

中野谷地区遺跡群

— 県営畑地帯総合土地改良事業横野平
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

— 本文編 —

1994

群馬県安中市教育委員会

中野谷地区遺跡群

—県営畑地帯総合土地改良事業横野平
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

—本文編—

1994

群馬県安中市教育委員会



天神原遺跡から見た日没：1994年3月21日（春分の日）

例 言

1 本書は『中野谷地区遺跡群-県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』本文編であり、第V章 遺跡各説・第VI章 成果と問題点・付編を掲載したものである。

2 本書の編集は社会教育課文化財係主事大工原豊が行った。

3 執筆者は以下のとおりである。また、執筆箇所については文末に記した。

V-1 (1) a	大工原 豊	金井京子		
b 土器	関根慎二	石坂 茂		
石器	大工原 豊	麻生敏隆	中島 誠	
(2) ~ (7)	大工原 豊			
V-2 (1) a	大工原 豊	金井京子		
b 土器	関根慎二	金井京子	石器	大工原 豊
V-3 (1) a・b	大工原 豊			
c 土器	石坂 茂	石器	大工原 豊	
(2)	大工原 豊			
V-4 (1) a	大工原 豊	林 克彦		
b 土器	関根慎二	林 克彦	石器	大工原 豊
(2)・(3)	大工原 豊	金井京子		
(4)	大工原 豊	林 克彦		
VI-1 (1)	関根慎二			
(2)・(3)	大工原 豊			
(4)	大工原 豊	金井京子		
(5)・(6)	大工原 豊			
VI-2 (1) ~ (8)	大工原 豊			
(9)	大工原 豊	林 克彦		
VI-3	林 克彦			
VI-4	大工原 豊	麻生敏隆		
VI-5	大工原 豊			
付 編	阪本英一			

4 図版、遺物分布図の作成、各種表・グラフ等の作成は、伊田百合子 氏家 愛 金井京子 佐々木祐子 佐藤佐由里 白石純子 鈴木将之 筑井美佐子 中川京子 萩原研也 林 克彦 和田宏子が行った。

5 本文に掲載した資料・台帳等は安中市教育委員会が保管している。

6 以下の方々に本書作成にあたり、有益な指導・助言をいただいた。記して感謝の意を表する。
川口 潤 鈴木正博 鈴木加津子 増田 修 (敬称略)

目 次

例 言

V	遺構各説	1
1	中原遺跡	1
	(1) 縄文時代の遺構と遺物	1
	(2) 弥生時代の遺構と遺物	50
	(3) 古墳時代の遺構と遺物	50
	(4) 奈良・平安時代の遺構と遺物	51
	(5) 中世・近世の遺構と遺物	54
	(6) その他の遺構	55
	(7) 小結	56
2	東畑遺跡	59
	(1) 縄文時代の遺構と遺物	59
3	金井谷戸遺跡	77
	(1) 縄文時代の遺構と遺物	77
4	天神原遺跡	95
	(1) 縄文時代の遺構と遺物	95
	(2) 古墳時代の遺構と遺物	212
	(4) 奈良時代の遺構と遺物	212
	(5) 小結	216
VI	成果と問題点	236
1	縄文時代前期前葉の集落について	236
	(1) 土器群と住居址の変遷について	236
	(2) 住居址の形態について	240
	(3) 住居址の分布について	247 243
	(4) 遺物出土パターンについて	248
	(5) 石器群の様相について	251
	(6) 集落の構造と景観の復元	251
2	配石墓について	254
	(1) 形態・構築方法	254

(2) 配石墓の被熱・覆土の状態	255
(3) 遺物出土状態	256
(4) 頭位方向	257
(5) 重複関係	260
(6) 埋葬区の配置	261
(7) 配石墓群の変遷	263
(8) 配石墓群の構造と社会の復元	264
(9) 配石墓の時空的分布について	268
3 天神原遺跡の縄文後・晩期の土器群について	272
(1) 後期の土器群について	272
(2) 「天神原式」土器について	272
(3) 縄文晩期の土器について	274
(4) 天神原遺跡の重量分布と使用量の推定	277
4 縄文時代の打製石器の製作について	280 281
(1) 前期前半の打製石器の製作について	280 281
(2) 石器製作システムの変遷	284
(3) 周辺地域の様相	286
5 奈良・平安時代の「牧」と推定される遺構群について	288
(1) 各遺跡の特徴	288
(2) 「牧」の可能性の検証	292 291
(3) 中野谷の「牧」成立の背景	293 292
(4) 「牧」管理集落の推定	294
(5) まとめ	295
付編 妙義山を巡る信仰	303

V 遺構各説

1 中原遺跡

(1) 縄文時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址

本遺跡から検出された縄文時代の住居址は16軒であり、すべて前期前半のものである。内訳は関山Ⅰ段階13軒、関山Ⅰ～Ⅱ段階1軒、有尾段階2軒であり、関山Ⅰ段階のものが大多数を占めている。また、拡張は関山Ⅰ段階2例、同Ⅱ段階1例、有尾段階1例の計4例であり、重複例は認められなかった。遺存状態はC区・E区では耕作の影響を受けており、あまり良好ではなかったが、D区は比較的良好であった。

各住居址の形態及び特徴は第4表のとおりである。以下、個々の住居址について、表で示し得ない所見について述べる。なお、柱穴の配列は第241図のように分類することができる。

J-1号住居址(第6図) 出土遺物から前期前半(関山Ⅰ式～Ⅱ式)のものと判断される。1度拡張されており、拡張前(J-1a号住居址)と拡張後(J-1b号住居址)で規模・柱穴の配列に違いが認められる。しかし、それぞれの住居址に帰属する柱穴を特定し得ない。それぞれ、長方形を呈する。掘り込みは比較的深いが、拡張後の方が浅い。

深さ25cm以上の柱穴は、24カ所であり、支柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向に平行する3列の柱穴列と、それに直交する3列の柱穴列が確認される。また、住居址北側の床面中央にひときわ深く太い柱穴が存在する。J-1a号住居址では長軸の中軸線上とそれに直交する1～2列の配置(D1配列)と推定される。また、J-1b号住居址では長軸に平行する2列と、それに直交する1～3列の配置(B1配列)と推定される。壁柱穴はJ-1b号住居址では四辺に全周するが、J-1a号住居址では南辺以外はまばらに存在する程度である。

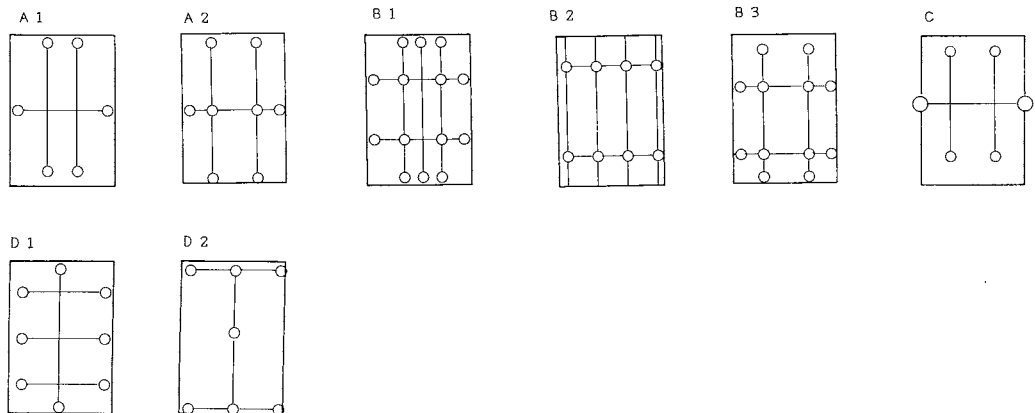
炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。竪穴の掘り込みは比較的深い。検出された石囲炉は拡張後のものであり、拡張前の炉址は確認できなかった。遺存状態は良好であった。

遺物出土状態(第242図)

【土器】 各層とも全体に散漫に分布しており、他の住居址に比べると出土量は少ない。層によ

住居址名	平面形態	規模			柱穴	柱穴	炉址	付帯施設	主軸方向
		長軸	短軸	深さ	配列	本数	形態		
J 1 a	長方形	380	260	72	D 1	59	石囲炉		N 53° W
J 1 b	長方形	516	308	60	B 1				
J 3	正方形	432	396	60	A 2	7	石囲炉		N 56° W
J 4	長方形	552	456	62	C	33	石囲炉		N 30° W
J 5	長方形	440	340	58	D 1	56	地床炉 (枕石)		N 62° W
J 6 a	正方形	440	440	32	B 3	71	地床炉	壁溝有り	N 2° W
J 6 b	長方形	564	460	32	B 3			壁溝有り	
J 7	長方形	440	364	10	D 2	28			N 6° W
J 8	正方形	488	456	72	A 2	50	石囲炉		N 4° W
J 9	長方形	380	320	52	A 2	42	石囲炉		N 43° W
J 10	長方形	440	330	58	B 1	52	石囲炉		N 26° W
J 11	長方形	380	228	70	A 1	21	石囲炉		N 57° W
J 12 a	長方形	480	392	80	A 1	57	地床炉		N 20° W
J 12 b	長方形	580	392	60	D 1			壁溝有り	
J 14	長方形	700	(460)	86	B 1	52	埋甕炉	壁溝有り	N 10° E
J 15 a	長方形	(430)	(400)	62	B 2	72	地床炉		N 42° W
J 15 b	長方形	588	460	62	A 2		石囲炉	壁溝有り	
J 16	長方形	540	448	74	A 1	53	石囲炉		N 24° W
J 17	正方形	420	380	60	A 2	72	石囲炉		N 15° W
J 19	長方形	500	348	40	D 2	26	地床炉		N 10° W

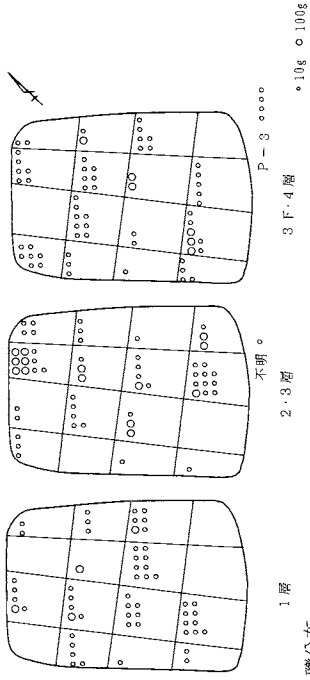
第4表 中原遺跡住居址観察表



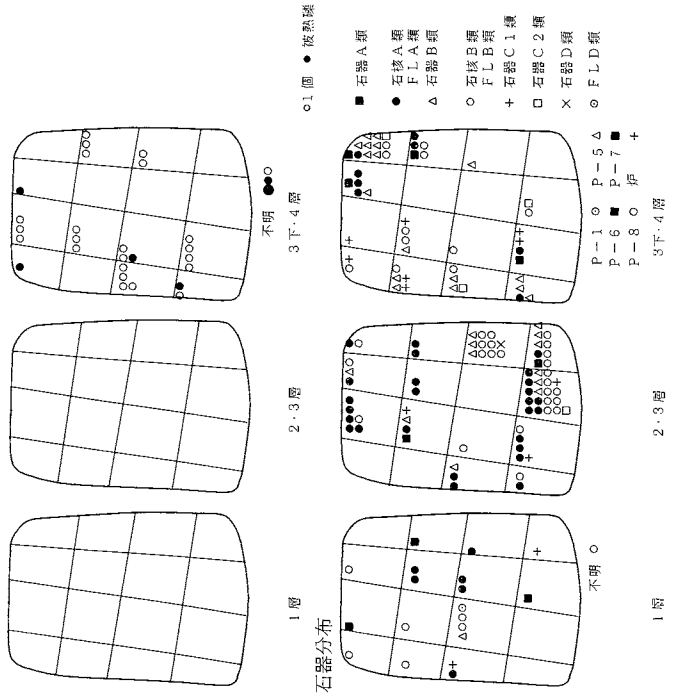
第241図 住居址の柱穴配列

土器分布

J-1 住

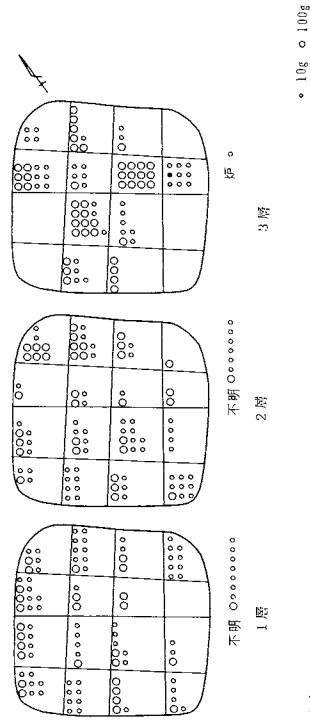


石器分布

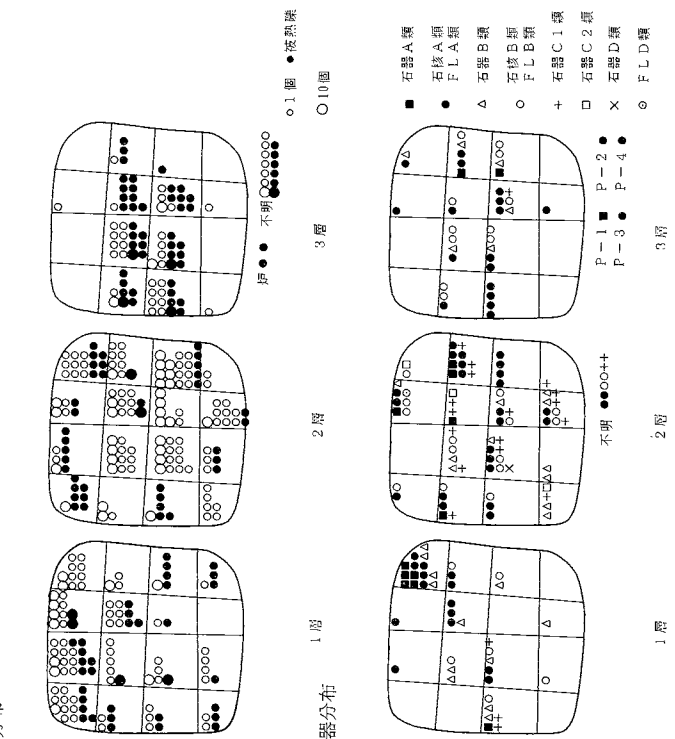


土器分布

J-3 住



石器分布



第242図 J-1・3号住居址遺物分布図

って偏在性が認められないことから、継続的な廃棄あるいは流れ込みと推定される。土器型式では関山Ⅰ～Ⅱ式にかけての土器が検出されている。

【礫】 3層のみの分布図しか揭示できなかったが、1・2層の礫は調査後に散逸してしまった可能性が高い。おそらく、3層と同じように全体に散漫に分布していたと思われる。

【石器】 土器とほぼ同じ様相を示す。2・3層では南東部に集中が認められるのに対し、3・4層では北東部に集中が認められ、堆積過程で廃棄あるいは流れ込みの方向が変化したことがうかがえる。

J-3号住居址（第7図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。正方形を呈し、掘り込みは比較的深い。深さ25cm以上の柱穴は25カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。柱穴の配列は、長軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する柱穴列が確認されるA2配列である。壁柱穴は四辺に連続する。このうち、南辺・北辺の壁柱穴は竪穴に沿ってやや湾曲する。

炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。中央部に浅い土坑が存在するが、上部から掘り込まれた可能性もある。

遺物出土状態（第242図）

【土器】 各層とも比較的出土量が多い。1層では北寄りに分布するが、2層・3層では北東部にやや偏在する。また、3層では周辺部からの出土が少なく、中央部に集中化の傾向が認められる。これらの土器は出土量からみて、単なる流れ込みではなく、廃棄活動によるものとみられる。そして、初期堆積土層からの出土が少ないことから、ある程度埋没後に廃棄活動が行われたと考えられる。

また、土器型式ではすべて関山Ⅰ式であり、廃棄活動は比較的短期間であったと推定される。

【礫】 本遺跡における住居址の中で最も多量な礫を検出した。分布傾向は土器と類似し、初期堆積土層からの出土も少ない。各層の分布状況を見ると、1層では北西方向に偏在し、2層では東に、そして、3層では西に偏在する。

【石器】 土器・礫の量に比べ、やや少ないものの多くの石器が出土している。特に、1層では出土量が少なく、北東方向から対角線上に分布するが、これは土器・礫の分布と様相を異にしている。しかし、2層以下では土器・礫とほぼ同じ分布傾向を示しており、土器・礫・石器の廃棄は一連のものであると推定される。

【炭化物】 1・2層からオニグルミの核片が少量検出されている。いずれの層も同じ種であり、廃棄が比較的短期間に行われたという堆積状態からの所見と一致する。

J-4号住居址（第8図） 前期前半（関山1式）の住居址と判断される。南側がやや開く長方形呈し、掘り込みは比較的深い。深さ30cm以上の柱穴は16カ所存在する。。配列する柱穴では、長軸方向にほぼ平行する2列の柱穴列と、それに直交する3列の柱穴列が確認される。なお、特に大きく深い主柱穴が、長辺の壁外・中央に位置する本遺跡では唯一のC配列である。壁柱穴はまばらに存在する程度で、東辺には浅い壁溝が存在する。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。

遺物出土状態（第243図）

【土器】 層位と分布状態を検討すると、1・2層では南から中央部に集中しているのに対し、3層では北寄りの三角堆積中に集中する。また、4層は中央部にうず高く堆積するローム混じりの土層であるが、少なからず土器が検出されている。土器型式でみた場合、関山1式が大部分であるが、1・2層では有尾式が約5%混入しており、3・4層には混入していない。

以上のことから、大きくみて1・2層と3・4層に分かれるものと判断される。したがって、住居址埋没過程で遺物を含む堆積が停止し、その後再開されたものと推定される。

【礫】 土器と同じように、1・2層と3・4層で様相が異なる。すなわち、1・2層では被熱礫の割合が非常に高いのに対し、3・4層では被熱礫の割合が非常に低い。

【石器】 各層とも土器・礫とほぼ同じ分布傾向を示しており、1・2層では石器が少ないのに対し、3層では多量出土している。この住居址ではA類が上層から下層まで多い点に特徴があるが、特に3層ではこの傾向が顕著である。以上のように、石器からも2層と3層間に違いが認められる。

【炭化物】 下層から炭化材が比較的多く検出された。分析を行った資料はタケ垂属であることが判明した。肉眼で観察する限りは、それ以外の樹種も含まれている可能性がある。礫の分析結果では3・4層が被熱礫の頻度が非常に低いといった所見が示されており、これらの炭化物も堆積時には”炭”ではなかった可能性が高い。

J-5号住居址（第9図） 前期前半（関山1式）の住居址と判断される。長方形呈し、掘り込みは比較的深い。深さ30cm以上の柱穴は16カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴は、長軸方向に平行する1列の柱穴列と、それに直交する2列の柱穴列であり、D1配列である。壁柱穴は四辺に連続し、南辺には浅い壁溝が存在する。

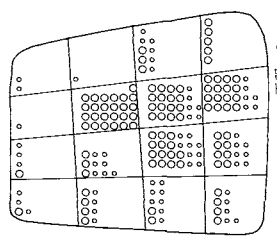
炉址は枕石を有する地床炉で、「コ」の字形の石囲炉の両側の石が脱落した形態である。

遺物出土状態（第243図）

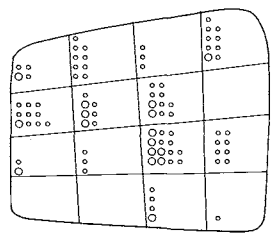
【土器】 住居址全体に分布しており、1層は西寄り中央部に偏在し、2・3層では比較的多くの量が北寄りに偏在する。しかし1層と2・3層の土器型式はすべて関山1式であり、差異はみ

土器分布

J-4 住

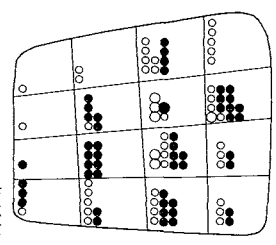


1.2層

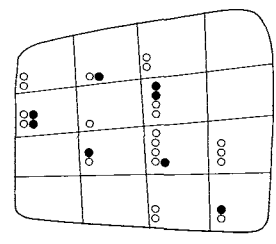


2 F. 3.4 土層

碟分布

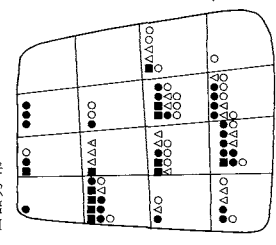


1.2層

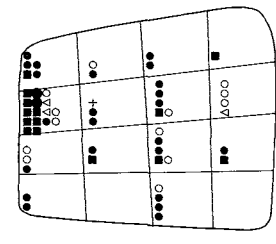


2 F. 3.4 土層

石器分布



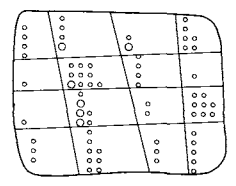
1.2層



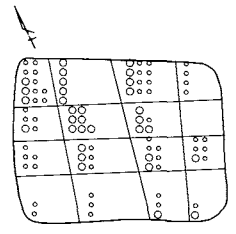
2 F. 3.4 土層

土器分布

J-5 住

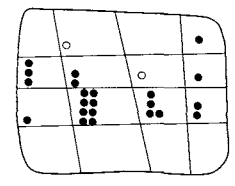


1層

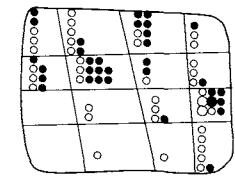


2.3層 10g ○ 100g

碟分布

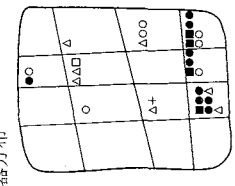


1層

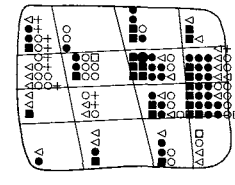


2.3層

石器分布



1層



2.3層

第243圖 J-4・5号住居址遺物分布圖

られない。

〔礫〕 土器と同じ様相で検出しており、2・3層により多くの礫が北寄りに偏在している。

〔石器〕 1層・2・3層とも南側にA類が集中する。これに対し、2・3層では北寄りにC1類が偏在する傾向が認められる。こうした2・3層の種別による分布の違いは、廃棄単位の違いであり、この廃棄単位は作業単位を反映している可能性が高い。すなわち、ここでは石鏃製作等に関わる剥片A類は南側から廃棄され、堅果類の加工等に用いられた石器類は北東から廃棄され、それぞれ別々の作業として行われていたことが推測される。

J-6号住居址（第10図） 前期前半（有尾式）の住居址と判断される。1度拡張されており、拡張前（J-6a号住居址）と、拡張後（J-6b号住居址）に分かれる。それぞれ、正方形に近い長方形を呈し、壁溝が全周する。竪穴の掘り込みは浅い。深さ30cm以上の柱穴は24カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向に平行する4列～5列の柱穴列と、それに直交する2～3列の柱穴列が確認される。長軸方向の柱穴列は、同軸で重複しており、拡張前後で配列の大きな変更は行われていないと判断される。それぞれの住居址に帰属する柱穴を特定し得ないが、いずれもB3配列と判断される。炉址は地床炉であり、小ピットが炉内に存在する。

遺物出土状態（第244図）

〔土器〕 各層とも大量に検出された。住居址全体に分布しているが、1層は中央部南寄りに濃密に分布している。2層でも中央部に集中し、やや北寄りに偏在している。また、土器型式は有尾式が主体をなしているが、1層では関山1式が混入している。しかし、2・3層には混入しておらず、二次的に混入したものと推定される。

〔礫〕 土器と同じように偏在し、分布しているが、土器に比べ量は少ない。また、1層ではほとんどが被熱礫であるのに対し、2層の被熱礫は出土した礫の50%にも満たないなど、差異が認められる。

〔石器〕 土器とほぼ同じ分布傾向を示す。ここではA類がわずかに出土しているだけである。

〔炭化物〕 1層から炭化材が若干検出されており、クリ材と同定された。

J-7号住居址（第11図） 前期前半（有尾式）の住居址と判断される。正方形に近い長方形を呈し、竪穴の掘り込みは非常に浅い。深さ30cm以上の柱穴は9カ所であり、主柱穴と補助柱穴に分かれる。配列する柱穴は、長軸方向に平行する3列の主柱穴列と、それにやや斜めに交差する2列の主柱穴列である。D2配列と判断される。住居址の北東部には比較的深い柱穴が2カ所認められる。壁柱穴はまばらに存在する程度である。また、炉址は確認されなかった。

遺物出土状態（第245図）

【土器】 住居址全体に散漫に分布しているが、やや北寄りに偏在する。土器型式では有尾式が大部分を占めている。

【礫】 礫も北寄りに分布する。出土量は他の住居址と比較すると少ない。また、分布図で被熱礫は表示されていないのは、整理段階でのエラーであり、本来は被熱礫も存在している。

【石器】 礫とほぼ同じ分布傾向を示す。堆積土層が薄く、耕作による攪乱も激しいため、本来はより多くの遺物が存在していたものとみられる。

J-8号住居址（第12図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。正方形を呈し、竪穴の掘り込みは深い。この住居址は唯一東向きに構築されている。深さ25cm以上の柱穴は34カ所存在し、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、主軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する1列の柱穴列が確認される。A2配列と判断され。また、炉址の西側には比較的深く太い柱穴が存在する。壁柱穴は連続しており全周する。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉であり、西側奥壁寄りに位置している。

遺物出土状態（第244図）

【土器】 本住居址は土層断面図作成漏れのため、土層堆積状態を示すことができなかった。調査時の所見では、一般的なレンズ状堆積で、特に大きな乱れは認められなかった。上層では全体に分布している。中・下層は住居址東寄り中央部に偏在する。また、西・南寄りの覆土内からはあまり出土していない。各層の土器型式は関山Ⅰ式であり、差異も少ないことから短期間に埋没したものとみられ、遺物量からみて、廃棄活動によるものと推定される。

【礫】 土器と同じ様相が窺え、中・下層の東寄り中央部に密に偏在する。

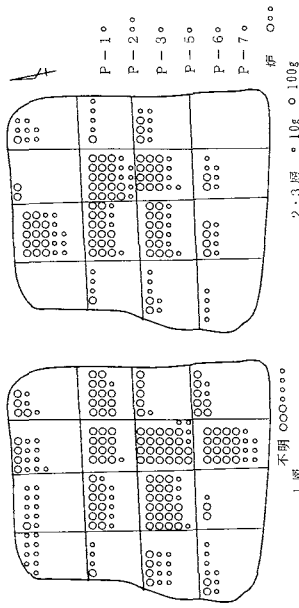
【石器】 土器とほぼ同じ分布傾向を示し、北東方向からの廃棄が下層～中層まで行われ、上層ではこうした方向性が弱まったことが窺える。

【炭化物】 上層から炭化材が若干検出された。同定の結果、カバノキ属であることが判明している。

J-9号住居址（第13図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。小形の住居址で、長方形を呈し、竪穴の掘り込みはやや深い。深さ25cm以上の柱穴は26カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する1列の柱穴列が確認される。A2配列と判断される。住居址の中央部のやや南よりにはきわめて深い柱穴と比較的深い柱穴が2カ所認められる。連続する壁柱穴は四辺に存在する。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。

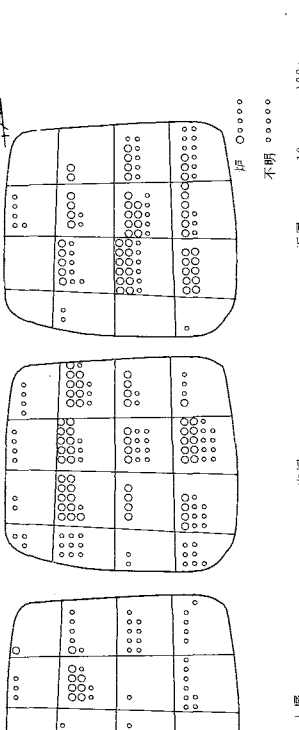
土器分布

J-6住



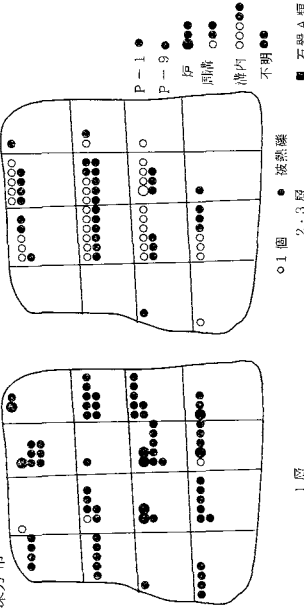
土器分布

J-8住



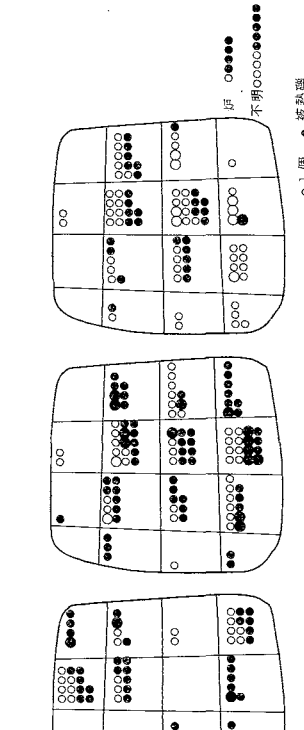
土器分布

J-6住



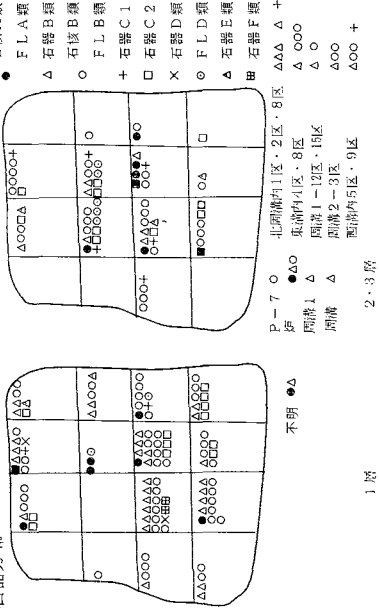
土器分布

J-8住



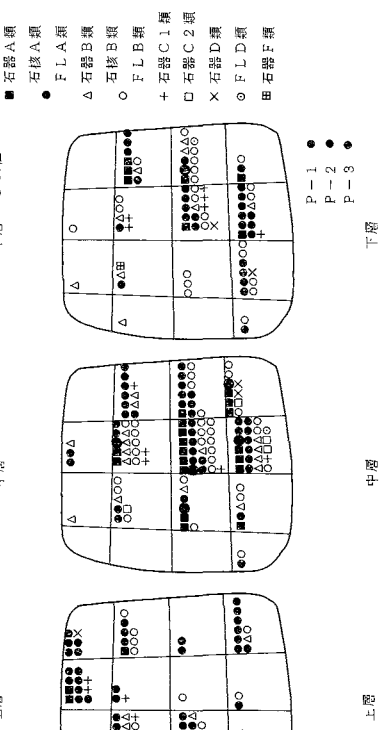
石器分布

J-6住



石器分布

J-8住



石器分布

J-6住



石器分布

J-8住



第244图 J-6・8号住居址遺物分布图

遺物出土状態（第245図）

【土器】 小規模な住居址であり、出土量は少量であった。1層はロームブロックが多量混入しており、人為的行為による土層と推定され、土器は全く検出されていない。しかし、2層では南寄りに偏在して出土しており、3層も出土量は少ないが同様な分布傾向を示している。そして、2層と3層では土器型式は関山1式であり、ほとんど差異が認められない。

このように、堆積状態と土器の出土状態からみて、1層と2層・3層間には不整合が認められる。したがって、この住居址では2・3層が堆積する段階では、南寄りからの廃棄により土器が混入し、窪地化した後、人為的埋め戻しにより1層が堆積したと推定される。

【礫】 土器と同様、2層の南寄りに偏在し分布している。

【石器】 土器と同じ分布傾向を示すが、出土量は少ない。土器・礫・石器の廃棄が一連の廃棄活動によるものである可能性が高い。

【炭化物】 2層中よりオニグルミの核片が若干検出されている。

J-10号住居址（第14図） 前期前半（関山1式）の住居址と判断される。長方形を呈し、竪穴の掘り込みはやや深い。深さ25cm以上の柱穴は18カ所存在し、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向にほぼ平行に3列の柱穴列と、それに直交する3列の柱穴列が確認される。B1配列と判断される。壁柱穴は連続しており全周する。炉址は底面に石のない「コ」の字形の石囲炉である。

遺物出土状態（第245図）

【土器】 住居址全体に分布している。1・2上層は北東方向に偏って分布しているが、2・3上層では南西から中央にかけてまとまる傾向がある。また、3・4層では南西から北東にかけての対角線に沿って分布する傾向が認められる。このように本住居址では、土器分布は常に南西から北東の対角線に沿った方向性をもっている。そして、層ごとに交互に異なった方向からの廃棄、あるいは流れ込みと推定される堆積状態を示している。しかし、各層の土器型式は関山1式であり、時間差はほとんど認められず、比較的短期間に生じた廃棄行為によると考えられる。

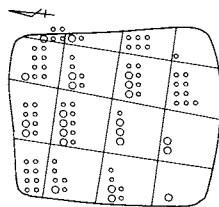
【礫】 1・2上層は北東部分に少量分布する。これに対し、2・3上層では南西から中央に偏在する。そして、3・4層では全体に多く分布しているが、南東寄りにやや集中している。

以上のように、1～3上層までは土器と同じ分布傾向を示すが、3・4層では土器の分布とやや分布傾向が異なっており、住居址埋没の初期においては、土器と礫が別々に廃棄されていたものと推定される。

【石器】 土器・礫と分布傾向が異なる点が多い。1層では量が少なく北西に偏在する。2・3層では出土量が多く、南に偏在する。そして、3・4層では北から南西にかけて斜めに偏在する。

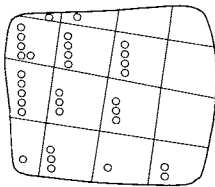
土器分布

J-7住



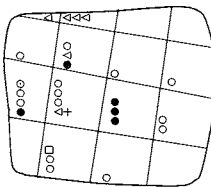
P-3 ○○○○
 炉 ○○○○
 不明 ○○○○○○○○
 ○ 10g ○ 100g
 1層

礫分布



P ●
 炉 ●
 不明 ●
 ○ 1個 ● 被熱燻
 1層

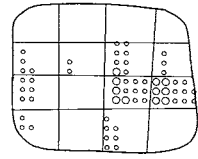
石器分布



● 石器A類
 ● FLA類
 △ 石器B類
 ○ 石器B類
 ○ FLB類
 + 石器C1類
 ○ 石器C2類
 ○ FL D類
 P-1 +
 P-2 △
 不明 ○○○
 1層

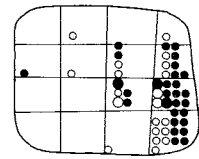
土器分布

J-9住



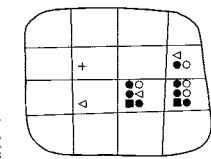
○ 10g ○ 100g
 2下・3層

礫分布



不明 ○○○○○○○○
 ○ 1個 ● 被熱燻
 ○ 10個
 2下・3層

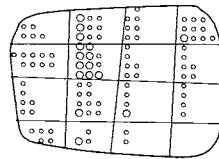
石器分布



■ 石器A類
 ● 石器A類
 ● FLA類
 △ 石器B類
 ○ 石器B類
 ○ FLB類
 + 石器C1類
 ○ 石器C2類
 P-1 ○ P-2 ●
 P-3 △ P-4 △
 P-5 ● P-6 □
 不明 +
 1・2層

土器分布

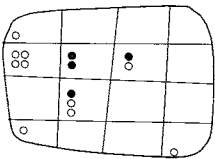
J-10住



P-1 ○○ P-5 ○
 ○ 10g ○ 100g
 2下・3下・4層

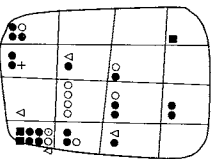
1層

礫分布



炉 ○○○
 ○ 1個 ● 被熱燻
 ○ 10個
 2下・3下・4層

石器分布



■ 石器A類
 ● 石器A類
 ● FLA類
 △ 石器B類
 ○ 石器B類
 ○ FLB類
 + 石器C1類
 ○ 石器C2類
 ○ FL D類
 P-3 ■ P-7 ○
 P-9 ■ 炉 +
 不明 ●●
 2下・3下・4層
 不明 ■■■
 2・3層

第245図 J-7・9・10号住居址遺物分布図

これらの石器は出土量が多いことから、廃棄活動によるものと推定される。

本住居址の廃棄の様相について検討した結果、土器・礫・石器がそれぞれ別の廃棄単位として周囲から交互に廃棄されたことによると推定され、廃棄が徐々に進行していった様子が窺える。

J-11号住居址（第15図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。小形の住居址で、長方形を呈し、竪穴の掘り込みは深い。比較的深い柱穴が多く、深さ40cm以上の柱穴は16カ所存在する。支柱穴と補助柱穴に分かれる。配列する柱穴では、長軸方向にほぼ平行する3列の柱穴列と、それに直交する2列の柱穴列が確認される。AⅠ配列と判断される。また、住居址の床面中央部のやや北寄りに比較的深い柱穴が存在する。壁柱穴はまばらであるが、全周している。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。

遺物出土状態（第246図）

【土器】 最も小型な住居址であり、出土量も少ない。1・2層は南北の壁際（2層内）に少量分布し、2下・3下・4層は北西から中央部にかけてまとまる。この住居址では、2層から検出されている遺物が多い。また、土器型式は関山Ⅰ式であり、ほとんど差異は認められない。以上のことから、土器の混入はまとまった廃棄行為によるものではなく、埋没過程で流れ込んだものである可能性が高い。

【礫】 極めて出土量が少ない。分布状態も土器と同じく西よりに散漫に出土しており、流れ込みによると推定される様相を呈している。

【石器】 出土量は土器・礫と同様に非常に少ない。下層（2・4層）では中央部にA類（黒曜石）がややまとまるのに対し、それ以外の部分ではほとんど出土していない。この点にのみに関してみれば、単なる流れ込みでない可能性もあるが、積極的な廃棄活動は認められず、概して流れ込みによる自然堆積であったと推定される。

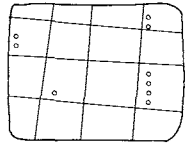
J-12号住居址（第16図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。南側に拡張した痕跡が認められ、拡張前（J-12a号住居址）と拡張後（J-12b号住居址）であるが、しかし、それぞれの住居址に帰属する柱穴を特定し得ない。それぞれ、南がやや開く長方形を呈し、掘り込みは比較的深い。深さ30cm以上の柱穴は19カ所存在し、支柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向にほぼ平行する2列の柱穴列と、それに直交する4列の柱穴列が確認される。J-12a号住居址はAⅠ配列、J-12b号住居址はDⅠ配列と推定される。南側の一部を除き壁溝が存在する。炉址は地床炉であり、小ピットが炉内に存在する。

遺物出土状態（第246図）

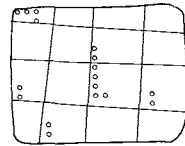
【土器】 本住居址では土層に明瞭な不整合面があり、埋没後、人為的に掘り込みが行われ、再

土器分布

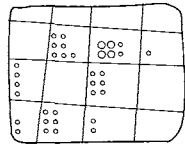
J-11住



1層



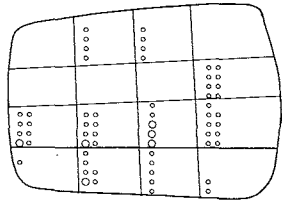
2.3.5層



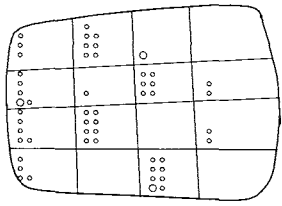
•10g ○100g
2 F. 3 F. 4層

土器分布

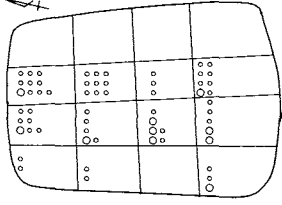
J-12住



不明 ○○○○○○



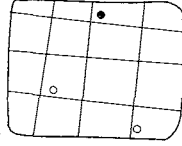
2.3.④.4層



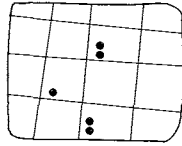
3 F. 4.④.6層

不明 ○○○○○○
•10g ○100g

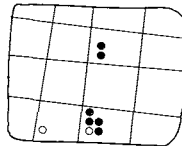
礎分布



1層



2.3.5層

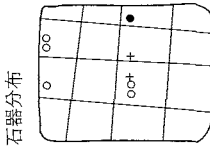


2 F. 3 F. 4層

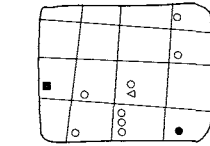
戸 ○○○○○○
不明 ●

○1 個 ● 炭熱線

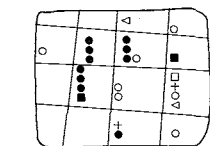
土器分布



P-2 ○



P-1 ■



P-3 ●
不明 +

○ 石器A類
● 石器A類
△ 石器B類
○ 石器B類
+ 石器C1類
□ 石器C2類
○ 石器D類
× 石器E類

1層

2.3.5層

2 F. 3 F. 4層

第246圖 J-11・12号住居址遺物分布図

度覆土が堆積したものと判断される。

上～中層部分では、当初堆積した部分と再堆積部分との間に分布上の際立った差異は認められない。しかし、下層では再堆積層（4層）中にまとまる傾向があり、当初堆積した覆土（④層）中には少ない。特に、東端と西端部分ではその傾向が顕著である。

土器型式は関山Ⅰであり、当初堆積した部分と再堆積層との間に顕著な差異は認められず、比較的短期間に堆積→掘り込み→再堆積が行われたと考えられる。

〔礫〕 土器と同じ様相で分布しており、上～中層では礫が少なく、顕著な傾向は認められない。しかし、下層では再堆積層（4層）に含まれる礫が多い。また、約40%の被熱礫が存在する。

〔石器〕 再堆積層と当初堆積層との間の分布状態にやや差異が認められるが、土器・礫に比べ顕著ではない。

J-14号住居址（第17図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。完掘していないが、本遺跡ではこの時期最大の規模を有する。長方形を呈し、掘り込みは深い。深さ30cm以上の柱穴は22カ所であり、主柱穴と判断される柱穴と補助柱穴に分かれる。配列する柱穴では、長軸方向に平行で2列の主柱穴列と、それに直交する3列の主柱穴列が確認される。B1配列と判断される。また、壁溝は全周し、壁溝中には柱穴が存在する。

炉址は特殊な埋甕炉である。直径約2mの浅い堅穴の西寄りの位置に炉体土器（第38図12）が設置されており、堅穴の南寄りの位置には、扁平な河川礫が2個並んで置かれている。

遺物出土状態（第247図）

〔土器〕 1層は中央部に集中する。2～5層では1区に集中しそれ以外は散漫に分布する。また、6層では全体にやや密に分布する。土器型式では関山Ⅰ式が主体となっており、炉体土器も関山Ⅰ式である。

また、14区1層からは3点の押型文土器が出土している。隣接するD-29号土坑は押型文段階の遺構であり、二次的混入と判断される。

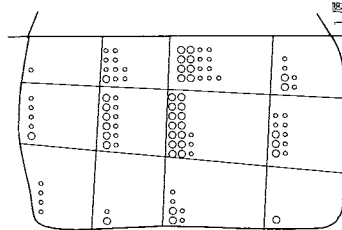
〔礫〕 各層に分布しているが、1層は中央部に偏って分布しており、2～5層では全体に散漫に分布する。6層では特異な分布状態を示す。住居址南半部に偏在する礫は、ほとんど火を受けていない。しかし、北西隅に集中する礫は被熱礫が多い。

〔石器〕 土器とほぼ同じ分布傾向を示す。中・下層（3～5層）では南東部にA類（黒曜石他）を主体とした集中が認められる点は土器の分布と異なっている。

J-15号住居址（第18図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。拡張が行われており、拡張前（J-15a）と拡張後（J-15b）では形態が異なる。J-15a号住居址の平面形は正方

土器分布

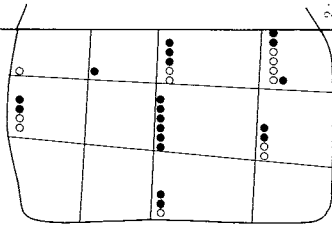
J-11E



1階

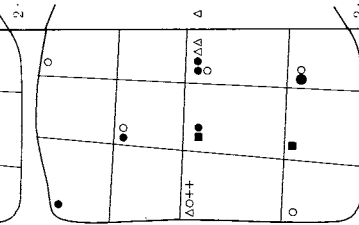
礎分布

2・3・4・5・6階

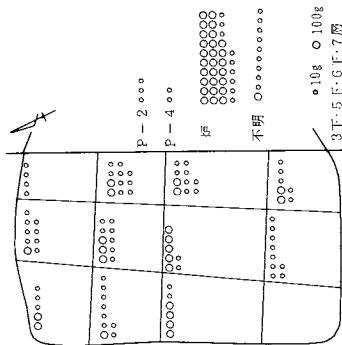


2・3・4・5・6階

石器分布



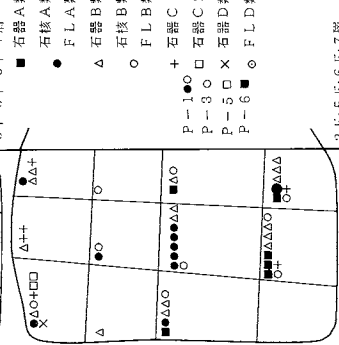
2・3・4・5・6階



3階・4階・5階・6階・7階



3階・4階・5階・6階・7階



3階・4階・5階・6階・7階

P-2 土器
P-4 土器
不明 土器

10g 土器
100g 土器

不明 土器

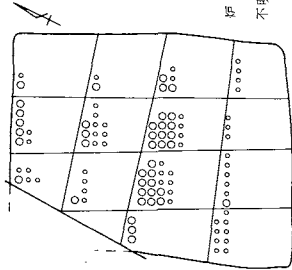
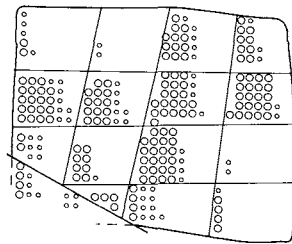
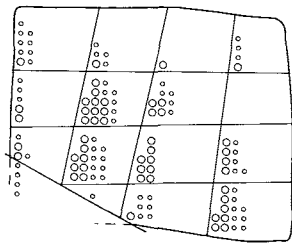
01 箇 土器
10 箇 土器

土器A類
土器B類
土器C1類
土器C2類
土器D類
FLA類
FLB類
FLD類

第247图 J-14号住居址遺物分布图

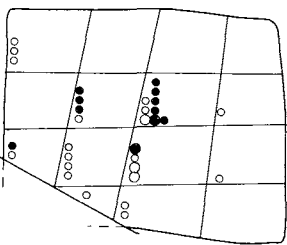
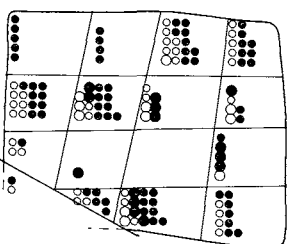
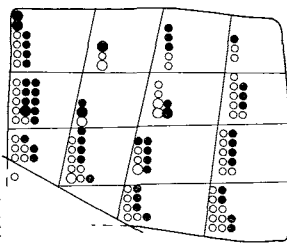
土器分布

J-15庄



不明
 ○ 10g ○ 100g

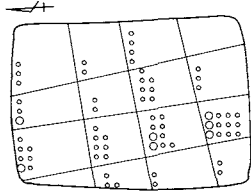
礎分布



不明
 ○ 1 個 ● 被熱燻
 ○ 10 個

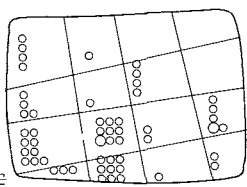
土器分布

J-19庄



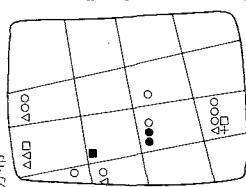
1. 2. 3 層
 ○ 10g ○ 100g

礎分布



1. 2. 3 層
 ○ 1 個
 ○ 10 個

石器分布



■ 石器A類
 ● 石器A類
 △ FLA類
 ○ 石器B類
 + FLB類
 ○ 石器C1類
 □ 石器C2類

1 層

2 層

3 層

炉

■ 石器A類
 ● 石器A類
 △ FLA類
 ○ 石器B類
 + FLB類
 ○ 石器C1類
 □ 石器C2類
 P-1 ○
 P-2 ○
 P-3 ○
 P-5 ●
 P-9 ■
 P-12 ●
 P-13 +
 P-14 ●
 △

第248图 J-15・19号住居址遺物分布图

形を呈し、J-15 b号住居址は、大形の長方形を呈する住居址で、掘り込みはそれぞれ比較的深い。住居址に帰属する柱穴は特定し得ない。深さ40cm以上の柱穴は25カ所であり、主柱穴と補助柱穴に分かれる。配列する柱穴では、長軸方向に平行する4列の主柱穴列と、それに直交する2～3列の主柱穴列が確認される。このうち、長軸方向の主柱穴列は同軸で重複しており、J-15 a号住居はB 2配列、J-15 b号住居はA 2配列と推定される。壁柱穴は、J-15 a号住居址では四辺にまばらに存在していたとみられ、J-15 b号住居址では壁溝は全周し、壁溝中には柱穴が存在する。

J-15 a号住居址の炉址は確認時には地床炉であったが、本来は石囲炉であった可能性が高く、J-15 b号住居址の炉址は石囲炉と推定され、礫が多数検出されていたが、検出時には崩れた状態であり、本来の炉址の形態は判然としない。

遺物出土状態（第248図）

【土器】 この住居址は土器の出土量が最も多い。1層～3層まで北西から南東方向にかけて土器が大量出土している。したがって、北西方向からの廃棄によるものと判断される。特に、2層からの出土が多い。また、3層では壁際に少ないので、ある程度埋没した後に廃棄行為が行われたと推定される。なお、土器型式ではすべて関山Ⅰ式であり、廃棄活動は短期間に集中的に行われたものである可能性が高い。

【礫】 土器とほぼ同じ傾向を示しており、一連の廃棄行為によると推定される。3層では北西部分以外、壁際からほとんど出土しておらず、ある程度埋没後に廃棄された様相が、土器の分布以上に顕著である。被熱礫の頻度は各層とも50%内外である。

【石器】 土器・礫と同じ分布傾向を示す。この住居址ではA類（黒曜石・チャート）が1・2層から大量出土しており、石鏃等の製作に関連した廃棄活動と判断される。

【炭化物】 1層よりオニグルミの核片が若干検出された。

J-16号住居址（第19図） 前期前半（関山Ⅰ式）の住居址と判断される。平面形は正方形に近い長方形を呈し、竪穴の掘り込みは比較的深い。深さ30cm以上の柱穴は12カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向に平行で2列の柱穴列と、それに斜めに交差する3列の柱穴列が確認される。A 1配列と判断される。壁柱穴は北・東・南の各辺はやや多く、西辺はまばらである。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。

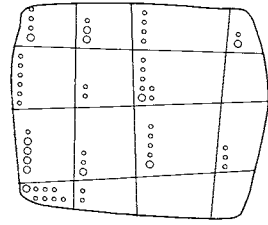
遺物出土状態（第249図）

【土器】 各層とも北西寄りに偏在する。土器型式をみると、大部分は関山Ⅰ式であるが、1・2層には有尾式が少量混在しており、この段階にも土器を含む堆積があったことを示している。

この住居址の存在する場所は最も傾斜が急な場所であり、傾斜方向と土器の分布傾向は一致し

土器分布

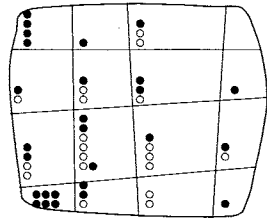
J-16位



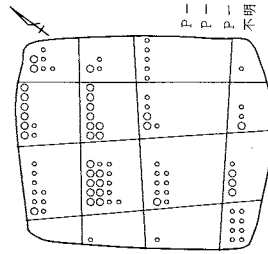
1-2-5層

礫分布

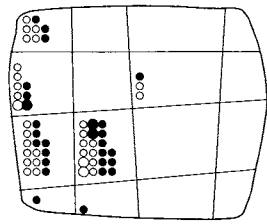
3-4層



3-4層



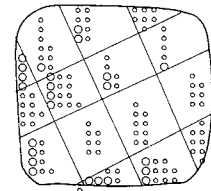
4-6層



4-6層

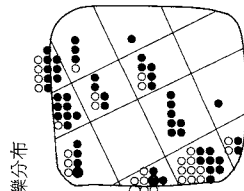
土器分布

J-17位

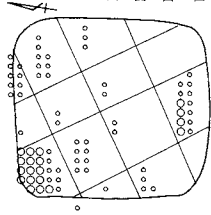


1-2-2-3上層

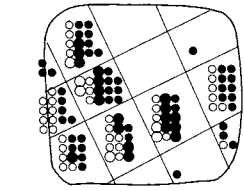
礫分布



1-2-2-3上層



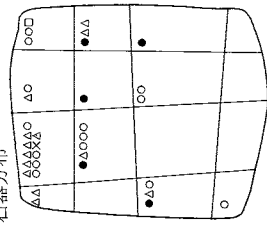
2-2-2-3 F層



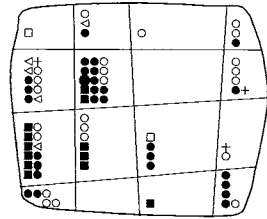
2-2-2-3 F層

石器分布

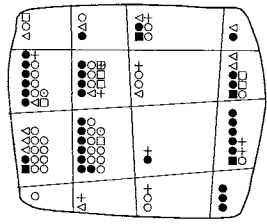
1-2-5層



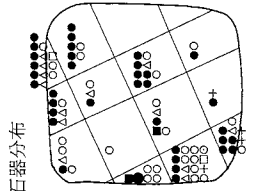
3-4層



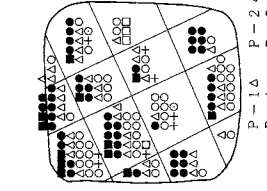
4 F-6層



1-2-2-3上層



2 F-2-3 F層



第249图 J-16·17号住居址遺物分布图

ている。また、この方向には住居址が多く存在している。単なる流れ込みではなく、廃棄活動によると推定される。

なお、分布図では2区3層が全く出土していない状態で図示されているが、調査・整理段階でのエラーとみられる。

【礫】 土器と同様な分布状態を示すが、上～中層（1・2・3・5層）ではややバラつく傾向がある。また、下層（4・6層）では北西に濃密に分布しており、単なる流れ込みではなく、廃棄活動による可能性が高い。

【石器】 土器・礫とほぼ同じ分布傾向を示す。上層（1・2層）ではB類が多い傾向があるが、中～下層ではA類が顕著であり、堆積時期により廃棄の内容が変化していることが窺える。

J-17号住居址（第20図） 前期前半（関山1式）の住居址と判断される。平面形は正方形を呈し、竪穴の掘り込みは標準的である。深さ30cm以上の柱穴は26カ所であり、主柱穴と補助柱穴には明確な違いは認められない。配列する柱穴では、長軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する1列の柱穴列が確認される。A2配列と判断される。また、炉址の北側に位置する柱穴も比較的深い。壁柱穴は連続して全周する。炉址は底面に石を置いた「コ」の字形の石囲炉である。

遺物出土状態（第249図）

【土器】 1層・2層上部では全体から多量出土しているが、北西にやや偏在する。2層下部・3層では北西（1区）に集中するほか、14区にも集中している。すべて関山1式であり、比較的短期間の廃棄活動により、覆土が堆積したものと推定される。

【礫】 土器とほぼ同じ様相であり、北西からの廃棄行為により、住居址が埋まったものと推定される。被熱礫の割合も高い。土器と異なる点は、上層よりも下層の方が出土量が多いことである。この現象は廃棄活動に質的差異が存在していたことによると思われる。

【石器】 土器・礫とほぼ同じ分布状態を示す。各層多様な石器が満遍なく多量出土している。

J-19号住居址（第21図） 前期前半（関山1式）の住居址と判断される。竪穴の掘り込みが浅いため、調査時には平面形が判然としなかったが、長方形を呈していたと推定される。深さ30cm以上の柱穴は10カ所であるが、主柱穴と補助柱穴に区別される。配列する柱穴では、長軸方向に平行する主柱穴列と、壁に沿った2列の主柱穴列が確認される。D2配列と判断される。壁柱穴はまばらに存在する。炉址ははっきりしなかったが、地床炉であったと推定される。

遺物出土状態（第248図）

【土器】 全体に散漫な分布を示す。住居址の掘り込みも浅いため、活発な廃棄活動は認められ

ない。

〔礫〕 北西に偏在している。土器の出土量に比べ、礫の出土量は比較的多く、単なる流れ込みではなく、廃棄活動によるものと推定される。なお、分布図では被熱礫が示されていないが、観察漏れによるものである。

〔石器〕 少量の石器が西側に散漫に分布する。

(大工原 豊・金井 京子)

土坑 (第22図・第23図)

土坑は全部で36基検出された。土坑は形状・規模から、大きく次の5形態に分類することができる。また、各土坑の形態・出土遺物等は第5表のとおりである。

大形円形 (1m以上)	17基
小形円形 (1m以下)	5基
大形楕円形 (1m以上)	9基
小形楕円形 (1m以下)	4基
方形	1基

土坑群はD区とF区に存在する。D区の土坑群は大形円形の土坑を主体とする。これらの土坑では関山I式の土器が出土するものが多く、周囲に存在する関山I式期の住居址と関連するものと判断される。この場所にある土坑では、大量の遺物が検出されるものはD-27号土坑を除いて存在せず、少量の遺物が検出される傾向がある。石器では凹石が比較的多い。

また、D-27号土坑ではA類が大量出土している。特に黒曜石の剥片が多く、石鏃・スクレイパーA類以外に、原石も3点出土している。石鏃未成品も存在しており、石鏃製作に伴う石器類とみなされる。この土坑は本来の用途はともかく、最終的には廃棄場所として用いられた可能性が高い。

F区では湧水坑の周囲にも大形円形の土坑群が存在しており、湧水坑との関連性が窺える。土坑からはほとんど遺物は検出されておらず、湧水に伴う陥没である可能性もある。また、湧水坑からは弥生時代中期前半期の土器が検出されており、この時期の所産であると推定される。

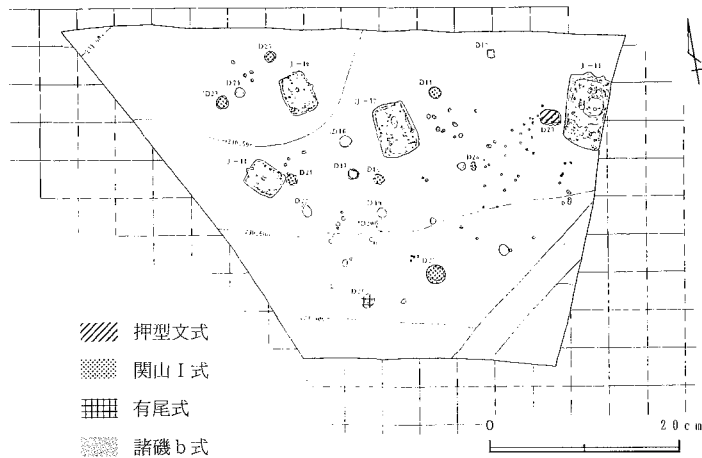
D区北東部に存在するD-29では、押型文土器が1点検出されている。また、関山I式期のJ-14号住居址が隣接するにも関わらず、全くこうした土器は検出されていない。逆に、この住居址からは押型文土器が数点混入している。また、土坑が浅い大形楕円形であり、他の関山期の土坑とは全く異なっている。こうした点からみて、この土坑は押型文段階のものであると推定される。

(大工原 豊)

区	土坑番号	上端		下端		深さ	平面形態	断面形態	出土遺物		時期		
		長軸	短軸	長軸	短軸				上器	石器	剥片等		礫
											A	B	
		(cm)		(cm)									
A区	D-1	92	90	76	62	22	小形円	皿状	△	打製石斧1・SCB1・凹石1		諸磯b	
	D-2	116	90	94	68	14	大形楕円	皿状					
	D-3	94	88	68	74	32	小形円	碗状		石鏃2	1		
	D-4 A	80	80	68	64	32	小形円	碗状	△			○関山1	
	D-4 B	74	(38)	(28)	58	32	小形楕円						
	D-5	106	74	86	52	16	大形楕円	皿状		打製石斧1			
	D-6	82	58	38	64	40	小形円	碗状				○	
	D-7	98	69	46	72	26	小形楕円	皿状					
B区	D-8	186	120	96	152	36	大形楕円	皿状				1	
C区	D-9	102	98	72	76	24	大形円	皿状					
D区	D-10	66	40	42	22	34	小形楕円	碗状	△	SCB1		○関山1	
	D-11	90	82	50	52	34	小形円	碗状	△	RFA1		関山1	
E区	D-12 A	108	102	84	82	44	大形円	碗状	△	SCB1	2	関山1	
	D-12 B	109	102	78	86	64	大形円	碗状	△	石鏃A1・RFA1・石匙B1 SCB1	1	関山1	
D区	D-13	95	80	80	60	40	不定形	碗状					
	D-14	126	118	120	112	50	大形円	袋状	△	RFB1・凹石4・石皿1	2	3	関山1
E区	D-15	(122)	116	74	70	54	大形円	碗状		石匙B1			
D区	D-16	122	120	102	102	70	大形円	袋状				1○	
	D-17	120	112	100	104	44	大形円	碗状	△	打製石斧1		1○諸磯b	
	D-18	118	112	100	98	88	大形円	袋状	△	石鏃A1・SCA1・RFB1 凹石1	3	1	○関山1
	D-19	114	112	74	66	60	大形円	碗状		SCB1	2	3○	
	D-20	122	100	100	72	28	大形楕円	皿状					
	D-21	126	124	106	100	34	大形円	皿状	△			2	関山1
	D-22	144	90	114	64	88	大形楕円	碗状					
	D-23	134	128	112	106	34	大形円	皿状	△				関山1
	D-24	104	96	70	82	18	大形円	皿状					
	D-25	122	118	90	94	48	大形円	碗状	△	SCB1		1	関山1
	D-26	136	132	68	70	62	大形円	碗状	△		2	2	有尾
	D-27	188	174	144	138	90	大形楕円	碗状	◎	石鏃A8・SCA4・RFA3 原石A3・石匙B1・SCB3 RFB1・凹石2・砥石1	62	30	◎関山1
	D-28	92	49	80	40	28	小形楕円	皿状	△	凹石1	1	1	関山1
	D-29	226	160	116	190	58	大形楕円	皿状	△		1	3	押型文
F区	D-30 A	154	(128)	114	(44)	72	大形楕円	碗状					
	D-30 B	110	64	96	46	72	大形楕円						
	D-31	122	116	98	94	42	大形円	皿状					
	D-32	121	102	102	121	52	大形円	碗状					
	D-33	104	94	94	104	31	大形円	皿状					
	陥穴-1	142	138	82	60	78	大形円						
	陥穴-2	160	132	104	88	150	大形円						

※土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g 礫：◎>5個, ○>1個

第5表 土坑観察表



第250図 各段階の土器出土の土坑分布

陥穴（第24図）

1号陥穴 B区に単独で存在する。円形を呈し、底面には小ピットが多数存在する。この陥穴の周囲には縄文時代の遺構は全く存在していない。

2号陥穴 E区南端に存在する。縄文時代前期の住居址から離れた位置に単独で存在する。円形を呈し、底面には小ピットが3カ所存在する。

これらの陥穴からは全く遺物が検出されないため、時期は判然としない。一般的に陥穴は早期後半の遺構であることが確認されており、本遺跡の陥穴もこの時期のものである可能性がある。しかし、縄文時代前期の集落とは、離れた位置に単独で存在することから、関山期の遺構である可能性も否定できない。なお、今村啓爾氏の分類ではF型に相当し、東畑遺跡や吉田原遺跡においても1基ずつ検出されている。

(大工原 豊)

b 遺物

土器

早期の土器 中原遺跡では第25図のように6点の山形押型文が存在し、3～6は金井谷戸遺跡例と同様に密接施文かあるいはそれに近似した文様構成をとるが、1・2は15mm以上の無文部を置く帯状施文であることや、原体長が12～14mmと極めて短いこと、胎土に結晶片岩を含まず灰色の焼成であること、それに1のように口縁部の外反の度合いが強いなどの点で前者とは大きな違いが認められる。この1・2に特徴的な幅の広い無文部や短めの施文原体を考慮すれば、これらは「樋沢式」よりもむしろ「沢式」に近似するとも言えよう。1・2は他の押型文土器とは出土地点も異なっており、文様構成の相違とともに両者が時間差をもつ可能性を示唆するものであろう。

(石坂 茂)

前期の土器 本遺跡出土の前期の土器群は、関山Ⅰ式から有尾式までの土器群であり、住居址ごとに様相が異なる。以下、各住居址出土の土器群の特徴について述べる。

J-1号住居址出土の土器 (第26図) 上層からは、羽状縄文で菱形を構成する土器、ループ文の土器が出土している。中層からは、縄文の撚りに縄の側面の環や、粘土瘤を持つ土器、尖底土器などやや古い傾向の土器が認めれる。下層からは、束の縄文が1点出土しているが、これは、神之木式の特徴を持つ土器で、関山Ⅱ式に相当する。その他の土器では、粘土瘤を持ち沈線による幾何学文の施文された土器など関山Ⅰ式土器に近い傾向を持つ。これらのことから、関山Ⅰ後半段階から関山Ⅱ段階にかけての住居と考えられる。

J-3号住居址出土の土器 (第27・28図) 上層・中層からは、粘土瘤貼付文や梯子状沈線による幾何学文施文の土器、が出土している。下層からは、ややだれた感じの粘土瘤貼付文や沈線による幾何学文の土器が出土している。これらのことから本住居址は、関山のⅠ段階に納まると思われる。

J-4号住居址出土の土器 (第29図) 上層からは、関山Ⅰ段階の土器と有尾段階の土器が混じって出土している。これらを除外して中層からは、粘土瘤貼付、梯子状沈線による幾何学文、下層に沈線による幾何学文の土器が多い傾向から、関山Ⅰ段階後半に主体があると考えられる。

J-5号住居址出土の土器 (第30図) 上層で粘土瘤、梯子状沈線の土器が多く、下層で粘土瘤や沈線による幾何学文の土器が出土している。関山Ⅰ段階前半から後半と考えられる。

J-6号住居址出土の土器 (第31図) 上層、下層とも関山Ⅰ段階の土器と有尾段階の土器が出土しているが、量的には、有尾段階の土器の出土が多くこの段階の住居と思われる。

J-7号住居址出土の土器 (第32図上段) 遺物総量も少ない中で、有尾段階の土器が大部分を占めていることからこの段階の住居と思われる。

J-8号住居址出土の土器（第33・34図） 上・中・下層で僅かに粘土瘤貼付の土器が見られるが、遺物の総量としては、沈線による幾何学文の土器が多く見られることから、関山Ⅰ段階後半になると思われる。

J-9号住居址出土の土器（第35図） 上層、下層とも粘土瘤貼付で、梯子状沈線による幾何学文の土器が出土している。僅かに平行沈線による幾何学文を持つ土器も下層から出土していることから、関山Ⅰ前半段階から後半段階に若干かかるものと思われる。

J-10号住居址出土の土器（第36図） 粘土瘤貼付の土器で、平行沈線による幾何学文の土器と、梯子状沈線による幾何学文の土器が混じり有った状態で出土していることから関山Ⅰ段階の前半に主体を持つものと思われる。

J-11号住居址出土の土器（第37図上段） 出土遺物が少ない中で、判断すると、平行沈線による幾何学文や、結び目縄文などから関山Ⅰ段階の後半になると思われる。

J-12号住居址出土の土器（第37図中段） 12号住居址も全体に出土遺物が少ないのであるが、上・下層から粘土瘤貼付、梯子状沈線の土器が出土していることから、関山Ⅰ段階前半の住居址と考えられる。

J-14号住居址出土の土器（第38図） 上・中層からは、粘土瘤貼付、梯子状沈線の土器が出土しており、炉址からは、ループ文施文の土器が出土していることから、関山Ⅰ段階前半と考えられる。

J-15号住居址出土の土器（第39・40図） 上・中・下層全体を通して、粘土瘤貼付土器、梯子状沈線の土器、ループ文の土器が出土していることから、関山Ⅰ段階前半と考えられる。

J-16号住居址出土の土器（第32図下段） 上層で、有尾段階の土器が見られるが、中・下層では、粘土瘤貼付、梯子状、平行沈線による幾何学文の土器が出土しており、関山Ⅰ段階前半から後半になる。

J-17号住居址出土の土器（第41図） 上・中・下層を通して、粘土瘤貼付、梯子状沈線。ループ文の土器が出土していることから関山Ⅰ段階前半と考えられる。

J-19号住居址出土の土器（第37図下段） 出土遺物が僅かで苦慮するが、梯子状沈線や、結び目縄文、ループ文の縄文をもつ土器から関山Ⅰ段階前半から後半にかけてと思われる。

（関根 慎二）

石器

1) 石器の分類

石器の分類は『大下原遺跡・吉田原遺跡』（大工原他1993）において行った分類を基本的に踏襲したものである。

この分類方法は「器種」の上位概念として、「石器種別（類）」という概念を用いている。「石器種別」は技術的特徴と製作工程の連動性からまとめた複数の「器種」を包括的に扱うための概念である。運用上はA類・B類・・・F類というように〈類〉を用いている。また、「器種」の下位概念としては「形態」を用いている。「形態」はこれまでに行われている石器の細分レベルの概念である。こうした概念を用いることにより、石器分類を階層的に捉えることが可能になる。これはちょうど、ディレクトリとファイルの関係のようなものであり、石器研究を系統的に行うために重要な概念である。

また、石材にも同様に「石材」の上位概念として「石材種別（類）」を用い、類似した性質により「石材」をⅠ類・Ⅱ類・・・Ⅵ類というように〈類〉を用いてグルーピングを行っている。これは石器石材の場合、岩石学的分類とは異なった基準、すなわち石材の性質により石器石材が選択されていることによるものであり、石器種別と対応する概念である。

そして、「石器種別」と「石材種別」は無関係なものではなく、特定の「石器種別」と「石材種別」が強い紐帯関係により結びついている点にこそ、縄文時代の石器群の本質的特徴が存在している。したがって、「石器種別」・「器種」と「石材種別」・「石材」を常に表裏の関係として分類・分析を進めて行く必要がある。この分類方法は、すでにくつかの遺跡の石器群に対して実践しているものであり、その有効性については漸次確認しつつある（大工原1988・1990・大工原・麻生・中島1993）。

なお、『大下原遺跡・吉田原遺跡』における分類は、本遺跡と時期が異なるため、器種の種類に違いがある。そのため、今回報告する中野谷地区遺跡群全体についての分類を第6表に示し、個々の遺跡の石器群の分類については本文中で述べることにした。

2) 石器組成

中原遺跡出土の石器の石器種別組成と器種組成は、第252図から第255図に示した。本遺跡から検出された石器は、大部分住居址から検出されたものである。住居址以外の遺物が少ない要因は、遺存状態や調査方法によるところが大きい。また、奈良・平安時代のM-1号溝からの出土遺物をみると、住居址が全く検出されていないA区・B区では当期の遺物はほとんど出土しておらず、遺物の分布は住居址周辺に限定されていたものと推定される。ゆえに、住居址出土の石器組成を検討することにより、本遺跡の石器組成の特徴については、おおよそ把握することが可能である。

石器種別	器種	技術的特徴	石材種別	石材	石材の特徴
A類	石鏃 石錐 石匙A類 スクレイパーA類 リットルフレクA類 楔形石器	押圧剥離を多用	I類	黒曜石 チャート 硬質頁岩 めのう 黒色安山岩	硬質で粘度が少ない 剥片剥離に最も適し鋭利
B類	打製石斧 スクレイパーB類 石匙B類 リットルフレクB類 三角錐形石器	直接打撃を多用	II類	頁岩(泥岩) 輝緑凝灰岩 硬砂岩	多少軟質でやや粘度がある 剥離に適するが鋭利さは劣る
C1類	磨石 凹石 石皿 球石	使用痕跡により 石器と認識される	III a類	安山岩	やや軟質で粘度がある 剥離に不適で剥離面は粗面 耐火性に富む
C2類	敲石 台石 砥石		III b類	(牛伏)砂岩 凝灰岩	軟質で粘度がない 剥離に不適でボロボロと崩れる
D類	石棒・石剣 棒状礫 多孔石・丸石 岩版	直接打撃・敲打・研 磨を複合的に用いる	IV類	結晶片岩	片理が発達している
E類	磨製石斧 石錘	直接打撃・敲打・研 磨を複合的に用いる	V類	緑色岩類	重量があり比較的硬質で粘度がある 剥離にあまり適さず剥離面は粗面
F類	垂飾 塊状耳飾 玉類 石製品 自然石・加工礫	直接打撃・敲打・研 磨を複合的に用いる	VI類	その他 (硬玉・鉄・ 白色凝灰岩・ 滑石等)	多種多様な希少石材

第6表 石器及び石材分類表

そこで、住居址出土の石器組成に重点を置いて、本遺跡の縄文前期の石器組成について検討することにする。

前項で住居址の遺物出土状態を検討した結果、住居址は最終的に廃棄場所として利用されることが一般的であるが、流れ込みにより埋没した例も存在することが判明した。そこで、石器組成を種別組成・器種組成・石材組成の3つの視点から検討することにより、生業活動を解明すると共に、遺跡におけるパターンの組合せと、パターンの質的变化を検討してみたい。

中原遺跡の住居址は出土遺物から大きく2時期に分かれる。関山Ⅰ段階を主体とした住居址は14軒であり、有尾段階の住居址は2軒のみである。なお、J-1号住居址は関山Ⅱ段階のものであり、J-4号住居址では1・2層に有尾式土器が若干混入している。この点に留意しながら各層について調べてみたい。

石器種別組成

石器種別組成からA類・B類について、石器(狭義)と剥片類の数量比について検討する。これにより、剥片類が多い石器製作的パターンと、石器の多い石器消費的パターンを抽出することができる。パターンの種類は理論的には第 表のように36種類に分類することができるが、本遺跡の場合、大きく4つのパターンが存在する。なお、C類～F類については、いずれの住居でも数量が少なく、大きな違いは見出せない。

パターンA1 A類・B類とも活発な石器製作的パターンを示すもの(J-4・J-8・J-10・J-16)

パターンA2 A類・B類とも活発な石器製作的パターンを示すが、B類では活発な石器消費的パターンも併せて示すもの(J-15・J-5・J-17・J-1・J-3・J-14)

パターンa1 A類は石器製作的パターンを示すものの低調であり、B類は活発な石器製作的パターンを示すもの(J-6)

パターンa1 A類・B類とも低調な石器製作的パターンを示すもの(J-12・J-7・J-9・J-11・J-19)

これらのパターンと住居群との関係を示したのが第8表である。関山段階では、パターンA2が北群に多く、パターンa1は南群に多い。そして、パターンA1は各群とも同数である。このように、北群と南群では石器種別パターンが多少異なっていたことが確認された。すなわち、北群では石鏃等の製作を行う頻度が高く、かつ、打製石斧・スクレイパーB類等の製作と消費が行われているのに対し、南群では石器製作・消費とも全般に低調であったと換言することができる。

また、関山Ⅰ段階の住居址全体の種別組成は第251図のとおりである。この組成はパターンA1

A	B	1	1	2	2	3	3
A	A 1	A ₁	A 2	A ₂	A 3	A ₃	
a	a 1	a ₁	a 2	a ₂	a 3	a ₃	
B	B 1	B ₁	B 2	B ₂	B 3	B ₃	
b	b 1	b ₁	b 2	b ₂	b 3	b ₃	
C	C 1	C ₁	C 2	C ₂	C 3	C ₃	
c	c 1	c ₁	c 2	c ₂	c 3	c ₃	

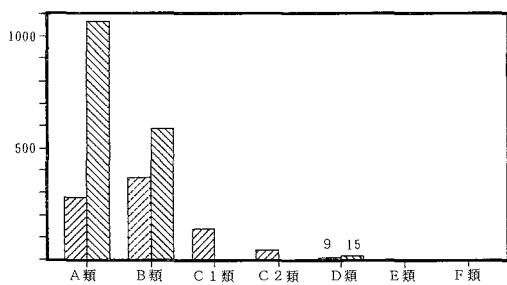
A : A類活発な石器製作的パターン
 a : A類低調な石器製作的パターン
 B : A類活発な石器製作・消費的パターン
 b : A類低調な石器製作・消費的パターン
 C : A類活発な石器消費的パターン
 c : A類低調な石器消費的パターン
 1 : B類活発な石器製作的パターン
 1₁ : B類低調な石器製作的パターン
 2 : B類活発な石器製作・消費的パターン
 2₁ : B類低調な石器製作・消費的パターン
 3 : B類活発な石器消費的パターン
 3₁ : B類低調な石器消費的パターン

第7表 石器種別のパターン分類表

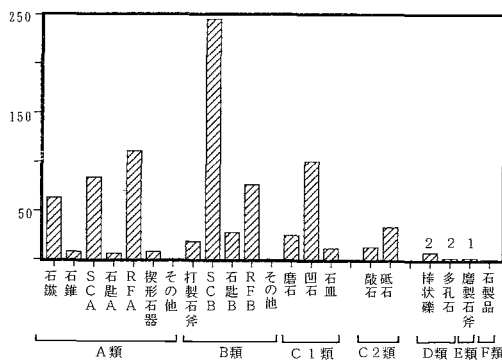
パターン	北群 (C区)	南群 (D区・E区)	計
A 1	2	2	4
A 2	4	2	6
a 1	1 (1)		1 (1)
a ₁	2 (1)	3	5 (1)
計	9 (2)	7	16 (2)

() 内の数は有尾段階の住居の数

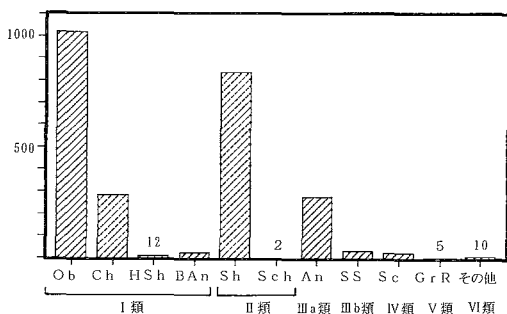
第8表 石器種別パターンと住居群との関係



種別組成

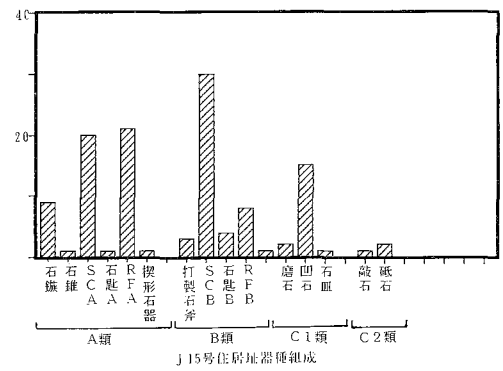
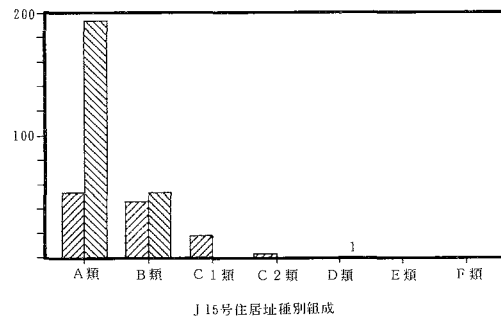
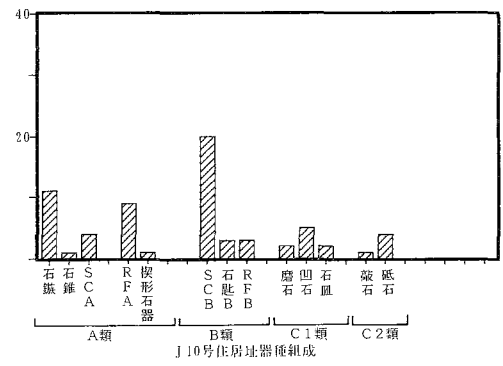
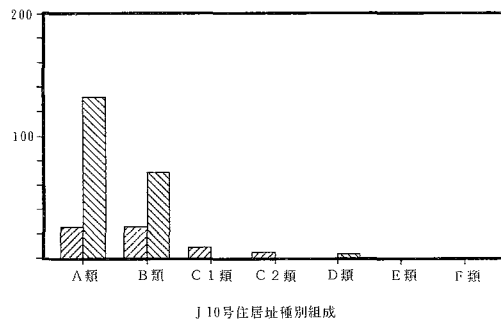
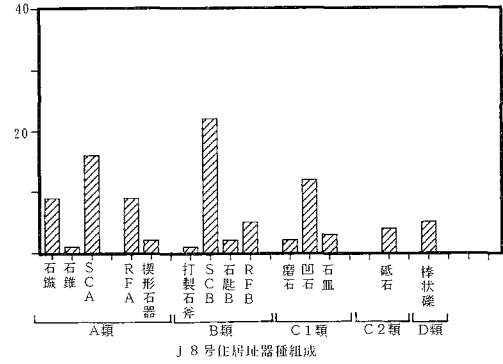
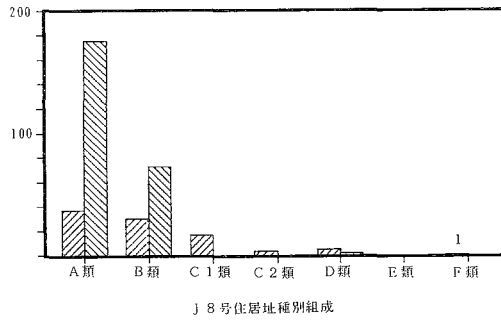
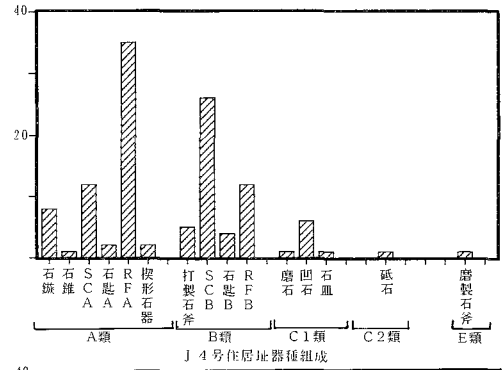
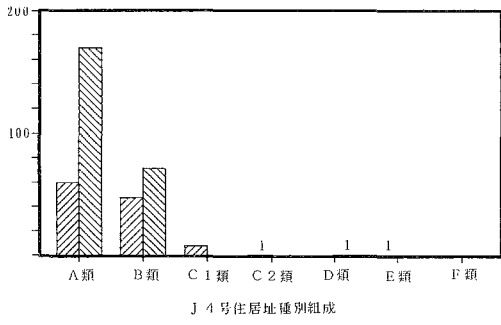


器種別組成



石材別組成

第251図 関山I段階の石器種別・器種・石材組成



▨ 石器 ▨ 剝片·石核·原石

第252圖 住居址石器種別・器種組成 (1)

に近似したものであり、出土量の多いパターンの様相が強く反映されている。しかし、出土量の少ないことも生業内容を反映したものであり、累積結果の解釈には注意が必要である。

なお、有尾段階の住居址はパターン a 1・a1に該当するものが各1軒ずつ認められる。関山Ⅰ段階に比べ、A類の製作・消費が低調である。この傾向は猫沢川を挟んで南に位置する大下原遺跡の有尾段階でも同様であることから、少なくとも本地域の有尾段階に特徴的な傾向とみられる。

器種組成

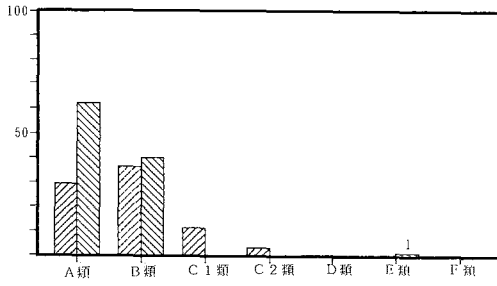
関山段階の組成 A類石器の中で代表的器種である石鏃の数量について調べると、10点前後有するものと、3点以下のものに分かれる。前者は北群4軒・南群2軒である。これに対し、後者では北群3軒・南群5軒であり、北群に属する住居の方が石鏃の数量が多い傾向が認められる。また、スクレイパーA類、リタッチド・フレイクA類が比較的多い住居址は3軒存在するが、すべて北群に属する。このように、北群に位置する住居址の方がA類石器の製作・消費が活発な傾向がうかがえる。また、石錐・石匙A類は各住居址数点と個数は少ないが、過半数の住居址から検出されており、必需品であったと推定される。

B類石器では、全体としてスクレイパーB類が多い点が特徴であり、当期では生業活動を行う際に重要な石器であったことが解る。この器種が多い（20点以上）住居址は7軒存在し、北群3軒・南群4軒である。また、やや多い（10点以上20点以下）住居址は北群に3軒存在する。そして、少ない（10点以下）の住居址は北群1軒・南群3軒であり、群による偏りは認められない。

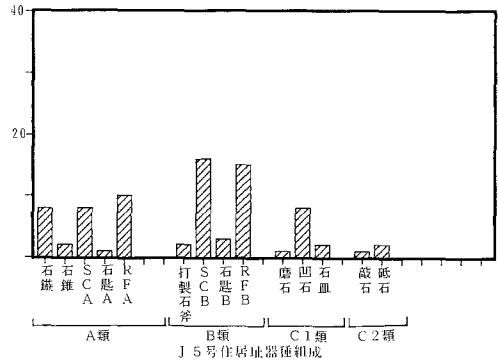
打製石斧は数点検出される程度であるが、10軒の住居址から検出されている。打製石斧は前期前半期特有の片刃撥形を呈する形態（Ⅰ形態）が82.6%を占める。J-10・J-3号住居址では石器の出土点数が多いのに、全く検出されておらず、住居址によりやや偏りがあるようである。また、J-1号住居址では8点（内Ⅰ形態7点）と多いが、この住居址は関山Ⅱ段階に属するものである。石匙B類も打製石斧同様10軒の住居址から検出されているが、個数は5点以下と少ない。このように、打製石斧・スクレイパーB類は、この時期の石器群では特徴的な器種であるが、数量的には案外少ないのが実態のようである。

C1類石器では、凹石が多く、すべての住居址から検出されている。特に個数が多い（10点以上）住居址は、3軒ありすべて北群である。磨石は11軒と、ほとんどの住居址から検出されているが、数量は数点と少ない。石皿は9軒の住居址から数点検出されているが、北群7軒・南群2軒であり、北群に偏在している。以上のように、C1類石器は北群から、より多く検出される傾向がある。

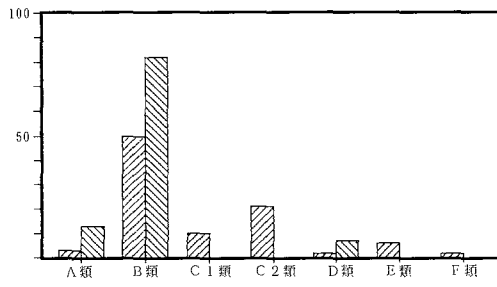
C2類石器では数量が少ないが、砥石・敲石は少量ずつ組成している。この類の石器は使用頻度が低いものであることが解る。



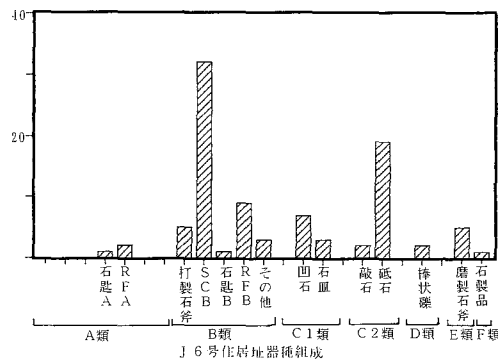
J 5号住居址種別組成



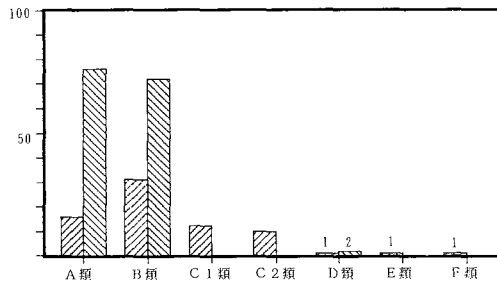
J 5号住居址器種組成



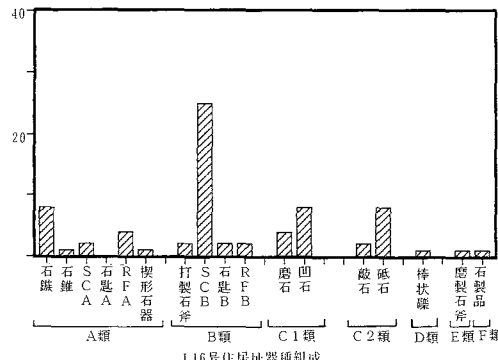
J 6号住居址種別組成



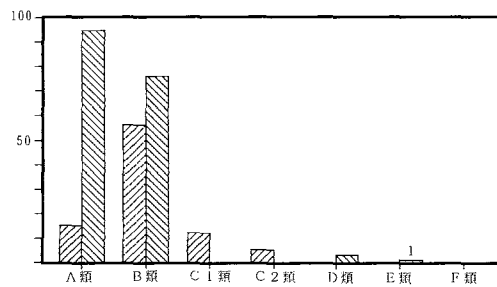
J 6号住居址器種組成



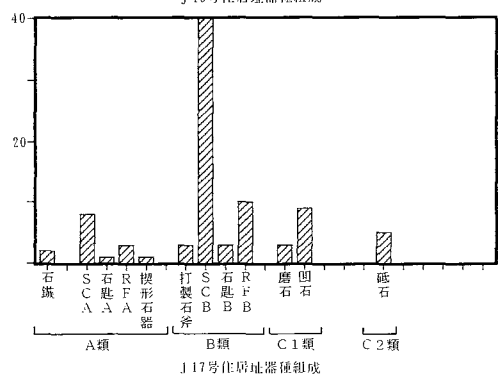
J 16号住居址種別組成



J 16号住居址器種組成



J 17号住居址種別組成



J 17号住居址器種組成

▨ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

第253図 住居址石器種別・器種組成 (2)

D類石器では、棒状礫は3軒の住居址から若干検出されている。また、多孔石も3軒の住居址から若干検出されている。いずれの器種も非常に少なく、利用頻度の低いものとみられる。

E類石器では、磨製石斧は2軒の住居址から各1点検出されているのみであり、使用頻度は極めて低いとみられる。

F類石器では、J-16号住居址より、垂飾が1点検出されているのみであり、この時期では装身具は保有率の極めて低いものであったことが解る。

また、関山I段階の全体の器種組成は第251図のとおりである。スクレイパーB類を主体としたB類石器が最も多く、次いで石鏃・スクレイパーA類等を主体としたA類石器と、凹石を主体としたC1類石器が多い。しかし、C2類以下の<類>に属する器種は非常に少ない。組成の主体を占める器種は直接生業に関連する器種であり、加工具(C2類)・木工具(E類)が少ない点や、いわゆる「第二の道具」(D類・F類)をほとんど保有していない点が大きな特徴である。組成グラフではB類石器にピークをもつ比較的単純な山なり形を呈するものであり、この波形を本遺跡における関山I段階の標準的生業パターンとして認識することができる。

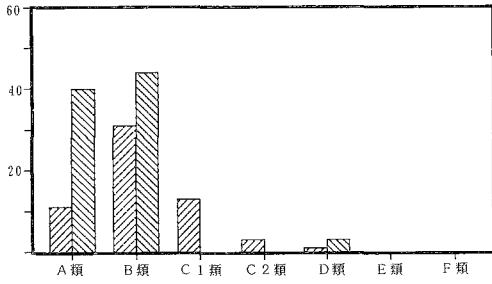
当期の標準的生業パターンでは、B類石器やC1類石器は組成中での数量的変位幅が比較的少なく安定しているが、A類石器は変位幅が大きく、やや安定に欠ける。この点もひとつの特徴としてとらえることができる。

特に北群においては、変位幅が大きく、石鏃の数量が多いものが偏在するが、種別組成においてもA類は北群で変位幅が大きい傾向が確認されており、剥片剥離に関連するものとしてとらえることができる。

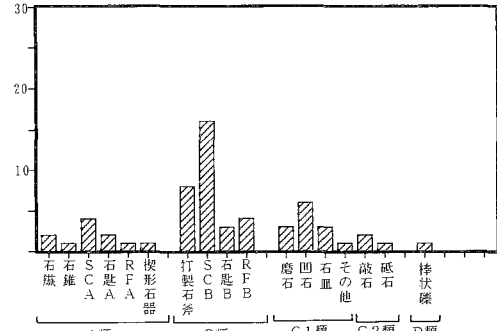
なお、種別組成の項でも述べたように、全体の組成には出土量の多い住居址の組成が強く反映されており、留意しておく必要がある。

有尾段階の器種組成 この段階に属する住居址は2軒であり、組成を検討するには数量的に問題があるので、概観するにとどめる。A類石器はほとんど検出されていない。わずかに石匙A類・リタッチドフレイクA類が検出されているのみである。また、B類石器では、スクレイパーB類が圧倒的に多い。打製石斧は少量存在し、ほとんどI形態である。そして、C1類石器では凹石と石皿が少量ずつ検出されている。C2類石器では、砥石と敲石を組成する。特に、J-6号住居址では砥石が20点も検出されており、突出した組成を有している。D類石器では、棒状礫が若干検出されているのみである。E類石器では、J-6号住居址より磨製石斧が5点まとまって検出されている。F類石器では、块状耳飾が1点J-6号住居址より検出されている。

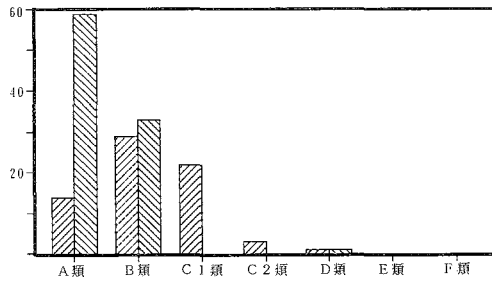
全体の傾向は、B類石器が最も多く、次いでC2類石器、C1類石器、E類石器の順である。しかし、これにはJ-6号住居址の器種組成が大きく反映されており、砥石・磨製石斧といった加工具・木工具が多いが、A類石器はほとんど存在しないと、J-6号住居址の個別的な



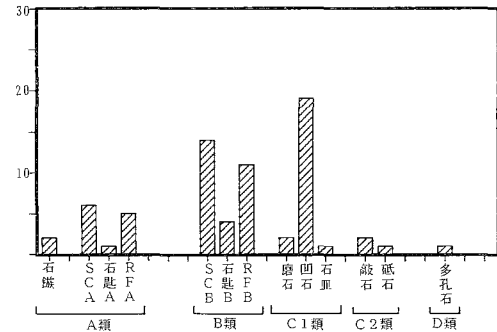
J 1号住居址種別組成



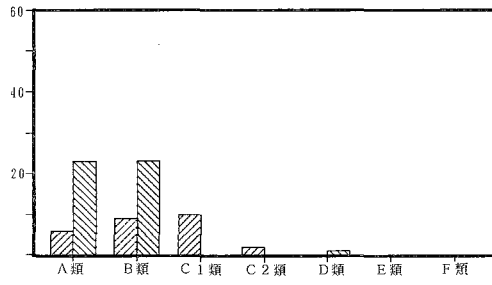
J 1号住居址器種組成



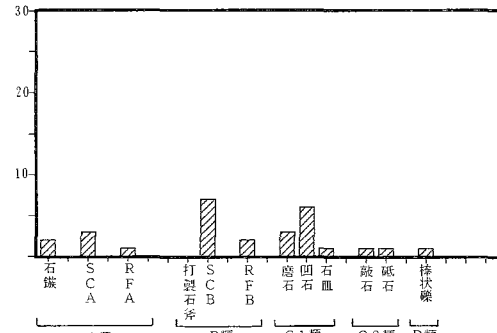
J 3号住居址種別組成



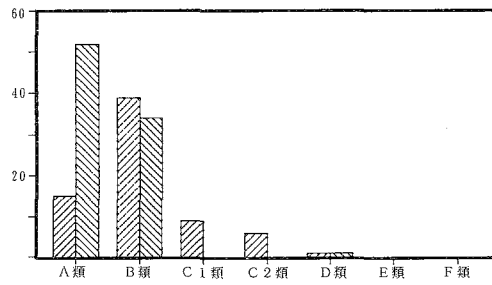
J 3号住居址器種組成



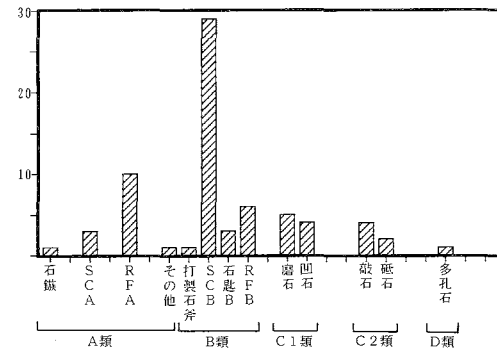
J 12号住居址種別組成



J 12号住居址器種組成



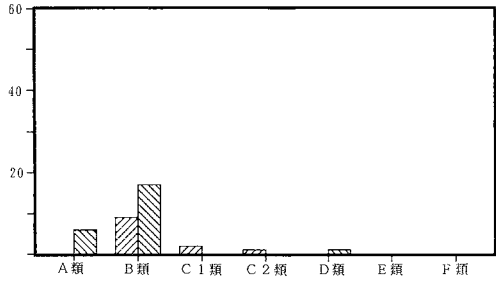
J 14号住居址種別組成



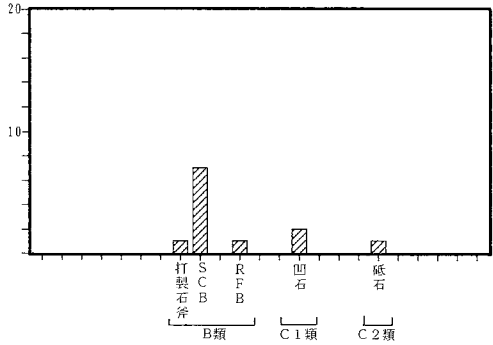
J 14号住居址器種組成

▨ 石器 ▨ 剥片・石核・原石

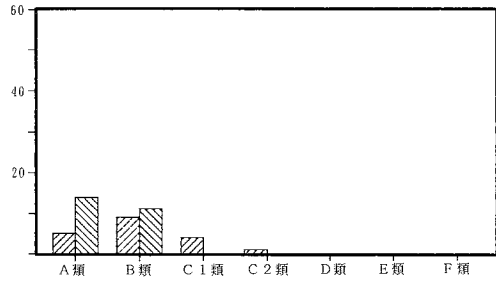
第254図 住居址石器種別・器種組成 (3)



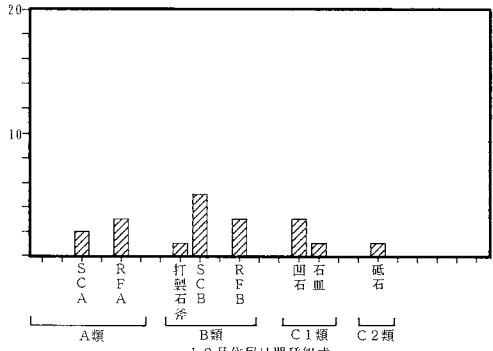
J 7号住居址種別組成



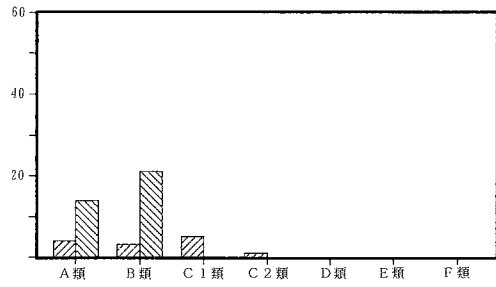
J 7号住居址器種組成



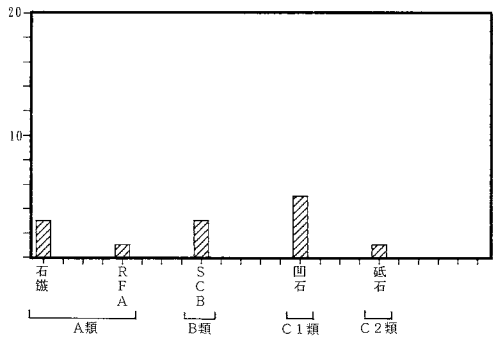
J 9号住居址種別組成



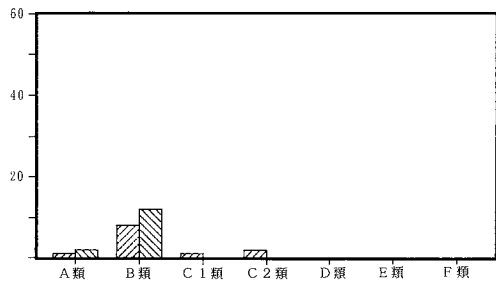
J 9号住居址器種組成



J 11号住居址種別組成

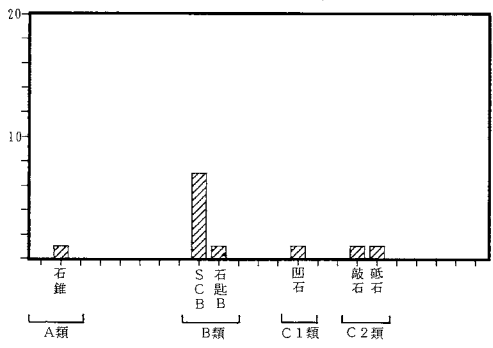


J 11号住居址器種組成



J 19号住居址種別組成

▨ 石器 ▨ 剝片・石核・原石



J 19号住居址器種組成

第255図 住居址石器種別・器種組成(4)

器種組成を反映したものと判断される。したがって、有尾段階の石器組成については、本遺跡の資料のみでははっきりしない。

石材組成

各住居址の石材組成は第256図～第257図に示したとおりである。

石材種別では、Ⅰ類～Ⅲa類が多く、Ⅲb類～Ⅵ類は非常に少ない。具体的石材では、石鏃などの素材となる黒曜石、打製石斧・スクレイパーB類の主要な素材である頁岩（泥岩）、凹石・石皿などの素材である安山岩が、どの住居址でも大きな割合を占めている。ただし、ここで示しているのは個数組成であり、重量組成としてみた場合、安山岩と頁岩（泥岩）は大きな割合を占めるものの、黒曜石は小剥片が多く、実際の割合は非常に小さい。

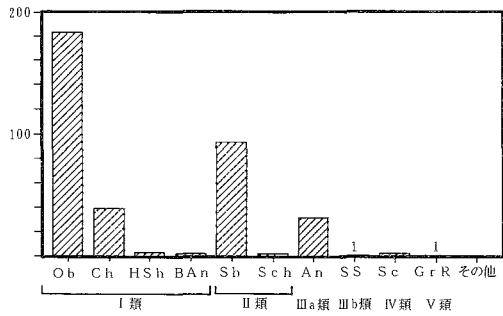
また、石材種別ごとにみると、Ⅰ類では黒曜石が圧倒的に多く、チャートが次いで多い。Ⅱ類は頁岩（泥岩）、Ⅲa類では安山岩が大部分を占めている。それ以外の種別はどれも非常に少ない。なお、少量検出されている石材では、黒色安山岩（Ⅰ類）・硬質頁岩（Ⅰ類）・めのう（Ⅰ類）・砂岩（Ⅲb類）・結晶片岩（Ⅳ類）・緑色岩類（Ⅴ類）・滑石（Ⅵ類）・硬玉（Ⅵ類）などが存在する。この中で、砂岩は砥石と、緑色岩類は磨製石斧と密接な関係にある石材であり、恒常的に多くは必要としないものの、重要な石材であったことがうかがえる。

石材組成での関山段階と有尾段階の差異は、黒曜石の割合の差異として示される。関山段階では黒曜石が多く、有尾段階では黒曜石は非常に少ない。なお、有尾段階では黒曜石だけでなく、Ⅰ類全体も非常に少量である。これは、器種組成では石器A類の差異として認められている点であり、石器A類と石材Ⅰ類は密接な関係にあることによるものである。

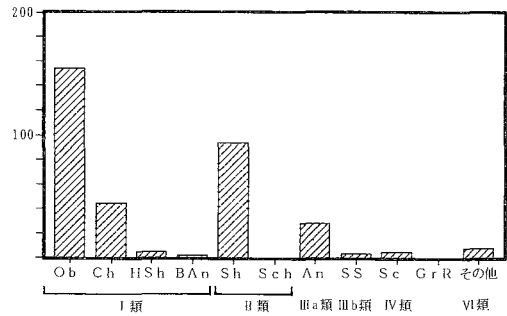
これらの石材の入手地点については、すでに現地調査・石材分析によりある程度判明している（磯貝・大工原1993）が、その結果をもとに本遺跡の石材入手地点を推定すると、碓氷川・鐺川水系で入手できない石材は、黒曜石・硬質頁岩・めのう・硬玉であり、それ以外のほとんどの石材は半径10km以内の比較的近い場所で入手していたものと推定される。

また、黒曜石は70km以上離れた遠隔地からもたらされた石材でありながら、常に一定量は確保されていることから、特別の重要な石材として認識されていたものとみられる。

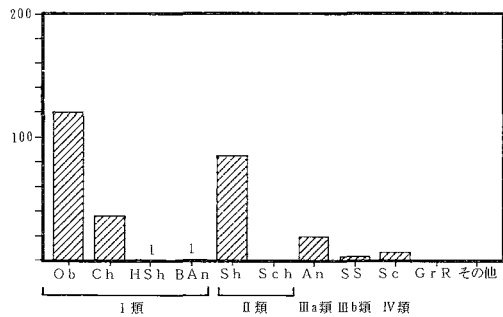
（大工原 豊）



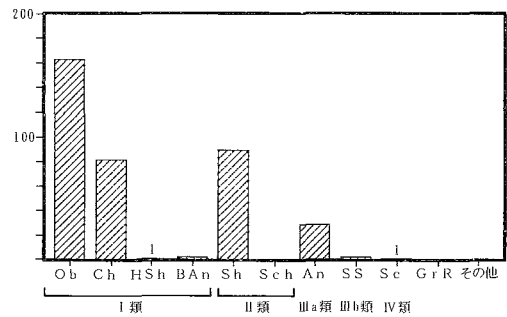
J 4号住居址石材組成



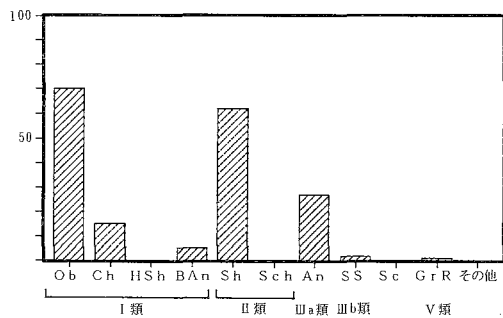
J 8号住居址石材組成



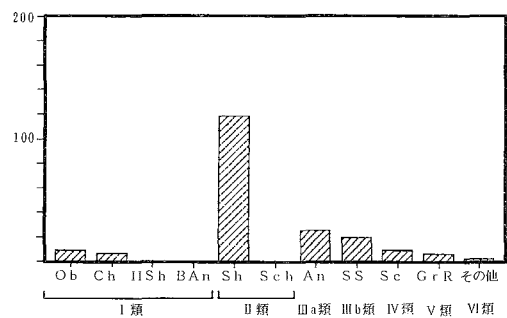
J 10号住居址石材組成



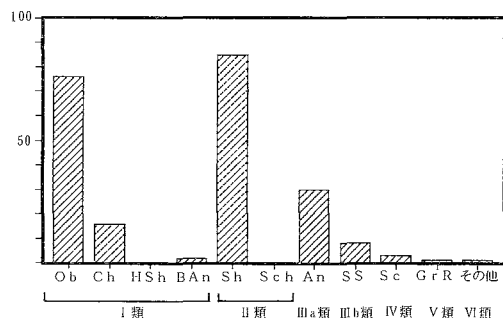
J 15号住居址石材組成



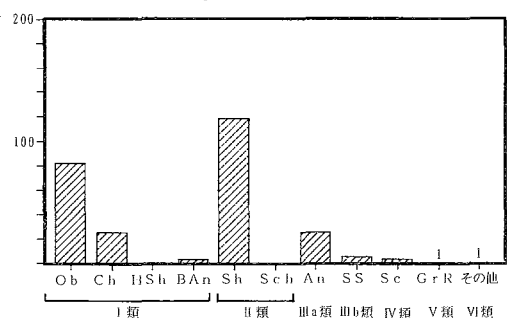
J 5号住居址石材組成



J 6号住居址石材組成

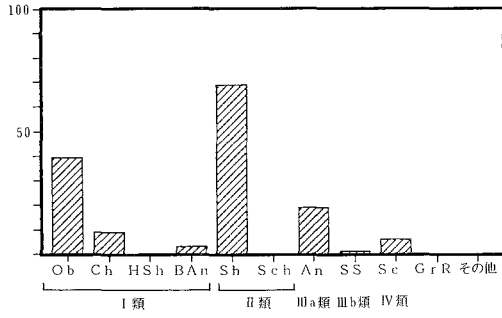


J 16号住居址石材組成

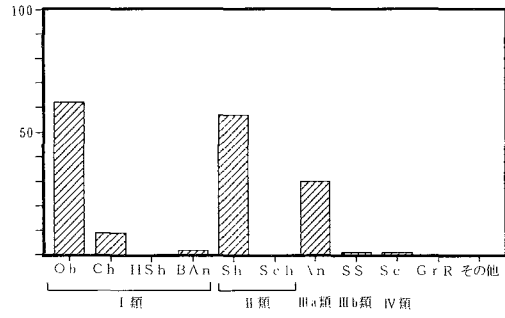


J 17号住居址石材組成

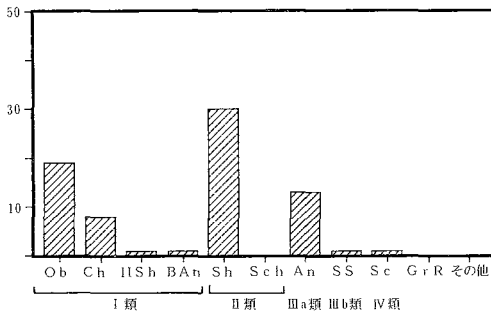
第256図 住居址石材組成 (1)



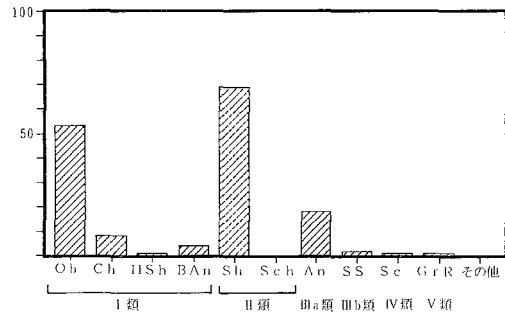
J1号住居址石材組成



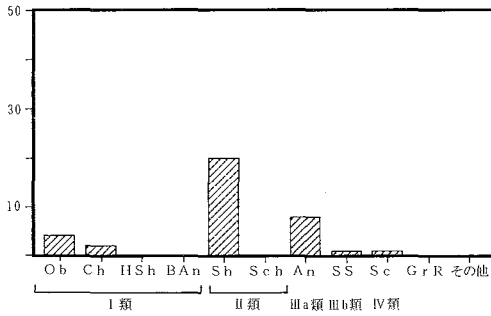
J3号住居址石材組成



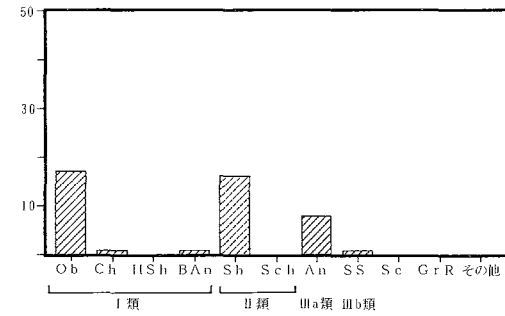
J12号住居址石材組成



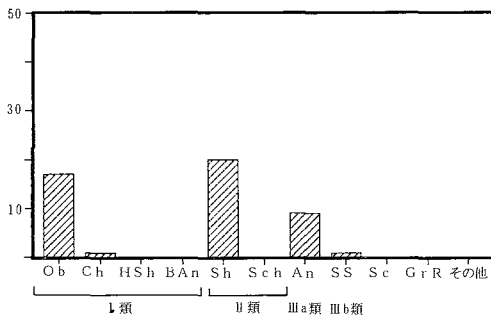
J14号住居址石材組成



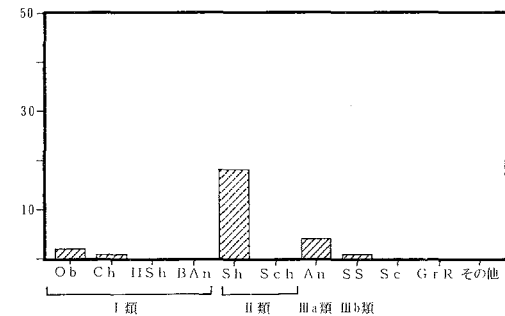
J7号住居址石材組成



J9号住居址石材組成



J11号住居址石材組成



J19号住居址石材組成

第257図 住居址石材組成 (2)

A類石器

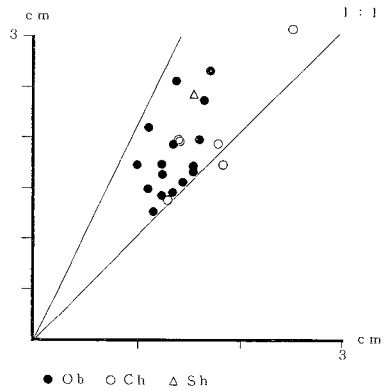
石鏃（第43図） 全部で52点出土しているが、大部分は関山I式土器と共伴しており、この段階のものだと判断される。形態は凹基無茎鏃（I形態）と平基無茎鏃（II形態）に分類されるが、I形態が圧倒的に多く、II形態は4点のみである。

I形態は細部の違いからI a～I gの7形態に細分される。I a（1～5）・I b（6～10）・I c（11～15）・I d（18）・I e（22～26）は比較的小形のものである。この中で主体を占めるI a～I c形態は、大きさと長幅比が少しずつ異なるものの、基本的には同一の範型を有していたとみられる。また、I f（16～17）・I g（19～21）は比較的大形のもので、数量的には少ない。

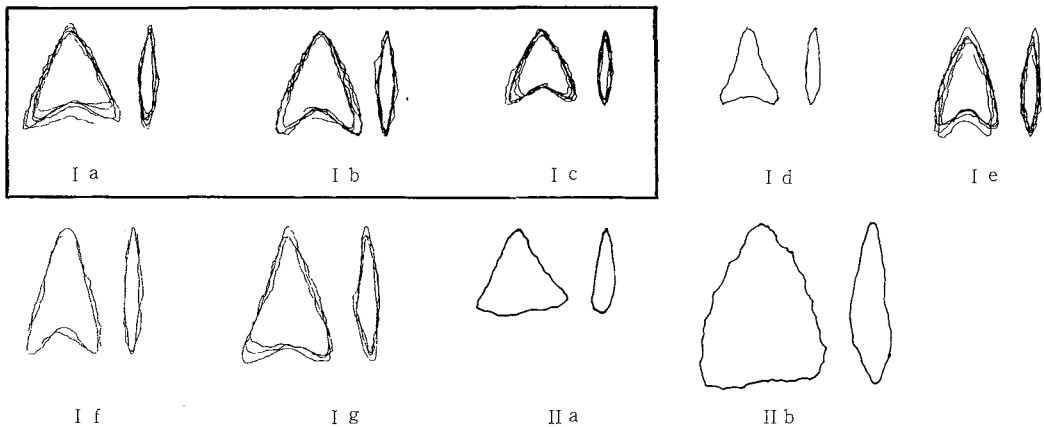
II形態でも個数は少ないが、小形（27）と大形（28）に分類できる。それぞれ2点ずつしか検出されておらず、範型を抽出することはできない。なお、大形の28は明らかに他のものと区別される大きさであり、未成品の可能性もある。

石材別にみると、黒曜石が42点と多用されており、チャート9点、頁岩1点とわずかに用いられているに過ぎない。また、I形態では黒曜石の占有率が非常に高いのに対し、II形態ではチャートが多く、頁岩も含まれている。

石鏃の大きさは第258図のグラフのとおりである。長幅比2：1から1：1の範囲内にほとんどすべてのものが収まる。また、長さは1～2.7cm・幅1～2cmの範囲内に28（II形態大形）を除きすべてのものが収まる。そして、各形態とも小形と大形は、長さ



第258図 石鏃の長幅比



第259図 石鏃の形態と範型

2 cmを境にはほぼ区別される。なお、チャートがグラフ上では分布の外縁部に存在するが、Ⅱ形態に属するものが多いためである。

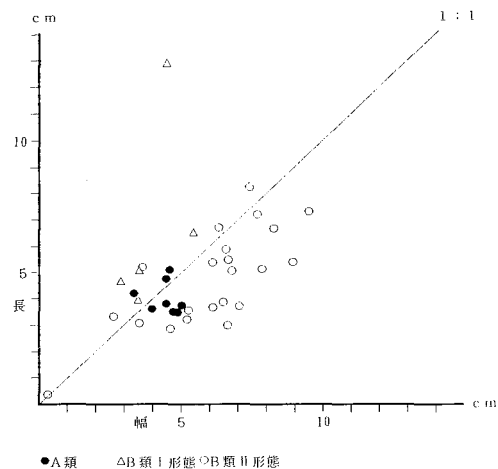
また、石鏃未成品については、今回図示しなかったが28点存在する。大形で剥片剥離工程の途中で放棄されたものと、形状のはっきりしない小形のものがある。この中では小形のものが多い。また、石材はチャートの4点がすべて大形であり、黒曜石は24点である。

以上のことから、石鏃についてまとめると、Ⅰ形態ではⅠa～Ⅰeの小形のものと、Ⅰf・Ⅰgの大形のものに大別され、この中では小形のⅠa～Ⅰcが数量的にも範型の強度からも主体を成していることが判明した。また、Ⅱ形態でも大形と小形に大別される傾向が認められた。大形と小形は長さ2 cmを境としているが、両者は用途により区別されて製作されていた可能性が高い。素材として用いられる石材は黒曜石が圧倒的であるが、Ⅱ形態ではチャートなど黒曜石以外の石材の頻度が高く、形態と石材との間に一定の関係が存在していた可能性がある。

石錐（第44図1） 10点検出してされており、1点を除き関山Ⅰ式土器と共伴している。個々の形態差は大きく、石鏃のように定形化しているものは少ない、そのため、石錐と分類したものの、石鏃未成品に分類することが可能なものも含まれている。形態及び個数は、Ⅰa形態（摘みなし・小形）4点、Ⅱa形態（摘み有り・小形）2点、Ⅱb形態（摘み有り・大形）4点であるが、摘みの有無の明確でないものが多い。

石材は黒曜石4点、頁岩4点、チャート3点であり、石材Ⅰ類・Ⅱ類が用いられており、石鏃のように特定の石材との強固な結びつきはない。

石匙A類・B類 「石匙」は器種レベルの分類より、スクレイパーの細分形態である「摘み付きスクレイパー」として認識することが妥当であり、広義のスクレイパーの中に入れて分類することが妥当と考えられる。しかし、「石匙」の呼称が現在は慣用的に用いられていることから、ここではとりあえず「石匙」の呼称を用い、スクレイパーの分類規準を準用し、押圧剥離により摘み部が作出されているか否か、硬質で粘度の少ない石材が用いられているか否かにより、「石匙A類」と「石匙B類」に大別した。ただし、黒色安山岩の



第260図 石匙A類・B類の長幅比

ものと頁岩のものの一部はA類ともB類とも区別がつかない「交わり」に位置するものが存在している。これらの個体はここでは原則としてB類に分類した。

摘み部が作出された形態が特徴であるが、形状で縦形と横形、調整加工による細分、さらには摘み部の作出状態から、範型について検討する。

石匙A類（第44図3～7） 石鏟やスクレイパーA類と共通の石材I類を素材とし、押圧剥離を主体とした調整が施されたものであり、10点検出されている。この中の1点は有尾式に伴うが、残りは関山I・II式に伴っている。すべて横形である。

関山段階の石匙A類は、次の2種類に細分することができる。

II a形態（3・6・7）は、横形で摘み部が幅広で薄身のものであり、調整は刃部を中心に全体に及んでおり、比較的精緻な押圧剥離が主体であり、スクレイパーA類I a形態・I b形態の範疇に含まれる。5点検出されており、黒曜石の1点を除きチャート製である。この形態は比較的明確な範型の存在がうかがえる。

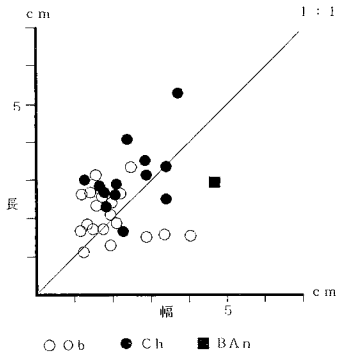
II b形態（4・5）は、横形で摘み部がはっきりせず、肉厚なものである。主剥離の打点は肩部に位置するが、調整により除去されている。調整は押圧剥離と直接打撃が併用され、精緻ではない。スクレイパーA類I b形態の範疇に含まれる。4点検出されており、黒色安山岩の1点を除き、チャート製である。この形態は石匙としては特異な形状であるが、比較的明確な範型の存在がうかがえる。

有尾段階のものは図示していないが、摘み部が小さいII a形態（横形・比較的精緻な調整）で、関山段階のものと区別される。

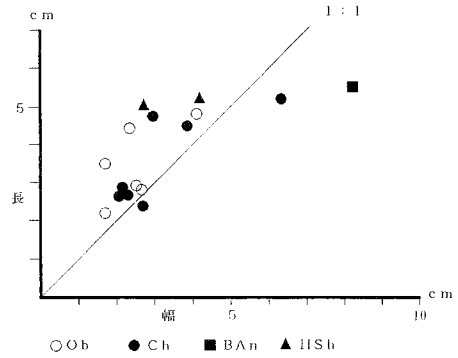
スクレイパーA類（第44図8～12） 96点検出されている。調整方法から、4形態に大別することができる。押圧剥離によると推定されるI a形態（8・11）、押圧剥離と直接打撃を併用したと推定されるI b形態（9・10）、直接打撃によると推定されるII形態、縁辺に微細な剥離が観察されるIII形態（12）である。また、形状・刃部形態からさらに多くの形態に細分することが可能である。

第261図1～5はスクレイパーA類の形状と大きさを示したグラフである。全体では同図5のように、長幅比1：1を中心に4：1から1：5まで大きくバラつきがある。また、大きさは1～6 cmの範囲に95%が含まれる。

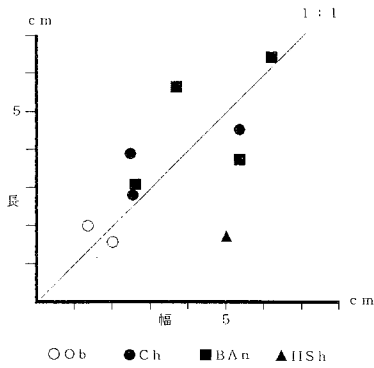
石材別では、黒曜石47点、チャート37点、黒色安山岩8点、硬質頁岩4点であり、黒曜石とチャートで87.5%を占める。比較的大形のもので硬質頁岩やチャートを用いるのに対し、小形のものには黒曜石が多い傾向がある。



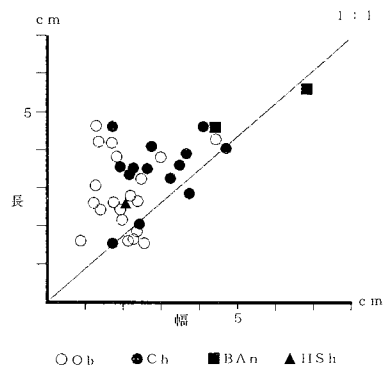
スクレイパーA類のI a形態



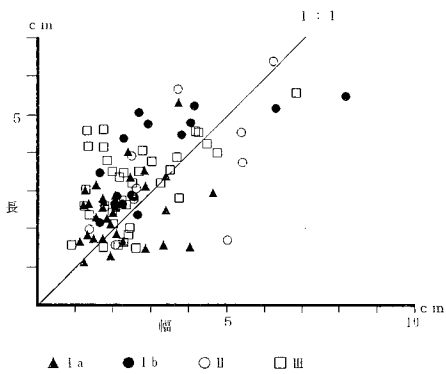
スクレイパーA類のI b



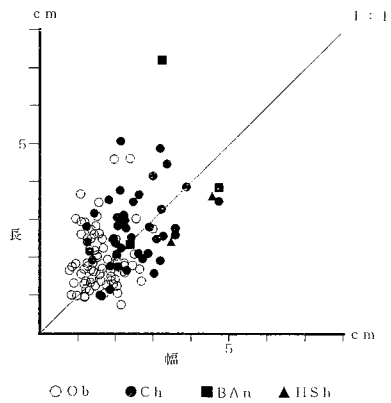
形態スクレイパーA類のII形態



スクレイパーA類のIII形態



スクレイパーA類の形態全体



リタッチド・フレイクA類の石材別長幅比

第261図 スクレイパーA類・リタッチド・フレイクA類の長幅比

形態別にみると、I a 形態は33点存在するが、黒曜石19点、チャート13点であり、黒色安山岩は1点のみであり、黒曜石の占有率が57.6%と最も高い。また、形状は長幅比1:1を中心にややバラつきをもっており、1~4cmの大きさのものが大部分である。なお、長さ1.7~3cm・幅2.3~3.2cmの範囲に空白域が認められる。この大きさは石鏃の素材に適した大きさであり、石材の共通する石鏃とI a 形態が、補完的関係を有していることを示している。

I b 形態は16点あり、石材別内訳は黒曜石6点、チャート7点、硬質頁岩2点、黒色安山岩1点であり、I a 形態に比べ、黒曜石の割合が小さい。また、形状・大きさはI a 形態よりやや大形のものが多い。なお、I a 形態同様石鏃の素材剥片に相当する部分に空白域が認められる。

II 形態は10点あり、石材別内訳は黒曜石2点、チャート3点、硬質頁岩1点、黒色安山岩4点であり、黒曜石以外の石材が多い。特に、黒色安山岩の占有率が高い点の特徴である。また、形状・大きさは、バラつきが大きく、特定の傾向は見い出せない。

III 形態は37点あり、石材別内訳は黒曜石20点、チャート14点、硬質頁岩1点、黒色安山岩2点であり、黒曜石の占有率が54%と高い。形状・大きさでは長幅比1:1~2:1のやや縦長の剥片を素材とするものが多い傾向がある。

リタッチド・フレイクA類 具体的に資料は図示していないが、120点検出されている。剥片の縁辺1/2以下に対し、小剥離が認められるもので、スクレイパーA類III形態と類縁関係にある。なお、この中には「加工痕のある剥片 (Retouched-Flake)」と、「使用痕のある剥片 (Utilized-Flake)」の両者を含めている。

大きさ及び形状は第261図6のグラフのとおりである。長幅比1:1を中心にややバラつきをもって分布し、ほとんどのものが1~5cmの範囲に含まれる。なお、1~4cmの小形のものと、4~5cmのやや大形のものに分かれる傾向がある。黒曜石のものは小形の中でも1~2cmの部分に集中している。

石槍 (第44図13) 1点検出されているのみである。頁岩製の両面調整のもので、ほぼ中央から先端部を欠損している。関山1段階のJ-14号住居址から検出されているが、早期押型文土器や特殊磨石が混在しており、この石器もこの時期の可能性がある。

(麻生 敏隆・大工原 豊)

B 類石器

打製石斧 (第45図・第46図) 本遺跡では53点検出されている。石材はほとんど頁岩であり、輝緑凝灰岩や安山岩が若干用いられている。撻形・急角度調整・断面蒲鋒形・片刃の「斧」的特徴

を有するⅠ形態と、撥形～短冊形・両面階段状剥離・断面レンズ形・両刃の「土掘具」的特徴を有するⅡ形態に大別することができる。Ⅰ形態のもの的大部分は前期前半（関山Ⅰ式～有尾式）の土器と同伴関係にあり、この段階のものと判断される。しかし、Ⅱ形態は表面採集や調査区・湧水坑から検出されたものが大部分であり、ほとんど時期が異なり、前期前半期に属する確実な例は存在しない。したがって、ここでは所属時期が明確なⅠ形態について言及することにする。

Ⅰ形態は36点検出されている。側縁部の形状や刃部形状など細部の違いにより、細分が可能である。以下、代表的な細分形態について説明する。

- Ⅰ a 形態（第45図1） 中形で三角形を呈する。刃部は直刃片刃で急角度である。
- Ⅰ b 形態（第45図2・6） 小形で撥形を呈する。刃部は円刃で急角度である。搔器的である。
- Ⅰ c 形態（第45図4・5） 小形で三角形を呈する。刃部は調整により作出されており、直刃片刃急角度である。
- Ⅰ d 形態（第45図3・7～9・第46図12） 小形で撥形を呈する。刃部は調整により作出されており、直刃片刃で急角度である。第46図12のように、Ⅱ形態的なものもある。
- Ⅰ e 形態（第45図10～13） 小形で撥形を呈するが、片側縁が外反し、突出する。刃部は一次剥離面を利用した緩やかな円刃である。
- Ⅰ f 形態（第45図14・15） 小形で撥形を呈する。刃部は一次剥離面を利用した円刃である。
- Ⅰ g 形態（第45図16・17） 中形で撥形を呈するが、周囲の調整は粗い。刃部は調整により作出された緩やかな円刃である。
- Ⅰ h 形態（第46図1～3） 中形で幅広な撥形を呈する。刃部は調整により作出された直刃ないし緩やかな円刃であり、厚い。使用による磨耗痕が多少認められる。

関山Ⅰ段階ではⅠ g 形態を除くすべての形態が検出されており、Ⅰ d・Ⅰ e 形態がやや多い。また、同Ⅱ段階では、Ⅰ d～Ⅰ g 形態が検出されている。そして、有尾段階のものはⅠ b・Ⅰ c・Ⅰ g 形態が検出されている。この結果から、Ⅰ a 形態は関山Ⅰ段階に、Ⅰ g 形態は関山Ⅱ～有尾段階にそれぞれ属しており、時期的な形態変化の一端を示していると推定される。しかし、それぞれの形態に属する個体数が数点ずつと少ないため、各形態が範型として区別されるものなのか、範型の偏差の幅なのかこの資料だけでは明言できない。

次に、Ⅰ形態の機能・用途について検討する。前述のとおり形態差には、時間差によるものが含まれている可能性を指摘することができる。しかし、刃部が厚いⅠ a～Ⅰ d・Ⅰ h 形態と刃部の薄いⅠ e～Ⅰ g 形態では、機能的に差異があり、中形と小形でも同様に違いが認められる。

使用痕を観察すると、Ⅰ形態ではどの形態にも僅かな磨耗痕が観察されるものが含まれている

が、Ⅱ形態のような「土掘具」特有の顕著な磨耗痕が認められるものはないが、刃部に使用痕と推定される小剥離が観察されるものが存在する。また、欠損例が少なく、刃部再生も行われていない。以上のような観察所見と、比較的小形のものが多く軽量である点から、強い衝撃を受ける対象物を切截するために用いられた可能性は低い。また、Ⅰd形態のように左右非対称の形状を呈するものもあり、柄の装着方法が「横斧」だけでなく、「縦斧」も想定することができる。

したがって、Ⅰ形態の打製石斧は、対象物を木材に限定した専用伐採具ではなく、「鉞」あるいは「トマホーク (tomahawk)」のような、より広範な万能具的な伐採具であった可能性が高い。

Ⅱ形態は17点検出されている。中形と小形のものがあり、使用による顕著な磨耗痕が観察されるものが大部分である。石材は頁岩が多く、安山岩や輝緑凝灰岩も少し用いられている。刃部は磨耗しており、本来の形状は不明であるが、第46図5のように斜めに片減りした例が数点認められる。また、刃部や頭部の一方を欠損する例が多く、両方を欠損する資料も存在する。刃部磨耗痕は刃部に縦方向に認められ、一部には剥離痕も認められる。また、装着によると考えられる身部擦痕は身部の表面と裏面の稜線部分に認められる。以上のことから、欠損や磨耗といった使用によるリダクションにより、長さが徐々に寸詰まりになってゆくことが確認される。これはⅡ形態の打製石斧が、「鉞」「突き」のような土掘専用工具として用いられた結果と推定される。

石匙B類 (第47図) 打製石斧・スクレイパーB類と共通のⅡ類石材(頁岩)を素材として製作されたものである。全部で37点検出されている。第260図のように大きさにはバラつきがあるが、全体的に石匙A類より大形のものが多く、スクレイパーB類と同じ程度の大きさである。しかし、小形ものは石匙A類と変わらない大きさの「交わり」のものも含まれており、一部のものはほぼ同様の機能・用途を有していたと推定される。

石匙B類では、大きく縦形(Ⅰ形態)と横形(Ⅱ形態)に分類され、さらに細分することが可能である。以下、各形態について述べる。

Ⅰ形態 (21~24) 8点検出されている。素材は縦長不定形剥片を用い、素材の形状を著しく変化させることなく、刃部を作出している。握み部は幅広で、主剥離の打面を端部にそのまま残している。刃部調整は押圧剥離を主体とするもの7点、縁辺微細剥離のもの1点であり、スクレイパーB類Ⅰa・Ⅰb形態の範疇に含まれるものが大部分である。

21は例外的に大形であるが、概して小形である。小形のものほとんど欠損している。また、使用による磨耗痕が観察されるものは大形の21のみであり、Ⅱ形態と大きく異なっており、用途の違いも推定される。

Ⅱ形態 (1~20) 29点検出されている。原則として幅広不定形剥片を素材とし、剥片を斜めに用いる。主剥離面の打面を握み部に残すものが多い。調整は握み部と刃部を中心に施されてお

り、素材の形状が残されているため、個体による形状の偏差は大きい。

調整は押圧剥離を主体とするもの11点、押圧剥離と直接打撃を併用するもの15点、直接打撃を主体とするもの2点、縁辺微細剥離のもの1点であり、スクレイパーB類Ⅰa・Ⅰb形態の範疇に含まれるものが圧倒的に多く、89.7%を占める。

形態的には、摘み部が幅広なもの（1～9・12）と、摘み部が小さいもの（10・11・13～20）に細分される。さらに、大きさによる細分や、幅広・横長といった形状による細分が可能であるが、特定の形態に収斂するものではなく、範型の抽出は困難である。

使用による刃部磨耗痕と摘み部の磨耗痕は、9点（31.0%）である。また、欠損例は7点（24.1%）であり、Ⅰ形態とは様相を異にしている。

なお、関山Ⅰ段階33点、同Ⅱ段階2点、有尾段階1点であり、ほとんどは関山Ⅰ段階のものと判断される。したがって、同時期でも多様な形態が併存していたものと推定される。

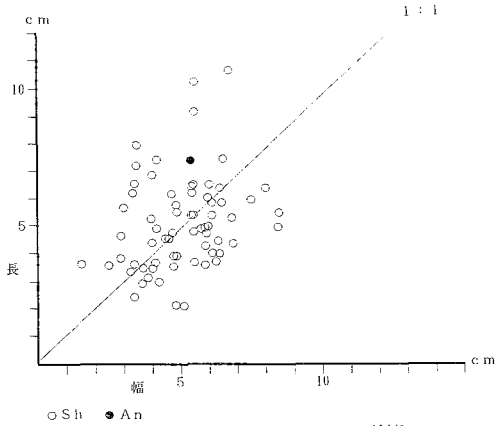
スクレイパーB類（第48図） 全体で336点検出されており、多様な形態と多様な技法により作出されたものである。小礫から直接加工された数点の資料を除き剥片を素材としており、素材剥片自体の形状を著しく変えるような二次加工を施さないものが大部分を占める。石材は安山岩（石材Ⅲa類）の20点（6%）を除き頁岩（石材Ⅱ類）を用いている。

形態別にみると、押圧剥離を主体とした精緻な調整によるⅠa形態（1～6・9）68点、粗雑な押圧剥離と細かい直接打撃の調整によるⅠb形態（7・8）61点、直接打撃の調整によるⅡ形態（10～14）107点で、一辺の1/2以上に微細な剥離がみられるⅢ形態（15～17）100点であり、数量的にはⅠa・Ⅰb形態がやや少なく、Ⅱ・Ⅲ形態が多い。

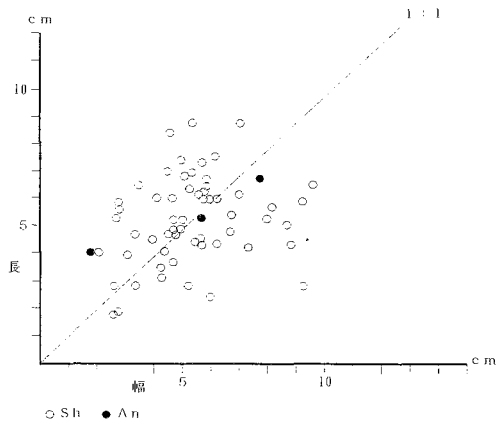
各形態別の大きさはⅠa・Ⅰb形態は4～7cm、Ⅱ形態は4～10cm、Ⅲ形態は3～8cm程度に集中しており、各形態がほぼ同じ大きさの素材を用いて本器種の製作を行っているものと思われる。しかし、Ⅰb形態は大きさに若干のばらつきが認められる。また、Ⅱ形態では大きさに若干のばらつきと他の形態より、やや大きいものが多い。

各形態ともに横長形状のもの（例えば4・7・8・15～17）、縦長形状のもの（例えば5・6・9・14）、剥片のほぼ全周に二次加工を施し円形となるもの（例えば1～3・10～13）がみられる。各形状・大きさごとにおおよそ均質な形状を示す傾向が認められ、細分が可能である。

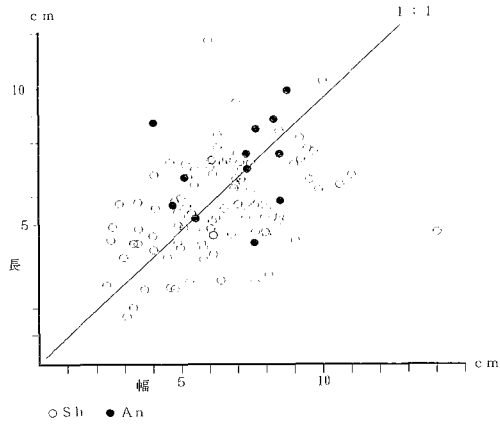
刃部に使用による磨痕を観察することができたのは、Ⅰa形態2点、Ⅰb形態2点、Ⅲ形態4点と合計9点であり全体の3%未満に過ぎない。このことは本器種が作用する対象物が磨耗痕を生じるようなものではなく、比較的軟質のものであったか、もしくは、個々の石器の使用期間が短かったことなどの要因が推測される。



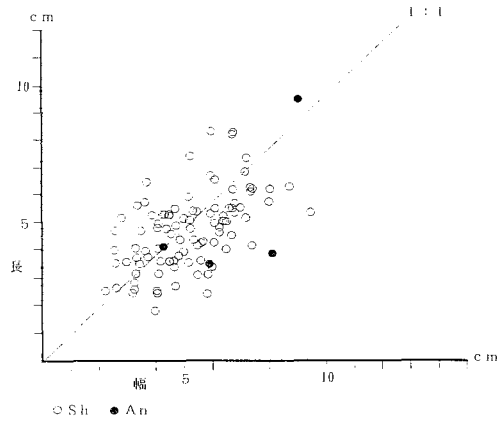
スクレイパーB類のI a形態



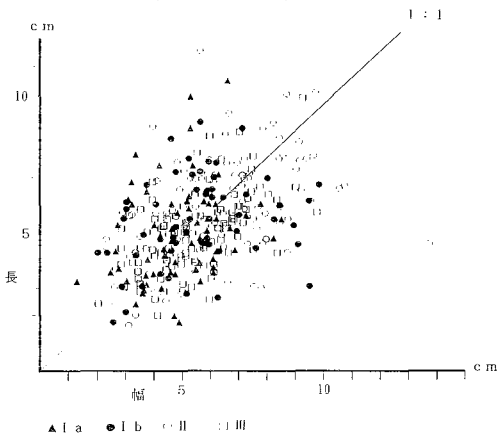
スクレイパーB類のI b形態



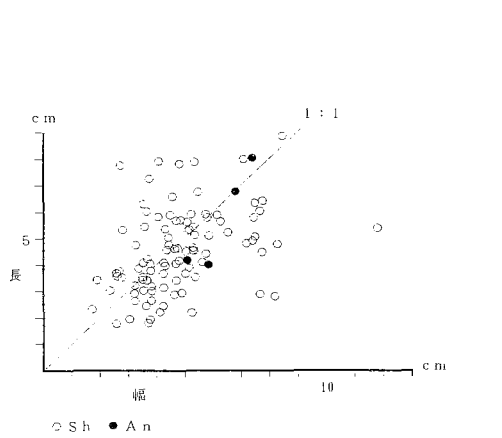
スクレイパーB類のII形態



スクレイパーB類のIII形態



スクレイパーB類の形態全体



リタッチド・フレイクB類の石材別長幅比

第262図 スクレイパーB類・リタッチド・フレイクB類の長幅比

リタッチド・フレイクB類 図示していないが、100点検出されている。4点が安山岩であるが、残りはすべて頁岩である。スクレイパーB類Ⅲ形態に近い器種であるが、実際に使用されていないものも含まれていると推定される。大きさは第262図のとおりであり、2～8cmの範囲に大部分のものが含まれ、スクレイパーB類とほぼ同じ剥片を素材としていることがうかがえる。また、グラフには示し得ないが、形状が不定形なものが多い。

その他の石器（第46図11・13） 打製石斧と同じ製作技術により作出された石器であるが、器種を特定し得ない石器である。6点存在する。

第46図11は三角錐状を呈する石器である。有尾段階の住居址から2点検出されている。一見すると打製石斧の未成品あるいは欠損品のようなものであるが、いずれも底面の一端に磨耗痕が観察され、この状態で使用された石器と判断される。三角錐形石器にやや類似するが、時期が異なるため、別の器種と推定される。

第46図13は両面調整の楕円形を呈する石器である。関山Ⅰ段階の住居址より検出されている。厚手で明確な刃部が作出されておらず、この段階の打製石斧の大きさと形状から未成品とは判断し難い。「槌」的機能を有した石器である。

(大工原 豊・中島 誠)

C1類石器

磨石（第49図） 29点検出されている。Ⅰ形態（円形）8点、Ⅱ形態（楕円形）15点、Ⅲ形態（棒状）6点であり、Ⅱ形態が51.7%を占める。石材はすべて安山岩である。欠損例はⅡ形態で9点（60%）存在するが、他の形態には認められない。

時期別では、関山Ⅰ段階25点・同Ⅱ段階3点である。また、16は特殊磨石であり、関山Ⅰ段階のJ 14号住居址から検出されている。この住居址からは早期押型文土器が検出されており、これに共伴するものと推定される。

凹石（第50図） 128点検出されている。形態と石材・欠損は第9表のとおりである。圧倒的に多いのはⅡb形態（楕円形・凹→磨）であり、52.3%とほぼ半数を占める。次いでⅠb形態（円形・凹→磨）が15.6%を占め、それ以外の

形態	個数	石材			欠損	被熱
		An	Sc	GrR		
I b	20	20			1	7
I c	2	2				1
Ⅱ a	1	1				
Ⅱ b	67	66		1	20	31
Ⅱ c	4	3	1		1	1
Ⅲ a	1	1			1	
Ⅲ b	10	10				1
Ⅲ c	6	5	1		2	1
V a	0	0				
V b	3	3			1	
V c	14	14			1	3
計	128	125	2	1	27	45

第9表 凹石の形態と諸属性

形態は数%を占めるに過ぎない。c形態では凹部分に変色しただけで、ほとんど凹が形成されないものが7点存在する。これらは軟質な対象物に対し用いられたものと推定さる。また、c形態ではVc形態が最も多く、次いでⅢc形態が多いが、こうした比率は敲石と類似しており、c形態の中には敲石として用いられたものが多いと推定される。したがって、c形態はa・b形態と異なった用途に用いられた可能性が高い。

欠損率は全体では21.1%を占めており、最多形態であるⅡb形態は29.9%とやや高率である。石材は結晶片岩2点(1.6%)、緑色岩類1点(0.8%)を除いて安山岩である。

時期別にみると、関山Ⅰ段階109点、関山Ⅱ段階6点、有尾段階7点、その他6点であり、85.2%は関山Ⅰ段階のものである。

石皿(第51図) 24点検出されている。形態別ではⅡa形態(楕円形・作業面凹面:1~5)6点、Ⅱb形態(楕円形・作業面平坦:6~10)9点、Ⅲb形態(不定形・作業面平坦)2点、不明7点である。大きくは作業面が凹面のa形態と、平坦なb形態に大別され、b形態が多い。石材は安山岩15点(62.5%)、結晶片岩9点(37.5%)である。また、欠損率は全体の66.7%である。

a形態では作業面の凹が深く底が抜ける寸前まで使用された扁平な結晶片岩製のもの(1・2・4)が特徴的である。また、作業面が平坦なb形態は作業面の磨耗が少ない。したがって、a形態とb形態は用途が異なっていた可能性が高い。

なお、時期別にみると、関山Ⅰ段階13点、関山Ⅱ段階3点、有尾段階3点であり、過半数は関山Ⅰ段階のものであるが、時期的な違いは把握できなかった。

C2類石器

敲石(第52図1~9) 19点検出されている。Ⅲ形態(棒状)6点、Ⅳ形態(四角形)1点、Ⅴ形態(不定形)12点であり、Ⅴ形態が63.2%を占める。また、石材は安山岩が16点(84.2%)、頁岩2点(10.5%)、結晶片岩1点(5.3%)であり、安山岩が圧倒的に多い。

大部分のものでは、敲打痕が端部に集中し、石器製作用の敲打器と推定される。しかし、5・9のように側縁部に広範囲に敲打痕が存在するものは、一概に石器製作用とも言えず、別の用途についても検討する余地がある。特に5は側縁部が湾曲する特徴的な形態を呈している。

砥石(第52図11~22) 55点検出されている。Ⅰ形態(荒砥:11~21)50点、Ⅱ形態(中砥)3点、Ⅲ形態(仕上砥:22)2点であり、Ⅰ形態が90.9%と圧倒的多数を占める。砥石の場合、形態と石材は密接に関係しており、Ⅰ形態・Ⅱ形態はすべて(牛伏)砂岩、Ⅲ形態は結晶片岩であ

る。Ⅰ形態では作業面が有溝のもの（11～13）と、扁平なもの（14～21）に細分され、それぞれ対象物が異なっていたと推定される。また、Ⅱ形態・Ⅲ形態では扁平なもののみであり、有溝は存在しない。

D類石器

棒状礫（第53図8～13） 13点検出されている。棒状を呈する自然礫であり、加工痕は認められないが、遺跡へ持ち込まれた搬入礫である。石材は結晶片岩が10点と多いが、これは石材の特性によるところが大きい。欠損率は92.3%と高く、敲石として用いられたものの基部も含まれていると推定される。

E類石器

磨製石斧（第53図1～7） 8点検出されている。すべて欠損しており、石材はすべて緑色岩類である。Ⅱa形態（中形・断面楕円形）が7点を占め、Ⅲa形態（大形・断面楕円形）は2点である。Ⅱa形態（1～4・7）は個体差はあるものの、基部が尖頭状を呈する前期特有の形態の範疇に含まれる。また、Ⅲa形態のうち5は全体の形状は不明ながら「ずん胴」であり、Ⅱa形態とは形状も異なる。

F類石器

垂飾（第53図14） 1点検出されているのみである。勾玉状に湾曲した形態に研磨により整形されている。穿孔部は2度穿孔したためか、瓢箪形を呈する。穿孔は両面から行われている。また、紐によると推定される片減りも観察される。石材は光沢のある緑色のもので、硬玉と推定される。関山Ⅰ段階住居址から検出されており、垂飾としては比較的古いものと判断される。

块状耳飾（第53図15） 1点検出されているのみである。扁平なものであり、半分程欠損している。欠損部には穿孔が存在する。穿孔は両面から行われている。块入部はから下端部にかけての磨滅が顕著であり、本来の形状から変形してしまっているものと判断される。白色を呈する滑石製である。この块状耳飾は有尾段階の住居址から検出されている。

（大工原 豊）

(2) 弥生時代の遺構と遺物

a 遺構

弥生時代に限定される遺構は検出されていないが、F区に存在する沼地の縁辺に存在するUS-2号湧水坑(第59図)より、弥生時代中期前半の土器が検出されている。また、A区北端部に位置するD-5号土坑周辺や、C区東端部に位置するJ-15号住居址周辺からも同様にこの時期の土器が少量検出されている。

また、F区古墳時代のH-1号住居址から後期(樽式)の破片が若干検出されている。

b 遺物

土器

壺(第42図10・11) 10は壺の底部であり、斜め方向に条痕文が施文されている。底部には網代痕を有する。11も条痕文が施文された土器の底部で、壺と推定される。底部には網代痕を有する。いずれの土器もF区のUS-2号湧水坑より出土している。中期前半の条痕文系土器群と判断される。これら以外の土器は小片であり、図示していないが、すべて条痕文系土器群と推定され、時期的にも近くに存在する注連引原遺跡・同II遺跡の土器群とほぼ同時期のものである。

石器

石鍬(第46図14) この石器が検出されたA区西部では、弥生時代中期前半の土器が検出されているが、縄文時代の遺構は存在せず、遺物も非常に少ないことから、弥生時代の石器と推定される。石鍬は広義では打製石斧に含まれるが、すでに注連引原II遺跡の資料を用いて定義したように、比較的大形・幅広で特徴的な形態を呈しており、典型的なものは縄文時代の打製石斧と識別可能である(大工原1988)。検出されたものは図示したもののみである。頁岩製で、刃部を欠損しているが、「I形態(大型円匙形)」ないし「III形態(中型幅広短冊形)」と判断される。

(大工原 豊)

(3) 古墳時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址

H-1号住居址(第54図) F区において検出された。自然堆積土層(III~IV層)が削平されて

おり、地表から浅い位置で検出された。したがって遺存状態はあまり良好ではなかった。平面形は長方形を呈、規模は南北8.0m×東西6.6mである。主柱穴は4本であり、北東部には土坑が存在する。また、炉址は北と中央西よりの2カ所に存在する。いずれも浅い地床炉である。主軸方向はN-36°-Eである。

遺物出土状態 調査時には覆土の上部は削平されてしまっており、出土遺物は最下層から床面直上に限定される。南東部に遺物が偏在する傾向が認められる。

b 遺物

H-1号住居址出土の遺物 (第55図) 検出された遺物は坏・高坏・甕・台付甕・小形甕等である。なお、この住居址には弥生時代後期の樽式土器の破片やS字口縁の台付甕の破片が混在している。しかし、形を成す土師器の形態・調整技法・組成からみて、これまでの群馬県の編年観(橋本・加部1984)に照らすと、5世紀前半と推定される。

(4) 奈良・平安時代の遺構と遺物

a 遺構

掘立柱建物址

HT-2号掘立柱建物址 (第57図) A区東部より検出された。東西4.8m・南北2.5mで、柱間は3間×1間の小規模な建物址である。柱穴の覆土はⅢ層(黒色土層)を基調としたものであり、奈良・平安時代のもものと推定されるが、遺物はまったく検出されなかった。

ピット群(付図)

A区・B区・C区西部では多数のピットが存在していることが確認された。これらのピットの覆土にはHT-2号掘立柱建物址やM-1号溝と同様な、Ⅲ層を基調とした土層が含まれており、これらの遺構と関連するものと推定される。

特にA区M-1号溝東部には密集しており、繰り返しピットが作出されたものと推定される。しかし、明確に直線状の配列を示すものは、HT-2号掘立柱建物址以外には認められず、不規則な配列を呈する構造物が存在していた可能性もある。遺物はほとんど検出されておらず、時期は決定できないが、覆土から奈良・平安時代の遺構と推定される。

炭窯

C-1号炭窯（第58図下段） F区沼の北東部に構築されていたもので、長さ5m、幅1.7mの規模を有する。火床面の比高は2.0mであり、傾斜角は15°である。覆土下層からは多量の焼土と大量の炭化物が検出された。

遺物は検出されなかったが、覆土中には浅間A軽石・B軽石は含んでおらず、Ⅲ層（黒色土層）を基調としており、奈良・平安時代のもものと推定される。なお、炭化物は堅炭に適したコナラ属クヌギ節に樹種同定された（第7章参照）。

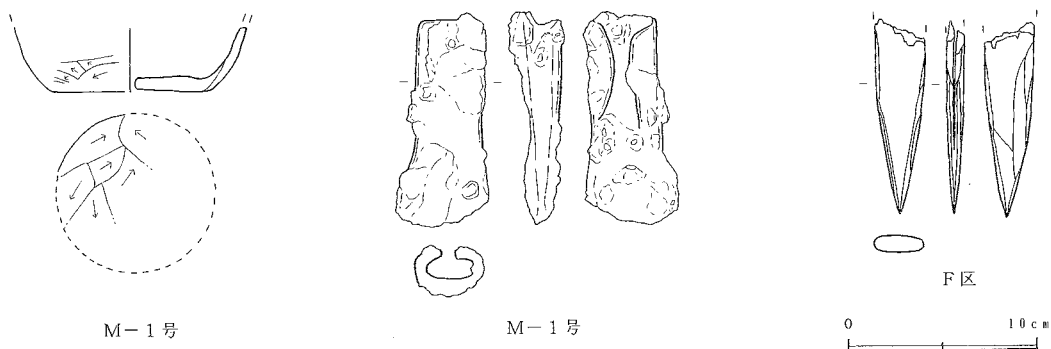
溝

M-1号溝（第5図・第61図～67図）

台地を区画する目的で構築された大規模な溝が数本検出されている。これらの溝は、当初別の遺構と考えられたので、M-1・4・5等別の呼称を用いていたが、一連のものであることが調査過程で判明したので、ここではM-1号溝と統一して呼称する。このM-1号溝は南北約410m・東西約260～300mの台形区画とみられ、推定面積は8.9haに及ぶ。以下、特徴について述べる。
形態・覆土（第60図下段・第66・67図） 溝の断面形態は逆台形を基本とする。確認面により規模は異なるものの、平均的な規模は、上幅2.8～3.1m・下幅0.9～1.2m・深さ（Ⅳ層上面から）1.2～1.3mである。確認面の違いにより多少規模は異なるが極めて画一的な規格である。

覆土の堆積状態は西辺土橋北で一部異なるものの、ほとんどの部分で類似した堆積状態を示す。この溝の覆土最上層にはすべて浅間B軽石の純層（Ⅱb層）が堆積しており、この時期まで浅い溝として、痕跡を留めていたことが確認された。また、それ以下の覆土は原則としてⅢ層を基調とした土層であり、Ⅲ層堆積時の遺構であることを示している。

なお、西辺では覆土中層部分に不整合面が連続して認められ、埋没過程で浅い溝が再構築された状況を示していた。また、南辺西部（F区）では覆土中・下層から掘り込まれたピット群の存在が確認された。



第263図 奈良・平安時代の遺物

出土遺物（第263図1・2） この溝からの出土遺物はすべて流れ込みと推定され、かつ、少量であるため、溝が構築された時期を決定する資料はほとんど存在しない。西辺A区部分では約88mを精査したが、Ⅲ層堆積時の土師器の小破片7点・須恵器の小破片3点が検出されたに過ぎない。このうち、坏の破片（1）は形態・調整技法からみて、9世紀代前半のものと推定される。

また、南辺F区より鉄斧（2）が1点検出されている。

東辺（第60図右上） M-5号溝として、一部が調査されたのみであり、詳細は不明である。恐らく西辺と同様に南へ向かって一直線に伸びていたものと推定される。東辺部分の対象区域は土地改良事業の都合で、調査不可能部分が多く、溝の延長はこの部分に及んでいたものとみられる。

北辺（第60図左上） M-4号溝として、一部が調査されたのみであるが、東西約260mの長さを有していたと推定される。北辺ではトレンチにより、溝の位置が確認されると推定されたが、調査部分からは検出されなかった。調査を行わなかった現道部分に沿って構築されていたと推定される。

西辺（A区・B区）・土橋（第61～62図） この辺は最も多く調査した部分であり、連続的に溝をとらえることができた。北西隅は確認できなかったが、南西隅は確認することができた。溝の長さは約410mであり、台地を一直線に南北に横断している。溝の底部や側面にピットが散漫に存在するが、明確な柵列は存在しない。

また、南西隅から約320mの場所に掘り残しで作出された土橋が検出された。土橋の幅は6.1mであり、浅いピットは多少検出されたが、明確な門状遺構は検出されなかった。

西辺南端部（F区）（第63図） この部分はⅢ・Ⅳ層が存在しておらず、Ⅴ層上面で確認されたため、他の部分に比べ浅く小規模である。南端は南辺を区画する溝に接続する。接続部では西辺の方が南辺より浅く段差が認められる。

また、沼に接続するM-2号溝が途中から伸びている。この溝は浅く、西辺覆土中層で検出された溝の延長である可能性がある。

南辺沼西部（F区）（第64図） この部分は沼から南西へ延ており、西辺の溝と接続している。約35m溝の存在を確認したが、さらに南西へ伸びている。この部分の特徴は、ピット群が底面に存在していることで、一部のピットは覆土下層～中層から掘り込まれていることが確認されている。明確な柵列は認められないものの、深いピットも存在しており、溝が埋没する以前に柵列が存在していた可能性がある。こうした柵列と推定されるピットを伴う溝は細田遺跡においても確認されており、同種の溝と推定される。

なお、溝は沼との接続部分で一旦は途切れるが、沼底で「L」字形に南へ曲がっていることが確認された。また、出土遺物としては鉄斧が検出されている。

南辺沼東部（D区・E区）（第65図） この部分の溝は沼西部からの延長線上からD区南東部を通り、E区へ抜け、さらに北東へ延びている。約 m溝の存在を確認した。完掘した部分は、沼との接続部分とD区の一部に過ぎないが、沼西に存在したような、柵列状のピットは検出されなかった。沼との接続部は南辺沼西部と同様、「L」字形に南へ曲がっていることが確認された。

なお、この溝の延長と、東辺の溝の延長が接続すると推定される部分には、大きな谷が入り込んでおり、どのように接続しているか、或いは接続していないか、今回の調査では確認することができなかった。

（5）中世・近世の遺構と遺物

ここで中世・近世の遺構としたものは、浅間B軽石を覆土に含んでいる遺構であり、厳密に中世と近世を区別できないので、ここでは一括して扱うことにする。

掘立柱建物址

HT-1号掘立柱建物址（第56図） A区西部より検出された。東西6.0m・南北3.6mで、柱間は3間×1間である。南部には庇と推定される柱穴列が付属する。庇状柱穴列の南東部は張り出し部が存在する。また、北東部と北西部に小規模な柱穴列が認められるが、これも庇の一部の可能性はある。柱穴内の覆土はII a層を基調としたものである。

ピット群（付図） M-1号溝の西側には、同様な浅間B軽石含む覆土のピットが散在する。明確な配列は確認されず、遺物も全く検出されなかった。簡易な建造物の存在が推定される。なお、これらピット群の周囲にはIV層中に硬化面が存在した。この硬化面は数mの範囲で、数カ所確認され、これらの遺構に関連する硬化面の可能性がある。

馬墓（第58図上段） 沼の東側のM-1号溝との接続部分北側に存在する。ローム層の上面に馬形の掘り込みを有し、頭部を北向きに横たわった状態で馬骨が検出された。遺存状態は悪く、頭部・前脚・後脚が残っていたのみであった。馬骨の周辺の土は黒色を呈し、腹部の覆土には浅間B軽石が混入していた。また、周囲には大量の浅間A軽石の二次堆積が認められたが、A軽石は馬墓の覆土には全く混入していないことから、それ以前のものであると判断される。

なお、馬骨の鑑定結果は別項において述べる。

(6) その他の遺構

沼(付図) 東西約60m・南北40m以上の大規模な沼地が検出された。調査では浅間B軽石下部まで行ったが、最上層には二次堆積の浅間A軽石が厚く堆積しており、近世まで沼として存在し、最終的に浅間A軽石の廃棄場所として用いられたことが判明した。したがって、この沼自体は少なくとも遺跡が形成された縄文時代以降近世まで存在し、人間の生活に利用されていたと判断される。

沼の北西部は突出しており、湧水点が認められる。また、北部には自然湧水坑3カ所と、人工的な施設と推定される湧水坑1カ所が存在する。自然湧水坑(US 2)からは弥生時代中期前半の条痕文系土器が検出されており、この時期に利用されたものであることが判明した。また、人為的な湧水坑は遺物は検出されていないものの、古墳時代以降の溜井に伴うものと判断され、沼が灌漑用の「溜井」として用いられていたものと推定される。

また、奈良・平安時代にはM 1号溝により囲まれ、沼の東縁にはほぼ同時期と推定される炭窯が構築されている。この時期には沼が「水場遺構」的に利用されていた可能性が高い。

この時期の台地部分と沼底との比高は浅間B軽石下面で1～4m程である。沼底部分では、底面に自然堆積する浅間B軽石を除去したところ、平坦面と段差が確認された。この段差が自然のものか人為的なものかははっきりしないが、畦畔・水路等の遺構は検出されなかった。なお、土壌中のプラント・オパール分析においても、イネの栽培の痕跡は認められなかった(Ⅶ章3節参照)。したがって、水田として利用された形跡は認められなかった。

また、沼底に設定した下部の状態を確認するための調査区では、浅間B軽石下部に堆積した泥炭層中から自然流木が折り重なる状態で検出された(図版8)。この部分からは板状の木器が検出された。

出土遺物(第263図3) 扁平な板材で、断面形は長方形を呈する。一端は削られて尖っている。加工痕が表面に観察される。

湧水坑(第59図) 沼の北縁部に4カ所存在する。いずれの湧水坑も覆土から浅間B軽石降下以前のものとして判断される。弥生時代のものとして判断されるものを一括してこの項で扱うことにする。

不定形で陥没部分を伴う自然湧水によると推定される湧水坑(US 1・US 2・US 3)と、人為的に開削されたものと推定されるもの(US 4)がある。この内、自然湧水によるUS 2号湧水坑は弥生時代の土器が出土しており、この時期のものとして判断される。また、隣接するUS 1号湧水坑も近接した時期に形成されたものと推定される。これに対し、人為的に開削され

たものは遺物は検出されていないものの形態的にみて、古墳時代以降の溜井に伴う湧水坑と判断される。

US-1号湧水坑 台地内側に存在する湧水による陥没部分と沼の縁に存在する湧水部分から成る。陥没部分是不正形でフラスコ状を呈する。湧水部分は浅く窪んでおり、US-2号湧水坑の湧水部分と繋がっている。自然に形成された湧水坑である。

US-2号湧水坑 US-1号に隣接し、台地内側に存在する湧水による陥没部分と、沼の縁に存在する湧水部分から成る。自然湧水により形成された湧水坑と推定される。陥没部分是不正形で、中から弥生時代中期前半の条痕文系土器が検出された。

US-3号湧水坑 台地内側に存在する湧水による陥没部分と、沼の縁に存在する湧水部分から成る。自然湧水により形成された湧水坑と推定される。遺物は検出されなかった。

US-4号湧水坑 沼の縁辺に「コ」字形に 入部が存在するもので、他の湧水坑より整った形状を呈し、不定形な陥没部分は存在しない。人為的に開削された遺構の可能性が高い。遺物は検出されていないが、落合遺跡で検出された湧水坑に類似しており、溜井に伴う施設と推定される。

(大工原 豊)

(7) 小結

中原遺跡は縄文時代早期から中・近世にいたる複合遺跡であり、時期により遺跡の性格は異なっている。時期ごとに遺構・遺物の関係を検討し、明らかになった事柄から遺跡の景観の復元について言及してみたい。なお、縄文時代前期については、ほぼ同時期の東畑遺跡も含め第VI章でまとめて検討することにする。

a 縄文時代の中原遺跡

早期ではD区を中心に、押型文段階の土坑と土器・石器が若干検出された。前期前半の集落と重なっており、遺物も混在していることから、不明な部分が多いが、キャンプサイトの小規模な集落が形成されていた可能性がある。

前期前半(関山～有尾)には多数の住居址が継続的に構築されており、一定期間居住する集落遺跡が形成されていたことが判明した。なお、この時期の集落の様相については、東畑遺跡を含め、まとめて第VI章で詳述するので、ここでは簡単に触れるに留める。

関山I段階では、住居址は北群と南群に分かれて存在しており、住居形態・遺物出土パターン・石器組成・付随する土坑群などについて多角的に検討すると、それぞれの群は併存関係にあり

ながら、異なる生業活動に従事していた可能性があり、これは季節により居住する群を異にしてこの場所が利用されていた可能性を示すものである。すなわち、この時期は定住性はまだ弱く、年に2回程度同じ場所が利用される行動パターンを有していたと想定される。

b 弥生時代の中原遺跡

弥生時代中期前半の土坑と土器がA区とF区より検出されており、本遺跡で小規模な生業活動の痕跡が認められる。F区では湧水坑周辺に土坑と土器が検出されている。

この時期集落址は本遺跡の東方700mに存在する注連引原遺跡・同Ⅱ遺跡で検出されており、注連引原遺跡を中心に下原遺跡、落合遺跡、大下原遺跡等半径800m以内に遺物が検出された遺跡が点在する。

中原遺跡もこうした遺跡の一つとして、短期間小規模に利用された遺跡として捉えることが可能である。これらの遺跡ではまとまった遺物の出土はなく、湧水点に存在する中原遺跡・落合遺跡と、台地内に存在するそれ以外の遺跡に分けられる。

前者では石鍬が検出されており、耕作に関連する遺物と推定される。これらの遺跡の具体的性格は不明であるが、湧水点を利用していることから、耕作等生業に関連する遺跡と推定される。

c 古墳時代の中原遺跡

F区で住居址1軒が検出されたのみであり、この住居址からは5世紀前半の土器が遺棄に近い状態で検出されている。湧水のある沼地周辺に小規模な集落が形成されたと推定される。この時期の遺跡は、周辺では下宿東遺跡、細田遺跡、天神原遺跡がある。本遺跡の南西400mに存在する下宿東遺跡では住居址が14軒検出されており、中野谷地区の中心的集落とみられる。中原遺跡をはじめ、それ以外の遺跡は住居軒数は少なく、いずれも小規模な集落址と推定され、下宿東遺跡の支村的存在であったと推定される。

d 奈良・平安時代の中原遺跡

この時期には台地を区画する大規模な溝（M-1号溝）が構築され、沼地を含む広大な範囲が囲い込まれた特殊な施設が形成されている。本遺跡の溝の形成時期は、出土土器からみて、少なくとも9世紀前半には存在していたことが確認された。また、浅間B軽石降下時には、ほとんど埋没していたことも確認された。したがって、この溝は9世紀を中心とする時期に使用された施

設として捉えることができる。

この溝は台地の平坦面を区画することと、沼地を区画内に取り込むことを目的として構築されている。溝によって区画された場所の用途についても、A区～C区でピット群が存在することが判明したのみであり、はっきりした遺構・遺物は検出されなかった。内部にはこの時期の住居址は確認されておらず、分布調査の結果でも遺物分布は低い。したがって、集落の区画の可能性は低いと判断せざるを得ない。また、水の流れた痕跡もほとんど認められないことから、用水路としての用途も考えられない。なお、畑地の害獣避けの施設の可能性についても想定し得るが、畑地との関連施設であれば、すでに多くの地域で検出されているはずである。

このように、現状ではこの区画がどのような用途に用いられたかについて、確実な根拠はないものの、消去法でこの施設について検討した場合、上記の施設の可能性は否定的要素が強い。

最後に残った可能性としては、古代の「牧」とその関連施設群が考えられる。「牧」の可能性については第VI章で周辺遺跡の事例も含めて検討するが、以下の状況と間接的根拠から「牧」が中野谷地区に設置されていたと推測される。

- ①各台地に同種の施設が多数構築されており、全体規模は数十ha～百haと広大なものとなること
- ②個人的労働の規模を越えた施設であること
- ③溝によって区画された部分が単に平坦部を区画する施設ではなく、台地ごとに多様な構造を有すること
- ④鍛冶工房址群など工房址は存在するが、一般的な集落は非常に少ないこと
- ⑤プラント・オパール分析によって溝構築直後は周囲がネザサ植生（開地的植生）を示すこと
- ⑥当時東山道が通る碓氷郡内にあたり、郡内には駅が2カ所設置されており、碓氷峠の交通事情などから多くの馬が必要とされたこと
- ⑦古代上野国は全国有数の馬の生産地であったこと

e 中世・近世の中原遺跡

この時期にはA区において、掘立柱建物址とその周囲にピット群が検出された。また、F区沼地の縁に埋葬されたと推定される小形馬が検出された。小規模な集落の存在が推定されるが、この時期の様相についてはほとんど不明である。

(大工原 豊)

2 東畑遺跡

(1) 縄文時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址 (第図69～第76図)

本遺跡で検出された住居址は8軒であり、内訳は前期前半(関山Ⅱ段階)6軒、前期後半(諸磯b段階)1軒、中期終末(加曾利E4段階)1軒である。重複はJ-3→J-4と、J-7→J-8の2例が確認されている。各住居址の形態と特徴は第10表のとおりである。以下、各住居址の特徴と遺物出土状態について述べる。なお、柱穴の配列は中原遺跡に対応させた。

J-1号住居址 (第69図) 前期前半(関山Ⅱ式)の住居址と判断される。平面形は正方形で、堅穴の掘り込みは浅い(20cm)。深さ30cm以上の柱穴は18カ所存在し、主柱穴と補助柱穴は明瞭な違いは認められない。柱穴の配列は長軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する2列の柱穴列が確認され、A1の配列である。浅い壁溝が巡り、壁柱穴はまばらに存在する。炉址部分には広い範囲に浅い掘り込みがあり、焼土は確認されなかった。

遺物出土状態 (第264図)

【土器】 出土量は少なく、全体に散漫に分布するが、東側にやや多い。

【礫】 出土量が極めて少なく、何ら傾向は認められない。

住居址名	平面形態		主柱穴 炉址 規模						柱穴 付帯施設 本数	主軸方向		
	配列	形態	長軸	短軸	深さ	規模	深さ					
J-1	正方形	I f	A 1	無	330	320	24	11	26	一部壁溝	N-53°-W	
J-2	隅円方形	I	5形態	1埋甕	340	328	14	11	15		N-26°-W	
			(大下原)2地床					0				
J-3	長方形	I b	C	石囲	530	360	70	19	48		N-3°-W	
J-4	正方形	I g	B 2	地床	360	350	52	13	27		N-45°-W	
J-5	長方形	I c	B 1	石囲	520	390	80	20	41		S-14°-W	
J-6	長方形	I d	A 1	石囲	390	280	28	11	13		N-15°-W	
J-7	長方形	I b	A 1	石囲	450	320	36	14	25		S-9°-W	
	平面形態		住居部規模			柄部 規模			柱穴 付帯施設			主軸方向
	長軸	短軸	深さ	長さ	幅	本数	炉	敷石	埋設土器			
J-8	柄鏡形	(350)	(290)	—	60	80	(10)	—	柄部	柄部	N-5°-W	
									炉辺部	出入口部		

第10表 東畑遺跡住居址観

【石器】 土器や礫と同様に出土量は少なく、住居址の南側と北側に散漫に分布する。また、柱穴の下部から剥片B類、凹石、棒状礫が各1～2点検出されている。

J-2号住居址（第70図） 炉体土器から前期後半（諸磯b式）のもの判断される。竪穴の掘り込みが非常に浅く、平面形ははっきりしなかったが、歪んだ隅円方形であったと推定される。深さ35cm以上の柱穴は、12カ所存在し、主柱穴と補助柱穴の違いははっきりしない。柱穴の配列は主軸に平行する2列の柱穴列と、それに直交する2列の柱穴列であり、B2配列と判断され、大下原遺跡の分類では5形態に相当する。炉址は小さなピットで地面が焼けていた。隣接して炉体土器（第79図14）が検出されており、このピットに設置されていたと推定される。

同時期の住居址が検出されている大下原遺跡の分類では、5形態に相当するものである。

遺物出土状態（第264図）

【土器】 出土量は極めて少ない。南東寄りに散漫に分布する。炉体土器（第79図14）は6区より出土している。土器は諸磯b式が主体である。

【礫】 土器と同じく出土量が極めて少なく、特に傾向は認められない。

【石器】 土器や礫と同様極めて出土量が少なく、特に傾向は認められない。

J-3号住居址（第71図） 前期前半（関山Ⅱ式）の住居址と判断される。平面形は長方形で、竪穴の掘り込みは深い（70cm）。30cm以上の柱穴は15カ所存在し、配列する柱穴の配列は長軸方向に平行する2列の柱穴列と、それに直交する3列の柱穴列が確認される。なお、側面の壁柱穴の中には、ひときわ深い柱穴が存在しており、配列はCである。壁柱穴は各辺連続して存在する。炉址は石囲炉で底面に石の配置されたものである。

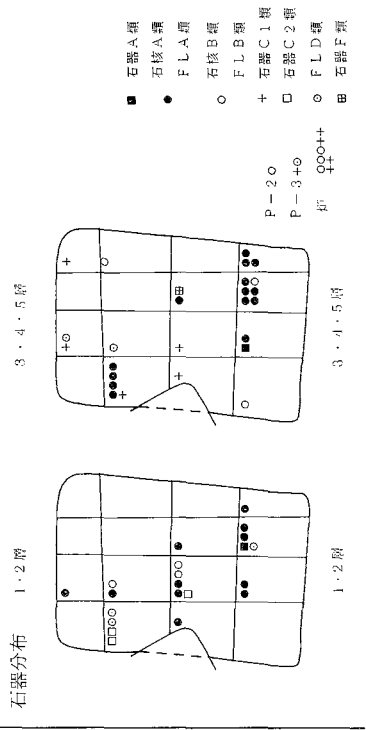
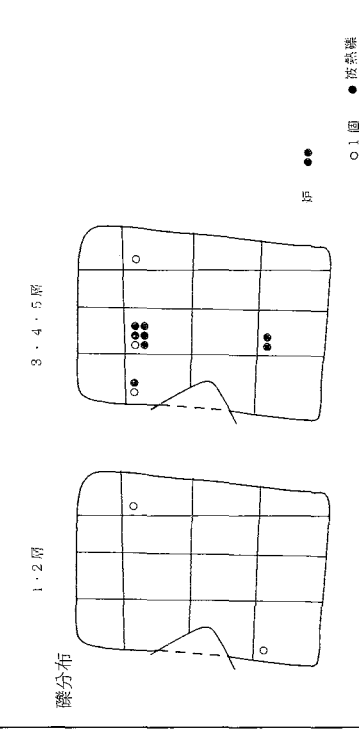
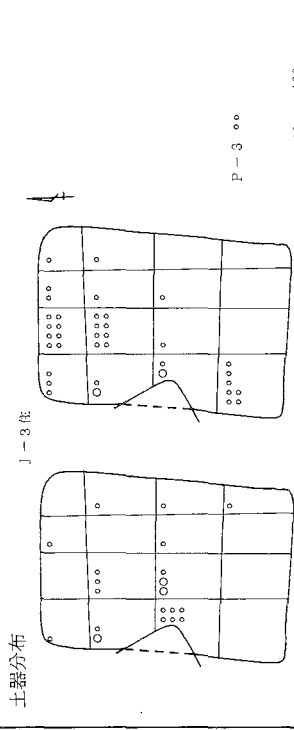
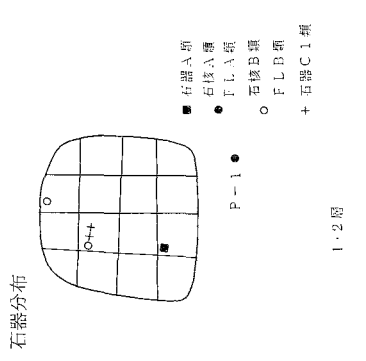
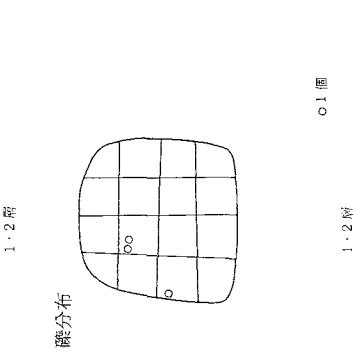
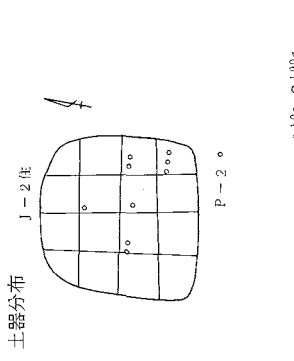
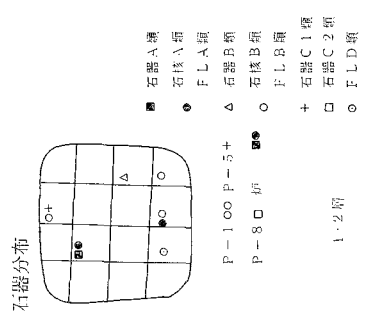
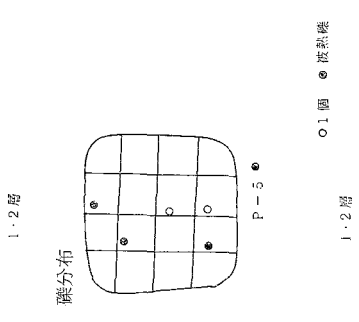
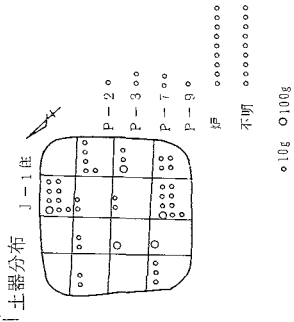
遺物出土状態（第264図）

【土器】 同規模の住居址の中では出土量は極めて少ない。1～2層では、西寄りに偏在するが、3～5層では北よりから北西部分に偏在する。なお、5区と9区ではJ-4号住居址の遺物が一部含まれていると推定される。

【礫】 出土量は少なく、6区よりまとまって検出されている。

【石器】 出土点数は土器の出土量の割には多い。各層とも南東から北西にかけて帯状に分布する。

出土状態からみて、出土遺物は廃棄行為によると推定されるが、石器と土器では分布状態に明確な差異が認められる。これは土器と石器の廃棄が別々に行われた可能性があることを示している。



第264図 J-1・2・3号住居址遺物分布図

J-4号住居址（第72図） 前期前半（関山Ⅱ式）の住居址と判断される。平面形は正方形で、
竪穴の掘り込みは深い（60cm）。30cm以上の柱穴は7カ所存在し、主柱穴と判断される柱穴と補助柱穴に分かれる。配列は4カ所平行に配列され、柱間は東西は狭く、B2配列である。壁柱穴は南辺を除き、ほぼ連続的に存在する。炉址の存在する位置に浅いピットが存在しているが、焼土は確認されなかった。地床炉または石囲炉の抜き取りと推定される。

遺物出土状態（第265図）

【土器】 出土量は比較的多い。1～3c層では北西に偏在しているが、4・5層では南東部にまとまっている。遺物量からみて廃棄によるとみられるが、上層と下層では廃棄の方向性が逆転している。

【礫】 上層では少量が周辺部に分布し、やや西側に多い傾向がある。また、中層では多量の礫が出土しており、北部に偏在する。そして下層では多量の礫が南部に偏在する。土器と同じく廃棄によると推定され、層ごとの傾向は類似しているが、各層ともやや廃棄方向に違いが認められる。

【石器】 土器や礫に比べ出土量は比較的小さく、上層では極めて少ない。中・下層ではやや多く、礫とほぼ同じ分布傾向を示す。

この住居址では、土器・礫・石器の廃棄は一連のものであるが、上・中層と下層では廃棄方向が逆転している。また、詳細にみると、土器・礫の廃棄方向は多少ずれており、石器は上層では土器・礫と一緒に廃棄されていないなど、差異が認められる。これは、個別の廃棄については別々に行われていたことによると推定される。

J-5号住居址（第73図） 前期前半（関山Ⅰ式～関山Ⅱ式）の住居址と判断される。平面形は長方形で、竪穴の掘り込みは深い（80cm）。30cm以上の柱穴は19カ所存在し、主柱穴と補助柱穴は明瞭な違いは認められない。配列は長軸に平行して3列の柱穴列と、それに直交する2列の柱穴列でありB1配列である。壁柱穴は各辺連続して存在する。炉址は枕石を有する地床炉である。出土土器から関山Ⅱ段階の住居址と判断される。

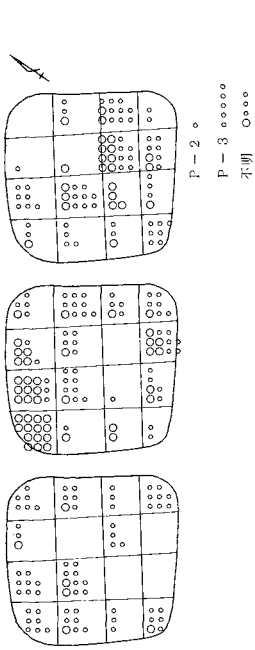
遺物出土状態（第265図）

【土器】 1層では住居址の中央部の北側から南側にかけて分布する。2・3上層では南東部にやや偏在する。また、3下～5層では住居址の中央部南寄りにややまとまる。関山Ⅰ式～関山Ⅱ式の土器が

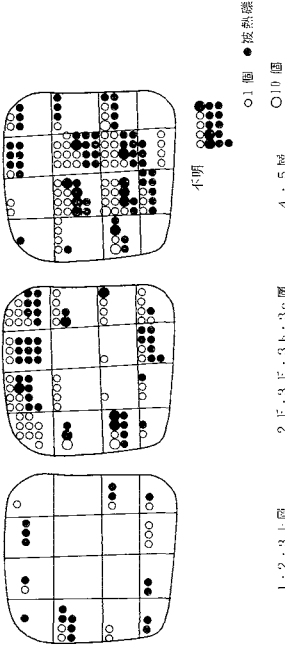
【礫】 1～3上層では非常に少なく、特に傾向は認められない。3下～5層では比較的多く出土しており、中央部にまとまっている。3下～5層では土器の分布と類似しており、一連の廃棄活動によるものとみられる。なお、3下～5層では礫の被熱率は約40%である。

土器分布

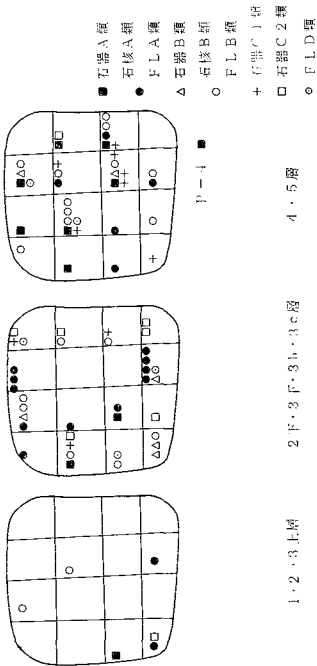
J-4住



礫分布

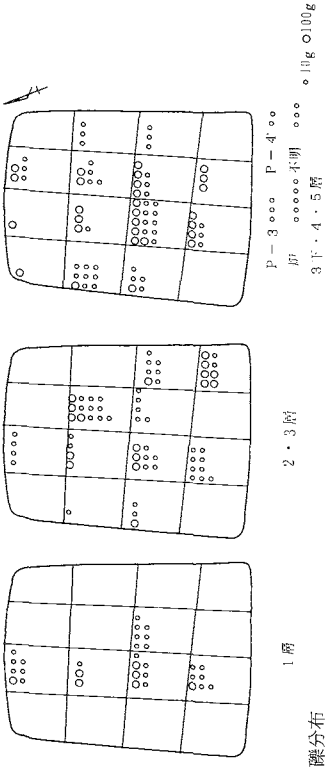


石器分布

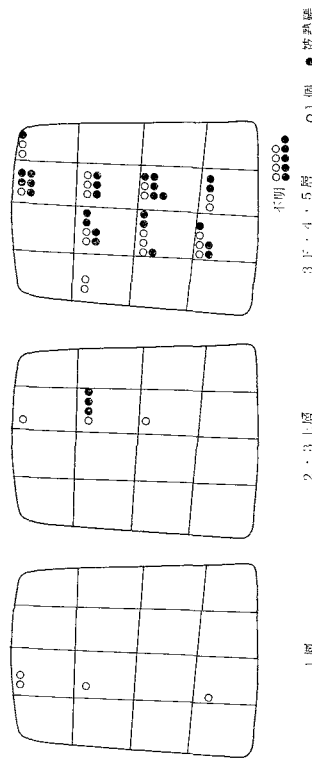


土器分布

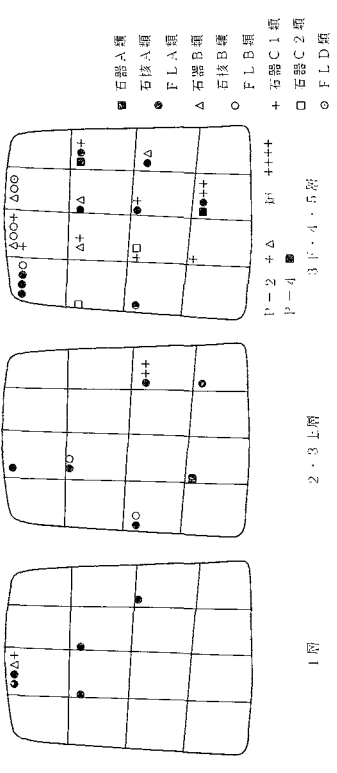
J-5住



礫分布



石器分布



第265図 J-4・5号住居址遺物分布図

【石器】 1層では少量しか出土していないが、北部に多い。2・3上層では少量の石器が全体に散漫に分布する。また、3下～5層では比較的多くの石器が出土しており、全体に分布するが、北西部にやや偏在している。

以上のように、この住居址では、土器と礫で一分布傾向が類似する以外は個々に違った傾向を示しており、それぞれ別々に廃棄された可能性が高い。

Ｊ－６号住居址（第74図） 前期前半（関山Ⅱ式）の住居址と判断される。平面形は歪んだ長方形ないし、東辺を底辺とする台形と推定される。小形で掘り込みは浅い（30cm）。25cm以上の柱穴は8カ所存在する。主柱穴と判断される柱穴と補助柱穴に分かれる。配列は長軸に平行する2列の柱穴列と、それに直交する1列の柱穴列でA1配列である。壁柱穴は少なく、まばらに存在する程度である。炉址は「コ」の字形に配列された石囲炉であり、底面には石が置かれていない。

遺物出土状態（第266図）

【土器】 住居址全体に分布しているが南東寄りにやや多い。なお、この住居址は耕作による攪乱が激しいため、本来はさらに多くの遺物が存在していたものとみられる。

【礫】 土器とほぼ同じ分布傾向を示し、南東寄りに多い。

【石器】 比較的多くの石器が全体に分布し、特に偏在性は認められない。FLD類が北部（2区）にまとまり、南部から中央部ではA類・B類・C1類がまとまっており、南北で石器の種別に違いが認められる。

この住居址では、土器・礫・石器はほぼ同じように分布しており、一連の廃棄行為によると推定される。ただし石器の場合、種別単位での偏在性が認められる。

Ｊ－７号住居址（第75図） 前期前半（関山Ⅱ式）の住居址と判断される。平面形は長方形を呈する。竪穴の掘り込みはやや浅い（40cm）。30cm以上の柱穴は17カ所存在し、主柱穴と補助柱穴の明瞭な違いは認められない。東辺部は完掘していないので、はっきりしないものの、柱穴の配列は長軸に平行する2列の柱穴列と、それに直交する1列と推定され、A1配列である。壁柱穴は連続して存在する。炉址は「コ」の字形に配列された石囲炉である。Ｊ－８号住居址がこの住居址の上部に重複して、構築されていた。

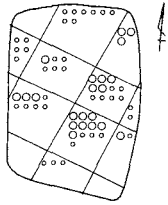
遺物出土状態（第266図）

【土器】 東辺部を完掘していないが、各層とも全体に散漫に分布し、特に傾向は認められない。

【礫】 出土量は少なく、散漫に分布する。2・3層では北西部にやや偏在する。

【石器】 各層とも少量出土している。1・2層では北東部にややまとまり、2・3層では西部に偏在する。

土器分布 J-6住

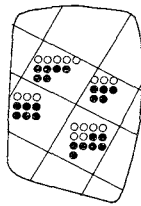


不明 ○○

1層

○ 10g ○ 100g

礫分布

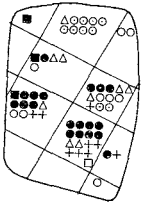


不明 ○●●●

1層

○ 1個 ● 被熱礫

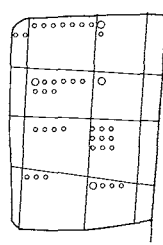
石器分布



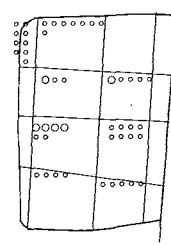
1層

- 石器A類
- 石器A類
- FLA類
- △ 石器B類
- 石器B類
- FLB類
- FLB類
- + 石器C1類
- 石器C2類
- FLD類
- P-1 ●
- 炉 ●+++
- 不明 ○+++

土器分布 J-7住



1・2上層

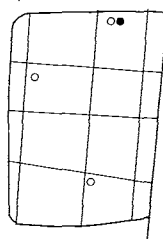


2・3層

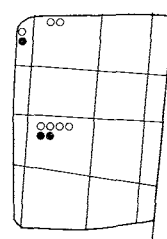
P-2 ○○
不明 ○○○○

○ 10g ○ 100g

礫分布



1・2上層

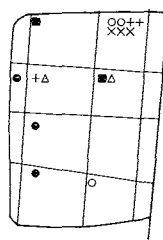


2・3層

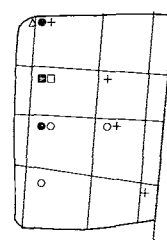
不明 ○●

○ 1個 ● 被熱礫

石器分布



1・2上層



2・3層

- 石器A類
- 石器A類
- FLA類
- △ 石器B類
- 石器B類
- FLB類
- + 石器C1類
- 石器C2類
- FLD類
- P-1 ○
- P-3 ○
- 石器C2類
- 炉 +++
- 不明 ●
- △ 石器E類

第266図 J-6・7号住居址遺物分布図

J-8号住居址（第76図上段） 中期終末（加曾利E4式）のものと同断される。柄鏡形を呈する敷石住居址である。住居部分（主体部）は円形あるいは逆台形状を呈するとみられる。竪穴の掘り込みは、ないか非常に浅かったと考えられる。支柱穴は壁に沿ってほぼ等間隔に配置されており、10カ所前後と推定される。

敷石は扁平な河川礫が用いられており、柄部と炉辺部に存在し、炉辺部では支柱穴の内側に環

状に敷かれている。明確な炉址は存在しない。また、出入口部と柄部に埋設土器（第84図1・5）が存在する。

中野谷地区遺跡群では同時期の敷石住居址は天神原遺跡において検出されているが、同形態のものは存在しない。なお、本橋恵美子氏の分類（1988）ではA類ないしB類に該当する。

遺物出土状態

この住居址は敷石の面で確認されたため、覆土の大部分は除去してしまった。そのため、覆土中の遺物分布状態も不明である。また、耕作により敷石の一部は取り除かれてしまっており、遺存状態も悪く、遺物も非常に少ない。

（大工原 豊・金井 京子）

円形柱穴列（第77図）

円形ないし隅円方形を呈する柱穴列であり、南北10.5m・東西10.8mの規模を有する大形の遺構である。柱穴は19～27カ所であり、等間隔ではないものの、一定の間隔を置いて全周している。東部隅の柱間のみ3.6mと長い。個々の柱穴は細長い楕円形を呈し、長軸が円周に沿って配列している。なお、掘り方は真っ直ぐである。また、浅いものの支柱穴と推定される柱穴が内側に4カ所存在し、柱間は東西3.2～3.6m・南北2.4～2.8mである。

調査時には掘り込みは確認されなかったが、元々平地式か、ごく浅い掘り込みであったと推定される。柱穴の形状からみて、割材のような扁平な断面を有する木柱が直立していたと推定され、内側に支柱穴と推定されるものも検出されていることから、円形掘立柱建物址であった可能性が高い。

また、遺物も全く検出されなかったが、柱穴の覆土は縄文時代の遺構のものである。また、周囲に存在する遺構はほとんど前期のものであるので、前期の遺構の可能性が高い。

こうした遺構は松井田町八城遺跡においても検出されており（山武考古学研究所1992）、関連性がうかがえる。

（大工原 豊）

竪穴状遺構（第76図下段）

D-1号竪穴状遺構 J-1号住居址の西南西に位置する。掘り込みは非常に浅く、遺物も全く検出されなかった。時期は不明である。

T-1号竪穴状遺構 J-8号住居址に隣接して存在する浅い掘り込みの遺構である。遺物は検出されていないが、位置からみて縄文時代中期終末の遺構と推定される。

土坑（第78図）

土坑としたものは全部で3基検出されたのみである。土坑としたものの中で、明確なものはD-3号土坑のみである。この土坑からは前期前半期の土器が少量と、礫が1点検出されている。

D-6号土坑は円形柱穴列の中に存在するものであるが、遺物は全く検出されておらず、この遺構との関係も不明である。

（大工原 豊）

陥穴（第78図）

1号陥穴 4N-157グリッドから単独で検出された。円形を呈し、直径1.4m・深さ1.2mである。底面には2カ所ピットが存在するほか、小さな穴が西半分には蜂の巣状に存在していた。遺物は全く検出されなかったため時期は不明であるが、覆土から縄文時代のものと推定される。

ほぼ同形態の陥穴は中原遺跡で2基、吉田原遺跡で1基検出されており、関連性がうかがえる。なお、この陥穴は今村啓爾氏の分類（今村1973）ではF型に相当する。

（大工原 豊）

b 遺物

土器

前期の土器 本遺跡出土の前期の土器群は、関山Ⅱ式の土器群、諸磯b式の土器群及び加曾利E（第4様式）が出土しており、住居址ごとに様相がことなる。以下、各住居址出土における土器群の特徴について述べる。

J-1号住居址出土の土器（第79図上段） 櫛歯状工具によるコンパス文、異条斜縄文などが出土していることから関山Ⅱ段階になるとと思われる。

J-2号住居址出土の土器（第79図中段） 関山段階の土器と諸磯b段階の土器が出土しており、幅の狭い平行沈線文系の埋設土器が出土されていることから諸磯b段階に相当すると思われる。

J-3号住居址出土の土器（第79図下段） 平行沈線によるコンパス文、異条斜縄文が上層では、出土している。下層では、ループ文の土器も出土していることから関山Ⅱ段階前半になるとと思われる。

J-4号住居址出土の土器（第80・81図） 上層からは、平行沈線による渦巻文がみられる。下層から平行沈線による鋸歯文や、コンパス文、異条斜縄文を施文する土器が出土している。関山Ⅱ段階前半から後半にかけてと思われる。

J-5号住居址出土の土器（第82図） 粘土瘤貼付の土器、櫛状工具によるコンパス文、平行沈線による鋸歯文、渦巻文の土器が比較的下層の方から多く出土している。関山Ⅱ段階前半に相当する。

J-6号住居址出土の土器（第83図上段） 櫛状工具によるコンパス文、ループ文の土器が出土していることから、関山Ⅱ段階前半と思われる。

J-7号住居址出土の土器（第83図下段） 平行沈線によるコンパス文、ループ文施文の土器が出土していることから、関山Ⅱ段階に相当すると考えられる。（関根 慎二）

中期の土器 J-8号住居址に伴い出土した土器が存在するのみである。

J-8号住居址出土の土器（第84図） U-1号埋設土器（1）は口縁部はキャリパー形を呈し、文様帯は消失されており逆U字及びU字の微隆線で上下に二分される文様帯構成をとる深鉢である。2は微隆起線による磨消縄文3・4は口縁部文様帯が消失、微隆起線及び沈線による磨消縄文の土器が出土している。U-2号埋設土器（5）は単節斜縄文が施文される深鉢形土器であるが、胴下半部のみである。これらの土器はほぼ単一時期の一括資料として捉えられ、その特徴から加曾利E4式に分類される。（金井 京子）

石器

1) 石器組成

東畑遺跡の石器組成（種別・器種・石材）は第267図～第269図のとおりである。本遺跡で検出された石器はほとんどが住居址覆土から出土したものである。そして、住居址は前期前半6軒、前期後半1軒、中期終末1軒であり、前期前半以外は組成として検討することができない。

そこで、前期前半（関山Ⅱ段階）の石器組成について、検討することにする。

石器種別組成

本遺跡の種別組成は、中原遺跡の分類に即してみた場合、次の2つのパターンに分類される。

パターン a₁ A類・B類とも低調な石器製作パターンを示すもの（J-1・J-3・J-4・J-6）

パターン a₂ A類・B類とも低調な石器製作パターンを示すが、B類では低調ながら石器消費パターンも併せて示すもの（J-5・J-6）

パターン a₁ の中では、J-1・J-7は非常に出土量が少なく、J-3・J-4はやや多く、同じパターンの中でも偏差がある。いずれのパターンにおいても、石器の製作・消費は低調であり、本遺跡における特徴と言えよう。

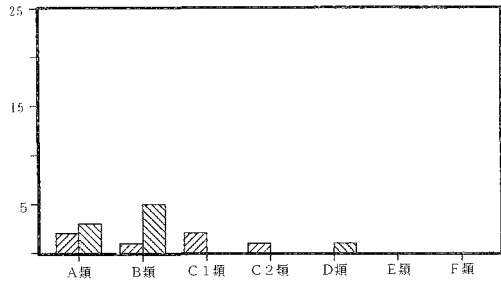
器種組成

A類石器では石鏃・石錐・石匙A類・スクレイパーA類等が1～4点検出される程度で非常に少ない。B類石器では打製石斧が全体で1点のみであり、極めて少ない。また、スクレイパーB類はパターン a₂ に属する住居址（J-5・J-6）ではやや多いが、それ以外の住居址では非常に少ない。C1類石器では凹石が多く、磨石・石皿が少量であるが、これは一般的な傾向と言えよう。C2類石器では敲石・砥石が若干検出される程度であるが、J-4号住居址は6点とやや多い。E類石器では、磨製石斧が1点検出されているのみである。

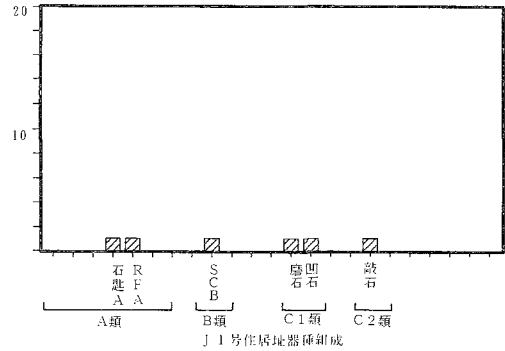
以上のように、種別ごとに器種組成について概観したが、全体的に石器の出土量が少ないため、はっきりした傾向をとらえることは難しいが、A類・B類に属する石器が少ないことは各住居址で共通しており、本遺跡における関山Ⅱ段階の石器群の特徴である。

石材組成

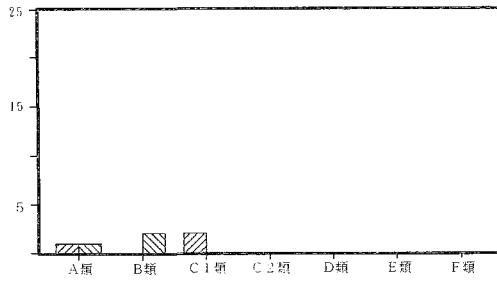
各住居址の石材組成は第269図のとおりである。黒曜石（Ⅰ類）、頁岩（Ⅱ類）、安山岩（Ⅲ a類）、結晶片岩（Ⅳ）類がそれぞれ安定して存在しており、他の石材は比較的少ない。こうした石材組成は、時期を限らずこの地域では一般的なものであり、黒曜石以外の石材は半径10km程度の場所で入手可能なものである。



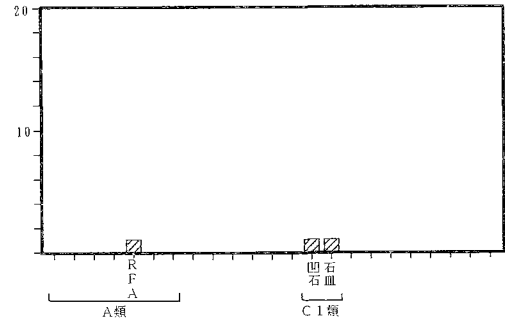
J 1 号住居址種別組成



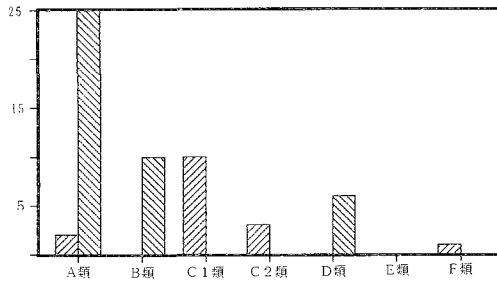
J 1 号住居址器種組成



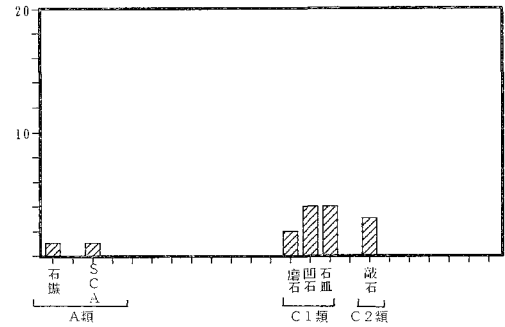
J 2 号住居址種別組成



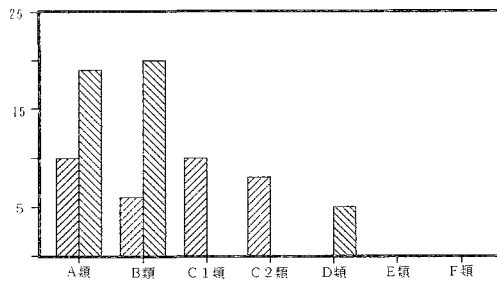
J 2 号住居址器種組成



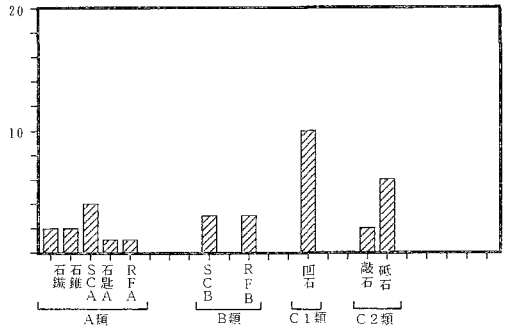
J 3 号住居址種別組成



J 3 号住居址器種組成

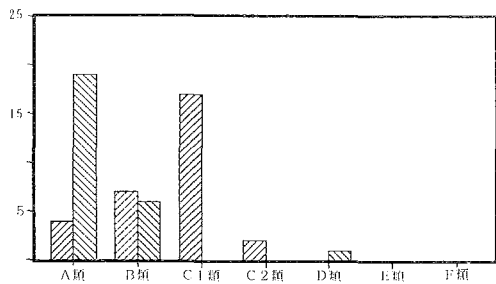


J 4 号住居址種別組成

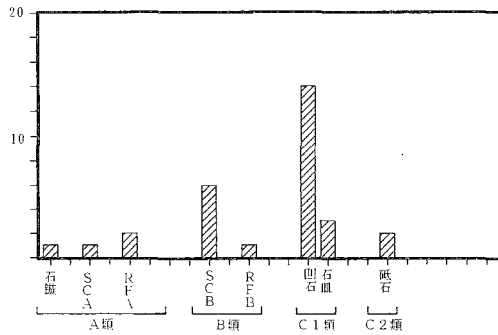


J 4 号住居址器種組成

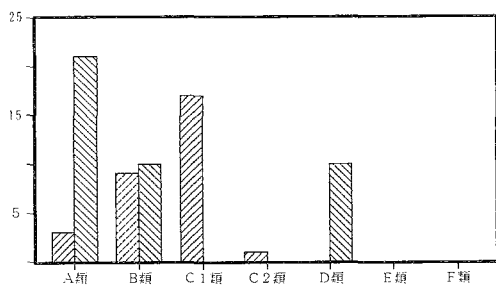
第267图 住居址石器種別・器種組成 (1)



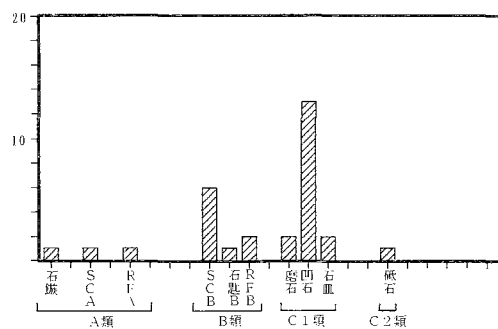
J 5号住居址種別組成



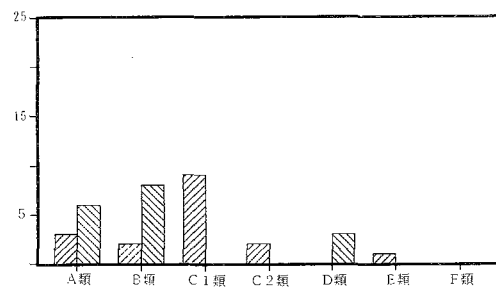
J 5号住居址器種組成



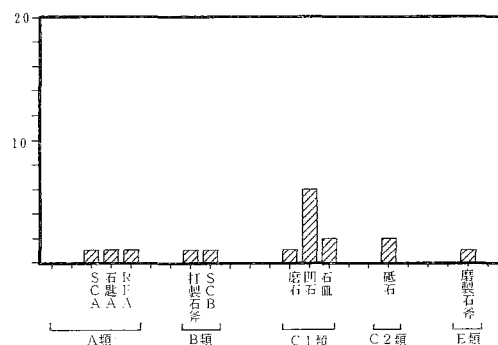
J 6号住居址種別組成



J 6号住居址器種組成

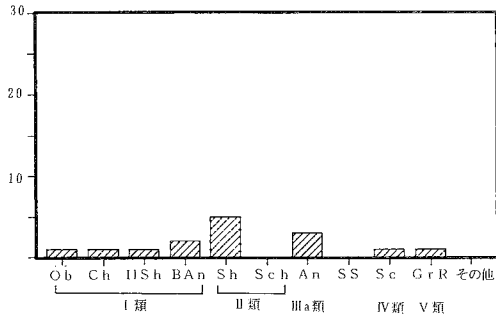


J 7号住居址種別組成

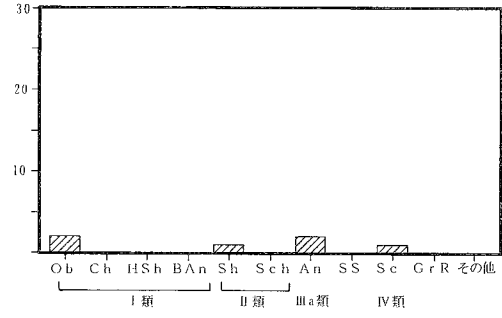


J 7号住居址器種組成

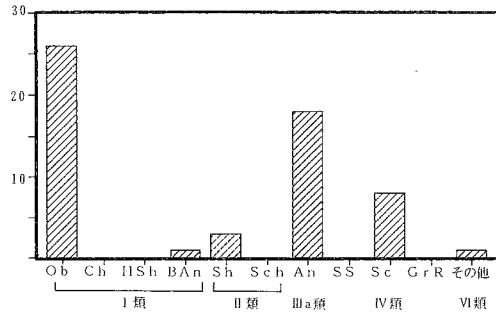
第268圖 住居址石器種別・器種組成(2)



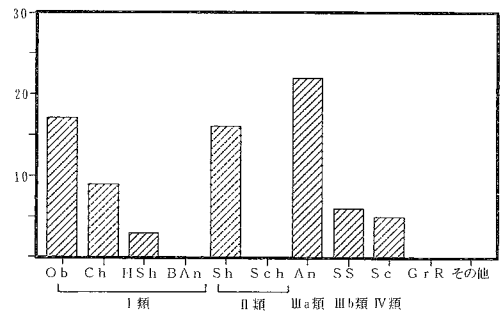
J1号住居址石材組成



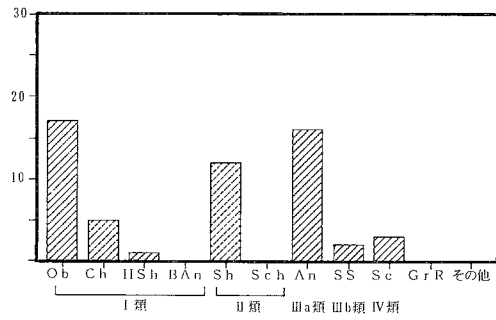
J2号住居址石材組成



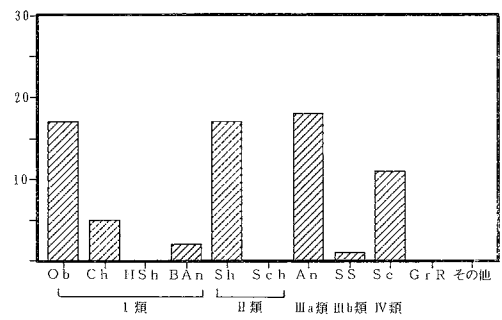
J3号住居址石材組成



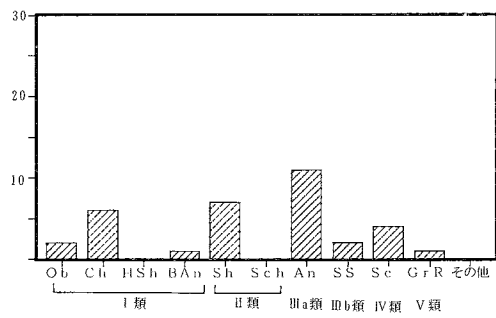
J4号住居址石材組成



J5号住居址石材組成

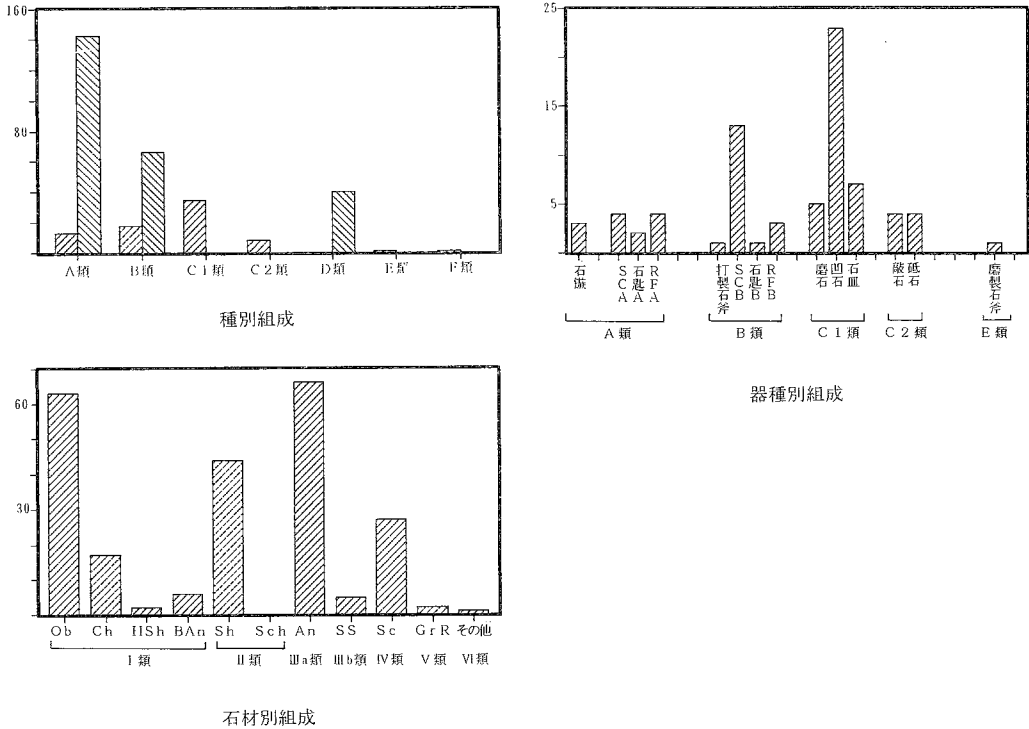


J6号住居址石材組成



J7号住居址石材組成

第269図 住居址石材組成



第270図 関山II段階の石器種別・器種・石材組成

A類石器

石鏃（第85図1～4） 5点検出されている。形態は凹基無茎鏃（I形態）2点、平基無茎鏃（II形態）3点であり、チャート製の3を除き黒曜石製である。II形態の中には左右非対称な未製品の可能性のあるものが1点含まれている。欠損例は3点存在する。

石錐（第85図5・6） 図示した2点のみであり、いずれもJ-4号住居址出土のものである。機能部の作出には片側面を折り取り、反対側のみ押圧剥離調整を施した簡単なものであり、平面形状は異なるが、技術的には共通する。黒曜石製の5には先端部に使用による擦痕が認められる。

石匙A類（第85図7～9） 検出されたものは、図示した3点のみである。9は縦形（I形態）、7・8は横形（II形態）に分類される。8は摘み部が幅広であり、中原遺跡においてII a形態に分類したものであり、同じ範型を有する。いずれも押圧剥離を主体として作出されたものであり、スクレイパーA類I a形態の範疇に属するものである。

スクレイパーA類（第85図10～13） 6点検出され、いずれも関山Ⅱ段階の住居址出土のものである。I a形態1点（10）、II形態1点（11）、III形態4点（12・13）である。石材は黒曜石3点、チャート2点、黒色安山岩1点である。11は両面調整であり、石鏃未製品の可能性もある。不定形剥片を素材としており、すべて3～5 cm程度大きさのものである。

リタッチド・フレイクA類 図示していないが、7点検出されている。1点を除き関山Ⅱ段階住居址出土のものである。石材は黒曜石3点、チャート4点である。不定形剥片を素材としており、すべて2～4 cm程度の大きさのものである。

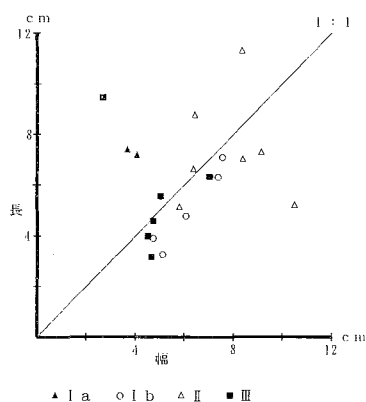
B類石器

打製石斧（第86図1） 2点検出されているのみである。1はII形態（撥形～短冊形・両面階段状剥離・断面レンズ形）に分類されるものである。表採資料である。また、図示しなかったものはI形態（撥形・片面急角度調整・断面蒲鉾形）であるが、形状が崩れており、典型例ではない。いずれも頁岩製である。

石匙B類（第86図2・3） 2点検出されているのみである。II形態（横形）に分類される。いずれも頁岩製である。スクレイパーB類の分類では2はIII形態、3はI a形態の範疇に含まれる。

スクレイパーB類（第86図4～14） 20点検出されている。1点を除き関山Ⅱ段階の住居址から検出されている。I a形態（4）2点、I b形態（5・6）5点、II形態（7～11）7点、III形態（12～14）6点であり、I a形態以外はほぼ同じ点数である。大きさは第271図のとおりであり、3～10 cm程度の長幅比1：1程度のものが多いが、形態によりやや違いが認められる。

形態別にみると、I a形態は4のような礫面を打面とした縦長不定形剥片を素材としており、側縁部に調整が施される。また、I b形態では、長幅比のほぼ同じ薄手の幅広剥片を素材としている。II形態では、7～9のような厚い大形のもの、10・11のようなやや小形で厚手のものが存在する。



第271図 スクレイパーB類の長幅比

厚手である点がⅡ形態の特徴である。Ⅲ形態は13・14のような比較的小形の幅広不定形剥片を素材としたものが多い。なお、12は唯一縦長剥片を素材としている。

これらの素材に用いられる剥片は、礫面または大きな剥離面を打面として作出された幅広剥片が多く、打角が鋭角なものが大部分である。また、連続的に剥離されたと推定される縦長剥片を素材とするものも少数ながら存在している。使用による擦痕は各形態に認められるが、顕著なもの少ない。石材は頁岩18点、安山岩2点であり、頁岩が圧倒的に多い。

リタッチド・フレイクB類 図示していないが、7点存在する。すべて関山Ⅱ段階のものである。幅広不定形剥片を素材としているもの多く、1点のみ縦長剥片を素材とした比較的小形のものが存在する。大きさは6～11cmであり、スクレイパーB類よりバラつきが大きい。石材は頁岩6点、安山岩1点である。

C1類石器

磨石 (第87図1～4) 4点検出されている。Ⅱ形態(楕円形)、被熱によるヒビ割れ・剥落、端部には敲打痕、石材は安山岩といった要件がすべてのものに共通する。なお、すべて関山Ⅱ段階の住居址から検出されている。

凹石 (第88図) 59点検出されている。形態と諸属性は第11表のとおりである。このうち52点(88.1%)は関山Ⅱ段階の住居址出土のものである。形態別では、Ⅱb形態(楕円形・凹→磨:6～10)26点(44.1%)と最も多い。また、石材では安山岩が56点(94.9%)と圧倒的多数を占め、残り2点は結晶片岩である。欠損率は22.0%、被熱率は20.3%と低率である。

使用状態からみると、b形態(凹→磨)50点、c形態(凹のみ)9点であり、大部分のものは凹→磨面の順序で使用されていたと推定される。また、c形態ではⅢc形態(棒状:13・14)・Vc形態(不定形:18～20)のものが多い。この傾向は中原遺跡においても確認されており、磨面のないc形態はb形態のものとは異なり、敲石として用いられていたものと推定される。

形態	個数	石材		欠損	被熱
		An	Sc		
I b	7	7			2
Ⅱ a	1	1			
Ⅱ b	26	26		9	8
Ⅲ b	10	10		1	
Ⅲ c	2		2		
V b	6	6		3	2
V c	7	7			
計	59	57	2	13	12

第11表 凹石の形態と諸属性

石皿（第89図） 17点検出されている。形態別ではⅡ a 形態（楕円形・作業面凹面：1・6・10）4点、Ⅱ b 形態（楕円形・作業面平坦：2～5・7～9）11点、Ⅲ b 形態（不定形・作業面平坦）1点、不明1点である。大きくは作業面が凹面の a 形態と、平坦な b 形態に大別され、b 形態が多い。石材は安山岩9点（52.9%）、結晶片岩8点（47.1%）である。また、欠損率は全体の35.3%であり、特に結晶片岩の欠損率が高い。

時期別にみると、関山Ⅱ段階15点、諸磯 b 段階、加曾利 E 4 段階各 1 点である。関山Ⅱ段階の J-3 号住居址では石囲炉に転用されたものが 6 点存在する。

C 2 類石器

敲石（第87図5～7） 5点検出されている。5は加曾利 E 4 段階のもので、6・7は関山Ⅱ段階のものである。形態別ではⅡ形態1点、Ⅲ形態4点であり、石材は安山岩4点、緑色岩類1点である。本遺跡では剥片剥離が低調であるが、それを反映してか敲石も少ない。

砥石（第90図） 10点検出されている。すべて荒砥であり、牛伏砂岩9点、板状の安山岩1点（8）である。小形有溝（2・4）、小形扁平（1・3・5・6・8）、大形有溝（7）、大形扁平（9・10）があり、扁平なものが多い。なお、J-4号住居址から砥石がまとまって検出されており、特に小形扁平のものはこの住居址に集中している。

D 類石器

棒状礫（第87図10） 1点のみである。結晶片岩製で欠損したものであり、敲石の基部の可能性もある。

E 類石器

磨製石斧（第87図8・9） 2点検出されている。いずれも定角式である。9はJ-7号住居址の上層から検出されているが、この部分にはJ-8号住居址（加曾利 E 4 段階）が存在しており、形態的にみてこの住居址に伴うものである可能性が高い。また、8も遺構に伴わず単独で検出されており、形態的にも前期のものでない可能性が高い。 （大工原 豊）

3 金井谷戸遺跡

(1) 縄文時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址 (第91図)

J-1号住居址 (第91図下段) 調査区の南東部に存在する。南半部分は道路により破壊されているが、直径4m弱の円形を呈していたと推定される。出土遺物から早期押型文段階のものと考えられる。IV層下部で円形の掘り込みが確認された。確認面からの掘り込みは約10cmと浅い。主柱穴と推定される細い柱穴は、内側に約10本存在するが、基本的には4本柱穴と推定される。また、北東の壁際にはほぼ等間隔に内側へ斜めに傾斜する垂木受けと推定される柱穴が5本検出された。炉址は確認されなかった。S-3号集石土坑近接しているが、新旧関係は明確でない。

S-1号集石土坑の周囲にJ-1号住居址と類似した、浅い掘り込みの存在が確認された。この遺構も南半が破壊されており、全体形ははっきりしないが、早期押型文土器がまとまって検出されており、住居址の可能性がある。

押型文土器群の標式遺跡である長野県樋沢遺跡では、2.6×2.2mの小形楕円形の住居址が検出されている(戸沢編1987)。大きさは樋沢遺跡の例の方が小振りであるが、平面形態・主柱穴の配置はほぼ同じであり、共通性が認められる。

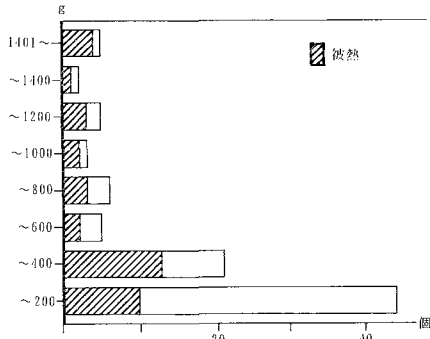
群馬県内で早期前半期の住居址が検出された例としては、小野上村八木沢清水遺跡(石坂1978)、北橋村城山遺跡(富澤他1989)などがあるが、いずれも撚糸文土器群に伴うものであり、押型文土器群に伴う住居址の例は知られていない。このうち城山遺跡の住居址例は、主柱穴の配置や傾斜する壁柱穴の存在などに本遺跡の例と類似点が認められる。

集石土坑 (第92図)

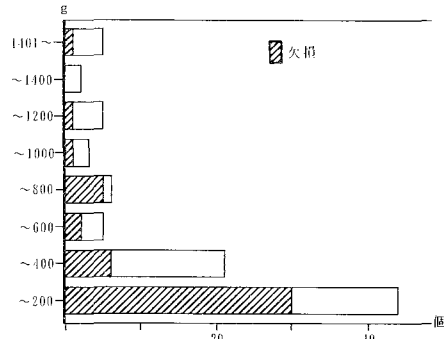
全部で4基検出されたが、いずれも早期押型文段階の遺構とみられる。

S-1号集石土坑 中形の土坑で、焼礫が土坑中央部に多量詰まった状態のものである。400g以下の比較的小振りの焼礫が主体をなす。構成礫数は91点である。周囲から押型文土器が周囲に分布するが、集石中からはほとんど検出されなかった。また、剥片A類・B類が集石から検出されているほか、周囲から磨石・特殊磨石も検出されている。

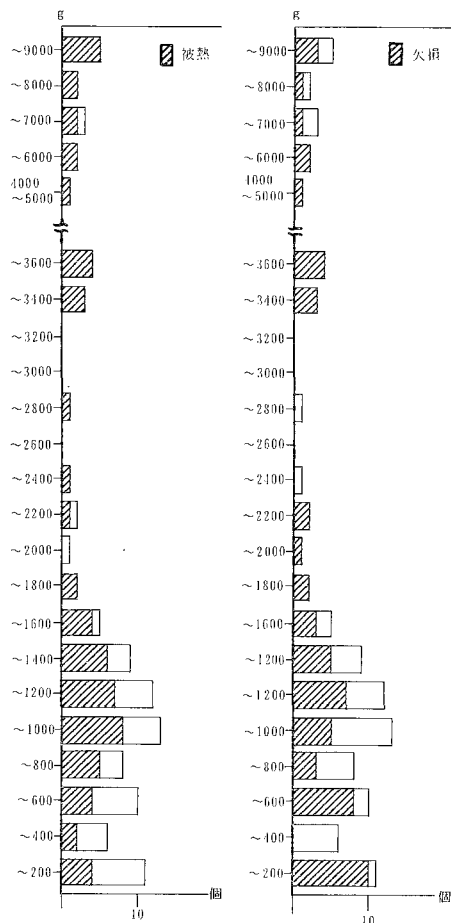
S-2号集石土坑 小形の土坑で、小振りの焼礫が少量、土坑の片脇にまとまる状態で検出された。構成礫数は28点である。土坑覆土中からは炭化物はほとんど検出されなかった。土坑上部から前期後半の土器が検出された。



1・S-1号集石土坑の被熱

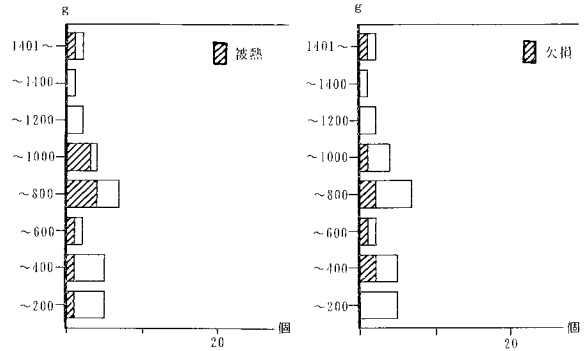


2・S-1号集石土坑の欠損



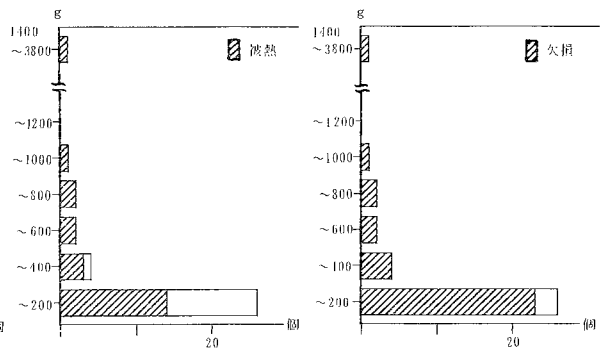
5・S-3号集石土坑の被熱

6・S-3号集石土坑の欠損



3・S-2号集石土坑の被熱

4・S-2号集石土坑の欠損



7・S-4号集石土坑の被熱

8・S-4号集石土坑の欠損

第272図 集石土坑の重力別個数及び被熱・欠損

S-3号集石土坑 大形の土坑であり、大形の焼礫が土坑中央部に多量詰まった状態のものであった。構成礫数は101点である。中央部中層から下層に大形で扁平な礫や人頭大の円礫がまとまり、その上部や周囲から比較的小振りの焼礫が覆う状態で多量検出された。扁平な大形礫は中央部に整然とまとまり、人為的に配置された状態を示している。また、比較的大形の磨石と・凹石が10点集石中から検出された。押型文・縄文系土器は集石上部から周囲にかけてやや密に分布するが、土坑の下部からはほとんど検出されなかった。土坑覆土中からは炭化物は若干検出される程度であった。

S-4号集石土坑 小形の土坑で小振りの焼礫が土坑の片脇に散らばる状態で検出された。構成礫数は36点である。内部からは遺物はほとんど検出されなかったが、周囲からは押型文土器と剥片A類が少量検出された。

S-1・S-3は住居址に隣接して並んで存在する。押型文土器の集中もこの部分に重なることから、この段階の遺構とみられる。また、S-4は調査区西北に単独で存在するが、押型文土器の分布も認められることから、この段階の遺構と推定される。しかし、S-2は周囲に押型文土器が分布するものの、遺構部分には前期後半の土器の分布と重なることから、押型文段階の遺構でない可能性がある。

集石を構成する礫の重量別構成比と被熱・欠損状態は第272図のとおりである。重量別構成比をみると、S-1とS-4は200g以下の小形の礫が多く、非常によく似た構成比を示している。また、S-2では弱いピークが600~800gにあり、偏差も大きい。一方、S-3は他の集石土坑とは全く様相を異にしており、1,000g前後の礫が主体を占め、3,500g前後の中形礫と、6,000~9,000gの大形礫も一定の割合存在している。この集石土坑では、大中小のスリーサイズが選択されている。

次に、被熱率をみると、S-1・S-2はやや低率であるが、S-3・S-4は高率であり、両者の間には差異が認められる。また、欠損率ではS-2は低率であるが、それ以外はかなり高率である。

以上の結果を整理すると、存在位置、礫の出土状態、礫数及び重量別構成比からは、S-1・S-3と、S-2・S-4に分けることができる。しかし、被熱率や欠損率ではそれぞれ様相を異にしており、単純に二分できない様相を呈している。したがって、これらの集石土坑は使用状態と遺棄（廃棄）された状態がそれぞれ異なっていた可能性がある。

また、集石を構成する礫はすべて安山岩製の河川礫であり、碓氷川または高田川の転石が遺跡内へ搬入されたと推定される。

集石土坑は早期前半期では特徴的な遺構であり、本遺跡の場合、炭化物は少ないものの大部分

の礫が被熱を受けていることから、石蒸し料理などに利用された調理用施設と推定される。

なお、類似した遺構は樋沢遺跡でも検出されており、県内では早期撚糸文系土器群を主体とした城山遺跡で多数検出されている。主体となる土器群は押型文と撚糸文と異なるものの、類似した遺構を有しているものと考えられる。

ピット群（第91図）

ピットは調査区の東半部分にまとまる傾向が認められる。また、比較的大形で深いピットはJ-1号住居址と重複して存在する。このピット群は明確に配列はしないものの、掘立柱建物址等の可能性がある。このピット群からは前期後半（諸磯a式）の土器が出土しており、同段階の土器分布とも重なることから、この時期の遺構と考えられる。（大工原 豊）

b 遺物の分布状態（第93図）

早期の土器群の分布 この時期の土器は調査区全体に分布し、遺跡の範囲はさらに調査区外に及んでいることが解る。しかし、周囲の表面採集資料の分布状態からみて、遺跡の範囲はさほど広くないものと推測される。調査区南のJ-1号住居址やS-1・S-3号集石土坑の周囲にやや集中している。押型文の分布は調査区全体に及んでいるが、表裏縄文や撚糸文は同様にJ-1号住居址付近にまとまる傾向が認められる。

前期の土器群の分布 前期の土器は時期により明確に分布の偏在性が認められる。前期前半（関山式・黒浜式）の含繊維土器は調査区西半部分に散漫に分布している。しかし、前期後半（諸磯a式）の土器は調査区東半部分に存在するピット群と重なるように分布している。

礫の分布 礫は集石土坑として集中して検出された他、調査区全体からも検出されている。集石土坑以外には特に集中は認められず、散漫な分布を示す。これらの礫は安山岩製であり、集石土坑を構成する礫と外見はほとんど同じ状態であり、集石土坑を構成する礫が二次的に散乱した可能性が高い。

石器群の分布 石器の分布をみると、早期の土器群の分布とほぼ一致しており、調査区南のJ-1号住居址やS-1・S-3号集石土坑の周囲に集中している。ただし、前期の土器の分布も調査区全域に及んでおり、早期と前期の石器を分布状態から明確に分離することは困難である。土器群の数量と分布状態を総合的にみて、石器の多くは早期の石器群と推定される。

また、種別・器種別にみても顕著なまとまりは見い出せない。ただし、凹石・磨石・特殊磨石などのC類石器は住居址及び周辺にまとまり、早期の土器群と分布域と重なる部分が多いように見受けられる。(大工原 豊)

c 遺物

土器 (第94図～第97図)

金井谷戸遺跡から出土した土器は、早期(草創期後半)の捺糸文土器や早期の押型文土器をはじめ、前期の関山式・黒浜式・諸磯式土器などの多岐にわたっている。これらの土器は形状をなすようなものはなく、その全てが小破片である。各土器の型式別の総点数は、稲荷台式17点、押型文163点、表裏縄文系21点、田戸下層式1点、関山式8点、黒浜式103点、諸磯a式206点である。第94～97図に掲載した土器はそれらの内の代表例であるが、本稿では竪穴状の遺構に伴って出土した押型文土器を中心として、若干の分析を加えてみたい。

163点の押型文土器は、山形文を主体としてわずかな格子目文と楕円文を含んでいる。その内訳は、山形文156点、格子目文5点、楕円文2点である。

まず、最多数を占める山形文の文様構成から見てみよう。各土器ともに小破片であることから、全体の文様構成を判別できるものは少ないが、口縁部破片で見える限りそのいずれもが口縁部を横位に施文しており、口端部直下から縦位の構成をとるものは存在しない。また、その胴部破片のほとんどが縦位構成である点を考慮すれば、口縁部と胴部の施文方向が異なる文様構成をもつと判断して良いであろう。次に、各施文単位間に若干の無文部を置く帯状施文なのか、あるいは密接施文なのかが問題となる。14・16・20・21・23・30などを見ると、10mm前後とわずかながらも無文部を有しており、これらが帯状施文であることを示している。このような帯状施文を確認できる個体は、前述のものも含めてわずか9点に過ぎず、当該の山形文の全てが帯状施文となるのか否かは判然としないところであるが、胴部破片に帯状施文を有するものが少ないことからすれば、かなり密接施文に近似した狭小な無文部構成による帯状施文であることが予想される。口唇部や裏面口縁部の文様帯構成はどうであろうか。24点の口縁部破片のうちで、口唇部と裏面の両部位に施文されるのは5点、口唇部のみが9点、裏面のみが4点、その両部位に施文されないものが6点である。これを比率でみるならば、両部位に併施文されるのは21%と少ないが、どちらか一方への施文例も含めるならば、全体の75%にも及ぶことになり、口唇部や裏面へ加飾される傾向の強いことが理解される。

施文原体は、棒軸の一周に小ぶりの山形文を2単位に刻み、かつ同様のモチーフを4～6条重帯させた横刻み原体である。原体の両端の処理は、山形文の単位に合わせて二方向からはずしに削

りとしている。原体の長さは、10・13・20などを観察すると22～27mmの長さを有している。施文単位を判読できる個体が少ないことから、全体的な原体長の傾向を把握することはできないが、概して25mm前後のやや長めのものが主体となるようである。また原体の棒軸の直径は、5～7mmの範囲に入るものが大半を占めている。(註1)

器形は、6～24の口縁部破片からも看取できるように、外反の度合いは弱く、また25からみて乳房状の尖底を有すると考えられる。

胎土については、およそA・B・C類の三つに分かれるが、A類が106点と最も多く、次いでC類の46点、B類の4点の順となる。このA類は、結晶片岩の粗・細砂を夾雑物として多量に含むものであり、視覚的には含有鉱物の雲母が特徴的である。

他の押型文としては、格子目文と楕円文が存在する。両者ともに個体数が少ないが、43の胴部破片の格子目文は縦位の帯状構成であり、また45の楕円文は口縁部が横位帯状で胴部が縦位の異方向施文となっており、前述の山形文とも類似した文様構成を有している。さらに、胎土でもその全てがA類となっており、この点でも山形文との共通性が認められる。

以上が金井谷戸遺跡から出土した押型文土器の主な特徴である。要約すれば、①狭小な無文部をもつ異方向帯状施文と口唇部や裏面部への強い加飾傾向、②胎土に結晶片岩を含む、の2点を上げることができる。これらの特徴は、大半の山形文をはじめ格子目文や楕円文にも認められることから、各押型文ともに同一時期の所産と考えて良いだろう。

ところで、このような特徴を有する押型文土器は、群馬県内でもかなり広範にその分布が認められるが、比較的まとまっている発掘資料としては、小野上村八木沢清水遺跡や桐生市普門寺遺跡の出土資料がある。八木沢清水遺跡では1150点の押型文土器が存在し、そのうちの1041点が山形文である。文様構成は異方向帯状施文を主体とし、口唇部や裏面に施文するものが口縁部破片の83%に認められる。また少数ではあるが、胎土に結晶片岩の粗砂を含むものもある。このような特徴は、先の①②とも共通するものであり、金井谷戸遺跡と八木沢清水遺跡の押型文土器がほぼ同一時期の所産であることを示唆するものと言えよう。さらに八木沢清水遺跡では、これらの押型文土器と平行関係にある器面の表裏に縄文施文を有した、いわゆる広義の表裏縄文土器が存在する。この表裏縄文土器は、押型文土器と同様の帯状の文様構成や胎土をもち、口唇部・裏面部への施文とともに、裏面に指頭圧痕を残すなどの特徴を有している。(註2) 金井谷戸遺跡でも、この縄文施文土器と類似した資料が21点検出されている。口縁部破片が存在しないために、裏面への施文の有無を含めた全体的な文様構成の詳細は不明であるが、46～48にみられるように縦位の帯状施文が確認でき、しかも胎土には結晶片岩を含むことから、八木沢清水遺跡と同様に押型文土器に併行する表裏縄文系土器とみて問題ないだろう。普門寺遺跡の資料については、1949(昭和24)年の酒詰仲男・渡辺仁らの発掘調査により、山形文を主体とする多くの押型文土器の

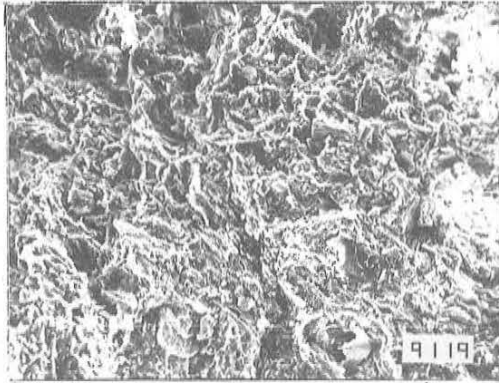
出土があったとされているが(註3)、未報告であることや資料の散逸によりその詳細は不明である。ただ、量的には少ないながらも藺田芳雄の調査資料によれば(註4)、胎土に結晶片岩の夾雑物は認められないものの、山形文を主体として異方向密接施文か無文部の狭小な異方向帯状施文の文様構成をとっており、口端部への施文傾向も強い。また、これらの押型文と類似した胎土を有する表裏縄文土器の存在も認められる。こうした特徴は、金井谷戸遺跡や八木沢清水遺跡の例と共通しており、これら三遺跡の押型文土器がともに平行段階の所産であると見てよいだろう。

このような比較的狭小な無文部を有する帯状施文の押型文や表裏縄文土器は、長野県樋沢遺跡の出土資料を標式とする「樋沢式」に特徴的なものである。かつて、普門寺遺跡の押型文については、「普門寺式」という別個の型式名で呼称されたこともあったが、内容的にはこの「樋沢式」とほぼ同様であり、金井谷戸遺跡や八木沢清水遺跡の例をも含めてこの「樋沢式」との関係において把握すべき土器群と思われる。

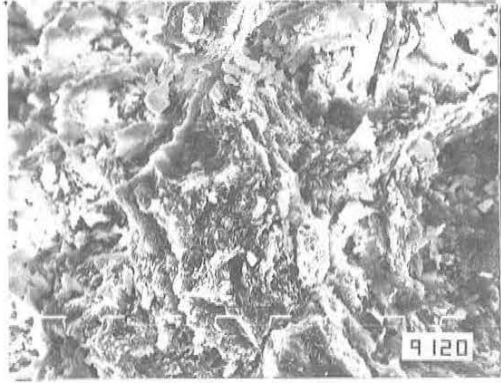
一方、上記のような山形押型文とは異なった特徴を有するものが、金井谷戸遺跡の340m北東に位置している中原遺跡から検出されている。ここでは、幅の広い無文部や短めの施文原体を用いる「樋沢式」よりもむしろ「沢式」に近似する一群と、本遺跡と同様「樋沢式」に類似する一群の両者が存在する。(註5)

ところで、押型文土器の編年は、各型式内容の把握やその変化の方向性および共伴関係の認識の違いにより、未だ確立されていない。上記のような無文部の広狭による差異も、幅広→幅狭という変化の方向性を想定する見方と、全くその逆を想定する考え方もある。いずれの説が的を得ているのかを当遺跡の資料から見極めることは難しいが、この編年の確立にあたっては、表裏縄文系土器群や撚糸文土器群との関係把握が大きな要素を占めるように思われる。特に近年の研究では、押型文土器と稲荷台式段階の撚糸文土器との関係が論議され、関東地方南西部や東部地方を中心とした多くの竪穴住居内での共伴事例により、両者の平行関係はほぼ動かすことのできない事実として認識されるようになってきている。当遺跡でも、同一地点より押型文土器に混じって13点の撚糸文土器が出土しているが、田戸下層式や前期の諸磯式土器等も混在しており、両者の共伴関係を特定できるような出土状況ではない。

1～5は、それらのうちの口縁部破片を中心とした代表的なものである。1は口縁部に5～10mmの無文部を置き、細いながらも条間隔の広い撚糸文を縦位施文しているが、これは稲荷台式の新しい段階に比定されるものであろう。また、節がやや大きく条間隔の広い3・4なども同段階に比定されよう。2は縦位施文した後に、口端より5mmほど下がった位置に一带だけ横位施文するもので、「若宮型土器」と呼称される撚糸文土器に類似した文様構成をとっている。(註6)
5は撚糸文が横走する特徴からみて、大浦山Ⅰ式併行と判断される。また、49・50はR L縄文を

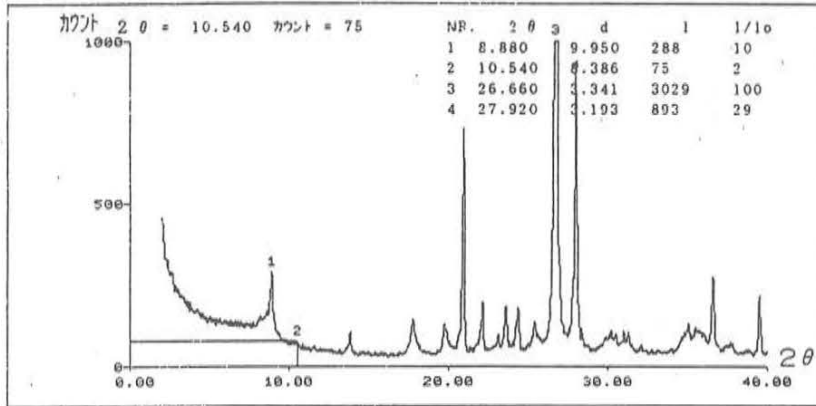


- 1・細砂粒を混入する碎屑性粘土
- 2・原土の組織を残す
- 3・マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
- 4・grass は中粒で、焼成ランクはIII

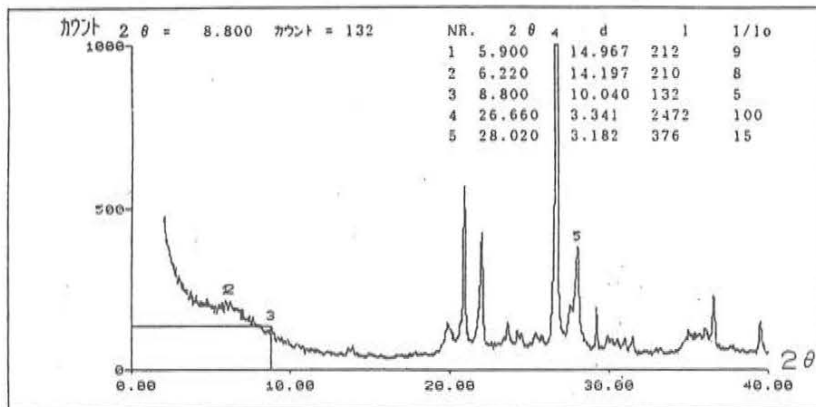


- 1・細砂粒を混入する碎屑性粘土
- 2・原土の組織を残す
- 3・マトリックスは Mont+grass
- 4・grass は中粒で、焼成ランクはIII

第273図 分析対象土器の電子顕微鏡写真



No.19



No.20

第274図 分析対象土器のチャート図

縦位に施文するものであるが、口唇部の形状等からみてこれらの土器は1の稲荷台式に併行すると考えられる。

これらの捺糸文や縄文施文の土器は、形式的には若干の時間差を有するが、いずれの土器の胎土にも結晶片岩の粗砂が含まれており、押型文土器とも共通する特徴をもっている。管見に触れた群馬県内での資料で見限り、胎土に結晶片岩を含有するのは押型文土器の他に稲荷台式期の捺糸文土器と、早期の鷓ヶ島台式期から茅山上層式期にかけての条痕文系土器群、それに極一部の前期の諸磯a式や中期初頭の五領ヶ台式土器であり、終末段階の捺糸文系土器群や三戸・田戸式段階の沈線文系土器群にはほとんど認めることができない。(註7) こうした胎土のあり方とともに、他遺跡での捺糸文土器との伴出事例を重視すれば、当遺跡における押型文土器は、稲荷台式から大浦山I式段階のいずれかの捺糸文土器と共伴した可能性も考えられる。

県内では八木沢清水遺跡や荒砥北三木堂遺跡(註8)などで、稲荷台式新段階の捺糸文土器と押型文土器との共伴が想定できるが、これらの押型文土器は当遺跡と同様に、いずれも狭小な無文部をもつ異方向帯状施文か異方向密接施文で構成されており、「沢式」的な無文部の幅広い異方向帯状施文とはならない点で注意を要するであろう。

なお、当遺跡の押型文土器に関しては、その胎土に結晶片岩の粗砂を含むA類と、含まないC類の各1点についてX線回折試験を行っている。その分析結果については、荒砥北三木堂遺跡(註9)の報告書中において、同遺跡や八木沢清水遺跡出土の捺糸文土器や押型文土器の分析データとも併せた報告がなされており、詳細はそちらを参照されたい。本稿では、土器の胎土性状表と断面の電子顕微鏡写真、それにX線回折試験のチャート図を掲載するに止める。

(石坂 茂)

遺跡名	胎土 分類	焼成 ランク	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物					ガラス	備考		
			Mo	Mi	Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Qt			P!	
中野谷	A類	Ⅲ	7		20			288	75		3029	893	中粒	細粒砂、碎屑性粘土
中野谷	C類	Ⅲ	10		18			212	132		2472	376	中粒	細粒砂、碎屑性粘土

胎土性状表

註

- (1) 16・23の原体はかなり短く見えるが、これは下端が撫で消されているためで、実際の長さは判然としない。
- (2) 能登 健・石坂 茂 1988「八木沢清水遺跡」『群馬県史』資料編1 群馬県
石坂 茂 1990「群馬県小野上村八木沢清水遺跡の押型文土器」『研究紀要』7群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3) 酒詰仲男・渡辺仁「栃木県菱村普門寺遺跡発掘概報」『人類学雑誌』第35巻第4号 1949
- (4) 藪田芳雄「普門寺観音山包含地遺跡調査概報」『両毛古代文化』第1集 1949
能登健・増田修・白石典之「普門寺遺跡」『群馬県史 資料編1』 1988
- (5) 中島宏は従来の沢式や樋沢式、細久保式の問題点を指摘し、その再検討を行っている。同氏は沢式を樋沢Ⅰ式に、樋沢式を樋沢Ⅱ式に再編しているが、これに従うならば中原遺跡の第25図1・2は樋沢Ⅰ式に、金井谷戸遺跡例も含めて他は同Ⅱ式に該当することになる。しかし、この編年観については、宮崎朝雄・金子直行らから異論も提示されている。この問題に関しては、良好な資料の集積ともう少し時間をかけた議論が必要であろう。本稿では、樋沢式が複数の型式を内包している等の問題点を認識しつつも、暫定的に従来の型式名称を踏襲している。
- 中島 宏 1987「中部地方における押型文土器編年の再検討」『埼玉の考古学』 柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
同 1988「関東地方における押型文土器編年の再検討」『縄文早期を考えるー押型文文化の諸問題』 帝塚山考古学研究所
- 宮崎朝雄・金子直行 1990「撚系文系土器群と押型文系土器群の関係」『縄文時代』創刊号
同 1992「若宮遺跡出土土器群の再検討ー静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開ー」『研究紀要』9 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 戸田哲也 1989「縄文土器の型式学的研究と編年(中編ーその2)」『神奈川考古』25
- (7) 胎土に結晶片岩を混入させることについては、中部地方方面の異方向帯状施文の山形文土器に顕著に認められる雲母の混入と何らかの関係の有していると考えられる。なぜなら、結晶片岩にも多量の雲母が含有されているからである。通常、雲母は六角形状の結晶構造を有しているが、結晶片岩内の雲母はそのような結晶構造をもたないという違いがある。しかし、視覚的な光輝の点では両者の雲母は類似しており、当地域では神流川流域に産出する結晶片岩を混和材として利用することにより、同様な効果を持たせようとしたのではないだろうか。雲母の混和材は、草創期前半の表裏縄文土器にも認められるもので、押型文土器の出自を暗示する一要素とも言える。
- (8) 石坂 茂 1992「2. 縄文土器について」『荒砥北三木堂遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 井上 巖 1992「1. 出土土器の胎土分析」『荒砥北三木堂遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

石器（第98図・第99図）

1) 各器種の特徴

石器・剥片類は全部で399点検出された。前述したように、遺構・土器の時期・分布状態等から、大部分は早期押型文段階のものと推定される。また、前期や他時期の石器も一部混在していると推測される。早期とそれ以外の時期の石器を個々に特定することは、層位からも遺物分布状況からも困難であった。ここでは各器種の特徴を述べ、石器型式学的に分析・検討することにする。

なお、器種分類については、すでに中原遺跡の石器分類の項（25ページ）で述べたが、本遺跡においても、これにしたがって分類を行った。

A類石器

石鏃（第98図1～3） 1は「楕形鏃」と呼称される形態で、かつ、局部磨製石鏃である。黒曜石製の薄い剥片で精緻に製作されている。こうした顕著な特徴を有する石鏃は、押型文土器群に伴い検出される特徴的なものであり、八木沢清水遺跡（能登・石坂1988）でも酷似したものが検出されている。2・3は平基無茎鏃であり、前期にも存在するが、早期に多い形態であり、当期の可能性が高い。

スクレイパーA類（第98図6） スクレイパーA類は原則として石鏃と共通の、または互換性のある石材で製作されたスクレイパーである。本遺跡の場合、黒曜石・チャート・硬質頁岩で製作されたスクレイパーがこれに相当する。11点検出された。縁辺部に調整または使用による小剥離が観察されるもので、第275図1のように長幅比1：1程度の剥片を素材とし、2cm程の小形のものと4cmの大形のもの（6）がある。

6はⅢ形態（微細剥離）で硬質頁岩製であり、小形のものとは明確に区別される。小形のものではⅠa形態（押圧剥離）2点、Ⅰb形態（押圧剥離＋直接打撃）5点、Ⅱ形態（直接打撃）1点、Ⅲ形態（微細剥離）1点であり、Ⅰb形態が多い。また、石材では黒曜石8点、チャート2点であり黒曜石が大多数を占める。

リタッチド・フレイクA類 スクレイパーA類に準じた器種であり、同様の石材を素材とするものである。16点検出された。縁辺部に一部微細な剥離が認められるものを一括したが、この中には調整剥片も含まれていると推定される。第275図2のように、石鏃やスクレイパーA類に比べ、大きさにばらつきがある。石鏃及びスクレイパーA類（小形）と関連性が高く、チャート製の1点を除き黒曜石製である。

細石刃？（第98図4・8） 4・8はいわゆる「曽根型石核」と呼称されているような楔形を呈

した石核から剥離された剥片であり、槌状剥離が施され細石刃に類似した形状を呈している。こうした細石刃状の剥片は調整剥片も含め7点検出されている。中には微細な剥離痕が認められる例も存在する。特に、4は宮城市市之関前田遺跡（細野他1991）の楔形を呈する細石刃核と類似しており、細石刃文化に属する石器群が混在している可能性がある。

B類石器

打製石斧（第98図20） 6点検出されている。20は小形の片刃・撥形形態を呈する打製石斧であり、搔器的な刃部を有する。類似の片刃・撥形形態のものは他に1点検出されている。また、図示していないが、突形（短冊形）形態のものも4点検出されているが、型式学的にみていずれも前期以降のものであると推定され、前期の土器群に伴うものと思われる。これら打製石斧では頁岩が多用されている。

石匙B類（第98図21） 21は頁岩製で、横形・I b形態（押圧剥離+直接打撃）の石匙である。表面採集資料であり、前期のものである可能性が高い。

三角錐形石器（第98図14） 2点検出されており、頁岩製である。この器種は早期撚糸文土器群後半期（稻荷台式期）に群馬県を中心に北関東地域に分布する石器とされており（石坂・岩崎1988）、本遺跡から検出された例は、この中でⅡ類として分類されているやや粗雑なものである。

押型文土器群に伴うとみられる例は、小野上村八木沢清水遺跡、前橋市柳久保遺跡にあり、本遺跡の例は押型文土器群あるいは撚糸文土器群（稻荷台式）に伴うものと推定される。

スクレイパーB類（第98図） この器種は原則として打製石斧と共通の石材で製作されたスクレイパーであり、22点検出されている。I a形態（6・7）、I b形態（19）、Ⅱ形態（9～13・15・16）、Ⅲ形態がある。I a形態2点、I b形態1点、Ⅱ形態15点、Ⅲ形態4点であり、圧倒的にⅡ形態が多い。Ⅱ形態では片面調整のものが多く、9・10のような搔器的な急角度な調整が施されたものも認められる。また、15のように打製石斧と明確に区別できない例もある。石材では黒色安山岩の1点を除きすべて頁岩製である。この器種は第275図3に示されるように、4～10cm程度の縦長から横長まで、多様な形状の剥片が素材として用いられている。

この中で小形で礫面を打面部に残すもの（5・6・16）は、礫器状の石核B類（17・18）より作出された剥片を素材としてしているとみられ、一連の剥片剥離工程を推定することができる。また、9～11・15など比較的大形のものとは別の剥片剥離工程により作出されたものであり、スクレイパーB類の製作には少なくとも2種類以上の剥片剥離工程が存在していたと考えられる。これらのスクレイパーB類では早期のものと、前期のものが混在している可能性が高い。

リタッチド・フレイクB類 スクレイパーB類に準じた器種であり、2点検出されている。図示しなかったが、頁岩・安山岩製の縦長剥片が素材として用いられている。頁岩製の剥片B類は表

面が風化しており微細な剥離は明瞭ではない。したがって、これ以外にも使用された可能性のあるもの剥片B類は存在していたと推定される。

C類石器

凹石（第99図1～3・8） 8点検出されており、すべて安山岩製である。形態別にみると、Ⅱb形態5点、Ⅰb形態・Ⅲb形態・Ⅴb形態各1点であり、Ⅱb形態（楕円形・凹→磨面）が多い。このうち3点は集石土坑から検出されており、確実に一部は早期のものと言えよう。

磨石（第99図4・7・13・14） 12点検出されており、すべて安山岩製である。Ⅱ形態11点、Ⅴ形態1点であり、圧倒的にⅡ形態（楕円形）が多い。13・14のような大形で多孔質である磨面の明確でない例は、S-3号集石土坑内から8点出土しており、早期のもの判断される。

特殊磨石（第99図5・6・10・11） 4点検出されており、すべて安山岩製である。この磨石は断面形が三角形を呈する形状で、平坦面のみならず、側面にも磨面（特殊磨面）が形成されることが特徴とされている。本遺跡の例はすべて半分欠損または分割しており、分割面にも敲打痕が観察される例（10・11）も存在しており、スタンプ形石器との類似が認められる。こうした例は城山遺跡、前橋市下鶴谷遺跡（前原他1985）、八木沢清水遺跡でも確認されており、特殊磨石とスタンプ形石器の機能・用途面での複合的な使用状況が看取される。また、平坦面に敲打痕や凹を有する例（5・6）もあり、凹石との共用関係も認められる。

スタンプ形石器（第99図9） 1点のみで、安山岩製である。典型例とは言えないが、スタンプ形石器の範疇に含まれるものと考えられる。特殊磨石がスタンプ形石器のように欠損（分割）しており、これらの器種の使用上での互換性が推定される。撚糸文土器群に特徴的な石器であり、本遺跡の例も早期のもの推定される。

砥石（第99図12） 2点検出された。牛伏砂岩製であり、粗砥に分類される。図示した12は側縁部が丁寧に研磨され、面取りされている。平坦面には斜め方向に研磨痕が観察される。

D類石器

線刻礫（第99図15） 1点検出されており、結晶片岩製である。扁平な楕円礫の中央部に沈線が一周する。平坦面には研磨痕と敲打痕が認められ、砥石の可能性もある。こうした線刻礫は撚糸文を主体とした埼玉県前原遺跡で検出されている（西井19）。前原遺跡では岩偶として報告されている礫に線刻が巡る石器も数点検出されており、本遺跡の例との類似性が認められる。

E類石器

磨製石斧（第99図16） 2点検出されている。16は輝緑凝灰岩製の扁平な小礫を素材とし、形状

を大きく変えることなく、刃部・側縁部を中心に研磨して製作されたものである。こうした礫素材の小形磨製石斧は早期燃糸文系土器群に伴ってしばしば検出されるものであり、本遺跡でも早期の土器群に伴うものとみられる。図示しなかった例は磨製石斧の中央部のみ残存しているものであり、同様に礫を素材としたものである。

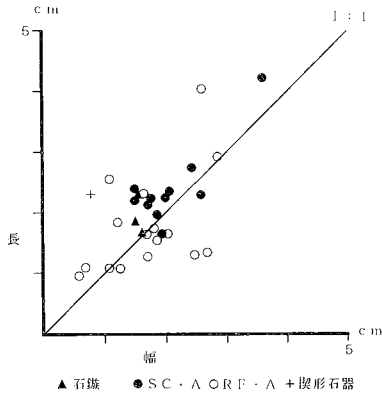
2) 石器製作について

本遺跡の石器群の剥片剥離について整理してみると、石鏃・スクレイパーA類などを目的器種として、剥片A類を作出するものと、三角錐形石器・スクレイパーB類等を目的器種として、剥片B類を作出するものに大別される。それぞれの主要な石器と剥片の長幅比をグラフ化すると、第275図のように示される。

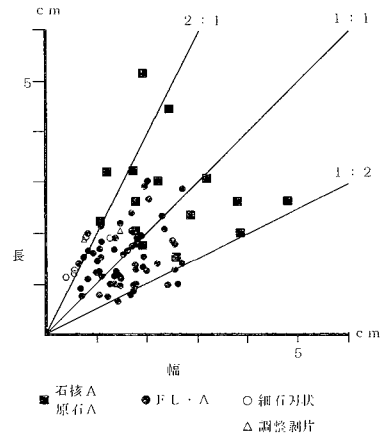
剥片A類は石材I類（黒曜石・チャート・硬質頁岩）を用いることを共通点としている。80点検出されており、チャートが少量含まれるものの、97.5%が黒曜石である。グラフ1に示されるように、1～3cmの長幅比が等しい剥片が主体をなしている。石鏃やスクレイパーA類（小形）、リタッチド・フレイクA類は一連の剥片剥離工程により作出されたものとみられるが、剥片A類は狭義の石器に比べ小振りのもが多い。また、リタッチド・フレイクA類は石鏃やスクレイパーA類に比べ剥片形状にばらつきがあり、素材剥片の選択基準が緩い。こうした器種による選択基準の違いは、石鏃→スクレイパーA類（小形）→リタッチド・フレイクA類の順に剥片A類の中から形状の整ったものが目的剥片として選択されていったことが要因と考えることができる。すなわち、本遺跡での剥片A類の剥片剥離は、石鏃を優先目的器種としたものであると言えよう。

剥片B類は193点検出された。また、石核B類は8点検出された。これらは石材II類（頁岩）を主体とし、一部石材I類（黒色安山岩）・石材III類（安山岩）を含む一群である。頁岩は全体の89.6%を占める。B類では長幅比1：1前後の剥片を作出している。このB類に該当する石器群は早期のものと前期のものが混在しているが、前期のものは狭義の石器では目立つものの、剥片・石核を含めた広義の石器全体の中では少数となり、さほど目立たなくなると推測される。そこで、B類全体の様相を調べることにより、早期の石器群の特徴について検討してみたい。すでにスクレイパーB類の項で述べたが、スクレイパーB類では礫器状の石核から剥離された小形の剥片を素材とする一群と、比較的大形の剥片を素材とする一群が存在する。前者は本遺跡において一連の剥片剥離工程が推定される一群であり、剥片B類の多くはこうした一連の剥片剥離作業により剥離されたものである。したがって、前者の剥片剥離工程を明らかにすることで、早期の石器群の特徴を抽出することができる。また、後者の中に前期のスクレイパーが混在している可能性が高い点に留意し、第275図3のグラフを見てみたい。

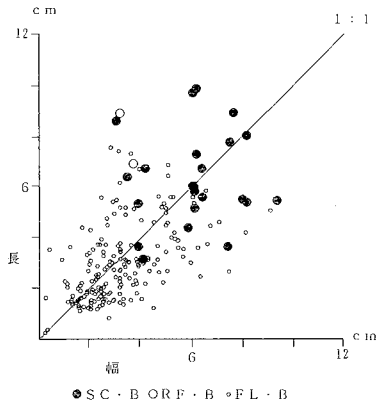
第275図3のグラフではスクレイパーB類は一つの緩やかなまとまりを形成する。前述したスク



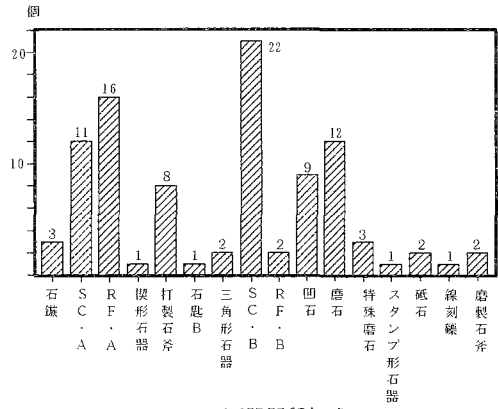
1・A類石器の長幅比



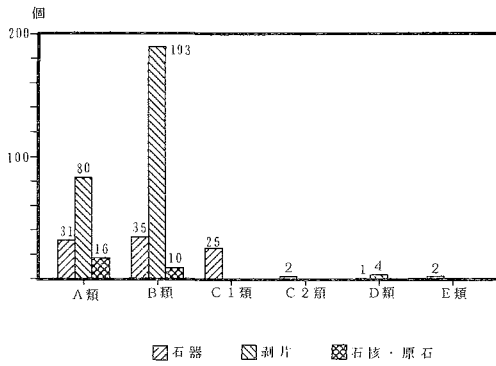
2・剥片A類・石核A類の長幅比



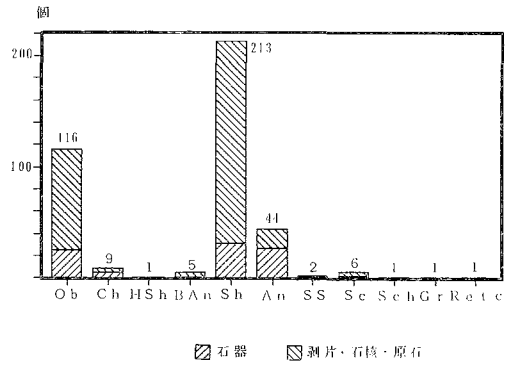
3・スクレイパーB類等の長幅比



4・石器器種組成



5・石器器種組成



6・石器器種組成

レイパーの2群はグラフ上では明確に区別できないが、スクレイパーB類がもつ機能・用途により、時期に関係なく一定の大きさを要求されていることによると考えられる。また、比較的大形のスクレイパーB類は本遺跡以外の場所で剥離された剥片を素材としており、遺跡内での剥片剥離からは除外される。

こうした制約を考慮した上で再度グラフをみると、本遺跡での剥片B類の剥片剥離工程を復元すると、以下のように工程を推定することができる。

石核（礫器状）→小形剥片（2～4 cm；長幅比1：1）
→調整（押圧剥離・直接打撃；片面加工）→スクレイパー

ここで確認された簡易な剥片剥離技術は小形のスクレイパーB類を生産する技法として、早期段階において、普遍的にみられるものである。また、本遺跡では復元することができなかったが、比較的大形のスクレイパーB類を製作する技法も併存しており、両者がスクレイパーB類を多用する当該期の石器群の特徴である。

このスクレイパーB類製作技術は前期中葉（黒浜期）まで継続することが知られており（松村1985、大工原1990・1993）、比較的息の長い伝統的技法と言えよう。

3) 石器組成と石器群の特徴

金井谷戸遺跡から検出された石器は全部で399点であり、このうち狭義の石器は96点を数える。この石器群は個々の器種を検討した結果からも、石器製作技術について検討した結果からも一部前期の石器を含むものの、全体としては押型文土器群を主体とした早期前半段階の石器群の様相を反映していると考えてよからう。そこで、本遺跡の石器群の石器・石材組成について若干検討し、石器群の特徴についてまとめてみたい。

押型文に伴う器群の様相については、すでに古くから多くの研究があり、斎藤幸恵氏により総括されている（斎藤1987）。また、県内で当期の石器群の特徴を示すものとしては、八木沢清水遺跡、城山遺跡出土資料が量的に安定している。これらの資料を参考に本石器群の特徴について検討してみたい。

第275図5は石器種別組成である。これをみるとA類・B類とも石器より剥片が多く、「石器製作的活動パターン」を示しており、本遺跡で石器製作が頻繁に行われたことを示している。

また、器種別組成ではスクレイパーA類・同B類、凹石・磨石が多い。しかし、石鏃は非常に少ない。中部地方を中心とした押型文段階の石器群では、石鏃・楔形石器などA類石器が多いことが特徴とされているが、ここでは著しく少ない。押型文土器を多出した八木沢清水遺跡でも、石鏃は少なく、同様な傾向が認められる。このように石鏃が少ない点は、本来撚糸文土器群の石器組成の特徴である。また、本遺跡と同形態の鋳形局部磨製石鏃は八木沢清水遺跡では数点検出

されているが、城山遺跡では全く検出されておらず、これまで指摘されているとおり、押型文土器群に供伴するものと考えられる。

そして、特殊磨石も押型文土器群に伴う石器として従来より注目されており、本遺跡・八木沢清水遺跡でも一定量検出されており、押型文土器群と関係を有していると推定される。しかし、撚糸文土器群を主体とする城山遺跡、条痕文系土器群を主体とした下鶴谷遺跡でもまとまって検出されており、必ずしも押型文土器群に限定されるものではないようである。

さらに、撚糸文土器群と密接な関係をもつスタンプ形石器は本遺跡では少なく、多量検出されている城山遺跡の石器組成とは大きく異なる。やはり、スタンプ形石器は撚糸文土器群と強い関係を有していると言えよう。

以上のように、本遺跡の石器群は、押型文系と撚糸文系の石器群の折衷的な特徴を有しており、単純な構成ではない。八木沢清水遺跡でも全体像は不明ながらも、同様な傾向を示していると推測される。こうした特徴を群馬県地域の押型文土器群に伴う石器群の様相として認識しておきたい。

また、細石刃状の小剥片が少量出土しているが、これらの小剥片が正真の細石刃であるのか、押型文土器に伴う石器であるのか、現段階では判断つきかねるが、今後とも出土状態に留意しておく必要がある。

次に、石材別組成をみると、黒曜石・頁岩・安山岩が多く、他の石材は極わずかである。黒曜石は長野県の実産地から入手したものと推定され、遠隔地との交流があったことが理解される。しかし、それ以外はほとんど半径10km以内で入手可能な石材であり、活動領域も広域に及ぶものではなかった可能性が高い。 (大工原 豊)

(2) 小結

金井谷戸遺跡では縄文時代早期前半期を中心に前期後半まで断続的に利用された遺跡であり、その中心は押型文段階（樋沢Ⅱ式）である。この時期には住居址・集石土坑などの遺構が構築され、キャンプサイト的な小規模な集落が形成されたことが判明した。

押型文段階の遺構の配置をみると、住居址及び住居址と推定される竪穴状遺構・集石土坑が1基ずつ東西に並んで位置している。しかし、住居址と集石土坑の間には新旧関係が認められ、すべての遺構が同時併存していた可能性は低い。また、押型文土器はほぼ同一時期のものであるが、撚糸文系土器群が混在している。そして、遺跡内で剥離された剥片量が約300点と少なく、長期間継続して生活していた可能性が低い。このような状況から、早期段階では小集団がこの場所

を繰り返し利用していたものと推定される。

また、集石の礫と石器石材は、黒曜石を除き大部分碓氷川及び鑓川流域で入手可能であり、土器胎土中にも鑓川流域に産出する結晶片岩が混入されていることから、この時期の集団の活動領域は半径10km圏を大きく越えるものではなかったと推定される。したがって、一定の範囲内を頻繁に移動しつつ、その領域からは大きく逸脱せず、繰り返し同じ場所に回帰する生活様式を有する当期の集団の行動パターンを看取することができる。 (大工原 豊)

1 天神原遺跡

(1) 縄文時代の遺構と遺物

遺構

住居

本遺跡では住居址は11軒検出された。内訳は前期2軒、中期末～後期前半8軒、不明1軒である。このうち、中期～後期の住居址は柄鏡形及び敷石住居址であり、大きくは連続した同じ時期のものとして捉えることができる。住居址の規模・諸属性については第12表のとおりである。各住居址の形態・特徴と遺物分布状態について説明する。

1号住居址(第101図) 前期後半(諸磯b式新)のものと判断される。隅円方形の住居址が軒重複しており、深い方が新しいと判断される。また、床面に土坑が存在するが、同時期の他の住居址の例からみて、住居廃絶後に覆土中から掘られたものである可能性がある。奈良時代の住居址が2軒、この住居址に重複していたため、覆土上層部は一部攪乱されている。

遺物分布状態(第276図)

【土器】 最下層(4層)は少なく、3層から大量の土器が出土している。廃絶後に第一次埋没土が堆積した後に土器の大量廃棄が行われており、完形に近い土器も多い。また、廃棄の方向は分布の偏在性からみて、南側からと推定される。土器型式はほとんど同じ時期のものであり、比較的短期間に廃棄されたものであると推定される。

こうした遺物出土状態から、パターンA(吹上パターン)(小林1972)と呼称されるものに非常に近いように見える。しかし、本住居址の場合、床面下まで掘り込まれているD1号土坑中にも大量の土器が廃棄されており、しかも完形に近いものが多い。また、第一次埋没土(4層)を検討すると、ロームを主体とした土層であり、土坑掘削時の排土の堆積層と推定される。つまり、この土坑は住居廃絶後土器が廃棄される直前に掘られたものであり、土器の廃棄が直後に行われていることからみて、土器を含む廃棄物を処理するためのゴミ穴と推定される。したがって、住居址の場合では、単なる吹上パターンではなく、次のような過程を経て埋没したと推定される。

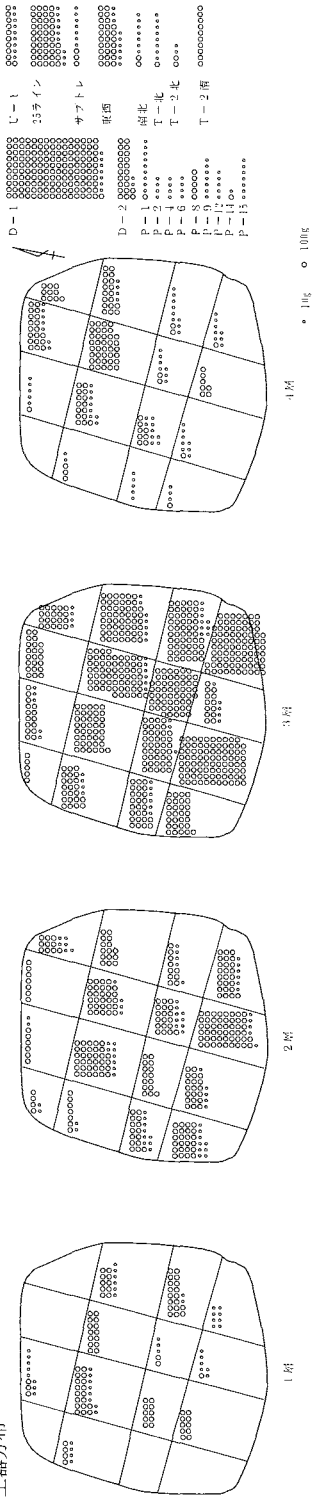
住居の廃絶→4層堆積(第一次埋没土)→土器の大量廃棄→継続的土器の廃棄・流れ込み

↑

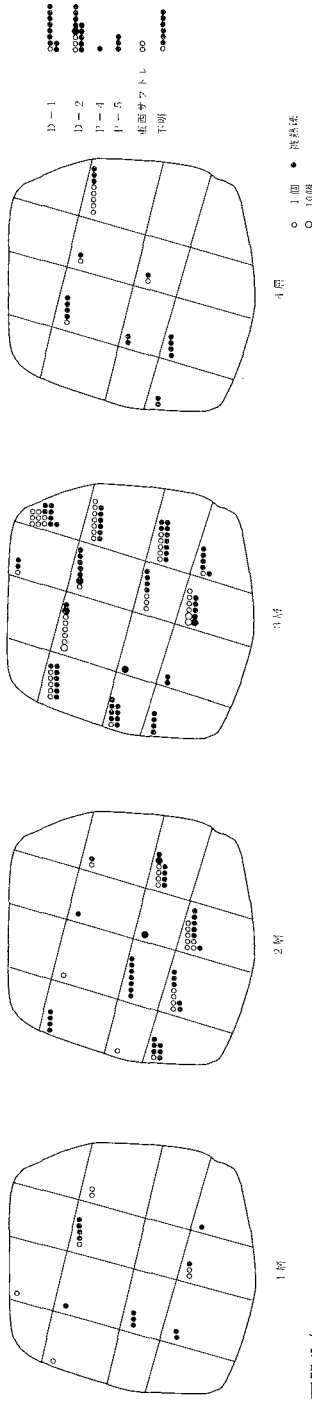
D1号土坑掘込み

【礫】 土器に比べ出土量が著しく少ない。しかし、出土傾向は同じであり、一緒に廃棄された

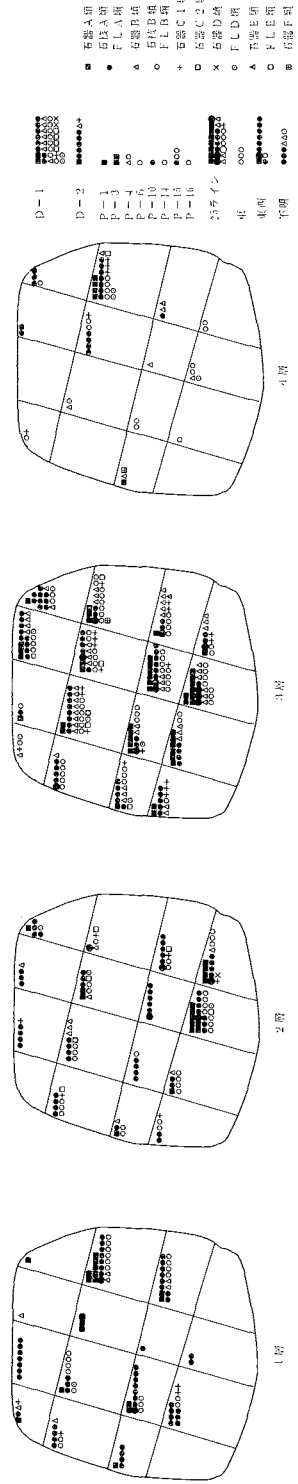
土器分布



碟分布



石器分布



第276図 J-1号住居址遺物分布図

ものと判断される。

【石器】 土器に比べ少ないものの、分布状態は一致しており、土器・礫と一緒に廃棄されたものであると判断される。出土した石器は多様であり、当該期の石器器種を網羅的に含んでおり、良好な石器組成を示す資料とみられる。

J-2号住居址（第102図） 前期後半（諸磯b式新～c式古）のものと判断される。隅円方形の住居址であり、1度拡張されている。覆土中・下層部まで耕作による攪乱を受けており、遺存状態はあまり良好ではない。

遺物分布状態（第277図）

【土器】 最下層である3層が最も多く、上層になるにつれて減少する。分布では各層とも中央から北寄りに集中し、同じ傾向を示すことから、一連の廃棄活動によると推定される。また、拡張の際の埋め土である4層の土器は非常に少ない。

【礫】 土器の同じ出土傾向を示すものの、量的には非常に少ない。

【石器】 土器と同じ出土傾向を示しており、量的にはやや少ないが、一緒に廃棄されたものと推定される。

J-3号住居址（第103図上段） 中期終末～後期初頭（加曾利EIV式～称名寺式）のものと推定される。地表から浅い部分に存在していたため、耕作等により著しく攪乱を受けていた。本来は柄鏡形を呈していたと推定されるが、南半分が削平され、敷石も一部抜き取られており、ほとんど原形をとどめていない。それでも、住居址の形態から、本遺跡の中期～後期集落の住居址では最古と推定される。

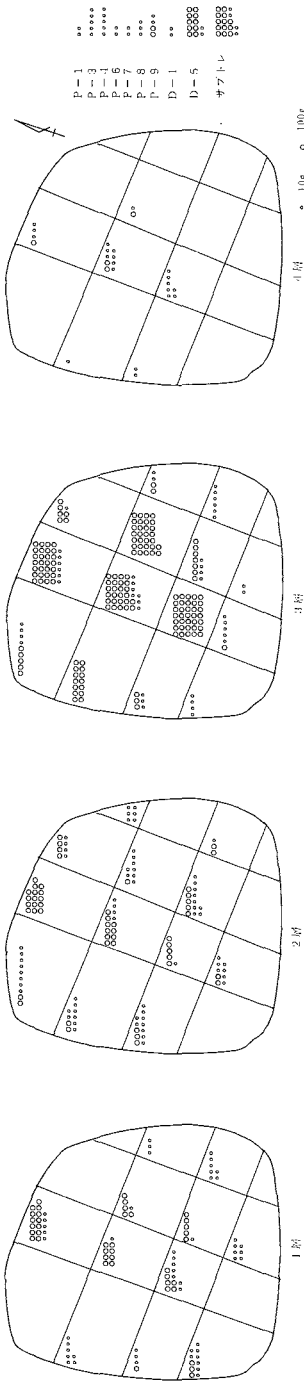
遺物分布状態（第278図）

【土器】 南半分は削平されてしまっていたため、北半分のみから遺物が検出された。遺存状態は悪く、分布状態について検討することはできない。

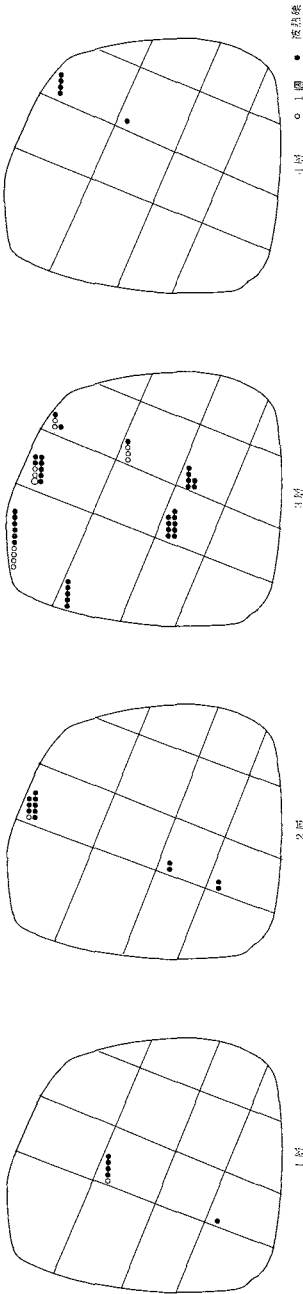
【石器】 土器と同様、遺存状態が悪いため、分布傾向は検討することができない。剥片A類と磨石が多い傾向がある。

J-4号住居址（第104図） 後期前葉（堀之内1式）のものと推定される。本来は柄鏡形を呈する敷石住居址であったと推定されるが、敷石はすべて抜き取られている。敷石の抜き取りは覆土からみて、最近のものではなく、住居廃絶後それほど時間が経っていない段階であったと推定される。

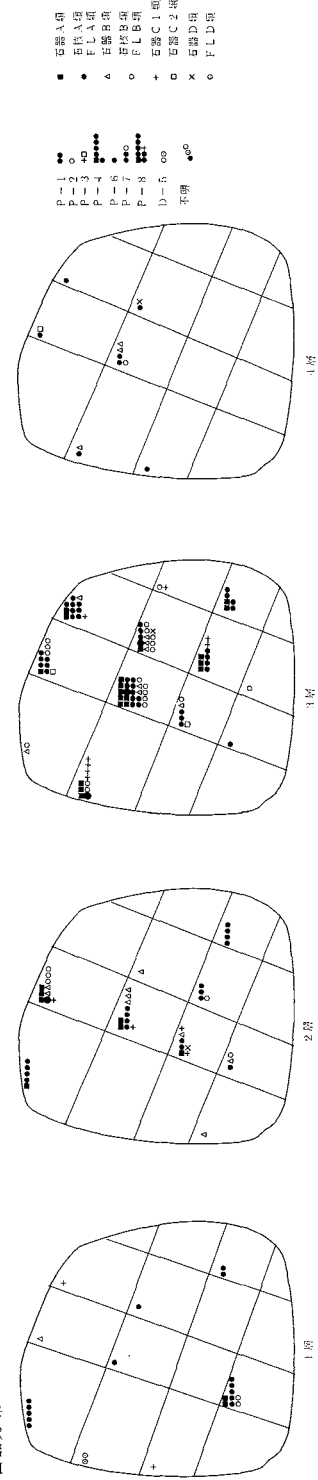
土器分布



礎分布

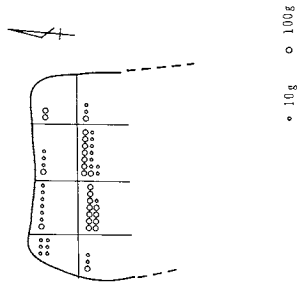


石器分布



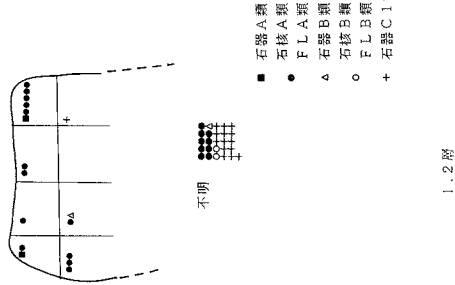
第277図 J-2号住居址遺物分布図

土器分布
J-3住



1.2層

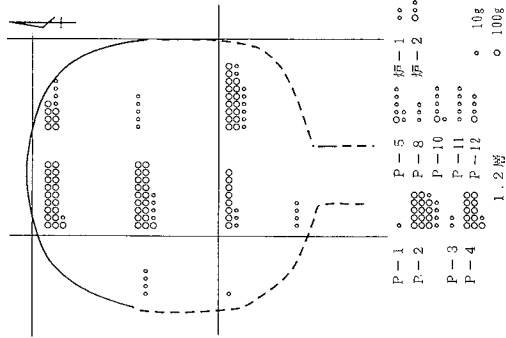
石器分布



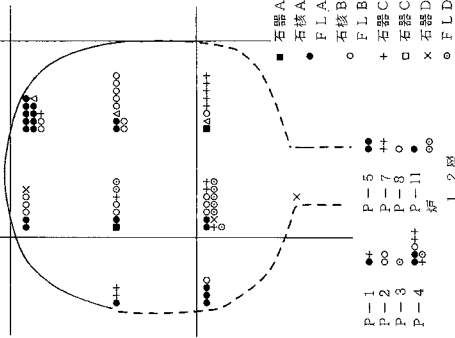
1.2層

土器分布

J-4住

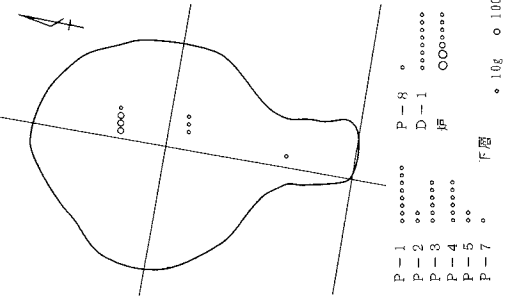


石器分布



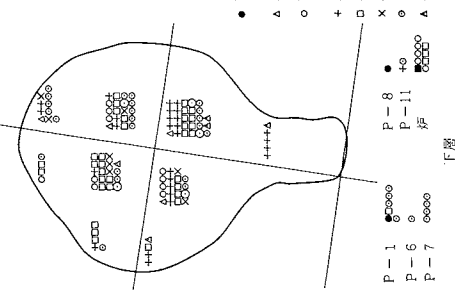
土器分布

J-5住



上層

石器分布



上層

第278图 J-3・4・5号住居址遺物分布图

遺物分布状態（第278図）

〔土器〕 全体に分布し、特に偏在傾向は認められない。

〔石器〕 剥片A類が北東部にややまとまる。また、凹石が南東部に集中する傾向が認められる。全体に出土量は少ない。

J-5号住居址（第105図） 後期前葉（称名寺2式～堀之内1式）のものと判断される柄鏡形敷石住居址である。遺物包含層（Ⅲ層～Ⅳ層上部）を除去した後、Ⅳ層中部で平面プランが確認された。包含層に覆われていたので、耕作等による攪乱は受けておらず、遺存状態は良好であった。

覆土はⅣ層とほぼ同じで、地山との識別が難しい土層であった。炭化物は少量検出された程度で、焼土は炉址部分以外では検出されなかった。柄部には扁平な河原石を敷き、住居内には壁に隣接した支柱穴に沿って円形に多量の礫を巡らす。また、床面にも同様に小礫が多量分布している。また、これらの小礫よりかなり高いレベル（40cm）で柱穴に沿って大形の礫が点々と存在している状態が確認された。遺物・礫等は全面から検出されているが、土器では大形破片は少ない。一方、小破片は床面及び柱穴に沿って散乱した状態で検出されており、土器片が小礫と同じように転用されていたものが多いものとみなされる。

こうした「周礫遺構」（金井1984）・「周縁部環礫」（石坂他1985）・「環状小礫配石」（本橋1988）と呼称される配石を施す例は、前橋市荒砥二之堰遺跡で10軒まとまって検出されている。

従来、柱穴に沿って検出される例については、留意されているが、この住居址の場合、小礫が床面部分にも大量分布しており、検出レベルもほぼ同じであることから、貼り床中に小礫を混入したものであった可能性がある。なお、小礫には表面に研磨痕が観察される安山岩製の板状礫が多量含まれている。形状から砥石（中砥・仕上砥）に分類されるものであるが、この板状礫は本来住居の敷石として用いていたものを破砕して貼り床材として転用していた可能性もある。以上のように、「周縁部環礫」は住居址廃絶後に形成されたものではなく、住居構造材の一部であったと判断される。

こうした「周縁部環礫」については、すでに多くの研究者により分析・検討が行われており、住居使用時の遺構としての認識（石坂1985・本橋1988・秋田1991等）と、廃絶後の祭祀遺構とする考え方（山崎1981・金井1984）が示されているが、本住居址の例からも前者の認識が整合性を得ていると判断される。

また、柄部敷石の中央部が帯状に抜けているが、掘り方からも、本来敷石がなかったとみられる。そして、よく見ると西側が少し開いている。このように柄部敷石の片側が抜けているものは、下宿東遺跡J-10号住居址でも認められ、小諸市三田原遺跡3号住居址（宇賀神他1992）のように柄部の横から出入りする入口形態であった可能性がある。

遺物分布状態（第278図）

【土器】 掘り込み面がはっきりしなかったため、グリッド出土の土器も含めて分布傾向について検討してみた。全体から比較的多量検出されており、偏在傾向は認められない。

【石器】 土器と同様、全体に多量分布するが、特に偏在傾向は認められない。砥石が多いのは、扁平な敷石用材が含まれているためと推定される。それ以外には凹石がやや多い。また、剥片D類（結晶片岩）が多いが、これは敷石用材であり、廃棄された石器とは性格が異なる。

J-6号住居址（第103図上段） 炉体土器から後期前葉（堀之内2式）のものと同判断される。I a層を除去したところ（IV層上部）で炉址が検出された住居址であり、非常に浅い部分に床面が存在していた。平面プランは確認することができなかったが、石囲炉の遺存状態は良好であった。また、支柱穴は確認することができなかった。ちなみに、隣接する古墳時代のH-5号住居址は、深い竪穴を有しており、床面はV層下部に及んでいる。したがって、J-6号住居址が元々極めて浅い竪穴であったか、竪穴のない平地式住居址であったと判断される。

J-7号住居址（第106図） 中期終末～後期前葉（加曽利E4式～堀之内1式）のものと同推定される。この住居址も地表から浅い部分に存在していたが、上部に薄く遺物包含層（Ⅲ層～IV層上部）が存在し、これを除去した後に敷石・平面プランを確認した。元々掘り込みは非常に浅かったとみられる。地表面から浅かったものの、遺存状態は比較的良好であった。敷石に接して浅い窪みが検出され、これが炉址の可能性もあるが、他の住居址のようなはっきりした炉址を検出することができなかった。支柱穴は壁に隣接して巡るタイプであるが、東側では確認できなかった。

また、柄部敷石の西側が大きく抜けており、J-5号住居址同様入り口が柄部西側に存在していた可能性がある。

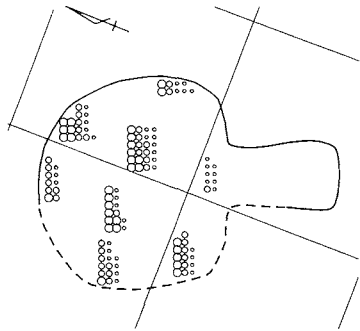
遺物分布状態（第279図）

【土器】 掘り込み面がはっきりしなかったため、グリッド遺物の分布状態により検討を行った。調査区内でも、住居址部分には遺物が集中しており、他の部分とは区別できる状態であった。しかし、住居址内での偏在性は認められない。

【石器】 土器と同様に住居址部分には石器の集中が認められる。しかし、住居址内での偏在性は認められない。剥片A類・B類が多い傾向がある他、砥石も多い。

J-8号住居址（第107図） 中期終末～後期初頭の住居址と同推定される柄鏡形敷石住居址である。住居址覆土の上部を後期後半の遺物包含層（Ⅲ～IV層上部）が覆っており、遺存状態は良好であった。住居址の複雑な重複により調査時には煩雑な様相を呈していたが、2軒の住居址の柄部敷

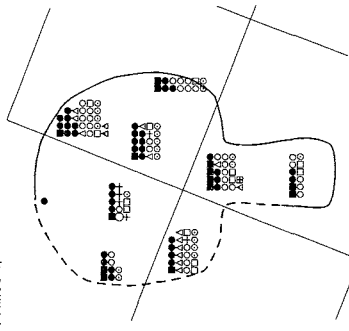
土器分布 J-7住



P-1 ○
 P-2 ○
 P-3 ○
 ○ 10g
 ○ 100g
 ○ 1000g

上層

石器分布



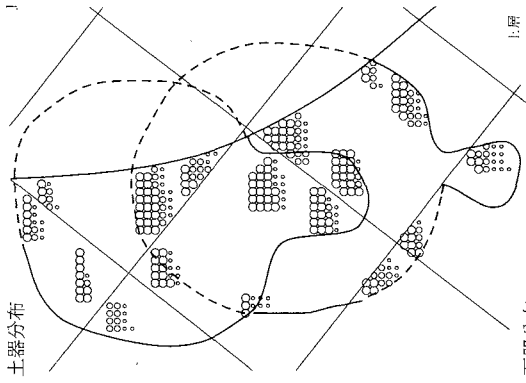
■ 石器A類
 ● F.L.A類
 ▲ 石器B類
 ○ 石器B類
 + F.L.B類
 □ 石器C1類
 × 石器C2類
 ⊕ 石器D類
 ⊖ F.L.D類
 △ 石器E類
 ⊞ 石器F類

P-2 ●
 P-13 ●
 P-14 ●
 D-3 ●
 不明 ○
 ○
 ○
 ○

上層

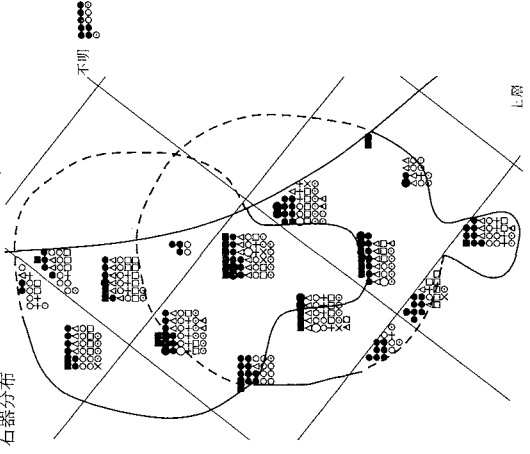
土器分布

J-8・9住

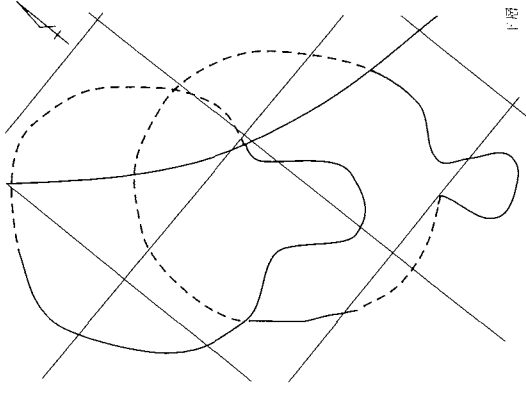


上層

石器分布



上層



P-1 ○
 P-4 ○
 P-5 ○
 P-8 ○
 P-13 ○
 P-14 ○
 D-1 ○
 D-2 ○
 D-3 ○
 不明 ○
 ○
 ○
 ○

○ 10g
 ○ 100g
 ○ 1000g

上層

P-5 □
 P-8 +OAS
 P-9 ○
 P-11 ○
 P-12 +
 P-14 ○
 D-3 ○
 不明 ○

● 石器A類
 ▲ F.L.A類
 △ 石器B類
 ○ F.L.B類
 + 石器B類
 □ 石器C1類
 × 石器C2類
 ⊕ 石器D類
 ⊖ F.L.D類
 △ 石器E類
 ⊞ F.L.E類

上層

第279図 J-7・8・9号住居址遺物分布図

石は一部重なっており、このことから住居址の重複が判明した。

下部のJ 8 a号住居址が古く、上部のJ 8 b号住居址が新しい。また、さらに新しいJ 9号住居址とも重複しており、J 8 a・8 b号住居址の炉址はこの住居址の柄部と重複し原形を留めていない。J 8 aの炉址は炉石の抜き取り痕が検出され、本来石囲炉であったと推定される。より床面の高いJ 8 bの炉址は焼土の詰まった浅い掘り込みが確認されたのみであり、本来の炉址の形態は不明である。竪穴の掘り込みは浅く、特にJ 8 bは南側の壁ははっきりしなかった。支柱穴はいずれの住居址も壁に沿って巡るタイプである。

遺物分布状態（第279図）

【土器】 J 9号住居址と半分以上重複しているため、遺物がどちらに所属するのか、はっきりしない。ただし、住居址部分には遺物の集中傾向が顕著であり、それ以外の部分とは遺物分布状態がはっきり異なっている。住居址内での土器の偏在性は認められない。

【石器】 土器と同様遺物が集中して大量検出されている。しかし、住居址内での量的偏在と、特定の遺物の偏在は認められない。

J-9号住居址（第108図） 後期初頭（称名寺2式）の柄鏡形敷石住居址である。J 8 a・b号住居址と重複しており、本住居址が最も新しい。

支柱穴沿いに「周縁部環礫」が存在し、柄部の縁に小礫が配列されている。支柱穴と壁の間には小段差が存在している。本住居址の「周縁部環礫」はJ 5号住居址とは異なり、床面全体には認められなかった。炉址は隅円方形の掘り込みの中に構築された石囲炉で、炉体土器（第150図1）が設置されていた。隅円方形の掘り込みの縁には対に小ピットが存在し、炉に関係のある遺構と推定される。柄部先端部付近には埋設土器（第150図2）が存在する。この住居址には比較的大きな土坑・ピットが重複しており、部分的には覆土の攪乱が生じている。また、住居址覆土の上部は後期後半の遺物包含層（Ⅲ～Ⅳ層上部）に覆われている。

遺物分布状態（第279図）

【土器】 J 8号住居址と同様に大量の土器の集中は顕著である。

【石器】 土器と同様に大量の石器の集中が認められるが、偏在性は認められない。

J-10号住居址（第109図） 炉址が検出されたことから、住居址として認識して調査を行ったが、明確な平面プラン、掘り込みは確認することができなかった。炉址の形態・支柱穴の配列からみると前期前半期の住居址のようでもあるが、この部分から出土した遺物は晩期を主体としている。したがって、この住居址の所属時期についてははっきりしないものの、前期の住居址が削平された後、晩期の遺物包含層が形成されたものと推測される。

前期前半期の遺物は削平されたため、全く検出されていない。

J-11号住居址（第110図） 調査区の端で確認され、周堤帯の下部にあったことから十分に調査を行うことができなかったが、炉体土器（第150図3）が検出されたことから後期初頭（称名寺1式）の住居址と推定される。平面形は不明であるが、同時期の住居址の例から円形または柄鏡形と推定される。

出土遺物は少なく、分布の傾向については、はっきりしない。

（大工原 豊）

住居址名	平面形態	規模		主柱穴 深さ	補助柱穴 本数	炉址 本数	主軸方向 形態	時期	備考
		長軸	短軸						
B区J-1a	隅円方形	(5.1)	(4.3)	35	6	4	N-5°-W	諸磯b式	J-1b・J-1c号住
J-1b	隅円方形	(6.3)	(5.6)	80	6	7	N-17°-E	諸磯b式	J-1a・J-1c号住
J-1c	隅円方形	6.0	6.0	80	6	12	N-4°-W	諸磯b式	J-1a・J-1b号住
D区J-2a	隅円方形	5.4	5.2	80	7	4	N-10°-W	諸磯C式	J-2b号住と重複
J-2b	隅円方形	7.3	6.6	60	4	2	N-10°-W	諸磯C式	J-2a号住と重複
A区J-10	-	(5.2)	(4.8)	-	-	-	石囲N-40°-W	前期前半か？	
J-11	-	-	-	-	-	-	-	称名寺1式	炉体土器

住居址名	平面形態	住居部		規模 深さ	柄部		柱穴 本数	付帯施設 炉
		長軸	短軸		長さ	幅		
D区J-3	柄鏡形	-	(4.5)	15	-	-	-	石囲
D区J-4	柄鏡形	(6.0)	5.6	15	(1.1)	(1.2)	36	地床
D区J-5	柄鏡形	5.2	4.8	10	(2.2)	1.9	13	石囲 炉体土器
C区J-6	-	-	-	-	-	-	-	石囲
C区J-7	柄鏡形	(4.3)	(4.2)	10	(2.2)	1.9	5	-
C区J-8a	柄鏡形	(5.1)	(5.1)	10	(1.6)	1.3	16	石囲
J-8b	柄鏡形	(5.7)	(5.5)	-	(1.7)	(0.5)	12	-
C区J-9	柄鏡形	(5.8)	(5.5)	-	2	1.8	9	石囲 炉体土器

住居址名	敷石		主軸方向	時期	備考
	敷石	埋設土器			
D区J-3	奥壁部（一部抜き取り）	-	N-3°-W	加曾利E4式～称名寺	
D区J-4	抜き取り	-	N-6°-W	堀之内1式	
D区J-5	周縁部還礫（床面全体）	-	N-3°-E	称名寺2式～堀之内1式	
C区J-6	柄部	-	N-6°-E	堀之内2式	
C区J-7	柄部	-	N-20°-W	加曾利4式～堀之内1式	
C区J-8a	柄部	-	N-3°-W	中期終末～後期初頭	J-8b号住・J-9号住と重複
J-8b	柄部	-	N-20°-W	中期終末～後期初頭	J-8a号住・J-9号住と重複
C区J-9	周縁部還礫	柄部先端部	N-36°-W	称名寺2式	J-8a号住・J-8b号住と重複

第12表 天神原遺跡住居址観察表

掘立柱建物址・柱穴群・柱穴列

ここでは柱穴が閉じた配列の遺構を掘立柱建物址として扱うことにした。しかし、現段階では、上部構造物が建物であったのか、屋外木柱列であったのか不明であり、建物址に限定されるものではない。また、柱穴の配列が閉じていない状態のものを柱穴群として区別した。HT-3号柱穴群は調査区界に位置しており、掘立柱建物址と同じ性格のものである可能性もある。そして、柱穴列としたものは柱穴列が1列しか確認できなかったものであるが、本来は閉じた配列で、掘立柱建物址と近い性格のものであった可能性もある。

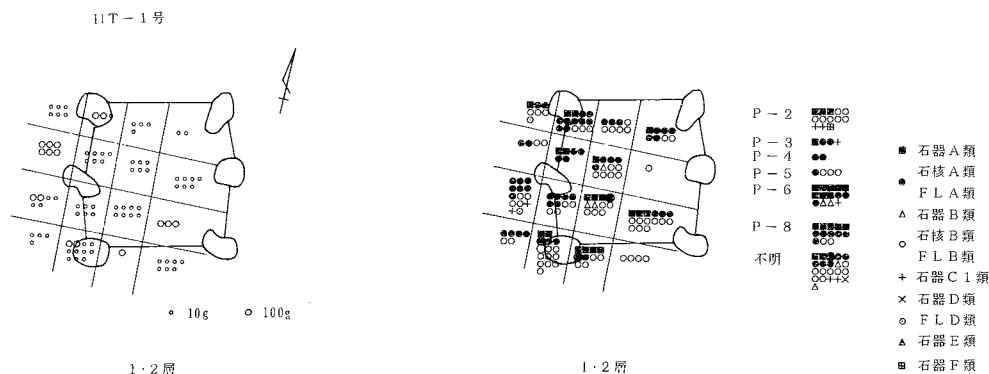
これらの遺構をここでは一括して扱うことにした。なお、位置・規模・特徴等については第13表のとおりである。

HT-1号掘立柱建物址（第111図） 周溝西部に位置し、最初に試掘トレンチで確認された遺構である。配石が円形を呈した状態で検出されたので、調査当初は環状配石遺構（S-1）と考えられていた。しかし、配石の下部から柱穴が検出され、掘立柱建物址であることが判明した。柱穴は3本×2本のやや胴の張る配列である。それぞれの柱穴が3本ずつ重複しており、3度同じ構造物が造られていたことが確認された。最後のⅢ段階では、柱穴の周囲を根巻石状の配石が行われていた。この遺構は「方形柱穴列」とも呼称されるものである。

遺物出土状態（第280図）

〔土器〕 HT-1及びHT-1周辺から検出された土器の数量は少なく、ピットや遺構上面から散漫な状態で検出され、時期を決定し得る土器の数量は限られている。時期の解るものは、ほとんどが晩期前半（天神原式）段階のものである（第150図5・7）。

〔石器〕 土器に比べ石器の出土量は多く261点出土している。特に、石鏃が30点と多い。また、剥片A類・B類も多量出土している。この傾向はHT-1からS-5周辺にかけて同様に認められる。他に石錐・リタッチドフレイクA類・打製石斧・スクレイパーB類・磨石・凹石が出土している。



第280図 HT-1号掘立柱建物址遺物分布図

分布状態をみると、剥片A類・B類は南東部にやや偏在する。それ以外には特に偏在性は認められない。しかし、南東部のピット中には剥片A類・B類ともほとんど検出されておらず、覆土（包含層）の石器と、ピット中の石器は別々の行為によるものと推定される。

また、ピット中の石器では、P-2中からは鉄鉾石が検出されている。石鏃は西側に位置するP-6から7点、P-8から5点まとまって検出されている。また、東側に位置するP-1・2・3からは磨石・凹石・石皿が数点検出されている。（これらは遺物整理中に行方不明となってしまう、点数と器種は不明である）このように西側に位置するピットと東側に位置するピットでの遺物の偏在性や、特殊な遺物が出土していることから、意図的に入れられた可能性が高い。

HT-2号掘立柱建物址（第137図） S-2号石棒祭祀遺構の周囲を囲むようにほぼ円形に柱穴が配列しており、この遺構を覆っていた構造物と推定される。柱穴は建物址の規模に比べ小規模であり、HT-1とは上部構造が異なっていたと判断される。

なお、出土遺物については、S-2の項で詳述する。

HT-3号柱穴群（第112図） 本柱穴群の位置は環状列石の中心に当たり、環状列石と密接に関係した建物か木柱列などの構築物が存在していたと推定される。柱穴は2カ所ずつ隣接していることから、少なくとも2度構築されたとみられる。また、本柱穴群は調査区界に存在しており、一部調査区外に及んでいて完掘されていないが、規模・形態等がHT-1と類似しており、同様な構造物であった可能性もある。出土遺物からみて、高井東式期の構築物であると推定される。

この柱穴群はS-15・S-17・S-42・S-13号配石墓と重複関係が認められる。柱穴内に配石墓構成礫が落ち込んでいる、配石がずれている、土層断面が乱れているといった状況からみて、これらの配石墓より柱穴群の方が新しいと判断される。なお、この柱穴群で注目されるのは、中心部に位置するP-3号ピットが東側へ傾いており、周囲2mの範囲の土層が大きく乱れている現象が確認されたことである。これはP-3に立てられていた木柱が強い力により倒されたことにより生じた現象であり、人為的に木柱が抜き取られた可能性が高い。

遺物出土状態

【土器】 P-1からは半完形の高井東式の深鉢形土器（第150図8）が出土している。また、S-42号配石墓に掘り込まれた部分からも高井東式（第154図10）が検出されている。それ以外の柱穴からは加曾利B2式～高井東式が数点検出されている。これらの土器は、P-1出土のものを除き、小破片であり、二次的に混入したものと推定される。

【石器】 柱穴内から検出された石器では、剥片A類が6点と最も多く、他の石器も少量である。いずれも意図的なものではなく、混入したものと推定される。

HT-4号柱穴列・HT-5号柱穴列（第113図） 環状列石の南側に柱穴が密集する区域が存在する。この部分には、本来仮設的な掘立柱建物址が繰り返し構築されたことが推定された。そこで、比較的深く規則的に配列する柱穴列について、検討を行ったところ、同じ方向性をもった2列の柱穴列の存在が確認された。

HT-4号柱穴列は6本の柱穴が約6mに渡ってほぼ等間隔に配列している。また、HT-5号柱穴列は5本の柱穴が3.5mの間不規則に配列している。しかし、これらの柱穴列に対応する位置に存在する柱穴列を抽出することはできなかった。

また、この柱穴列以外に柱穴密集部分には、直径6m程度の楕円形に配列する可能性のあるピット群が存在するが、円形柱穴列と認定できるほどはっきりしていない。

遺物出土状態 配列する柱穴内から検出された遺物を検討すると、加曾利B2式・高井東式の土器片が混入している。また、柱穴密集部分の柱穴内から検出された土器は、ほとんどが加曾利B式であり、配石墓群の形成時期と一致する。しかし、この部分の周溝覆土中から検出される土器は、晩期前半の土器群であり、柱穴中の遺物と時間的差異が認められる。したがって、これら柱穴列及び柱穴群の形成は、後期後半段階を中心とした時期と推定される。そして、その後は柱穴を伴う遺構は構築されなかったとみられる。

また、石器では柱穴内から検出されるものとしては、剥片A類・B類・砥石などが少量検出されている程度であり、特別の傾向は認められない。また、晩期前半の包含層中の石器は比較的少なく、剥片A類がやや多い傾向がある。それ以外には特定の石器の集中は認められない。

（大工原 豊・林 克彦）

遺構名	規模 (cm)		柱穴 (本)		位置	備考
	長軸	短軸	配列	本数		
HT-1 建物址	290	290	2×3		6 周溝部西部	3度構
HT-2 号建物址	600	540	円形		12 S-2号石棒祭祠遺構	
HT-3 号柱穴群	(380)	-	2×2	中心1	(4) 環状列石中心部	2度構
HT-4 号柱穴列	-	-	直線状		6 環状列石南側	等間隔
HT-5 号柱穴列	-	-	直線状		5 環状列石南側	不規則

第13表 掘立柱建物址・柱穴群・柱穴列観察表

配石墓

ここで「配石墓」としたものは鈴木保彦氏の「上部に墓標のごとき配石があり、下部に石棺状の組石をもつ土壇や単なる土壇を有するもの、あるいは上部に配石をもたなくとも、土壇内に立石等による各種の施設を有するものなど」（鈴木1986）という定義に準じた。

この中には「石棺墓」とも呼称される石組を有するもの（Ⅰ～Ⅴ形態）以外に、比較的大形の礫を伴う舟形・長方形の土壇墓（Ⅵ・Ⅵb形態）を含む。なお、本遺跡の場合、人骨は全く検出されておらず、これらの土壇の中には墓ではないものが含まれている可能性は否定できない。しかし、これまでの調査・研究の成果及び、機能・用途の見地から、「墓」と考えられる形態・規模・掘り方を有している。そして、限られた空間に重複しつつ密集して「複数のかたまりが若干の間隔を保ちながら連なっている状態」で「埋葬区（＝群）」（林1977）を構成していることから、「墓」と考えることが妥当であろう。

各配石墓の規模・出土遺物等の特徴は第15表のとおりである。以下、各配石墓について、表では説明しきれない点について、所見を述べることにする。なお、配石墓を構成する礫の積み方・置き方については、古墳に関する用語（尾崎1954）を準用し、以下のように呼称する。

小口積み：長めの石を小口を出して積んだもの

平積み：最大の面を壁面に出して積んだもので、面の割に厚みが小

横積み：中位の面を壁面に出して積んだもの

形態	平面形状	底面	礫の積み方	副室状石組	埋葬区（小群）	数
Ⅰ	大形楕円形	敷石	平積み二段 ＋横積み・小口積み	なし	A群	1
Ⅰb	幅広長方形	地床	平積み一段 ＋横積み・小口積み	なし	H群	1
Ⅱ	長方形	敷石	平積み一段 ＋横積み・小口積み	あり	B群	3
Ⅲ	長方形	地床	平積み一段 ＋横積み・小口積み	一部あり	C群	5
Ⅳ	小形長方形	地床	平積み一段・板状礫 ＋横積み・小口積み	なし	C群	1
Ⅴ	舟形・長方形	地床	平積み一段 ＋横積み・小口積み	なし	D群	7
Ⅵ	舟形・長方形	地床	両端に平積み一段	なし	E群・G群	4
Ⅵb	舟形・長方形	地床	一部に石積み	なし	E群・F群	12

第14表 配石墓の形態と特徴

遺構名	形態	方向	群	内法 (下端)		深さ		掘り方 (上端)		礫数	出土土器の時期
				長軸	短軸	長軸	短軸	長軸	短軸		
S-4	I	N-2° E	A	175	94	55	256	175	178		安行3b 3c
S-6	II	N-21° W	B	183	70	55	265	160	186		加曾利B3-晩期
S-22	II	N-13° W	B	153	73	70	280	164	354		加曾利B3-高井東
S-40	II	N-3° E	B	*101	75	50	*120	120	92		加曾利B2-晩期
S-10	III	S-89° W	C 1	192	81	23	230	105	42		加曾利B3
S-14	III	N-25° E	C 1	170	78	35	*220	148	36		加曾利B2-新地
S-16	III	N-13° E	C 1	*130	79	29	*170	150	18		加曾利B2-B3
S-44	II or III	N-15° E	C 1	*155	120	45	*155	108	?		加曾利B3-高井東
S-13	IV	S-76° W	C 1	110	35	30	175	84	19		加曾利B1
S-7A	III	N-28° W	C 2	*150	65	25	*170	126	22		加曾利B
S-7B	III	S-77° W	C 2	185	80	30	310	150	75		加曾利B1-晩期
S-18	III	N-27° W	C 2	190	95	23	270	160	41		加曾利B
S-19	III	S-71° W	C 2	*83	48	30	*95	78	7		加曾利B1-佐野 II
S-35	III Or V	S-77° W	C 2	210	80	40	243	*115	0		加曾利B
S-36	III Or V	S-82° W	C 2	210	78	32	253	112	0		加曾利B
S-8	V	N-17° E	D	147	63	18	210	104	16		加曾利B3
S-15	V	S-82° W	D	136	50	15	185	80	21		加曾利B
S-17	V	S-88° W	D	163	45	17	210	80	18		加曾利B1 B3
S-20	V	N-85° W	D	168	*70	16	200	*120	10		?
S-42	V	N-88° W	D	*126	*40	23	180	100	7		加曾利B
S-21	VI	N-15° E	E	168	90	7	200	108	2		加曾利B2
S-23A	VI	N-3° E	E	*153	84	23	*180	97	1		加曾利B3
S-23B	VI b	N-90° W	E	145	68	23	160	90	0		加曾利B
S-29	VI b	N-64° W	E	132	*92	25	145	105	0		?
S-30	VI b	N-83° W	E	*150	77	9	*164	90	4		?
S-34	VI ?	N-19° W	E	153	88	25	170	104	3		?
S-24A	VI b	S-52° W	F	168	83	25	195	96	6		高井東
S-24B	VI b	S-53° W	F	*185	100	24	*200	112	!		加曾利B2
S-25A	VI b	N-78° W	F	170	*103	25	193	*114	3		加曾利B
S-25B	VI b	S-65° W	F	217	*82	25	230	*95	3		?
S-26	VI b	N-27° W	F	*130	110	24	*140	130	0		?
S-27	VI b	S-45° W	F	190	*122	25	202	*135	0		加曾利B2
S-33	VI b	S-37° W	F	*175	96	30	*190	110	0		?
S-28	VI	N-13° W	G	185	138	26	248	152	3		?
S-11	I b	N-12° E	H	180	*125	27	234	*160	26		加曾利B1-晩期

計測値の単位はcm、*は現存部分の計測値

第15表 配石臺観察表 (1)

遺構名	土器量 (g)		土製品		主 な 石 器		重 複 関 係	備 考	
	上層	下層	上層	下層	上層	下層			
S - 4	3496	10286	13782	土偶3 ミチュ71	耳飾3	石鏃33石錐5	石鏃7	晩期に再用	
S - 6	2799	1715	4514			石棒4磨石11	石鏃5	晩期に再用	
						石鏃8砥石7打斧6			
S - 22			4823				石鏃8	閉塞石有	
S - 40	1364	200	1564		多孔石4		44→40	晩期に再用	
S - 10			927				玉2	13・16→10	
S - 14			663						
S - 16			375					16→10	
S - 44			404				磨石2	44→40・14	掘り方のみ
S - 13			96					13→10・HT3	
S - 7A			575					19→7A→7B	
S - 7B			1469					7A・20・35→7B	
S - 18			203					18→M-1	貝製品
S - 19			76				石鏃2	19→7A	
S - 35			1395					35→7B	
S - 36			613						
S - 8			214		耳飾1		SCB2		
S - 15			35					42→15→HT3	
S - 17			735				石鏃2	17→HT3	
S - 20			328					20→7B	
S - 42			254					42→15→HT3	
S - 21			14					29→21	
S - 23A			469					23A→23B	
S - 23B			76					23A→23B	
S - 29			148					29→21・30	
S - 30								29→30→34	
S - 34			144					30→34	
S - 24A			766					27→24A→24B	
S - 24B			298					24A→24B	
S - 25A			263					25B→25A	
S - 25B			12					25B→25A	
S - 26			2					26→33	
S - 27			47					27→24A	
S - 33			102					26→33	
S - 28			361						
S - 11			1177		耳飾1		石鏃6	一部攪乱	

上層は晩期に再利用された部分の覆土、下層は埋葬時の覆土を示す。

第15表 配石墓観察表 (2)

1) I 形態の配石墓

S-4号配石墓(第114図・第115図) 周溝部に単独で存在する最大の規模の配石墓である。構造は平積み2段+小口積みであり、傾斜角度も45~55°と緩傾斜であることや、幅広であることなど、他の配石墓と異なる点が多い。平積みは奥行き(控え)が少なく、崩れやすいため、2段重ねにする場合、傾斜角を緩くする必要性があったとみられる。

本来は形態からみて、後期後半段階に構築された配石墓(配石遺構)であったと推定されるが、晩期に環状配石遺構として再利用されている。一般的な配石墓とは異なり、晩期の遺物が多量検出された。覆土も一般的な配石墓のように一度に埋め戻された状態を示しておらず、互層をなす。特に、1層と2層の間には明瞭な境界線が観察され、再利用後も土層堆積状態に変化を及ぼすような変化が生じたものと判断される。

この配石墓が晩期に環状配石遺構として再利用された際には、一度底面敷石まで露出した状態から、3・4層が堆積した時期(再利用1期)、2層が堆積した時期(再利用2期)、1層が堆積した時期(再利用3期)の3段階が存在したことが確認された。しかし、それ以前の使用状態については、再利用の際に覆土が一度除去されてしまったと推定されるため、全く不明である。

遺物出土状態(第281図)

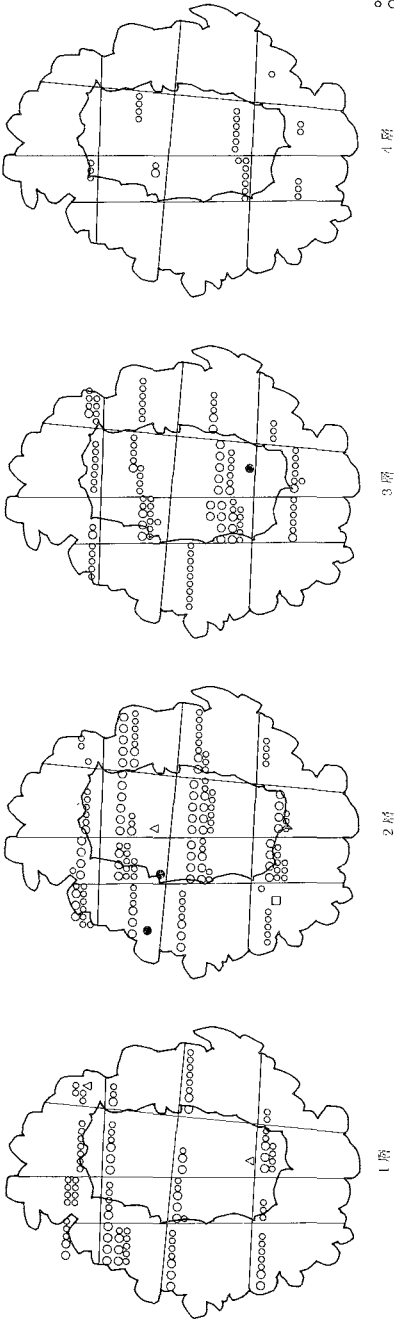
【土器】 土器量の割合を見ると、1・2層(再利用2・3期)が多く、3・4層(再利用1期)では少ない。特に2層が最も多く、逆に4層が最も少ない。また、分布傾向をみた場合、どの層でも特に偏在する傾向は認められない。

第151図1~6は1層出土の土器、7~13は3層出土の土器、14は4層出土の土器である。15~26は層位が明確でないものだが、ほぼ2層出土の土器に含まれる。出土土器には1・17・18のように玉抱き三叉文を施した東北的なものや、2・7・25のように隆帯を施した中部的なもの、8・19のように刺突を多用した在地的なもの等がみられるが、これらは時期的には安行3a式から3c式段階に位置付けられる。14は口縁部に縄文帯による連弧文を施したもので安行3b式と思われる。出土土器はほとんどが晩期のもので、明確に後期の土器と分かるものは1片のみである。したがって、上層から下層まで土器の時期差は見られない。

【土製品】 土偶は1層から2点、2層から1点検出されているが、すべて断片的に一部が残存している欠損品である。分布上特に傾向は認められないが、いずれも再利用2期のものである。また、ミニチュア土器は13区2層から1点出土している。

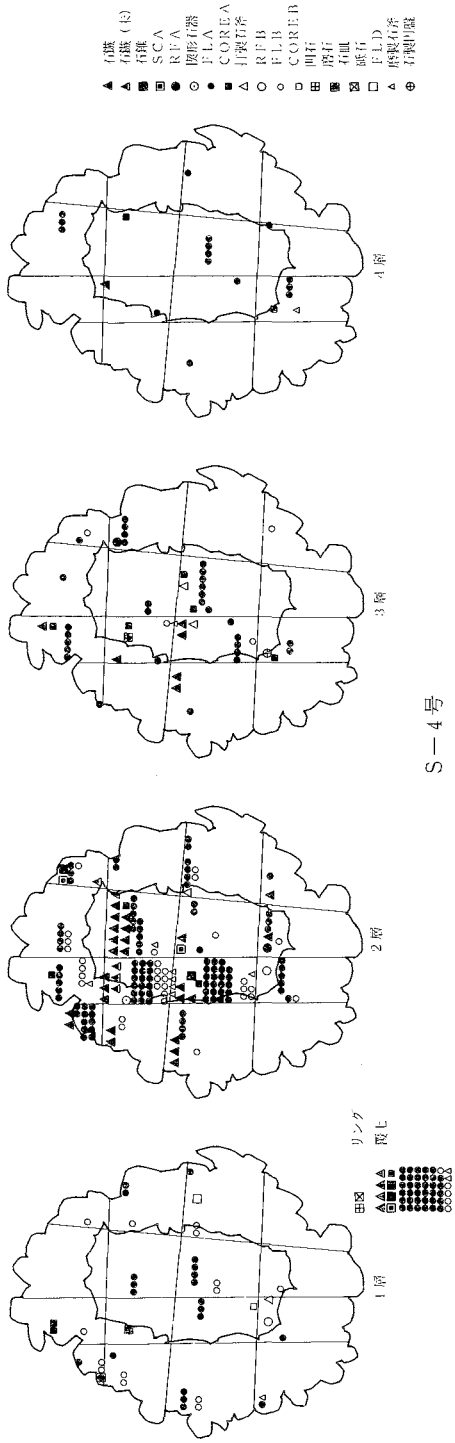
【石器】 層別にみると、2層から大量検出されており、それ以外の層は少ない。土器に比べ2層への集中化傾向が著しい。A類が圧倒的に多く、B類がそれに次ぐ。いずれも石器製作的パターンが顕著である。石鏃(未成品を含む)が圧倒的に多く、しかも2層北半部に集中している。しかし、土器の分布には2層北半部に偏在する傾向は見られず、石鏃の集中化は再利用2期に限

土器分布



○ 土器重量 10g
○ 土器重量 100g
△ 土器
● 耳飾
□ ニニチュア土器

石器分布



▲ 石鏃 (B)
▲ 石鏃
■ SCA
● RFA
○ 磨石
○ FLA
■ COREA
△ 打石斧
○ RFB
○ FLB
□ COREB
□ 同行
田 磨石
田 石皿
□ 砥石
△ 磨石
● 打石斧

S-4号
第281図 配石墓遺物分布図(1)

定された様相とみられる。

さらに、石鏃について時期ごとに比較すると、有茎鏃の比率が再利用1期では14.3%（7点中1点）であるのに対し、再利用2期では38.2%（34点中13点）であり、有茎鏃の割合が大きく異なる。この差異は有意な差異としてとらえることができる。

また、黒曜石を主体とする剥片A類は2層に集中するものの、それ以外の各層から少しずつ出土しているが、特に偏在性はなく、無意図的な混入である可能性が高い。

2) I b 形態の配石墓

S-11号配石墓（第121図） S-4と線対称の位置の周溝部に単独で存在する。内法は幅広であり、大きさではS-4と共通する。小口積み部分は北半分は1～2段残存しているが、南半分はほとんど欠落していた。東辺の配石は最近の攪乱により破壊されていた。また、覆土は一度に埋め戻された状態を呈しており、晩期の再利用の痕跡は認められない。出土遺物からみて、周溝を削平する以前に構築されたものであり、上部の小口積み部分はその際に取り除かれてしまったものと推定される。

遺物出土状態（第283図）

【土器】 出土土器はあまり多くないが、2層からは加曽利B3式の大型の破片（第153図13）が出土している。2層に晩期の土器はみられないが、1層では大洞C1式土器（11）が出土しており、時期差がみられる。これらの土器は二次的な混入である可能性が高い。

【土製品】 耳飾（第202図18）が1点、北端の2区2層から出土している。位置から頭位方向と関係する可能性もある。

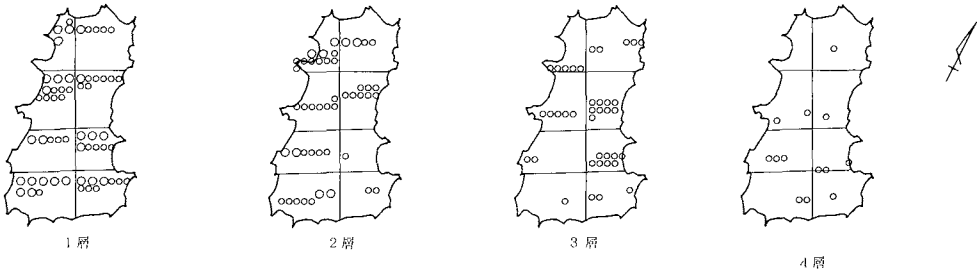
【石器】 石鏃は未成品1点を含め5点出土している。3点は北寄りの1・2区からである。また、6区よりスクレイパーA類が出土している。この配石墓の場合、剥片A類の混入はほとんど認められず、石器（狭義）が大部分である。しかし、石鏃は4点中2点が大きく欠損しており、副葬品とも言い難い。耳飾と同様、頭位方向と関係する可能性もあるが、判然としない。

3) II 形態の配石墓

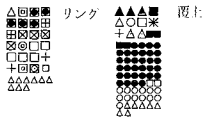
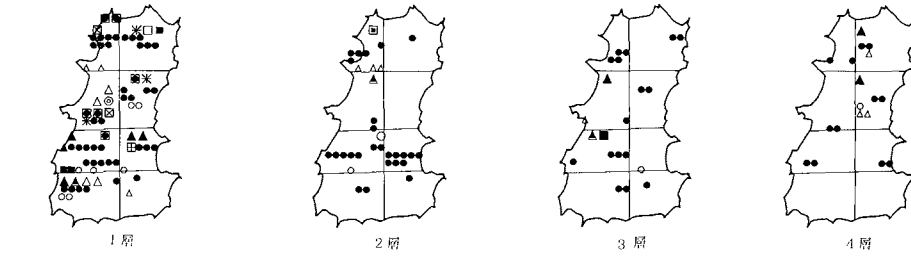
S-6号配石墓（第116図・第117図） II形態の典型例である。土層堆積状態を検討すると、2層との間に不連続面が存在することが判明した。2層以下は土層の特徴から、埋葬時に一度に埋め戻された土と判断されるが、1層の覆土は埋葬時の覆土とは性質が全く異なる。

また、副室状石組は2層にめり込んでいることから、埋葬時の施設であったと判断される。この石組は礫を数段横に並べ、小さな区画を作出したものであり、調査時には流れ込みの礫とは容易に識別できるものであった。

土器分布

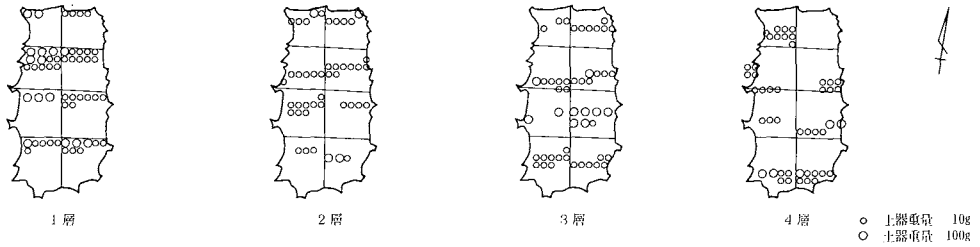


石器分布

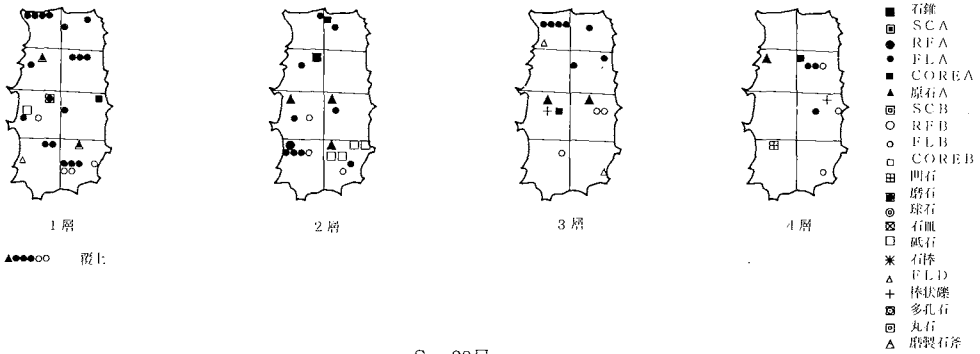


S-6号

土器分布



石器分布



S-22号

第282図 配石墓遺物分布図(2)

底面敷石は丁寧に行われていたが、枕石は存在していなかった。東側面の配石は内側へ押し出されて、下部の平積みが欠落してしまっていた。また、平面形も歪んでしまっているが、本来は長方形であったとみられる。

この配石墓もS-4と同様、晩期に環状配石遺構として再利用されたものとみて間違いない。晩期の使用状態は第117図下段に示した。大形石棒（第225図1）の根本には礫がまとまっており、中央部に立てられていたと推定される。また、石皿・磨石・多孔石などの石器が環状配石の一部として利用されている。これらが晩期に環状配石遺構で行われた行為に伴うものか、機能喪失した石器が単なる礫として転用されたものか、いずれかと考えられるが、全体の比率では少ない磨石が多く存在し、逆に凹石が少ないことから、環状配石遺構での行為との関連する遺物も含まれていると推定される。

【土器】 S-4号配石墓と同じく上層から多く出土し、下層に行くに従ってその数を減じる。第152図1～7は1層出土の土器であるが、2・3のように三叉文を施すものや、5のように三叉状入組文を持つものなど晩期の土器が主体を占める。しかし、2～4層からは明確に晩期と解る土器は検出されず、8・9のように口縁部が折り返し状となる高井東式土器の他に加曽利B式土器が数点見られる。

以上のように、1層と2層の間に土器型式の上からも明確な差異が認められ、調査時の所見と一致し、2層以下は埋葬時の覆土、1層は再利用時の覆土として区別できる。

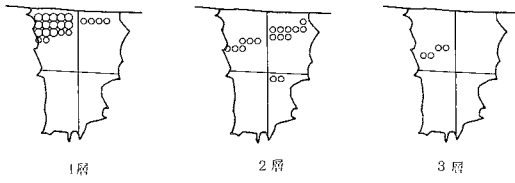
【石器】 再利用時の覆土である1層からは石鏃・磨石・凹石・石皿・砥石・石棒など多様な器種が出土した。このうち多いのは磨石と石鏃である。そして、分布状態をみると、立てられていたと推定される大形石棒を中心に、その北西部には磨石が集中する。これに対し、石鏃（未成品を含む）はすべて南側から検出されており、有意な偏在性が認められる。

2層以下では、石鏃が北側から検出される傾向（5点中4点）があるが、すべて欠損品と未成品であり、副葬品の可能性は低い。さらに、どの層からも黒曜石を主体とした剥片A類が少量ずつ検出されており、これらと一緒に混入した可能性がある。

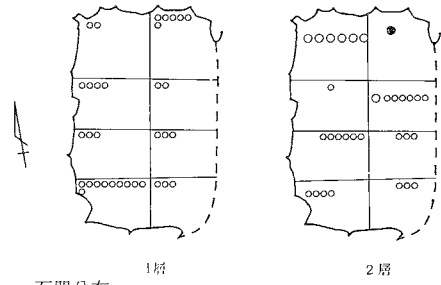
S-22号配石墓（第118図・第119図） この配石墓は晩期の環状列石の下部に存在していた。丁寧に小振りな礫により閉塞されていた（第119図下段左）。閉塞石は埋土最上層に平らに詰め込まれた状態であった。南端の閉塞石は蓋石状の平坦な礫が用いられており、内側に傾いた状態であった（写真図版-3天神原遺跡参照）。また、閉塞石の中には多孔石が含まれていた。閉塞石を取り除いた段階で、北寄りに副室状石組が検出された。

構築材は全体に小振りであり、被熱礫・欠損礫の頻度が高い。そして、本配石墓が最も掘り込みが深く、石段数も多い。また、底面敷石では、頭部の位置と推定される北寄りの場所に緑色の

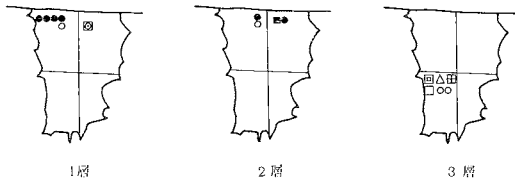
土器分布



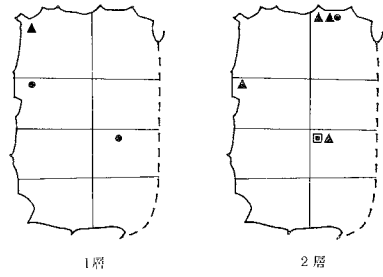
土器分布



石器分布



石器分布

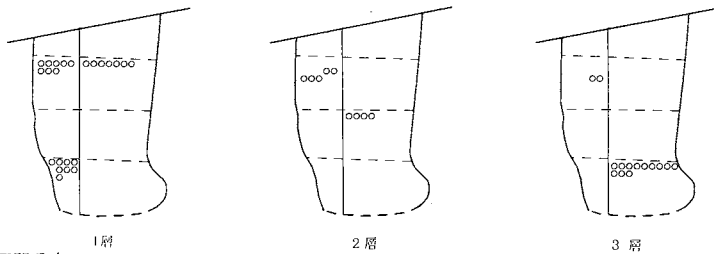


■田□ リング
 □△
 ▲田■+ 覆土
 ●▲

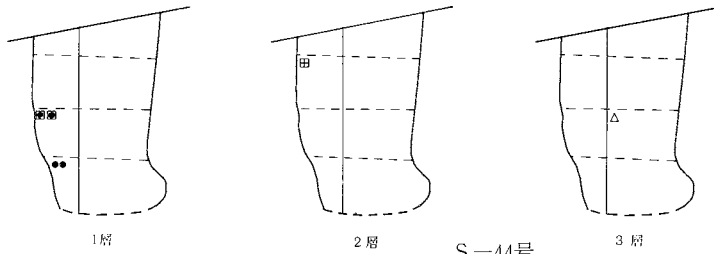
S-40号

S-11号

土器分布



石器分布



○ 土器重量 10g
 ○ 土器重量 100g
 ● 耳飾り

▲ 石鏃
 ▲ 石鏃 (L)
 ■ 石鏃
 □ SCA
 ● FLA
 ● CORRA
 △ 打製石斧
 □ SCB
 ○ FLB
 ■ 明石
 ■ 磨石
 □ 砥石
 ▲ FLD
 + 埴土
 ■ 多孔石

S-44号

第283図 配石墓遺物分布図(3)

結晶片岩が枕石状に埋め込まれていた。この施設から頭位方向は北向きであったと推定される。

遺物出土状態（第282図）

【土器】 1層から4層までほぼ均等に出土している。明確に晩期のものと解る土器はいずれの層からも出土していない。図示したように、後期Ⅴ群土器（第153図1～3・6）が主体を占め、北陸系の後期Ⅶ群土器が数点見られる（4・5）。後期Ⅲ群土器も各層より出土しているが、そのほとんどは加曾利B3式土器である。

【石器】 1層から4層まで少量ずつ出土しており、器種レベルでの有意な偏在傾向は認められない。石器製作的パターンがA類・B類に認められる。そして、黒曜石・チャート製の石鏃・剥片A類などが、各層から少しずつ検出されているが、意図的なものであるかどうか、判然としない。

S-40号配石墓（第120図） 完掘していないので、全体像は不明だが、S-6に近いと推定される。Ⅱ形態の中では最も浅い部分に底面敷石が存在していた。覆土の観察から晩期に閉塞石が除去され、環状配石遺構として再利用されたものとみられる。1～2層が晩期の覆土であり、晩期に再利用した際には埋葬時に遺骸の存在していたと推定される部分まで掘り込んでいる。この配石墓では、多孔石が多く検出されており、環状配石遺構の中心部にも存在していたものなどは、晩期にこの遺構で行われた行為との関連性が窺える。

遺物出土状態（第283図）

【土器】 1層からは輪積み痕を残した鍋状の土器（第153図9）が、2層からは晩期Ⅲ群土器（10）が出土している。図示していないが、3層からも晩期の土器が出土している。明確に後期と解る土器は、1層で加曾利B2式土器が2片確認されている。

完掘していないので分布状態ははっきりしないが、1層が最も多く、下層になるにつれて少なくなる。

【石器】 晩期に再利用した段階の石器と推定される。多孔石・凹石・砥石が検出されている。特に多孔石は環状配石部分から多く出土しており、転用されている可能性もある。

4) Ⅲ形態の配石墓

S-10号配石墓（第122図） 調査当初から確認されていた配石墓である。Ⅲ形態の典型例である。西側に多くの小口積みがなされているが、上部の配石は一部除去されていると推定され、本来的なものでない可能性もある。また、副室状石組は確認されていない。この配石墓より古いS-16を壊しているが、S-13は一部配石を共有するかたちで、接して構築されている。

遺物出土状態（第284図）

【土器】 1層からやや多く土器が出土しており、2層ではやや少ない。1・2層とも北側に偏

在する。小破片が多く時期の解るものは少ないが、加曾利B3式土器がやや多い。

〔石器〕 土器と同じ傾向を示す。玉が2点検出されているが、出土位置が明確な1点は東端から出土しているが欠損品である。また、他の1点はフローテーションにより検出されたもので、詳細な位置は不明である。いずれにしても、数が少なく、埋葬時に装着されていた可能性は低い。

S-14号配石墓（第123図） 1次調査で南半分が調査され、2次調査で北半分を調査した。北側配石の内側まで検出した。副室状石組は検出されなかった。配石墓の中央上部から大形石棒（第224図2）が割れた状態で検出されたが、上部施設として立てられていた可能性もある。

遺物出土状態（第284図）

〔土器〕 1層と2層とも少量ずつ検出されており、ほぼ同じ出土量である。また、分布図では南側に偏在しているが、南半分は1次調査、北半分は2次調査によるものであり、北半分は一括して取り上げてしまったためであり、本来は全体に広がる分布状態であったとみられる。

1層で新地式と考えられる土器片が、2層で加曾利B2式から高井東式までの土器片が出土している。

〔石器〕 出土量が少なく、特別な傾向は見い出せない。中央部から石皿の破片が出土しているが、配石に転用されたものの可能性もある。

S-18号配石墓（第124図） M-1号溝が中央部を斜めに横切っている。M-1号溝の方が新しく掘られているが、配石墓の礫は除去せずにそのまま残しており、意図的と思われる。

遺物出土状態（第284図）

〔土器〕 極少量の土器が北側に偏在している。中期の土器が一片混入している以外は、時期の解る土器片は出土していない。

〔石器〕 若干の剥片類が北側から検出されているに過ぎない。土器と同じ分布状態を示しており、一緒に混入した可能性が高い。

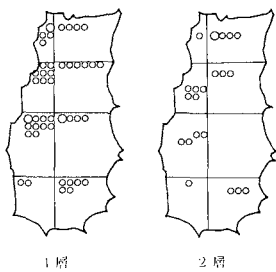
〔その他〕 海に棲息する貝の小片がS-18から検出されており、貝輪の破片と推定される。

S-7A号配石墓（第126図上段） やや小形であるが、長大な礫が平積みに用いられていることから、皿形態に分類される。この配石墓の上部に晩期のS-3号通路状遺構が構築されていた。また、S-19を壊して造られているが、西側壁にはS-19の構築材がそのまま利用されていた。

遺物出土状態（第284図）

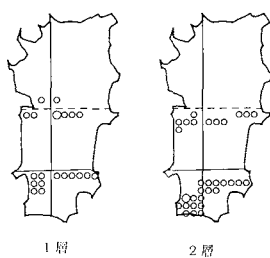
〔土器〕 土器の出土量はそれほど多くなく、1層に偏る。分布に特に傾向はない。加曾利B式と考えられる土器片が数点出土している。

土器分布



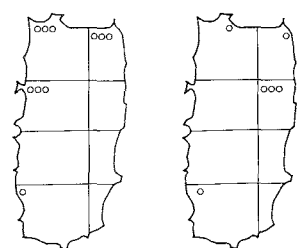
1層 2層

土器分布



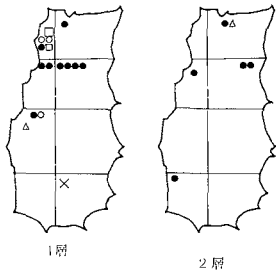
1層 2層

土器分布



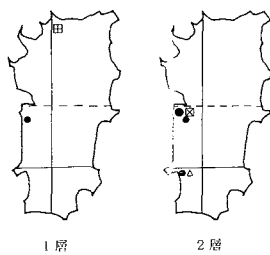
1層 2層

石器分布



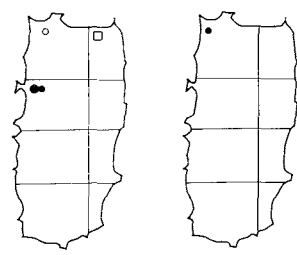
1層 2層

石器分布



1層 2層

石器分布



1層 2層

●●●● 5A-1D ▲▲× 覆土
● 5A-2C

⊗* リング □ 掘り
● 覆土

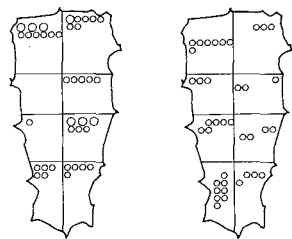
● 5B-2C ● 不明

S-10号

S-14号

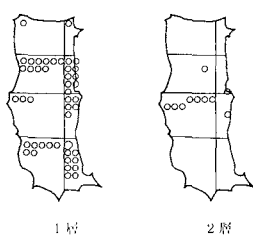
S-15号

土器分布



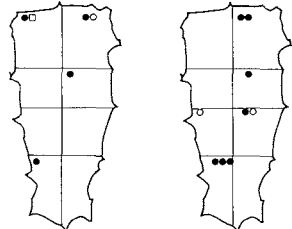
1層 2層

土器分布



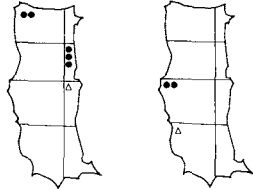
1層 2層

石器分布



1層 2層

石器分布



1層 2層

○ 土器重量 10g
○ 土器重量 100g

▲ 石筋
● RFA
● FLA
○ FLB
○ CRB
田 凹石
■ 磨石
⊗ 石皿
□ 砥石
* 石棒
▲ FLD
+ 棒状礎
× 石

S-7B号

S-7A号

第284図 配石墓遺物分布図(4)

【石器】 土器に比べ、出土量が少ない。剥片A類・D類が散漫に分布している。

S-7B号配石墓（第125図） III形態の典型例である。この配石墓の上部を晩期のS-3号通路状遺構が斜めに横切るように構築されていた。副室状石組は西寄りに構築されていた。他の遺構との切り合い関係が最も多い配石墓であり、配石墓群の中では新しい部類に属するが、副室状石組のある西側がやや広がっている点が、他のIII形態のものとは異なっている。

遺物出土状態（第284図）

【土器】 やや多くの土器が出土しており、特に1層に多く見られるが、分布には特に傾向はない。1層では加曾利B3式、高井東式の他に大洞BCないしC₁式の破片が一片出土しており、2層では加曾利B2、B3式土器が出土している。

【石器】 土器に比べ、出土量が少ない。剥片A類・B類等が散漫に分布し、特別な傾向は見い出せない。

S-16号配石墓（第127図上段） S-10に北半分を破壊されているが、S-7Bと同じく、一方がやや広がる形状とみられる。

遺物出土状態（第285図）

【土器】 出土土器量は少なく、分布にも特に傾向は見られない。加曾利B2、B3式土器が出土している。

【石器】 極少量の剥片A類・B類が散漫に分布する。石皿の破片は配石への転用例とみられる。

S-19号配石墓（第126図下段） S-7Aにより半分以上壊されており、北側壁の礫は内側に傾いている。構築材の一部はS-7Aに再利用されている。

遺物出土状態（第285図）

【土器】 土器はほとんど出土していないが、1層からは粗大な工字文を持つ佐野II式土器が、2層からは加曾利B2式、B3式土器が出土している。

【石器】 石鏃・磨石・剥片A類・B類などが検出されているが、分布に偏在性は認められない。

S-44号配石墓（第134図下段） この配石墓は2次調査の際検出されたもので、すべての配石が取り除かれてしまっていた。側壁がややオーバーハングした掘り方からみて、本来はIII形態であったと推定される。S-40（II形態）・S-14（III形態）の両者より古い。

遺物出土状態（第283図）

【土器】 どの層からも土器はあまり多く出土しておらず、分布にも特に傾向は見られない。3層から高井東式の口縁部片や加曾利B3式の破片が出土している。

〔石器〕 出土量は非常に少ない。磨石2点が1層西側から出土している以外は特に出土状態に傾向は認められない。

5) IV形態の配石墓

S-13号配石墓（第127図下段） IV形態はこの配石墓だけであり、3基重複している中で最も古い。本来の配石の内側に、凝灰岩製の板状礫を箱形に組んでいる点に特徴がある。類似した凝灰岩は碓氷川（磯部地区）に露頭として存在しており、これが用いられたものと判断される。検出された状態では、内法は他の配石墓の半分程度の大きさであったが、HT-3号柱穴群P-2号ピットが東側に一部重複しており、東壁面の配石が欠落している。したがって、HT-3の構築時点で配石が移動ないし、取り除かれてしまった可能性が高い。また、内側の板状礫の石組みについても、二次的に追加されたものである可能性がある。この配石墓は規模の割に大きな礫を平積みに用いており、本来はIII形態の配石墓であった可能性もある。

遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 土器はほとんど出土しておらず、わずかに加曾利B1式土器が二片確認されている。

〔石器〕 剥片類が数点しか出土しておらず、偏在性は認められない。砥石が出土しているが、側壁部を構成する板状礫に転用されたものの可能性もある。

6) V形態の配石墓

S-8号配石墓（第128図上段） 内円部東端に位置し、V形態では唯一南北方向を向いている。東側の配石はほぼ構築状態のままであり、晩期の環状列石の一部として再利用されていた。これに対し西側の配石は多くが抜き取られており、耕作による影響も考えられるが、すでに晩期の時点で抜き取られた可能性が高い。なお、結晶片岩製の石皿の破片が配石墓の用材として用いられている。

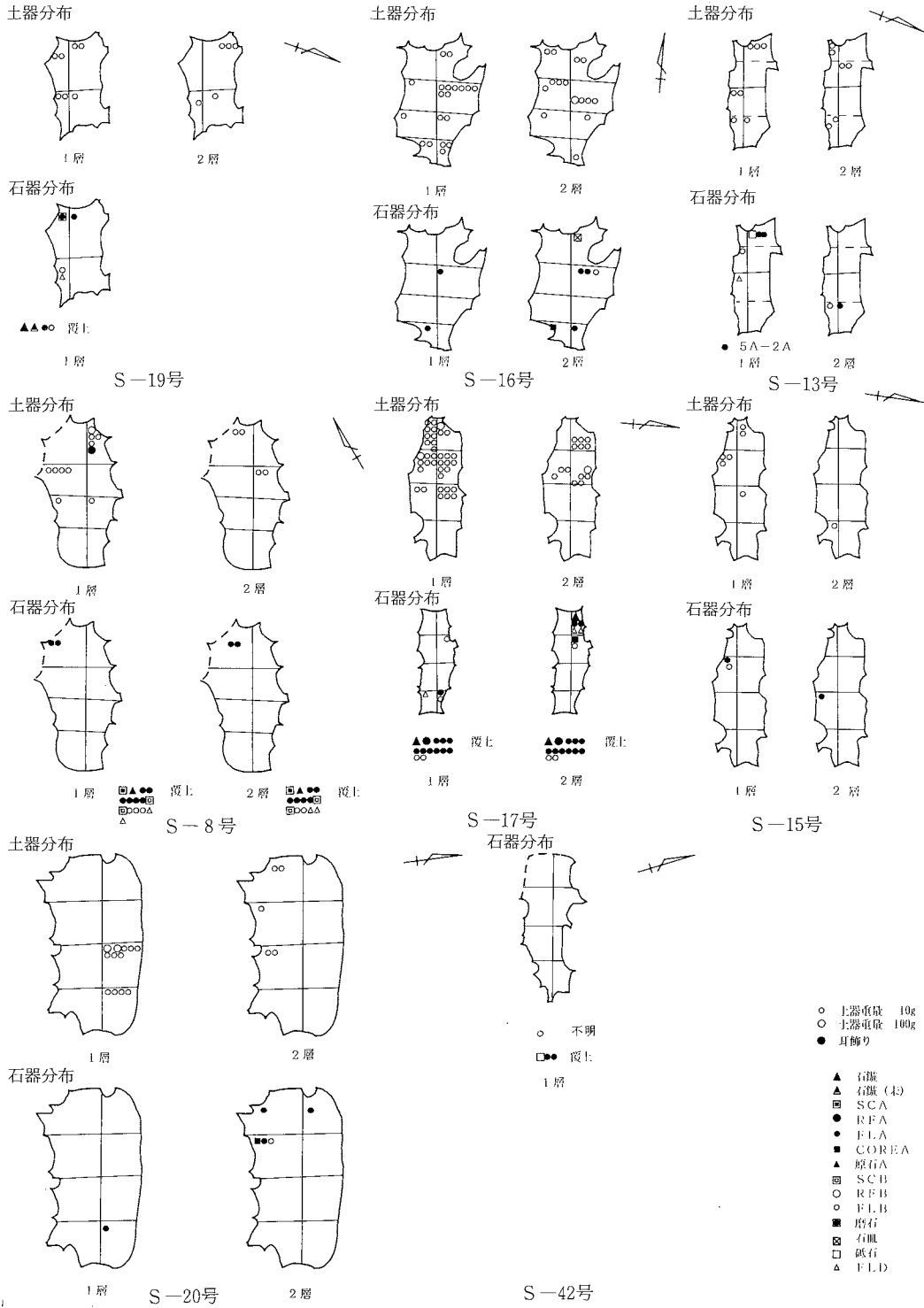
遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 土器の出土量はそれほど多くなく、1層に偏る。分布は北側に偏る傾向がある。1層で加曾利B3式土器が出土している。

〔土製品〕 1層から耳飾りの破片が出土している。

〔石器〕 剥片A類等が2層北部からまとまって出土しているが、少量である。

S-17号配石墓（第128図下段） 内円部中央のHT-3号柱穴群の柱穴（P-5）が西側に重複して構築されており、その影響で柱穴内に配石が一部陥没してしまっている。また、北側の配石は別のピット（P-3）の抜き取りの影響で中央部が外側へずれてしまっている。



第285图 配石墓遺物分布图 (5)

また、東側の配石が欠落しているが、この部分は表土から浅いため、耕作等による影響も考えられる。

遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 1層でやや多くの土器が出土しているが、1、2層とも西側に偏在する傾向がある。1層からは加曾利B3式土器が、2層からは加曾利B1式土器が出土している。

〔石器〕 出土量は少ないが、1層では南に偏在し、2層では北に偏在する。また、2層では北側から石鏃の破片が出土している。

S-15号配石墓（第129図上段） 内円部中央に位置し、HT-3号柱穴群の柱穴（P-3）がこの配石墓の西に重複している。このピットに立てられていた木柱の抜き取り行為により、配石の一部は柱穴の深い位置まで落ち込んでしまっている（第112図）。土層断面でも亀裂が観察される。

なお、東端部の配石には石皿が2点転用されている（スクリーントーン部分）。

遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 ほとんど出土しておらず、僅かに加曾利B式と確認できる土器片が1片出土している。

〔石器〕 剥片A類・B類が3点出土したのみである。

S-42号配石墓（第129図下段） S-15により南側半分が壊されている。また、S-15同様柱穴群（HT-3）の抜き取りによる土層捻転の影響を受け西端の配石が柱穴内に落ち込んでしまっていた。他の配石墓とは土層堆積状態が異なっているが、二次的な掘り込み（1層）が行われていたことによると推定される。配石墓の中では比較的新しい土器（高井東式）が検出されているのもそのためと思われる。

遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 土器出土量は少なく、特に傾向はない。加曾利B式と解る土器片が出土している。

〔石器〕 剥片類少量と砥石が検出されているのみであり、混在と推定される。

S-20号配石墓（第130図上段左） S-7Bにより南側が壊されている。また、北側の配石も大部分抜き取られている。この配石墓の形態ははっきりしないが、掘り方の規模と構築材として用いられている礫の大きさ等から本来はV形態であったと推定される。

遺物出土状態（第285図）

〔土器〕 1層で少量の土器が出土しているが、2層からはほとんど出土していない。土器の出土分布は北東部分に偏る傾向がある。明確に時期の解る土器は出土していない。

〔石器〕 2層では剥片A類・B類等が北西部から数点出土しているのみである

VI形態の配石墓

S-21号配石墓（第130図上段右） 周溝部に位置し、IV層中で両端の配石が確認されたが、掘り込みがはっきりと確認されたのはローム層（V層）上面であった。そのため、掘り込みが非常に浅い状態として図示されているが、本来は配石より深い掘り込みであったと推定される。

遺物出土状態（第286図）

〔土器〕 土器はほとんど出土しておらず、わずかに加曾利B 2式土器が一片確認されている。

〔石器〕 完形の石鏃が3区から検出されている。

S-23A・B号配石墓（第130図下段） A・B 2基が直交するように切り合っている。Aの方が古くBの方が新しい。両端に配石を有する配石墓と推定されるが、Aの片端以外はすでに抜き取られてしまっていた。Bは掘り方からV形態の可能性もある。

遺物出土状態（第286図）

〔土器〕 S-23Aの出土土器量は少ないが、西側に偏在する傾向を示す。加曾利B 3式かと思われる土器片が出土している。また、S-23Bでは、土器の出土量は少ないが、西側に偏在する傾向がある。加曾利B式と考えられる土器片が出土している。

S-28号配石墓（第133図下段） 周堤帯により上部を覆われていたため、遺存状態がVI形態では最も良好であり、典型例である。上部には配石は存在しなかった。また、遺物もほとんど検出されなかった。

遺物出土状態（第287図）

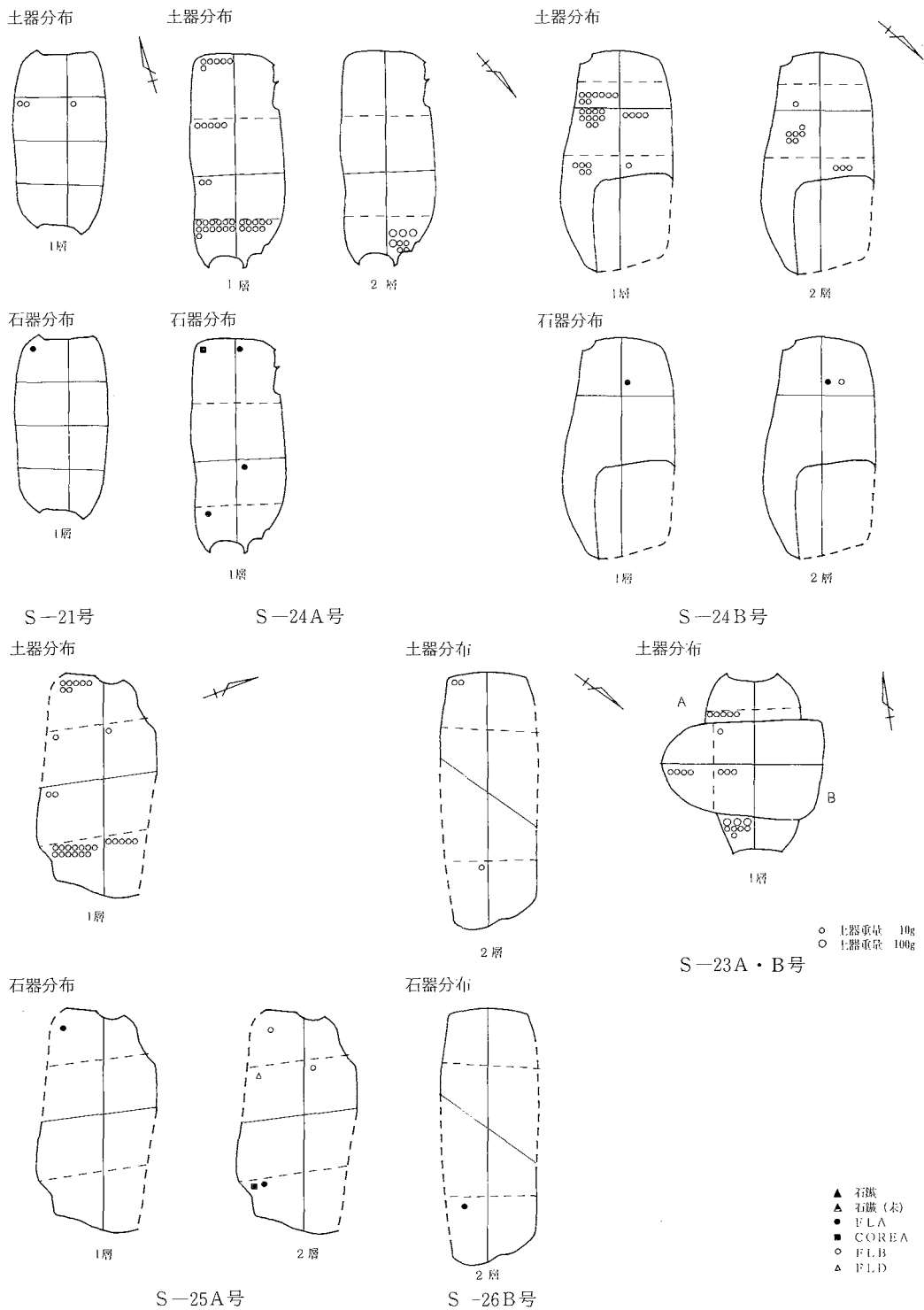
〔土器〕 土器の出土量はそれほど多くなく、1層に偏る。分布は南側に偏在する傾向がある。明確に時期の解る土器は出土していない。

S-34号配石墓（第133図上段右） 片端に大形礫が存在しており、VI形態に分類される。しかし、大形礫は配石墓に近接して検出されており、元々配石墓に配した礫ではない可能性もあり、あるいはVI b形態とも思われる。

遺物出土状態（第287図）

〔土器〕 土器の出土量は少なく、2層でやや多い。分布は特に傾向は見られない。明確に時期の解る土器片は出土していない。

〔石器〕 剥片A類・B類が若干検出されている。



第286图 配石墓遺物分布图(6)

VI b 形態の配石墓

S-24A 号配石墓（第131図上段左） S-24B と重複し、本遺構の方が新しいと判断される。両端に部分的に配石を有するが、VI 形態のように大形礫は用いられていない。

遺物出土状態（第286図）

【土器】 土器の出土量はそれほど多くなく、分布に東側に偏在する傾向がある。1層、2層で高井東式土器が出土している。

【石器】 欠損した石鏃が南側から検出されている他、剥片A類等も若干検出されている。

S-24B 号配石墓（第131図上段右） S-24A・S-27 と重複し、両者の中間に構築されたと判断される。一端に礫が存在するほか、内部に礫が入り込んでいる。配石が崩れた可能性がある。

遺物出土状態（第286図）

【土器】 土器の出土量は少なく、1層に偏る。2層で加曾利B 2式土器が出土している。

【石器】 剥片A類2点、B類1点が出土しているのみである。

S-25A 号配石墓（第132図上段左） S-25B を切って構築されている。配石は斜めに1列に並んでS-25Aの覆土中から検出された。しかし、この配石はS-25Bと同じ方向性をもって存在しているため、本来はS-25Bの配石であった可能性もある。

遺物出土状態（第286図）

【土器】 土器の出土量は少なく、分布も特に傾向は見られない。加曾利B式と考えられる土器片が出土している。

【石器】 剥片A類・B類などが若干出土している。

S-25B 号配石墓（第132図上段右） S-25Aにより切られている。S-25Aの項で説明したとおり、配石はこの配石墓のものであった可能性がある。

遺物出土状態（第286図）

【土器】 S-25B号配石墓では、土器はほとんど出土していない。明確に時期の解る土器の出土はない。

【石器】 石鏃未成品と剥片A類が東端から出土しているのみである。

S-26号配石墓（第132図下段左） この遺構はS-33により切られている。配石は検出されておらず、土墳墓として分類することも可能であるが、周溝部配石墓群中に存在するため、VI b 形態に分類したものである。

遺物出土状態（第287図）

〔土器〕 土器はほとんど出土していない。明確に時期の解る土器の出土はない。

〔石器〕 石鏃未成品・剥片B類が南側から検出されているのみである。

S-27号配石墓（第131図下段） S-24B・S-33に切られている。配石は検出されているものの、本来の位置を留めていない可能性が高い。遺物は全く出土していない。

S-29号配石墓（第133図上段左） S-30・S-21により切られている。配石は存在していなかった可能性が高い。土壙墓に分類することも可能な遺構である。

遺物出土状態

〔土器〕 土器の出土量は少なく、分布も特に傾向はない。明確に時期の解る土器は出土していない。

S-30号配石墓（第133図上段左） 一端に数個の小振りな配石がある配石墓である。また、配石墓上部にかけて礫が存在するが、本遺構には伴わない。

S-33号配石墓（第132図下段右） 耕作による乱れにより西側を破壊されているため、本来の形状は不明であるが、周溝部配石墓群中に存在するためVI b形態に分類した。土壙墓として分類することも可能である。

遺物出土状態（第287図）

〔土器〕 土器は若干出土しているが、分布図は作成しておらず、分布状態は不明である。明確に時期の解る土器もない。

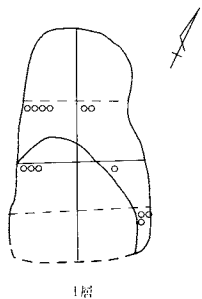
S-35号配石墓（第134図上段左） S-7Bに切られている。当初土坑として認識されていたので、調査時に数個の礫を取り上げてしまった。本来はIII形態或いはV形態で、二次的に配石が抜き取られたものの可能性もある。

遺物出土状態（第287図）

〔土器〕 土器の出土量は比較的多いが、出土位置・層位は記録していなかったので不明である。加曾利B式と考えられる土器片が出土している。

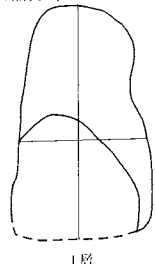
〔石器〕 凹石が1点出土している。

土器分布



1層

石器分布

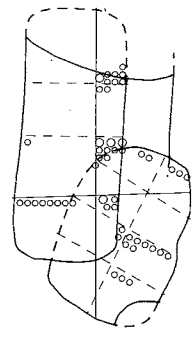


1層

○ 7区

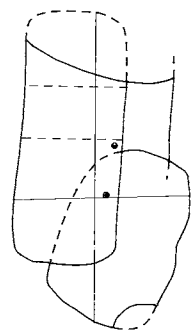
S-26・33号

土器分布



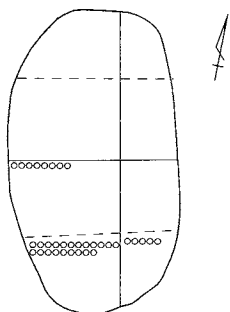
1層

石器分布



1層

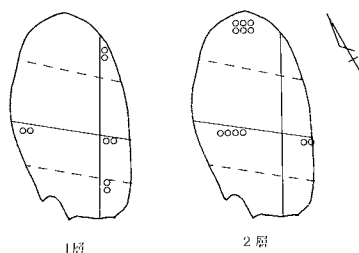
土器分布



1層

S-28号

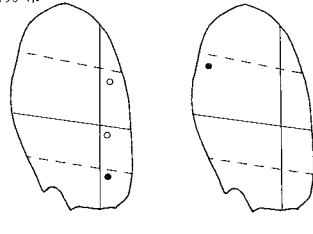
土器分布



1層

2層

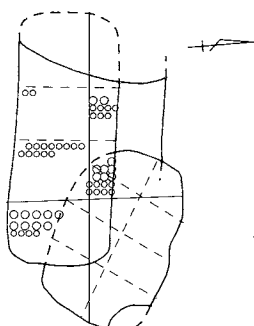
石器分布



1層

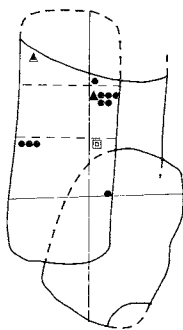
2層

S-34号



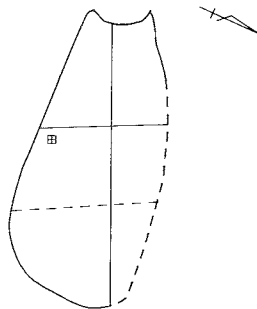
2層

石器分布



2層

S-29・30号



S-35号 2層

○ 土器重量 10g

○ 土器重量 100g

▲ 石鏃
 ▲ 石鏃 (43)
 ● F.L.A
 ⊕ S.C.B
 ○ F.L.B
 ⊞ 四石

第287图 配石墓遺物分布图 (7)

S-36号配石墓（第134図上段右） S-35同様、調査時に数個の礫を取り上げてしまった配石墓である。やはり、本来は皿形態或いはV形態の配石墓であった可能性がある。

遺物出土状態

【土器】 土器の出土量はそれほど多くない。加曾利B 1式の口縁部片が出土している。分布図は作成しておらず、出土位置は不明である。

【石器】 剥片A類が1点出土しているのみである。

（大工原 豊・林 克彦）

環状列石（付図・第138図）

配石墓群の上部に構築されていたもので、直径約10mの規模を有する。環状列石を構成する礫は配石墓の構築材を転用しているものが多く認められる。また、東縁部に位置するS-8号配石墓の構成礫はそのまま環礫として利用されている。一部石皿の破片も用いられている。環は均一ではなく、西側に構成礫が多く、東側は少ない。北半分は調査区外に及んでいる。

付帯施設としては、後述する祭壇状配石遺構・通路状配石遺構・門状配石遺構がある。また、中心部に存在するHT 3号柱穴群も付帯する施設と判断される。そして、周溝部と周堤帯も同時期に構築された遺構とみられる。

環状列石の形成は、配石墓との切り合い関係や出土遺物からみて、配石墓の構築終了後、時間的断絶もなく構築されたと推定される。

（大工原 豊）

祭壇状配石遺構

S-5号祭壇状配石遺構（第135図） 環状列石の西側に長方形に大形礫を配した遺構で、規模は南北5m、東西2mである。配石は平坦な礫が配列したものではなく、ゴツゴツした状態で西に傾斜しつつ並べられており、この配石の上部で人間が座って何らかの行為を行う施設とは考え難い。そして、配石の大きさは配石墓の構築材とほぼ同じ大きさであり、被熱礫が多く認められ、配石墓の構築材が転用された可能性が高い。

また、配石は一面であり、下部には埋設土器が4基検出された。この配石遺構自体が埋設土器の上部施設の可能性もあるが、埋設土器との間には若干間層が存在していることや、配石遺構周辺にも埋設土器が存在していることから、同時期のものではなく配石遺構の方が新しいものと判断される。なお、出土土器からみて主として晩期前半に利用されたものと考えられる。

この遺構の特徴は西縁部に3本の立石が設置されていることである。立石の間隔は約1.6mで、環状列石中心部から見た場合、ちょうど西方に存在する妙義山の三峰（南から金鶏山・金洞山・白雲山）に対応する位置に設置されていた。このうち、南に位置する立石（第224図1：石棒）は

倒れていたが、本来は立てられていたと推定される。また、中央に位置する立石（石棒）、北に位置する立石は傾いていたものの、立てられた状態で検出された。立石は南から青白色（結晶片岩）→白色（安山岩）→赤褐色（安山岩）の順に配置されており、色彩を意識した配置が行われていた可能性もある。

ところで、中央の立石は最長であり、上部が突出していたためⅢ層で確認されており、縄文時代以降も頭部が地表に露出していたものとみられる。3本の立石では、北に位置するものを除き加工痕が観察され、石棒に分類することができる。また、南に位置する石棒を除き、被熱が認められる。

なお、環状列石の中心（HT-3号柱穴群）の位置から春分・秋分の日前後の日没地点を観測すると、金洞山上に日没地点が存在している。金洞山上に日が沈むのは2～3日とごく短期間であり（1994年は3月25日の前後1日程度）、立石はその目標物としての役割を果たしていたと推定される。以上のことから総合的に判断し、この施設を構築した集団がすでに太陽の運行に関する基本的知識を有していた可能性が高い。

遺物出土状態

〔土器〕 比較的多量検出されている。検出された土器は大洞BC式・安行3a式・天神原式といった晩期前半の型式が大多数を占める。また、器種別にみると、深鉢（第177図24・第178図1・10・第180図19・20・23・24）、浅鉢（第198図5・第177図4・第185図11）、壺形土器（第190図21・22）、注口土器（第178図11・13・15・16）と多様な器種の破片が検出されている。しかし、無文の粗製土器は広く分布しているにもかかわらず、この遺構ではほとんど検出されておらず、特異な分布状態を示している。

〔石器〕 石器では石鏃・打製石斧・砥石が多い傾向があるが、比較的多くの器種が少量ずつ検出されている。また、黒曜石等の剥片A類が多く検出されている。

さらに詳細な分布状態をみると、中央の立石の東側には打製石斧・石皿・磨石・砥石・石棒・多孔石等がまとまって検出され、このうち石棒2点は立てられていた。また、北の立石の周囲にも打製石斧・石皿・磨石・砥石・棒状礫・多孔石等が集中して検出された。南の立石の周囲では、石皿・磨石・丸石・砥石等が検出された。以上のように、立石の周囲から検出された器種には強い共通性が認められ、この配石遺構で行われた行為との関連性が窺える。この他に、配石遺構の中央東端では丸石・磨石が目立つ状態で検出されている。

以上のように、この配石遺構は形態だけではなく、遺物から見た場合でも特殊遺物が多く、なおかつ、特殊な分布状態を示しており、祭祀的な行為などの用途で利用された可能性が高い。

（大工原 豊）

通路状配石遺構

S-3号通路状配石遺構 (第136図) 環状列石の南東部に、環状列石を跨ぐ形で構築された直線状の配石遺構で、列状配石遺構と呼称してもよいものである。扁平な礫を平坦に並べており、長さ4.2m・幅0.7mの規模を有する。南東端には巨大な礫を配した門状配石遺構が存在しており、一体の施設であったと推定される。また、北西端はM-1号溝のところで途切れており、本来はさらに延びていた可能性もある。

この配石遺構は配石墓(S-7B・S-19)の上部を斜めに横切って構築されており、配石墓との間に新旧関係が認められる。後期後半の配石墓の上部に構築されていることから、後期終末～晩期前半の遺構であるとみられる。

遺物出土状況 特異な遺物出土状況は認められず、土器片が散乱する状態であった。この遺構周辺から検出された土器は後期後半(加曾利B式・高井東式)が多いものの、晩期前半(安行3a式・天神原式・中部系)も比較的多く検出されている。また、配石の中には石皿が転用されたものが3点ある。(大工原 豊)

門状配石遺構 (第136図) S-3号通路状配石遺構の南東端に構築された配石遺構であり、1m程の巨大な将棋駒状の礫が折り重なった状態で検出された。巨石は火を受けて赤化していた。

遺物出土状態 巨石の間から石棒(第225図6)・石剣(同8)・鉄鉱石(第231図6)・注口土器(第155図1)等がまとまって検出された(第136図下段)。石剣は3つに欠けており、巨石が倒れた際に欠損したものと推定される。こうした遺物出土状態からみて、この門状配石遺構の場所において、特殊な行為が行われていた可能性が高い。この遺構の構築は通路状遺構と同時に行われたものと推定されるが、後期終末の土器(新地式)が巨石間から検出されていることから、この時期まで遡る可能性がある。しかし、周辺部の遺物分布をみると、この遺構の南部に晩期前半段階に属する中部系の精製土器(第192図1、第199図2～4・7・8等)が多く検出されており、主としてこの段階に利用されていた可能性が高い。(大工原 豊)

石棒祭祀遺構 (第137図) この遺構は周溝南西部、S-4号配石墓に隣接して検出された。直径約4mの範囲に、石棒・石皿・球石などが656点集中した状態で検出されたものである。

遺物の分布状態から見た場合、大形遺物を中心に、一定の規則性を有して遺物が分布している。そして、本遺跡の最終段階の遺物群であり、その後二次的集積が行われた可能性も低い。さらに、この遺物集中部分の周囲を囲むように、HT-2号掘立柱建物址が存在している。したがって、この遺物集中部分は単なる廃棄場所として遺物が集積されたものではなく、使用時の状態を残し、有機的な関連性を有した遺物群(ユニット)として捉えられる。この遺物群(ユニット)

は、石棒・石皿・球石を中心としており、日常生活に関連する遺物（第1の道具）以外の特殊な遺物（第2の道具）が顕著であることから、祭祀的色彩が濃い遺構として認識し、「石棒祭祀遺構」と呼称することにした。

中心に当たる位置には大形石皿（第220図1）・大形の石棒（第225図4）・丸石（第227図1）が存在していた。大形石皿は「コ」の字形に配列された球石・凹石の上部に裏返しの状態で置かれていた。そして、大形石棒が石皿の北側から斜め下方へ刺さる状態で配置されていた。また、大形石棒に隣接して橙色に変色した丸石が置かれていた。

この大形石皿の周囲からは、中形・小形の石棒（第225図2・3・5）・石剣（第225図11・17・18）・石剣未成品？（第226図2～6）・棒状礫（第226図9・16・19）・磨製石斧（第228図5・8）など緑色で棒状の石器がまとまって出土した。この中のいくつかは大形石皿に放射状に置かれていた。この遺構から検出された石棒・石剣はすべて中折れ状態であった。

また、球石136点・磨石25点・凹石26点と円形・球形の石器が多量検出された。これらの石器は自然石も含め、円形・球形の形状のものが選択的に集められたものと推定される。

そして、黒曜石製の石鏃・石鏃未成品・剥片A類・石核A類も全体に散らばった状態で大量検出された。石鏃・未成品を含めて48点検出されているが、有茎鏃が大部分である。未成品は33%を占め、欠損品も52%と高率である。また、剥片A類177点・石核A類16点と多量検出されており、石鏃製作過程に沿った資料が揃っている。したがって、この場所で石鏃製作が行われた可能性が高い。

大形石皿の周囲からは多様な色彩・性質の自然石が検出された。赤色チャート6点、石英1点、緑色凝灰岩2点、鉄鉱石（磁鉄鉱：餅鉄）3点、黒曜石2点が主要なものである。これらの自然石のうち、赤色チャート・黒曜石は南側からまとまって検出された。赤色チャートは石鏃等の素材となる良質のものであるが、本遺跡ではこの赤色チャートを用いた石鏃は1点も検出されておらず、石鏃の素材としての認識ではなく、「赤い石」として認識されていたものと思われる。

土器は晩期前半のものが大部分であり、中部系の赤色塗彩の台付鉢（第155図20）が大形石皿の東側と北側からまとまって検出された。なお、この土器の一部は隣接するS-4号配石墓（晩期では環状配石遺構として再利用）の中からも検出されており、両遺構が同時併存していたことを裏付けている。

なお、土製品としては、赤色塗彩の小形耳飾が1点・土錘2点が検出されているだけであり、数量は少ない。

これ以外にも中心的な大形石皿の西側にも大形石皿が存在するが、この石皿の周囲には遺物の集中は認められないが、鉄鉱石2点はこの石皿付近から検出されている。下部には何も存在していなかった。

（大工原 豊）

周溝（付図・第138図） 晩期環状列石の構築に際し、その周囲を浅く掘り、外側に排土を除去することによって形成されたもので、その排土により周堤帯を形成する。西側はVI層上面まで地山を掘削しており、内円部の配石墓確認面（IV層下面）より、1mの深さを計る。また、南側ではV層中まで掘削しており、0.7mの深さを計る。しかし、東側ではほとんど掘削が行われていない。全体が均等に掘削されているのではなく、西側がより深く掘削されていたことが確認された。

周溝の幅は南東で約7m・南側で約10mである。

ところが、西側は20m以上あり、調査区外へ延びているため、単純な溝ではなく、広く窪んだ平坦面が存在している。西側部分には浅間B軽石の純層が5cmほどの厚さで堆積しており、平安時代まで窪地であったことが確認された。また、III層（黒色土層）も厚く堆積しており、中位に浅間C軽石を帯状に含む層（III b層）が認められた。遺物はこの層の上部のIII a層からも出土するが、多くは下部のIII c層に包含されていた。また、III c層下部にS-2号石棒祭祀遺構（安行3 b・3 c段階）が形成されており、周溝の削平はそれ以前に行われたことは確実である。

このように、西側部分は南側部分と同じ状態ではなく、西側部分では、さらに規模の大きな地山削平が行われた結果、形成された遺構とみらる。また、西側部分は南側部分に比べ、ピットが少ないが、地山削平でより古い段階のピットが削り取られてしまった可能性がある。したがって、西側周溝の削平は、1回だけでなく、2回以上行われたものと推定される。（大工原 豊）

周堤帯（第138図） 周溝の南側から東側にかけて検出された盛土遺構である。最も厚い南側では盛土層を確認することができるが、東側では区別が困難であった。東側部分は調査時点では周溝の包含層と区別することはできなかった。しかし、遺物分布を検討したところ、周溝形成以前の遺物が周堤帯と推定される部分に帯状に分布することから、東側にも周堤帯が存在していたとみられる。南側部分での盛土層は周溝部で削平されたと推定されるIV層（暗褐色土層）に近似した土質である。

周堤帯の規模は南側で、幅約10m、盛土の厚さは南側で0.7m程度である。東側は盛土を供給する周溝の削平がほとんど行われていないことから、非常に薄いものであったと推定されるが、幅と厚さは不明である。

また、第100図のように、県道の西側の雑木林内にも調査区から連続する起伏が認められることから、大規模な周堤帯が現存している可能性が高い。

遺物出土状態 盛土層全体の調査を行っていないので、周堤帯全体の遺物については確認していない。しかし、周堤帯南側に設定したサブトレンチと、東側に存在したと推定される低い周堤帯部分については、盛土中の遺物がある程度判明している。

南側のサブトレンチ内の盛土中からは、加曽利B式・高井東式・新地式等、後期後半の土器が

多く出土しており、それ以前の中期の土器も少量出土している。しかし、晩期の土器ほとんど出土していない。盛土層の上部の包含層中からは大量の晩期前半の土器が出土している。

東側部分では後期後半以前の土器が帯状に分布している。これに対し、この内側の周溝部分では前期・中期の土器は面的に欠落しており、後期後半の土器も少ない。したがって、周溝部分が削平され、周堤帯の盛土として利用されたものと推定される。

また、土偶の分布をみると、後期後半のいわゆる山形土偶は周堤帯部分に偏っており、盛土層中に混入したものと推定される。

以上のような遺物の出土状態からみて、周堤帯の形成時期は後期後半以降、晩期前半以前の時期（後期終末～晩期初頭）と推定される。 （大工原 豊）

埋設土器（第135図右・第139図）

分布及び出土状態

埋設土器は12基が確認されており、A区では8基が群を構成して検出された。また、B・C区では4基が単独で検出された。

〔A区の埋設土器群〕 A区の埋設土器は配石墓群の西側に集中する。さらに詳しくみると、S-6号配石墓の周囲に分布するI群（U-4・U-6・U-204）と、S-5号祭壇状配石遺構の下部に存在するJ群（U-201・U-202・U-203・U-205）の2群に分かれる。J群は調査区の北側に広がっている可能性が高い。

I群の埋設土器は破損したものが多く、U-6・U-204は、いずれも破損しており、土器の上部には礫が存在していた。U-6は上部は破損して内部へ崩れ込んでいたが、下部は正位の状態であり、埋設された状態で破損したと推定される。しかし、U-204は横位で検出されており、原位置を留めていない可能性がある。また、U-6のみ底部穿孔されている。

J群では比較的小範囲にまとまり、U-201・U-203・U-205は南北に一直列に並んでいる。また、J群では破損例が少なく、U-203を除き完形である。上部に祭壇状配石遺構が存在していたため、埋設土器の上部に礫が置かれていたかどうかははっきりしないが、内部に蓋状の施設が落ち込んでいる状態は確認されなかった。

また、U-5はJ群と隣接するものの、祭壇状配石遺構の西側に存在していることと、土器型式が新しいことから、他の埋設土器とは区別される。しかし、時期が異なるにも関わらずJ群に隣接するのか疑問は残る。

〔B区・C区の埋設土器〕 これらの埋設土器は単独で存在しており、特別な傾向は見い出せない。H-6住U-1の覆土中からは無文の土製腕輪の小破片が出土している。覆土中に混入していたものであり、副葬あるいは装着の痕跡は確認できない。 （大工原 豊）

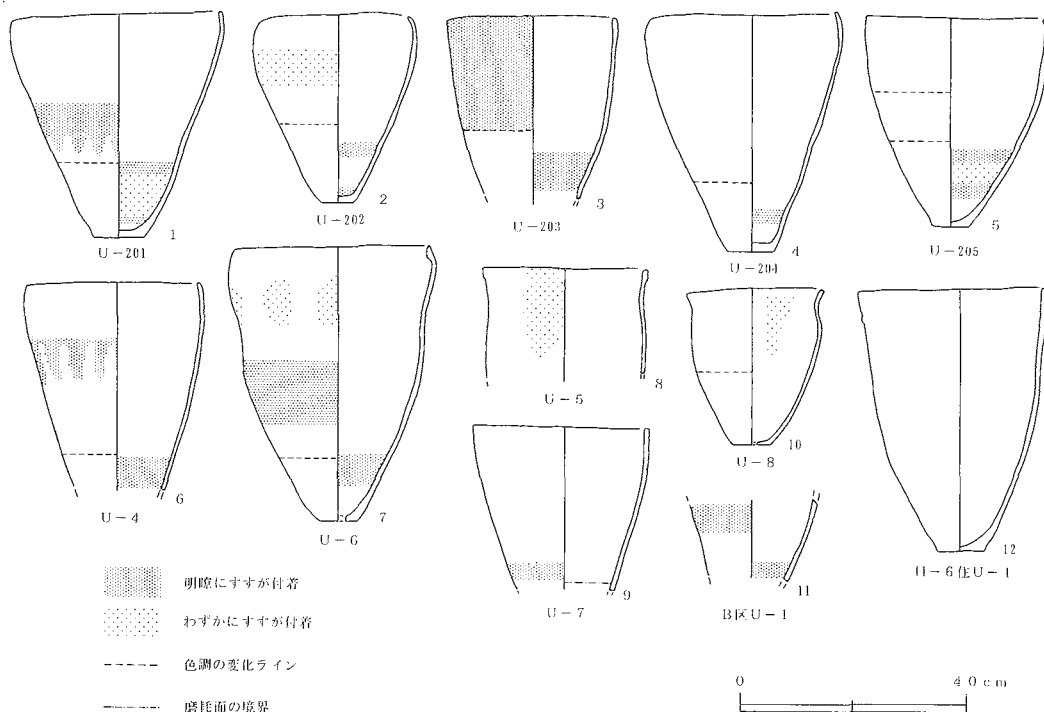
埋設土器の特徴（第156図・第157図・第288図）

A区の8基（第156図1～6・第157図1・2）はU 5を除いて全て無文である。U 5は口縁端部を外側に折り返し、そこに口縁部文様帯を持つ深鉢形土器で、胴部下半を欠損し、器面は全体的に摩耗している。色調は淡い赤褐色を呈し、外面の一部に、口縁部から胴部にかけて僅かな煤の付着が認められる。文様帯は三段構成で、二段目の文様帯には入組文とそれに沿って二本の連続する三叉文が加えられている。また、三段目には直線的な入組文が施され、その入組文と入組文の間に三叉状の陰刻を加えている。これらの文様から、この土器は晩期前半の安行3b式に平行する段階に位置付けられるものと思われる。

U 5以外の土器も全て深鉢形土器で、頸胴部に緩いくびれを持つU 6以外は、口縁部がやや内湾する砲弾形を呈する。U 6・U 201・U 205は口縁端部を内側に折り返して口縁部を肥厚させており、U 204には補修孔が見られる。底部に網代痕を持つものはU 6・U 202・U 205で、U 6には底部に焼成後の穿孔がみられる。また、U 204・U 205の底部には太めの棒状工具による、一条ないし二条の押し引きがみられる。器面の調整をみると、内面はいずれも棒状工具（あるいは石の可能性もある）によって、横方向の「つぶし」（後藤1980）が加えられ、その痕跡を明瞭に残すものが多い（U 4・U 201・U 202・U 203・U 205）。外面は輪積痕が残るような粗い調整（口縁部は横あるいは斜め方向、胴部以下は縦方向）をした後、撫で磨きを加えているが、胴部下半は摩耗しており調整痕は明瞭ではない。色調は胴部より上部は暗褐色から黒褐色を呈し、胴部下半は赤褐色を呈する。煤の付着状態をみると（第288図1～8）、内面ではいずれも底より数cm上部のところから、5～15cm幅の煤の付着がみられる。煤の幅の広いものは上端と下端に煤が多く付着し、その間は煤の付着が見られないか、見られても僅かである。外面を見ると、胴部の色調が変わる部分より上部に幅約20cm位の煤が付着しているものが多いが、U 203では色調が変わる部分から口縁部まで全面にすすが付着し、U 4では縦の帯状に僅かに煤の付着が見られる。これらの煤の付着状態は、縄文時代の深鉢形土器には普通に見られ、煮炊きによって付着したと考えられている（小林1978）。したがって、これらの埋設土器群は他の廃棄された土器群と同じように、埋設される前は煮沸に利用されていたと考えられる。文様が施されていないため、これらの土器の正確な時期を決定することは難しいが、地文が無文化し、無文粗製土器が増える後期終末から晩期初頭のものと考えられる。

C区・B区の埋設土器（第157図3～6）は何れも深鉢形土器である。U 8は頸部の屈曲下に下向きの弧線を連続的に施文し、その後、器面全体に磨きをかけているが、この調整によって文様は消失しかけている。底部には網代痕が見られ、焼成後の穿孔が施されている。色調は黒褐色から暗褐色で、煤の付着は明瞭ではない。時期は後期終末と思われる。

U 7は底部欠損の土器であるが、器面は全体的に縦方向の磨き調整が施されている。表面に



第288図 埋設土器スス付着状態

は煤の付着が明瞭にみられるが（第288図9）、裏面には見られず、現存部の最下部が摩耗しているだけである。文様は二本一對の沈線によって連続的に山形の文様が施され、それを挟むように二本一對の横線が施されている。分布状況を見ると、加曾利B式段階のものと思われ、恐らく加曾利B1式段階のものと思われる。

B区U-1は胴部のみであるが、煤の付着は濃厚に認められる（第288図11）。無文で、表面は粗い縦方向の調整が施されている。時期は不明である。

H-6住U-1は後期I群6類土器で、口頸部に摘んだような突起を持つ隆帯を施し、その隆帯以下に多数の縦方向の条線が施されている。色調は全体的に淡い褐色を呈し、煤の付着は認められない。

（林 克彦）

配石遺構

S-101号配石遺構（第140図上段左） D区5Q-18グリッドに存在し、J-4号住居址の南東約2mに位置する。東西0.8m・南北0.7mの小規模な配石遺構で、立石の四方に礫を配したものである。すべて河原石であり、被熱による赤化や表面剥落が認められるものがある。立石は長さ46cmのずんぐりした河原石であり、地表に約30cmほど露出していた。また、加工痕は観察されなかった。

この遺構に伴う遺物は確認されなかったが、周囲からは後期前半の土器が出土しており、この時期の遺構の可能性が高い。また、石器では石鏃・打製石斧・スクレイパーA類・B類・砥石などが周囲から検出されている。

S-102号配石遺構（第140図上段右） C区5T-12グリッドを中心に存在する。調査区の南西端に接しており、一部調査区外へ延びている。確認された部分では、L字形を呈し、東西4.5m以上、南北約2.5m、配石の幅約1mである。詳細にみると、外側（北側）に比較的大きな礫が並び、内側（南側）に角礫状の小礫が並ぶ。構成礫数は104個以上であり、被熱礫もある程度認められる。

遺構に直接伴う遺物は確認されなかったが、周囲からは後期前半～後半の土器が出土しているが、主体を占めるのは後期前半の土器であり、本遺構もこの時期のものである可能性が高い。また、石器では石鏃・打製石斧・スクレイパーB類・敲石・砥石・石錘などが出土している。

その他の配石遺構

巨石 5N-17グリッドでは長さ1m以上の棒状の巨石が単独で検出された。加工痕は観察されなかったが、本来は立石として用いられていたものの可能性がある。図示していない。

溝

M-1号溝（第140図） 環状列石の中心部を通り、南西方向へ円弧を描いて造られた溝で、26mに渡って検出された。幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.4mで、箱葉研形を呈する。円弧からの推定直径は約70～80mである。地下レーダー探査により、調査区の西方で対応する溝を確認している（第100図）。

覆土はⅢ層（黒色土層）を基調としたものであり、容易に識別が可能であった。また、水成堆積の痕跡は認められない。切り合い関係をみると、HT-3号柱穴群の抜き取り痕より新しい。S-18号配石墓の真ん中を斜めに横切るように造られているが、両側の配石墓構成礫は抜き取っていない。そして、周溝・周堤帯の起伏に応じて掘られており、これらの遺構よりも新しい。なお、遺物は基本的に流れ込みであり、分布の偏在性は認められない。土器は晩期前半のものが大

部分であり、粗製土器が目立つ。

以上のことから、この溝は円形の区画を明示するために造られた区画用の遺構と考えることができ、本遺跡の縄文時代晩期の遺構の中では最も新しい段階のものと判断される。(大工原 豊)

竪穴状遺構 (第141図) B区南西部で2基並んで検出された。浅い皿状の掘り込みで、遺物も少なかったが、覆土が紫がかかった色調を呈しており、朱などの物質が含まれていたと考えられる。

出土遺物から堀之内式段階のものと思われるが、前期・中期の土器の方が出土量が多いことから、時期的に遡る可能性もある。(大工原 豊)

土坑 (第141図～第143図)

本遺跡では、前期から晩期までの土坑が31基検出された。分布を見るとそのほとんどはA区にまとまり、B区からD区では数基しか検出されていない。これらの土坑は時期的に分布域が異なっている。なお、各土坑の形態・出土遺物等は第16表のとおりである。

A区の土坑 A区では28基の土坑が検出されているが、中期の土坑は五領ヶ台式期のD-31号土坑だけで、それ以外の土坑は後・晩期のものと考えられる。晩期と考えられる土坑はD-7・D-11・D-12号土坑であるが、これらの土坑はM-1号溝の西側で検出されており、東側では検出されていない。このことはピットについても言え、M-1号溝の東側で検出されたピットからは晩期の土器はほとんど出土していない。したがって、時期の解らない土坑のうちM-1号溝の西側に存在する土坑は晩期の可能性もあるが、東側にある土坑はほぼ後期のものと考えられる。平面形態をみると、中期の土坑は円形であるが、後期の土坑は円形ないし円形に近い楕円形のものが多く、方形・不定形ものは少ない。また、晩期の土坑は楕円・不定形であり、後期の土坑と形態が若干異なる。

確認時での断面形態は中期は袋状、後・晩期は皿状あるいは浅い碗状を呈するが、この部分は周堤帯を造る際に大きく削平されており、その時に土坑上面も大きく削られたものと考えられる。したがって、ほとんどの土坑は、本来碗状あるいは円筒状を呈していたと考えられる。

機能面を見ると、D-2号土坑で焼土が検出され、D-35号土坑からは大量の粘土塊が検出されており、特殊な機能を想定できる。その他の土坑は、遺物の出土状況からは特別な傾向は見られない。

また、分布状の特徴について検討すると、後期後半(加曽利B)の遺物を出土する土坑では、D-26号土坑を中心とした半径10mの円内にまとまる傾向が認められる。中心に位置するD-26号土坑は大形で、掘り込みも比較的深い。そして、配石墓群の配置上、中心的位置を占めており、特殊な機能を有していた可能性が高い。柱痕は確認されていないが、マーカーポールのような

土坑番号	規模(上端規模(下端				深さ	平面形	断面形	出土遺物		剥片			時期	
	WE	NS	WE	NS				土器	石器	A	B	他		礫
B区														
T-1	*122	308	*112	295	22	楕円?	皿状	△			1		後期?	
T-2	*223	270	*212	206	24	楕円?	皿状	○	凹石1・磨石1		1		堀之内?	
D区														
D-201	116	123	132	140	72	円	袋状	△	磨斧1・打斧1 RFB1・原石A36		13	1	諸磯b	
C区														
D-2	226	170	180	128	43	楕円	皿状	○						
J-9・D-1	193	*117	212	*128	116	楕円?	袋状	△					加曾利E?	
A区														
D-1	111	100	85	74	18	円	皿状	△			1		高井東-晩期	
D-2	114	60	93	41	11	楕円	皿状	△			1		加曾利B3	
D-5	96	92	73	73	30	円	椀状	○						
D-6	74	72	56	54	24	円	皿状	△	敲石1					
D-7	112	112	100	95	28	不定形	皿状	◎	打斧1・砥石1		5		安行3a	
D-10	160	144	143	128	34	楕円	皿状	△			3		中期-後期	
D-11	203	112	188	98	14	不定形	皿状	△					晩期	
D-12	145	102	129	76	20	楕円	皿状	○			3		安行3c(天神)	
D-13	*132	*70	*112	58	32	円?	椀状		?		?		加曾利B	
D-14	82	*52	64	*45	15	円?	皿状	△			1			
D-15	62	84	39	56	42	楕円	椀状				1			
D-18	90	63	73	46	35	楕円	椀状	△						
D-20	*60	97	*54	88	19	隅円方形	皿状	△			1		中期-後期	
D-22	148	83	131	68	20	不定形	皿状	△	石皿1・凹石1		1		加曾利E?	
D-23	162	138	133	114	36	円	皿状	◎	打斧1		1	2	1	堀之内2
D-25	90	94	69	71	28	円	椀状	△						
D-26	165	174	139	140	54	円	椀状	○	石鏃1		2	1	4	加曾利B3
D-28	132	133	104	111	25	円	皿状	○	磨斧1・SCB1		2	3		後期初頭
D-29	103	122	87	108	20	楕円	皿状	◎	石錘1		2	2		加曾利B2
D-30	96	*106	77	88	25	円	皿状				1	2		
D-31	120	122	119	110	45	円	袋状	○	石鏃2・打斧1 石皿1・凹石1 SCA2・SCB1・RFA2		15	3	1	五領ヶ台
D-34	*70	*152	*64	*132	31	不定形	皿状	◎	石鏃1・SCA1 砥石2・敲石1		15	3	3	加曾利B1
D-35	195	200	120	116	77	円	椀状	◎	石鏃1・打斧1 磨石1		10	5		加曾利B1-B2
D-36	99	67	88	56	43	楕円	椀状	△	打斧1		1	1	1	加曾利B3-高
D-37	92	134	70	90	32	楕円	皿状	△			9	2	2	加曾利B2-高
D-38	122	96	92	73	42	楕円	椀状	△						加曾利B3
D-39	75	109	42	76	44	楕円	椀状	△	砥石1		1	1		高井東
D-40	68	88	54	68	40	楕円	椀状	△						高井東

※数値の単位cm *は現存部の長さ 土器：◎>1000g, ○>500g, △>1g

第16表 土坑観察表

木柱が立てられていた可能性がある。

C区の土坑 C区の2基は出土遺物がほとんどなく時期・性格など明確なことは不明である。平面形態は、恐らく2基ともやや大形の楕円形で、断面形態は皿状・袋状を呈する。J-9号住D-1では加曽利E式土器が出土しているが、1片のみであり時期を決定し得るものではない。

D区の土坑 この区からは1基の土坑が検出された。D-201は平面形態が円形で、断面形態は袋状となる。出土土器（第147図12～15）から諸磯b式（新）段階のものと判断され、時期的にみてJ-1号住居址・J-2号住居址と関係がうかがえる。

この土坑からは角礫状の良質の黒曜石製の原石が36点まとまって覆土中層から検出された。それ以外には打製石斧・リタッチドフレイクB類・磨製石斧等が少量出土しているのみであり、土器も少ない。こうした状態から、この土坑は埋没途中の段階に意図的に大量の黒曜石を入れられたものと判断される。黒曜石はいずれも未使用の状態であり、保管・隠蔽等の目的が考えられる。

（大工原 豊・林 克彦）

b 遺物

土器

〔前期の土器〕 本遺跡出土の諸磯式土器は、諸磯b式土器の浮線文土器、沈線文土器、諸磯b～諸磯cにかけての土器がJ-1号住・J-2号住から出土している。

諸磯b式土器については、大下原遺跡・吉田原遺跡でも若干のべており、これを参照にしながらここでは各住居址出土の土器群について特徴を述べる。

1号住居址出土の土器 (第144・145・146図) 諸磯b式の浮線文の土器とともに平行沈線による施文の土器が出土している。諸磯b式土器の文様施文方法の変遷では、爪形文、浮線文、沈線文へと変化していく。本遺跡出土の土器は、口縁部が靴先状にとがる形態を持ち、施文される浮線文も扁平化し、矢羽根状に刻みが施されている。また、沈線による施文の土器についても沈線が集合化してくるものと、沈線による横位区画のない風車渦巻状の文様が乱雑になってくるなど諸磯b式土器の新しい時期に相当する。鈴木敏昭氏(1980)の言う諸磯b3式に相当すると考えられる。また、第146図21の土器は、四単位の波状口縁になり口縁部には、円形の丸い張り付けをしている土器である。地文に集合化した沈線で横位に区画した中を、斜位に施文しようとした上に粘土紐による鋸歯状の貼り付けを行っている。地文が諸磯式土器風でその上に粘土紐を張り付ける土器が新潟県や群馬から長野県の東部で見られる。大木式土器との関連も考慮に入れて今後考えて行かなければならない土器であろう。

2号住居址出土の土器 (第146図21・第147図) 下層から諸磯b3式と言われている土器と諸磯cになる土器が出土している。諸磯b3式土器は、集合化した沈線による風車状渦巻文を持つ。諸磯c式土器は、集合沈線により縦に区画された中を縦方向に鋸歯状の文様矢、対弧になる線を重ねたものが充填される。また、口縁部には、4単位でくびれを持たせ、そこに棒状の粘土紐を張り付ける。これは、諸磯b式土器の四単位の口縁状に獣面把手が付けられたものから、瘤状の貼り付け棒状の粘土紐へと変遷したものと考えられる。口縁に添っては、ボタン状の貼付文を施している。これらの特徴から、諸磯c式でも口縁部に文様帯に4単位の規制を持ち、粘土紐によるボタン状や、棒状の貼付が胴部にされない等の特徴から諸磯c式土器の古い段階のものとする。

(関根 慎二)

中期から後期の土器 天神原遺跡の縄文中期から晩期の土器は、住居址・土坑等の各種遺構や包含層から多量出土しているが、遺構から出土したものについては、他時期のものが多数混入しており、良好なまとまりを示すものは少ない。そのため、ここではグリッド出土のものを中心に群ごとに記述する。また、土器の記述に際し、個々の土器については詳細な説明は加えず、各群の内容（特に文様）について記述する。

[中期の土器] 中期Ⅰ群土器（第162図1～3）は五領ヶ台式であるが、全体の文様構成を窺えるような破片はない。2類の土器（2）が量的には多いが、この土器には雲母を多量に含むものとほとんど含まないものとが存在する。D-31号土坑からは本群の土器がまとまって出土しており（第160図1～5）、2類・3類土器が見られる。

中期Ⅱ群土器（第162図4）は阿玉台式であるが、この群も全体の文様構成を窺えるものはほとんどない。ほとんどの土器が雲母を多量に含んでいる。遺構出土のものはD-10号土坑等で検出されているが（第158図11）、何れも破片で混入したものである。

中期Ⅲ群土器（第162図5～11・13）は加曾利E3式・加曾利E4式・曾利式であるが、天神原遺跡で出土したⅢ群土器は、ほとんどが1類、2類に分類されるものである。この内1類に分類した土器の中には縄文を施すものと施さないものがあり、縄文を施さないものは施すものに比べ器面調整が粗く、また隆帯の施し方も雑である。この縄文を施さない1類土器は形式的に、次の後期Ⅰ群土器6類に系統的に変化すると思われる。

なお、5類に分類される曾利式土器はJ-4号住居址の炉址内から1片検出されているが、これも含めて2片しか出土していない。

[後期の土器] 後期Ⅰ群土器（第162図12・14・第163図・第164図1）は称名寺式（三十稲葉式に類似する文様をもつ土器群を含む）に比定されるものであるが、縄文を施すものと施さないものに大別される。縄文を施すものは、二沈線間に縄文を施した縄文帯によって曲線的な文様を描くもので、J字文やスパード文等が見られる。縄文を施さないものは沈線によって文様を描くが、列点を施すものは比較的少ない。一方、群馬県域では口頸部に隆帯を施す6類、7類土器が顕著に見られるが、本遺跡でも多量出土している。

遺構ではJ-5・9・11号住居址から本群の土器が多数検出されている。J-9号住居址では6類土器が埋設土器として検出されており（第150図2）、炉体土器が称名寺2式（1）であることから、称名寺2式の時期のものと判断される。J-11号住居址で検出された深鉢形土器（第150図3）は遺構（炉）として確認されたものではないが、胴部下半を人為的に打ち欠き、その割れ口を平らに研磨していることから炉体土器と判断された。器面全体に列点（刺突）を施す8類土器

はJ-5号住居址他から3点出土しただけで(第149図3・6・第164図1)、数量は多くないが、J-5号住居址の出土状況から称名寺式の終末から堀之内式の初頭段階のものと同判断される。

B区では器面に条線を多用した6類土器が埋設土器として検出され(第157図6)、覆土から土製腕輪の破片が検出されている。

後期Ⅱ群土器(第164図2~15・17)は堀之内1式・2式であるが、特に称名寺式の系統を引く堀之内1式土器が多くみられる。1類土器は称名寺式の系統を引いており、胴部には称名寺式の胴部文様の変化したものが施される。これらの土器群は関東西南部で「下北原式」(安孫子1981)と呼称されている土器群の範疇に含まれるものと思われる。口縁部に幅の狭い文様帯を持つが、この文様帯には円形の窪みと窪みとを結ぶ1本の沈線のみがめぐり、円形の窪みを縦に二つ並べ、その二つの窪みと二つの窪み間に2本の沈線がめぐり、その二沈線間に列点が施されたものがある。この文様帯は2類や3類にも見られ、堀之内1式の大きな指標となっている。小波状部には円形の窪み(貫通孔となる場合が多い)のみが施される場合が多いが、他に多種類の文様が施され、窪み(貫通孔)を中心に円(2・3)、()状沈線(8)、列点(2)等が施される。また、2類の胴部には3ないし4本の沈線が一組となった曲線の多い文様が施される。12は他に例を見ない破片であるが、おそらくこの群に比定される注口土器と考えられる。

遺構では、J-4・5・6号住居址、D-23号土坑等で検出されている。J-4号住居址では堀之内2式である4A類土器と無文の土器底部が炉体土器として検出されている。

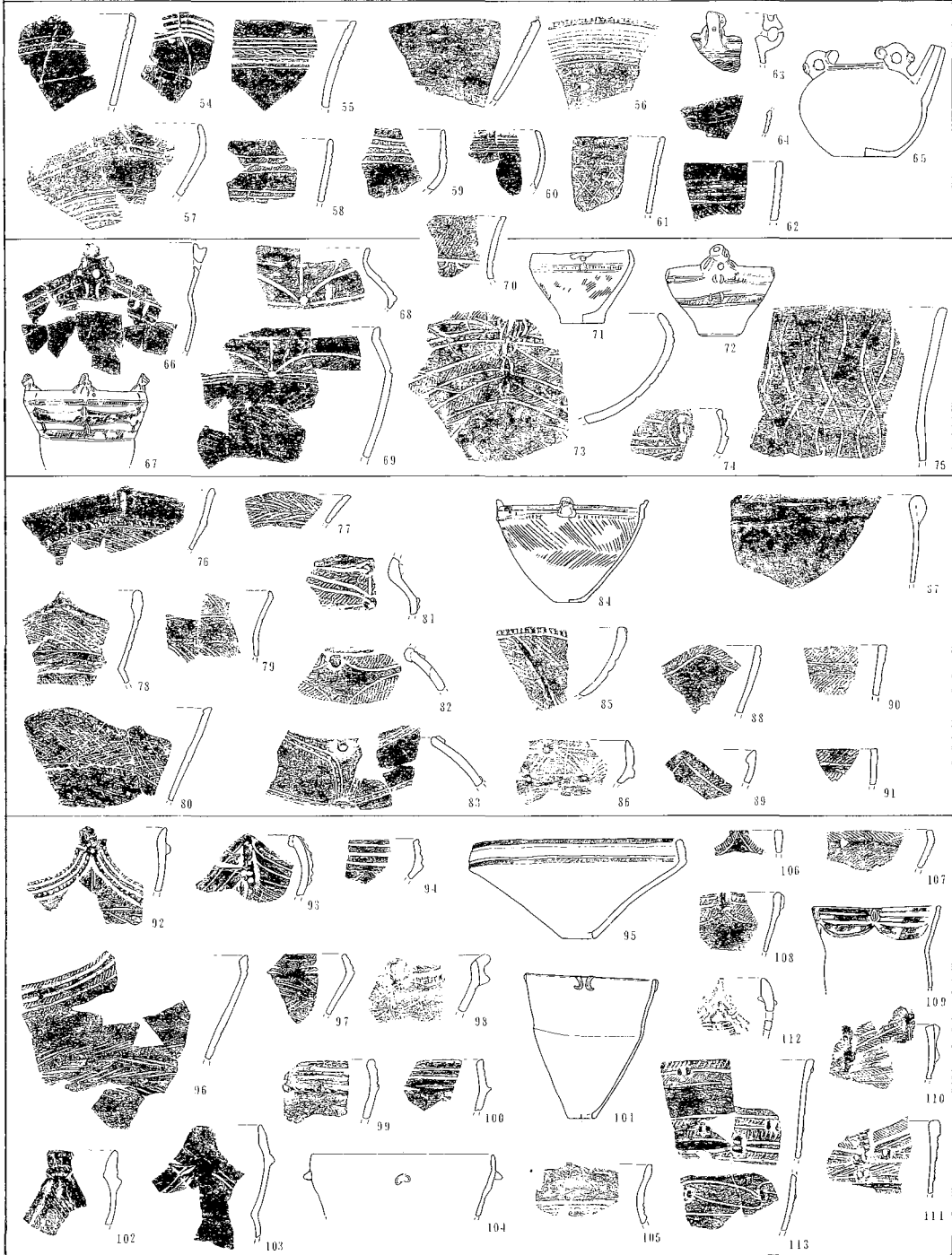
なお、明確に本群に伴う粗製土器を抽出することは出来なかった。

後期Ⅲ群土器(第164図16・18・第165図~第170図5・第175図・第176図1)は加曾利B1・B2・B3式で、平面的な磨消縄文を多用する。加曾利B式の段階になると本遺跡でも粗製土器が明瞭に現れ、また精製土器には多数の器種が存在するようになる。そのため、加曾利B式では多数の分類を行ったが、大別すると縄文を中心とする古手のものと条線を中心とする新手のものに分類することが可能である。1類土器(第164図16・18)は加曾利B式でも初頭のものと思われる。16は3単位の小波状口縁となる深鉢形土器であるが、器面に施される文様は幅の広い縄文帯で堀之内2式の文様(例えば13)に近い。18に施される文様は注口土器によく施される文様(第169図14)である。この1類と3類(第165図2~5)では口縁部が内側へ屈曲することは稀であるが、2類(1)・4類(6・8~11)では口縁端部が屈曲している場合が多い。出土量の多い5類(第165図14~第167図8・第175図1・2)・6類(第175図6)・9類土器(第167図13~21・第175図4)は口縁部が内側へ屈曲しており、5類では胴部にも外傾する屈曲部を持つ。この屈曲部には沈線や列点(刺突)帯・縄文帯が施され、口縁部文様帯、頸胴部文様帯を区切っている。5類では頸胴部文様帯に平行沈線による縄文帯が施されたものや、菱形状の磨消縄文が施されたもの、横位の弧状沈線による磨消縄文が施されたものが存在する。9類では口縁部文様帯にも弧状沈線(下向き)

	配石墓出土	遺構出土
加曾利 B1 式		
加曾利 B2 式		
加曾利 B3 式		
高井東式		

第289図 後期縄文土器の変遷(1)

グリッド出土



第290図 後期縄文土器の変遷(2)

が施されるが、まれにステッキ状となるもの（第167図16）や直線的なもの（15）がある。11類土器（第168図3～8）の口頸部文様帯には9類土器の口縁部文様帯に施される文様と同じ文様が施される場合が多いが、縄文部が逆のもの（4）や、弧状沈線が二本のもの（6・7）、弧線が向かい合うもの（8）も存在する。12類（第168図9～14）・13類（第168図15～20・第169図1～3）・14類（第168図21）は文様に斜方向の条線を多用する土器であるが、この条線は単方向のものや格子状のもの、羽状のものがある。

この群に含まれる粗製土器は、砲弾形の深鉢形土器がほとんどであるが、文様は多種のものが存在する。文様は単工具による簡易な文様が多く、磨消縄文が施されるものは稀である。

遺構では配石墓・土坑等で本群の土器が検出されており、第289・290図に時間的な変遷を示した。出土量が多く、時間的なまとまりを示すのはD-29号土坑（第159図12～14）・D-35号土坑（第160図6～15）で、特にD-35号土坑では、最上層から加曾利B2式（9・11・13～15）が、下層から加曾利B1式（8・10・12）がまとまって検出されている。また、加曾利B1式と考えられる埋設土器が1基検出されている（第157図5）。

なお、この群では注口土器や吊手土器、台付土器等も多数出土しているが、破片が多く全体の器形が窺えるものは少ない。

後期IV群土器（第170図6～26）は加曾利B式の終末から後期終末の時期のものと考えられるが、5類をはじめ東北南部から新潟方面によく見られる土器が多い。10は胴部が張り、内側へ強く傾く土器であるが、口縁部は上から見ると方形になるようである。この10の土器も含め3A類土器には円形の貼瘤が施されるが、どれも押圧を加え窪ませている。3A類土器には沈線あるいは隆帯で連続する山形の文様を施すものがあるが（13・14・19）、これらは器形や文様等から後期の終末に位置付けられるものと考えられる。

後期V群土器（第171図～第173図・第176図2～6・8）、後期VI群土器（第174図1～10・12・13・第176図7）、後期VII群土器（第174図11・14～28・第176図6）は後期終末に位置付けられる土器群である。これらの土器群はその文様から、それぞれ本地域・中部地方を中心に分布する土器群（高井東式）、南関東地方を中心に分布する土器群（曾谷式・後期安行式）、東北・北陸（新潟）地方を中心に分布する土器群（新地式等）に分類される。これらの中で量的に最も多いのはV群土器で、次いでVI群土器、そして南関東系のVII群土器が最も少ない。VI・VII群土器に対するV群土器の数量は約3倍である。

V群土器の特徴は地文に縄文を用いることが稀で、口縁に沿って数本の沈線（凹線）を巡らし、体部には文様を施さないか、斜条線（斜沈線）による簡易な文様を施すものが多いことである。沈線（凹線）が巡る幅の狭い口縁部文様帯には、沈線（凹線）が施された部分に稜が明瞭に残るもの（平面系：例えば第171図5～8・10・11等）と、稜の明瞭でないもの（凹凸系：例えば第172

図1・21等)があり、この違いは1類土器において特に明瞭に認識される。1類土器では口縁部文様帯が屈曲部によって明確に区切られており、沈線と縄文帯や列点帯、隆帯が組合わさった文様が施されているが、1B類(凹凸系)には他の文様(縄文帯など)が施されることが稀で、他の文様と組み合わされることの多い1C類(平面系)の方が、器面装飾が丁寧に施されている。平縁となる2類土器にも平面系(A類)と凹凸系(B類)が存在するが、A類(第172図16~21・第173図6・8)では体部に斜条線(斜沈線)が施されることが多いのに対し、B類(第173図1~5・7・9~13・15)では体部に文様の施されないものが多い。これらの相違は時間的前後関係を示しているものと考えられ、施される文様(縄文や矢羽状沈線など)や器形等から平面系が古く、凹凸系が新しいものと考えられる。

このV群土器のうち、1類土器では波頂部に大きな突起が付されるが、特に1B類では円筒状(第171図12・第172図12)、篋状(第171図8・13)、コップ状等の突起が加えられ、波底部や波底部よりやや波頂部側のところには、橋状のもの(17)や空豆大の貼瘤(突起)(第172図8)が貼り付けられる。この類の他にも貼瘤(突起)が付される土器は多く、ボタン状(第171図20・第172図19)、コーヒー豆状(第173図14・18)、三日月状(8・13・15)等の貼瘤(突起)や、押圧を加えた縦の隆帯(第171図1~3)が施される。また、口縁部文様帯と体部との境に、押圧あるいは刺突を加えた隆帯が施されることもある(第171図8・第173図12・16)。

遺構では配石墓や石棒祭祀遺構等で本群の土器が検出されている。断片的な資料が多いが、HT-3号柱穴群のP-1号ピットからは2A類の大形破片(第150図8)が検出されている。また、S-2号石棒祭祀遺構の東側部分からは後期Ⅲ群土器(所謂ソロバン玉)の系統に連なると思われる深鉢形土器(第155図3)が検出されている。

Ⅵ群土器も貼瘤(突起)を多用する土器群であるが、V群土器と異なり縄文を多用する。曾谷式、安行1式、安行2式に比定されるが、本遺跡で出土している破片数はいずれも十片に満たない。口頸部に隆起帯縄文が施されるもの(第174図2・4~6・第176図7)や、連続する弧線文(連弧文)が施されたもの(第174図3・7・9・第176図7)等がある。貼瘤(突起)は、その上に何も加えないものが施されたもの(第174図2・3・5等)もあるが、豚鼻状突起が施されたもの(6)もある。紐線文系の粗製土器は1個体のみの出土している(13)。紐線部は貼り付け隆帯で、条線はみられない。

Ⅶ群土器は瘤付土器(所謂新地式:第174図11・14~24・第176図6)と北陸(新潟方面)系の土器(25~28)に分類される。第174図11・15・16、19・20・23、25~27はそれぞれ同一個体である。瘤付土器には小さな貼瘤が1個ずつ施されたものと2個一対で施されたものがあるが、刻みを加えた縦長のやや大きな貼瘤(突起)が施されたものもある(11)。器形のバラエティは少なく平縁の深鉢形土器(1類)と注口土器(3類)がほとんどを占めるが、特に注口土器の割合が大き

い。北陸系の土器の出土数は図示した2個体(4類)で、いずれもピット出土である。これらの土器は口縁端部に隆帯あるいは縄文帯を巡らし、頸部は無文で胴部との境に3条の沈線(凹線)を施すものであるが、類例は余り多くない。新潟県の刈羽大平遺跡で出土している土器(埼玉考古学会他1992、図版1106-5等)が類例として挙げられる。

遺構ではS-3号通路状配石遺構に連なる門状配石の部分から、注口土器の頸の部分が発出されている(第155図1)。

【晩期の土器】 晩期1群土器(第177図・第178図・第195図1)は安行3a式あるいは大洞B式に比定されると考えられる土器群であるが、一部に、大洞B-C式期(安行3b式期)まで降る可能性のある土器群を含む。この群に含まれる土器群は安行2式の系統を引く土器群(1類~3類)と、安行3a式と大洞B式との分離が難しい土器群(4類~9類)に分類することが可能であるが、前者の出土量は少ない。1類は大波状となる深鉢形土器で隆起帯縄文が施されるが、付される貼瘤(突起)は南関東に見られるものとは若干異なるようである。また、この土器群と組成をなす紐線文系の粗製土器(3類)は一片(第177図8)出土しただけである。

一方、安行3a式と大洞B式との分離が難しい土器群には大波状の深鉢形土器は無く、小波状の深鉢形土器が主体を占めるが、他の器種も多数存在する。縄文を多用し、数段の文様帯が施される。第177図24・第178図1・6・7・13・21のように胴部に列点帯を施し、その列点帯によって口縁部(口頸部)文様帯と胴部文様帯を分離しているものがある。口縁部文様帯には口縁に沿って施されるハ字状の沈線と、それに沿うように施される単独の三叉文(所謂I三叉文)が組み合わさったものや玉抱き三叉文が施される。I三叉文が施されるものには、ハ字状沈線と口縁の間に縄文が施され、ハ字状沈線と頸部に施される横走る沈線の間が無文になるもの(第177図10~13等)とその逆のもの(14・18)、I三叉文の下部が延びて隣のI三叉文と連結し、ハ字状沈線との間に縄文を施したもの(24)等がある。また、縄文を施した上に、縄文のように見える刺突を加えたものがあるが(18)、文様帯が口縁部に限られていることや施文手法の雑さなどから、時間的により後出のものである可能性が高く、I三叉文が施された土器の一部が安行3b・3c式に降る可能性のあることを示している。

玉抱き三叉文には、独立しているもの(25等)と連結して三叉状入組文になっているもの(21等)がある。第178図9・10は口縁部が外傾し、その部分が縄文帯になる土器群であるが、両者の玉抱き三叉文がみられる。11・12・15・16は恐らく同一個体で、注口土器だと思われるが口縁部に彫刻的な玉抱き三叉文が施されている。なお、口縁部が外傾する縄文帯を持つ9・10は安行3b式に、22・23は大洞B-C式に含まれる可能性のある土器群である。

D-7号土坑で本群に含まれる注口土器(第158図6~8)が発出されているほか、S-5号祭

壇状遺構周辺で精製土器が多数検出されている。

晩期Ⅱ群土器（第179図～第185図・第195図2～9・第196図・第197図）は安行3b・3c式に平行する在地の土器群である。この土器群には、南関東の土器群と似るが細部で異なる安行3b式段階のものと、南関東の土器群とは明確に異なる安行3c式段階のものが含まれる。安行3b式段階の土器群は「板倉沼式」（鈴木他1982）の範疇に含まれるものも多いが、この段階で在地化が進行し、次の段階になって明瞭な地域性を持つことから、安行3b式段階の土器も含めて、この群の土器を「天神原式」と呼称しておきたい。

この土器群は「精粗中間形態」（藪田1972等）とも言うべき粗雑な土器が多く、胎土には大きめの砂粒を多く含む。また、表面を丁寧な磨いているものは少なく、一次的な調整が施されているだけのものが多い。時間的に安行3b式に近いものほど仕上がりは丁寧で、在地化（地域的に変容）したものほど粗雑である。縄文を施したものもあるが、縄文を施すべき所に刺突（列点もあるが少ない）を多用するものが特徴的であり、また、押圧を加えた貼瘤（突起）を付した土器が多い。この貼瘤（突起）には縦長のものや横長のもの、円形のものと日字状（第184図24・第196図1）・目字状（第182図10）のものなど多種のものが存在するが、波状口縁となる土器では波頂部下に縦長の、波底部下には横長或いは円形のものが付される場合が多い。文様は安行式の系統を示すもので、大波状口縁深鉢が明瞭に存在するが、安行3c式段階のものは口縁部が低位化し、くびれ部の位置が器高中位から器高上位に移行している。安行3c式では胴部に連続する下向きの弧線が施されるものが多いが、本群では同じ文様は存在せず、単発的な下向きの三日月文が施されたもの（第180図7・21・22等）が存在する。器種は深鉢形土器が主体を占め、広口壺形土器、台付鉢形土器がそれに次ぐが、その他の器種は極めて少ない。特に時期的に新しくなるほどこの傾向は顕著になる。1類、2類土器は安行式の大波状口縁深鉢の系統を引くものであり、大波状口縁に規定される口縁部文様帯とくびれ部直下に施される頸胴部文様帯に文様が施される。口縁部文様帯には八字状の縄文帯と横走る縄文帯よりなる三角形のもの、八字状の縄文帯とそれと線対称を成す縄文帯によって構成される菱形状のものがあるが、縄文を施した菱形状のものは少ない。三角形に区画されたものの内部には三叉文（第180図13）、三叉状入組文（第179図11）が、菱形状に区画されたものの内部には（）状文（第179図15・第196図1）が施されたものが多い。この口縁部文様帯の八字状の縄文帯が施される部分に、押圧を伴った隆帯が施される場合が稀にあるが（第180図8・第181図1・4）、これらの土器に縄文が施されたものはない。頸胴部文様帯にはレンズ状の文様や三叉状入組文が施され、胴部以下は縄文あるいは無文となる。第179図17は14と同一個体で、胴部以下が縄文となる土器であるが、この縄文部には福島方面の大洞B-C₂式に見られる綾線文（結節縄文）が施されている。平縁となる3類、4類土器ではしばしば口唇部に刺突あるいは押圧を伴い、刺突（押圧）を伴わない土器にはB突起が付される場合が

多い。第183図11は恐らく3類土器であるが、隆帯と貼瘤によって人面を模した装飾を施している。

なお、第196図8は第Ⅲ群土器と同様な文様構成をとる土器であるが、器面の調整が粗いことや文様施文の粗雑さ、列点（刺突）が多用されている点等から本群に分類される。また、第185図16・17・19は恐らく同一個体であるが、裏面に発達した文様が施される点や、器面の調整が丁寧に行われている点で本群の主体となる土器群とは異なる。

遺構ではS-4号配石墓やS-2号石棒祭祀遺構から、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器を伴い、まとめて出土している。

晩期Ⅲ群土器（第186図～第189図1～17・第198図1～9）は大洞B-C式・C₁式に比定されるものであるが、若干大洞C₂式と思われる土器を含む。大洞B-C式は大洞B-C₂式がほとんどである。Ⅱ群土器と異なり、器種がバラエティに富む。第186図・第198図1・3は平縁の深鉢形土器で、頸部にくびれを持つもの（5～33）と持たないもの（1～4）がある。何れも口縁部に数条の沈線を基本とした文様を施す（口縁部文様帯）。頸部でくびれるものはくびれ部直下にも数条の沈線を基本とした文様を施す（頸部文様帯）。この両文様帯には刺突ないし列点を伴うものが多いが、截痕となるものは少ない。両文様帯間および胴部には縄文が施され、口唇部には刺突を伴うものが多い。第187図・第188図1～8・第198図5・9は浅鉢あるいは鉢形土器で台を持つものもある。口縁端部に数条の沈線を基本とした文様が施され、体部には入組文や雲形文が施される。稀に内面に文様を持つものがある（第187図9・10）。第188図9～24・第189図1～13・第198図2・4・6・8は壺形あるいは広口壺形土器で、胴部が球形で頸部ですぼまるものが多いが、細長い壺形土器（第189図13）も存在する。胴部上半に文様帯を形成し入組文や雲形文が施されるが、口頸部は無文のものが多い。

この群の土器は東北地方の大洞式に文様が類似するものであるが、器壁が厚い点や文様が簡単な点、施文技法が単純な点などから東北地方からの搬入品である可能性は少ない。しかし、中部地方や北陸（新潟方面）地方の大洞式とは文様にかんがりの共通性が認められ、この地方から搬入された可能性は残されている。

晩期Ⅳ群土器（第189図18～25・第190図～192図・第199図）は中部・北陸地方の晩期縄文土器に系統が追えるものであるが、時期的には安行3 a式から安行3 c式（あるいは3 d式）に平行するものである。第189図18～25は深鉢形土器であるが口縁部に列点帯を持つもの。第190図・第199図5は口縁部あるいは頸部に1条（稀に2条）の刺突（押圧）を伴った隆帯が施されるものである。器種は深鉢形土器と壺形土器が存在する。隆帯とそれに伴う貼瘤以外に文様が施されることは稀で、地文は無文のものが多い。第191図1～9は入組文系の土器で6～8には所謂雷文が施されている。第191図10～18・第192図1・第199図1・2は頸部でくびれる深鉢形土器で口縁部は幅の狭い縄文帯ないし無文帯で、くびれ部直下に文様帯を施すものが多い。この文様帯には列点帯

に挟まれた粗大な工字文が施されもの（所謂佐野Ⅱ式）が多く、時期的には大洞C₂に平行するものとされている（大原1981、南1992）。第192図2～12・第199図3は壺形土器でⅢ群の壺形土器と同じく胴部上半に文様帯を施す。浅鉢形土器（第192図14～19）には口唇部に文様を施すものがあるが（19）、第191図20とともに中屋式に比定される。

なお、以上のⅣ群土器の中には大洞式類似のものも含まれているが、それらのものについては中部・北陸（新潟方面）地方で独自に変容したものと考え、この群に含めた。

晩期Ⅴ群土器（第193図・第194図）は無文の粗製土器である。口縁部に粘土紐を数段重ねた1類土器や口唇部に刺突ないし押圧・刻みを持つ2類・4類土器が多くみられる。何れも器面調整は粗く、その後に研磨せず調整痕を明瞭に残すものが多い。1類土器では折り返し部に二列の刺突を伴うもの（第194図1～4）や、口唇部に刺突を加えるもの（第193図23）がある。また16のように裏面に条痕を施すものがあるが、二枚貝による条痕の可能性がある。なお、これらの土器群は従来折り返し口縁深鉢と呼ばれることが多いが、実際、口縁部を折り返しているものは少なく、口縁端部に粘土紐を貼り付けているものがほとんどであり、折り返し口縁の名称は不適当だと考えられる。粘土紐が多段に貼り付けられているものもあることから、しばしば用いられる「有段口縁」という名称を使用したい。

晩期の無文粗製土器では、他に素口縁の土器が多く存在すると思われるが、後期の土器と区別することが出来ず、晩期の土器として抽出することが出来なかった。ここで晩期として抽出出来たものは何れも「天神原式」に伴うと考えられるものである。

晩期Ⅵ群土器（第198図10）は全面に条痕を施した土器で1個体みの出土である。表面は横位あるいは斜位の条痕が施され、裏面には、口縁部に横位の、同部以下には縦位の条痕が施される。条痕は凹状に窪んでいるものと、丸く窪んでいるものがあり一定しない。条痕の施文は二枚貝によるものではなく、束ねた棒状工具によるものではないかと思われる。この条痕は器面調整のためのものであるが、他の縄文晩期の同様の器種を見ると、いずれも表面は横位あるいは斜位の調整で、裏面は口縁部が横位、胴部以下が縦位の調整を施しており、調整の仕方が同じであることは明かであり、結果的な文様である可能性が高い。晩期Ⅴ群土器に裏面に条痕を施した土器が存在することから、本群の土器も天神原式の時期のものであると考えられる。なお、本群に類似する土器が埼玉県川口市の精進場遺跡で出土している（鈴木1993）。

土製品

【土偶】（第200図・第201図1～13） 土偶あるいは土偶の一部と見られるものは、全部で40点出土している。完形品は無く、全て破損している。明確に晩期のものと解るものは少なく、大半は後期の山形土偶に分類されるものである。第200図1～3は頭部を残すものであるが、眉・鼻が

隆帯で表現され、おちょぼ口になっていることから、縄文後期の山形土偶と考えられる。1・2は耳の部分に穿孔している。1は腹部に円形の窪みを有し、首や腰の部分に刺突列を施している。4は頭部を欠く。首の部分はクレーター状に窪んでおり、腹部には突起を有する。腹部以下は細線が無造作に施され、パンツ状の文様となっている。6～11・19は胴部のみのもので、6・7・9・10は乳房を貼り付けている。6は左腕の部分に刺突の痕跡がみられる。10には左肩から腰まで続く穿孔がみられるが、腰より下の部分がないため貫通していたかどうかは明かでない。同様の刺突が右肩に3箇所見られる。体部の文様は刺突による。12は肩の部分のみであるが、中空で背面に渦巻の文様を施した大型の土偶である。13・17は腕の部分、14は腰の部分のみのものである。15～18・20～23・第201図1～6は脚の部分である。第200図15・16以外はつま先を表現しており、膝の部分に突起を有するものが多い。第201図6は脚の裏に刺突がみられる。7は脚の部分であるが、彫刻的な三叉文を施していることから晩期のもと思われる。8～10はS-4号配石墓出土のもので、晩期のもと考えられる。8はみみずく土偶の左耳の部分である。9は耳に穿孔し、眉の部分に刻みを施している。10は中空の土偶である。11は遮光器土偶の左肩の部分で、12はI字文が施される晩期の土偶である。13は脚の部分であるが、いぼ状の突起が多数付されている。

【耳飾り】（第202図13～48） 耳飾りは全部で40点出土している。形態によって数類に分類できる。13は片側に窪みを施し、一方は丸みを帯びる形態のもの。14は短い棒状のもの。15～30は臼形と呼称されているものであり、15～17は小型で中央に細い中心孔を有する。18は小型で側縁に明瞭なくびれを持ち、窪みを施した部分には、稜を明瞭に残す。19～26は両面を窪ませたもので、この窪みの部分が丸底状になるもの、平坦なもの、円錐状になるものがある。25は窪みの部分が円錐状を呈するもので、細い中心孔を有し、片側に文様を持つ。この文様は細線で描かれるが、文様を施さない部分は、削り取られている。28～30は片面に文様を施し、反対側を円錐状に窪ませるもの。28・30は明瞭なくびれを有する。30は彫刻的に文様を施す。31～48は環状になるもので、断面形態によってさらに細分される。31～33・41は断面が三日月状あるいは棒状になるもので、41には細線が施され、三叉文等が彫刻的に施される。35・42は内側に沈線が1条めぐるもの。36～40・43～46・48は片側が内側に屈曲した鍵状の断面形態をとるもの。文様を施すものは、入組三叉文や玉抱き三叉文が施される。47は大型の漏斗状になる耳飾りの破片である。

【土製腕輪】（第202図1～11） 全部で15点出土している。完形品はなく総て欠損している。復元すると楕円形の環状で、一部がやや尖る形状になると思われ、貝輪の形状に似る。縄文を施したものと無文のものが存在するが、縄文のものは最後にナデ調整を施すのに対し、無文のものは粗いケズリの調整痕を明瞭に残している。色調や胎土、出土分布状況から後期初頭の称名寺式あるいは堀之内1式段階のもと思われる。同様の土製品は笠懸町阿左美遺跡で、後期前半の住居址の埋没土中から出土している（若月1988）。

【ミニチュア土器】（第201図14～20・32） 全部で11点出土し、様々な器種が存在する。17は注口土器で橋状把手が付いていた痕跡がある。19は楕円形の浅鉢状の土器であるが、2個一對の孔が2箇所にあけられており、蓋と考えられる。同様の土製品は堀之内1式期の上鶴ヶ谷遺跡で出土している（内田1988）。20は濃い赤褐色で、器面はきれいに研磨され杯状を呈する。

【手燭形土製品】（第201図21） 1個体のみ出土である。二重の同心円と三叉文が彫刻的に描かれる。煤などの付着はみられない。縄文晩期前半のものであろう。

【土版】（第201図22） 1個体のみ出土。厚手で、半分以上欠損している。粘土紐によって目を作り出しており、表裏面とも斜位の沈線が施される。晩期前半期のものと思われるが、類例はほとんど認められない。

【その他の土製品】（第201図23～31） 23はほぼ完形で、平坦面には沈線による渦巻文が施されるスタンプ形土製品。24は手握ねの舟形土製品である。25～27は同じ機能・用途を持つものと考えられるが、細長い形状で頂部あるいはそのやや下から斜め下方に穿孔している。類例が埼玉県の御陣山遺跡（中村和夫他1987）で検出されている。29・30は、形状が類似するが、29はきれいにへら磨きが施されている点、30は一面に平坦面を持つ点で異なる。28はタイヤのような形状をした完形品である。31はミニチュア土器であろうか。何れも機能・用途は不明である。

（林 克彦）

石器

1) 石器組成

時期別・遺構別石器組成

天神原遺跡は前期～晩期にかけての複合遺跡であり、前期後半：集落→中期末～後期前半：集落→後期後半：墓域→晩期：祭祀領域と遺跡の性格が変化する。そこで、時期の明らかな遺構に伴う石器群について、石器種別組成と器種組成を検討する必要がある。以下、時期別・遺構別に分析することにする。

前期後半の遺構の石器組成（第291図）

種別組成 この時期の遺構としては、J-1号住居址・J-2号住居址がある。いずれの住居址も廃棄の場として用いられたと推定され、両住居址とも種別組成は類似している。A類は活発な石器製作的パターンを示すが、B類は低調な石器製作的パターンを示している（パターンA1）。ここでは諸磯b終末～諸磯cの時期には、A類石器を集中的に製作する場所として利用されていたものとみられる。このパターンは、榎木畑遺跡（大工原他1990）で認められたものであるが、中原遺跡（関山I段階）や大下原遺跡（有尾～諸磯b段階）など中野谷地区では見られなかったパターンである。

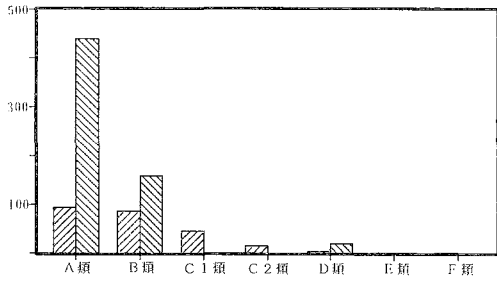
器種組成 両住居址とも類似したパターンを示しており、A類石器とB類石器が多い点が特徴である。A類石器ではスクレイパーA類やリタッチド・フレイクA類が多く、B類では打製石斧とスクレイパーB類が多い。また、C1類では凹石が多い。これらの器種が多いパターンは標準的な器種組成であり、A類石器が全体的に多い点が本遺跡の器種組成の特異性と言えよう。

石材組成 両住居址とも類似したパターンを示す。個数組成では黒曜石（I類）が圧倒的に多く、頁岩（II類）、安山岩（III a類）の順である。ところが、重量組成では安山岩が圧倒的に大きな値を示し、黒曜石は非常に小さな値しか示さない。このように、統計学的手法により組成比率を求める時には計測方法により全く別のパターンを示してしまうので、注意が必要である。

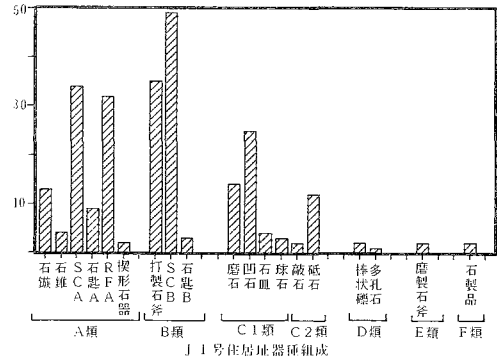
中期末～後期の遺構の石器組成

住居址の石器組成（第292図～第294図） ここで扱う住居址は中期末から後期前半のものであり、この時期の石器組成の様相を強く示していると判断される。しかし、土器の占有率からみて、J-7～9号住居址では、後期後半の石器も相当数混在していることが推定される。

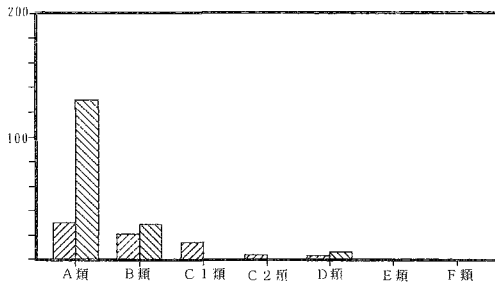
なお、遺物出土状況の項でも述べたが、ここで扱う住居址は遺存状態の著しく悪いもの（J-



J 1号住居址種別組成

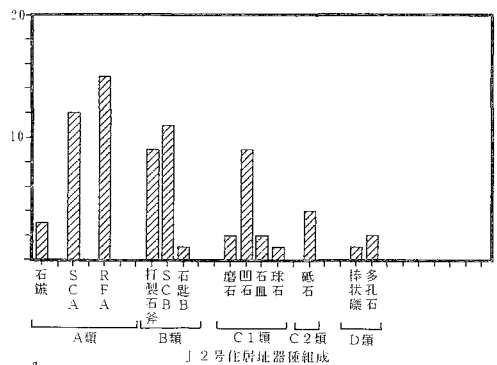


J 1号住居址石器組成

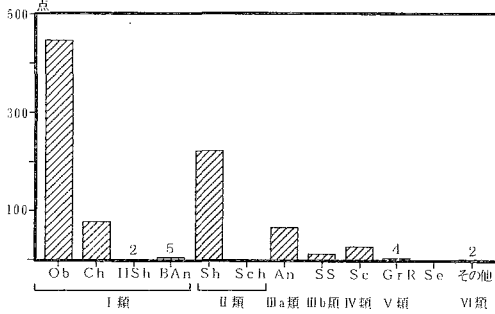


J 2号住居址種別組成

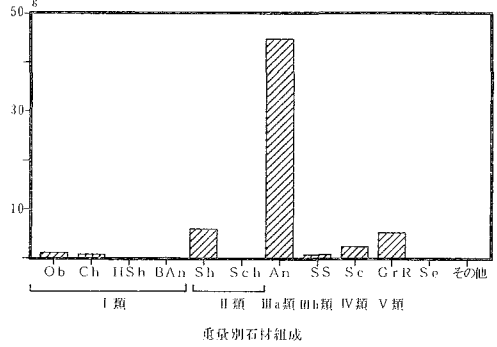
▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石



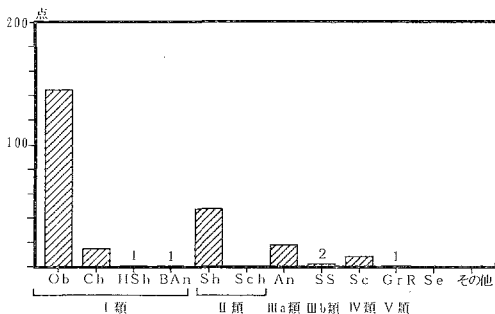
J 2号住居址石器組成



J 1号住居址石材組成

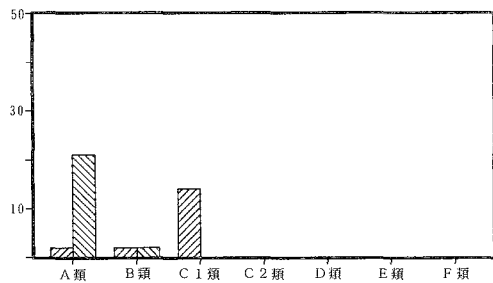


重砂別石材組成

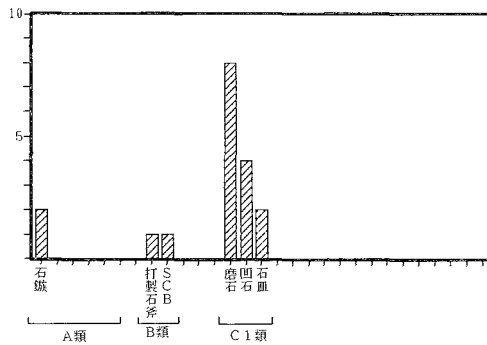


J 2号住居址石材組成

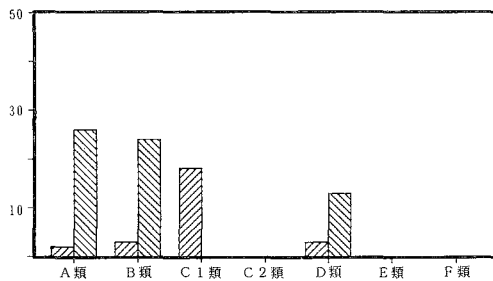
第291図 前期の住居址の石器組成・石材組成



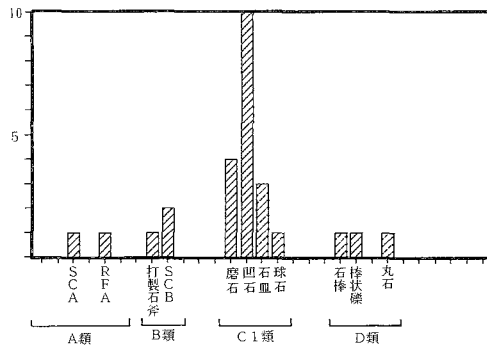
J 3号住居址種別組成



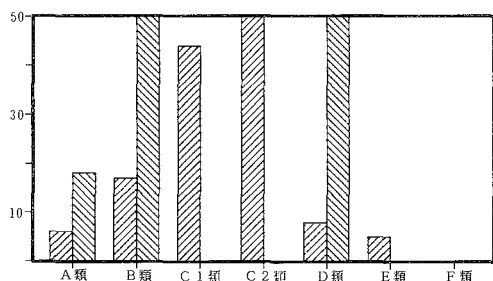
J 3号住居址器種組成



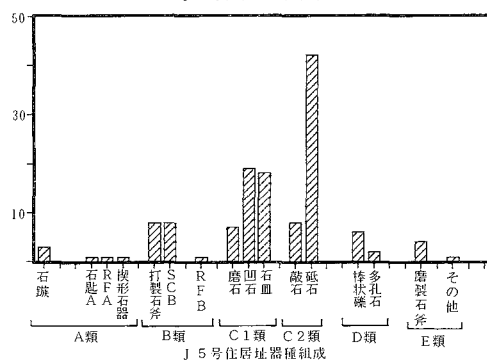
J 4号住居址種別組成



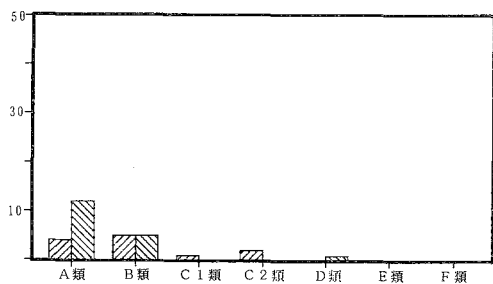
J 4号住居址器種組成



J 5号住居址種別組成

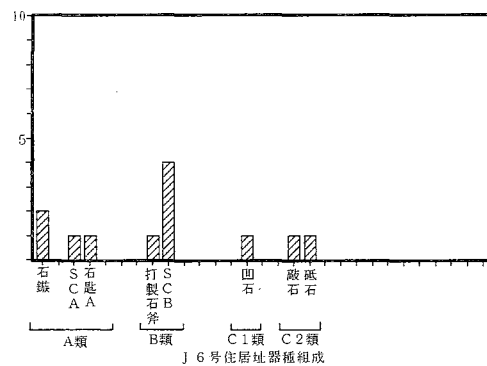


J 5号住居址器種組成



J 6号住居址種別組成

▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石



J 6号住居址器種組成

第292図 中期末～後期の住居址の石器種別・器種組成(1)

3・J-6・J-10)、敷石が抜き取られたと推定されるもの(J-4)があり、これらの住居址は遺存状態が悪い。したがって、それ以外の住居址を中心に石器組成を調べることにする。

種別組成

後期前半のJ-5号住居址はA類は低調な石器製作のパターンを示し、B類は活発な石器製作のパターンを示し、C1類石器・C2類石器・D類剥片が多い独特のパターンを示す。住居址の項でも述べたが、C2類石器(砥石)・D類剥片は床材として用いられた可能性が高いものである。基本的にはパターンa1と判断される。

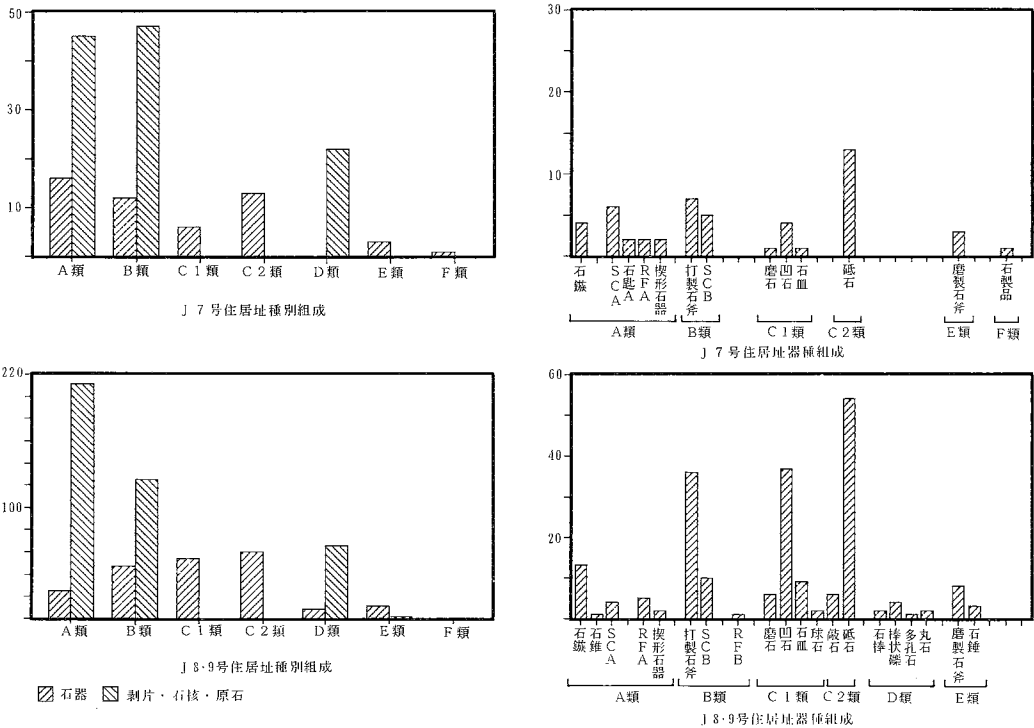
また、後期前半のJ-7、J-8・9号住居址ではパターン1aである。

この時期の住居址の特徴はD類が比較的多い種別組成を有する点に特徴がある。

器種組成 後期前半のJ-5号住居址は、A類・B類石器は少ないが、C1類石器(凹石・磨石・石皿)がやや多く存在する。C2類に属する砥石が多いのは床材利用のためと推定される。D類(棒状礫・多孔石)・E類(磨製石斧)はいずれも少ない。

後期前半の住居址では、J-8・9号住居址は打製石斧・凹石・砥石が多いのに対し、J-7号住居址では砥石は多いものの、打製石斧・凹石は少なく、この点に差異が認められる。

石材組成 個々の住居址により差異が認められるが、全体としては、石材種別ではI類(黒曜石等)・II類(頁岩等)・IIIa類(安山岩)・IV(結晶片岩)類が多く、V類(緑色岩類等)・VI類(その他)は少ない。特に、石鏃等A類石器の素材となる石材I類では黒曜石が圧倒的に多い

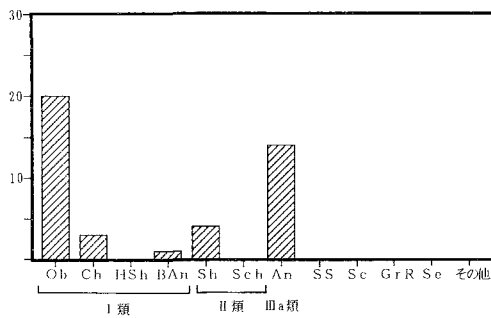


第293図 中期末～後期の住居址の石器種別・器種組成(2)

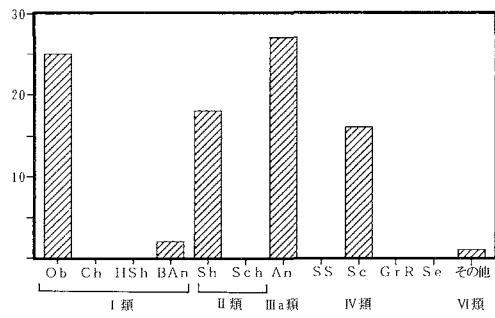
傾向を示している。

後期前半の J-5 号住居址では、I 類石材は非常に少なく、II 類（頁岩）・III a 類（安山岩）・IV 類（結晶片岩）が多い。この石材組成のパターンは他の住居址と大きく異なっている。

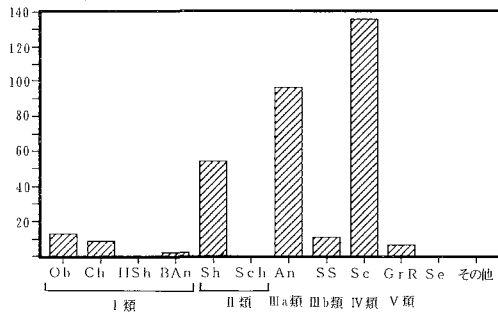
この時期の石材組成では、I～III 類といった伝統的に多数を占める必需的石材以外に、IV 類（結晶片岩）が増加するのがこの時期の特徴と言える。



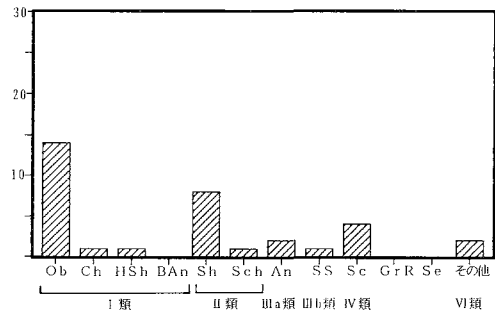
J-3 号住居址石材組成



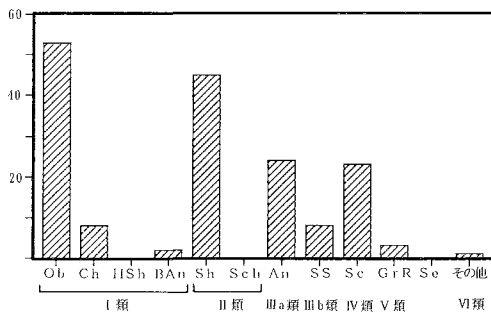
J-4 号住居址石材組成



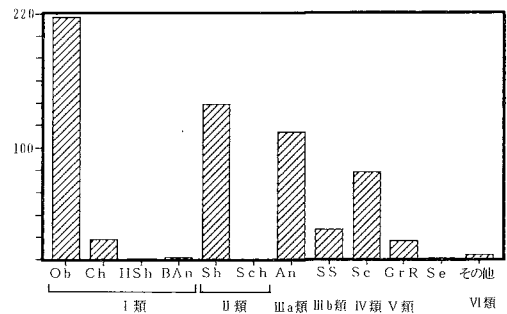
J-5 号住居址石材組成



J-6 号住居址石材組成



J-7 号住居址石材組成



J-8-9 号住居址石材組成

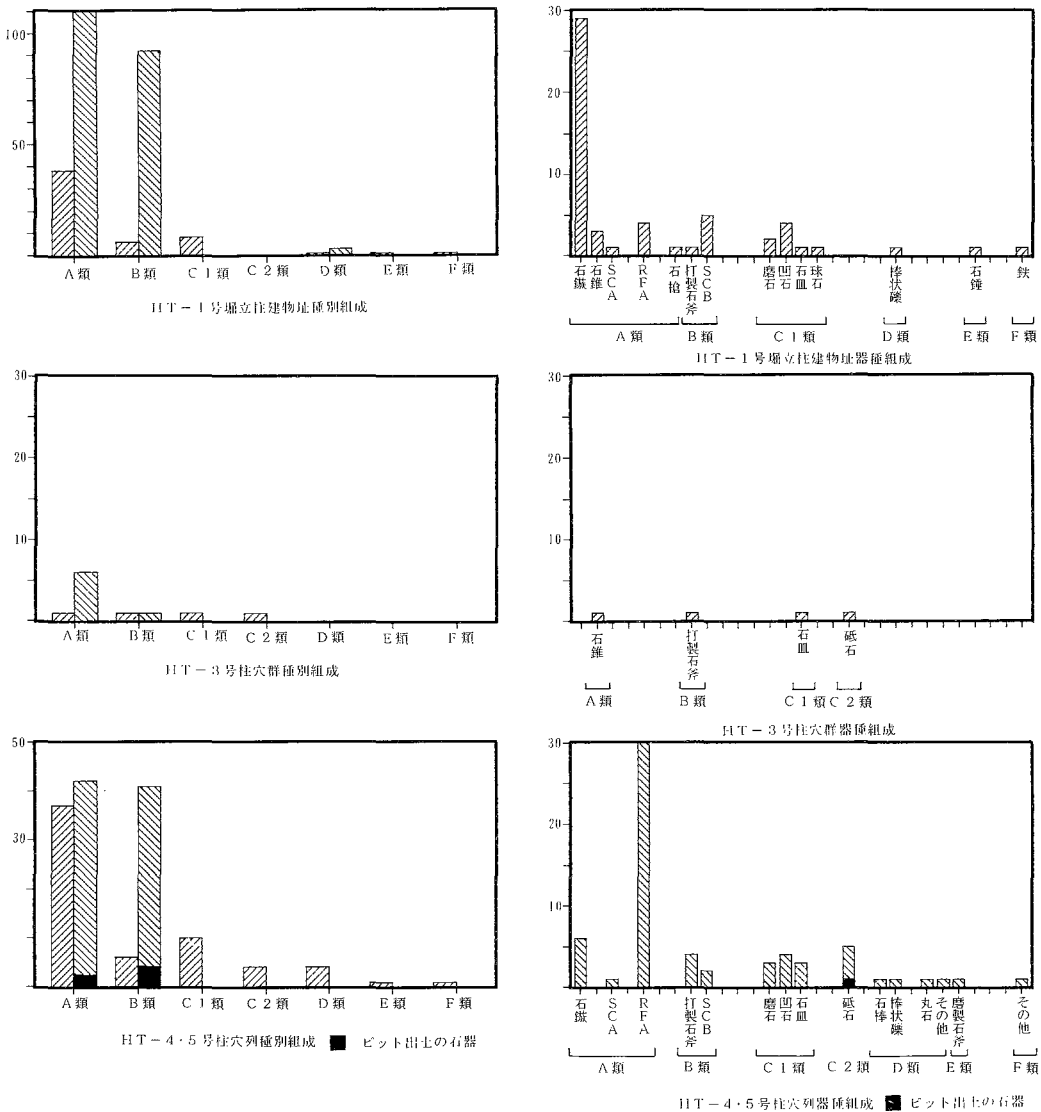
第294図 中期末～後期の住居址の石材組成

後期後半～晩期の遺構の石器組成

掘立柱建物址等の石器組成 (第295図・第297図)

種別組成 HT-1号掘立柱建物址ではパターンA1を示す。また、HT-3号柱穴群ではパターンa2を示す。HT-4・5号柱穴列ではピット中の遺物はパターンa1であるが、この部分の包含層を含めた場合、パターンB1を示す。

器種組成 HT-1号掘立柱建物址では石鏃が圧倒的に多く、それ以外の器種は若干存在するのみの偏った組成を示す。また、HT-4・5号柱穴列では、周辺部分を含めると、リタッチド・フレイクA類が突出しており、それ以外の器種は少ない。このように両者ではA類でも突出する器種が異なっており、構築物の用途等の違いを反映していると推定される。



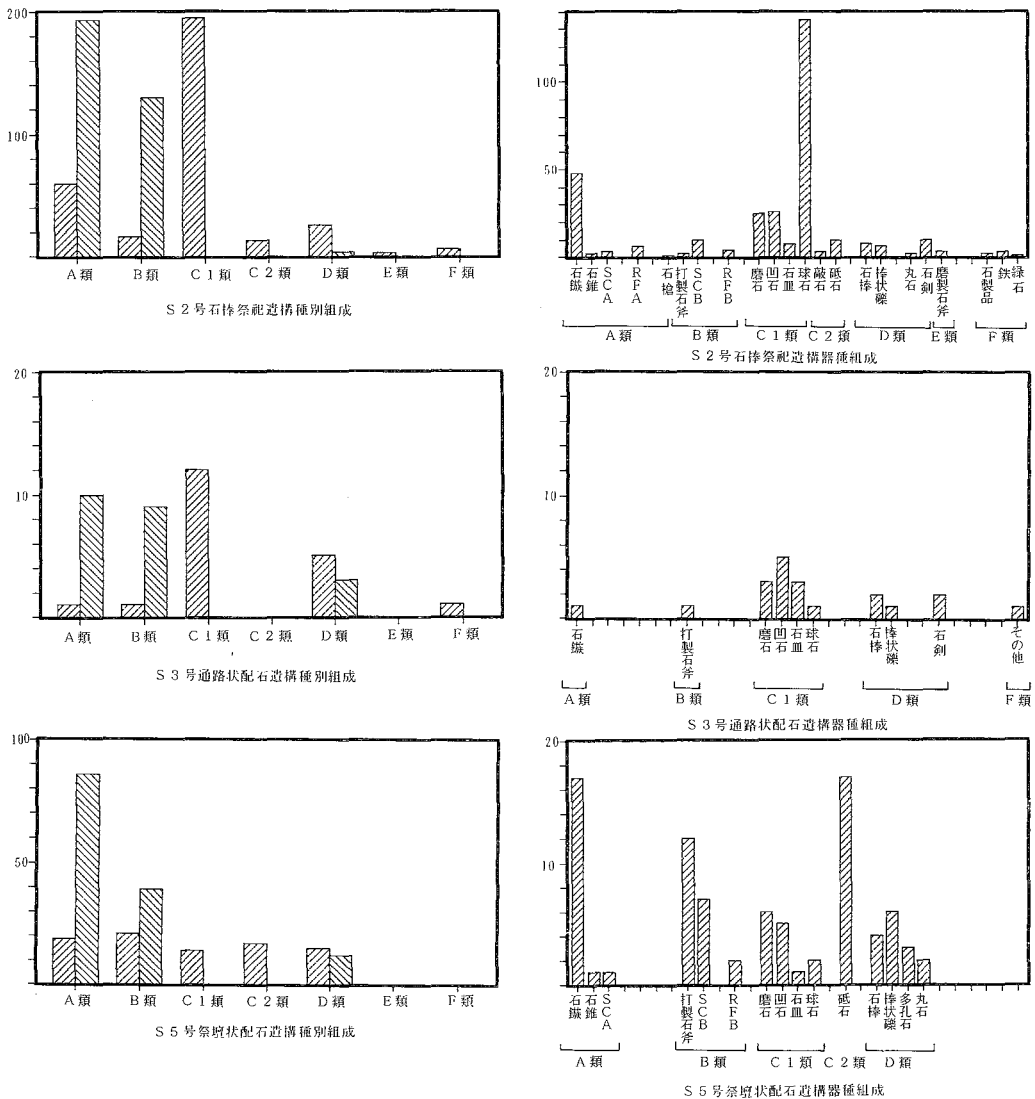
第295図 掘立柱建物址・柱穴群等の石器種別・器種組成

石材組成 HT-1号掘立柱建物址では黒曜石・チャート・硬質頁岩・黒色安山岩といったI類が多い。特に、黒曜石は突出している。また、II類の頁岩も突出して多いが、この遺構は晩期のものであり、石鏃の素材として頁岩が多用されているためと判断される。また、VI類に属する鉄鉱石が1点柱穴中から検出されており、注目される。

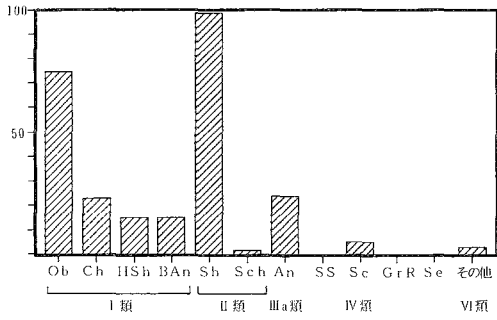
HT-4・5号柱穴列もほぼ同様の傾向を示し、黒曜石・頁岩・安山岩も多い。

石棒祭祀遺構・配石遺構の石器組成 (第295図・第296図)

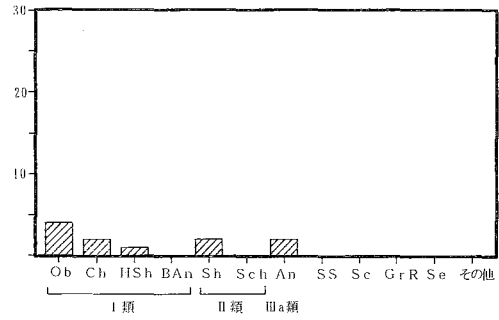
石器種別組成 S-2号石棒祭祀遺構では、基本的にはパターンA1を示すが、C1類石器が突出する点は特異である。S-3号通路状配石遺構では、基本的にはパターンa1を示すが、C1類



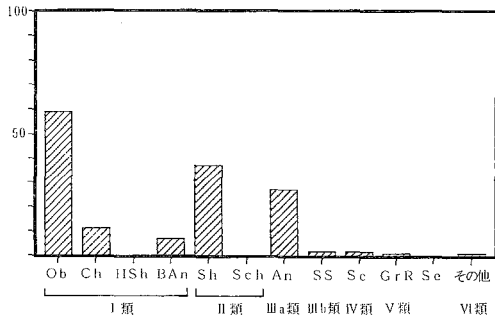
第296図 配石遺構の石器種別・器種組成



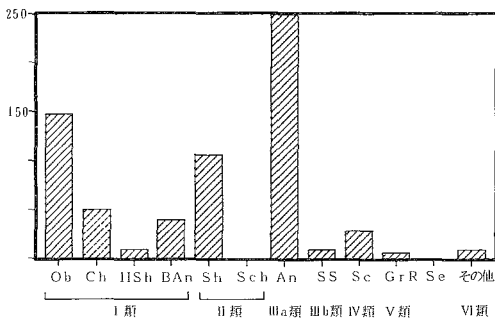
HT-1号堀立柱建物址石材組成



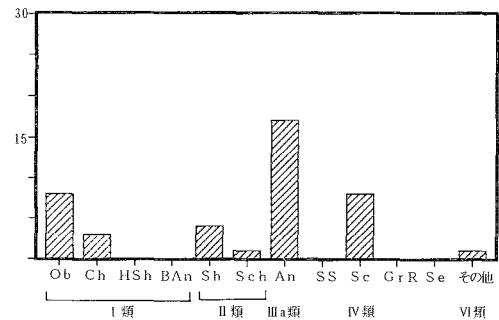
HT-3号柱穴群石材組成



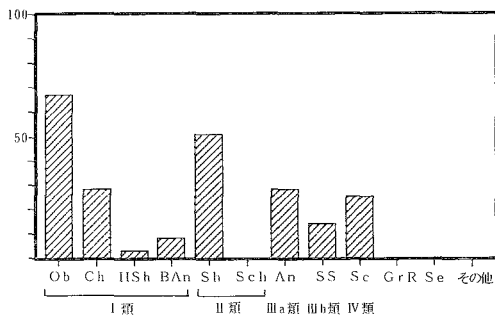
HT-4・5号柱穴列石石材組成



S2号石棒祭祀遺構石材組成



S3号通路状配石遺構石材組成



S5号祭壇状配石遺構石材組成

第297図 堀立柱建物址・柱穴群・配石遺構の石材組成

石器が多い傾向がある。また、S-5号祭壇状遺構では、単純なパターンA₁を示す。

器種組成 S-2号石棒祭祀遺構には多種多様な器種が存在するが、石鏃とC1類に属する球石・磨石・凹石が多い傾向が認められる。特に球石は圧倒的に多く非常に特異な組成を示している。また、D類では石棒・石剣がやや多い傾向がある。特筆すべきものとしてはF類に属する鉄鉱石が3点存在する点である。S-3号通路状配石遺構では、C1類に属する凹石・磨石・石皿が多く存在する。また、石棒・石剣も若干存在する。また、S-5号祭壇状遺構は、多種多様な器種が少量ずつ存在する。A類では石鏃、B類では打製石斧・スクレイパーB類、C1類では磨石・凹石、C2類では砥石、D類では石棒・棒状礫・多孔石・丸石などが存在しており、この中では石鏃・打製石斧・砥石が多い。この遺構は晩期に属するが、打製石斧と砥石が多い点は非常に特異な存在である。

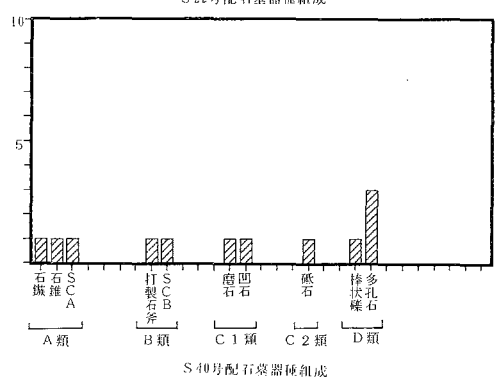
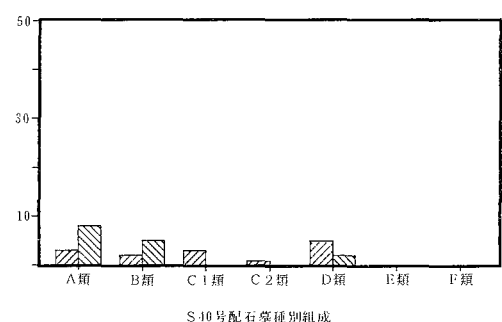
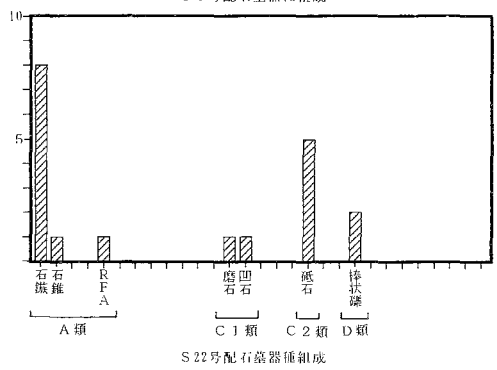
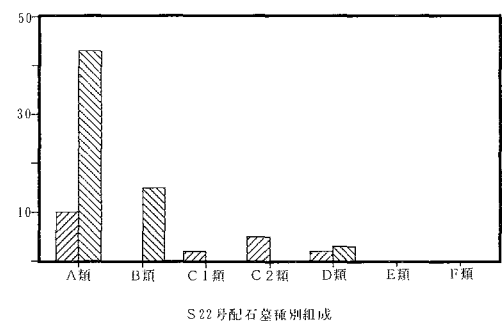
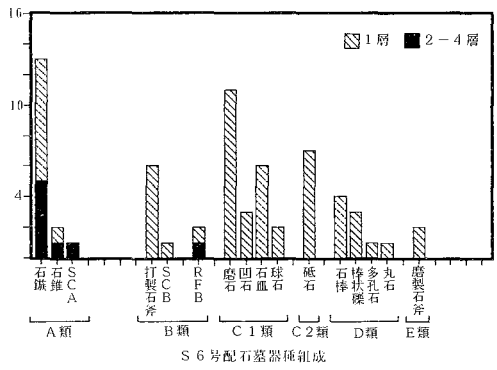
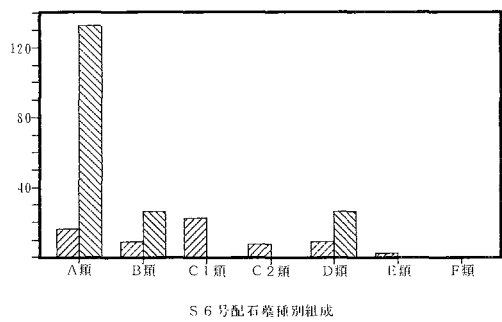
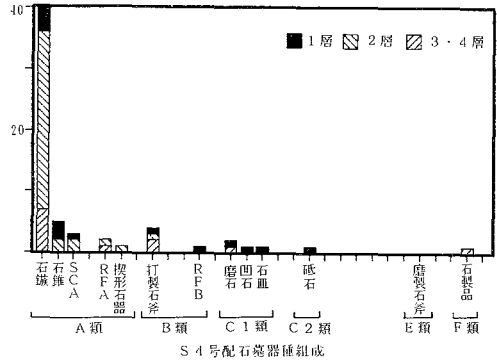
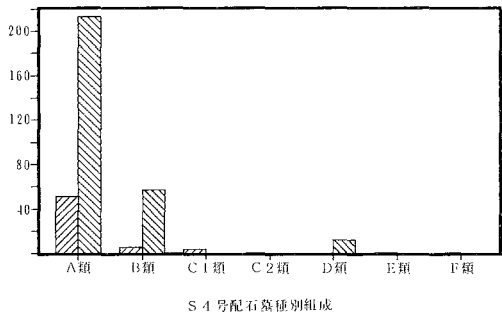
石材組成 S-2号石棒祭祀遺構では、安山岩(Ⅲa類)が多く、次いで黒曜石(I類)、頁岩(Ⅱ類)の順である。また、Ⅵ類では鉄鉱石が存在する。S-3号通路状配石遺構では、安山岩が多く、黒曜石・結晶片岩が多い。また、S-5号祭壇状遺構では、黒曜石・頁岩がやや多く、チャート・安山岩・結晶片岩・砂岩が存在する比較的バランスのとれた組成を示す。

配石墓の石器組成 (第298図～第308図) 配石墓は基本的には後期後半の遺構であり、遺物は非常に少なく、石器はほとんどが流れ込みであることが、出土状態の検討により明らかとなっている。また、S-4・S-6・S-40は、晩期に環状配石遺構として再利用されており、これに伴う石器が多量存在している。そこで、後期の配石墓に混入した石器の組成と、晩期の遺構に伴う石器組成を区別して扱うことにする。

種別組成 後期の配石墓に混入した石器の場合、ほとんどの配石墓が基本的にパターンa₁ないしパターンa(B類のないパターン)を示す。また、配石墓の累積結果(第309図)によってもパターンa₁を示している。例外的なものでは、パターンA₁を示すS-22、パターンc(B類のないパターン)を示すS-11、パターンb₁を示すS-19がある。S-11は出土状態でも石鏃が副葬された可能性を示している。

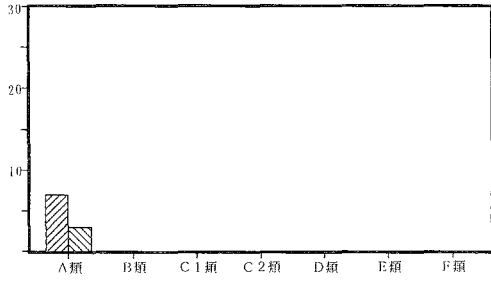
晩期再利用遺構の場合、パターンA₁を示すS-4・S-6と、パターンa₁を示すS-40がある。後者の場合、埋葬状態の配石墓と同じ種別組成を示しており、少なくともA類が再利用時には混入しなかったものと判断される。

器種組成 後期の器種組成では、石鏃・スクレイパーA類・リタッチドフレイクA類が若干存在する。また、B類石器はほとんど検出されない。磨石・凹石・石皿も若干検出されているが、石皿の場合配石墓に組み込まれていた再利用品も含まれる。C2類では砥石がしばしば検出されている。A類については、埋土への無意図的混入の可能性が高いが、磨石・凹石や砥石が出土する

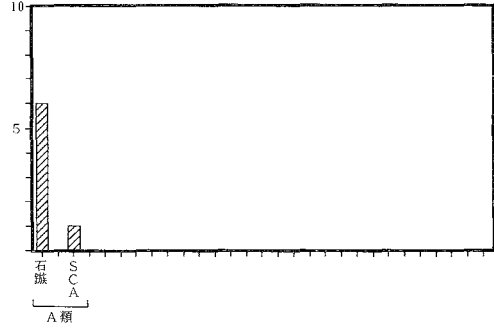


石器 剥片・石核・原石

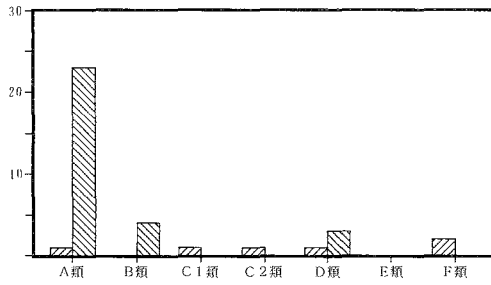
第298図 配石墓の石器種別・器種組成(1)



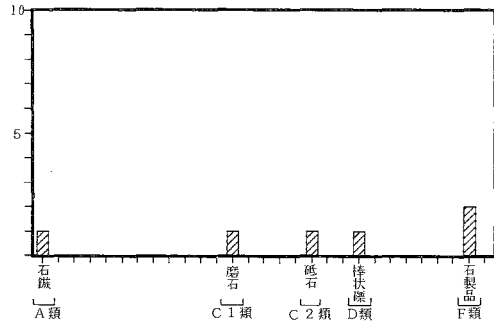
S11号配石墓種別組成



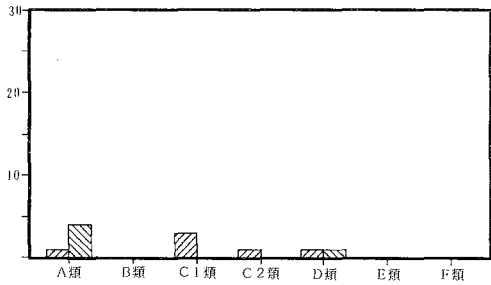
S11号配石墓器種組成



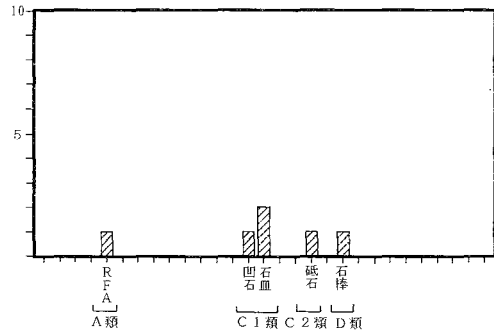
S10号配石墓種別組成



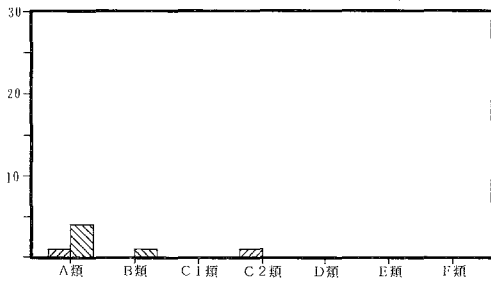
S10号配石墓器種組成



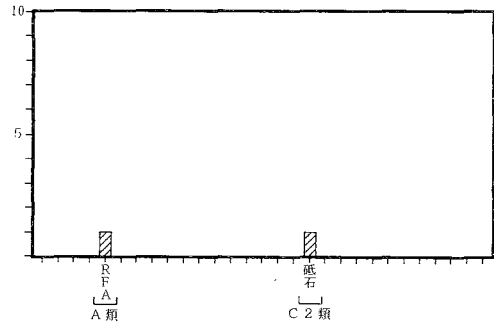
S14号配石墓種別組成



S14号配石墓器種組成



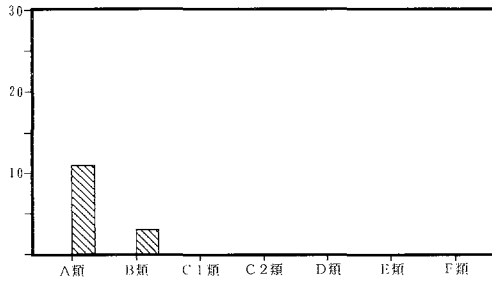
S18号配石墓種別組成



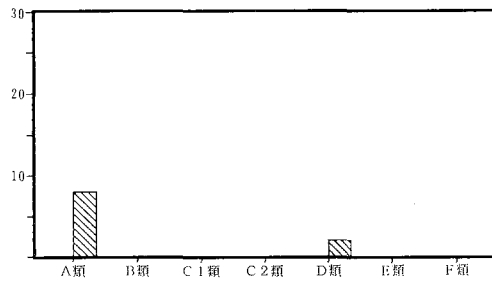
S18号配石墓器種組成

▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石

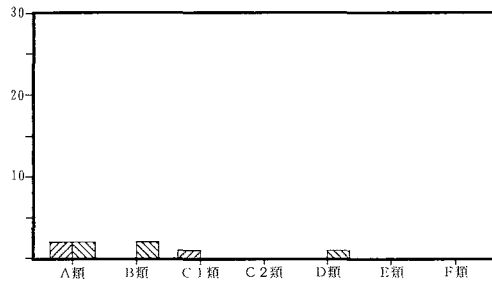
第299図 配石墓の石器種別・器種組成(2)



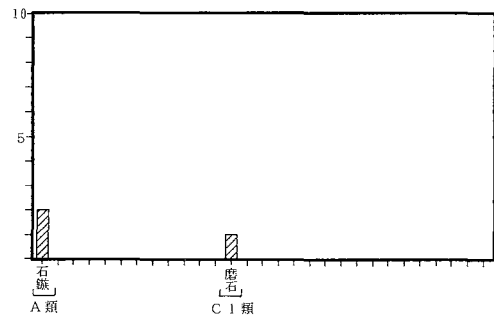
S7B号配石墓種別組成



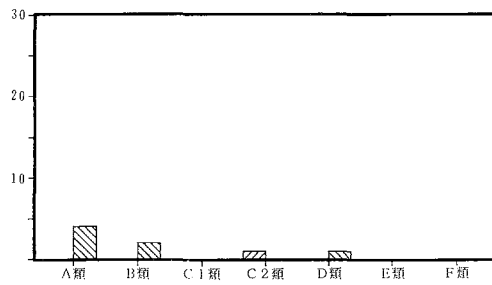
S7A号配石墓種別組成



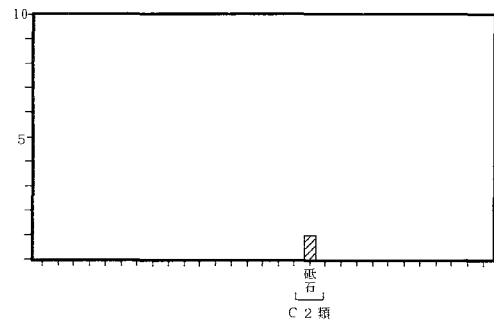
S19号配石墓種別組成



S19号配石墓器種組成



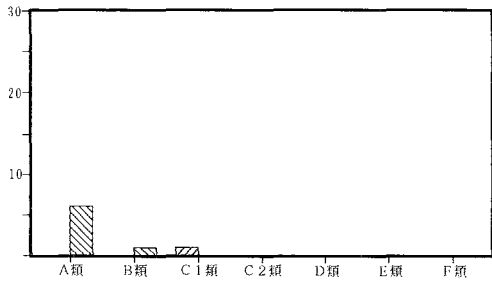
S13号配石墓種別組成



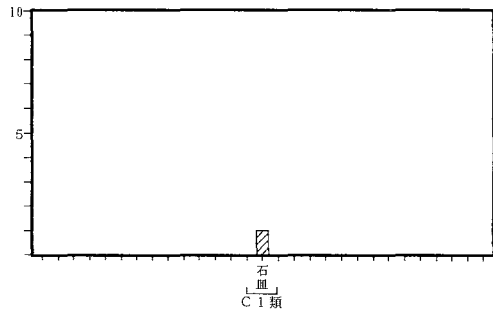
S13号配石墓器種組成

▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石

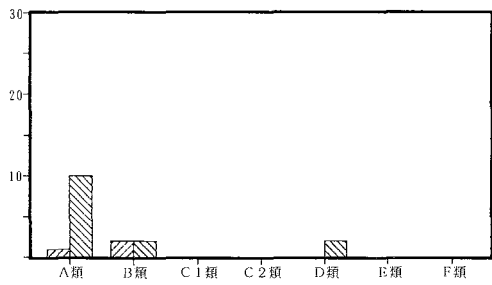
第300図 配石墓の石器種別・器種組成 (3)



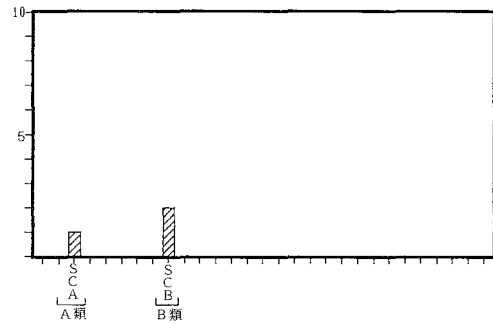
S16号配石墓種別組成



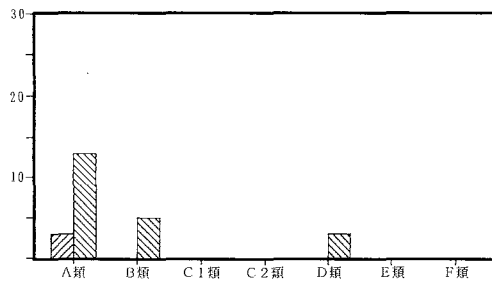
S16号配石墓器種組成



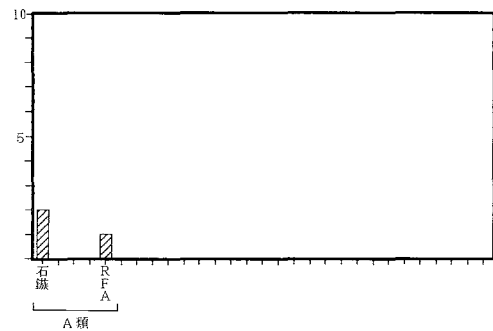
S8号配石墓種別組成



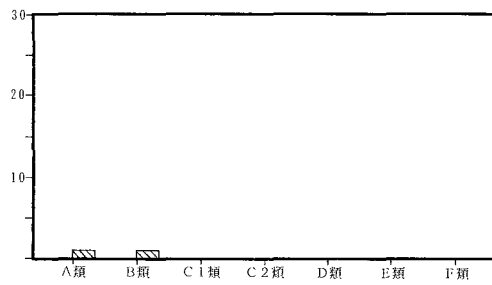
S8号配石墓器種組成



S17号配石墓種別組成



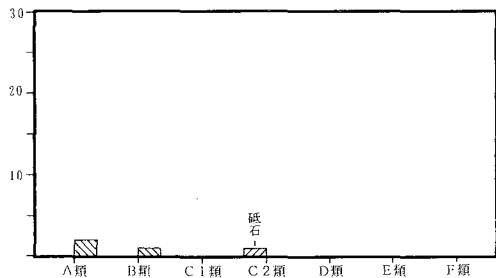
S17号配石墓器種組成



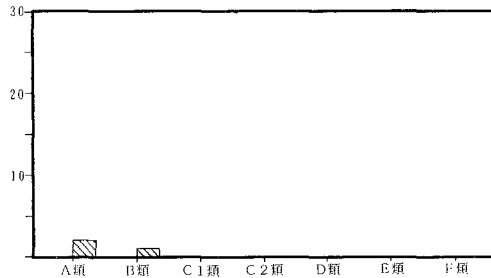
S15号配石墓種別組成

▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石

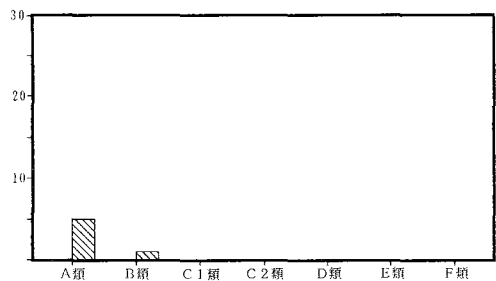
第301図 配石墓の石器種別・器種組成(4)



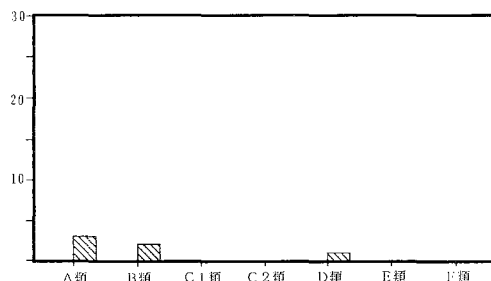
S 12号配石墓種別組成



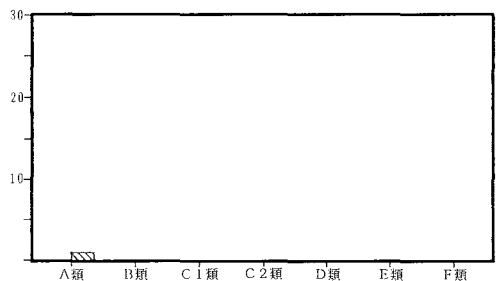
S 24 B号配石墓種別組成



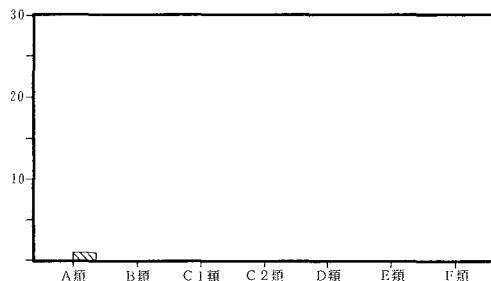
S 20号配石墓種別組成



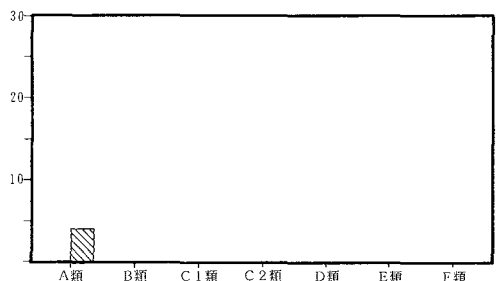
S 25 A号配石墓種別組成



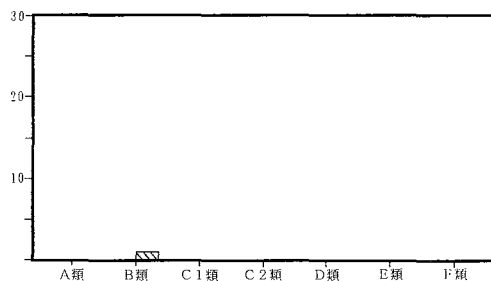
S 21号配石墓種別組成



S 25 B号配石墓種別組成



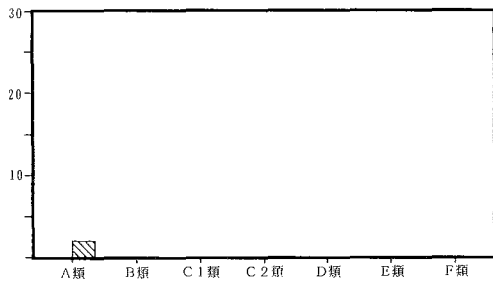
S 24 A号配石墓種別組成



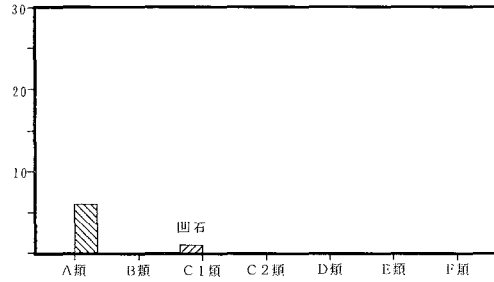
S 26号配石墓種別組成

▨ 石器 ▩ 剥片・石核・原石

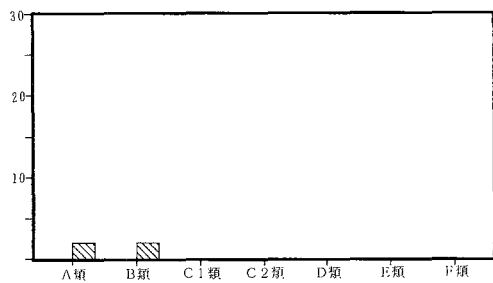
第302図 配石墓の石器種別・器種組成（5）



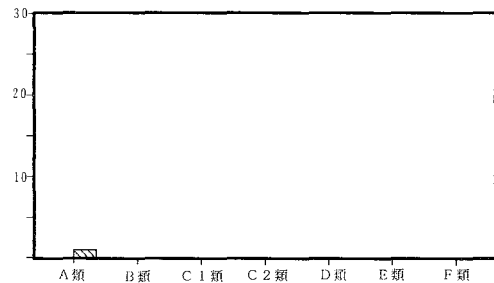
S29号配石墓種別組成



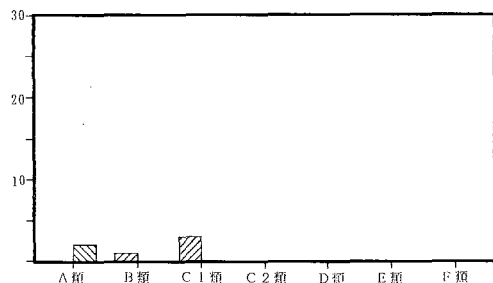
S35号配石墓種別組成



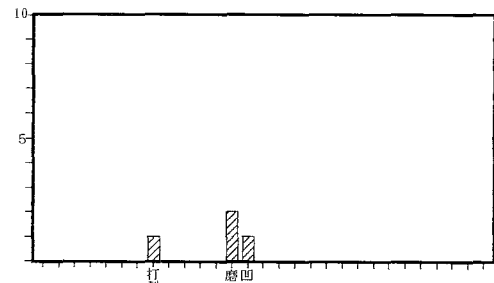
S31号配石墓種別組成



S36号配石墓種別組成



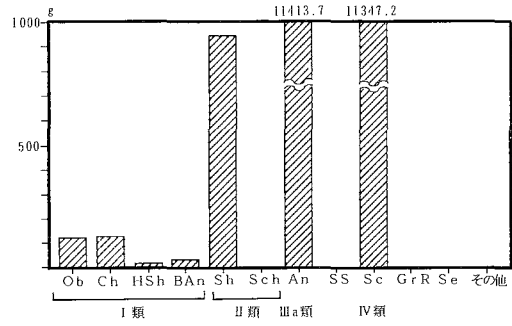
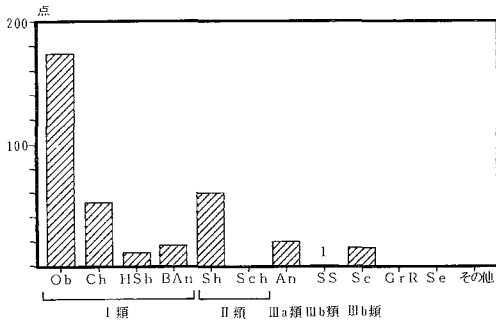
S44号配石墓種別組成



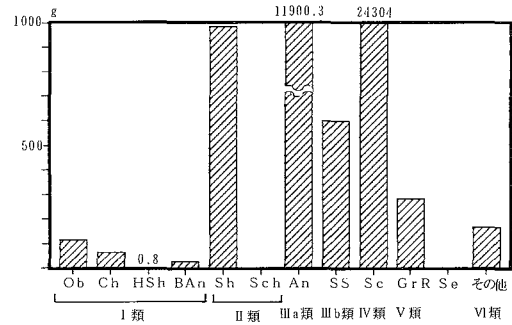
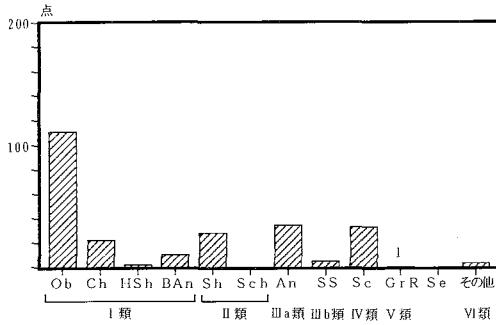
S44号配石墓器種組成

石器 剥片・石核・原石

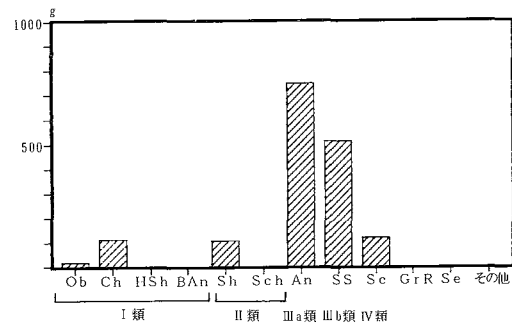
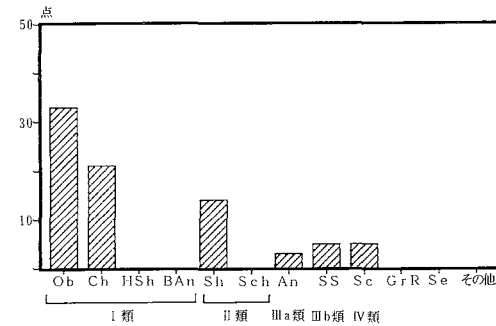
第303図 配石墓の石器種別・器種組成(6)



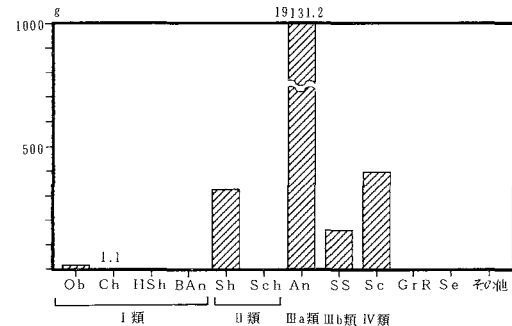
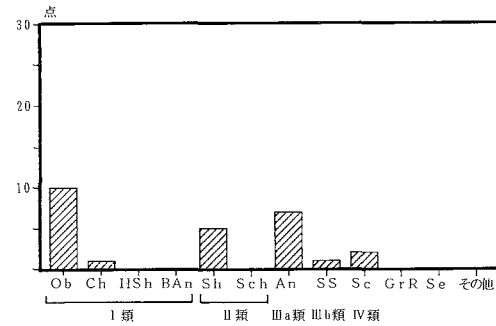
S4号配石墓石材組成



S6号配石墓石材組成

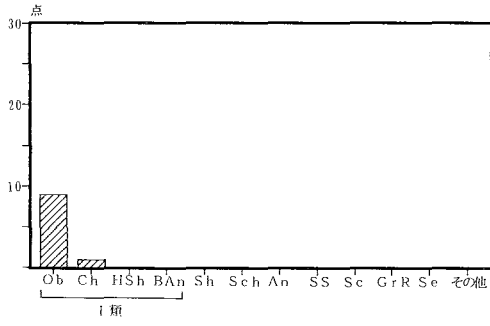


S22号配石墓石材組成

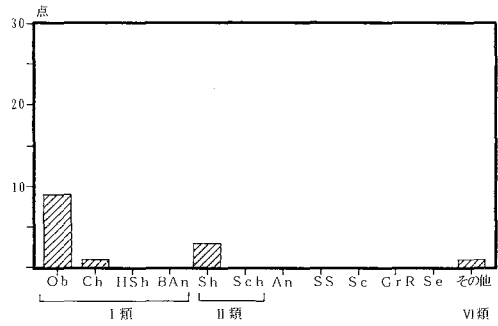


S40号配石墓石材組成

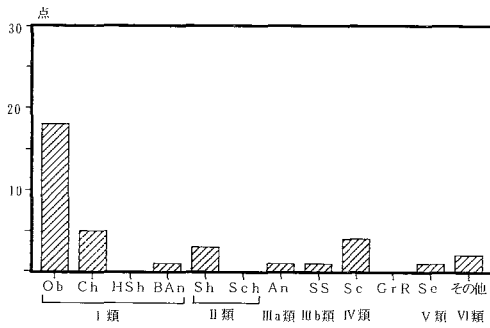
第304図 配石墓の石材組成・重量別組成(1)



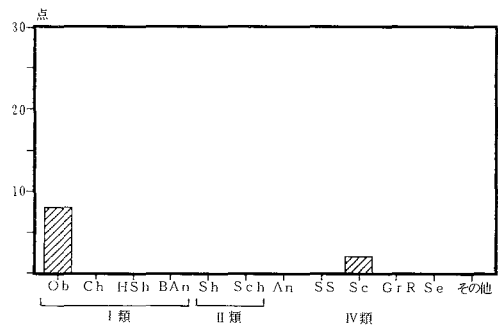
S11号配石墓石材組成



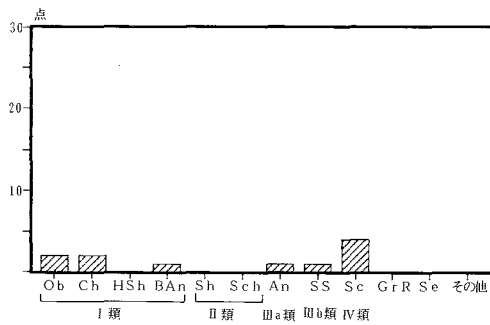
S7B号配石墓石材組成



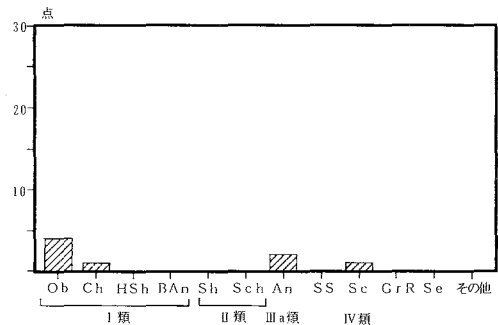
S10号配石墓石材組成



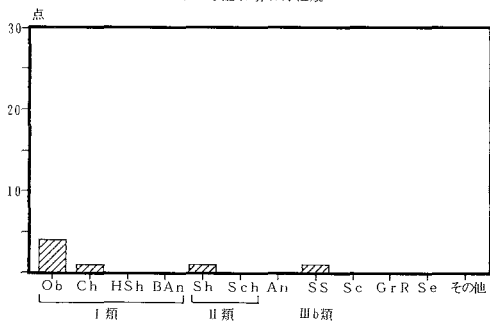
S7A号配石墓石材組成



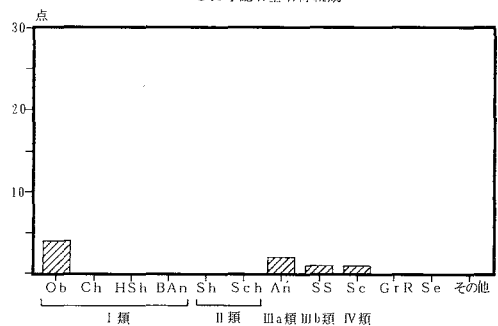
S14号配石墓石材組成



S19号配石墓石材組成

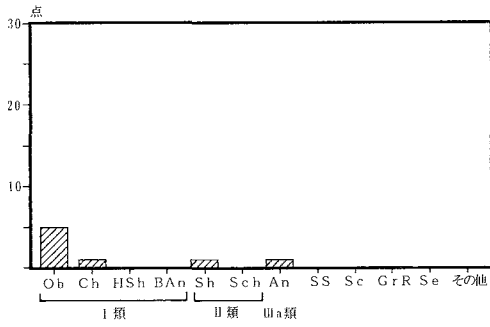


S18号配石墓石材組成

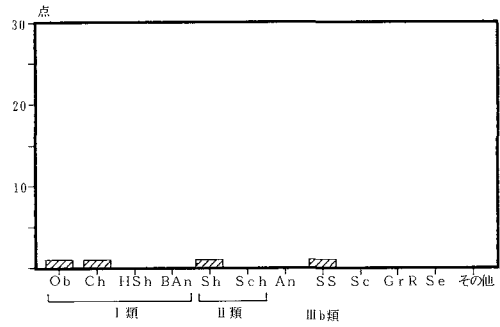


S13号配石墓石材組成

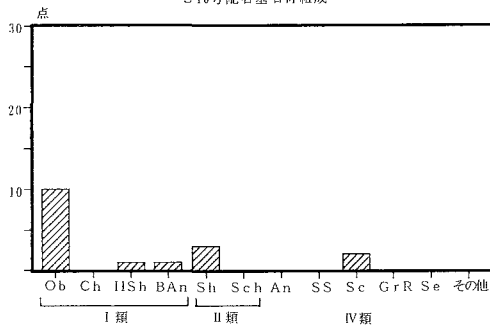
第305図 配石墓の石材組成 (2)



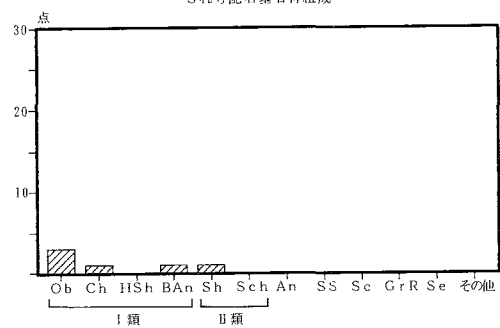
S16号配石墓石材組成



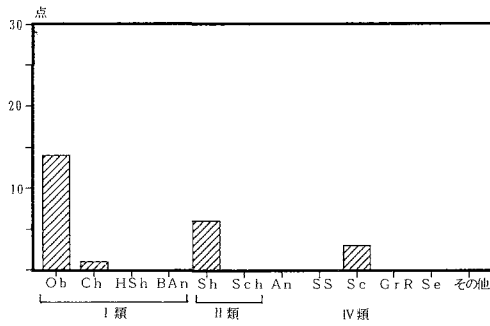
S42号配石墓石材組成



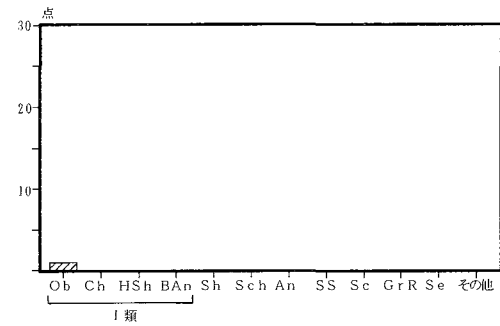
S8号配石墓石材組成



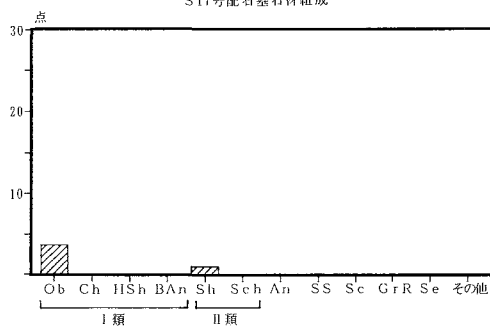
S20号配石墓石材組成



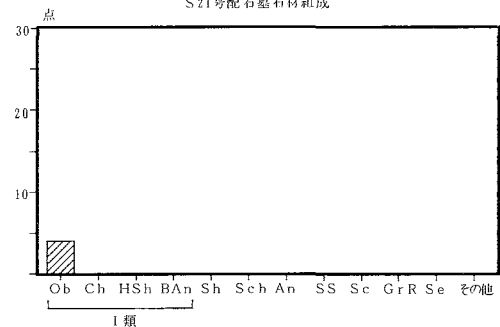
S17号配石墓石材組成



S24A号配石墓石材組成

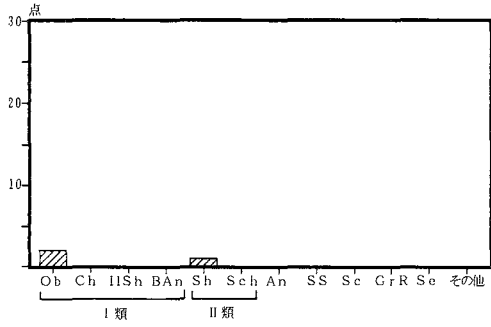


S15号配石墓石材組成

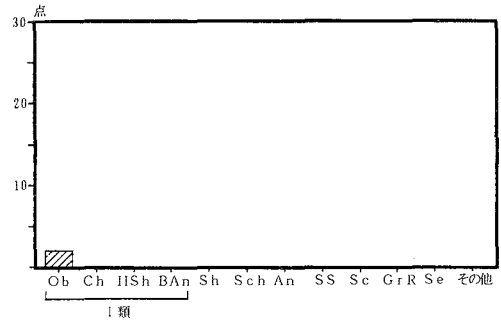


S21号配石墓石材組成

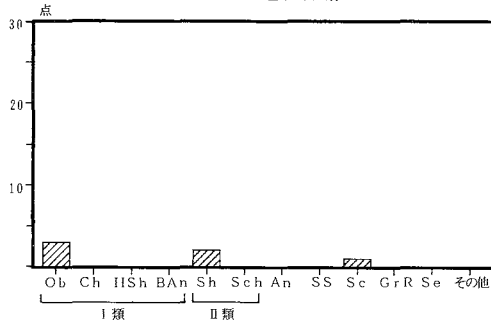
第306図 配石墓の石材組成 (3)



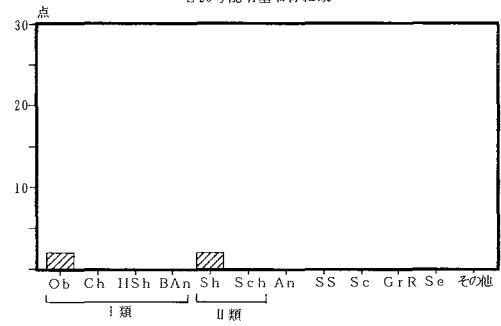
S24B号配石墓石材組成



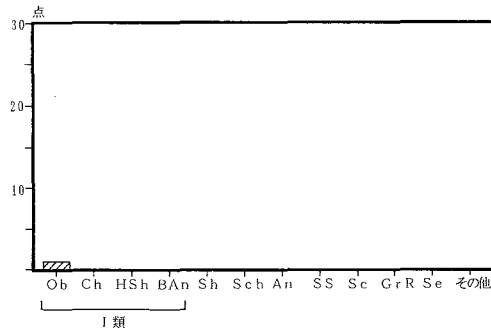
S29号配石墓石材組成



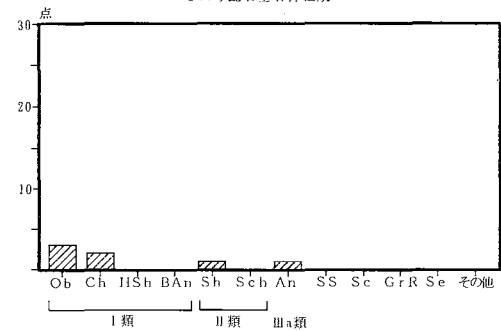
S25A号配石墓石材組成



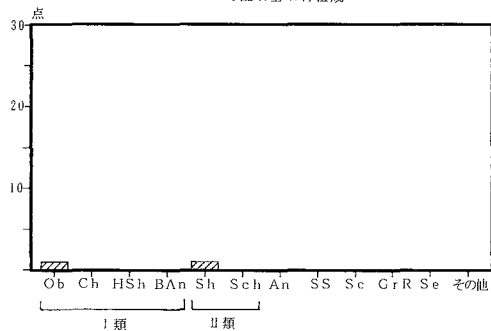
S34号配石墓石材組成



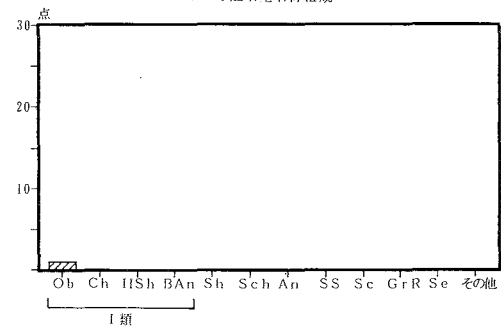
S25B号配石墓石材組成



S35号配石墓石材組成

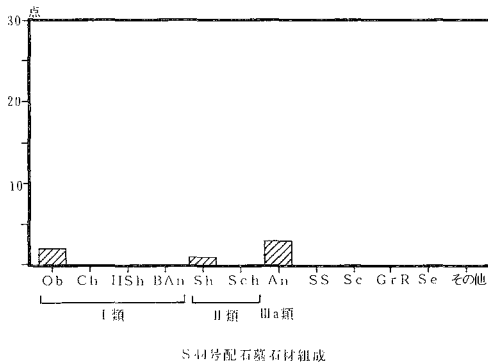


S26号配石墓石材組成



S36号配石墓石材組成

第307図 配石墓の石材組成 (4)



第308図 陪石墓の石材組成（5）

点については、単なる混入とすることもできない。しかし、いずれの器種も数量が少なく、際立った傾向は見い出せない。

なお、石器が全く検出されない陪石墓も数多く存在しているが、S-22号陪石墓では、石鏃・砥石が比較的多く検出されている。また、S-11号陪石墓も石鏃がやや多く検出されている。これらの陪石墓は、他の陪石墓とは様相が異なっている。

次に、晩期に再利用された遺構の器種組成を検討する。S-4号陪石墓はすべて晩期の土器と共伴関係にあるが、石鏃が圧倒的に多く、それ以外の器種は少量である。なお、D類の石器が全く検出されていない点に特徴がある。この組成はHT-1号掘立柱建物址と類似する。

S-6号陪石墓では石鏃が多い点ではS-4号陪石墓と共通するが、打製石斧（B類）、磨石・石皿（C1類）、砥石（C2類）、石棒・棒状礫（D類）など、それ以外の器種も比較的多数検出されており、大きく様相が異なる。この器種組成は隣接するS-5号祭壇状遺構と類似する。

以上のように、S-4とS-6は両者とも環状陪石遺構として、再利用が行われていながら、それぞれ別種の遺構（HT-1、S-5）と器種組成上は親和性を有していることが確認された。

また、S-40号陪石墓は多孔石がやや多い傾向が認められる。

石材組成 後期の石材組成では、石器種別組成・器種組成に連動し、黒曜石（I類）が多くの陪石墓から検出されている。しかし、どの陪石墓も数量は少ない。それ以外の石材も少量ずつであり、特定の傾向は見い出せない。唯一、S-22号陪石墓は黒曜石・チャート・頁岩が多く検出されており、晩期再利用のものにやや近い組成を示している。

晩期に再利用された陪石墓について検討すると、器種組成で大きな違いを見せたS-4号・S-6号陪石墓が類似した傾向を示し、I類では黒曜石が多いほか、チャートも比較的多い。また、頁岩もやや多い傾向がある。しかし、S-40号陪石墓はこれらの陪石墓とは様相を異にする。

なお、同じ石材組成でも個数別と重量別では全く正反対の傾向を示すことになる。

各時期の占有空間別石器組成（第310図・第311図）

各時期の遺構別石器組成については前項で述べた。しかし、後期～晩期では包含層から出土した石器はむしろ遺構に伴うものよりも多い。また、天神原遺跡は前期～晩期にかけての複合遺跡であり、前期後半：集落→中期末～後期前半：集落→後期後半：墓域→晩期：祭祀領域と遺跡の性格が変化するため、画期ごとに性格の違いを抽出する必要がある。そこで、土器分布から明らかになった時期ごとの占有空間を基に各時期の石器組成の特徴について検討することにする。

前提となる土器分布から抽出された各時期の占有空間は第325図のとおりである。これによれば、前期（土器占有率86.5%）、中期末～後期前半（同54.8%）、後期前半～後半（同71.7%、後期後半のみでは58.2%）、後期後半～晩期（同88.8%、晩期のみでは58.9%）の占有空間に区分される。統計学的には、石器の比率もこれに近似するものと推定される。当然、これ以外の時期の石器も含まれていると推定され、個々の石器の時期決定は形態的特徴を含めて検討する必要があるが、全体的な傾向については把握することが可能と判断される。また、各時期の占有空間は〔 〕を付して、〔前期〕、〔後期前半〕、〔後期後半〕、〔晩期〕と呼称することにする。

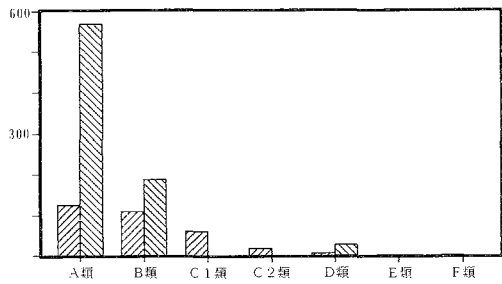
種別組成 各占有空間ごとの石器種別組成及び器種組成は第17表・第310図のとおりである。まず、石器種別組成では、一見すると〔後期前半〕以外はほぼ同じ様相を示しているように見える。しかし、石器と剥片の比率を含め、石器種別パターンについて検討すると、〔時期〕ごとに様相は異なる。〔前期〕はパターンA₁であり、〔後期後半〕はパターンA₁を示す。また、〔晩期〕は一見するとパターンA₁であるが、剥片B類（頁岩）の多くは石鏃製作時のものであることから、パターンA₁である。また、〔後期前半〕はパターンa₁であり、唯一A類の割合が小さい。また、D類の割合が大きいが、これはJ--5号住居址の床材として用いられていた結晶片岩の剥片（剥片D類）多量存在するためである。

出土量については、占有空間の規模が異なるので、一概に比較することはできないが、〔晩期〕が狭い空間ながら最も多く、次いで〔後期後半〕が多い。占有空間が狭く、遺構数も少ない〔後期前半〕は最も少ない。〔晩期〕が最も多いのは石鏃製作に伴うA類・B類の小剥片が多いためである。

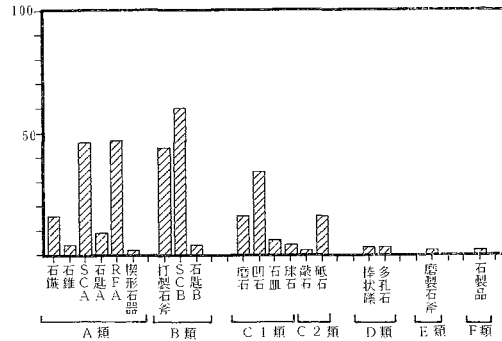
次に、各時期の遺構に伴う石器群の種別組成（第309図）と、占有空間の組成を比較すると、〔前期〕では大部分の石器が住居址から検出されているため、同じ傾向を示す。

また、中期末～後期前半のJ--3～9号住居址の組成と〔後期前半〕、〔後期後半〕の組成を比較すると、〔後期後半〕と同じパターンA₁であるが、〔後期前半〕とは組成が異なっており、住居址の組成は〔後期後半〕とほぼ同じ傾向である。

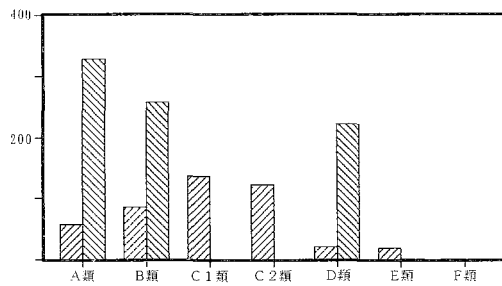
ところが、後期後半の配石墓の組成はパターンA₁を示しており、〔後期後半〕の種別組成と違



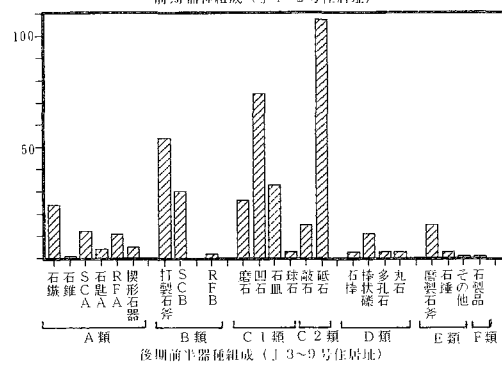
前期種別組成 (J 1・2号住居址)



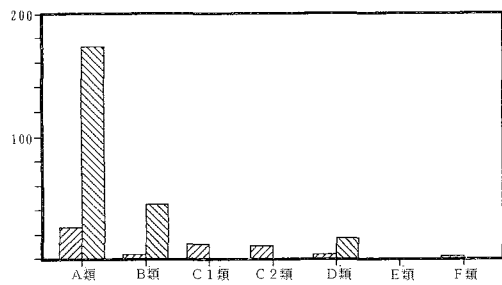
前期器種組成 (J 1・2号住居址)



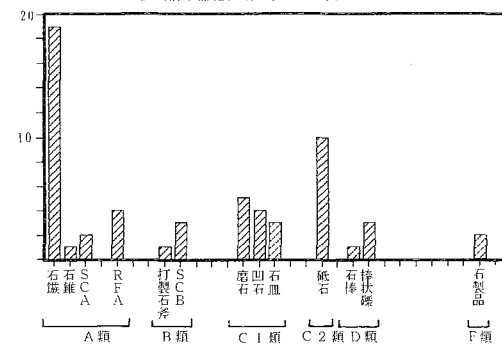
後期前半種別組成 (J 3~9号住居址)



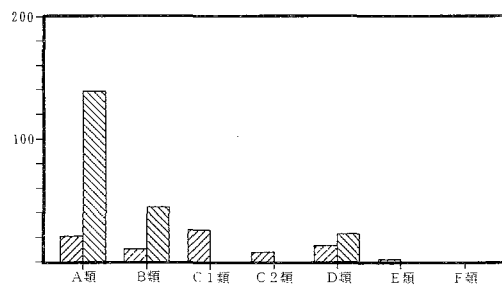
後期前半器種組成 (J 3~9号住居址)



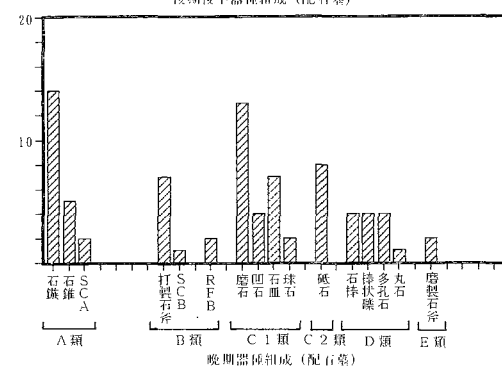
後期後半種別組成 (配石墓)



後期後半器種組成 (配石墓)



晚期種別組成 (配石墓)



晚期器種組成 (配石墓)

第309図 各時期の石器種別・器種組成

前期の占有空間			中期末～後期後半の占有空間			後期後半の占有空間			晩期の占有空間			時期不明		
石器種別	器種	個数	石器種別	器種	個数	石器種別	器種	個数	石器種別	器種	個数	石器種別	器種	個数
A類	石鏃	41	A類	石鏃	6	A類	石鏃	160	A類	石鏃	684	A類	石鏃	12
	石鏃	9		石鏃	0		石鏃	17		石鏃	51		石鏃	1
	スレバ-A	73		スレバ-A	4		スレバ-A	39		スレバ-A	55		スレバ-A	0
	石匙A	16		石匙A	1		石匙A	2		石匙A	1		石匙A	0
	RFA	59		RFA	6		RFA	49		RFA	76		RFA	0
	楔形石器	4		楔形石器	2		楔形石器	17		楔形石器	23		楔形石器	0
	石槍	1		石槍	0		石槍	1		石槍	8		石槍	0
	ナイフ	1		その他	0		その他	0		その他	0		その他	0
	FLA	1072		FLA	128		FLA	1453		FLA	3656		FLA	238
	石核A	76		石核A	21		石核A	139		石核A	256		石核A	12
	原石A	49		原石A	4		原石A	36		原石A	56		原石A	1
B類	打製石斧	94	B類	打製石斧	24	B類	打製石斧	185	B類	打製石斧	84	B類	打製石斧	5
	スレバ-B	108		スレバ-B	22		スレバ-B	111		スレバ-B	137		スレバ-B	3
	石匙B	7		石匙B	0		石匙B	0		石匙B	3		石匙B	0
	RFB	7		RFB	4		RFB	9		RFB	26		RFB	0
	その他	0		その他	0		その他	0		その他	0		その他	0
	FLB	451		FLB	158		FLB	788		FLB	2269		FLB	66
	石核B	24		石核B	12		石核B	39		石核B	59		石核B	3
	原石B	0		原石B	0		原石B	0		原石B	0		原石B	0
C1類	磨石	29	C1類	磨石	11	C1類	磨石	50	C1類	磨石	89	C1類	磨石	1
	凹石	79		凹石	42		凹石	125		凹石	95		凹石	4
	石皿	11		石皿	24		石皿	38		石皿	61		石皿	1
	球石	13		球石	2		球石	14		球石	157		球石	1
C2類	礫石	7	C2類	礫石	13	C2類	礫石	24	C2類	礫石	14	C2類	礫石	2
	砥石	43		砥石	64		砥石	214		砥石	153		砥石	6
	台石	0		台石	0		台石	0		台石	0		台石	0
D類	石棒	0	D類	石棒	3	D類	石棒	13	D類	石棒	21	D類	石棒	2
	棒状礫	12		棒状礫	11		棒状礫	16		棒状礫	33		棒状礫	2
	多孔石	4		多孔石	3		多孔石	5		多孔石	11		多孔石	1
	丸石	0		丸石	1		丸石	6		丸石	8		丸石	0
	石剣	0		石剣	1		石剣	1		石剣	19		石剣	1
	その他	0		その他	0		その他	1		その他	0		その他	0
	FLD	93		FLD	210		FLD	352		FLD	265		FLD	23
E類	磨製石斧	9	E類	磨製石斧	5	E類	磨製石斧	28	E類	磨製石斧	19	E類	磨製石斧	2
	石鏃	6		石鏃	2		石鏃	23		石鏃	8		石鏃	1
	その他	0		その他	1		その他	0		その他	0		その他	0
	FLE	1		FLE	0		FLE	9		FLE	9		FLE	2
	石核E	2		石核E	0		石核E	1		石核E	0		石核E	0
	原石E	0		原石E	0		原石E	1		原石E	5		原石E	0
F類	石製品	0	F類	石製品	1	F類	石製品	4	F類	石製品	10	F類	石製品	0
	鉄鉱石	2		鉄鉱石	0		鉄鉱石	0		鉄鉱石	12		鉄鉱石	0
	その他	0		その他	0		その他	0		緑石	3		その他	0
	合計	2403		合計	786		合計	3970		合計	8416		合計	390

総個数 15965 個

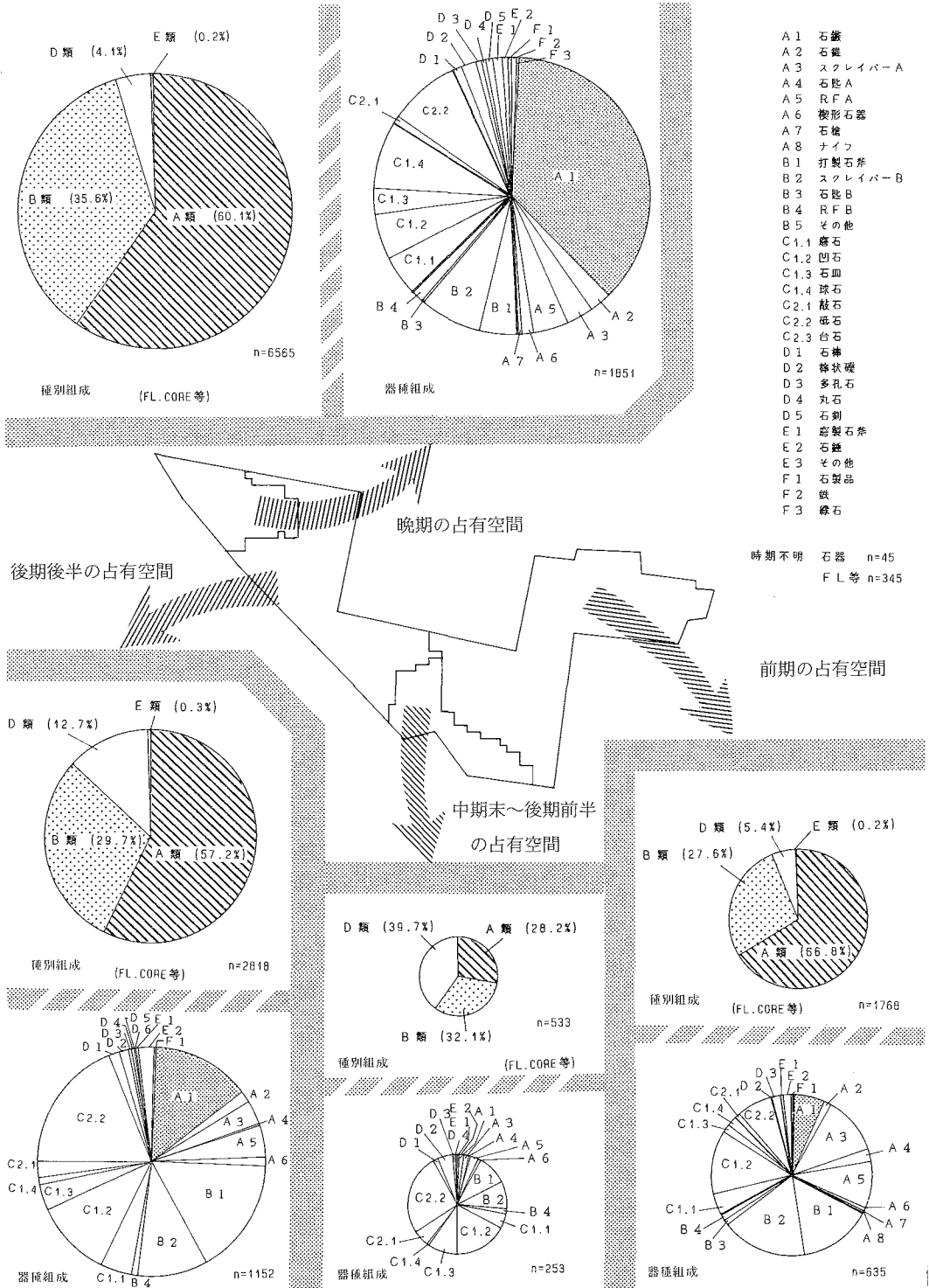
第17表 各時期の占有空間と石器組成

いが認められるが、これは配石墓の「墓」としての性格によるとみられる。また、晩期における配石墓の再利用時の組成は、[晩期]の組成と同じ傾向を示している。

以上のように、遺構出土の種別組成と占有空間の組成は、配石墓以外ではほぼ同じ傾向を示しており、占有空間の組成が各時期の組成を反映している。

器種組成 器種組成は第17表・第310図のとおりであり、種別組成同様、時期ごとに様相が異なる。石器個体数では種別組成と同様の傾向を示しており、[晩期]が最も多く、[後期後半]、[前期]、[後期前半]の順である。

[晩期]では石鏃が著しく多い。この中には未成品も含まれおり、石鏃製作の「場」としてこの空間が用いられていたことを示している。石鏃が大量検出される傾向は、これまでも晩期の



第310図 各時期の占有空間と石器種別組成・器種組成

多くの遺跡で確認されている現象である、時期的特徴と言える。

〔後期後半〕では石鏃、打製石斧、スクレイパーB類、凹石、砥石がそれぞれ同程度の割合を占めておりバランスがとれた組成を示す。従来、後期・晩期を一緒に扱い、石鏃が多い点が強調されていたが、本遺跡の〔後期〕では突出して多い傾向は認められず、石鏃の大量出土は〔晩期〕に限定される。

〔後期前半〕では打製石斧、スクレイパーB類、磨石、砥石が多い傾向が認められる。石鏃等A類石器は非常に少ない点の特徴である。砥石が多い点は〔後期後半〕と共通しているが、敷石住居地の床面構築材の一部が砥石の中に含まれているためと推定される。

〔前期〕ではスクレイパーA類、リタッチド・フレイクA類、打製石斧、スクレイパーB類、凹石が多い。A類石器の中で、石鏃よりもスクレイパーA類とリタッチド・フレイクA類が多い点と、砥石が少ない点は、〔後期後半〕と異なっている。こうした傾向はこの時期の多くの遺跡に共通しており、時代性を示すものと考えられる。

また、第309図に示した各時期の遺構の器種組成と、占有空間の組成を比較すると、種別組成同様、後期後半の配石墓のみ、様相が異なっていることが確認された。この違いは一般的な生活領域の器種組成と、「墓」の組成の違いとして認識することができる。

石材組成 個数別組成と重量別組成を第18表・第311図に示した。個数組成は小さな剥片でも1点として数えるため、石器製作址といった剥片が大量検出される場所では、大きな割合で示される。例えば、1点の原石と、これから剥離された数百の剥片では、剥片が数百倍の値を示すことになる。しかし、石皿（5～20kg）と石鏃（1g程度）は1点の石器としてカウントされることになる。したがって、種別組成や器種組成においては個数組成で示す方が利点が多い。

しかし、遺跡内への搬入された石材の物理的規模についてに検討する場合、重量組成で示す必要がある。そこで、個数組成と重量組成の両方を示すことにする。

個数組成では〔後期前半〕以外の時期はI類が全体の50～60%程度を占める。この中でも黒曜石が最も多い。実数では黒曜石は〔前期〕と〔後期後半〕は大差ないが、〔晩期〕には倍増している。チャートについても同様に、〔晩期〕に3倍以上に激増している。それ以外の石材についても概ね同様の傾向を示す。しかし、重量組成では黒曜石は〔後期後半〕は少ないが、〔前期〕と〔晩期〕では4kg程度とほぼ同じである。ここで留意される点は、〔後期後半〕から〔晩期〕にかけて、黒曜石が大幅に増加している点である。しかし、平均的大きさは〔後期後半〕と〔晩期〕ではほとんど変わらず、同じ器種を目的としていたことが推定される。これは、A類石器の増加に連動し、素材となる黒曜石の搬入量が大幅に増加していることに起因するとみられる。

また、II類は個数組成では各時期とも20～25%前後を占めており、常に安定した石材であるこ

前期の占有空間

石材種別	石材	重量(g)	個数	重量/個(g)
I類	Ob	4,013.5	1,113	3.6
	Ch	1,349.4	259	5.2
	BAn	281.5	15	18.8
	HSh	169.6	7	24.2
	Qu etc.	99.0	3	33.0
II類	Sh	19,116.7	618	30.9
	Sch			
III a類	An	150,796.8	215	701.4
III b類	SS	2,383.0	36	66.2
IV類	Sc	8,203.1	120	68.4
V類	GrR	6,752.0	2	3376.0
	Se	243.5	12	20.3
VI類	その他	59.6	3	19.9
	合計	193,467.7	2,403	80.5

後期後半の占有空間

石材種別	石材	重量(g)	個数	重量/個(g)
I類	Ob	2,244.8	1,526	1.5
	Ch	1,570.0	249	6.3
	BAn	1,027.6	64	16.1
	HSh・Si	458.8	41	11.2
	Qu etc.	738.7	17	43.5
II類	Sh	37,571.9	964	39.0
	Sch	41.7	2	20.9
III a類	An	276,652.1	470	588.6
III b類	SS	15,113.1	152	99.4
IV類	Sc	66,278.9	431	153.8
V類	GrR	6,840.7	44	155.5
	Se	228.6	4	57.2
VI類	その他	217.0	6	36.2
	合計	408,983.9	3,970	103.0

中期末～後期前半の占有空間

石材種別	石材	重量(g)	個数	重量/個(g)
I類	Ob	309.9	136	2.3
	Ch	274.7	28	9.8
	BAn	52.6	5	10.5
	HSh・Si			
	Qu etc.	311.0	1	311.0
II類	Sh	8,866.3	169	52.5
	Sch			
III a類	An	165,760.5	178	931.2
III b類	SS	2,869.3	21	136.6
IV類	Sc	57,452.6	239	240.4
V類	GrR	1,655.1	9	183.9
	Se			
VI類	その他			
	合計	237,552.0	786	302.2

晩期の占有空間

石材種別	石材	重量(g)	個数	重量/個(g)
I類	Ob	3,764.8	3,048	1.2
	Ch	4,224.6	839	5.0
	BAn	4,825.8	471	10.2
	HSh・Si	1,071.6	254	4.2
	Qu etc.	888.6	22	40.4
II類	Sh	36,082.8	2,218	16.3
	Sch	112.2	4	28.1
III a類	An	485,304.2	998	486.3
III b類	SS	14,282.5	124	115.2
IV類	Sc	184,337.0	371	496.9
V類	GrR	6,487.9	34	190.8
	Se	70.3	3	23.4
VI類	その他	2,828.6	30	94.3
	合計	744,280.9	8,416	88.4

時期不明の占有空間

石材種別	石材	重量	個数	重量/個(g)
I類	Ob	66.5	213	0.3
	Ch	9.8	35	0.3
	BAn	1.0	8	0.1
	HSh・Si	6.5	6	1.1
	Qu etc.	16.6	1	16.6
II類	Sh	2,871.7	71	40.4
	Sch			
III a類	An	5,869.7	18	326.1
III b類	SS	1,940.3	6	323.4
IV類	Sc	2,030.5	28	72.5
V類	GrR	1,415.1	4	353.8
	Se			
VI類	その他			
	合計	14,227.7	390	36.5

総重量(g) 1,598,512.2
総個数 15,965

Ob 黒曜石
Ch チャート
BAn 黒色安山岩
HSh・Si 硬質頁岩・硅質岩
Qu etc 石英・メノウ・玉髄
Sh 頁岩
Sch 輝緑凝灰岩
An 安山岩
SS 砂岩
Sc 結晶片岩
GrR 緑色片岩
Se 蛇紋岩

第18表 重量別個数別石材組成

とが分かる。また、重量組成では5～10%程度であり、全体に占める割合は低い。また、個数では〔晩期〕に激増するが、重量では〔後期後半〕とほぼ同じであり、小形化の傾向が顕著である。これは石鏃の素材としてⅡ類が多用されるようになったことに関連するものとみられる。なお、Ⅱ類は頁岩が大部分を占めているので、そのまま頁岩の様相を示している。

Ⅲ a 類（安山岩）は個数組成では〔後期前半〕を除き、10%前後を占め、少数ながら安定している。しかし、重量組成では、各時期とも70%前後を占め、非常に大きな割合をしめる。これはⅢ a 類を用いる個々の石器の大きさによるものである。実数では〔前期〕151kg、〔後期後半〕277kg、〔晩期〕485kgと膨大な量である。〔後期後半〕にはさらに配石墓の構築材として搬入されたものが加わる。

Ⅲ b 類（牛伏砂岩）は個数組成では1.5～4%と少ないながら安定して存在する石材である。また、重量組成ではほとんど数値として示し得ない割合である。実数では個数・重量とも〔後期後半〕と〔晩期〕は、ほぼ同じ程度であるが、〔前期〕には少ない。これは、Ⅲ b 類の主たる用途である砥石の使用頻度に起因するものであり、〔後期後半〕以降砥石によって研磨する作業が増加したことによるとみられる。

Ⅳ類（結晶片岩）は個数組成では、〔前期〕・〔晩期〕では5%と少なく、〔後期前半〕・〔後期後半〕は多い。しかし、重量組成では〔前期〕以外は16～25%とⅢ a 類（安山岩）に次いで大きな割合を占める石材である。石棒・石皿等重い器種に多用されるためと判断される。

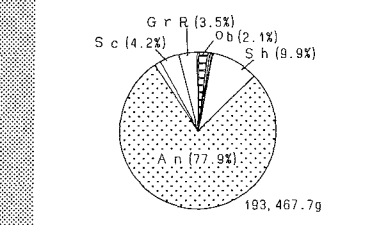
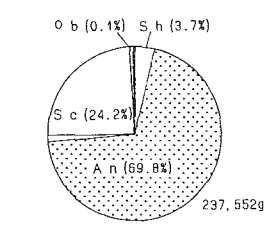
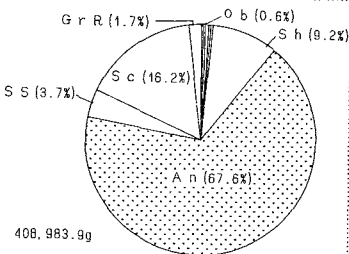
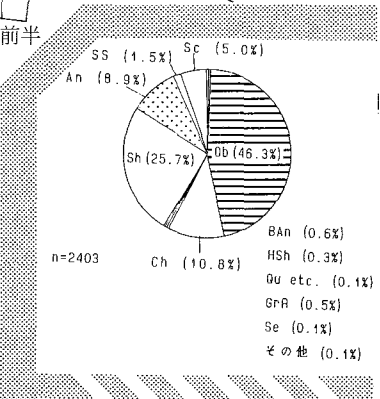
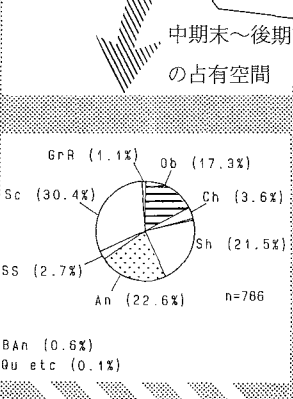
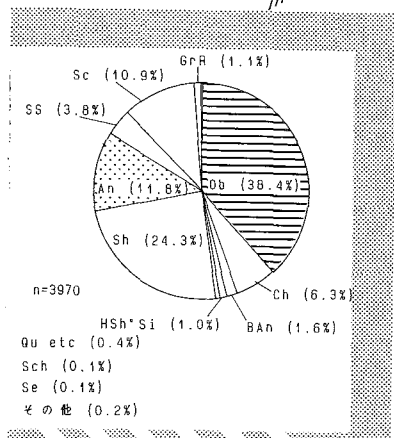
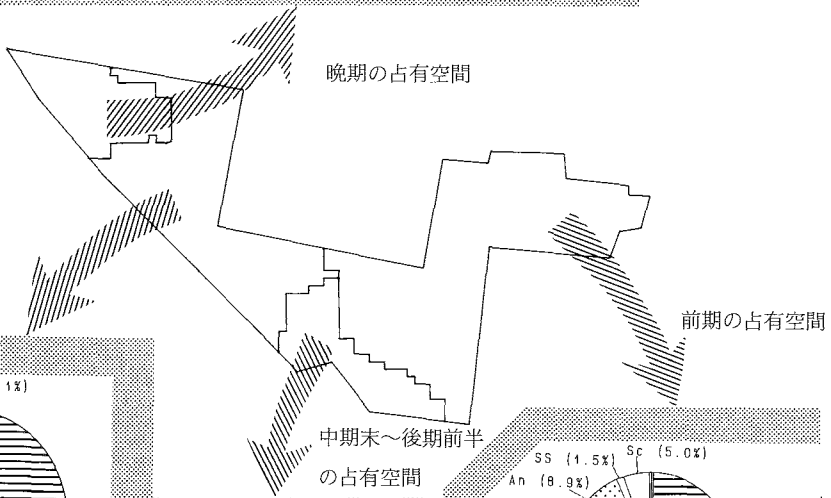
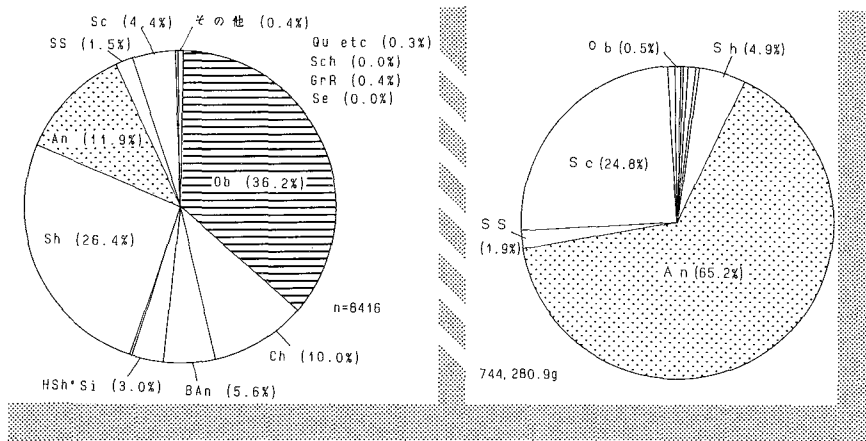
Ⅴ類（緑色岩類・蛇紋岩等）は各時期とも個数組成では非常に少ない。また、重量組成では〔前期〕のみ大きな値を示すが、石核が存在するためである。これは、〔前期〕では遺跡内に磨製石斧の素材を搬入していたことを示しており、後期以降のように完成品として搬入される状態ではなかったことを推測させる。なお、この中では緑色岩類が大部分を占め、蛇紋岩等は非常に少ない。

Ⅵ類は個々の石材は非常に少なく、特定の傾向を見い出すことはできない。この中では〔晩期〕のみ鉄鉱石が存在している点が特筆される。

以上のように、石器種別組成・器種組成及び石材組成について、個別にみてきたが、種別と石材は常に連動関係にあることが判明した。この場合、石材個数組成と種別・器種組成はほぼ正比例の関係にあるが、石材重量組成はむしろこれらと反比例の関係にあることも判明した。いずれにしても、遺跡内へ搬入された石器類は非常に多く、15,965個に及び、総重量は1.6 tである。

なお、土器の総重量も1.7 tであり、石器の搬入量と土器の搬入量は重量的にはほぼ等しい。木器・骨角器等有機物の道具がこれにどの程度加わるかはっきりしないが、土器と石器の搬入量が非常に大きかったと判断される。

（大工原 豊）



第311図 各時期の占有空間と石材組成

2) 石器各説

A類石器

石鏃(第203図～206図・第312図・第313図) 全部で670点検出されている。凹基無茎鏃(I形態)、平基無茎鏃(II形態)、凸基有茎鏃(III a形態)、平基有茎鏃(III b形態)、凹基有茎鏃(III c形態)、円基鏃(IV形態)、尖頭状(V形態)、局部磨製石鏃、形態不明に分類される。また、細部の違いにより、さらに細分が可能である。概略は第19表のとおりであるが、以下に各形態ごとの所見を述べる。

I形態(第203図) 各形態中最多の177点が検出されている。黒曜石が80.2%と圧倒的多数を占め、他にチャート・黒色安山岩・頁岩も少量存在する。欠損率は60.5%である。

I a(1～6)、I b(7～11)、I c(12～16)、I d(17～26)、I e(27～29)、I f(31～33)、I g(34・35)、I h(36)、I i(37)、I j(30)、I k(38)などに細分される。この内、最も多いのは比較的小形で基部の挟り込みの浅い範型を有するI d形態である。また、やや大形・細身のI a～I c形態も比較的多い。

I a～I d形態は基部形状が同一であり、同じ範型による可能性が高い。また、小形で挟入部が深いI e・I f形態もやや多く存在する。これらの形態は、類似した範型によると推定される。

第312図1に示した時期別長幅比のグラフでは、長さ1～2.5cmの範囲に強い集中が認められるが、時期による大きさの違いはほとんど見い出せない。また、石材別でも、黒曜石が長さ1～2.5cmの範囲に集中する傾向が見い出せるのみである。

特別大形のI j・I k形態は数量は少なく、石材もチャート・頁岩を用いており、一般的な石鏃とは機能・用途面での違いが想定される。

なお、少数しか存在しない形態について見ると、I h形態は小形の五角形鏃であり、中部・東海地方との関連性が窺える。また、[後期後半]からは岐阜県産の黒雲母流紋岩(下呂石)製と推定されるものが1点検出されている。

II形態(第204図1～10) 69点検出されている。欠損率は52.2%を占める。大形で細身のII a形態(1・2)、中形のII b形態(4～6)、小形のII c形態(8～10)などの形態に細分される。最も多いのはII b形態である。

また、第312図2のように時期別にある程度形態的差異が認められる。すなわち、[前期]から出土したものは長さ・幅とも2cm程度にまとまり、II a・II b形態が存在する。[後期後半]から出土したものは、[前期]から出土したものよりやや幅広で小さい傾向があり、II b・II c形態に限定される。しかし、[晩期]のものは長さ1～3cmと、小形から大形まで存在し、II a～II c形態まで、すべての形態が含まれる。全体的に細身のものが多い傾向がある。

次に、石材別に見ると、黒曜石が75.4%と大部分を占め、チャート・黒色安山岩・頁岩・硬質

前期の占有空間

形態	個数	石材								欠損	
		I						II	III a		不明
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An			
I	29	24	5							25	
II	7	4	3							1	
III a											
III b											
III c											
IV											
V											
不明	1	1								1	
局磨 I											
局磨 II											
I 未	2	2									
II 未											
III a 未											
III b 未											
III c 未											
IV 未											
V 未	2	2								1	
合計	41	33	8							28	

後期後半の占有空間

形態	個数	石材								欠損	
		I						II	III a		不明
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An			
I	46	42	1		1	1	1			24	
II	18	18								11	
III a	16	8	3	2			3			8	
III b	12	3	1	3	2		3			9	
III c	7	5				1	1			6	
IV											
V											
不明	7	4	2				1			6	
局磨 I	10	9	1							6	
局磨 II	1	1									
I 未	7	7								3	
II 未	11	11								4	
III a 未	9	7	1				1			2	
III b 未											
III c 未											
IV 未	1	1								1	
V 未	15	13	2							9	
合計	160	129	11	5	4	2	9			89	

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材								欠損	
		I						II	III a		不明
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An			
I	3	3									
II											
III a											
III b											
III c											
IV											
V											
不明											
局磨 I	1	1									
局磨 II											
I 未	1					1					
II 未											
III a 未											
III b 未											
III c 未											
IV 未											
V 未	1		1								
合計	6	4	1			1					

晩期の占有空間

形態	個数	石材								欠損	
		I						II	III a		不明
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An			
I	97	77	8	2	4		5	1		54	
II	43	29	5	1	2		6			24	
III a	145	39	25	4	11	2	61	2	1	62	
III b	111	41	15	8	4	2	41			63	
III c	47	23	5	3	2	2	12			36	
IV	12	2	3		1		5	1		2	
V	1						1				
不明	44	32	4				8			38	
局磨 I	2	1					1			1	
局磨 II	1	1									
I 未	8	6	2							6	
II 未	17	11	4	1			1			4	
III a 未	82	34	12	4	3	1	28			18	
III b 未	6	4					2			3	
III c 未	3		1	1	1					1	
IV 未	21	6	3	2	2		8			3	
V 未	42	29	2	2	3		6			19	
合計	682	335	89	28	33	7	185	4	1	334	

第19表 石鏃の時期別形態と諸属性

頁岩は少量である。また、石材別長幅比は第313図2のようになり、黒曜石製のものは長さ1～2 cmに集中し、Ⅱb・Ⅱc形態との結びつきが強いが、それ以外の石材では2～3 cmの細身のものが多く、Ⅱa形態との結びつきが強い。

以上のことから、Ⅱ形態では形態と時期・石材との間に相関関係が認められることが判明した。

Ⅲa形態（第205図1～17） 163点検出されており、Ⅰ形態に次いで多い。欠損率は44.2%と他の形態に比べ低率であるが、本形態には未成品が含まれている可能性があり、そのために欠損率が低いと推定される。

Ⅲa 1（小形で茎が長い：1～6）、Ⅲa 2（小形で茎が短い：7・8）、Ⅲa 3（同：9・10）、Ⅲa 4（同：11・12）、Ⅲa 5（大形で茎が長い：14）、Ⅲa 6（大形で茎が短い：15・16）などに細分される。第312図3のように、長さ1～4 cmのものが存在するが、2 cm前後のものが多い。時期別に見ると、[後期後半]・[晩期]に限定され、[晩期]のものが89.0%と大多数を占める。

石材別に見ると、黒曜石28.8%・チャート17.2%・黒色頁岩7.4%とⅠ類石材が占める割合が低く、頁岩39.9%とⅡ類石材の占める割合が多い。本形態ではⅠ形態・Ⅱ形態といった伝統的形態と強く結びついていた黒曜石の占有率が低い点の特徴である。また、石材別長幅比について見ると、第313図のとおりであり、黒曜石製のものは長さ1.5～2 cmの範囲にまとまる。これに対し、頁岩製のものは2～4 cmの範囲に弱いまとまりを有し、黒曜石製のものより大形の傾向を示す。このように、Ⅲa形態では石材と大きさの間に一定の関係が存在していることが確認された。

なお、Ⅲa 1形態の中に黒雲母流紋岩（下呂石）製のものが1点存在している。

Ⅲb形態（第206図1～13・18） 123点検出された。欠損率は58.5%である。本形態はⅢa形態と細部が異なるのみであり、大きくは同形態として捉えることも可能であり、親和性も高い。

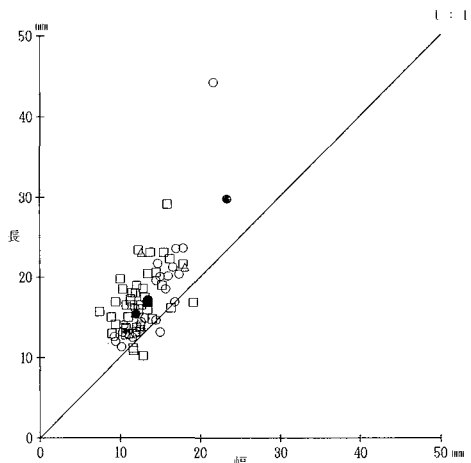
Ⅲb 1（1～5）、Ⅲb 2（6～10）、Ⅲb 3（11～13）、Ⅲb 4（18）などの形態に細分が可能である。

時期別にみると、[晩期]が90.2%、[後期後半]9.8%であり、[晩期]のものが大部分を占める。また、長さ1～3 cmの範囲にまとまり、Ⅲa形態より集中度が高い。

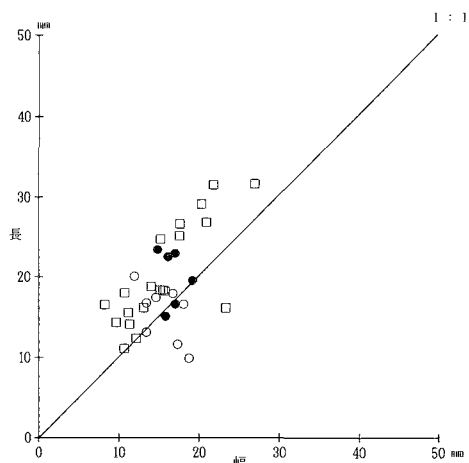
次に、石材別にみると、黒曜石35.8%、チャート13.0%、硬質頁岩8.9%、頁岩35.8%であり、黒曜石と頁岩（Ⅱ類）の占有率が高い。また、硬質頁岩はこの形態に最も多い。石材別長幅比は、第313図4のように示される。黒曜石製は長さ1～2.5 cmの範囲にまとまり、頁岩製は1.5～3 cmの範囲にまとまる。黒曜石製のものが頁岩製のものより、やや小形であることが確認される。

なお、Ⅲb 4形態は18のみであるが、この石鏃は本遺跡では最大の石鏃である。

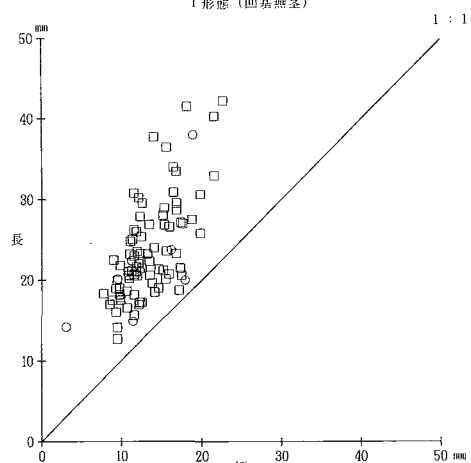
Ⅲc形態（第206図14～17・19～35） 55点検出された。欠損率は76.4%と高率である。Ⅲc 1（大形・鋸歯縁14～17・19～22）、Ⅲc 2（小形～中形：23～27）、Ⅲc 3（中形：28・31）、



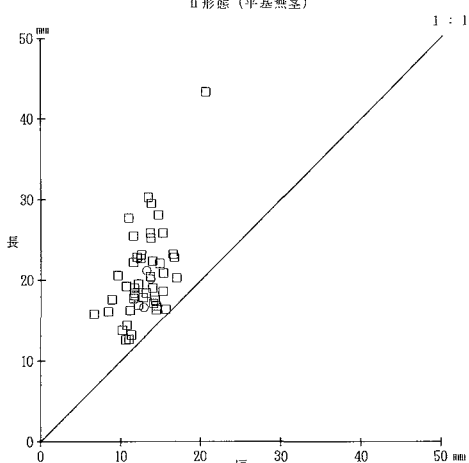
I 形態 (凹基無茎)



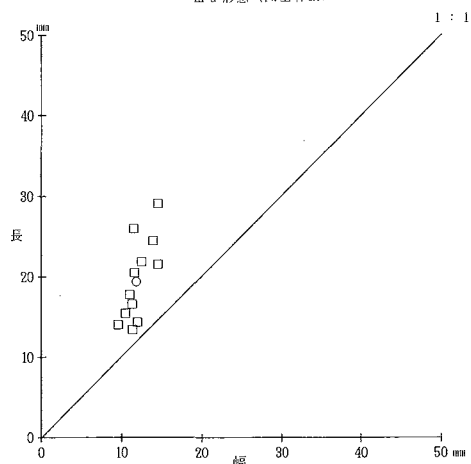
II 形態 (平基無茎)



III a 形態 (凹基有茎)



III b 形態 (平基有茎)



III c 形態 (凹基有茎)

●前期 △中期～後期前半 ○後期後半 □晚期

第312図 石鏃の時期別形態別長幅比

Ⅲc 4（小形・飛行機鏃様：32～35）などの形態が存在する。Ⅲc 1形態は側縁部が意図的に鋸歯状に加工されており、比較的強い範型の存在が推定される。それ以外の形態でも鋸歯縁状のものも多く存在しており、Ⅲc形態全体の傾向でもある。

時期別にみると、〔晩期〕87.3%、〔後期後半〕12.7%であり、大部分は〔晩期〕のものと同断される。また、石材別では黒曜石50.9%、チャート9.1%、頁岩21.8%であり、硬質頁岩、黒色安山岩、メノウ、玉髄等多様な石材が少量ずつ存在する。Ⅲ形態（有茎鏃）中、唯一黒曜石の比率が高い点と、メノウ、玉髄が用いられている点の特徴である。また、石材別長幅比は第313図のように示され、長さ1～3cmの範囲にまとまる。欠損品が多く判然としないが、黒曜石は長さ1～2cmの範囲にまとまる傾向が認められる。

なお、Ⅲc 4形態は明確ではないものの、いわゆる「飛行機鏃」的に側縁部に屈曲が認められるものであり、中部・東海地方との関連性が窺える。

Ⅳ形態 今回は図示しなかったが、12点検出されている。この形態はⅢa形態に類似しており、Ⅲa形態の未成品の可能性を有するものも含まれている。欠損率は16.7%と非常に低率である。第19表のように未成品は欠損率が低い点の特徴であるが、本形態も欠損率からみると、未成品である可能性が高い。

石材は黒曜石16.7%、チャート25.0%、頁岩41.7%等であり、頁岩の割合が高い。

Ⅴ形態（第205図24） 1点検出されているのみである。スクレイパーの可能性もあるが、調整方法・大きさから石鏃に分類した。頁岩製で先端部に擦痕が観察される。

局部磨製石鏃（第204図11～23） 16点検出されている。この石鏃の特殊性についてはすでに言及したことがあり（大工原1990）、敢えて一般的な石鏃と区別することにする。

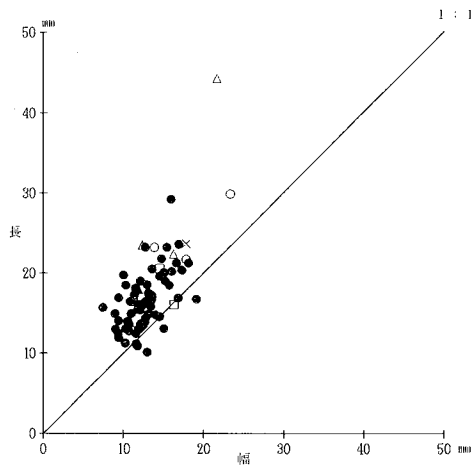
一般的な石鏃に準じて形態を分類すると、Ⅰ形態（凹基無茎鏃）14点、Ⅱ形態（平基無茎鏃：20・24）2点に大別される。Ⅰ形態はさらに細分が可能で、Ⅰa形態（やや大形で袂入部が深い：11～19）、Ⅰb形態（やや小形で袂入部が深い：21～23）、Ⅰc形態（小形で袂入部が浅い：25・26）に分けられる。Ⅰc形態はⅡ形態に近いものである。また、欠損率は50.0%であり、19のように再調整が施された例も存在する。

石材は黒曜石14点、チャート・頁岩各1点であり、黒曜石製が87.5%を占める。

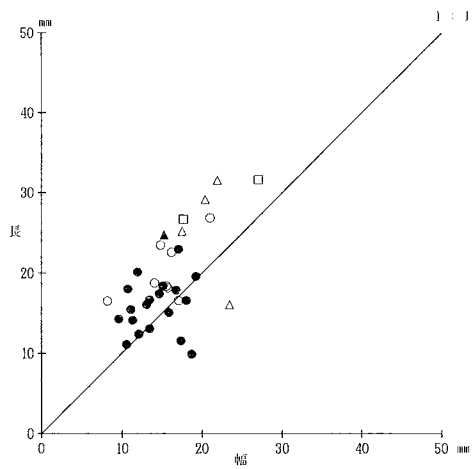
本遺跡の局部磨製石鏃はほとんどが〔後期後半〕から検出されており、この時期のものが大部分と推定される。しかし、〔後期前半〕及び、〔晩期〕からも少量検出されており、この時期のものも存在していた可能性がある。

なお、本遺跡の局部磨製石鏃は大部分Ⅰ形態であることと、黒曜石を多用していることから、「関東型局部磨製石鏃」の範疇に含まれるものである。

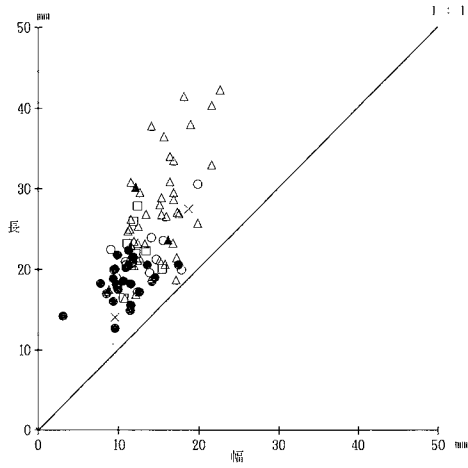
石鏃未成品（第205図18～23） 232点検出されている。未成品と成品の区別は難しいが、ここで



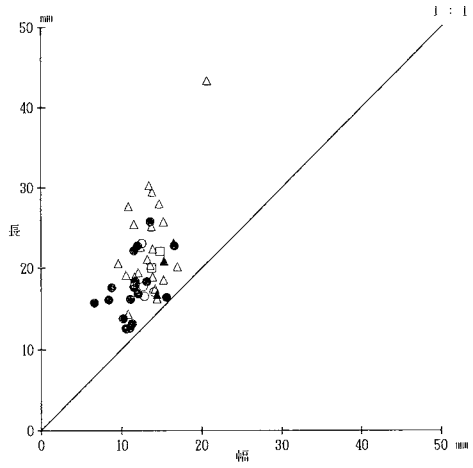
I 形態 (凹基無茎)



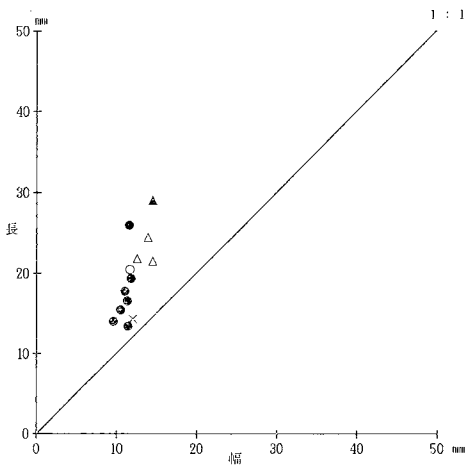
II 形態 (平基無茎)



III a 形態 (凸基有茎)



III b 形態 (平基有茎)



III c 形態 (凹基有茎)

● Ob ○ Ch ▲ Hsh △ Sh □ BAu × その他

第313図 石鏝の石材別形態別長幅比

は大きさ・厚さなどから形状が整っていないものを未成品として区別した。なお、形態不明に分類したものは、成品の欠損品と判断されるものであるが、製作時の未成品の一部の可能性もある。

未成品は各形態に属するものが存在しているが、成品との割合でみると、Ⅲ a 形態・Ⅳ 形態の未成品が圧倒的に多い。これにはⅢ b・Ⅲ c 形態の製作途中の未成品も含まれているためとみられる。しかし、Ⅰ 形態・Ⅱ 形態では未成品は少なく、平面形状の複雑なⅢ 形態には多くの未成品が生じる製作技術上の要因が存在していた可能性が高い。なお、欠損率をみると、未成品では概ね20～30%程度であり、欠損率が成品に比べて低い傾向がある。Ⅲ a 形態やⅣ 形態の成品欠損率が低い状況は未成品を含んでいるためと推定される。

石材別にみると、概ね各形態の石材組成を反映している。しかし、Ⅲ a 形態では黒曜石43.8%、頁岩26.7%と主要石材の割合が逆転しているが、これもⅢ a 形態の成品中に未成品が含まれていることが要因と推定され、欠損率から見た結果と一致している。

石錐（第207図・第314図） 78点検出されている。形態別にみると、Ⅰ a（摘み無し・やや大形：1～5・11）、Ⅰ b（摘み無し・やや小形：6～10）、Ⅱ a（摘み有り・大形・精緻：14～16・22）、Ⅱ b（摘み有り・大形・粗雑）、Ⅱ c（摘み有り・小形：13・17～21）、Ⅱ d（摘み有り・やや粗雑：12）、Ⅲ（錐部のみ作出・小形）の各形態に分類される。Ⅰ a・Ⅰ b 形態が両者で過半数を占めている。

時期別にみると、第20表のように示され、〔前期〕9点、〔後期後半〕17点、〔晩期〕53点であり、〔晩期〕のものが最も多い。時期別の特徴についてみると、〔前期〕では11～13のように、各形態に分散しており、粗雑なものが多い傾向がある。そして、Ⅱ a 形態が最も多い。また、〔後期後半〕ではⅡ c 形態が多い以外は、多くの形態が少量ずつ認められる。一方、最も出土量の多い〔晩期〕ではⅠ a・Ⅰ b 形態が多い点が大きな特徴である。比較的精緻なものが多く、明確な範型の存在が想定される。また、Ⅱ a・Ⅱ b 形態等の中でも摘み部が「T」或いは「Y」字形になるもの（14～16）はこの時期のみ認められる。Ⅱ d 形態もこの時期が最も多いが、錐部と摘み部の区別が明確でないものも多く、未成品的様相を呈している。

欠損率は時期により差異が認められ、〔後期後半〕では17.6%に過ぎないが、〔前期〕では66.7%、〔晩期〕では41.5%と比較的高率である。

石材についてみると、〔前期〕・〔後期後半〕では黒曜石とチャートが多用されている。しかし、〔晩期〕では大きく様相が異なっており、頁岩（Ⅱ類）が62.3%を占め、次いで黒曜石は18.9%であり、チャートは少ない。時期により石材が異なる傾向は石鏃にも認められるが、石錐の方が全般に黒曜石の使用頻度が低い点の特徴である。

前期の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		I				II	III a	
		Ob	Ch	Hsh	BAn	Sh	An	
I a	1	1						1
I b	1	1						
II a	4	2	1			1		2
II b								
II c	3	1	2					3
II d								
III								
不明								
計	9	5	3			1		6

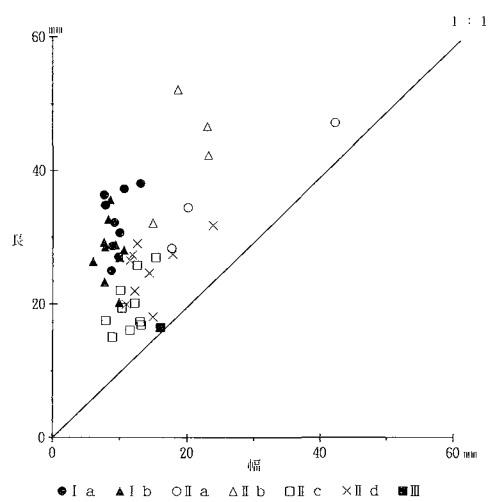
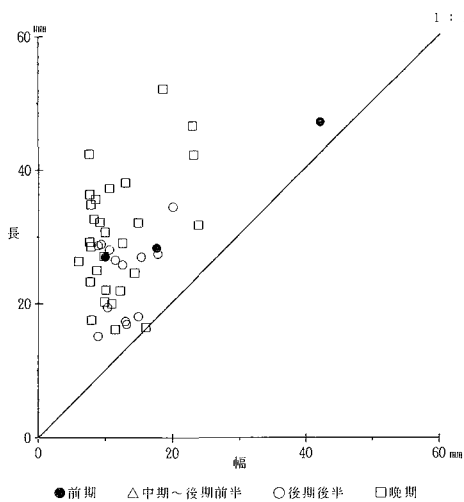
後期後半の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		I				II	III a	
		Ob	Ch	Hsh	BAn	Sh	An	
I a	2		1	1				
I b	2		1				1	
II a	2	1					1	1
II b	1	1						1
II c	7	2	4	1				1
II d	3	3						
III								
不明								
計	17	7	6	2			2	3

晩期の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		I				II	III a	
		Ob	Ch	Hsh	BAn	Sh	An	
I a	16	2				13	1	7
I b	10	1	1	1		7		2
II a	5		1		2	2		5
II b	5					5		1
II c	3	1	2					
II d	8	5		1		2		2
III	1	1						
不明	5		1			4		5
計	53	10	5	2	2	33	1	22

第20表 石錐の時期別形態と諸属性



第314図 石錐の長幅比

石槍（第208図1～7） 9点検出されている。1点を除き、〔晩期〕から検出されており、この時期のものと判断される。すべて欠損しているが、1～6のようにほぼ同じ範型を有している。押圧剥離と直接打撃を併用して作出されている。石材は黒曜石、チャート各1点の他はすべてⅡ類の頁岩製である。

7は両尖 首の欠損したものとみられる。調整は直接打撃によっており粗雑である。未成品の可能性もある。また、石材は硬質頁岩製である。〔前期〕から検出されており、この時期のものと推定される。

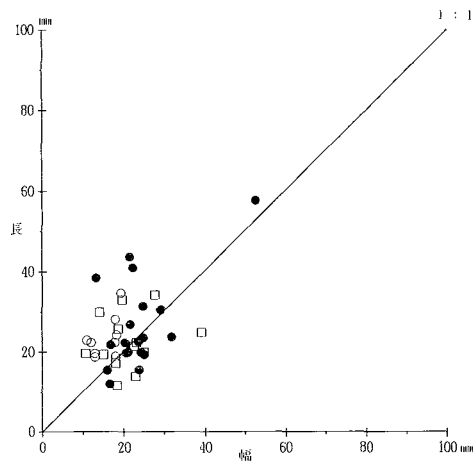
石匙A類（第208図8～13） 20点検出されている。Ⅰa形態（縦形・押圧剥離による精緻な調整：12・13）、Ⅱa形態（横形・押圧剥離による精緻な調整：8～10）、Ⅱb形態（横形・押圧剥離と直接打撃を併用した調整：11）、Ⅱc形態（横形・小形）、Ⅲ形態（超小形）に分類される。〔前期〕のものが16点と大部分であるが、〔後期前半〕（11）、〔晩期〕（8）のものも若干存在する。形態別ではⅡa形態が6点と最も多く、それ以外の形態は各3～4点ずつである。

石材は黒曜石6点、チャート8点、硬質頁岩2点、黒色安山岩3点であり、チャート、黒曜石が多く用いられている。ただし、黒曜石は〔前期〕のみに用いられている。また、晩期の精緻な石匙（8）には緑色を呈した良質の硬質頁岩が用いられており、優品である。

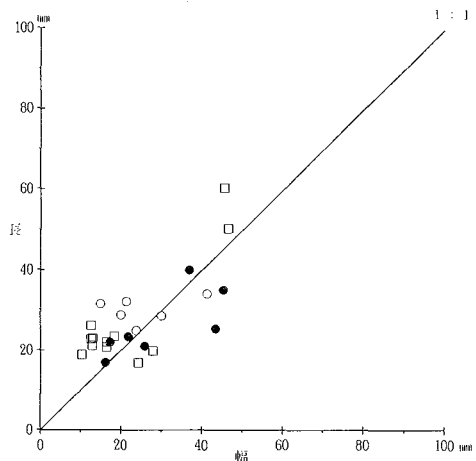
スクレイパーA類（第209図） 171点検出されている。中原遺跡と同様に調整方法から4形態に大別した。概要は第21表のとおりである。Ⅰa形態（押圧剥離：1～7・10）41点、Ⅰb形態（押圧剥離+直接打撃：8・9・13）26点、Ⅱ形態（直接打撃：18～20）29点、Ⅲ形態（縁辺微細剥離：11・12・14～17）74点である。

時期別にみると、〔前期〕のものが73点、〔後期後半〕40点、〔晩期〕55点であり、〔前期〕のものが最も多い。石材別にみると、各時期とも黒曜石が最も多い点は変わらないが、〔前期〕と〔後期後半〕ではチャートが次いで多いが、〔晩期〕ではチャートが少なく、硬質頁岩・黒色安山岩がやや多い傾向がある。

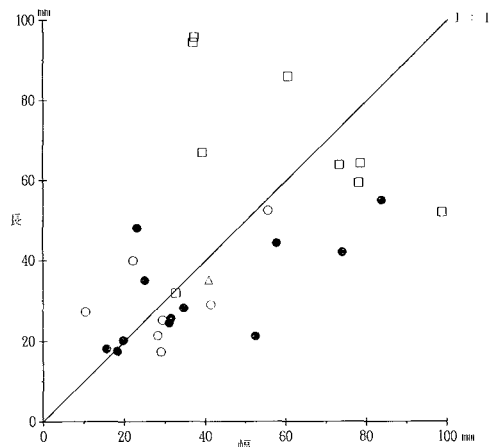
形態別に時期ごとの特徴については、第315図のように示される。Ⅰa形態では時期に関わらず長幅比1：1程度の幅広形状のものが多く、1～4cm程度の大きさに集中する。Ⅰb形態では長幅比1：1程度のものが多いが、2～3cmの小形のものと4～6cmの大形のものに分かれてまとまる。この傾向は各時期に共通して認められる。Ⅱ形態は形状・大きさともバラつきが大きい。〔前期〕では2～8cm程度のやや横長のものが多い。〔後期後半〕でも同様の傾向が認められるが、〔晩期〕では6～10cm程度の大形のものが多く、小形のものは1例しか存在しない。Ⅲ形態では長幅比1：1程度のやや縦長のものが多く、大きさは2～4cmに集中するが、5cm以上の大



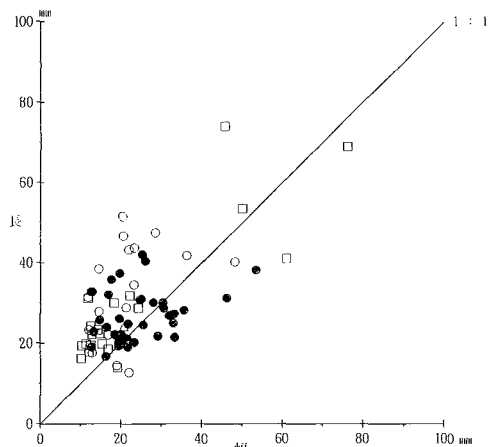
I a 形態



I b 形態

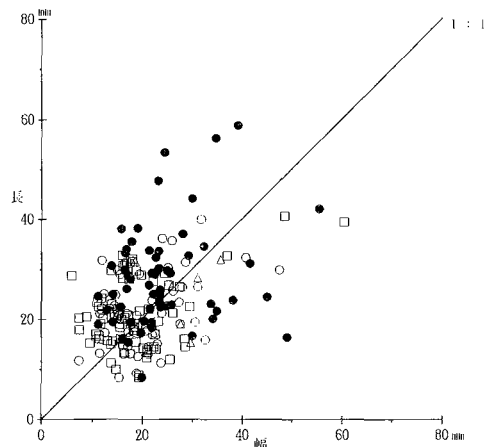


II 形態

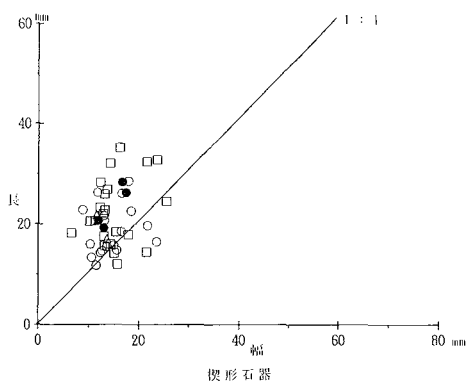


III 形態

スクレイパーA類



リタッチドフレイクA類



楔形石器

●前期 △中期～後期前半 ○後期後半 □晩期

第315図 スクレイパーA類・リタッチドフレイクA類の長幅比

前期の占有空間

形態	個数	石材 (I類)					
		Ob	Ch	赤Ch	HSh	BAn	他
I a	19	14	3		2		
I b	7	4	3				
II	12	4	5		1	2	
III	35	28	5		2		
不明							
計	73	50	16		5	2	

後期後半の占有空間

形態	個数	石材					
		Ob	Ch	赤Ch	HSh	BAn	他
I a	9	7		1	1		
I b	6	1	4		1		
II	7	2	2			3	
III	18	14	3	1			
不明							
計	40	24	9	2	2	3	

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材 (I類)					
		Ob	Ch	赤Ch	HSh	BAn	他
I a							
I b	1	1?					
II	1					1	
III	1	1					
不明							
計	3	2				1	

晩期の占有空間

形態	個数	石材					
		Ob	Ch	赤Ch	HSh	BAn	他
I a	13	6		1	4	2	
I b	12	9	2			1	
II	9				2	6	1
III	20	13	2	1	3	1	
不明	1	1					
計	55	29	4	2	9	10	1

第21表 スクレイパーA類の時期別形態と諸属性

形のものも少数存在する。

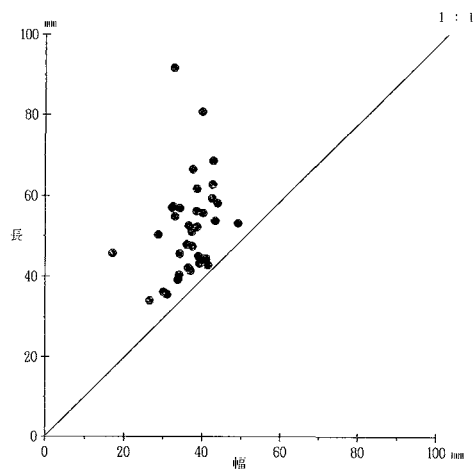
時期別にみると、「前期」ではほとんどが2～4 cmの範囲にまとまるが、「後期後半」では2～4 cmの小形で縦長のもの、5 cm程度のやや大形のものの2群に分化している。同様に、「晩期」でも2～3 cmの小形のものが多いが、5～8 cm 2大形のものも少数存在しており、2群に分かれる。

以上のことから、スクレイパーA類では時期により形態別比率が変化すること、形態内での形状・大きさが時期により異なること、II形態は他の形態とは大きな違いがあることが確認された。また、I b・III形態では大形のグループと小形のグループに分化することが確認されたが、小形では黒曜石が多く、大形ではそれ以外の石材が用いられており、時期を限らず石材と大きさとの間に一定の関係が存在することが判明した。また、I b形態・III形態が2群に分かれるのは、石鏃の素材となる3～4 cmの大きさのものが欠落しているためと考えられ、石鏃とスクレイパーA類が補完的關係にあったことが想定される。

リタッチド・フレイクA類 図示していないが、190点検出された。スクレイパーA類III形態に準じるものであり、形状・大きさは第315図のグラフのように示される。形状は長幅比1：1を中心に1：2～2：1程度の剥片を素材としたものであり、大きさは1～4 cmのものに集中している。

また、4～6 cm程度の大形のものも存在するが少量である。また、グラフでは2～3 cmの大きさのものが欠落している状態が観察されるが、スクレイパーA類同様、石鏃と補完的な関係にあるためと推定される。

時期別にみると、〔前期〕のもの59点、〔後期前半〕6点、〔後期後半〕49点、〔晩期〕76点であり、〔晩期〕のものが最も多い。また、石材別では、黒曜石154点（81.1%）と大多数を占め、チャート22点（11.6%）、硬質頁岩11点（5.8%）とそれ以外の石材は少ない。このうち硬質頁岩はすべて〔後期後半〕と〔晩期〕のものである。



第316図 D-201号土坑出土の黒曜石の長幅比

楔形石器 図示していないが、46点検出されている。石核A類の可能性のあるものも含まれている。〔後期後半〕のものが18点（39.1%）、〔晩期〕のもの22点（47.8%）と両者で大部分を占める。また、石材別では黒曜石37点（80.4%）であり、他の石材は少ない。

楔形石器は「楔」として用いられていた可能性と、両極技法により剥片が作出された残核の可能性があるが、第315図のグラフのように、大部分は1～4 cm程度のやや縦長の形状であり、石鏃の素材剥片を作出するのに適したものである。したがって、この器種は両極技法によって石鏃の素材剥片を作出した残核の可能性が高い。また、前期には少なく、大部分が後期後半～晩期のものであることから、時期により剥片A類の作出方法が異なっていたと推定される。

黒曜石原石（第210図） 全部で81点検出されている。このうち、前期後半（諸磯b）のD-201号土坑から検出された良質の黒曜石原石の一括資料は36点存在する。これらの形状は1～9のように、角礫状を呈しており、転石ではなく露頭から直接採取したものとみられる。総重量は1,573 gであり、石鏃の素材となる3～4 cmの剥片約320点分である。平均重量は44.9 gである。採取地点については、現在分析中でははっきりしないが、長野県和田峠周辺のものとして推定される。

なお、前期の黒曜石原石の集中出土事例は、中野谷地区では注連引原遺跡（関山期・9点672.5 g：信州系星ヶ塔）、中野谷松原遺跡（諸磯b期：未分析）でも確認されており、この地区の前期遺跡の特徴である。前期には、この地域が黒曜石の流通上、重要な位置にあったとみられ（金山1993）、流通システムを解明するために重要な資料である。

旧石器再利用品（第210図11） 11は石刃を素材とした二側縁調整のナイフ形石器の基部と推定される。全体に風化しており、表面は黒曜石原石の剥離面に近い状態を示す。J・1号住居址（諸磯b期）から出土しており、原石と一緒に搬入されたものの可能性がある。

B類石器

打製石斧（第211図～第214図） 392点検出されている。形態分類は以下のとおりである。

I形態（第211図13） 平面形は撥形で、断面蒲鉾状を呈する片刃の「斧」的特徴を有するもので、急角度調整により作出されている。「撥形」と呼称されるものである。7点検出されたのみであり、[前期]から3点、[後期後半]から4点検出されている。

II a形態（突形：第211図1～12、第212図1～3） 平面形は短冊形または細長い撥形を呈する。断面形はレンズ状を基本とし、刃部は両刃である。両面調整で階段状剥離が多用される。「土掘具」的特徴を有する。従来、これらは平面形のみにより、「短冊形」と「撥形」に大別されていたものである。各形態中最多の171点（43.6%）検出されている。この形態は使用による磨耗が顕著であり、刃部は徐々に後退している。

各時期とも多いが、[前期]では68.1%と最も高率である。前期の住居址から検出されたII a 1形態（1～6）は、やや刃部が開いており、比較的明確な範型の存在が窺える。また、II a 4形態（第212図1）、II a 5形態（第212図2・3）など、刃部の開く形態も[前期]に多い。これに対し、II a 2形態（7・8）、II a 3形態（9～11）等、[後期前半]～[晩期]のものは側縁部が平行のものが多く、前期のものとはやや形状が異なる。

II b形態 図示していないが、小形の打製石斧で、II a形態を短くした形状のものである。6点と少ない。この形態には本来は別形態であったものが、二次加工されたものも含まれている。

III a形態（側湾形：第212図4～10・第214図5・6） 側縁部が湾曲した幅広のもので、断面形はレンズ状を基本とする。刃部は両端に存在し、両刃を基本とする。両面調整で階段状剥離が多用される。「分銅形」と呼称されていたものである。51点検出されている。時期別にみると、[後期後半]に最も多く、[後期前半]と[晩期]の部分にも存在するが、[前期]にはほとんど存在しない。

III a 1形態（4・5）、III a 2形態（6・7）、III a 3形態（8～10）、III a 4形態（第214図5・6）等に細分される。また、使用により損耗し、形状変化しているものも存在する。

III b形態（挟入形：第213図1～3） 側縁部に挟入部が存在する幅広のもので、断面形はレンズ状を呈する。刃部は両刃で両端に存在する。両面調整で階段状剥離が多用される。10点検出されているのみである。III b形態は[後期後半]から7点検出されており、この時期のものが多いと推定される。

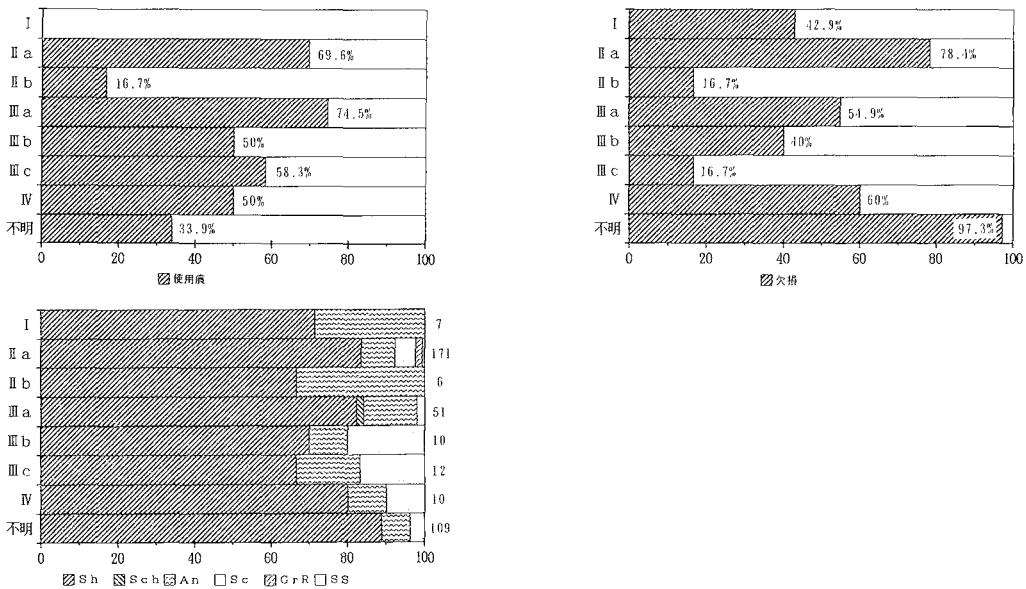
大形のⅢb1形態（1・2）と小形のⅢb2形態（3）などが存在する。Ⅲb1形態は特徴的形態であり、谷地遺跡（藤岡市）、山間遺跡（同）、梨ノ木平遺跡（月夜野町）などでも検出されている。

Ⅲc形態（側湾非対称形：第214図1～4・8・9）側縁部が湾曲し、大きくはⅢa形態（側湾形）に含まれるが、湾曲部が基部に偏っているものである。Ⅱa形態（突形）に近いものⅢc1形態（1～4）と、Ⅲa形態（側湾形）に近いⅢc2形態（8・9）に細分される。この形態は

前期の占有空間								後期後半の占有空間									
形態	個数	石材						欠損	形態	個数	石材						欠損
		Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR				Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR	
I	3	1						3	I	4	4						
Ⅱa	64	51		7	1	5		53	Ⅱa	70	62		5	1	2		53
Ⅱb	5	4		1					Ⅱb	1							1
Ⅲa	1			1				1	Ⅲa	32	26		5	1			17
Ⅲb									Ⅲb	7	5		1	1			3
Ⅲc									Ⅲc	4	4						2
Ⅳ									Ⅳ	8	6		1	1			4
不明	21	19		2				20	不明	60	53		5	2			59
計	94	75	0	13	1	5	0	77	計	186	160	0	17	6	2	139	

中期～後期前半の占有空間								晩期の占有空間									
形態	個数	石材						欠損	形態	個数	石材						欠損
		Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR				Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR	
I									I								
Ⅱa	10	6		3		1		8	Ⅱa	25	22			2	1		19
Ⅱb									Ⅱb								
Ⅲa	8	8						3	Ⅲa	10	8	1	1				7
Ⅲb	2	2							Ⅲb	1				1			1
Ⅲc	1			1					Ⅲc	7	4		1	2			
Ⅳ									Ⅳ	2	2						2
不明	3	3						3	不明	39	35		2	2			38
計	24	19	0	4	0	1	0	14	計	84	71	1	4	7	1	67	

第22表 打製石斧の時期別形態と諸属性



第317図 打製石斧の形態別使用痕・欠損・石材

〔晩期〕に最も多く、次いで〔後期後半〕のものが多い。

IV形態（凸形：第213図4～8・第214図7） 基部が凸形を呈するもので、刃部の平面形は正方形を呈する。断面形はレンズ状基本とし、使用による磨耗痕が観察される。比較的小形のものが多い。後期後半の占有空間から大部分検出されており、この時期のものと推定される。この形態の打製石斧は谷地遺跡においてまとまって検出されている。

なお、第214図7は石材が異なるものの、注連引原Ⅱ遺跡で検出されている弥生時代の「石鋏（Ⅰ形態）」と大きさ・形状とも非常に類似しており、留意される。

打製石斧の諸特性（第317図） 欠損・使用痕・石材について、ここでまとめて扱うことにする。

〔欠損〕 欠損率が最も高いのはⅡa形態であり、78.4%に達する。Ⅰ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ形態は40～60%と中程度の欠損率であり、Ⅱb・Ⅲc形態は20%以下と低率である。

〔使用痕〕 使用による刃部磨耗痕と、装着による磨耗痕が観察されたものは、Ⅰ形態を除くすべての形態に存在する。刃部・装着部の両方に磨耗痕が認められるものが多数であり、一連のものと推定される。中でもⅡ形態・Ⅲa形態は70%以上と高率である。Ⅲb・Ⅲc・Ⅳ形態は50～60%と過半数のものに認められる。また、形態不明としたものの中の30%程度に使用痕が認められる。しかし、Ⅱb形態は16.7%と低率である。

Ⅱa・Ⅲa・Ⅳ形態では欠損率と使用痕の比率がほぼ同じ割合を示しており、欠損と使用痕が一連のものであったことが解る。ちなみに、刃部に磨耗痕より新しい剥離痕が観察されるものも各形態に存在しており、使用時には磨耗と剥離が繰り返される状態で用いられていたことが解る。このような状態で使用されていたためか、形態不明としたものの中には、単に割れたものではなく、使用による剥離・欠損の繰り返しにより変形し、本来の形態が解らなくなってしまったものも多数存在する。また、敲打痕の観察され、敲石に転用されたものも存在する。

〔石材〕 各形態ともⅡ類の頁岩が70～80%を占めており、頁岩と打製石斧の結び付きは強い。それ以外の石材の中ではⅢa類の安山岩がやや多く、形態に関わらず一定量を占めている。また、〔後期後半〕・〔晩期〕に多いⅢb形態・Ⅲc形態では結晶片岩がやや多く、時期的傾向として捉えることができる。

石匙B類（第215図1～5・8・12） 10点検出されている。これら石匙B類は主として頁岩（Ⅱ類）を用いたやや大形のものである。大部分は前期の住居址から検出されており、この時期のものが大多数を占める。

すべて横形（Ⅱ形態）であるが、細部の違いにより細分が可能である。Ⅱa形態（1～5）は主として直接打撃により作出されたもので、やや大形である。これに対し、Ⅱb形態（8・12）は押圧剥離と直接打撃を併用したもので、やや小形である。それぞれ、スクレイパーB類の分類

ではⅡ形態とⅠa・Ⅰb形態に相当する。

なお、使用による刃部磨耗痕が観察される例も存在するが、打製石斧に比べ、いずれも顕著ではない。

スクレイパーB類（第215図～第217図） 382点検出されている。中原遺跡の分類同様、Ⅰa形態（押圧剥離：6・7・9・11）、Ⅰb形態（押圧剥離+直接打撃：第215図13～21）、Ⅱ形態（第216図1～15）、Ⅲ形態（縁辺微細剥離：第217図1～20）に大別される。

形態別にみると、Ⅱ形態が257点（67.6%）と最も多く、それ以外の形態は比較的少ない。いずれの形態でも長幅比1：1程度の幅広剥片と、それに準じた剥片が素材とされている。

次に時期別にみると、第23表のように、中期を除いてほぼ同じ程度の数量であるが、時期によって形態別組成は大きく異なる。前期ではⅡ形態以外にⅠa形態も18.5%とやや多い。しかし、晩期ではⅠa形態は5.1%と少なく、Ⅰb形態が17.5%とやや多い。そして、中期末～後期前半と後期後半はⅠa・Ⅰb形態はほとんど存在しない。

また、大きさ・形状で比較すると、第318図のグラフのように示される。Ⅰa形態は〔前期〕のもの、〔晩期〕のものに二分される。〔晩期〕のものは2～3cm程度のものであるのに対し、〔前期〕のものは4～7cm程度のものが大部分であり、顕著な差異が認められる。また、Ⅰb形態では〔晩期〕のものが大部分であり、それ以外の時期のものは少ない。〔晩期〕のものでは3～6cm程度のものと、8cm以上のものに分かれる傾向がある。Ⅱ形態は2～10cm程度にまとまるが、大きさ・形状からは時期による傾向は全く認められない。Ⅲ形態は3～9cm程度の大きさにまとまるが、Ⅱ形態同様時期による傾向は認められない。

以上のように、Ⅰa形態・Ⅰb形態では時期により、存在の有無・大きさ・形状等に差異が認められることと、Ⅱ形態・Ⅲ形態では時期により大きな違いが存在しないことが判明した。

また、石材は大部分頁岩が用いられているが、安山岩等も少量存在する。この

前期の占有空間

形態	個数	石材		
		Sh	Sch	An
Ⅰa	20	19		1
Ⅰb	2	2		
Ⅱ	71	64		7
Ⅲ	15	13		2
不明				
計	108	98		10

後期後半の占有空間

形態	個数	石材		
		Sh	Sch	An
Ⅰa				
Ⅰb	2	2		
Ⅱ	87	76	2	9
Ⅲ	23	22		1
不明				
計	112	100	2	10

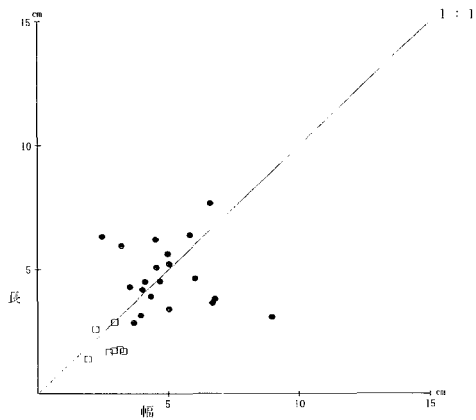
中期末～後期前半の占有空間

形態	個数	石材		
		Sh	Sch	An
Ⅰa				
Ⅰb	1	1		
Ⅱ	15	10		5
Ⅲ	6	6		
不明	1	1		
計	23	18		5

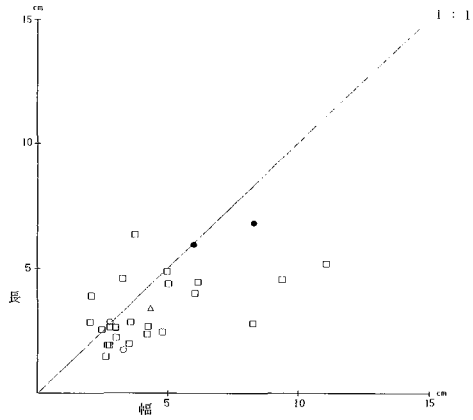
晩期の占有空間

形態	個数	石材		
		Sh	Sch	An
Ⅰa	7	7		
Ⅰb	24	22		2
Ⅱ	84	73		11
Ⅲ	22	18		4
不明				
計	137	120		17

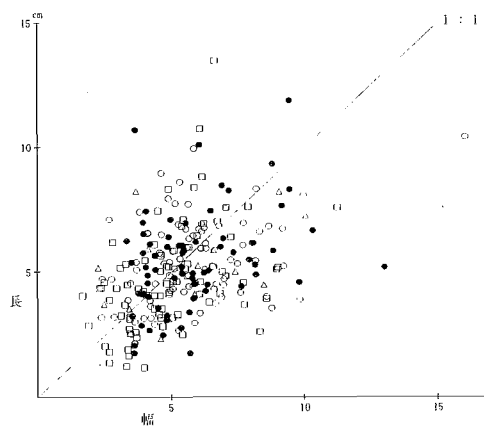
第23表 スクレイパーB類の時期別形態と諸属性



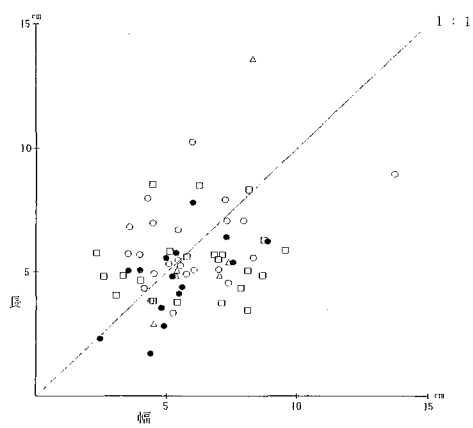
I a 形態



I b 形態

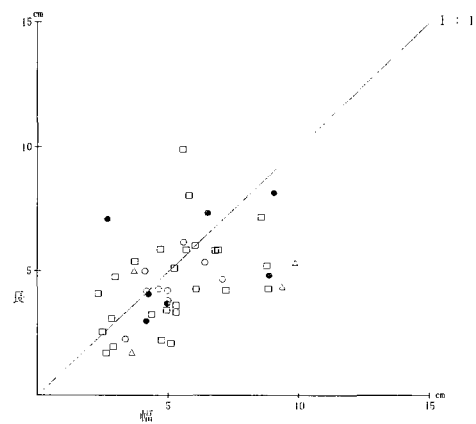


II 形態



スクレイパーB類

冪形態



RF・B

● 前期 △ 後期前半 ○ 後期後半 □ 晩期

第318図 スクレイパーB類・リタッチドフレイクB類の長幅比

傾向は打製石斧とほぼ同一であり、素材の作出において、緊密な関係を有しているとみられる。

使用痕の認められるものは各形態に少量ずつ存在しており、これらのものは使用状態において、打製石斧同様「土」との接触のある用いられ方であった可能性が高い。

リタッチド・フレイクB類 図示していないが、46点検出されている。晩期のものが26点（56.5%）と最も多く、それ以外の時期では数点ずつ存在するのみである。この器種はスクレイパーB類Ⅲ形態に準じたものであり、使用によると推定される縁辺微細剥離が観察されるものも含む。しかし、顕著な刃部磨耗痕の観察されるものは存在しない。これは、個体ごとの使用頻度が低かったためと推定される。第318図のグラフのように、2～10cm程度の長幅比1：1程度の剥片を素材としている。また、素材はすべて頁岩である。

C1類石器

磨石（第218図） 180点検出されている。形態分類は中原遺跡同様に、Ⅰ形態（円形：1～4）、Ⅱ形態（楕円形：5～8）、Ⅲ形態（棒状）、Ⅳ形態（四角形：9～12）、Ⅴ形態（不定形：13～16）の5形態に分類される。諸属性は第24表のとおりである。

時期ごとにみると、〔晩期〕から出土したものが89点と最多である。また、形態別では〔後期前半〕のものを除き、Ⅱ形態（楕円形）が最も多い。また、Ⅴ形態（不定形）も各時期に多いが、Ⅱ形態に準じたものが多い。欠損率についてみると、〔前期〕では非常に少ないが、それ以外の時期では比較的高率である。なお、石材は各時期ともすべて安山岩である。

凹石（第219図） 344点検出されている。形態分類は中原遺跡同様に、平面形態によりⅠ～Ⅴ形態に大別し、凹と磨面との新旧関係によりa形態（磨面→凹面）、b形態（凹面→磨面）c形態（凹のみ）に細分した。諸属性は第25表のとおりである。

形態別にみると、Ⅱ形態が175点（51.4%）と過半数を占め最も多い。Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ形態は

前期の占有空間				後期後半の占有空間				
形態	個数	石材		欠損	形態	個数	石材	
		An					An	
Ⅰ	3	3			Ⅰ	4	4	
Ⅱ	11	11		2	Ⅱ	26	26	
Ⅲ	1	1			Ⅲ			
Ⅳ	1	1			Ⅳ	3	3	
Ⅴ	13	13		2	Ⅴ	14	14	
不明					不明	3	3	
計	29	29		4	計	50	50	

中期～後期後半の占有空間				晩期の占有空間				
形態	個数	石材		欠損	形態	個数	石材	
		An					An	
Ⅰ	1	1			Ⅰ	13	13	
Ⅱ	3	3			Ⅱ	36	36	
Ⅲ					Ⅲ	1	1	
Ⅳ	2	2		1	Ⅳ	9	9	
Ⅴ	5	5		2	Ⅴ	26	26	
不明					不明	4	4	
計	11	11		3	計	89	89	

第24表 磨石の時期別形態と諸属性

前期の占有空間

形態	個数	石材					欠損
		An	Sh	SS	Sc	Tf	
I a							
I b	12	12					1
I c							
II							
II a	1	1					
II b	45	44	1				9
II c							
III b	1	1					
III c							
IV a	1	1					
IV b	5	5					4
V a							
V b	14	14					1
V c							
計	79	78	1				15

後期後半の占有空間

形態	個数	石材					欠損
		An	Sh	SS	Sc	Tf	
I a	1	1					
I b	13	13					3
I c							
II	1	1					
II a	2	2					1
II b	54	54					15
II c	3	3					
III b	9	7		1	1		2
III c							
IV a							
IV b	12	12					3
V a	1	1					1
V b	28	28					13
V c							
計	124	122		1	1		38

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材					欠損
		An	Sh	SS	Sc	Tf	
I a							
I b	10	10					3
I c							
II							
II a							
II b	12	12					3
II c	1	1					
III b	2	2					
III c							
IV a							
IV b	3	3					
V a	1	1					
V b	13	13					3
V c							
計	42	42					9

晩期の占有空間

形態	個数	石材					欠損
		An	Sh	SS	Sc	Tf	
I a	4	4					
I b	13	12		1			3
I c	1	1					
II	1	1					
II a	7	7					2
II b	42	41				1	14
II c	8	8					1
III b	3	3					1
III c	1				1		
IV a							
IV b	5	5					1
V a	1	1					
V b	7	7					
V c	2	1			1		1
計	95	91		1	2		23

第25表 凹石の時期別形態と諸属性

やや少ないが安定して存在するが、Ⅲ形態は非常に少ない。また、細分形態別では a 形態19点 (5.6%)、c 形態16点 (4.7%) と少なく、b 形態が圧倒的に多い。図示したのは I b 形態 (1~4)、II b 形態 (5~8)、III a 形態 (14~16)、IV b 形態 (9~12) のみである。

時期別にみると、各時期とも形態組成・個数とも類似した傾向を示しており、時期による大きな差異は認められない。しかし、[晩期]のみV形態(不定形)が少ないことや、c 形態が多いことなど、若干の差異は存在する。

欠損率は各時期とも20~30%程度であり、時期による違いは見い出せない。

石材は安山岩が97.9%とほとんどを占めており、[後期後半]・[晩期]に砂岩(Ⅲb類)・結晶片岩(Ⅳ類)が僅かに存在するのみである。

石皿 (第220図・第221図・第232

図11~15) 全部で125点検出されている。形態分類は基本的には中原遺跡と同様であり、I 形態(円形)、II 形態(楕円形)、III 形態(不定形)に大別されるが、本遺跡ではこれにIV a 形態(足付き: 第221図5~8)、V a 形態(小形石皿: 12~15・石臼状: 11)が加わる。また、作業面の形状から a 形態(凹面)・b 形態(平坦)に細分される。欠損率が66.1%と高いためと、小破片では形態が判断できないため、形態不明のものが46点(37.1%)と多い。諸属性は第26表のとおりである。図示したものは I b 形態(第221図4)、II a 形態(第220図1・3、第221図1)、II b 形態(第220図2・4・6・第221図2)、III b 形態(第220図5)、IV 形態(第221図5~8)である。

前期の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	Sc	SS	
I a					
I b	4	3	1		2
II a	1	1			
II b	3	3			
III a	1	1			1
III b					
IV a					
V a					
不明	2	2			2
計	11	10	1		5

後期後半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	Sc	SS	
I a					
I b	1	1			1
II a	1	1			1
II b	3	3			1
III a					
III b	4	1	3		4
IV a	1	1			
V a	3	3			
不明	25	12	12	1	24
計	38	22	15	1	31

中期~後期前半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	Sc	SS	
I a	2	2			2
I b	2	2			1
II a	3	2	1		3
II b	2	2			
III a					
III b	10	5	5		8
IV a					
V a					
不明	5	4	1		5
計	24	17	7		19

晩期の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	Sc	SS	
I a	1	1			1
I b	7	7			
II a	8	6	2		8
II b	7	7			3
III a	1	1			
III b	8	4	4		4
IV a	4	4			3
V a	2	2			
不明	13	8	5		10
計	51	40	11		29

第26表 石皿の時期別形態と諸属性

時期別にみると、〔前期〕では少ないが、〔後期前半〕～〔晩期〕では多い。また、〔前期〕ではⅠb形態とⅡb形態といった作業面が平坦なものが大多数を占めている。また、〔後期前半〕ではⅢb形態が最も多いが、この中には敷石住居址の構築材が含まれている可能性が高い。また、〔後期後半〕のものでも同様の傾向を示しているが、この場所にも敷石住居址（後期前半のもの）が存在しているためとみられる。また、〔晩期〕ではⅡa形態とⅢb形態が多い。Ⅱb形態・Ⅲb形態で特に大形のもの（第220図1～4・6等）が多いことと、こうした大形のもの欠損率が低いことが、〔晩期〕の特徴である。

Ⅳa形態は4点と少ないが、〔後期後半〕・〔晩期〕にまとまる。また、Ⅴa形態も〔後期後半〕・〔晩期〕に多い。これらの形態は〔前期〕には認められず、この時期の特徴とみられる。Ⅴa形態には5点と少ないが、臼状のもの（第232図11・12）、小形碗状のもの（同13～15）に細分が可能であるが、いずれも多孔質の安山岩が用いられており、一般的な石皿と別の用途に用いられた可能性が高い点で共通する。

石材は安山岩が71.8%と多く、結晶片岩27.6%と少ない。結晶片岩製のものは石材の特徴からb形態のものが多い。また時期別にみると、〔前期〕ではほとんど安山岩製であるが、中期末～〔後期後半〕では結晶片岩製のものが30～40%を占める。また、〔晩期〕には結晶片岩の比率が低下する。

球石（第231図13～25） 187点検出されている。研磨により球状に整形されたものと、自然の状態で球状のものが存在する。大部分は磨石より小形であり、掌中に収まる。平面形が円形のⅠ形態と楕円形のⅡ形態に分類されるが、Ⅰ形態が125点（67.2%）と多い。時期別にみると〔晩期〕のものが84.4%を占め、その大部分はS-2号石棒祭祀遺構から出土したものである。石材は砂岩・緑色岩類各1点を除き、安山岩製である。諸属性は第27表のとおりである。

この器種は磨石に類似するが、磨石との差異は磨石では作業面が扁平化しており、直線運動により磨面が形成されているのに対し、球石では全体が球状を呈しており、回転運動によっている点に大きな

前期の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	SS	GrR	
Ⅰ	8	8			5
Ⅱ	5	5			3
計	13	13			8

後期後半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	SS	GrR	
Ⅰ	5	5			2
Ⅱ	9	9			1
計	14	14			3

中期～後期後半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	SS	GrR	
Ⅰ	2	2			2
Ⅱ					
計	2	2			2

晩期の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		An	SS	GrR	
Ⅰ	110	109	1		2
Ⅱ	47	46		1	1
計	157	155	1	1	3

第27表 球石の時期別形態と諸属性

違いがある。また、丸石と類似するが、掌で握れるか否かにより区別される。

用途については、磨石のように実用的なものの可能性と、丸石のように「第二の道具」として用いられた可能性があるが、大部分が晩期の特殊遺構に伴っていることから、後者の可能性が高い。

C 2 類石器

砥石（第222図） 481点検出されている。形態分類は基本的には中原遺跡と同様であり、I形態（荒砥）、II形態（中砥）、III形態（仕上げ砥）に大別される。本遺跡では有溝のものが多いことから、さらにa形態（作業面・平坦）とb形態（作業部・有溝）に細分することにした。諸属性は第28表のとおりである。

I形態はすべて牛伏砂岩製であり、321点（67.6%）と最も多い。I a形態（9～25）が最も多く、I b形態（1～8・26）は少ない。また、小形扁平で縁辺部が薄くなるように砥石自体が整形されたものが、[後期後半]・[晩期]から54点検出されている（1～24）。こうした形状のものは「石庖丁様石器」（鈴木1970・鈴木1981）として区別されている。

II形態はほとんどが板状節理による安山岩を用いたものであり、136点（28.6%）を占める。II a形態（27～29）が大部分をしめており、II b形態はやや粒子の細かい砂岩製のものが4点存在するのみである。

III形態ではすべて結晶片岩製であり、18点と非常に少ない。III a形態（28・31）のみであり、中には石皿と区別が困難なものも存在する。

時期別にみると、[後期後半]のものが45.3%を占めており、次いで[晩期]のものが32.2%を占める。

[前期]ではI a形態が大部分であり、II・III形態は少ない。また、[後期前半]ではII a形態が最も多く、

I a形態の方が少ない点で

前期の占有空間

形態	個数	石材			
		An	SS	Sc	Tf
I a	30	1	29		
I b	6		6		
II a	5	5			
II b					
III	2			2	
計	43	6	35	2	

後期後半の占有空間

形態	個数	石材			
		An	SS	Sc	Tf
I a	94	1	93(10)		
I b	46		46(26)		
II a	63	61	2(1)		
II b	3		3(3)		
III	9			9	
計	215	62	144(40)	9	

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材			
		An	SS	Sc	Tf
I a	22	6	16(1)		
I b	5		5(2)		
II a	36	36			
II b					
III	1			1	
計	64	42	21(3)	1	

晩期の占有空間

形態	個数	石材			
		An	SS	Sc	Tf
I a	110		109(6)		1
I b	8		8(7)		
II a	28	27	1(1)		
II b	1		1		
III	6			6	
計	153	27	119(14)	6	1

() 石包丁様

第28表 砥石の時期別形態と諸属性

特異である。これはⅡ a 形態の中に敷石住居址の構築材が含まれているためと推定される。また、[後期後半]ではⅠ b 形態が21.4%と他の時期に比べて著しく多い点の特徴である。Ⅱ a 形態の一部は敷石住居址の構築材の可能性のあるものも含まれる。晩期ではⅠ a 形態が圧倒的に多く、それ以外のものは少ない。

以上のように、砥石では[後期後半]に有溝のものが非常に多く存在すること、[後期後半]～[晩期]にはいわゆる「石庖丁様石器」が多数存在することが判明した。

敲石（第223図） 65点検出されている。磨石同様平面形状から5形態に分類される。Ⅰ形態（円形：1～4）、Ⅱ形態（楕円：5～15）、Ⅲ形態（棒状：16～21）などが存在、Ⅱ形態が27点（48.2%）と最も多い。これら敲石は、形態の別なく敲打痕の状況からみて、石器製作用のハンマーストーンと推定される。諸属性は第29表のとおりである。

時期別にみると、[後期後半]が24点と最も多く、それ以外の時期では10点前後である。[晩期]では他の石器に比べ非常に少なく、敲石を用いる作業が少なかったことを示している。また、石材はⅠ類～Ⅴ類までの、多様な石材が用いられており、中では頁岩、安山岩、結晶片岩がやや

前期の占有空間

形態	個数	石材					
		An	Sh	SS	Sc	GrR	BAn
円	2		1			1	
楕円	2		1		1		
棒状	1				1		
四角形							
不定形	2		1		1		
不明							
計	7		3		3	1	

後期後半の占有空間

形態	個数	石材					
		An	Sh	SS	Sc	GrR	BAn
円							
楕円	11	3	3	1	2	2	
棒状	3				2	1	
四角形	1					1	
不定形	8	4	1		1	1	1
不明	1					1	
計	24	7	4	1	5	6	1

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材					
		An	Sh	SS	Sc	GrR	BAn
円							
楕円	6	3			1	2	
棒状	4	1			3		
四角形							
不定形	3	1	1			1	
不明							
計	13	5	1		4	3	

晩期の占有空間

形態	個数	石材					
		An	Sh	SS	Sc	GrR	BAn
円	1	1					
楕円	9	3	1		4	1	
棒状							
四角形	1	1					
不定形	2		1			1	
不明	1				1		
計	14	5	2		5	2	

第29表 敲石の時期別形態と諸属性

多い。頁岩製のものの中には3～5のように石核B類が転用されたものも存在する。なお、3・4は研磨痕も観察され、用途も単なるハンマーストーンではないと判断される特異なものである。また、結晶片岩製のものはⅢ形態に多いが、石材の性質によるものとみられる。

D類石器

石棒（第224図・第225図） 39点検出されている。Ⅰ形態（無頭：第224図1～20）、Ⅱa形態（有頭無溝：第225図1～4・7・13～15）、Ⅱb形態（有頭有溝：第225図5・6）に分類される。諸属性は第30表のとおりである。時期別にみると、〔晩期〕のものが21点と最も多い。

Ⅰ形態は17点と最多であり、大形のものから小形のものまで多様である。各時期に存在している。大形のものでは第224図1のようにS-5号祭壇状配石遺構に立石として用いられたものが存在する。また、20は最小のもので10cm以下である。一部のもの（4・7～9）には多孔石と同様の穴が認められる。

Ⅱa形態は7点であり、中形～大形のものに限定され、〔晩期〕のものが多く、大形のものでは晩期の遺構に付随しており、第225図1はS-6号配石墓の立石として、同3はS-2号石棒祭祀遺構の中心的石棒として用いられていた。なお、4は胴部の太く特異な形状を呈しており、留意される。また、中形のものではS-2号石棒祭祀遺構に伴うものが多い。

Ⅱb形態は3点のみであり、すべて中形のものである。第225図5・6は頭部に2条の溝が存在するもので、同一範型を有する。5はS-2号石棒祭祀遺構、6は門状配石遺構から検出されており、晩期のものともみられる。

石材は81.6%が結晶片岩製であるが、安山岩と緑色岩類製のものが少数存在する。結晶片岩は鐙川流域・神流川流域で産出する石材であり、この地域から搬入されたものと推定される。なお、安山岩製のもの（4～6・12）は、Ⅰ形態で大形のものにほぼ限定され、後期～晩期の占有空間

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		Sc	An	GrR	
Ⅰ	1	1			1
Ⅱa	1	1			1
Ⅱb					
不明	1		1		
計	3	2	1		2

晩期の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		Sc	An	GrR	
Ⅰ	8	7	1		5
Ⅱa	5	5			4
Ⅱb	2	2			2
不明	6	3	3		6
計	21	17	4		17

後期後半の占有空間

形態	個数	石材			欠損
		Sc	An	GrR	
Ⅰ	8	8			7
Ⅱa	1		1		1
Ⅱb					
不明	4	4			4
計	13	12	1	0	12

第30表 石棒の時期別形態と諸属性

から検出されている。これらの石棒に用いられている石材は、中期の石棒製作址が検出されている恩賀遺跡（桐原他1990）のものと同質であり、後期以降も碓氷川流域で石棒が製作されていた可能性と、中期のものが再利用された可能性がある。

石剣（第225図8～12・16～19・第226図1～6） 小破片・未成品を含め22点検出されている。広義には石棒の範疇に属するが、中形～小形で細身のものを石剣として区別した。諸属性は第31表のとおりである。

I形態（有頭無溝：8）、II形態（有頭有溝：9～12・19）、未成品（打製）に分類される。さらに、身部の違いにより、菱形となるもの（8・18）、レンズ状になるもの（9～11・16・17）、円筒状になるもの（12・19）に細分される。II形態が最も多い。時期別にみると、19は〔後期後半〕、それ以外は〔晩期〕のものであり、それぞれの時期のものと推定される。

石材は大部分結晶片岩製であり、石棒同様結晶片岩との強い結びつきがある。また、19は唯一緑色岩類である。

未成品または打製石剣（第226図1～6）は8点検出されている。石剣と形状は類似するが、直接打撃と敲打により整形されている。すべて結晶片岩製である。1を除き〔晩期〕部分から検出されており、5点はS2号石棒祭祀遺構から検出されている。したがって、実際には未成品の状態で使用されていたとみられる。

形態	個数	石材			欠損
		Sc	An	GrR	
I	1	1			1
II	7	4		3	7
不明	6	5	1		6
未成	8	8			8
計	22	18	1	3	22

第31表 石剣の諸属性

棒状礫（第226図） 加工が施されていない棒状の搬

入礫である。74点検出されている。結晶片岩製のもの

が68点（94.4%）と大部分であり、

緑色岩類・安山岩などが若干存在する。大きさは石棒の中形と小形に相当するものが大半を占める。

諸属性は第32表のとおりである。

時期別にみると、〔晩期〕のものが33点と最も多いが、他の時期でも安定して存在する。欠損率は55.5%であり、敲石の基部が含ま

前期の占有空間

個数	石材				欠損
	Sc	An	GrR	Cg	
12	10		1	1	4

後期後半の占有空間

個数	石材				欠損
	Sc	An	GrR	Cg	
16	15	1			12

中期末～後期前半の占有空間

個数	石材				欠損
	Sc	An	GrR	Cg	
11	11				4

晩期の占有空間

個数	石材				欠損
	Sc	An	GrR	Cg	
33	32		1		20

第32表 棒状礫の諸属性

れている可能性もあるが、結晶片岩製であることと、S-2号石棒祭祀遺構からも多数検出されていることから、祭祀的用途に用いられていた可能性も高い。

丸石（第227図1～6） 15点検出されている。

I形態（球形）とII形態（卵形）が存在し、I形態の方が多い。〔後期後半〕・〔晩期〕のものがほとんどであり、本遺跡では〔前期〕のものは存在しない。そして、〔後期後半〕・〔晩期〕の配石遺構に伴うものも多い。石材はすべて安山岩製である。この器種は球石とは異なり、手に持って用いる大きさではなく、据え置きで用いられたと推定されるものである。

IはS-2号石棒祭祀遺構の中心部分から検出されたものであるが、表面に錆状の物質が付着しており、オレンジ色に変色している。人頭大の球形のもの（6）は多孔石I形態と大きさもほぼ同じであり、僅かに孔も観察されることから、本来は同じ器種であり、使用頻度の違いである可能性もある。火を被り全体にひび割れが観察されるもの（7・8）も存在しており、使用方法との関連性が窺える。

なお、諸属性は第33表のとおりである。

多孔石（第227図7～16） 24点検出されている。なお、石皿・石棒の一部が多孔石状になっているものは除外している。I形態（円形）・II形態（楕円形）を呈する比較的大形の礫が用いられており、据え置き状態での使用が想定され、手に持って使用する凹石とは区別される。凹の数は少ないものから蜂の巣状のものまで存在しており、使用頻度の差と推定される。諸属性は第34表のとおりである。

中期末～後期前半の

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I				
II				
V				
不明	1	1		1
計	1	1		1

晩期の占有空間

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	5	5		3
II	2	2		1
V	1	1		
不明				
計	8	8		4

後期後半の占有空間

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	4	4		
II	2	2		2
V				
不明				
計	6	6		2

第33表 丸石の時期別形態と諸属性

前期の占有空間

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	1	1		
II	2	2		
III				
V	1	1		
不明				
計	4	4		

後期後半の占有空間

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	2	2		2
II	1	1		1
III	1		1	1
V				
不明	1	1		1
計	5	4	1	5

中期～後期前半の

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	1		1	
II	1	1		
III				
V				
不明	1	1		1
計	3	2	1	1

晩期の占有空間

形態	個数	石材		欠損
		An	Sc	
I	2	2		1
II	2	2		2
III	1		1	
V	1	1		
不明	5	3	2	5
計	11	8	3	8

第34表 多孔石の時期別形態と諸属性

時期別にみると、[前期]から[晩期]まで存在するが、[晩期]のものが多い。また、後期後半～晩期の配石遺構に伴うものが多いが、配石遺構構築材として転用されたものも存在するとみられる。

石材は安山岩18点、結晶片岩5点であり、安山岩が大部分である。また、前期では結晶片岩製のものは存在しない。

岩版（第232図6） 1点のみであり、晩期の占有空間から出土している。線刻にある岩版の未成品である。石材は碓氷川に露頭で存在する凝灰岩製と推定される。全体を研磨し長方形の板状に整形し、表面に線刻により対向する三叉文が彫られている。この文様は晩期前半期の土版・岩版に特徴的なものである。三叉文が直線的構成で彫られており、これは群馬県地域に特徴的なものである。

製作工程が追える未成品であり、左半分は先の尖った工具により凹基無茎鏃様の文様が素描された段階で中断されている。右側はさらに工程が進行した状態であり、文様の内側が彫刻刀様の工具により彫り窪められ、文様の枠がきれいに縁取られている。

E類石器

磨製石斧（第228図・第229図） 63点検出されている。時期別にみると、[後期後半]のものが28点（45.9%）と最も多いが、他の時期のものも安定して存在する。I形態（断面楕円形：第228図1～13）とII形態（定角式：第229図1～22）に大別される。さらに大きさからa形態（大形）、b形態（中形）、c形態（小形）に細分することが可能である。石材は各時期とも緑色岩類が多用されている。蛇紋岩製のものは7点存在するが、1例を除きII形態であり、時期ではなく形態との結び付きが強い。

諸属性は第35表のとおりである。

I形態はI a形態（7～13）とI b形態（1～5）に分けられる。I a形態には基部が尖る特徴的な形状のものが多く、明確な範型を有している。この形態は出土遺構等から

前期の占有空間

形態	個数	石材				欠損
		SS	GrR	Se	不明	
I	7		7			6
II	2			2		1
計	9		7	2		7

後期後半の占有空間

形態	個数	石材				欠損
		SS	GrR	Se	不明	
I	15		14	1		13
II	13		9	3	1	7
計	28		23	4	1	20

中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材				欠損
		SS	GrR	Se	不明	
I	4		4			2
II	1		1			1
計	5		5			3

晩期の占有空間

形態	個数	石材				欠損
		SS	GrR	Se	不明	
I	5		5			3
II	14	1	11	1	1	12
計	19	1	16	1	1	15

第35表 磨製石斧の時期別形態と諸属性

前期の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		BAn	Sh	An	SS	Sc	GrR	
I	1					1		
II	3		1			2		1
III	2					2		1
計	6		1			5		2

後期後半の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		BAn	Sh	An	SS	Sc	GrR	
I	2	1				1		1
II	19		3	2	1	10	3	8
III	3					3		
計	24	1	3	2	1	14	3	9

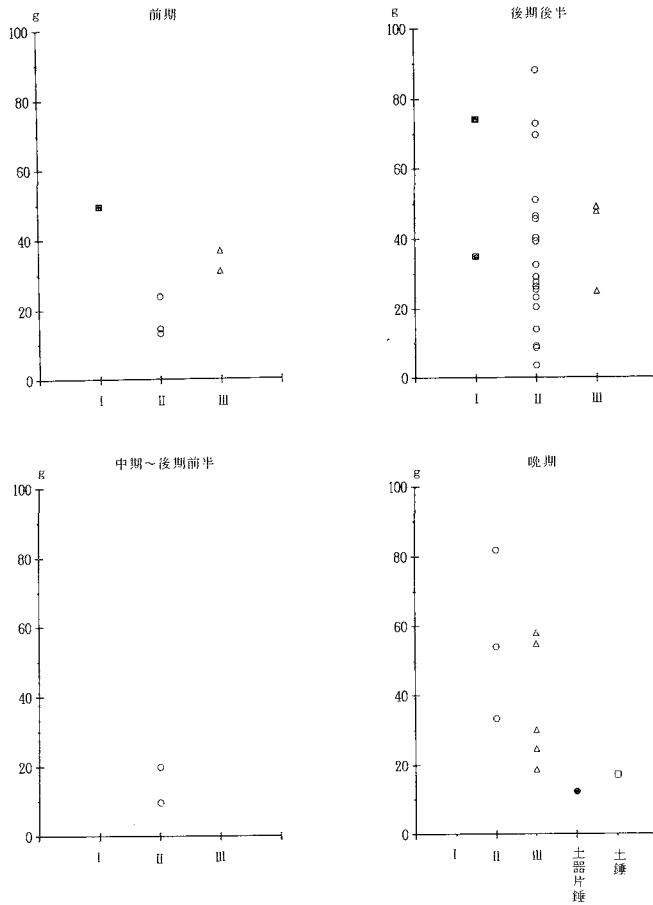
中期～後期前半の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		BAn	Sh	An	SS	Sc	GrR	
I								
II	2					2		
III								
計	2					2		

晩期の占有空間

形態	個数	石材						欠損
		BAn	Sh	An	SS	Sc	GrR	
I								
II	3					3		
III	6			2		4		
計	9			2		7		

第36表 石錘の時期別形態と諸属性



第319図 石錘・土錘の重量分布図

みて本来は前期後半期のものと判断される。欠損率は77.4%と高い。また、敲石に転用され敲打痕が観察されるものも多い。晩期のS-2号石棒祭祀遺構出土のもの(8)は前期の磨製石斧が石棒・棒状礫の代用として用いられたと推定される。

Ⅱ形態はⅡa(19~22)、Ⅱb(3・9~18)、Ⅱc(1・2・4~8)の各形態に細分される。Ⅱa形態は数量が少なく、すべて欠損しているため、全体形状ははっきりしないが、Ⅱb形態を大形化した範型の存在が推定される。Ⅱb形態は最も多く、典型的な定角式の範型を有している。また、Ⅱc形態は多様であり、Ⅱb形態の範型を小形化したものが多いが、中には超小形(1)、欠損品から再加工されたもの(5)、刃部の作出されていないもの(6)などが存在する。特に、超小形のものとは後期以降の時期に特徴的な形態である。

石錘(第230図) 41点検出されている。Ⅰ形態(打欠:1~6・39)、Ⅱ形態(切目:7~17・19~25・27・30~35・37)、Ⅲ形態(有溝:18・26・28・29・36・38)に大別される。諸属性は第36表のとおりである。

時期別にみると、[後期後半]が最も多い。石材はⅠ類~Ⅴ類まで多岐に渡っているが、結晶片岩(Ⅳ類)が最多である。なお、[前期]から検出されたものは[後期前半]の場所に接しており、前期の住居址からは全く検出されていないことから、[後期前半]のものとは判断される。

時期ごとに形態別重量についてみると、第319図のグラフのように示される。[後期後半]ではⅠ・Ⅱ形態は50g以下と60g以上に分かれる。また、Ⅲ形態は晩期と同様に50gと20gに分かれる。[晩期]ではⅠ形態は存在せず、Ⅱ形態・Ⅲ形態とも20~30g、50~60g、80gの3つのグループに分かれる。ちなみに、[晩期]のみに存在する土器片錘(40)・土錘(41)は20g程度であり、石錘の小形のグループとほぼ同じである。なお[後期前半(前期を含む)]ではⅠ形態50g、Ⅱ形態10~20g、Ⅲ形態30~40gであり、各形態により重さが異なっている。以上のように、各時期とも重量により、2~3群に区分されていた可能性がある。

F類石器

鉄鉱石(第231図1~12) 全部で12点検出されている。自然の磁鉄鉱であり、餅鉄と呼称されるものである。すべて[晩期]から検出されており、HT-1(1点)、S-2(2点)、S-3(1点)と、晩期の遺構に伴うものも多い。

大きさは、最大のもは666.6g、最小のもは19.6gである。すべてのものに礫の表皮部分が存在しており、転石として存在していたものとみられる。また、破碎した状態のものも9点存在する。

人為的な加工痕が観察されるものでは、表面に弱い擦痕と光沢が観察されるものが7点存在す

る。また、変色（赤化）しているものも8点存在する。したがって、これらの鉄鉱石に対し、様々な人為的行為が加えられたことが確認される。

縄文時代晩期における鉄の出土例は桐生市千網谷戸遺跡（註：増田修氏のご教示による）、新潟県館ノ内遺跡（田中1992：鉄鉱石）、長野県円光房遺跡（原田他1990：砂鉄）、青森県泉山遺跡・同福泉遺跡・同五月女菴遺跡（山田1990：混粘土砂鉄塊）等、東北地方から中部地方までのいくつかの遺跡において出土例が知られている。したがって、この時期にすでに自然鉄の利用が行われていたことは本遺跡に限らず、広域に及んでいた可能性が高く、留意される。

なお、鉱物学的分析の鑑定結果については、別項において詳述する。

垂飾（第232図1） 1点検出されたのみである。頁岩製の湾曲した礫の一端に溝を巡らしたものである。出土位置から晩期のもものと推定される。

玉（第232図2～5） 4点検出された。蛇紋岩・滑石・硬玉が用いられている。このうち2点はS-10号配石墓の覆土中から検出されており、後期後半のもものと推定される。残りの2点は晩期の占有空間から検出されている。

石製品（第232図7～10） 7・10は軽石製石製品である。表面を研磨し、板状に整形している。出土位置から晩期のもものと推定される。

8は凹石様の石器である。大きさ・凹の位置等は凹石と同様であるが、軟質の白色凝灰岩製であり、同一用途に用いられた可能性は低い。関東地方では白色凝灰岩は岩版に多様される石材であり、岩版との関連性が窺える。S-2号石棒祭祀遺構から検出されており、晩期のもものと推定される。

9は安山岩製の特殊敲打石器である。敲打により中央に鞍部が作出されている。また、部分的に弱い研磨痕が観察される。敲打の可能性もあるが、北陸・中部地方に多く認められる「御物石器」の可能性もある。いずれにしても、特殊な形状の石器である。出土位置から後期後半のもものと推定される。

その他（口絵写真） これ以外の石器類では、赤色チャート（A類原石に分類）、緑色凝灰岩の礫片がS-2号石棒祭祀遺構から検出されている。赤色チャートは石鏃等A類石器の素材であるが、本遺跡では全く剥片を作出しておらず、「赤い石」として祭祀的用途に用いられたと推定される。また、緑色凝灰岩についても同様に「緑の石」として祭祀的用途に用いられた可能性が高い。

（大工原 豊）

(2) 古墳時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址 本遺跡ではC区において2軒の住居址が確認された。このうち、H-5号住居址からは大量の土器が廃棄された状態で検出されている。

H-4号住居址 (第233図) 地表から浅い位置で検出され、西辺は完掘されておらず遺存状態は悪い。平面形は正方形を呈すと推定される。規模は南北6.6m×東西(5.8m)である。柱穴、及び炉址は確認されていない。

本住居址は掘り込みが浅く、炉址、柱穴も存在しないことから住居址以外の可能性もありうる。
遺物出土状態 掘り込みが浅く、遺物はほとんど検出されていないが、2区から石製紡錘車が検出されている。

H-5号住居址 (第234図) 平面形は正方形を呈し、規模は南北7.2m×東西7.4m、掘り込みは深い(80cm)。遺存状態は良好で、南側の壁下はテラス状になり、他の三辺の壁下は周溝が回る。主柱穴は4本で、西部及び東部には土坑が存在する。また、本住居址では炉址は確認されていない。主軸方向はN-22°-Eを示す。

遺物出土状態 出土遺物は下層から高坏・埴・甕・台付甕・小形甕等が多量に検出されている。これらの遺物は一括廃棄されたと推定される。

b 遺物

H-4号住居址出土の遺物 (第235図2) この石製紡錘車は滑石製で、有段のものである。

H-5号住居址出土の遺物 (第235・236図) 検出された遺物は、高坏・埴・甕・台付甕・小形甕等である。これらの土師器の形態・調整技法・組成からみて、これまでの群馬県の編年観(橋本・加部1984)に照らすと、5世紀前半の遺物と推定される。

(3) 奈良時代の遺構と遺物

a 遺構

住居址 本遺跡では、B区において当期の住居址が4軒検出された。その内2軒(H-1・H-6)は、大規模な長屋形を呈する住居址(建物址)であり、これらの位置は東西に平行して配列

している。また、小形のH-2号住居址・H-3号住居址も大形住居址に対し、南北に一直列に並び、全体で「L」字形に配列している。これらの住居址では遺棄された状態で土器が検出されており、こうした土器から8世紀中葉の時期に同時併存していたものと推定される。また、住居址の形態、出土遺物から通常の住居址とは考えられず、何らかの工房址と推定される。

H-1号住居址（第238図上段） 本住居址はB区より検出された。平面形は東西に細長い長方形を呈しており、東側はさらに調査区外へ延びている。規模は東西18.6m以上・南北3.6mであり、掘り込みは50cmと比較的深い。主軸方向はN-5°-Eを示す。柱穴は浅く、数カ所存在するが明瞭な支柱穴は存在しない。また、竈も存在しない。

遺物出土状態 出土遺物は、少量の土師器坏、須恵器蓋、須恵器盤状形坏などが床面直上から出土している。覆土中には周囲から流れ込んだと推定される縄文時代の遺物が多量検出された。

H-2号住居址（第237図） 本住居址はB区より検出された。平面形は長方形を呈す。規模は東西2.5m・南北3.5m、掘り込みは比較的深い（45cm）。壁はやや鈍角に立ちあがる。主軸方向はN-15°-Eを指す。

竈は本住居址の南側中央に位置し、壁よりも外側へ構築されている。両袖と天井石は細長い河川礫を用い、構築材として、粘土ローム土等はほとんど用いられていない。また、通常の住居址に比べ焼土の形成が弱く使用頻度は低かったと推定される。

遺物出土状態 遺物出土量は少量であるが、竈内より完形の坏が遺棄された状態で検出された。

H-3号住居址（第237図） J 2号住居址の南に位置する。平面形は長方形で規模は東西2.6m・南北3.6m、掘り込みはやや深く（45cm）、遺存状態は良好である。壁は鋭角に立ち上がる。主軸方向はN-17°-Eを指す。柱穴は本住居址では確認されていない。

竈は本住居址の北壁中央やや西寄りに位置し、壁の内側へ構築されている。袖部はローム混入の褐色土により作り付けられている。袖と天井石は細長い河川礫が用いられている。また、本住居址も通常の住居址に比べ、焼土の形成が弱く竈の使用頻度は低かったとみられる。

遺物出土状態 床面直上から坏・須恵器大甕と、大形台石・円筒形作業石が検出された。大形台石は住居址に据え付けられていたと推定される。また、隣接して円筒形作業石が検出された。また、須恵器大甕は洗面器様の器として再利用されたものとみられ、これらの遺物は遺棄された一括遺物と認識される。これらの遺物は一般的住居には認められない特殊な遺物出土状態であり、何らかの作業に伴う遺物群と判断される。

H-6号住居址（第238図下段）本住居址はB区より検出された。平面形は長方形を呈し、規模は東西15.0m・南北5.0m、掘り込みは比較的浅い（30cm）。主軸方向はN-5°-Eを示し、本住居址もH-1号住居址と同様に大規模な長屋形を呈する住居址（建物址）である。柱穴は数カ所存在するが、掘り込みが浅く明確な主柱穴は存在しない。

竈は2基存在し、北壁の左右に位置する。これらは壁よりも外側へ構築され、両袖と天井石は細長い河川礫を用いられ、構築材として、粘土ローム土等はほとんど用いられていない。本住居址も焼土の形成は弱い。

遺物出土状態 本住居址では覆土中に土師器の小破片が検出された程度であり、住居址に遺棄された遺物は検出されなかった。

b 遺物

H-1号住居址出土の遺物（第239図上段） 本住居址からは土師器の坏、須恵器蓋、須恵器盤状坏等が検出されている。これらの土器は遺棄された一括遺物であり、8世紀後半のものと推定される。

土師器坏（1・2） 口辺部は屈曲気味に外反する。底部は手持ちヘラ削りにより調整されている。1は内面には放射暗文、2は放射暗文と螺旋暗文が施される。焼成は良好である。在地化した畿内系の土師器坏である。

須恵器蓋（3） 小振りて扁平なものである。口縁部は折り返されており、摘みは比較的大きく扁平化している。

須恵器盤状坏（4・5） 大形の盤状坏で、底部は回転ヘラ削りである。焼成は良好である。本来は高台付きであるが、両者とも高台は意図的に取り除かれている。

H-2号住居址出土の遺物（第239図中段）

土師器の坏（6） 口辺部はやや屈曲気味に外反する。底部は手持ちヘラ削りにより調整されている。焼成は良好である。内面には放射暗文が施されており、いわゆる畿内系の土師器坏である。

H-3号住居址出土の遺物（第239図下段）

須恵器坏（8） 口辺は直線的に外傾し、底部はヘラ切りにより調整されている。焼成は良好である。

須恵器大甕（7） 底部のみが残存しており、「洗面器状の器」として再利用されていたとみられる。焼成は良好である。

大形台石 安山岩製であり、表面が作業面と推定される。

円筒形作業石 安山岩製であり、全体に平滑面が形成されている。平滑面は磨石・石皿の磨面より平滑であり、むしろ仕上砥の作業面に近似している。台石と対で用いられたとみられる。

(大工原 豊・金井 京子)

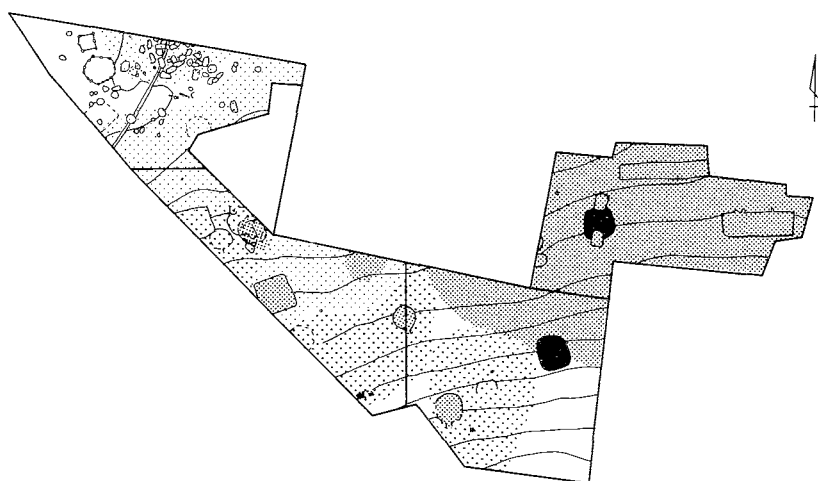
(4) 小結

a 縄文土器の分布について (第320図～第325図・付図)

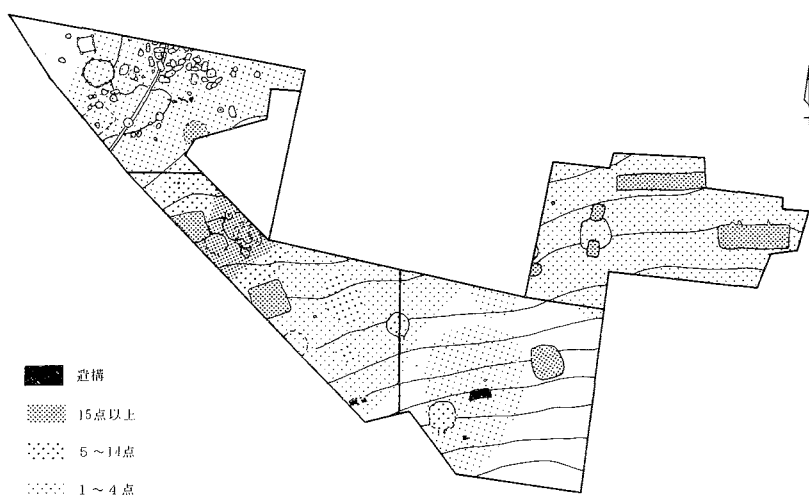
天神原遺跡では、各時期における遺跡内の活動領域を明確にするため、時期ごとの土器の分布図を作成した。この時、時期を示すのは型式によるが、相対的な土器の量や遺跡の性格などから次のような分類をおこなった。即ち前期、中期、後期前半(称名寺・堀之内式)、後期後半(加曾利B式)、後期終末(高井東・新地・後期安行式)、晩期安行式・天神原式、大洞式・晩期中部系土器及び粗製土器 a (素口縁)・b (口縁部肥厚)、c (有段口縁)・d (口唇部刺突)である。ドットは個体数を示すが、個体数の出し方については次のような基準を設けた。土器片は基本的には1片1個体と数えるが、グリッド出土の土器の場合で、各グリッド内における同一個体については、これを合わせて1個体と数え、同一個体でグリッドが異なる場合は、グリッドごとに1個体と数えた。なお、グリッドは2メートル四方の小グリッドと4メートル四方のグリッドがあるが、個体数の数え方は同様である。遺構の場合は区・層位が明かな場合は、区・層位ごとに個体数を数え(同一個体の場合は合わせて一個体)、区・層位が明かでない場合は遺構ごとに同様の累計を行った。また、ドットによって量比も解るように、1、10、100のそれぞれを表すドットを用いて個体数を表すようにした。ドットの落とし方は、グリッド出土土器は小グリッドを基本とし、小グリッドの北西側から順次落として行き、遺構出土の土器は遺構の範囲を基本とし、遺構の範囲の北西側から順次ドットを落とした。なお、遺構の部分に付いては視覚的に解りやすくするため、より大きなドットを用いず、小さなドットで充填したことがある。埋設土器は丸に十字の記号を用い、1個体1ドットとし、時期が明確な場合はその時期の面にドットを落とし、時期が不明のものは型式不明の面に落とした。攪乱等で土器の出土がみられない部分に付いては、網をかけてその部分が解るようにした(付図)。

以上を概念的に示したのが第320図～第324図である。以下この概念図を元に各時期の状況について記述する。

前期の土器(第320図)は調査区全域から出土しているが、特にB区に集中し、C区5Kライン周辺、C区東側、D区西側に土器のまとまる部分がある。D区東側は攪乱がひどく土器の出土を見ていないが、J-2号住居址の存在から、この部分にも前期の土器が分布していたと考えられる。A区北側の配石墓が集中する部分には若干の出土を見るが、周堤帯との間に全く土器の出土を見ない部分がある。これは周堤帯を構築する際の削平によるものだと考えられる。C区5Kライン周辺に土器のまとまりが見られるのは、この部分にある後期前半期の住居址に対し、後期前半期以降、周辺に散在していた土器に対して同様に廃棄行為が行われた結果であると考えられる。中期の土器も同様である。

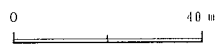


前期段階

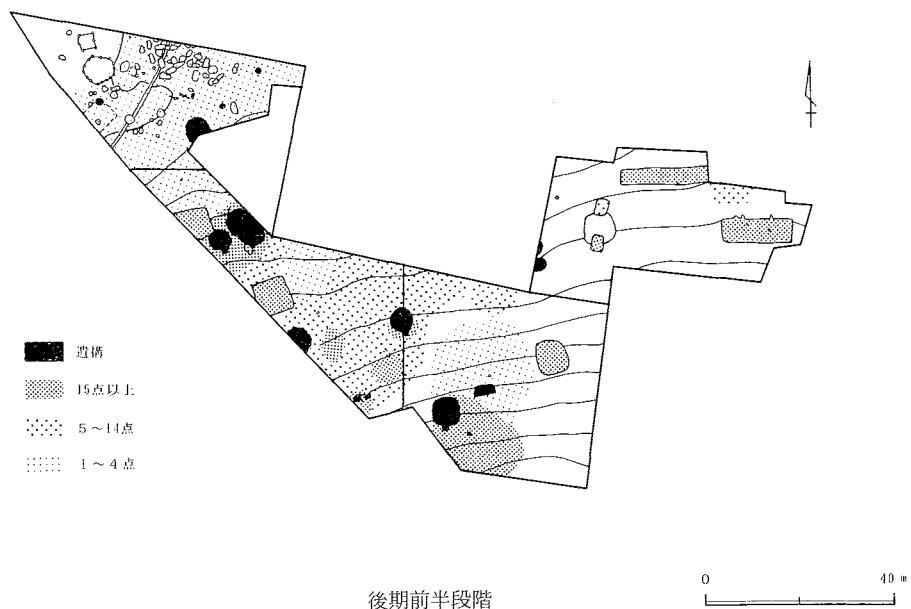


- 遺構
- ▨ 15点以上
- ▧ 5～14点
- ▦ 1～4点

中期段階



第320図 前期・中期段階の遺構及び土器分布図



第321図 後期前半段階の遺構及び土器分布図

本調査区で前期の土器が見られる部分のうちA区・C区・D区西側は、後の時期に移動されたものが大半だと考えられ、当時の分布範囲は必ずしも明確ではない。従って、本調査区における前期の土器の主体的な分布範囲はD区東側からB区にかけてであり、隣接する松原遺跡にかけて大きく広がると考えられる。

中期の土器（第320図）も調査区全域から出土しているが、C区5Kラインに分布が集中する以外は均一的な分布を示す。D区東側では、J-2号住居址から中期の土器が相当量出土していることから、この部分にも中期の土器が分布していたと考えられる。A区では前期と同様の理由で周溝部分には分布が見られない。

本調査区では中期の土坑が若干存在する他は、明瞭な活動の痕跡は残されていない。また、A区・C区で見られる土器の分布の大半は、後の時期に移動されたものと考えられ、当時の分布範囲は必ずしも明確ではない。従って、D区からB区にかけてが、この時期の主体的な分布範囲であると考えられる。

後期前半の土器（第321図）も調査区全域から出土しているが、この時期の住居址が存在するC区5Kライン周辺、C区東側、D区南西部にまとまって分布する。J-2号住居址やB区でも

土器の出土が見られることから、D区東側にも後期前半の土器が分布していたと考えられる。A区では前期と同様の理由で周溝部分には分布が見られない。

後期前半段階では、A区からD区にかけて住居址の形成が見られ、B区では、分布は希薄なもの、同時期の埋設土器が検出されている。従って、後期前半段階の主体的な分布範囲は本遺跡全体に及んでおり、その範囲は多方向に広がると考えられる。

後期後半の加曾利B式段階の土器（第322図）はB区、D区にはほとんど見られず、C区5Lライン周辺に特に濃密に分布し、東はC区とD区の境界となる15ラインに分布の境界が認められ、北は5Eライン付近に分布の境界がある。また、A区の配石墓が集中する部分にも土器のまとまった分布があり、5Eライン付近の土器分布の境界との間には土器がほとんど出土していない部分がある。これも前期と同様に周堤帯を構築する際の削平のためである。この時期の遺構はA区に集中しており、C区に見られる濃厚な分布は前時期（後期前半期）の住居址に対する廃棄行為の結果であると考えられる。

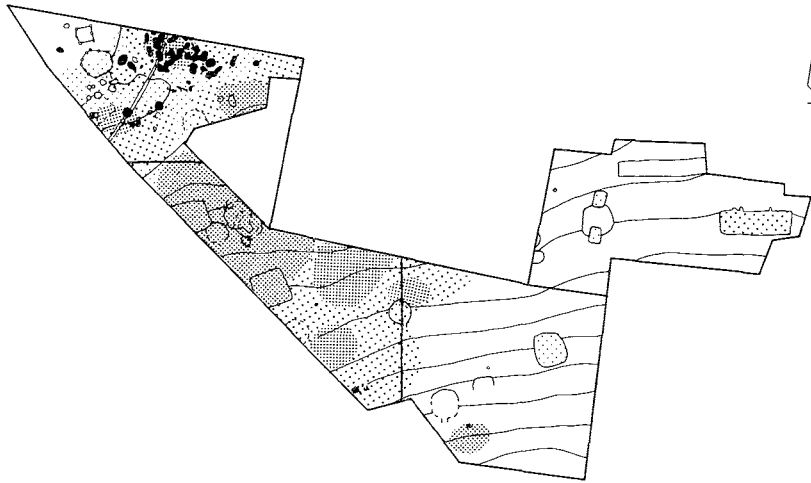
後期終末段階（第322図）では、A区南側からC区の5Lライン付近にかけての部分とA区の配石墓が集中する部分に土器のまとまりがみられる。加曾利B式の段階に比べ、分布が縮小しているが、分布の重なる部分の分布傾向は加曾利B式段階に類似する。

後期後半から後期終末にかけてはA区に配石墓群と土坑群が形成され、C区に埋設土器が埋置されている。土器の分布はC区とD区の境目以東ほとんど見られないことから、A区からC区にかけてがこの時期の主体的な分布範囲であり、その範囲はこの調査区より北から西側に広がるものと考えられる。

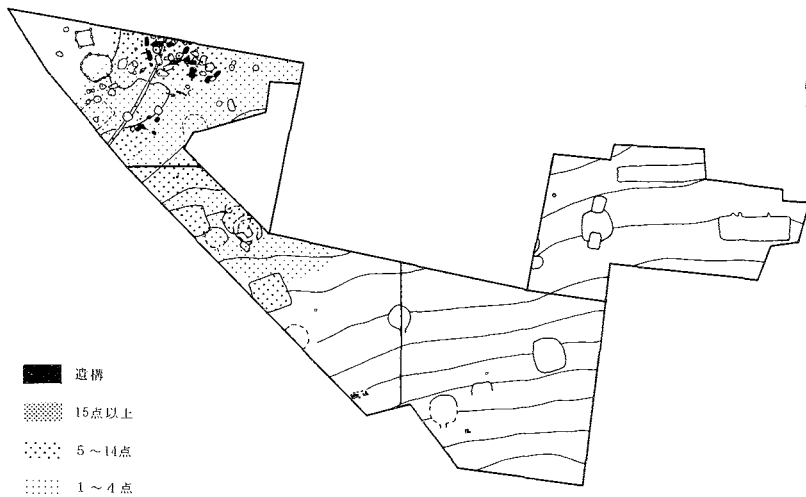
晩期の土器の分布は在地系の土器分布と、東北・中部系の土器分布とに分けたが、ほぼ同じ様な分布を示している。5F 3周辺には攪乱が存在するが、周辺の出土状況から見ればこの部分にも晩期の土器が分布していたと考えらる。晩期の土器の分布はA区南側の部分と配石墓群の外縁部にまとまった部分が見られるが、これらはM-1号溝に沿う形で分布しており、土坑・ピットではM-1号溝より西側の土坑・ピットから晩期の土器が出土する傾向がある。周堤帯の部分では、土器の分布は希薄である。これらの状況は晩期の廃棄行為の結果であると考えられる。

晩期の遺構はM-1号溝より西側に集中している。土器の分布はA区周辺でしか見られず、この部分がこの時期の主体的な分布範囲であると考えられる。また、この範囲はA区より北から西側にかけて広がると考えられる。

粗製土器の分布は粗製土器a（素口縁）・b（口縁部が肥厚したもの）の分布と、粗製土器c（有段口縁）・d（口縁端部に刺突あるいは押圧が加えられたもの）の分布に分けたが、c、dはほぼ同様な分布を示した。粗製土器aはB区を除いた遺跡全域に分布し、特にA区からC区北側にかけて濃密に分布する。粗製土器bは出土量が少ないため分布の濃淡は明かではないが、



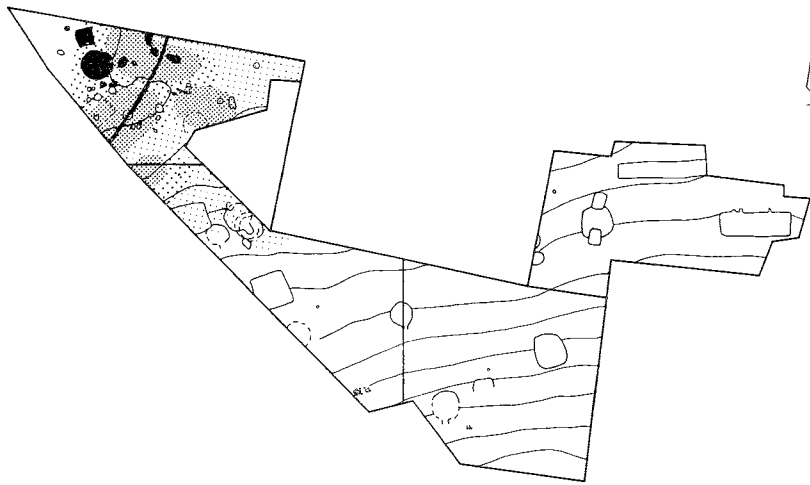
後期後半段階



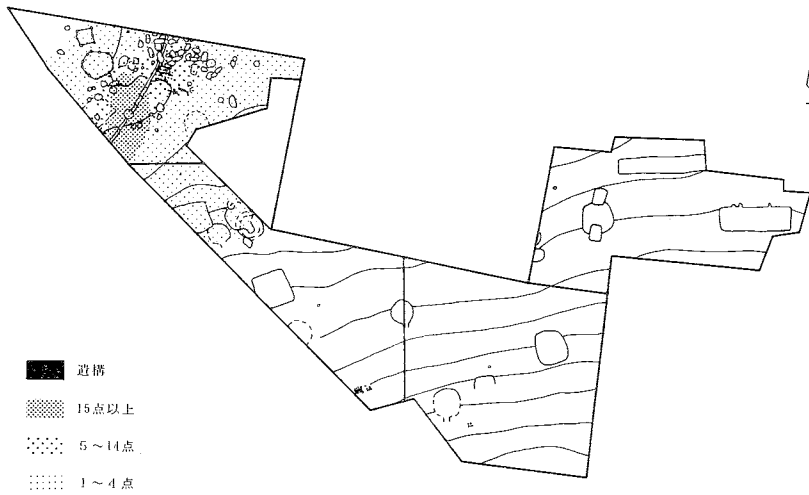
後期終末段階

0 40 m

第322図 後期後半・終末段階の遺構及び土器分布図

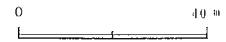


晩期段階（精製土器）

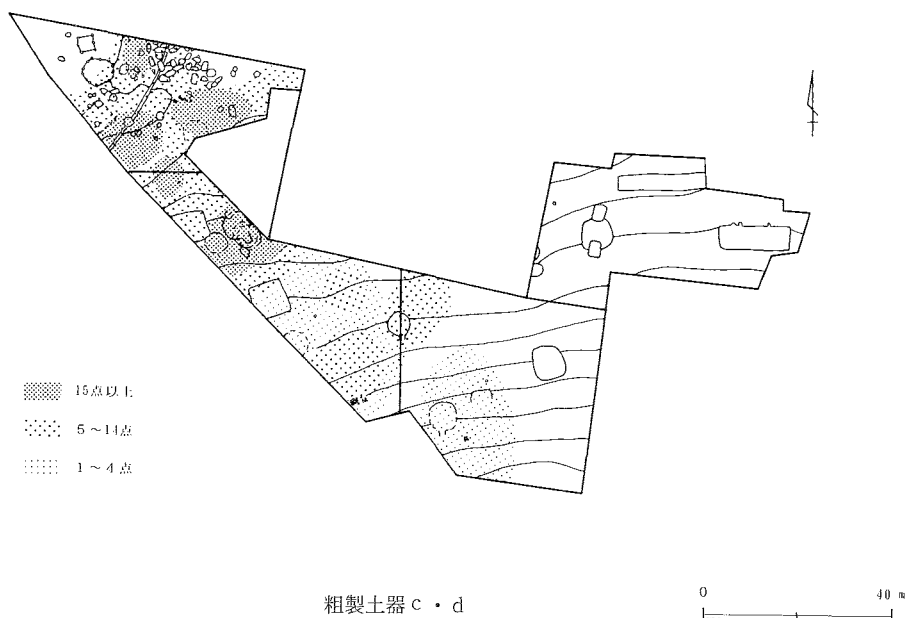


- 遺構
- ▨ 15点以上
- ◻ 5～14点
- ◻ 1～4点

晩期段階（粗製土器 a・b）



第323図 晩期段階の遺構及び土器分布図

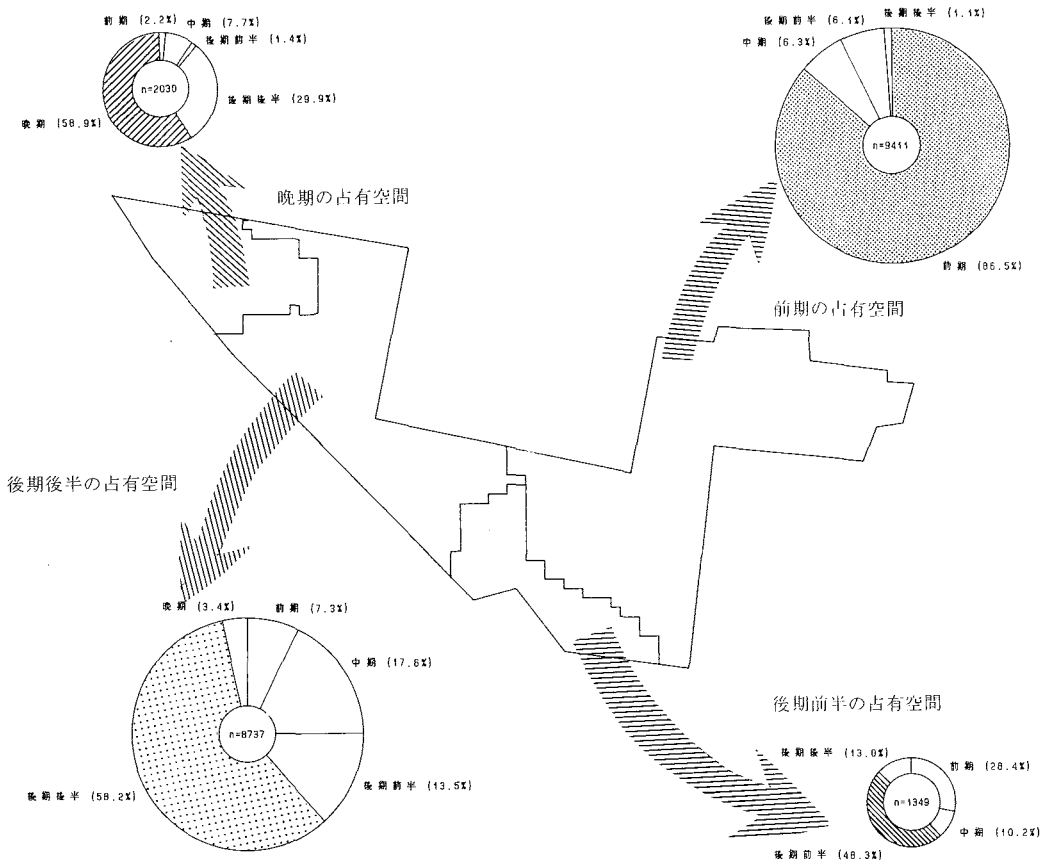


第324図 時期不明の粗製土器分布図

粗製土器 a に似た分布範囲を示す。粗製土器 c・d は B 区、C 区、D 区にはほとんど見られない。A 区では 5 F ーイを中心に、5 G ラインから 5 B-3 にかけてまとまった分布が見られるが、配石墓の集中する部分にはほとんど見られない。この分布から粗製土器 c・d は晩期の天神原式に伴うと考えられ、その分布域はほぼ重なると考えられる。しかし、S-5 号祭壇状遺構周辺ではこれらの粗製土器の分布は見られない。S-5 号祭壇状遺構周辺で検出された土器群は、その場で使用された直後に廃棄されたものとするれば、ここで行われた行為において、精製土器のみを使用するという器種の選択が行われた可能性がある。

型式不明の土器（付図）は文様を施した土器片の内、型式が不明のものである。遺跡全域に分布がみられるが、A 区の配石墓が集中する部分と C 区の 5 L ライン周辺に濃密な分布を示す。この分布には前期のものから晩期のものまでが含まれていると考えられ、ここから時期的な分布を考えることは困難である。

以上、本遺跡では、時期ごとの土器の主体的な分布域が異なっていることを示したが、これをより明確にしたのが第325図である。この図は各グリッドから出土した各時期の土器のうち、その



第325図 縄文土器の時期別占有空間

出土頻度の最も高かった時期のまとまりを示したもので、相対的に見て、その場所の活用頻度が最も高かった時期を示していると考えられる。晩期の占有空間とした部分は晩期の土器の出土頻度が最も高かった部分で、58.9%の確率で晩期の土器が出土している。後期後半の占有空間とした部分は後期後半（後期終末を含む）の土器の出土頻度が最も高かった部分で、58.2%の確率で後期後半の土器が出土している。後期前半の占有空間とした部分は後期前半の土器の出土頻度が最も高かった部分で、48.3%の確率で後期前半の土器が出土している。これに後期前半に連続する中期終末の土器群（加曾利E3式・E4式）を加えると54.8%になる。前期の占有空間とした部分は前期の土器の出土頻度が最も高かった部分で、86.5%の確率で前期の土器が出土している。

後期後半の占有空間では、後期前半期の住居が形成されていて、後期前半期の明確な活動空間であるが、後期後半以降の土器数が後期前半の土器数を大きく上回っているため、見かけ上は後

期後半以降の活用頻度が最も高いように見える。これは廃棄行為の相対的大きさに起因するものと思われ、ここで見られるこの場の活用の程度は、廃棄行為の程度とほぼ同義になると考えられる。つまり、後期前半期に比べ後期後半期の方が廃棄行為の程度が大きかったものと考えることができる。

この図を各時期の土器の主体的な分布範囲と比較すると、より新しい時期のものほど、その分布は一致する。したがって、この図で見られる分布は、より新しい時期の主体的な分布であると考えられる。また、この図に示された分布が、その場所における廃棄行為の程度を示していると考えられることから、廃棄とみなされる他の遺物についても、同様な時期別割合を考えることが可能であると思われる。 (林 克彦)

b 石器の分布と形態変化について

1) 石器の分布 (付図)

天神原遺跡で検出された石器類は約15,500点である。出土位置がある程度明らかなものは15,401点であり、内訳は石器3,864点、剥片・石核等11,537点である。また、それ以外に礫が大量検出されており、敷石住居址・配石遺構・配石墓に用いられた構築材を含めると、調査区内から検出された石器類は膨大な量に及ぶ。

種別・器種ごとの石器の分布状態は付図のとおりであり、概要は以下のとおりである。

A類 [晩期]の部分に集中しているほか、[前期]の住居址、[後期後半]部分に存在する後期前半の住居址(J-7~9)にも集中が認められる。器種別に分布傾向をみると、石鏃が[晩期]に集中する傾向が顕著である。また、局部磨製石鏃は[後期後半]に大部分が集中する。それ以外の器種では顕著な偏在性は認められない。

B類 基本的にはA類とほぼ同じ傾向を示すが、[晩期]の部分ではM-1号溝に沿って南北に帯状に濃密に分布する。また、[後期前半]の住居址(J-5)にも集中が認められる。

器種別分布では特に顕著な偏在性は認められない。

C1類 [晩期]分布は環状列石部分、S-2号石棒祭祀遺構、周堤帯部分に濃密に分布する。それ以外はA類・B類とほぼ同じ分布を示す。器種別では磨石が[晩期]部分に偏在する。また、S-2号石棒祭祀遺構の部分には大部分の球石が集中する。

C2類 [前期]以外はB類とほぼ同じ分布を示す。しかし、[前期]では疎であり、住居址でも少ない。器種別にみると、砥石が大部分であり、上記の傾向は砥石の分布傾向と一致する。

D類 [後期前半]のJ-5号住居址、[晩期]の環状列石、S-2号石棒祭祀遺構に集中が認められる。[後期後半]では後期前半の住居址部分にやや濃密な分布が認められる。器種別にみると、石棒・石剣は大部分[晩期]に集中する。多孔石・丸石についても同様である。また、

剥片D類は〔後期前半〕のJ-5号住居址に集中する。

E類 全体に少量であり、顕著な集中は認められないが、〔前期〕以外ではB類とほぼ同じ分布傾向を示す。器種別にみると、磨製石斧は上記のとおり分布であるが、石錘は〔後期後半〕のS-102号配石遺構の部分に偏在する傾向が認められる。

F類 少量しか存在しないが、〔晩期〕部分にほとんど集中する。

なお、石器組成の項で詳述したが、各時期の土器の分布から導き出された占有空間ごとに、各種石器組成について検討を行った。その結果、石器種別パターンは〔前期〕はパターンA₁、〔後期前半〕はパターンa 1、〔後期後半〕はパターンA 1、〔晩期〕はパターンA₁を示しており、時期によって異なっていることが判明した。また、剥片A類の製作のみが活発で同じパターンを有する〔前期〕と〔晩期〕では、器種組成が全く異なっており、〔前期〕では石鏃・スクレイパーA類などが主体的に製作されているのに対し、〔晩期〕では石鏃が集中的に製作され、他の石器は非常に少ない点が明らかとなった。

また、時期的に連続し、隣接する〔後期後半〕と〔晩期〕では石器種別パターンと器種組成の両方で大きく異なっており、この間に大きな画期が存在することが判明した。この画期は遺構から見た場合、「墓域」から「祭祀の場」への変化に対応する。しかし、多くの集落遺跡において、晩期に石鏃が多量出土する現象は確認されており、これが遺跡の性格の変化だけに連動した現象でないことは明らかである。

2) 器種・形態の時期的変化について

前項のように、全体としては遺構部分に遺物が集中する傾向が認められ、種別ごと、器種ごとにやや異なった分布を示すことが解る。この中で、占有空間により顕著な差異を有する器種・形態は、時間的差異として認識することが可能である。

こうした器種としては、本遺跡では石鏃・石棒・石剣・球石・多孔石・丸石・鉄鉱石等がある。また、形態レベルでの違いを有する器種は、大部分である。ここでは代表的な例として、石鏃と打製石斧の時期別変化について述べる。

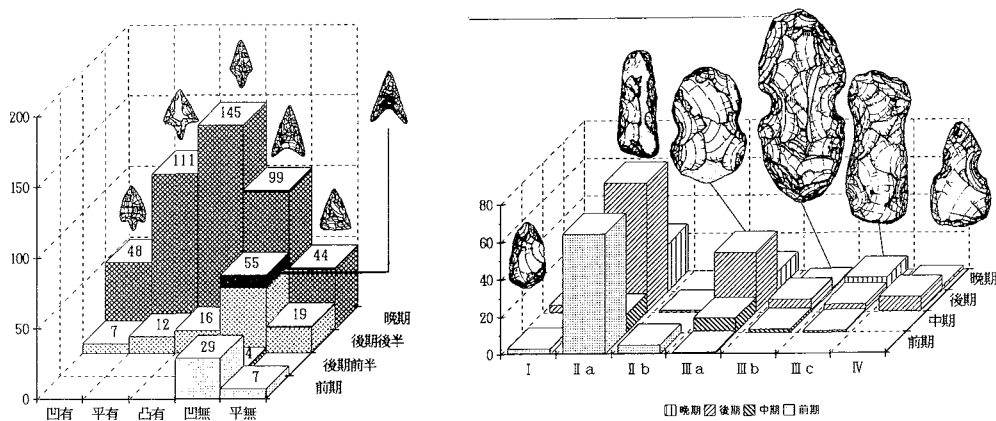
石鏃の推移 石鏃は第326図のような推移をたどる。伝統的な形態であるⅠ形態（凹基無茎鏃）は〔前期〕から〔晩期〕にかけて漸次増加している。Ⅱ形態（平基無茎鏃）も同様な傾向を示す。しかし、Ⅲa形態（凸基有茎鏃）・Ⅲb形態（平基有茎鏃）・Ⅲc形態（凹基有茎鏃）は〔後期後半〕に出現し、〔晩期〕には急激に増加する。晩期の占有空間は狭いため、本来はさらに増加傾向は激しいものと推定される。この中ではⅢc形態が最も後出の形態であることが

共伴する土器から確認される。なお「後期前半」は狭いため、他の時期と同列に扱うことができないが、石鏃が少ない傾向は変わらない。

これらの石鏃の急増に伴い、素材となる石材も大きく変化する。すなわち、「晩期」では伝統的な範型を有するⅠ形態には黒曜石が依然として多用されているのに対し、新しい範型であるⅢa・Ⅲb形態では大形のものを中心にチャート・黒色安山岩といった在地のⅠ類石材や、これまでは石鏃に用いられることがほとんどなかった在地の頁岩（Ⅱ類石材）が多用されるようになる。

なお、黒曜石の出土量は「後期後半」2,245g、「晩期」3,765gと、むしろ「晩期」に増加している。また、個々の黒曜石の大きさも「後期後半」1.5g、「晩期」1.2gとほぼ同じであり、黒曜石を利用する器種の変化は認められない。

したがって、黒曜石の流通量が減少したために、在地の石材が多用されたのではなく、Ⅲ形態を中心とした石鏃の需要が著しく増加したため、代用石材として在地の石材が用いられることになったと推定される。この場合でも、新しい形態であるⅢa・Ⅲb形態に在地石材が専ら用いられ、晩期になっても伝統的な範型を保持しているⅠ形態に用いられる黒曜石は確保されており、Ⅰ形態とⅢa・Ⅲb形態が区別される存在として併存していたことが理解される。異なった範型の石鏃が併存する現象は、集団内に異なる石器製作様式を持ったグループが併存していた可能性と、範型の相違は用途の別であった可能性がある。後述するように局部磨製石鏃のように厳密な範型を有している形態は、用途により区別されていたとみられており、この場合も後者の可能性が高い。用途としては大量製作・大量消費を前提とした「武器」としての石鏃の可能性を含んでおり、晩期社会の本質を理解する上で重要な問題と考えられる。



※黒の塗り潰しは局部磨製石鏃

第326図 石鏃・打製石斧の出現頻度グラフ

なお、従来より有茎鎌は東北地方から南下し、関東地方では後期初頭以降に出現する形態であることと、晩期に石鎌が関東・中部・東海地方で急増する点については、すでに鈴木道之助氏により指摘されている（鈴木1981・1983）。本遺跡でも同様な傾向が認められ、特に東北地方・新潟方面から搬入されたと推定される硬質頁岩製の有茎鎌の存在は、こうした現象と関連するものと推定される。

また、関東型局部磨製石鎌は〔後期後半〕部分から大部分が検出されている。この型式の石鎌は中期終末以降出現し、晩期まで継続する形態であるが、通常石鎌と機能・用途が異なっていると推定される。石錘が多く出土する内陸河川を利用した漁撈が行われた遺跡に多く、漁具として用いられた可能性がある。天神原遺跡でも石錘は〔後期後半〕に最も多く、こうした可能性の傍証となっている。この器種は厳密な型式を保持していることが、本遺跡においても確認されており、時期的なメルクマールとなる可能性が高い示準遺物と言えよう。

打製石斧の推移 打製石斧も時期ごとに型式・形態の変化が認められる器種である。第326図はそれを示したものである。前期後半以降伝統的な範型であるⅡ a形態（突形）は全時期を通して最も多い。これに対し、新しい範型であるⅢ a～Ⅲ c形態は〔後期前半〕以降出現し、〔晩期〕まで存続する。最も普遍的なⅢ a形態（側湾形）は〔後期後半〕には最多となり、晩期には減少する。Ⅲ b形態（挟入形）・Ⅳ形態（凸形）も同様の傾向を示す。しかし、Ⅲ c形態（側湾・非対称形）は晩期になって増加する。なお、Ⅰ形態は前期前半期に特徴的な形態であり、当然本遺跡では若干存在するのみである。

したがって、形態変化の画期は本遺跡では、新しい範型であるⅢ形態の出現する〔後期前半〕に存在する。また、後期～晩期にかけては、各形態の増加時期から、〔後期前半〕Ⅲ a形態→〔後期後半〕Ⅲ b形態+Ⅳ形態→〔晩期〕Ⅲ c形態といった漸移的变化が認められる。以上のことから、石鎌ほど厳密ではないものの、示準遺物として時期的メルクマールとして捉えることができる。

c 遺構と遺物との関係について

これまで、遺構・遺物について、原則として個別に分析・検討を行ってきた。しかし、遺跡の景観を復元するためには、遺構と遺物の関係について再度整理し、総合化を行う必要がある。そこで、ここではこれまでの分析結果に基づき、遺構と土器群・石器群の関係について整理することにする。

1) 遺構と土器の関係

今回、遺構の時期決定は、原則として出土する土器を基に決定した。しかし、重複した遺構では、土層堆積状態等と出土土器の両者から新旧関係を判断した。したがって、遺構と土器との関係はこれまでの分析の過程で多分に考慮されており、原則として整合性が認められた。具体的な例としては、多くの重複関係が確認されており、遺構自体にも多様な形態が認められる配石墓群の分析・検討結果があり、第VI章で詳述している。また、遺物包含層の中での土器群の面的広がり、遺構の関係についても、有意な関係を把握することができた。しかし、住居址については同様な検討を試みたが、重複関係を抽出することが限界であり、土器群と遺構型式学との有機的関係を把握することはできなかった。

2) 土器と石器の関係

土器の占有空間内から検出される石器を仮に該当時期の石器として分析を行い、これまでに解明されている石器型式学的所見と統計学的に所見を検討した。その結果、石鎌・打製石斧・石棒・磨製石斧等、「主体的な器種」（大工原1993）では、石器型式学的所見と土器分布から導き出された占有空間との間に有意な相関関係が認められた。

また、従来帰属時期の特定が困難と考えられていたスクレイパー類・磨石・凹石等「客体的な器種」においても、「石器群」として認識することにより、時期的な特性を抽出することができた。例えば、スクレイパーB類では主として押圧剥離による一群（I a形態）は前期には多いが、後・晩期には非常に少ない傾向があることなどである。

なお、磨製石斧の一部などでは、型式学的所見と相違が確認されたものもあるが、これらは再利用・転用等の現象として捉えることが可能であり、基本的には石器型式学が成立するものと考えられる。

3) 遺構と石器の関係

石器は土器に比べ、その場所での行為の内容を反映している可能性が高い。遺構と石器の関係を調べることにより、遺構の性格をある程度推定することが可能である。本遺跡の場合、遺棄の様相が残されていた晩期の「祭祀の場」では、石器群の「遺棄」の様相により、ここで行われた祭祀的行為の特徴が判明した。石棒祭祀遺構（S-2）や、配石墓を転用した環状配石遺構（S-4・S-6）などは端的な例である。また、配石墓への副葬の有無の検証にも石鎌等の出土状態が重視され、基本的に副葬のないことが判明した。そして、晩期の遺物包含層も、土器と同様にM-1号溝に沿って帯状に延びており、単なる「廃棄の場」ではなく、「祭祀の場」を「スペースデザイン」（小林1988）するような存在となっている。

しかし、最終的に「廃棄の場」として用いられた住居址については、一般的遺物包含層との明確な区別は困難であり、住居で行われた行為の具体的内容を追究することはできず、集落景観の復元を難しくさせている。

以上のように今回の分析では、土器型式学が基軸を構成し、それに遺構型式学・層位学による所見と、石器型式学による所見を照合することで、ある程度遺構・遺物の総合化を成し得たと考える。

(大工原 豊)

d 遺跡景観の復元

天神原遺跡は縄文時代から奈良時代までの間に繰り返し利用されており、集落が営まれた時期（1期・3期）、墓域・祭祀の場として利用された時期（4期）、祭祀の場として利用された時期（5期）、小規模な集落が営まれた時期（6期）、「牧」関連の工房が営まれた時期（7期）の7期に変遷することが、今回の調査で明らかとなった。以下、各時期の遺跡景観について簡単に述べることにする。

天神原1期（縄文時代前期後半） 土器型式では諸磯b式～諸磯c式の段階であり、集落が営まれていたことが確認された。検出された住居址は2軒であり、1～2回拡張が行われており、土器の時間幅からも、ある程度継続していたことが判明した。この集落は、調査区内で完結する小規模な集落ではなく、北側に存在する当期の大規模集落址である中野谷松原遺跡第3期集落の南縁部の住居の可能性が高い。

また、住居址の南西部分には黒曜石が集積（貯蔵）されたD-201号土坑が存在する。黒曜石が土坑中からまとまって検出される例は、しばしば確認されており、保管・隠匿・貯蔵等の推測がなされている。黒曜石の大量出土は中野谷松原遺跡においても確認されており、この集落の特徴と考えることができる。なお、前期段階には黒曜石交易が出現することと、交易ルートに沿って、黒曜石を大量保有する集落が存在することについては、金山喜昭氏によって指摘されている（金山1993）。本遺跡における黒曜石の集積も、交易ルート上に存在する拠点集落に象徴的な現象として、捉えることができる。

天神原2期（中期初頭） 土器型式では五領ヶ台式の段階である。土坑が1基検出されているのみであり、集落が営まれた可能性は低い。中野谷松原遺跡でもこの時期の住居址は全く検出されておらず、集落の縁辺部とも考えられず、小規模な生業の場として利用されていたと推定される。こうした遺跡の様相は下大原遺跡4期の様相と類似しており、この時期の遺跡の特徴

のひとつと考えられる。

天神原3期（中期終末～後期前半） 土器型式では加曾利E4式～堀之内2式の段階である。この時期には、集落が営まれる。住居址はほとんどが、柄鏡形を呈する敷石住居址である。多くの住居址では、数回重複ないし建て替えが行われており、土器型式の断絶もないことから、集落は継続的に営まれていたとみられる。

住居址群の配置は加曾利E4式～堀之内1式段階の住居址は、直径約70m程の弧状に展開しており、同時期の荒砥二之堰遺跡（前橋市）と類似した集落構成を成す。いわゆる中央広場の有無については、本遺跡でははっきりしない。

堀之内2式の段階では、J 6号住居址が存在するのみであり、住居軒数は減少する。

J 4号住居址の南東には立石を有したS 101号配石遺構が存在する。また、S 102号配石遺構は住居域の南に位置している。なお、埋設土器は集落から北東へ離れた位置に存在している。中野谷松原遺跡でも、この時期の土坑と遺物が確認されており、この集落を中心として比較的広範囲に活動範囲が及んでいる。

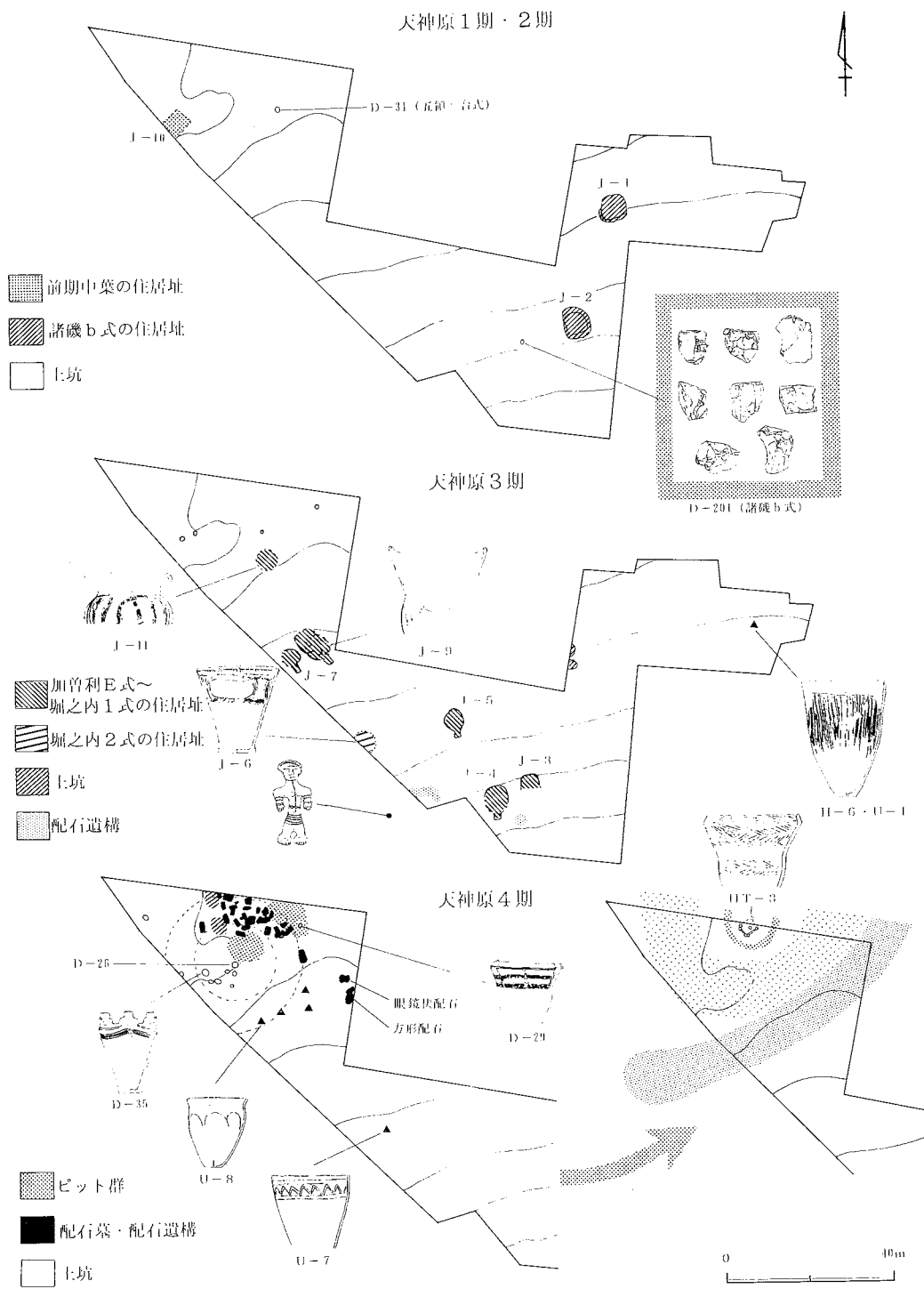
なお、昭和38年に発見された完形土偶は、この時期のものであり、出土地点はS 102号配石遺構付近とみられる。

天神原4期（後期後半） 土器型式では加曾利B式～高井東式の段階である。住居址は全く確認されておらず、住居形態の変化または、遺跡の性格の変化が考えられる。この時期以降は住居址は全く確認されておらず、配石墓群を中心とした「墓域」と、配石遺構を中心とした「祭祀場所」として利用された時期である。

配石墓群は、D 26号土坑を中心とした半径15mのドーナツ状の「環」に沿って配置される。この土坑は木柱等マーカールポールを立てられていた大形柱穴の可能性が高い。

配石墓群については第VI章において詳述するので、ここでは詳しく述べないが、ある種の埋葬原理により形成されたものであることが判明した。要約すると、次のことが推定される。

- ①配石墓群はドーナツ状「環」に沿って並んだ埋葬区（群）が単位として構成されており、埋葬単位は「世帯」と推定される。
- ②埋葬区ごとに配石墓の形態が異っており、集団構成員の血縁的・社会的差異（社会階層）により、配石墓の形態が区別されていた可能性が高い。
- ③原則として南北と東西方向の頭位規制がなされており、各埋葬区に「双極性」が認められ、性差に起因する可能性が高い。
- ④大形配石墓（S 4・S 11）は、一般的な配石墓とは別の埋葬原理により構築された施設



第327図 天神原遺跡変遷図(1)

と推定される。

⑤配石墓群の西側に存在する埋設土器群は配石墓群よりやや遅れて形成され始め、配石墓の一部のものと併存している可能性が高い。また、南東部に存在する埋設土器群（高井東式）もほぼ「環」に沿って配置されている。これらは、配石墓同様一連の埋葬施設の可能性がある。

⑥配石墓の東と南には葬送儀礼等に用いられたと推定される仮設的建物が繰り返し建てられた場所（ピット群）が存在する。また、D・26号土坑を中心とした円内にも土坑が集中しており、中心的存在の施設で、長期間に渡ってシンボリックな存在であったとみられる。

また、配石墓群の中央には、方形柱穴列と推定される柱穴群が2回ほど構築されるが、配石墓群の中では新しい段階（高井東式）のものと判断される。そして、中心の柱穴には大形の木柱が立てられていたと推定される。配石墓群を中心とする直径約10mの環状列石もこの段階に形成され始めたともみられる。配石墓群の存在する内円部は墳丘状に小高くなっていたと推定される。

なお、今回の報告では詳細について触れていないが、配石墓群の南東部には眼鏡状配石遺構・方形配石遺構といった祭祀的色彩の強い遺構が存在しており、東側に「祭祀の場」が存在していた可能性が高い。

配石墓群の西側については、晩期に大規模な削平行為が行われたため、本来の状態については不明であるが、北側（現道路部分）については地下レーダー探査により、配石遺構の存在が推定されており、配石墓群が延びる可能性がある。

天神原5期（晩期前半） 土器型式では晩期安行式（天神原式）の段階である。この時期には「墓域」としての色彩が薄れ、「祭祀の場」として本格的に利用された時期である。この時期の住居址は検出されておらず、集落の存在は現在のところ確認されていない。4期終末に配石墓群の上部に形成された環状列石には、付随施設が加えられ、「祭祀の場」としての機能がさらに強化された時期でもある。付随施設としては、妙義山に対応させた立石を伴う祭壇状配石遺構や、環状列石の外部と内部を繋ぐ通路状配石遺構・門状配石遺構がある。また、一部の配石墓（S-4・S-6）は小規模な環状配石遺構として再利用されており、S-6では石棒が立石として利用されていたと推定される。

環状列石の外側には地山を削って周溝が造られ、その排土は周囲に周堤帯を形成する。周溝は遺物の分布状態からみて、当初は環状列石の外部を巡る浅い溝として形成されたものと推定される。環状列石の南東部から東部の状態が当初のものと推定される。

その後、西側を中心に大規模な地山の削平が行われたことが、土層（IV層・V層）の欠落していることから確認された。この削平は調査区の西側に広範囲に及んでいることが、県道西

側の雑木林内の現況から推測することができる。なお、周堤帯の一部は現在もこの雑木林内で確認することができ、南西部には周堤帯が途切れる部分が存在していたとみられる。こうした削平と周堤帯は群馬県内では子持村押出遺跡（石井1987）においても存在が確認されており（註1）、最近調査された栃木県寺野東遺跡の例は有名である。これらの大規模な削平と周堤帯構築は、北海道における環状土籬に類似し、時期的にもほぼ同時期であり、何らかの関連性があった可能性がある。

削平部分には掘立柱建物址（HT-1）、石棒祭祀遺構（S-2）が構築される。掘立柱建物址は3回繰り返し同じ場所に建てられたことが確認されており、継続的施設と推定される。石棒祭祀遺構では、石棒・石剣・大形石皿・丸石・球石が大量集積された状態で出土しており、鉄鉱石も検出されている。この部分には簡単な上部構造物が存在していたとみられ、祭祀的行為が行われたと推定される。こうした大量の遺物が集積された状態で検出された事例は埼玉県赤城遺跡（新屋他1988）、長野県円光房遺跡（原田他1990）等で確認されている。集積された遺物はそれぞれ異なるものの、時期的にも安行3b~3c式（大洞B-C~C₁式）と同時期であり、この時期の祭祀行為の特徴と考えられる。鉄鉱石の利用もこの時期であり、同様にこの時期の祭祀行為の特徴と推定される。

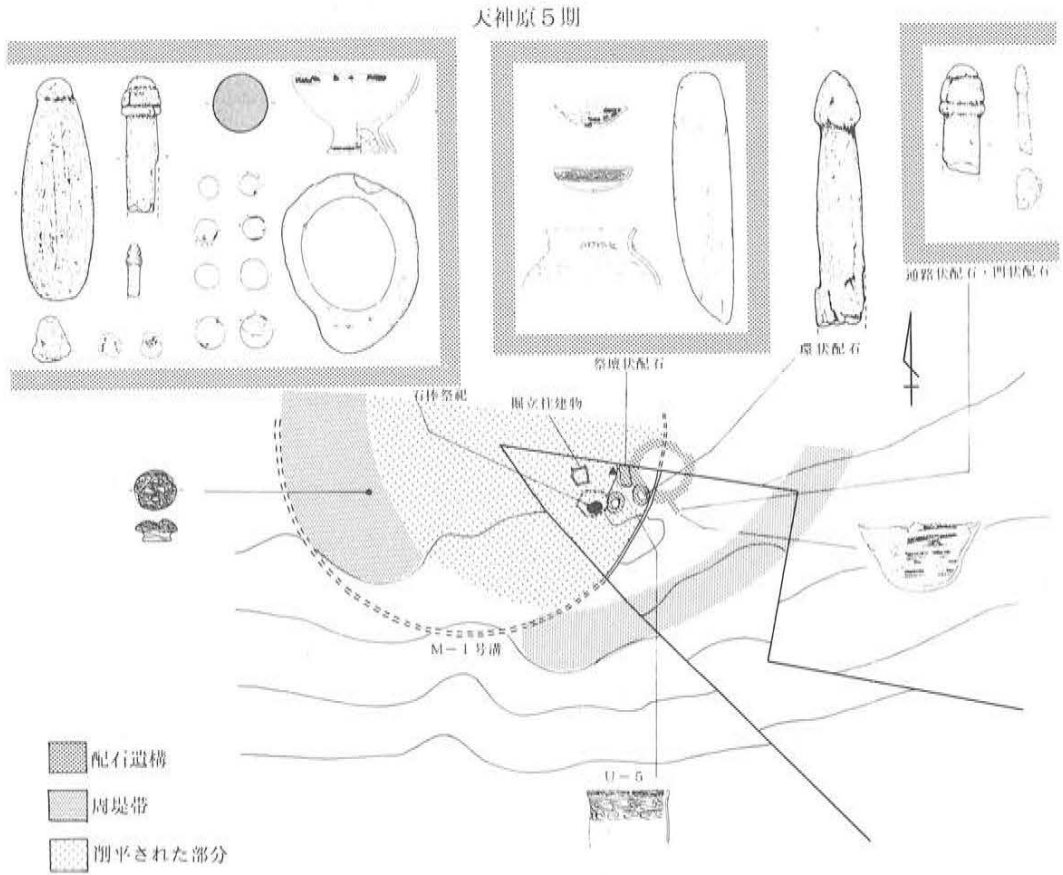
周溝や周堤帯が構築された後に、環状列石の中心を通る推定直径約70~80mの円形の溝（M-1）が構築される。この溝は何らかの区画を示すものと推定されるが、この溝に沿って帯状に晩期の遺物が濃密に分布していることが確認されており、溝と関連するものとみられる。

この時期をもって本遺跡における縄文時代の人間活動は終了する。最終段階の遺物はそのまま遺棄されたため、調査の際に原位置に近い状態で検出されたものと推定される。

なお、周囲の植生は、削平直後はイネ科植生であったのが、その後ススキ属を主体とした草原植生へ移行したことで、周堤体内部では一部ヨシ属が生育する湿地的な状況にあったことが、植物珪酸体分析により確認された。したがって、環状列石や周堤帯は草原植生の中に形成され、祭祀行為は妙義山を一望することの可能な環境のもとで行われていたと推測される。

天神原6期（古墳時代：5世紀前半） 住居址が2軒検出されているのみであり、小規模な集落が形成された時期である。時間的には短期間であったとみられる。H-5号住居址からは高坏・卍等の土器が大量出土しており、量的にみて単なる生活道具とは考えられず、何らかの祭祀的行為が行われた可能性がある。土層堆積状態からみて、この時期にはまだ環状列石の一部は地表に露出していたと推定され、縄文時代の環状列石が意識されていたことも考えられる。

天神原7期（奈良時代：8世紀後半） この時期にはB区に「牧」に関連すると推定される大



第328図 天神原遺跡変遷図(2)

形住居（建物）を伴う工房群が構築される。この工房群は同時併存していたとみられるが、それぞれ形態が異なっており、分業化された何らかの作業が行われたとみられる。遺物が少なく作業内容は判然としないが、坏・台石・円筒形作業石等を用いた作業であることが確認された。

なお、出土した土師器坏は畿内系のものであり、この坏はこれまで官衙的遺跡やその周辺から検出される例が多いこと（石戸1986、桜岡1989）と、渡来系の人々が多かった鑄川流域に多いこと（神谷1987）が指摘されている。したがって、この工房群も官衙的色彩の強いものであったと推定される。

まとめ 以上、各時期の様相について概観してみた。天神原4期から5期にかけて、「環」を基調とした遺構が継続的に構築されていたことが確認された。当初30m程度であったのが、最終的には70～80mの環に拡大されており、「環」がこの時期の精神構造上重要な意味を保持し続けていたものと推定される。

その後、天神原遺跡が現在に至るまでの間の状態については、不明な部分も多いが、現在確認されている状況から簡単に触れてみたい。浅間B軽石降下時には、周溝部分はまだ窪地の状態であり、周辺を含めた植物珪酸体分析によれば、稲作が周囲で行われていたことが判明している。また、周堤帯の一部は現況でも確認できること、環状列石の一部はかなり後まで露出していたと推定されること、天神原遺跡を中心に「天神原」「天神林」といった字名が残っているにも関わらず、神社・宮の存在が周囲に確認されないこと、古墳時代にも祭祀が行われている可能性が高いことなどから、その後も地域の中で「何らかの場所」として、意識され続けていたと推定される。

（大工原 豊）

（註1）調査担当者石井克己氏のご教示による。

VI 成果と問題点

1 縄文時代前期前葉の集落について

中野谷地区遺跡群では中原遺跡と東畑遺跡において、関山Ⅰ式・同Ⅱ式の段階の集落が検出された。この段階の集落構造についての分析・検討は少なく、不明な点も多い。そこで、当期の土器群の分析により、住居址の変遷過程を明らかにし、次に住居址の形態の特徴・遺物出土状態・配置について分析し、さらに石器群の分析結果も考慮した上で、遺構・遺物の総合的検討・解釈を行い、集落の様相を明らかにしたい。

(1) 土器群と住居址の変遷について

中原遺跡及び東畑遺跡においては、関山Ⅰ式から有尾式にかけての土器群が、住居址からまともに出て出土しており、重複も少ないことから、一括資料として扱うことができる。

そこで、住居址出土土器と住居址との時間的關係について、整理してみると、第329図・第330図のように示すことができる。図中の出土土器変遷は、県内の該期の遺跡等を勘案して本遺跡群から出土した土器によって示した。出土土器については、各々の遺跡の性格により、必ずしも理想の変遷通りの土器が揃っているわけではなく、欠落部分も多々ある。

また、本遺跡群の関山Ⅱ段階とした土器と、有尾段階とした土器との間には、時間的空白があると考えられるので、本項で掲載した関山Ⅱ式と有尾式は連続するものではない。

住居址出土の土器から、その住居址の年代を推定する場合、覆土中にある土器全部が、同一型式の土器であるなら問題はないが、大概の場合、数型式混じるのがほとんどである。そのため、今回は住居址の時期を決定するために、優先順位として、まず炉体土器、次に床面直上、覆土下層出土の土器をあげ、その他は、量的に多い土器によって若干の巾をもたせてその住居址の時期を決めることにした。

住居址出土の土器変遷図を作成し、その中に各住居址を当てはめると、1軒の住居址からは、かなり時間幅をもった遺物が出土しているのが分かる。また、遺物の出土傾向を見ると、上層には比較的新しい土器が多く、中層では古い土器と新しい土器が混在し、下層には古い土器が多い傾向がみられる。ただし、古い土器でも、その住居址の使用時期より古いものが混じることは、様々な要因により、少なからず考えられる。

これらのことを考慮にいれて本遺跡群の住居址の時期幅を推定した。なお、各段階の土器群の

特徴は以下のとおりである。

次に、本遺跡から出土した関山式土器から有尾式土器の変遷を周辺の地域と比較してみよう。長野地域では、関山Ⅰ式土器から関山Ⅱ式土器にいたる過程で主体となるのは、神ノ木式土器である。神ノ木式土器は、本遺跡出土の土器ではっきりした物は、束の縄文を施文した土器が1点出土しているのみである。逆に、本遺跡の土器と、長野県地域の関山式土器を比べると、諏訪郡原村阿久遺跡出土の関山Ⅰ式土器や、長門町六反田遺跡で出土している平行沈線による鋸歯文を持つ関山Ⅱ式土器に類似する土器等に類似点（半截竹管による文様モチーフや、縄文に異条斜縄文を持ち、羽条縄文で菱形を構成する等）が多い。

南関東から出土する関山式土器を本遺跡出土の土器と比べると、関山Ⅰ式土器に付いては、大きな違いを認めることは出来なかった。関山Ⅱ式土器に付いては、文様モチーフでは類似する点が多く認められるが、地文の縄文に付いては、若干の相違点がみられた。地文の縄文は、南関東の関山Ⅱ式では、組み紐縄文を多用しているが、本遺跡から出土した土器は、組み紐は少なく、異条斜縄文が多い傾向にある。これは、本遺跡の土器が、文様モチーフでは、南関東的な、関山式土器であるが、地文の縄文は、異条斜縄文を使い、羽条縄文で菱形を構成しているなど神ノ木式・有尾式的な作られかたをしているとも考えられる。

関山Ⅰ段階としたものの特徴

〔前半段階〕 瘤状貼付文、梯子状沈線施文による幾何学文（蕨手、連結、山形、菱形、鋸歯状）、円形刺突。縄文はループ文、結び目縄文等有る。

〔後半段階〕 瘤状貼付文や梯子状施文は形骸化して円形刺突や沈線に置き代わってくる、平行沈線による幾何学文（山形、菱形、鋸歯状）。縄文はループ文、結び目縄文等有る。

関山Ⅱ段階としたものの特徴

〔前半段階〕 平行沈線や櫛歯状工具によるコンパス文。縄文はループ文も残るが、組み紐、異条斜縄文が多くなる。

〔後半段階〕 前半段階よりもより明瞭な平行沈線によるコンパス文、幾何学文（山形、鋸歯状）。組み紐、異条斜縄文。

有尾としたものの特徴

半截竹管による爪型、平行沈線で菱形構成の文様を作る。

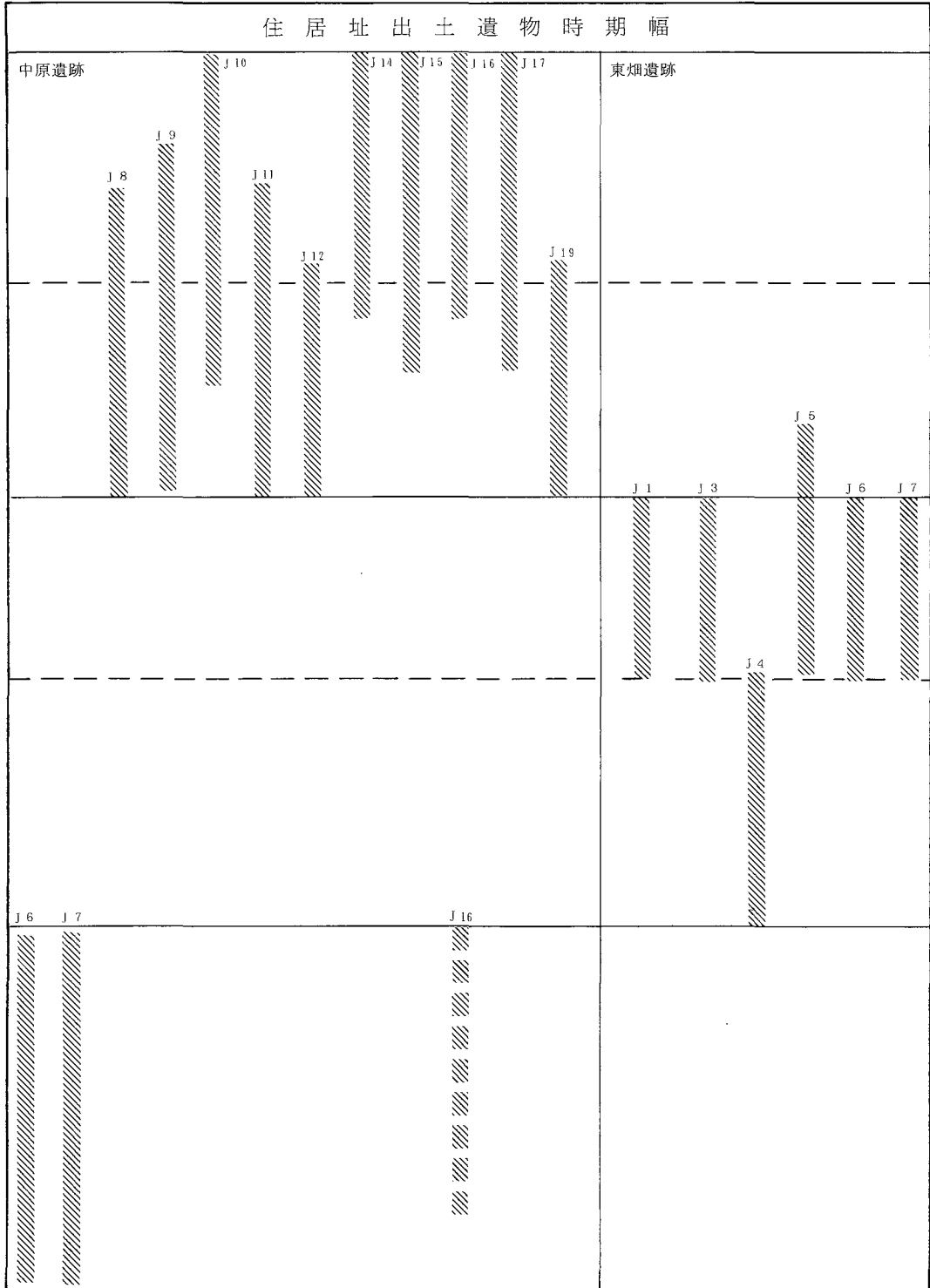
羽状縄文で菱形を構成する。

以上であるが、本遺跡群から出土した土器群については、各段階の前半と後半段階の段階分けは、特に関山Ⅱ段階において必ずしも明確に分けられるとは言えない。

（関根慎二）

	主な土器	段階的特徴	
関 関山Ⅰ式		瘤状貼付文 梯子状施文による幾何学文 ループ文	
		瘤状貼付文 梯子状施文 平行沈線 幾何学文 ループ文	
関山Ⅱ式		コンパス文 組紐 異条斜縄文 ループによる彫削	
		平行沈線の幾何学文 コンパス 組紐・異条斜	
有尾式		平行沈線 爪形文 菱形を作る 異条斜縄文	

第329図 住居址出土土器変遷(1)



第330図 住居址出土土器変遷図(2)

(2) 住居址の形態について

縄文時代前期の住居址形態については、これまで多くの研究が行われており、多くの重要な指摘がなされている（関野1938、小林1965、塚田1982、笹森1981等、小林1988、宮本1988、小栗1991）。また、群馬県内の前期の住居址の集積と時期別特徴についての研究もなされている（原1991）。こうした研究により、住居址形態の変遷過程や地域性については、ある程度解明されつつある。前期の住居形態は多様であり、変遷過程や集落構造、集団関係を追究するためには、格好の素材と言えよう。しかし、住居址の調査精度には、質的差異が見受けられ、報告例の資料批判なしに、平面形態や柱穴の配列について分析するには問題点も多い。また、研究者による見解の相違も認められ、不明な点もいまだに多い。

これまでに判明している前期前半期の住居址の特徴として、共通認識が得られている事項についてまとめる。

前期の住居址の平面形態は基本的には、隅円長方形（花積下層期）→方形（関山期）→長台形（黒浜期）→隅円方形・円形（諸磯a期）→隅円方形・円形（諸磯b期）→隅円方形・不整円形（諸磯c期）といった変遷を辿ることや、上部を支える構造が壁柱穴から支柱穴へ変化することなどが挙げられる。また、群馬県内の様相では、関山期に石囲炉が特徴的で「局地的」なものとの指摘（小林1988等）や、壁溝を有する住居址が黒浜・有尾期に多い点も特徴的であり、すでに黒浜・有尾期から諸磯b期の変遷過程については、一部言及している（大工原1993）。なお、中野谷松原遺跡でこの時期の大規模な集落遺跡が調査されたことにより、重複関係を基本とする住居型式学的方法（赤山1982）によって、変遷過程を検証することが可能になってきた。

今回言及するのは、前期前葉の中原遺跡の関山段階の住居址14軒（関山Ⅰ式：13軒、関山Ⅱ式：1軒）と、東畑遺跡の住居址6軒（関山Ⅱ式）の計20軒である。個々の住居址の特徴については、前章において詳述したので、ここでは触れないが、これらの住居址は壁柱穴が連続するもの（Ⅰ形態）と、壁溝が巡るもの（Ⅱ形態）に大別される。さらに、炉址の形態や支柱穴の配置から、次のように分類することができる。

I a 形態（中原J-3・中原J-8・中原J-17） 平面形は正方形で、掘り込みは比較的深い（60～70cm）。壁柱穴が連続する。柱穴の配列はA2配列である。炉址は石囲炉で、底面に石が配置されている。3軒存在する。

I b 形態（中原J-1a・中原J-9・東畑J-3・東畑J-7） 平面形は長方形で、掘り込みは比較的深い（50～70cm）。壁柱穴が連続する。柱穴の配列はA1・A2・C・D1と多様である。炉址は石囲炉で、底面に石が配置される。5軒存在する。

I c 形態 (中原 J-1 b・中原 J-5・中原 J-10・東畑 J-5) 平面形は長方形で、掘り込みは比較的深い(55~70cm)。壁柱穴は連続し、柱穴 B 1・D 1 である。炉址は底面に石のない石囲炉または、枕石を伴う地床炉である。4 軒存在する。

I d 形態 (中原 J-4・中原 J-11・中原 J-16・東畑 J-6) 平面形は長方形で、掘り込みは比較的深い(60~70cm)。壁柱穴は連続せず、まばらに存在しており、側面の壁柱穴の中にひとときわ深い柱穴が存在する。柱穴は C 配列と A 1 配列である。炉址は石囲炉で、底面に石が配置されている。4 軒存在する。

I e 形態 (中原 J-19) 平面形は長方形で、掘り込みは比較的浅い。壁柱穴はまばらに存在するが他形態に比べると少ない。柱穴は D 2 配列である。炉址は地床炉である。1 軒のみである。

I f 形態 (東畑 J-1) 平面形は正方形で、掘り込みは非常に浅い。壁柱穴と浅い壁溝が連続する。柱穴は A 1 配列である。炉址の形態は不明である。1 軒のみである。

I g 形態 (東畑 J-4) 平面形は正方形で、掘り込みは深い(50cm)。壁柱穴は連続する。柱穴は B 2 配列である。炉址の形態は不明である。1 軒のみである。

II a 形態 (中原 J-12 b・中原 J-15 b) 平面形は長方形で、掘り込みは比較的深い。壁溝が全周し、壁溝中には壁柱穴が連続する。柱穴は A 1・D 1 配列である。炉址は地床炉、または石囲炉である。3 軒存在する。

II b 形態 (中原 J-14) 平面形は長方形で、掘り込みが深い。壁溝が全周し、壁溝中には壁柱穴が連続する。柱穴は B 1 の配列である。炉址は 2 段に掘り込まれた埋甕炉である。1 軒のみで

形態	A 1	A 2	B 1	B 2	C	D 1	D 2	計
I a		3						3
I b	1	1				1	1	4
I c			3				1	4
I d	3					1		4
I e							1	1
I f	1							1
I g				1				1
II a		1					1	2
II b			1					1
計	5	5	4	1	2	3	1	21

第37表 住居址形態と柱穴配列の関係

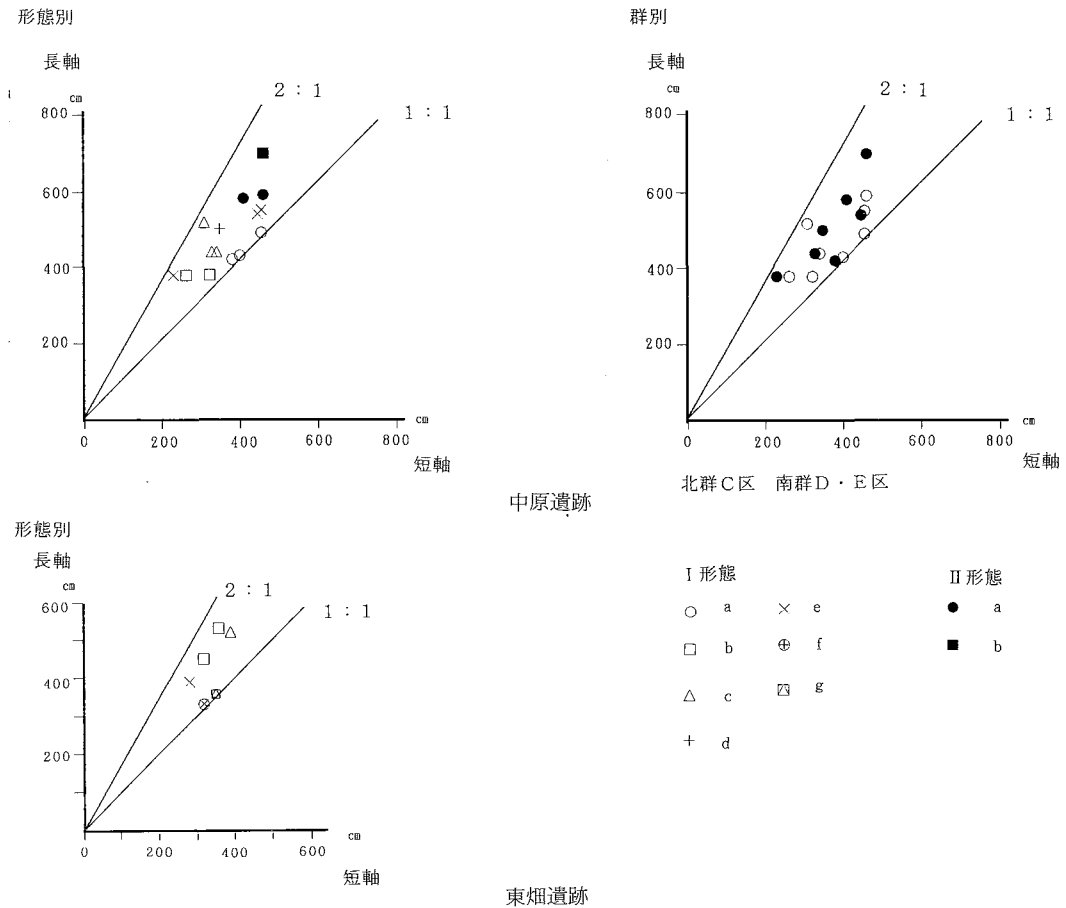
ある。

なお、拡張前の住居址で炉址形態がはっきりしないもの（中原J-12a・同J-15a）は分類から除外した。

形態別にみた場合、I b・I c・I d形態が4軒ずつで最も多く、次いでI a形態が3軒であり、I a～d形態がこの時期の一般的な形態と判断される。形態と柱穴配列の関係は第 表のとおりであり、I aとA 2、I cとB 1、I dとA 1との間にある程度関連性があることが解る。

また、規模はI形態では、長辺4m～5.5m、面積10～25㎡であるが、II形態では長辺5.8～7m、面積23～32㎡であり、II形態の方が大形のものが多い（第331図）。

次に、時期別に変遷を示したのが第332図～第334図である。重複や近接する例は少ないため、出土土器によって时期的前後関係を示したものである。大きな違いを見せるI形態とII形態は関



第331図 住居址の規模

山Ⅰ段階においては、併存していると推定される。Ⅱ形態では拡張が行われるなど、継続的に使用されているのに対し、Ⅰ形態では関山Ⅰ段階には拡張例は認められず、炉址の形態も大きく異なる。なお、関山Ⅱ段階ではこうした住居址は存在しておらず、集落構造の変化等も考えられるが、現状でははっきりしない。

Ⅰ形態においても小さな差異が認められる。関山Ⅰ段階では底面に石のある石囲炉を有するものが多く、柱穴の配列にA2配列が5例認められる。Ⅰa形態もこの時期のみに認められる。これに対し、関山Ⅱ段階では底面に石のない石囲炉・枕石を有する地床炉が多く、A1配列が多い傾向が認められる。Ⅰa形態とⅡ形態は全く存在しない。石囲炉の底面の石の欠落は、本地区では北下原遺跡（関山Ⅱ：2軒）でも認められ、また、後続する吉田原遺跡（関山Ⅱ～黒浜：5軒）・大下原遺跡（黒浜・有尾段階：9軒）では、すべて地床炉（一部枕石を有する）となっている。したがって、本地域においては石囲炉の底面の石の欠落は住居址の形態変化のメルクマールとなり得るものと言えよう。

また、壁柱穴が連続するものと、そうでないものが各段階に併存しており、こうした観点からも住居址形態の多様性が看取される。中原遺跡遺跡北群と南群では、やや偏在しており、集落構造と関連する問題として考えることができる。

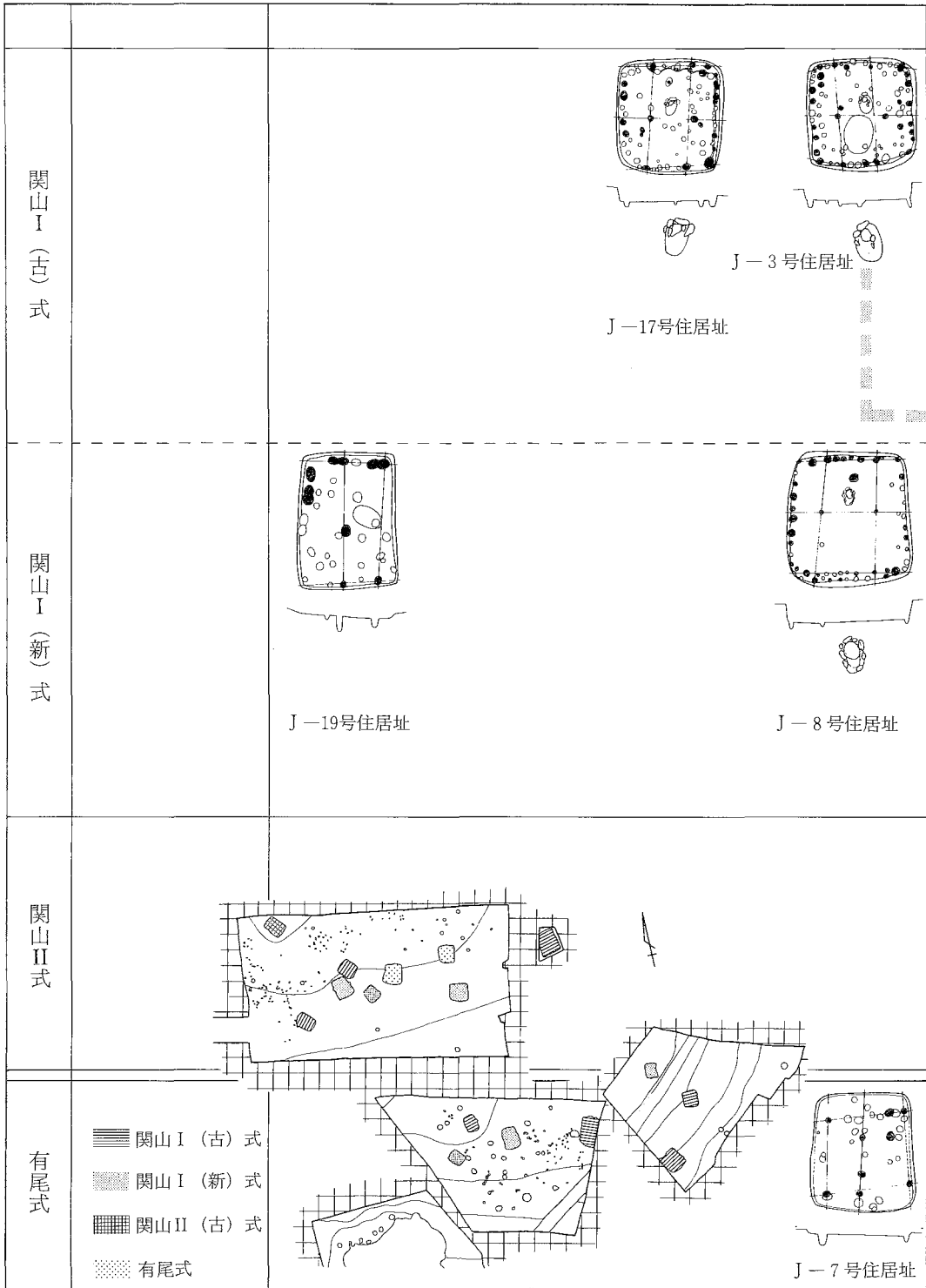
このように、関山Ⅰ段階と同Ⅱ段階では住居址の形態には、いくつかの相違点が存在することが判明した。これは、時期的変遷と同時併存する住居の機能的差異の両側面から考えることが可能であることを示唆している。

なお、関山段階全体の住居址の形態についてまとめる以下のとおりである。関山段階ではⅠa～Ⅰd形態が一般的な形態であり、方形プランを呈すること、石囲炉が多いこと、支柱穴は6カ所～12カ所で長軸に平行に「井」形・「廿」形・「キ」形に配列されるバリエーションが認められること、壁柱穴を有するⅠ形態と、壁溝を持つⅡ形態は併存しており、複数の形態が諸条件によって適宜選択的に構築されていたことなどが、住居址の形態の特徴として捉えられる。

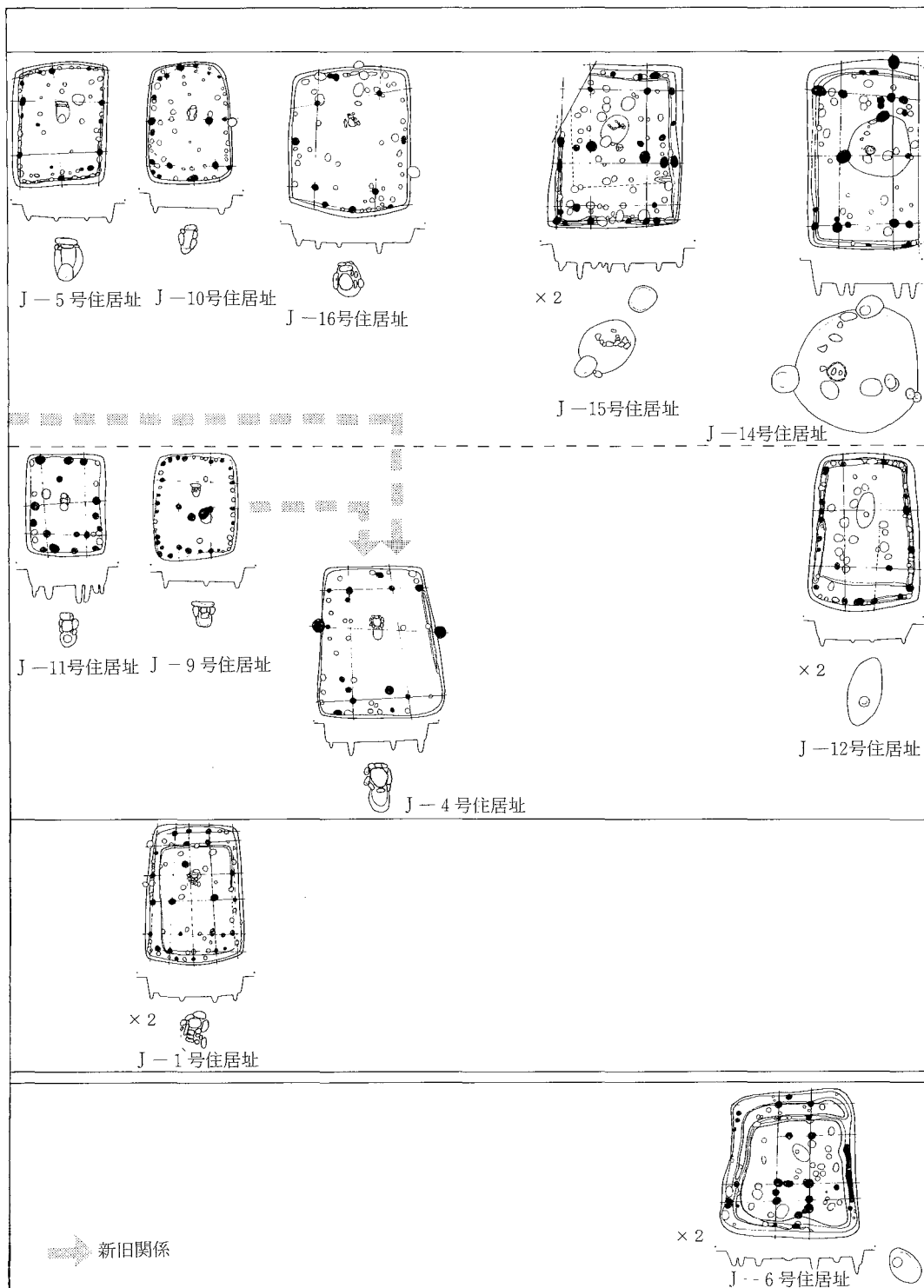
（大工原 豊）

（3） 住居址の分布について

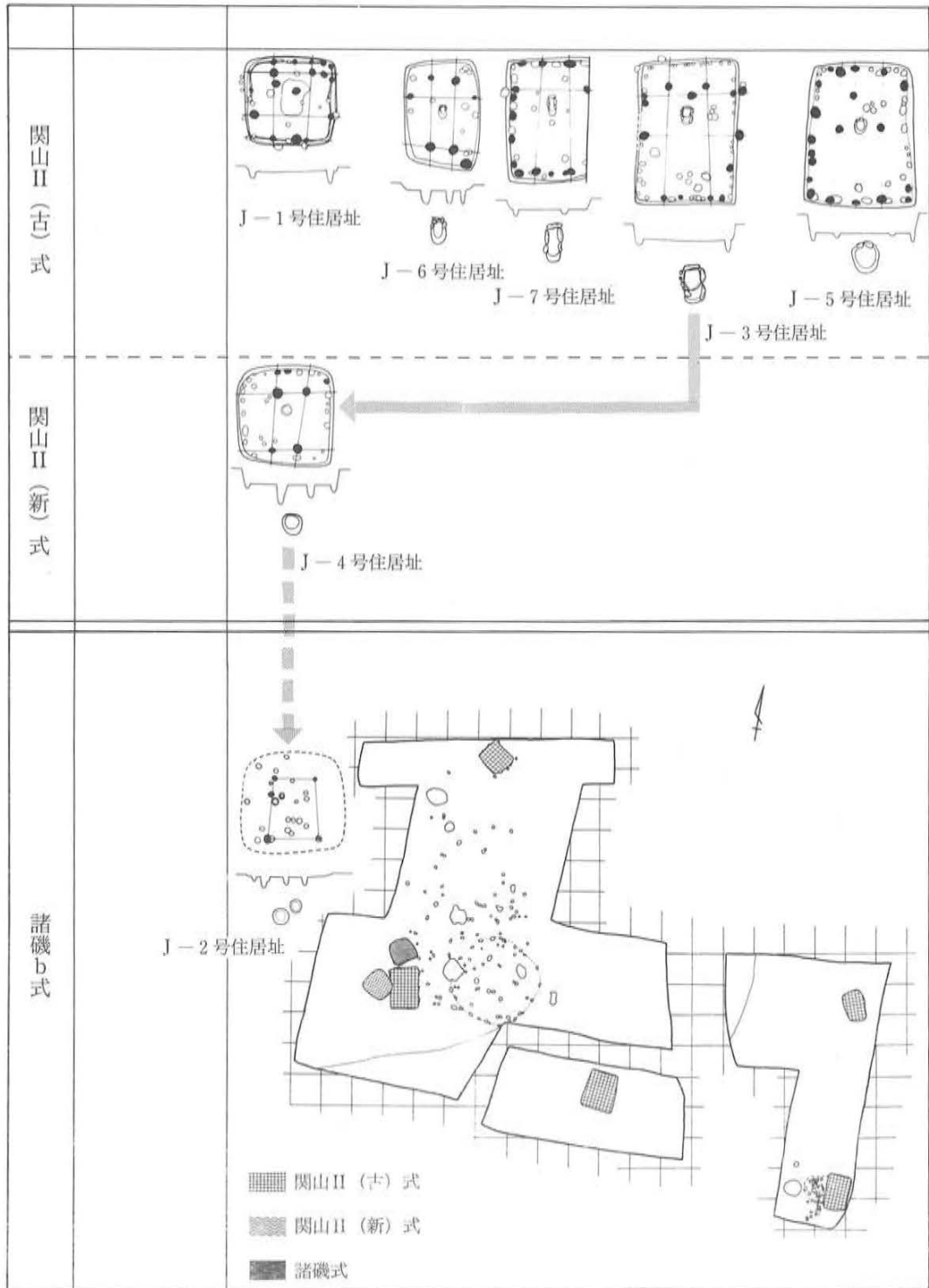
中原遺跡の関山段階の住居址群は、北群（C区）と南群（D区・E区）に分かれる。両群とも帯状に住居址が分布しており、間には約30mの無遺構部分が存在している（第332図）。各群の構成住居址数は北群7軒、南群7軒と同数である。時期的には、関山Ⅰ（古）段階と、同Ⅰ（新）段階に細分され、関山Ⅰ（古）段階7軒、同Ⅰ（新）段階6軒とほぼ同数である。さらに、各時



第332図 住居址形態変遷図(1)



第333图 住居址形態變遷圖(2)



第334図 住居址形態変遷図

期・各群に分離した場合でも、3～4軒ずつであり、常にほぼ同数になる。この状態は単なる偶然とは言い難く、この時期の集落構成単位・行動様式を反映している可能性が高い。そして、両群は時期の差に起因するものではないことも解る。

次に、形態別にみた場合、I a～I c形態は北群にやや多く、I d形態は南群にやや多い傾向がある。また、各群に1・2軒ずつII形態の比較的大形の住居址が存在しており、I形態数件に対し、II形態1軒の割で存在している。II形態の特殊性については前項でも述べたが、I形態数軒と併存していたことはほぼ確実であり、何らかの意味で区別された存在であったものと推定される。

また、住居址以外の遺構では、土坑は南群の住居址周辺に土坑群を形成するが、北群にはほとんど存在しておらず、各群での行動様式・生業活動の差異が認められる。これについては、次項で詳述することにする。

東畑遺跡は調査範囲が狭かったので、集落全体を把握することはできないが、中原遺跡同様、並行する北群と南群に分けることができる(第334図)。北群2軒、南群4軒である。各群とも調査区外にもさらに数軒の住居址の存在していた可能性がある。

時期別にみると、南群に属するJ-4号住居址のみ関山II(新)段階であり、それ以外は関山II(古)段階に属する。関山II(古)段階では、土器群からは両群の大きな時期差は認められない。しかし、住居址の形態では、南群と北群との間に中原遺跡同様の差異が認められる。すなわち、南群はI b・I c形態であるのに対し、北群はI d・I f形態であり、北群の方が堅穴が浅い点で共通する。なお、ここではII形態の住居址は認められず、関山I段階の中原遺跡とは様相が異なる。

この遺跡の関山II(古)段階でも、列状に配列する2～3軒が単位で集落が構成されていた可能性が高い。しかし、ここでは土坑も少なく、両群の大きな差異を抽出することは難しい。

以上のように、中原遺跡、東畑遺跡とも、各時期・各群で列状に配列する3軒程度の住居址により集落が構成されていた可能性が高いことが判

形態	中原北群	中原南群	東畑北群	東畑南群	計
I a	2	1			3
I b	2			2	4
I c	2	1		1	4
I d	1	2	1		4
I e		1			1
I f			1		1
I g				1	1
II a	1	1			2
II b		1			1
計	8	7	2	4	21

※ 中原 J-1 a 住を含む

第38表 中原遺跡・東畑遺跡の形態別住居址軒数

明した。これらが前期前半期においては集落を構成する単位集団とみられる。

また、これらの「群」においては、重複関係はほとんど認められない。同じ場所に継続的或いは断続的に住居址を構築しながら、敢えて他の住居址との重複を避ける様相は、この時期の特徴とみられる。そして、この重複を避ける様相は廃絶された住居址の利用方法と密接に関連するものと推定される。そこで、次に住居址の遺物出土状況について検討する。

(大工原 豊)

(4) 遺物出土パターンについて

中原遺跡では、個々の住居址について遺物出土状態の検討を行った結果、流れ込みや遺棄の可能性を有した例も認められるものの、大部分の住居址では、出土遺物は廃棄によるもので、比較的短期間に行われた廃棄活動によるものと推定された。また、廃棄単位を平面分布から検討してきたが、土器と礫・石器が全く同じ状態で検出される例はほとんどなく、多くの場合種類ごとに分布に偏りがあることが確認された。この状態は廃棄が土器・礫・石器一括で行われたのではなく、個別の廃棄の連続によるものであることを示している。そして、出土遺物の時間幅からみて、ほとんどが、土器型式で1型式の間であり、比較的短期間に行われたものであることも判明している。

そこで、中原遺跡の各住居址から出土した遺物の全体量を比較し、有意な分析単位の抽出を試みたい。なお、東畑遺跡の住居址は遺物出土量が少なく、有意な傾向を抽出することが困難であるため、ここでは中原遺跡の事例のみ検討することにする。

中原遺跡の各住居址の遺物出土量を土器・礫・石器の種類別と、その累積で示したのが第335図である。土器・礫・石器とも、6種類のパターンが存在し、類似したパターン同士が対応関係にある場合が多い。そして、土器・礫・石器の累積結果を分類すると、次の6パターンに分類することができる。

パターン1：比較的深い住居址から大量の遺物が出土し、頻繁な廃棄が推定されるもの

(J-3・J-8・J-15)

パターン2：比較的深い住居址から多量の遺物が出土し、やや頻繁な廃棄が推定されるもの

(J-5・J-10・J-14・J-16・J-17)

パターン3：比較的深い住居址から少量の遺物が出土し、低調な廃棄または遺物の流れ込み

が推定されるもの (J-1・J-9・J-11・J-12・J-19)

パターン4：浅い住居址から少量の遺物が出土し、低調な廃棄が推定されるもの (J-7)

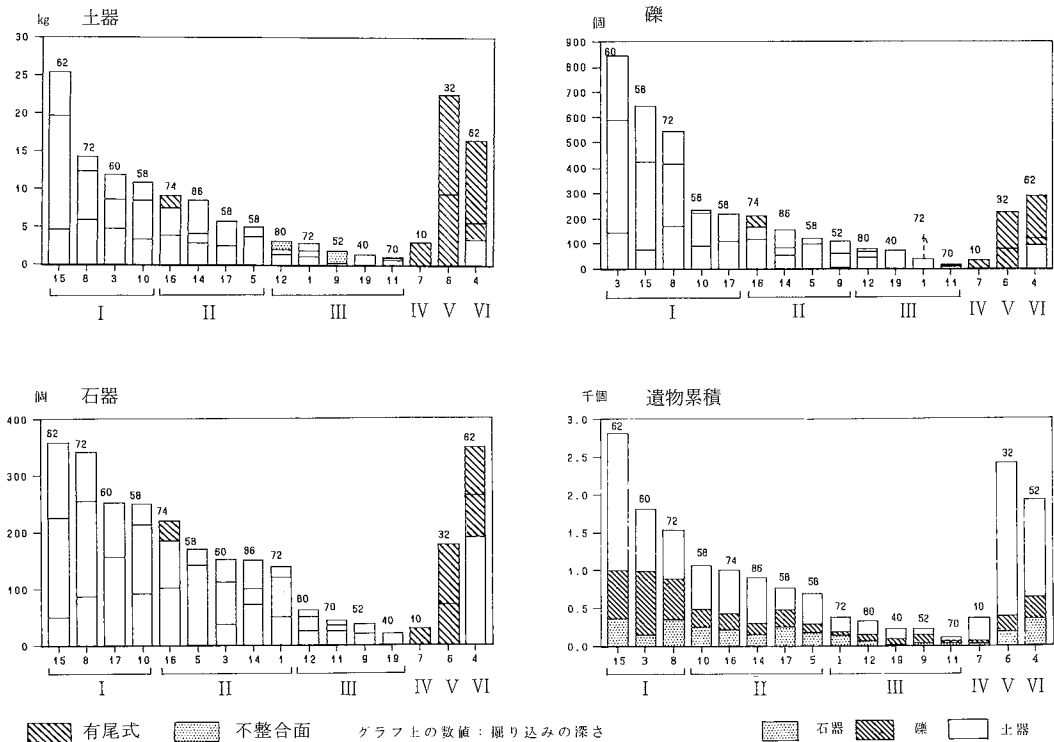
パターン5：比較的浅い住居址から多量の遺物が出土し、頻繁な廃棄が推定されるもの

(J-6)

パターン6：比較的深い住居址から多量の遺物が出土し、頻繁な廃棄活動が推定されるが、
廃棄活動に中断があり、その後再び廃棄活動が行われたと推定されるもの

(J-4)

このうち、パターン1～3はほとんどが関山I式土器が出土する住居址に認められる。また、パターン4・5は有尾式土器を出土する住居址に認められる。そして、パターン6は関山I式と有尾式土器を出土する住居址に認められる。なお、パターン6のJ-4号住居址は関山I式段階に限って見た場合、パターン2に属する。そして、一部時期の異なる遺物が混入しているJ-16号住居址や、同一型式内で2回廃棄が行われているJ-12号住居址は、出土量にほとんど影響がないため、本来属するパターンに含めてグルーピングを行った。ちなみに、小林達雄氏の分類(1972)ではパターン3の一部にパターンC₂が含まれる可能性があるが、それ以外はパターンC₁に分類される。



第335図 住居址の遺物出土量

関山Ⅰ段階ではパターン1～3の3パターンが存在する。これは本遺跡での生業活動が単一ではなく、廃棄物の量に差異が生じるような、質的に異なる生業活動が反復的に行われたことによると推定される。次に、北群（C区）と南群（D・E区）に分けてみると、第表のようになる。パターン1はすべて北群に存在する住居址であるのに対し、パターン2の住居址は1例を除き南群に存在しており、パターン3でも同様な傾向が認められる。廃棄物の多寡は、生業活動の差異と、滞在期間の長短、利用回数の多寡が要因として考えられる。

パターン	中原北群	中原南群	計
1	3		3
2	1		1
3	2	4	6
4	1(1)	3	4(1)
5	1(1)		1(1)
6	1		1
計	9(2)	7	16(2)

() は有尾段階

第39表 中原遺跡各群の遺物出土パターン

次に種類別に見た場合、礫の数量の差異が最も顕著であり、北群では大量検出される場合がしばしば認められる。礫は被熱率が高いことから、調理に利用されたと推定されるが、北群に居住した際には礫を多量用いた調理が行われることが多かったとみられる。さらに、クリ・オニグルミ等の炭化物が検出される住居址も北群に集中しており、北群と南群の差異はここにも認められる。

このように、廃棄物の多寡は累積頻度の違いではなく、質的差異に起因しており、生業活動の差異を反映している可能性が高い。すなわち、北群の位置に居住した際は廃棄物が多い生業活動が行われる場合と、廃棄物が少ない生業活動が行われていたのに対し、南群に居住した際には常に廃棄物が少ない生業活動が行われていたと判断される。

以上のように、廃棄物から見た場合、北群と南群では生業活動に差異が存在する可能性が高く、このような生業活動の違いは、この場所に居住した季節の差に起因すると考えることが妥当であろう。つまり、関山Ⅰ段階では中原遺跡での居住が、特定の季節に集中するものではなく、複数の季節に行われていたことと、その際には居住場所も異なっていたものと推定される。

また、有尾段階では、この場所がもはや頻繁に利用される場所ではなくなっていたため、住居址も2軒しか存在していない。廃棄物のパターンは大きく異なった2通りのパターンが認められるが、数量的分析から普遍性を抽出することはできない。ただし、関山Ⅰ段階に比べ、有尾段階の方が土器の占める割合が高いのが特徴であり、有尾段階の方が土器の大形化や器種の増加、使用頻度の向上などの要因を反映しているとも推定される。

以上のように、遺物出土パターンの違いは、同一時期内での生業活動の差（季節の差）と、時期の差に起因する行動様式の差によるものであることが明らかとなった。

(大工原 豊・金井京子)

(5) 石器群の様相について

各遺跡の石器群の分析については、前章で行っているのので、ここでは簡単に要点を述べるにとどめる。なお、東畑遺跡では石器類が少なく顕著な傾向は認められないので、中原遺跡についてのみ述べる。

中原遺跡の石器群は、石器組成・石材組成の分析の結果、北群と南群との間に有意の差異が認められることが判明した。北群は石器種別パターンではA2パターンが多いのに対し、南群ではa₁パターンが多い傾向が認められた。これは北群ではA類石器（石鏃・スクレイパーA類等）の製作が活発であったことを示しており、ここをベースとしての狩猟等A類石器を多用する生業活動が行われる頻度が高かったと考えられる。また、C1類石器（凹石・石皿等）も北群に多い傾向があり、堅果類の加工調理が活発であったことが窺える。これはクリ・オニグルミの北群偏在や、焼礫の大量出土も北群に偏ることからも傍証される。

これに対し、南群では石器の製作は低調であり、北群の様相とはやや異なっているものの、特徴的な生業内容を特定することはできない状態であった。

以上のように、石器群の分析結果からみて、北群は狩猟活動と堅果類の加工・調理の活発な生業活動が行われた集落であることが推定され、集落が営まれた季節は秋から冬にかけての時期である可能性が高いことが判明した。

(大工原 豊)

(6) 集落の構造と景観の復元

中原遺跡と東畑遺跡の住居址の形態及び遺物出土状態の分析と、土器群・石器群の分析結果についての検討を行った。その結果、関山Ⅰ式～Ⅱ式にかけての、集落構造とその特性についてある程度把握することができた。

要約すると、以下のとおりである。

- ①この時期の集落は、軒程度の住居を単位とする「単位集団」による小規模な集落であったと推定される。また、集落構造は直線的であり、中央広場の形成も認められない。そして、住居址以外の施設も少なく、移動性に富んだ集落構造であったと判断される。
- ②住居址の時期的変化については、石囲炉の形態変化によってある程度把握することが可能であることが判明した。すなわち、関山Ⅰ段階：石囲炉（底石有り）→同Ⅱ段階：石囲炉（底石なし）である。また、炉址の使用頻度は低く、小芥達雄氏が指摘しているように（小林1988）、煮炊きのための施設の可能性は低い。

③中原遺跡では住居址には石囲炉を有する標準的なもの（Ⅰ形態）と、比較的大形のもの（Ⅱ形態）が併存しており、後者は3軒に1軒の割合で存在しており、居住状態に何らかの違いがあったものと推定される。

④住居址は意図的に重複を避けて構築されており、古い住居の竪穴は廃棄の場・集石土坑のような調理の場として利用していたと推定される。

⑤中原遺跡では、土坑群の有無、遺物廃棄パターン、住居址の形態から南北両群の生業活動の差異が認められた。また、同じ場所（群）に繰り返し住居址が構築されており、同一場所へ回帰する行動様式であったとみられる。また、回帰は少なくとも年2回程度のサイクルで行われていたと推定される。

⑥中原遺跡では、住居群は2群存在しており、そこで行われた生業活動には差異が認められる。差異は住居址の形態・土坑群の有無・遺物出土状態・石器群の様相・堅果類の出土頻度等多くの面で認められた。この違いは石器群の様相からみて、居住する季節の差であった可能性が高い。具体的には、北群は狩猟活動・堅果類の加工調理が活発な秋から冬の可能性が高く、南群はそれ以外の季節の可能性が高い。

この時期の集落は、本遺跡群においては下塚田遺跡（関山Ⅱ：1軒）・北下原遺跡（関山Ⅱ：2軒）が存在する。しかし、調査範囲が狭いこともあり、集落構造について検討するには適していない。そこで、本遺跡群の調査所見を踏まえ、群馬県内の当期の集落遺跡との共通点と相違点について整理することにした。

県内である程度集落構造について検討可能な遺跡としては、利根川上流域の十二原Ⅱ遺跡（関山Ⅰ：3軒）・三後沢遺跡（関山Ⅰ：3軒）、赤城山麓地域の勝保沢中ノ山遺跡（関山Ⅰ：6軒）・諏訪西遺跡（関山Ⅰ：9軒）・分郷八崎遺跡（関山Ⅰ：3軒・同Ⅱ：1軒）・芳賀東部団地遺跡（関山：6軒）等がある。

これらの遺跡は、利根川上流域と赤城山麓地域に分けられるが、両者間で多少様相が異なる。すなわち、利根川上流域では、石囲炉を有する住居址が少なく、地床炉と埋甕炉が多い。しかし、赤城山麓地域では石囲炉を有するものが大部分であり、本遺跡群の様相と同一である。

また、壁溝を有するⅡ形態の住居址は、分郷八崎1号住・同2号住、諏訪西12号住、勝保沢中ノ山2号住、三後沢J-6号住（第1期）、芳賀東部団地J35号住などがある。これらの住居址はいずれも、各遺跡1～2軒と少数であり、本遺跡の様相と共通する。

住居址の分布状態をみると、いずれの遺跡でも重複事例は認められず、列状に2～3軒が並ぶパターンが多い。この状態も本遺跡群と共通する。

このようにみると、本遺跡の様相は群馬県内の同時期の遺跡についても、適合する部分が多い

ことが解る。遺跡数の増加と分析の多重化により、さらに普遍化されるものと思われる。

なお、長野県でも本地域に隣接する城之越遺跡（堤他1992）でも、関山Ⅱ段階並行の小規模な集落が検出されており、集落構成は類似するが、住居址の形態はⅠf形態を中心としており、多少違いが認められる。また、南関東の当期の住居址には、石囲炉が存在しておらず、同じ土器型式を有しながらも、住居形態の差異が生じる要因は何に起因するのか、どこで境界線が引けるのか、広域的集団関係を解明するために重要な課題であると考えられる。

そして、南関東や中部地方等周辺地域における同時期の遺跡の様相を一瞥したところ、こうした集落構成とは異なる集落遺跡が存在している。例えば、埼玉県打越遺跡（麻生・荒井他1978・荒井他1983等）、千葉県幸田貝塚（関根他1987）、長野県阿久遺跡（笹沢他1982）などでは、連綿と多数の住居址が構築される大規模な集落遺跡の存在が確認されており、本遺跡群のような小規模集落と二元的な在り方をしていたものとみらる。両者がどのような関係で結びついていたのか、当期の集落構造を解明するために重要な課題である。

なお、当期の集落構造を解明するために、すでにいくつかの研究も行われており（村田1985、小藁1985・1991等）、具体的な集落像の解明と、集団領域を明らかにしようとしている。今後も、こうした研究を継続することにより、縄文社会の実像に迫ることが可能である。今回の分析・検討が十分であったとは言えないが、遺構・遺物の統合化により、集落像を解明する所期の目的の一部を果たすことができたと考える。

（大工原 豊）

2 配石墓について

天神原遺跡では配石墓群が検出された。配石墓は、後期後半期を中心に構築されており、すでに集成・分類等が行われている（山梨県考古学会1990、鈴木1980・1986）。また、この時期の墓制の研究については、1980年前後にさかんに行われ、すでに林謙作氏により研究史を含め整理がなされている（林1977）。その後、墓制に関する研究については低調であり、大きな進展を見せていない。また、近年では脂肪酸分析法を用いた試みが、全国各地で行われている。また、最近では後期前半を中心とする墓域において多量の人骨の出土事例が長野県北村遺跡において確認されており（平林他1993）、具体的な埋葬形態・社会組織についての実態が解明されつつある。

しかし、本遺跡の場合、人骨等有機物は皆無に近い状態であり、こうした直接的なアプローチは不可能である。そこで、今回の調査において確認されたことを中心に、間接的な方法で配石墓群の実態について、分析・検討を行ってみたい。

（1）形態・構築方法

配石墓は8形態に分類することができ、分類基準は第13表のとおりである。大量の礫を必要とする形態から、1～2個程度の礫で構成される形態までの偏差は大きく、形態により構築方法も大きく異なる。A群を構成するⅠ形態（S-4）のみ平積み2段である。しかし、B群～D群及びG群を構成するⅠb～Ⅴ形態は、平積み1段＋小口積み数段が基本である。また、Ⅵ形態は両端部に平積み1段の配石を有する。このように形態により構築方法が異なっている点に本配石墓群の特徴を見出すことができる。

また、Ⅲ形態とⅤ形態は類似しているものの、規模と平積みの礫の大きさに違いが認められる。Ⅲ形態ではやや小形の例でも平積みの礫は長大なものが用いられており、この点からⅤ形態とは区別される。

組石方法 側面の小口積みの礫では表面が小さく見えているものでも奥深く突き刺さっているものが多く、容易に崩れない状態であった。特に、コーナー部分の礫では、長大なものが深く埋め込まれていたものがしばしば認められた。しかし、裏込めが施されている例はⅡ形態に認められたが、少量であり、古墳の横穴式石室のような本格的な例は存在しなかった。

底面敷石 Ⅰ形態・Ⅱ形態では底面敷石（底石）が施されているが、これは周囲の配石とは組み合わせず、扁平な礫が地山に貼り付けられた簡単なものである。配石墓構築の最終段階に設置されたものと判断される。

閉塞石 閉塞石が存在したものはS-22（Ⅱ形態）のみであった。この配石墓では比較的小振りの礫が埋土最上部に平らに詰め込まれた状態で検出された。また、S-6・S-40（Ⅱ形態）では本来こうした施設が存在していた可能性が高く、晩期に環状配石遺構として再利用された際に除去されてしまったものと推定される。

また、内円部に存在するS-7B・S-7A（Ⅲ形態）では、晩期の通路状遺構（S-3）が埋土の直上に構築されていたが、その間には蓋石等は認められなかった。このことは、本来は蓋石が存在していなかったか、すでに晩期段階に内円部が環状列石化する時点で除去されてしまったか、いずれかであると考えられる。内円部に存在するⅣ・Ⅴ形態もⅢ形態と同じ状況であったと推定される。

また、周溝部に存在する、E群・F群（Ⅵ・Ⅵb形態）では晩期に周溝構築の際、上部を削平されているので、本来の状態は不明である。ただし、周堤帯部分に位置するS-28（Ⅵ形態）でも上部施設は存在していないので、元々なかった可能性が高い。

副室状石組 S-6・S-22・S-7Bでは埋土の上部に小規模な石組遺構が存在していることが確認された。石組みは閉塞施設の下部に存在しており、埋葬時に造られたものである。また、石組により区画された部分から副葬品等、特別な遺物は検出されなかった。この副室状石組についての性格は不明であるが、有機質の遺物が入っていた可能性も考慮されよう。

掘り方 掘り方は、Ⅰ形態では皿状で浅い掘り方であるが、周溝が削平されているため、本来はもっと深い掘り方を有していたと考えられる。

Ⅱ形態では下段平積みの礫が埋め込まれた部分が若干掘り窪められていた。また、Ⅱ・Ⅲ形態では、コーナー部分には長大な棒状の礫が埋め込まれたピットが存在する例が認められた。

構築手順 解体調査時の組石状態から配石墓の構築手順を復元すると、Ⅱ形態では次のようであったと推定される。

地山掘削→コーナー部の礫設置→平積み（1段）→小口積み（3～7段）→底面敷石設置
埋 葬→副室状石組設置→閉塞石設置

（2）配石墓の被熱・覆土の状態

被熱 配石墓の構成礫の多くには赤化・ひび割れ・表面剥落・欠損等、強い火を受けた痕跡が認められる。各配石墓実測図の中に被熱礫の分布状況を図示した。この中で黒く塗りつぶした礫が被熱礫であるが、比較的多くの被熱礫が使用されている。しかし、被熱礫だけではなく生礫がモザイク状に組み込まれており、配石墓が構築されてから火を受けたものではないことが確認され

た。また、被熱礫と生礫の組合せに特別な傾向を見い出すこともできない。

いずれにしても、多くの礫が予め別の場所で被熱礫化とされ、その後、構築材として使用されていたことは確実である。調査区内では、こうした大規模に火を焚いた場所は確認されておらず、被熱礫化された場所は、現段階では不明である。

覆土 配石墓の覆土は基本的にはY P粒子が全体に斑状に入り込む単調な状態であり、色調・しまり・粘性・混入物等に顕著な違いが認められないのが特徴であった。これは、一般的な住居址の覆土の状態とは異なっており、一度に埋まった（埋葬された）状態を示していた。

しかし、S-4（I形態）・S-6・S-22・S-40（II形態）では、覆土上層にこれとは全く異なった土層堆積状態が観察された。

（3）遺物出土状態

土器 配石墓から出土した土器の量（重量）は、第14表・第15表のようにS-4号配石墓が極めて多く、5kg近く（埋設土器U-202の重量にほぼ相当）出土している。次いでS-11、S-22、S-6、S-44、S-7 B号配石墓で1kg以上出土しているが、その他の配石墓では1kg以下の出土量しかない。これらの配石墓では副葬を示すような土器は出土しておらず、混入した状況を示すように中期の土器から晩期の土器まで見られる。但し、出土土器は無文の土器が多く、時期を決定できる土器数は比較的少ない。時期的なまとまりを持つものは数例存在するが、ほとんどの配石墓では時期を断定するほどの出土量ではない。

土製品 耳飾がS-11・S-8から検出されているが、S-8のものは破片であり、装着された状態とは判断しがたい。

石器 埋葬時に装着または副葬されていたと推定される石器は、原則として存在していない。多くの配石墓で、剥片類が少量ずつ検出されているが、意図的な状態は見出し難い。石鏃が検出される場合でも、欠損品・未成品が混在しており、剥片同様周囲に散乱していたものが混入したと判断される。また、中でも剥片類が多く検出されるのはB群（II形態）であるが、埋土の深さが厚いことに起因する可能性が高い。

しかし、晩期に配石墓が環状配石遺構として、再利用されたS-4・S-6の石器出土状態をみると、石鏃・磨石に偏在性が認められる。特に、石鏃はいずれの遺構でも片方に偏っており、分布上有意なまとまりと考えられる。S-6の場合、中央に石棒が立位で存在していた可能性が濃厚であり、これらの遺構で行われた祭祀的色彩の強い行為の一端を窺い知ることができる。

以上の点からみて、本遺跡の配石墓では、装身具や副葬品と共に埋葬された可能性は、ほとんど認められない。生前装着していた装身具もはずれた（はずされた）状態になった後に、配石墓の埋葬されたと考えることが妥当である。

(4) 頭位方向

頭位方向については人骨が存在しておらず、直接確認することはできなかった。また、耳飾・垂飾などの装身具もほとんど検出されず、生前身につけていた装身具は、埋葬時にははずされた状態であったことが確認された。そのため、遺物から頭位方向を推定することもできなかった。したがって、間接的な状況証拠から頭位方向を推定せざるを得ない。

頭位方向が推測できた配石墓にはS-22号(Ⅱ形態)がある。S-22では、礫床北部中央に緑色の結晶片岩が枕石として埋め込まれており、この位置に頭部があったと推測できる。また、この配石墓では頭部埋土の上部に副室状の石組が存在した。この石組も頭位と強い関係を有していると推定される。こうした石組はS-6・S-7Bにも認められ、それぞれ北部と西部に位置していた。したがって、少なくともこれらの配石墓では頭部は北と西に存在していた可能性が高い。しかし、他の配石墓については、南北或いは東西といったところまでしか推定することはできない。このように頭位方向を推測可能な配石墓はごく一部である。それ以外の配石墓でも同様な規制が働いていた可能性が高い。

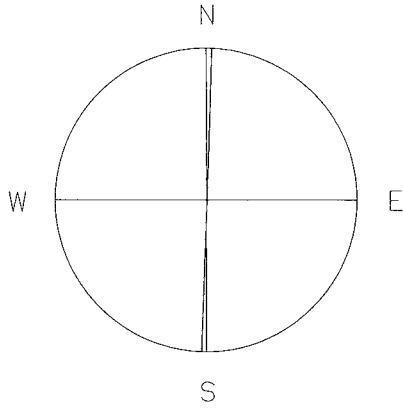
次に、配石墓の埋葬区・形態別に主軸方向について検討してみたい。埋葬区ごとに主軸方向を検討すると、第336図・第337図のように示される。各群の特徴は以下のとおりである。

B群(Ⅱ形態) 3例すべて南北方向であり、この内頭位が北向きと推定されるものが2例あり、北向きを強く指向しており、単極型である。また、軸の振れは 24° である。

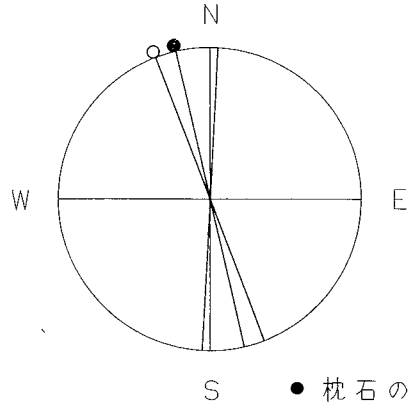
C群(Ⅲ・Ⅳ形態) 南北方向と東西方向がほぼ同数であり、二極分化している。また、東西方向では軸の振れが 11° と小さいのに対し、南北方向のものは、 53° と振れが大きい。

D群(Ⅴ形態) 1例を除きすべて東西方向であり、東西方向(西向き?)の指向性の強い単極型である。軸の振れは 13° と小さい。

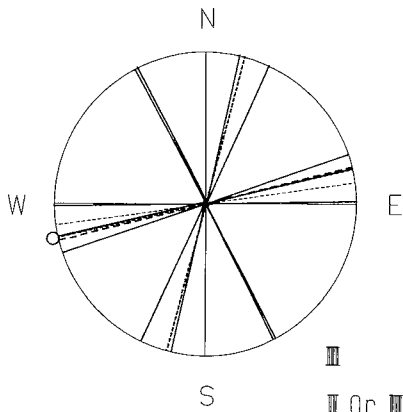
E群(Ⅵ・Ⅵb形態) 南北方向と東西方向に二極分化しており、C群と類似した傾向が認められる。軸の振れは東西 26° 、南北 34° であり、南北の方が振れが大きい。



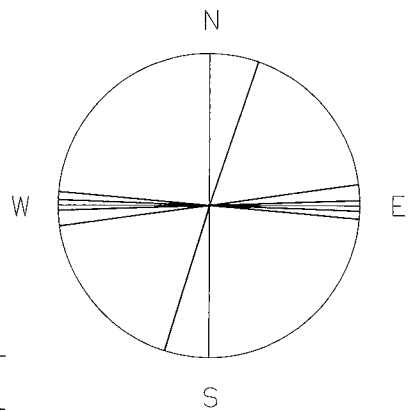
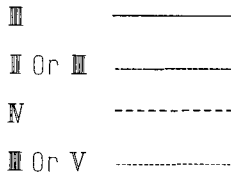
A群 (I形態)



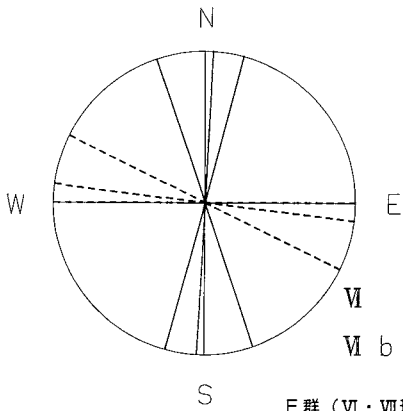
B群 (II形態) ● 枕石の位置
○ 副室状石組



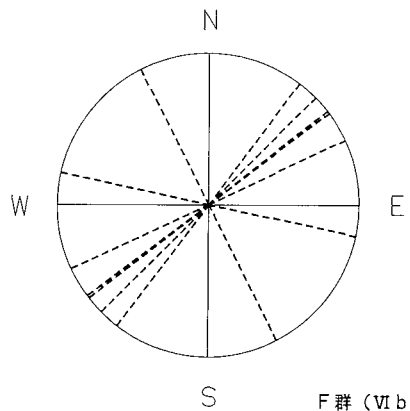
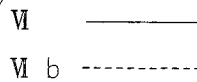
C群 (III・IV形態)



D群 (V形態)

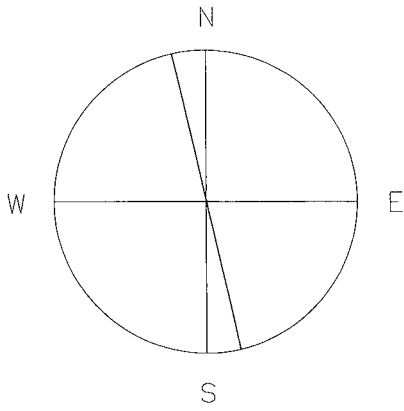


E群 (VI・VII形態)

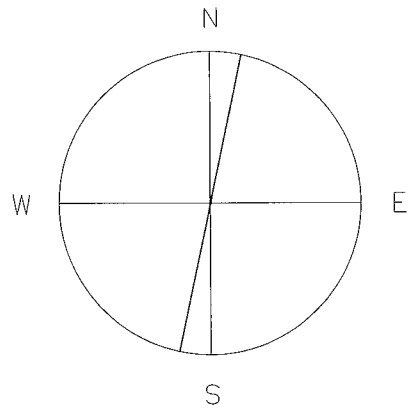


F群 (VI b形態)

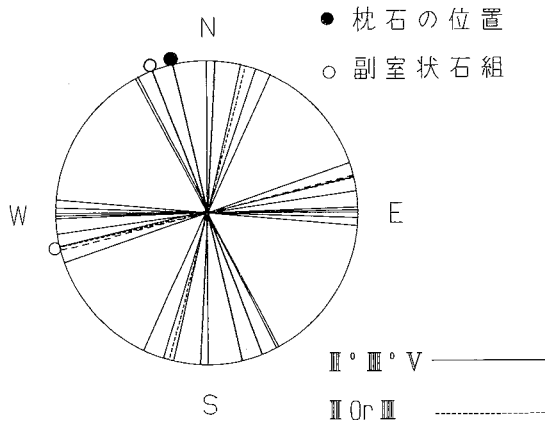
第336図 配石墓の主軸方向 (1)



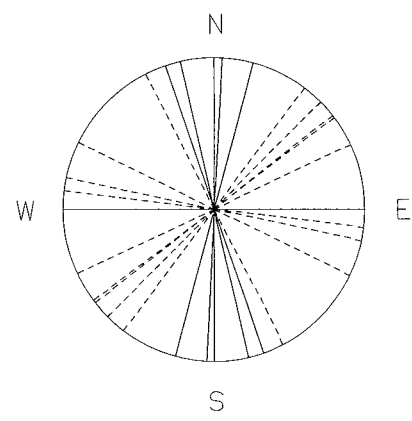
G群 (VI形態)



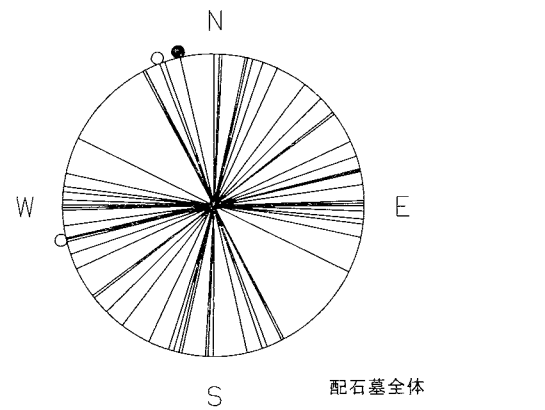
H群 (I b形態)



B~D群 (II~V形態)
 II° III° V ———
 II Or III
 IV - - - - -
 III Or V - · - · -



E~G群 (VI·VI b形態)
 VI ———
 VI b - - - - -



配石墓全体

第337図 配石墓の主軸方向 (2)

F群 (VI b 形態) 群全体が45°程ずれているが、基本的には東西方向と南北方向に二極分化している。軸の振れは東西28°、南北51°であり、南北の振れが大きい。

以上のように、各埋葬区により、指向する方向性に違いが存在することと、全体としては南北と東西に二極分化していることが解る。また、単独で存在するA・G・H群はすべて南北方向である。

次に、西側に位置するB群～D群と、東側に位置するE群～G群を対比すると、B群～D群では、東西方向と南北方向に二極分化が顕著である。また、軸の振れは東西24°、南北53°であり、南北方向の振れが大きい。これに対し、E群～G群では3極に分かれているように見え、軸の振れも大きい。これはF群が45°程軸がずれているためであり、基本的には二極分化の状態であることが解る。形態別にみると、I・I b・II・VI形態はすべて南北方向であり、III・V・VI b形態では南北と東西に二極分化している。この内V形態は東西指向が強い。

以上の結果から、配石墓の頭位方向についてまとめると、埋葬区ごとにも、配石墓群全体としても、東西と南北に2極分化していることが明らかとなった。ただし、埋葬区が特定の形態と強い関係を有していることから、頭位方向の指向性が形態によるのか、埋葬区によるのかははっきりしない。このように東西方向と南北方向に二極分化される状態は、「双極型」(林1977)という概念でとらえられている状態と考えられ、縄文時代後期以降の墓制の特徴として認識することができる。南北方向と東西方向との比は16:20であり、この社会全体を二分する原理が「双極型」の要因と考えられる。ただし、この場合では、埋葬区内でも「双極型」を形成しているところから、「胞族」の違いの可能性よりは、性差の可能性であったと推測される。

また、主軸が常に振れている状態から、配石墓構築の際の目標は動体であった可能性が高い。主軸の振れは埋葬区単位でも、配石墓群でも東西方向は小さく、南北方向は大きい傾向がある。したがって、配石墓群形成には東西方向が基軸となっていたことが推定され、動体であった可能性が高いことから、太陽・月といった天体の運行により規制されていたものと思われる。

(5) 重複関係

切り合いが認められた例は非常に多く、第15表及び第339図に示したように大多数の配石墓が重複関係を有している。重複で特徴的なのは、南北方向と東西方向が交互に切り合う例が多い点で、これが顕著なのはC群(III形態)である。また、同形態で一つの埋葬区が形成されていることが多いため、重複も同形態同士が多い。

S-44では礫がすべて抜き取られており、構築用石材が再利用されていることが確認された。そして、これに重複関係にあり、より新しいS-22は破碎礫・被熱礫といった比較的小さな礫が利用されている。そのため、小口積みは7段とⅡ形態の中では最も多い。また、出土土器からみても、この配石墓のものの方が新しい。したがって、S-22はⅡ形態の中でも新しい段階のものと判断される。

(6) 埋葬区の配置

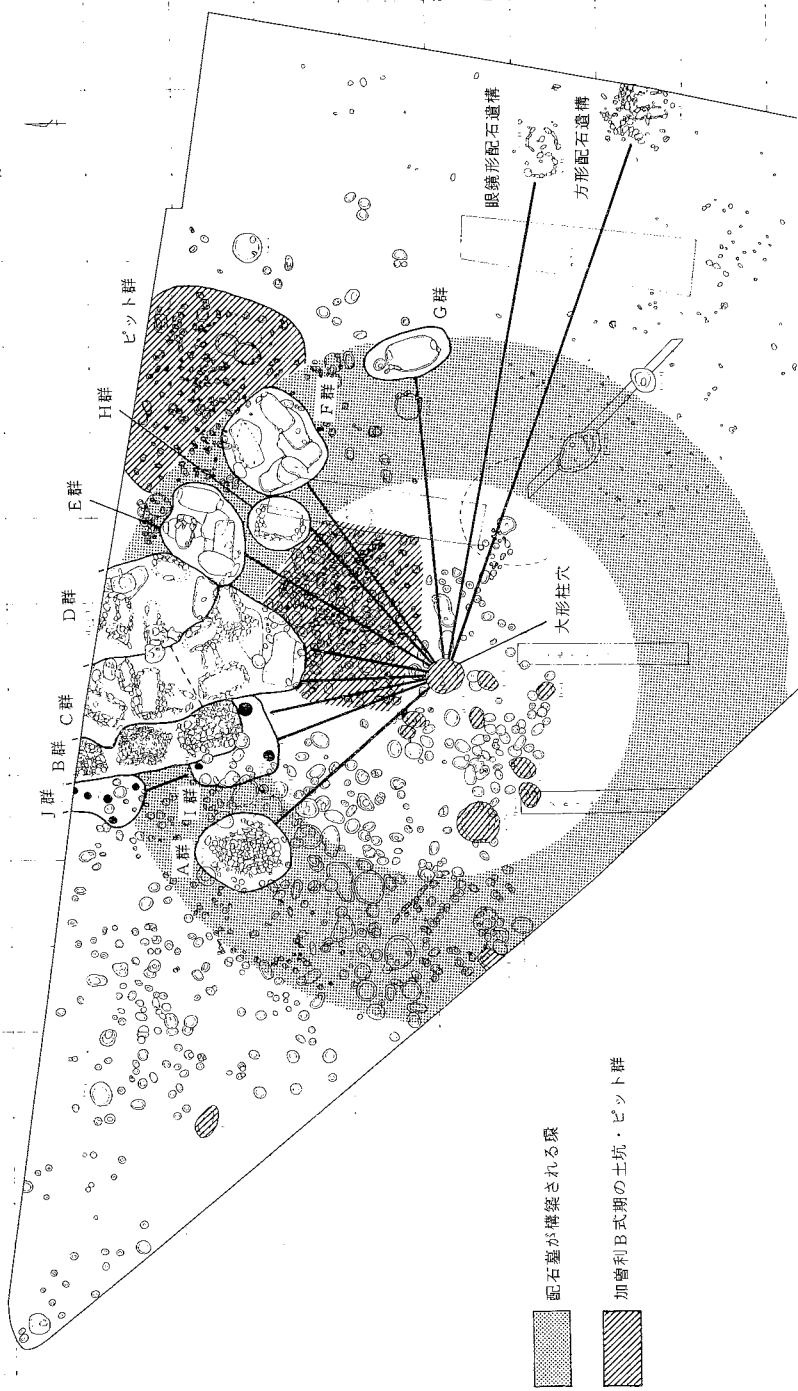
配石墓群の形成は、加曾利B1式期～高井東式期といった比較的限定された時間幅の中であることが判明している。配石墓は単独で存在するものと、数基が群を形成するものがあり、7カ所の埋葬区(=群)を形成している。(註1) 限定された場所に構築されることにより、埋葬区内では頻繁に重複を繰り返している。また、重複パターンにも南北方向と東西方向が交互に切り合う状態が多い点に共通性が認められる。

配石墓群の配置は第338図に示したとおりである。同時併存するD-26号土坑(加曾利B～高井東式が出土)を中心とした半径約15mの円弧に沿って、北西から南東にかけてⅠ～Ⅵ形態が埋葬区ごとに配置している。西からA群(Ⅰ形態)→B群(Ⅱ形態)→C群(Ⅲ形態+Ⅳ形態)→D群(Ⅴ形態)→E群(Ⅵ形態+Ⅵb形態)→F群(Ⅵ形態+Ⅵb形態)→G群(Ⅵ形態)といった順に並んでいる。また、C群は配置から、北に位置するC1群(Ⅲ形態+Ⅳ形態)と南に位置するC2群(Ⅲ形態)に細分される。

また、F群(Ⅵ+Ⅵb)の主軸方向のずれは、D-26号土坑との対応関係によってのみ説明可能である。このD-26号土坑周溝部に位置しているため、上部を削平されていると推定され、本来はもっと深い掘り込みを有していたとみられる。したがって、この土坑は大規模な柱穴であった可能性が高い。(註2) また、D-26号土坑の周辺には同時期の土坑やピット群が集中しており、この場所が配石墓群の形成と密接に関連していることを示している。

なお、ピット群は、配石墓群の内側と外側の2カ所に存在しているが、簡単な建物等の構築物が繰り返し構築されたものと推定される。そして、この構築物は埋葬の度に繰り返し構築された仮設的構築物であった可能性が高い。

ところで、A群(Ⅰ形態)とH群(Ⅰb形態)の位置については、別の関係が成り立つ。すなわち、D-26を中心として、ちょうど90°の位置に両者は配置されている。さらに、両者は底面が幅広いといった形態的特徴からも、他の配石墓と区別される存在である。また、数基で群を形成することなく、単独で存在している点も異質である。したがって、この両者は他の埋葬区とは



第338図 配石墓の配置と埋葬区

別の規範に則って構築されていた可能性が高い。

以上のように、配石墓群は、D-26号土坑を中心とした円弧に沿って、埋葬区単位で配列していたことが明らかとなった。そして、埋葬区は基本的には同一形態によって構成されており、埋葬区ごとに配石墓の形態が定まっていたことも判明した。また、葬送に用いられたと推定される構築物の構築場所についても厳格に定められていたとみられる。

したがって、配石墓群の配置は埋葬にあたっての社会的規範を強く反映したものと推定される。また、「埋葬小群は「世帯」の一部」と考えられ（山田1993）、被葬者の社会的背景を反映した構成単位と推定される。

（7）配石墓群の変遷

配石墓群は同一形態の配石墓によって形成された埋葬区が存在することが判明した。また、配石墓の重複関係は非常に多く、多くの配石墓の新旧関係が判明している。覆土中からは量は少ないものの、時期を決定することができる土器片も出土している。そこで、配石墓群の変遷について、調べてみたい。

第339図は配石墓群の変遷を埋葬区ごとに示したものである。配石墓の構築時期は加曽利2式～高井東式の段階であり、大部分は加曽利B2～B3段階に構築されたものである。また、埋葬区（群）単位で見た場合、C1群～F群では5～7基で埋葬区が構成されている。また、頭位方向が「双極型」であることと、これが性差に起因する可能性があることについてはすでに指摘したとおりである。この考えに立脚するならば、2人（男女）×3世代＝6基といった計算が成り立つ。すなわち、各埋葬区は3世代に渡る間に形成されたと推論することができる。また、埋葬区の数からみて、同時併存していた「世帯」数は5～7単位と推定されることができる。

次に、形態ごとの時期的変化について検討してみたい。埋葬区は原則として同一形態により構成されているので、埋葬区ごとの配石墓の変化をみることにより、形態変化を追うことができる。まず、B群においてⅡ形態を検討すると、第1段階（加曽利B2式）に比較的浅いS-40が構築され、第2段階（加曽利B3式）に深いS-6、第3段階（加曽利B3～高井東式）に構成礫が小振りのS-22の順である。この順序は配石墓構成礫の変化と、出土土器の両方からも検証することができる。特に、土器の量は比較的多いので、安定した時期決定を行うことが可能であった。

これを基軸に据えて単独で存在し、土器も排除されてしまったⅠ形態（A群：S-4）について検討すると、S-40と形態的特徴が類似することから、ほぼ同一時期（加曽利B2式）に構築されたと推測することができる。

また、Ⅲ形態（C群）では、第1段階（加曽利B2式）に構築されるものは比較的細長く、第2段階（加曽利B2～B3式）では幅広のしっかりしたものとなり、第3段階（加曽利B3～高井東式）になるとやや胴の張る形状に変化する。なお、Ⅳ形態（S-13）は本来Ⅲ形態であったと考えられるが、Ⅲ形態の変遷と整合性を有している。

V形態（D群）では細長いものが加曽利B2～B3式段階まで継続して構築されており、変化は認められないが、最終段階（加曽利B3式～高井東式）では、やや胴の張る形状へ変化する。

Ⅵ形態・Ⅵb形態については、形態変化については明確に示すことはできないが、最終段階（加曽利B3式～高井東式）では、やや胴の張る形状へ変化する可能性がある。

以上のように、配石墓は同一形態内でも、漸次形状が変化していることが確認された。そして、その変化は形態の枠を越えて同一時期にはそれぞれ対応する形状が存在することも認識することができる。これは、配石墓が型式を有している可能性を示すものとして留意される。

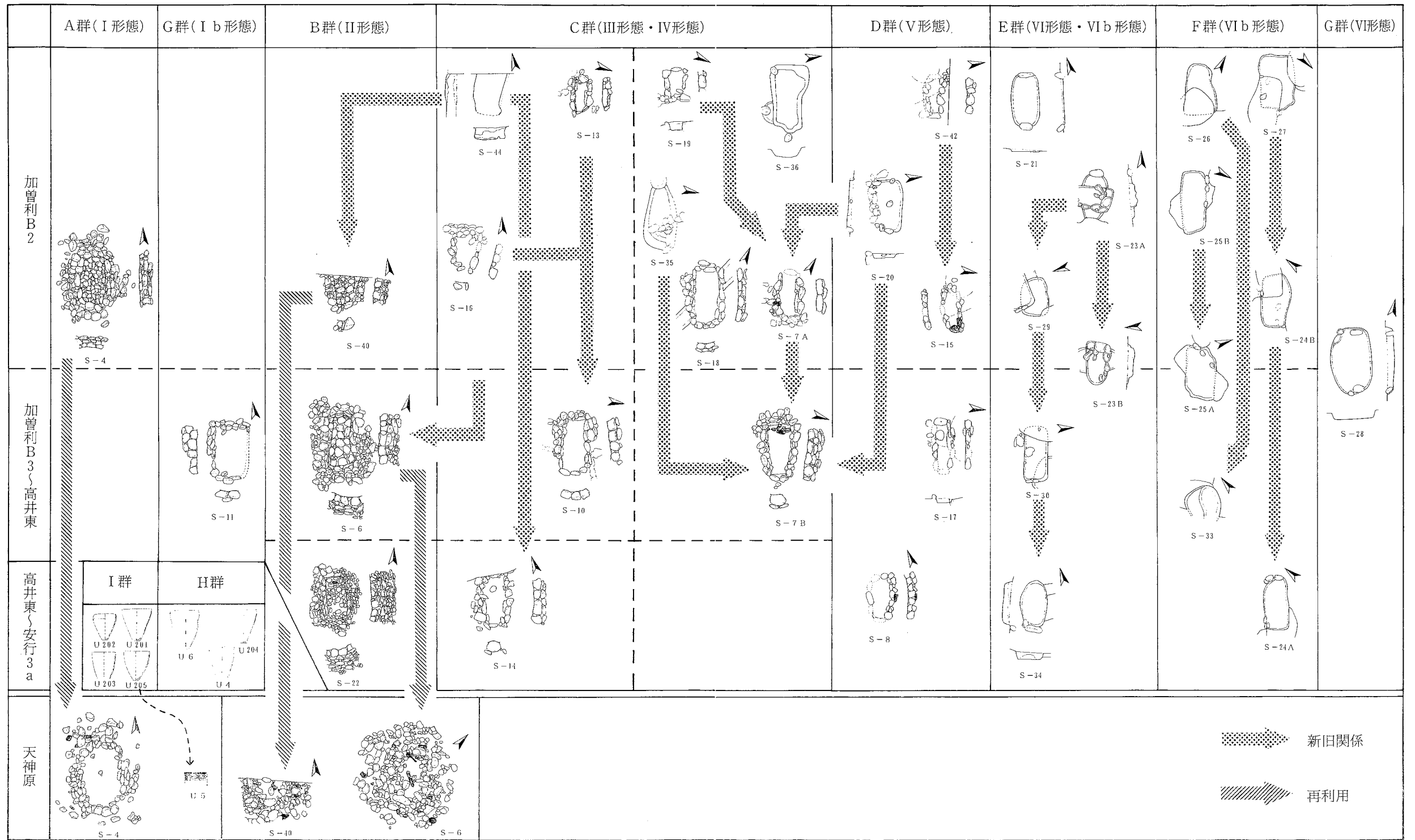
また、埋設土器群の形成は配石墓群の構築が終了した後に行われたと推定される。埋設土器群は3～4基から成る2群（I群・J群）によって構成されており、配石墓群と同様に同時併存し、質的差異により区分されていた可能性が高い。

（8）配石墓群の構造と社会の復元

配石墓はほぼ同じ形態ごとに埋葬区を構成し、各埋葬区がリアルタイムで形成されていったもので、同時併存していた「世帯」数は5～7単位であったことが明らかとなった。そして、配石墓群の形成は加曽利B2式から高井東式までの比較的短期間に行われたもので、3世代程度の時間幅を有してしたことが確認された。さらに、配石墓の形成当初から計画的に墓域として利用が開始され、終了もある種の規制により行われたことも推定された。その後の墓域は、調査区内では検出されていないが、配石墓群はその後も祭祀の場として利用され続けていることから、隣接地に墓域が新たに形成された可能性が高い。

I～Ⅵb形態の占有位置・頭位方向・同形態同士の重複関係などから、形態差は時間差ではなく、社会的要因により決定されていた可能性が高いことが明らかとなった。また、配石墓の配置からみた場合、形態別に埋葬区（群）が認められ、埋葬区がD-26号土坑を中心とした円弧上にはほぼ等間隔で配列している状態は、墓域の形成に強い社会規範が存在していたことを示している。

そして、こうした形態差や埋葬区が社会的要因により区別されたものであるならば、その差が何に起因するかが問題である。そこで、構築に要する仕事量の違いから、配石墓を形態ごとに比較してみたい。



第339図 配石墓の変遷

配石墓構築に要する石材調達に関わる仕事量の違いは非常に大きなものである。例えば、使用された礫数は、S-4 (I形態) 約200個、S-6 (II形態) 約200個、S-10 (III形態) 約40個、S-15 (V形態) 約20個、S-21 (VI形態) 2個であり、II形態ではVI形態の100倍の仕事量である。被葬者がそれぞれ1人であることを考えれば、被葬者間に非常に大きな格差が存在していた可能性が高い。(註3)

配石墓を構成する礫は、岩石学的特徴から碓氷川の河川礫と判断される(石器石材分析の項を参照)。そして、遺跡からの距離は約1.5km・比高約70mであり、礫は1個5~20kg程度であるので、仮に1個10kgとすると、II形態の配石墓1基を構築する礫を搬入するのに

$$(1,500\text{m} \times 10\text{kg} \times 9.8\text{m/S}^2 + 70\text{m} \times 10\text{kg} \times 9.8\text{m/S}^2) \times 200\text{個} = 30,772,000\text{ J}$$

$$\approx 7,327\text{Kcal}$$

のエネルギーが必要である。II形態では礫の搬入だけで、成人男子が12.2時間働いただけのエネルギーを要する。これをクリに換算すると、4.7kgに相当する。(註4)これに対し、VI形態はII形態の1/100であり配石墓構築に要するエネルギーの差は大きい。

また、配石墓の埋葬区と形態の関係について調べてみると、第40表のように示される。埋葬区と形態が組列を有していることが確認される。そして、形態別基数と仕事量の関係について検討してみると、大きな仕事量を要する形態ほど基数が少なく、仕事量が小さい形態ほど基数が多い。この状態はちょうどI形態を頂点とし、VI b形態を底辺としたピラミッド構造である。これは大きく分けてII形態(B群)、III~V形態(C群・D群)、VI・VI b形態(E群・F群)の3単位に大別される。(註5)

このように、埋葬区と形態の関係からみて、埋葬に際し社会的に弁別された埋葬単位が存在しており、この単位は等質のものではなく、きわめて不均衡な単位である。こうした埋葬単位を直

埋葬区 (群)	配石墓の形態								埋設 土器	計
	I	I b	II	III	IV	V	VI	VI b		
A	1									1
B			3							3
C 1				4(1)	1					5(1)
C 2				6(2)						6(2)
D						5				5
E							3	3		6
F								8		8
G							1			1
H		1								1
I									3	3
J									5	5
計	1	1	3	10(3)	1	5	4	11	8	44(3)

*ただし、()は礫が抜き取られていたもの

第40表 配石墓・埋設土器の小群と形態の関係

ちに社会階層として認識するには、検証すべき問題も多いが、本遺跡の埋葬状態を多角的に検討した限りにおいては、すでに縄文時代後期後半に階層化社会が成立していた可能性が高いことを指摘することができる。(註6)

(9) 配石墓の時空的分布について

本配石墓群とほぼ同形態の配石墓が検出されている遺跡としては、群馬県内では松井田町行田Ⅱ遺跡（山武考古学研究所1991）、月夜野町深沢遺跡（下条他1987）、子持村押出遺跡（石井1987）、榛東村下新井遺跡（新藤・小宮1988）、桐生市千網谷戸遺跡（増田・伊藤他1978）で検出されている。これらの遺跡の配石墓は加曾利B段階のものが多く、天神原遺跡のものとはほぼ同時に構築されたものとみられる。ただし、千網谷戸例は後期前半（堀之内2段階）であり、やや古い。

また、深沢遺跡・押出遺跡・下新井遺跡では大形配石墓（Ⅰ形態・Ⅰb形態類似）が数例検出されており、本遺跡と共通する。なお、押出遺跡では晩期に配石墓群の周囲が削平され、周堤帯が構築されていたことが確認されており、その後の変遷過程も非常に類似している。（註7）

全国的な配石墓の集成は、すでに鈴木保彦氏によって行われており（鈴木1980・1986）、その後の集成もある（山梨県考古学会1990）。その後も配石墓の検出例は増加している。そこで、こうした資料をもとに、本県周辺地域における、ほぼ同形態の配石墓を抜き出し、時期と形態について若干検討してみたい。

長野県では、石神（花岡1993）、茂沢南石堂（上野1983）、円光房（原田・森嶋1990）、岡ノ峰（檀原1985）、宮中（高橋1982）、宮崎（青木1988）、一津（島田1990）、中越（友野1983）などがある。これらの遺跡は東信地区から北信地区に多く、やや偏在している。時期的には加曾利B段階のものが大部分である。この地域の土器群は、晩期では異なるものの、後期を通じて本地域の土器群と極めて類似しており、ほぼ同じ土器型式圏に含まれるものと思われる。形態的には、岡ノ峰・宮崎の事例は礫床を有する本遺跡Ⅱ形態に類似するものが多い。また、円光房・石神・茂沢南石堂の事例はⅢ・Ⅴ形態に類似する。一津のものは本遺跡Ⅰb形態に類似する。

また、山梨県では青木（雨宮他1988）、尾咲原（都留市史編纂委員会1986）、金生（新津1989）、豆生田第三（櫛原1986）などがある。時期的には加曾利B段階が大部分である。この地域も、後期を通じて本地域とほぼ同じ土器型式圏に含まれるものと思われる。なお、形態的には金生の事例には、Ⅱ・Ⅴ形態類似のものが存在する。また、青木・尾咲原の事例は、本遺跡のⅢ・Ⅴ形態に分類されるものが大部分である。そして、豆生田第三の例は、Ⅵ形態に分類されるものである。

新潟県では、籠峰（室岡1984）、葎生（中川・岡本他1966）、奥の城（西峯）（室岡1982・岡本他1982）などの遺跡で検出されている。時期的には後期末～晩期中葉のものが多く、この時期は土器の地域性が明確になる時期であるが、この地域の土器群は北信地域の土器群と類似する。また、形態的には、細長く礫床を有する特徴的形態を有している。時期的にも形態的にも本遺跡

の事例とは異なるものである。

南関東では、東京都田端（浅川・戸田他1969）、同寺改戸（久保田1977、1986）、同西秋留（後藤1933）、同新堂（山崎他1984）、神奈川県下北原（鈴木他1978）、同金子台（赤星1974等）、同柵戸中原（赤星1974）、同山の上（大上1989）などの遺跡がある。なお、埼玉県の事例については把握していないが、今後検出されるものと思われる。時期的には、加曾利B段階のものが多いが、堀之内段階から継続する遺跡も認められる。この地域の土器群は、後期前半段階で、本地域の土器群と類似するが、後期後半（特に曾谷から後期安行式の段階）以降、明確な差異が認められる。形態的には、すべての遺跡でⅢ・Ⅳ・Ⅴ形態のいずれかに類似のものが検出されている。

以上のように、本県周辺地域の配石墓の特徴として、時期的に古いものは堀之内段階まで遡るが、大部分のものは加曾利B段階に集中している（註8）。ただし、新潟県の例はこれより新しい段階のものが中心であり、本県の事例とは異なる。土器型式から見ると、配石墓が特に多く認められる堀之内2式（註9）から加曾利B1式（註10）段階の配石墓の分布は、その土器型式の分布の広がりとはほぼ一致し、小形の土器を一個体埋納するという方法も近似している。その後の時期も、配石墓と土器型式の分布が共に縮小するものの、その分布はほぼ一致している。配石墓の形態は基本的には天神原遺跡で認められる各形態が存在する。しかし、構築材の入手条件等により、遺跡単位や、地域単位での個性も認められる。

次に、ほぼ同形態の配石墓が検出されている東北地方の事例について検討する。青森県花巻遺跡（鈴木1986）、同堀合1号遺跡（葛西・高橋1981）、同餅ノ沢遺跡（葛西他1981）、秋田県矢石館遺跡（奥山1954）、岩手県下村B遺跡（鈴木他1983）、宮城県根岸遺跡（阿部他1981）などの遺跡が知られている。これらの遺跡では後期前半期に構築されているものが多く（註11）、関東周辺地域より時期的に多少古い傾向がある。しかし、形態的にはⅢ・Ⅳ・Ⅴ形態に類似の事例が存在している。

東北地方と関東周辺地域の配石墓を比較すると、時期的に東北地方のものの方が一段階古い傾向があり、関東周辺地域の配石墓との関連性について指摘することができる。しかし、東北地方南部ではこうした形態の配石墓はほとんど検出されておらず、中抜き現象が生ずる要因については、判然としない。土器型式から見ると、東北南部は独自に土器型式が展開する地域であり、配石墓と土器型式の分布には相関関係が認められそうである。

なお、東北地方の配石墓について、山田昌久氏は「日本列島東北部の”縄紋時代後期”の石棺墓は、おそらく、中国東北部から沿海州の地より、”飛び石的な技術移転”によって、なんらかの機会に日本列島東北部に入り込んだ人々が残した墓制と考えられる。」（山田1990）との仮説を提示しており、こうした観点に立脚すれば、前述の中抜き現象の要因について、ある程度理解することが可能である。しかし、こうした文化伝播の形態を説明するためには、さらに多重的に

遺構・遺物論を展開する必要があり、方法論の構築も含め、慎重に考慮しなければならない。

以上、多角的な分析・検討を行ったことにより、天神原遺跡で検出された配石墓群の時空的位置について、ある程度把握することができた。こうした配石墓群が構築された後・晩期社会の時代的・社会的背景については、未だに不明な部分が多く残されており、今後調査事例の増加により、蓋然性から確実性へ徐々に接近することが可能となろう。

最後に配石墓群の調査に携わり、配石墓・配石遺構等の研究を行うためには、調査記録と、資料の質的向上が重要であることを痛感した。配石遺構の調査に携わる機会は、個々の調査担当者にとって希有な経験であることが多く、経験を蓄積することの難しい調査対象である。したがって、配石遺構の調査に遭遇した場合、ある種の心構えと、調査マニュアルの整備が必要である。

(大工原 豊・林 克彦)

註

(1) 埋葬単位については、林謙作氏により「墓域が、いわばのっぺらぼうな広がりではなく、あらかじめ何らかの原則、もしくは計画にもとづいて設定された区画の集合体である」とし、「この構成単位(=かたまり)を埋葬区(=群)と呼ぶ。」と定義されており、「5～15体前後の遺体で構成される埋葬区を基礎単位とする墓域」の成立を関東では後期中葉としている(林1977b)。本遺跡の配石墓群もこれに含まれることから、この定義にしたがい、埋葬区(=群)と呼称することにする。

(2) このように配石墓群の中心に位置する土坑は、深沢遺跡(月夜野町)においても検出されており「中心土坑」と呼称されている。

(3) 渡辺仁氏は「墓制の分化(複雑化)度を比較分析し、それがいかなる進化的(歴史的)意味あるいは機能的(社会的)意味をもつかを確かめることである。」とし、縄文人の墓の体系的分類表を提示し、6タイプ(グレイドgrade)の分類を行っている(渡辺1990)。本遺跡の配石墓群は、地上部:配石墓・方形乃至環状、地下部:石棺墓の分類(4等級:上位から3番目)に相当する。また、アメリカ大陸の北洋沿岸狩猟採集民の階層化社会の例により、「動員力power of mobilizationの大きさに個人の威信をかけるような考え方(価値観)は、農耕化(新石器時代)以降の社会のものといえる。」もので、労働力の差よりも「上層者(富者)の威信は、専ら最高の美術品・奢侈品類の獲得にかかっているのが特徴的様相である。縄文人の社会はそのような特徴的様相を示しているといえよう。」とも述べており(渡辺1990)、本遺跡の配石墓の労働力の差のみでは、直ちに階層化社会の根拠とはなり得ないかもしれない。しかし、100倍以上の労働力の違いは積極的に評価すべき機能的(社会的)意味を有していると考えられる。

(4) 生活活動強度IV(重い)・男19歳で、激しいトレーニング・木材の運搬・農繁期の濃厚作業などのような重い筋作業に従事している場合で、1時間のエネルギー600Kcalとして換算した。また、クリ(現生種)可食部分100gあたり156Kcalとして換算した。(菅原明子1991『食物成分表ハンドブック』池田書店)

(5) I形態・Ib形態については、すでに述べたように他の配石墓とは別の社会規制により配置されている可能性が高

いので、ここでは除外した。

(6) 林謙作氏は「生前に行われた抜歯の方式と、死亡時の頭位方向規制とが対応すると言う事実は、頭位方向の区分が、死者の生前における広義の social status を反映していると解すべきであろう。」(林1977b)との指摘を行っている。また、小林達雄氏は耳飾・貝製腕輪といった装身具の在り方から、すでに縄文時代前期以降の社会での身分階層を推定している(小林1988)。そして、渡辺仁氏も土俗考古学的・構造的アプローチにより、「縄文式階層化社会」を提唱している(渡辺1990)。筆者も前期後半期の大集落である中野谷松原遺跡の土壌墓群の調査所見から、何らかの階層差の存在を推定した(大工原1993)が、ここで扱う後・晩期における階層化状態とは、質的相違があると考えている。

(7) 調査担当の石井克己氏のご教示による。なお、栃木県寺野東遺跡において検出された周堤帯の内部には配石遺構の存在が確認されており、遺跡の存続時期や変遷過程は、本遺跡や押出遺跡と類似している。こうした状況からみて、内部の配石遺構は配石墓群の可能性も考えられよう。

(8) 配石墓の構築時期に関しては、覆土中から時期の決定できるような遺物が出土することが少なく、多くは周辺から出土した遺物の状況から推定されたものである。したがって、幾つかの配石墓では、その時期に関して再検討が必要なものもある。

(9) 堀之内2式では、いくつかの地域性が指摘されている(阿部1993)。この段階の配石墓が分布する地域は、阿部氏の指摘した北信地域の地域性(分布)にほぼ匹敵すると思われる。

(10) 加曾利B式(特にその前半)は極めて広域的に分布する土器型式だと言われているが、地域性もまた存在する。この地域性について、東部関東地域についてはいくつかの分析があるが、加曾利B式全般に亘っての地域性の指摘はない。恐らく、前段階の地域性を踏襲した地域性が存在すると思われ、配石墓の分布も、この地域性のいくつかに対応するものと思われる。

(11) ここで指摘した配石墓の中には、晩期のものと推定されたものが幾つかあるが、後期後半のものがほとんど確認されておらず、後期前半から連続しない。

3. 天神原遺跡の縄文後・晩期の土器群について

(1) 後期の土器群について

天神原遺跡では、後期の土器が後期全般にわたって出土しているが、これらの土器群は集落が形成される後期前半、配石墓が形成される後期後半、土器のバラエティが増加する後期終末の時期に大きく3分される。

後期前半の土器は称名寺式・堀之内式土器がまとまって検出されている。住居址からは良好なまとまりをもって検出されたものはほとんどないが、J-9号住居址からは称名寺2式の深鉢形土器と群馬県域に特徴的な隆帯を持つ深鉢形土器が炉体土器と埋設土器として検出されており、注目される。本地域の称名寺式土器については、近年、その地域性が明らかにされつつあるが(石坂他1991)、それを受けて展開する本地域における堀之内式土器の研究は極めて少ない。本遺跡では「下北原式」類似の土器が多数検出されており、その成立と展開について今後検討していかなければならない。また、本遺跡ではこの時期のものと思われる土製腕輪が多数検出されており、この土製腕輪の検討も今後必要であろう。

後期後半の時期は、配石墓が形成された時期として重要な時期であるが、大半の土器は包含層から出土したものであり、配石墓からは混在したものと思われるものが少量検出されたにすぎない。本遺跡の土器群が祭祀的な状況(器種の偏在、土器自体の特殊性等)を持っているか否かは、他の集落址出土の土器群との比較検討を行う必要がある。また、加曾利B式は広域的と言われているが、本地域ではこの土器群に対する研究は少なく、その様相は必ずしも明らかではない。しかし、粗製土器は南関東とは異なる部分があり、精製土器も加曾利B3式の時期には地域性が顕在化してきていると考えられる。今後加曾利B式の地域性の問題も検討してゆく必要がある。

後期終末の時期は新地式や曾谷式・安行式を客体として、高井東式が主体的に検出された。高井東式は近年認識されてきた型式であり、その型式内容も明確になっているとはいいたい。特に、本地域ではこの土器群の既出の事例報告が少なく、本遺跡の資料は重要な位置を占めると考えられる。本遺跡では、今回報告しなかったE区で高井東式が多数検出されており、この報告を待って、本地域の後期終末の土器群の様相について検討していきたい。

(2) 「天神原式」土器について

天神原遺跡では晩期の土器群が多量出土しているが、この中で特に安行3b・3c式期の地域性を持つ土器群として、晩期Ⅱ群土器に分類した土器群が注意された。この土器群は「精粗中間形態」(藪田1972)とも言うべき粗雑なものが多く、器種は深鉢形土器がほとんどで、浅鉢・壺

形土器は少ない。地文は縄文が施されるものも存在するが、特徴的なものは無造作な刺突・列点を持つ土器群であり、縄文部を置換するかのように刺突・列点が施されている。地文は無文となるものが多いが、これらは簡単なナデ調整を施したのみのものが多い。これらの土器には貼付文を持つものが多いが、この中には月夜野町の矢瀬遺跡で注目された「四隅袖付炉」（三宅1993）に見られる、「目」・「日」字状配石と類似する貼付文を持つものも存在する。

安行3 b式並行期では胴部に文様帯を持つが、安行3 c式並行期になると、文様は口頸部に限られるようになる。文様は安行式の系統を引くものであり、安行3 b式並行期では従来の安行3 b式あるいは鈴木正博氏の言う「板倉沼式」（鈴木他1982）と区別をすることが難しいものも多いが、安行3 c式並行期では、差異が明瞭となり安行3 c式とは明確に区別される。

この土器群に伴う粗製土器は晩期Ⅴ群土器として分類した土器群で、有段口縁となるものや口唇部に刺突・刻み・押圧を施したものが認められる。これらの土器群は安行式に伴う紐線文系の粗製土器とは異なるもので、器面は粗い調整を施しただけのものが多く、丁寧に磨きかけたものはほとんど認められない。また、輪積み痕を残したものも多い。この中では1類とした有段口縁を持つものが、強い地域性を持つ土器群として指摘することが出来る。

これら晩期Ⅱ・Ⅴ群（特に1類）土器に類似する土器群は群馬県、埼玉県北部、栃木県南部で認められるほか、長野県、山梨県、埼玉県南部、東京都等でもわずかながら認められる。時間的には、本遺跡で相伴している土器や他遺跡の相伴事例から、安行3 b式・3 c式に並行すると考えられるが、増田修氏は大洞C₂式の古い段階までこれらの土器群が伴うことを指摘している（増田他1980）。本遺跡でも大洞C₂式初頭と思われる土器や佐野Ⅱ式が検出されていることから、これらの土器群は大洞C₂式初頭の段階まで続く可能性がある。また、安行3 b式並行期については、本遺跡の他、大洞B・C₁式を欠く遺跡の多いことから、安行3 b式以降の可能性もある。

これらの土器群は、かつて藪田芳雄氏が提唱した「須永式」（藪田1972）の一部であると考えられるが、「須永式」の型式内容は明確ではなく、その型式内容中には誤認も認められる（増田1980）。また、鷹野光行氏が示した「安行3 c式北部型」（鷹野1990）は本遺跡で示した晩期Ⅱ群土器の一部であると考えられ、晩期Ⅱ群土器を全体的に含んだものではない。従って、本遺跡の晩期Ⅱ・Ⅴ群土器に対してこれらの名称を用いることは適当でないと考えられる。

これらの土器群は一定の地理的な広がりを持ち、一定の時間幅を持つことから型式と認定する必要があると考え、また、本遺跡ではこれらの土器群がまとまって見られることから、これらの土器群を「天神原式」と呼称した。

「天神原式」は一部に大洞式の系統と見られる土器群を含むが、主体となるものは安行式の系統を引くものであり、「板倉沼式」・「小深作式」（鈴木他1982）、「裏慈恩寺式」（鈴木他1983）、「姥山Ⅱ・Ⅲ式」（鈴木1963 a・1964 b）とともに広義の「安行式」（小林達雄氏の言う

「晩期安行様式」（小林1989他）にほぼ相当する）を形成する「型式」であると考えられる。型式には、そのまとまりによって数段階の階梯があると考えられ、ここでは広義の「安行式」を、「天神原式」を包括する上位の型式と考える立場から、広義「安行式」を「天神原式」の「上位型式」と考え、「天神原式」を広義「安行式」の「下位型式」と考えることにしたい。この「天神原式」はさらに幾つかの小さなまとまり(註)を有すると考えられ(藪田1961)、「天神原式」はこういった型式の幾つかの階梯の一段階を示すものであると考えられる。

また、「天神原式」の前後の時期にも「天神原式」と同等な「型式」が本地域に存在していたと考えられるが、今のところ、明確にこれを識別することはできない。今後の資料の蓄積を待つて、再検討する必要があると思われる。

これら型式の各段階は、それぞれ有意のまとまりであると考えられる。この「天神原式」それ自体の意味、あるいは広義「安行式」の中で捉えられる社会的な意味が、今後解明されていかなければならないと考えられる。

(註) このまとまりに対し「型式」、「系列」、「類型」、「地域性」等の用語が考えられるが、曖昧に認識されている場合が多く、明確に認識されていても用語が用いられていなかったり、用語の統一を見していない場合が多い。

(3) 縄文晩期の土器の組成について

天神原遺跡では縄文中期から晩期にかけての土器が出土しているが、縄文時代晩期の土器の器種組成は、次の弥生時代への生活の変化を考える上で重要な位置を占めている(小林1992)。また、同時期における系統の異なる土器群の存在は、各系統の土器群が異なった性格を有していた可能性を示しており、この点においても、各系統の器種組成は重要な位置を占めている。天神原遺跡では遺跡全域を発掘してはいないものの、縄文晩期の各系統の土器(在地系、東北系、中部・北陸系)がまとまって出土しており、本地域の器種組成、各系統の器種組成を十分に示し得ると考えられる。そこで、次のような条件で器種分類を行い、器種の組成を求めた。なお、「3大別器種」の分類は小林(1992)の分類に準じた。

まず、客観性を持たせるため数値化する土器片は口縁部片に限り、同一個体は合わせて1個体とした。器種は「3大別器種」(煮沸用の深鉢・貯蔵用の壺・盛りつけ用の浅鉢)を基本に分類し、深鉢に限り有文土器(精製・半精製)と無文粗製土器に分類した(佐原1979)。また、何れにも属さない注口土器と香炉形土器は別に分類し、器形不明の土器も含めてつごう7分類した。

系統の分類は型式学的検討によって分類し、在地系(天神原式、晩期安行式)、東北系(大洞式)、中部・北陸系(佐野式、中屋式等)に3分類した。ただし、これらの分類中には若干時期の異なる土器が含まれている可能性があり、特に中部・北陸系の土器は時期的な細分が出来な

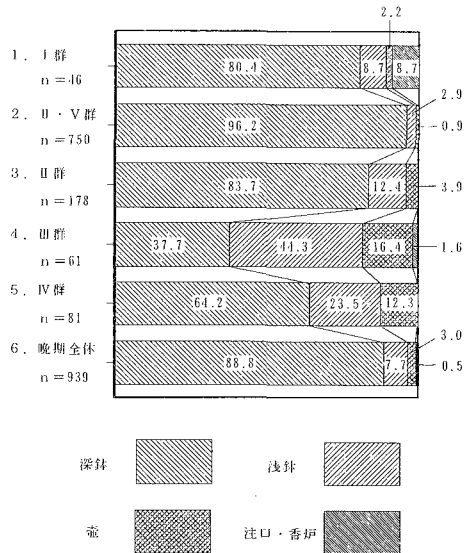
ったため、時間的にやや幅のあるものとなっている。このため各分類は同時性という点で完全ではなく、厳密な比較は困難であるが、おおまかな傾向は捉え得ると考えられる。また、無文粗製土器については、明確に晩期のもと考えられるものしか数値化しなかったが、数値化しなかったものの中にも晩期の土器が多数含まれていることは明らかで、無文粗製深鉢の割合はより高いものとして考えなければならない。

以上のことを踏まえながら各系統の器種組成を見ると、第340図1～6のようになった。1は晩期初頭の土器の器種組成で、本文中の晩期I群土器である。後期終末では土器の無文化が顕著となり、

それに続く晩期初頭も無文の粗製土器がかなりの割合を占めたと考えられる。しかし、現時点では後期終末の無文粗製土器との区別は明瞭ではなく、明確にこの時期に位置付けられる無文粗製土器を検出することは困難である。従って、1は無文粗製土器を除く有文の精製土器のみの器種組成となる。各器種の割合を見ると深鉢が最も多く(80.4%)、次いで浅鉢(8.7%)、注口土器(8.7%)が多い。また、壺形土器も少量見られるが、割合としては極めて少ない(2.2%)。この組成の特徴は、次の時期に比べて注口土器が比較的多く、壺形土器が少ないことである。この注口土器・壺形土器の割合は後期終末の割合にかなり近いものではないかと思われる。

2は晩期前半の在地系土器(晩期II・V群土器)の器種組成である。この段階になると明確に晩期と解る無文粗製土器が現れる。すなわち晩期V群土器である。器種組成を見ると無文粗製深鉢が圧倒的に多く、全体の76.3%を占め、有文の深鉢と合わせると実に96.2%の割合を占めている。これに次ぐのが浅鉢であるが(2.9%)、壺(0.9%)と合わせても3.8%しかない。晩期I群土器や次に示す晩期III・IV群土器では、その群に伴う粗製土器が明瞭ではないので、精製土器のみの数値を示しているが、これらと比較基準を同じにするために、在地系土器の精製土器のみの数値を示すと、深鉢83.7%、浅鉢12.4%、壺3.9%となり、深鉢と浅鉢の割合は晩期I群土器の割合に比較的近いものとなった(3)。

4は晩期前半の東北系土器(晩期III群土器)の器種組成であるが、この群に含まれる粗製土器は明瞭ではないので、精製土器のみの数値を示した。最も多い器種は浅鉢で(44.3%)、次いで深鉢(37.7%)、壺(16.4%)の順に多いが、他に香炉形土器が一個体ある(1.6%)。この群の特徴は、浅鉢形土器の割合が非常に高いことで、壺形土器も他の群に比べ高い数値を示している



第340図 晩期土器の器種組成

が、注口土器は見られない。

5は晩期初頭を含む晩期前半の中部・北陸系土器（晩期Ⅳ群土器）の器種組成であるが、この群でも、伴う粗製土器は明瞭ではないので、精製土器のみの数値を示した。器種は深鉢が最も多く（64.2%）、次いで浅鉢（23.5%）、壺（12.3%）の順に多いが、注口土器は見られない。この群の器種組成のあり方はⅡ・Ⅴ群土器とⅢ群土器の器種組成の中間的な様相を示している。

これらにⅥ類土器の1個体を加えて、晩期の器種組成として見たのが6である。深鉢が最も多く88.8%を占め、次いで浅鉢（7.7%）、壺（3.0%）、注口・香炉（0.5%）の順に高い数値を示している。

以上、本遺跡の晩期縄文土器の器種組成を見てきたが、晩期全体で見た場合の器種組成は深鉢が大多数を占め、浅鉢・壺が少数存在するという同時期の関東地方の器種組成（金子1981）、あるいは東北地方の器種組成（小林1992）と比べて、それほど差は見られない。このことはⅠ、Ⅱ群土器（Ⅴ群土器を含むと含まざるとに係わらず）の器種組成についても同様である。Ⅳ群土器の器種組成については比較する資料がないので、中部・北陸地方の器種組成と比べてどの程度の差異があるのか解らないが、浅鉢や壺の比率は本遺跡の方が高いのではないかと思われる。Ⅲ群土器については、比較できる器種組成が多数の遺跡で報告されており（小林1992）、本遺跡の器種組成と比較することが出来るが、東北地方の器種組成では深鉢が8割前後の高い比率を示すのに対し、本遺跡では浅鉢が約4割を占め最も高い比率を示している。このことは本遺跡における大洞系土器群の機能が、東北地方の土器群の機能とは異なっていることを示していると考えられる。しかし、共伴する土器が少ないという資料的な制約からか、関東地方の縄文晩期の遺跡における大洞系土器群の器種組成及びその機能についての研究はほとんどない（この研究の例として鈴木1963b・1964a）。

本遺跡では、在地系土器に対する他系統の土器群の割合が比較的高いと思われるが、この比率の高さは地理的な条件によるものであると考えられる。しかし、大洞式土器について見れば、地理的に離れた場所でも、多くの土器を出土する特別な遺跡があり、本遺跡がそれらの遺跡の性格を全く有していなかったとは言い切れない。また、本遺跡の大洞式土器群の場合、前述のように、器種の比率が分布の中心地域とは異なり、器種が選択されて存在することは明らかで、単なる地理的な条件による流入と考えるのは困難である。何れにしろ、本遺跡ではそれら他系統の土器を含めた器種組成が、本遺跡の実際的な器種組成であり、そこには関東・東北地方を含めた他遺跡の器種組成と比較して、特異な様相を見いだすことは出来ない。器種組成の異なる他地域の系統の土器が多数存在するにも関わらず、全体として見れば、その器種組成は他の遺跡とそれほど変わらないという状況は「天神原式」が主体的に分布する地域で特に普遍的に見られる様相であると考えられる。つまり、「天神原式」はそれのみで一つの遺跡の器種の全てを賄うことはなく、

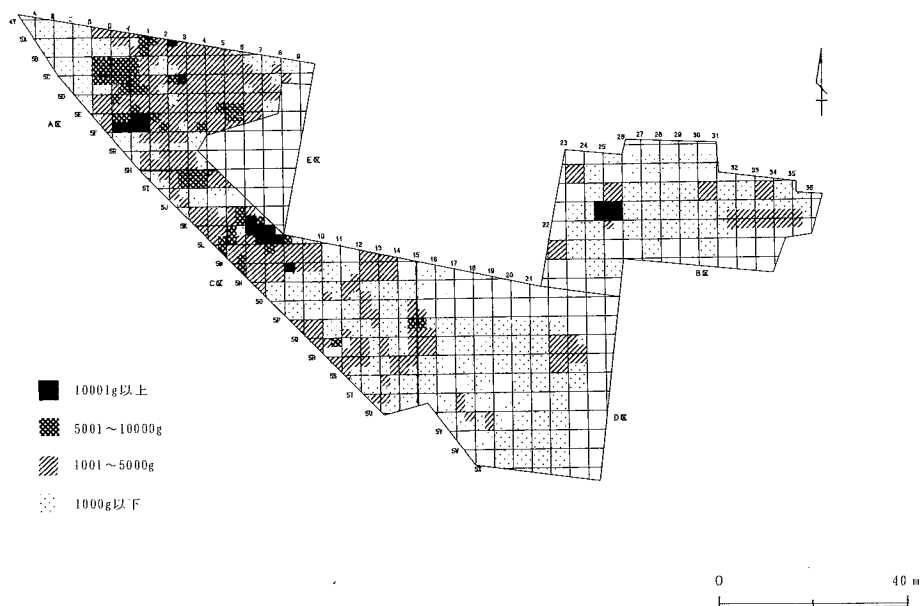
他系統の土器を相当数伴って東日本的な器種組成を形成していると考えられるのである。この点に関しては、「天神原式」あるいは他系統の土器群の機能及びその移動の実体が明らかにされねばならないと考えているが、このことを現時点で明確にすることは出来ない。

(4) 天神原遺跡の重量分布と使用量の推定

重量分布 天神原遺跡では総数約93,000片、総重量約1.7t（1片の平均重量は18.7g）の縄文土器が出土しているが、これらの土器の遺跡内での重量分布を見たのが第341図である。この図を見るとA区からC区北半にかけて特に濃厚に分布しているのが解る。この部分は前期から晩期にかけての土器が出土した部分であるが、特に後・晩期の土器が多量出土している。一方、B区からD区にかけては前期から後期前半の土器は多量出土しているものの、後期後半以降の土器はほとんど出土しておらず、重量分布はやや希薄に見える。天神原遺跡での重量分布の濃淡は、こうした遺跡利用の継続時間の長短によるものとも考えられるが、各時期の土器の比率はそれぞれの区ごとにより異なっているので、一概にそうとも判断できない。以下、各区ごとにその様相について述べることにする。

A区では約36,000片、約720kg（1片の平均重量は19.7g）の縄文土器が出土している。時期の解る土器の割合から、後期後半から晩期の土器が約8割を占めると考えられる。重量の分布を見ると、M 1号溝周辺で特に高い数値を示し、この部分より東側は調査部分の端まで比較的高い数値を示すが、西側ではかなり低い数値となっている。数値の高い部分は後期後半の土器群が多量に出土した部分であり、その中でも特に高い数値を示す部分は、晩期の土器群も多量出土している部分である。遺構を見ると、後期のD 35号土坑、晩期のS 2号石棒祭祀遺構やS 5号祭壇状遺構で土器が多量出土しているが、配石墓からの土器の出土はほとんど見られない。全体的に見て、土器は遺構よりも包含層から多量出土している。これは後期以降、普遍的に見られる土器塚と呼ばれる出土状況であり、継続的な廃棄行為の結果と考えられている。

C区では約36,000片、約640kg（1片の平均重量は18.0g）の縄文土器が出土している。時期の解る土器の割合から、後期後半から後期末にかけての土器群が5割強を占め、中期から後期前半の土器群が3割強占めていると考えられる。重量分布を見ると、縄文時代の住居址が存在する部分に特に濃厚に分布している。これらの住居址は全て後期前半期のものであるが、中期から後期後半までの土器が多量出土している。これは住居が廃絶された後、後期後半にかけて廃棄行為が行われた結果であると考えられるが、中期の土器も多量に出土していることから、使用直後に廃棄された土器の他に、周辺に散乱していた土器も同時に廃棄された可能性が高い。A区では、包含層から検出された土器の量が圧倒的であったのに比べ、この区では遺構部分の方が土器の出土頻度が高いと言える。これは、後・晩期の遺構では、深く掘り込まれたものがほとんどないこ



第341図 縄文土器重量分布図

とが一因であると考えられる。

D区では約6,500片、約110kg（1片の平均重量は16.9g）の縄文土器が出土している。時期の解る土器の割合から、前期の土器群が約6割を占め、次いで後期前半の土器が2割強を占めていると考えられる。前期の土器群の大半はJ-2号住居址から、後期前半の土器群の大半はJ-4号住居址から出土している。これらの土器群はC区のものと同じく、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。D区東側では遺物の分布はほとんど見られないが、これは後世の攪乱によるものであり、攪乱を受ける前はこの部分にも遺物が包含されていたと考えられる。この区も包含層より遺構部分の方が土器の出土頻度が高いと言える。

B区では約14,000片、約270kg（1片の平均重量は18.8g）の縄文土器が出土している。時期の解る土器の割合から、前期の土器群が約9割を占めていると考えられるが、その半数近くはJ-1号住居址から出土している。この土器群も住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。この区も包含層より遺構部分の方が土器の出土頻度が高いと言える。

使用量の推定 A区では後期から晩期にかけての土器が多量出土している。後・晩期の土器については精製土器の他に粗製土器が多量存在することが知られているが、ここで、A区における精製土器と粗製土器の重量組成について見てみたい。A区では明らかに精製土器と思われるものが約190kg、無文・有文の粗製土器と思われるものが約520kg出土している。この数値は後期から晩期のものを含んでおり、時間的に幅のあるものとなっているが、それは無文粗製土器では後期のもものと晩期のもものを厳密に区分することが難しいため、精製土器も後期と晩期のもものを区別せずに比較の対象としたためである。また、晩期の土器については精製土器に分類した土器の中にも粗雑な土器が多く存在しているが、これらの土器の文様部は器高上半に限られ、胴部以下は無文で簡単なナデ調整のみのものが多い。この部分の破片は精製と粗製の区別が出来ないため、粗製土器に分類されたものが極めて多いものと思われる。したがって、ここで示した精製土器と粗製土器の比率は、実際よりやや高いものになっていると考えられる。この重量組成で見た場合、粗製土器の重量は精製土器の約2.7倍であるが、晩期の土器の口縁部片で見た場合（第240図に示した粗製のV群土器とその他の群の土器個体数を比較した）、無文粗製土器の破片数は精製土器の約1.5倍である。先述の事情や、粗製土器1個の重量は精製土器1個の重量より重いことを考えれば、本遺跡の精製土器に対する粗製土器の数量（個体数）は2倍前後ではないかと考えられる。

次に、先に示した重量が何個体分の土器の重量なのか推定してみたい。A区では約720kgの土器が出土しているが、このうち無文粗製土器は約490kgである。A区では、恐らく後期末から晩期初頭のものと考えられる無文粗製土器が埋設土器として利用されており、この中で遺存状態が比較的良好的なU・6・201・202・204・205号埋設土器の重量を見てみると、約5kg（U-202）から約10kg（U・6）であり、その平均重量は約6.5kgであった。この数値をもとにA区における無文粗製土器の重量を見ると、約75個体分であった。一方、無文粗製土器の口縁部破片数（接合作業後）を見ると1888片（個体数）出土しているが、この数値に同一個体の破片数が多く含まれていたとしても、重量から見た数値とはその差が著しい。ちなみに、この破片数で粗製土器の重量を割ると約260g（A区の土器片約13片分）になる。それは第196図3に示した小形の無文深鉢形土器の重量（457g）にも満たないが、それらの破片を見る限り、この土器よりも小形になる土器の破片と考えられるものは極めて少なく、ほとんどのものは埋設土器群の大きさの中に収まるのではないかとと思われる。重量から見た個体数と破片数から見た個体数の差は、一つには、おそらく廃棄時における土器の完形率が低かったためと考えられるが、今のところそれを明確にすることは出来ない。また、後の攪乱等による土器片の拡散もあったと考えられるが、拡散の方向や拡散の度合いを示すような状況（例えば接合関係）を明確にすることは出来なかった。

なお、A区の精製土器については、完形あるいは完形に近いものはほとんどなく、また、器種の多様性を考えると1個体の平均重量を導き出すことは極めて難しく、粗製土器に対して行った

ような作業をすることは出来なかった。仮に埋設土器の中で一番低い数値だったD・202（約5kg）の数値をもとにすると、A区の精製土器の重量は約38個体分であり、第196図3の土器（457g）をもとにすると、約418個体分である。

本遺跡ではB区とD区に前期の諸磯期の住居址が2軒検出されている。J・1号住居址では約146kg、J・2号住居址では約30kgの土器が出土している。本遺跡から東南東約1.5kmの同じ横野台地上には、同時期の集落址である大下原遺跡が存在しており、住居址から検出された土器の重量から、その住居址に廃棄された土器の個体数およびセット数の推定がなされている（大工原他1993）。本遺跡の住居址からは完形になる土器は出土しておらず、土器の器種組成の検討も十分行うことは出来なかったため、ここでは既に大下原遺跡の報告で示されている数値をもとに、本住居址に廃棄された土器の個体数、セット数を推定してみたい。

大下原遺跡の報告では、諸磯期における土器の形態をA・B・C・Dの4形態に分類し、その中のC形態の土器（780g）をもとに、住居址に廃棄された土器の個体数を推定している。また、各形態の土器の出土頻度から、5個体あたりの推定個体数を $1.7 \cdot 0.6 \cdot 1.9 \cdot 0.8$ と導き出している。ここでは1世帯の保有する土器の個体数を5個体と仮定しており、その総重量は約20kgと推定している。

この数値をもとにするとJ・1号住居址では187.1個体、7.2セット分の土器が出土していると推定され、また、J・2号住居址では38.2個体、1.5セット分の土器が出土していると推定される。大下原遺跡では、1軒の住居址から5～104個体、0.2～4セット分の土器が出土していることを考えれば、J・2号住居址はこの範囲に収まるが、J・1号住居址の出土量はこれを越える数値となっている。これはJ・1号住居址に、さらにD・1号土坑が掘り込まれたために、土器の廃棄量が増えたとも考えられる。本住居址は隣接する中野谷松原遺跡の外縁にあたるものと考えられ、中野谷松原遺跡の様相が明らかにされた段階で再検討されねばならないであろう。

このような、土器量から見た個体数・セット数の復元によって、遺跡を形成した人数あるいは世帯数、遺跡の継続年数などがある程度推定することが可能になると思われる。今のところ、この分析は必ずしも厳密ではないが、分析の良好なモデルとなるようなものが発掘されれば、遺跡の分析に対して極めて有効な手段になると考えられる。

（林 克彦）

4 縄文時代の打製石器の製作について

中野谷地区遺跡群では、縄文時代早期から晩期にかけての縄文時代の集落遺跡が検出され、土器と共に多量の石器が検出されている。これらの各遺跡の石器群の特徴については、遺跡各説で述べている。ここでは、石器製作の観点から、縄文時代の石器群の特徴について、若干整理しておくことにする。

(1) 前期前半の打製石器の製作について

a 前期前半のA類石器

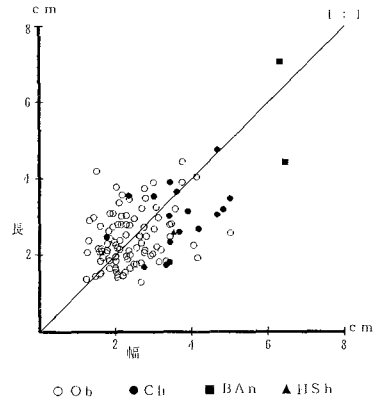
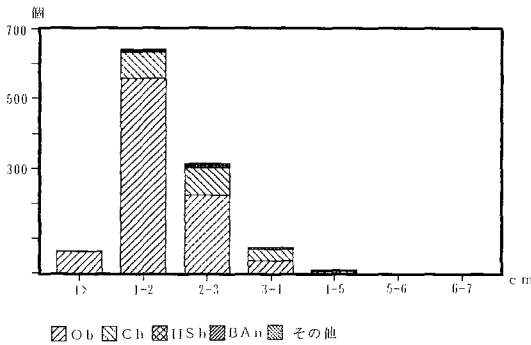
この時期のA類石器には、石鏃、石錐、石匙A類、スクレイパーA類、リタッチド・フレイクA類等が存在する。このうち、明確な範型を有している（主体的な型式を有する）器種としては、石鏃と石匙A類がある。この時期の石鏃については、第259図（p.38）のように、中原遺跡では凹基無茎鏃のうちI a～I c形態及びI e形態が範型として認識されていたことが推定される。また、石匙A類でも、比較的明確な範型の存在がうかがえる。このうち、石鏃は数量的にも安定して存在しており、A類石器の中では、主要な器種であることが解る。

また、A類石器の石材では、第251図（p.28）の石材組成図に示されるとおり、石材1類の黒曜石が圧倒的に多い。チャートもやや多いが、黒曜石には及ばない。（註1）

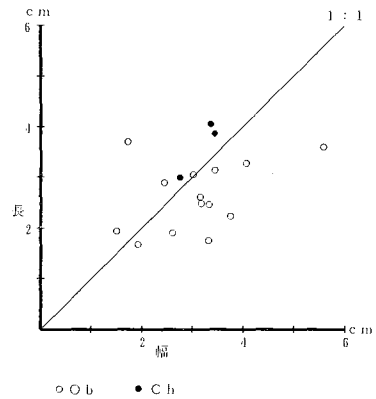
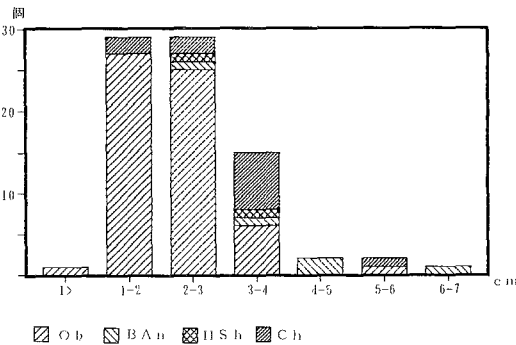
次に、各器種の大きさについて比較してみよう。石鏃は長さ1～3cm・幅1～2cmであり、これを製作するためには、これより多少大きな剥片を素材としている。石鏃の素材剥片の大きさを推定するために、スクレイパーA類、リタッチド・フレイクA類の大きさについてみると、第261図（p.41）のように、1～4cmの大きさの長幅比1：1程度のものが大部分であることが解る。したがって、石鏃よりもスクレイパーA類等の方が、大きさにバラつきのある剥片が用いられている。

また、中原遺跡・東畑遺跡の石核A類の大きさと、剥片A類の大きさについてのヒストグラムを示したものが第342図である。（註2）石核A類では2～4cm程度の長幅比1：1程度のものが大部分であり、A類石器の素材剥片の大きさは、最小でも2cm程度のものであったことが解る。

そして、剥片A類についてみると、1～2cmの大きさのものが最も多い。これら1～2cmの剥片から製作されたと推定される石器は非常に少ないことから、一次剥離のみで放棄された剥片が大部分であると推察される。また、素材剥片となり得る2～3cmの剥片が少ないのは、すでに石器に加工されてしまったか、あるいは消費されてしまったものが多数存在する可能性が高い。ちなみに、中原遺跡で検出されたA類石器は300点弱であり、遺跡外で消費したのものも含めれば、さ



中原遺跡



東畑遺跡

第342図 前期前半の剥片A類・石核A類の大きさ

らに多くの石器の素材となり得る剥片が作出されていたものと推定される。

以上のように、A類石器の大きさと、石核A類・剥片A類の大きさから、素材剥片の大きさについて推定すると、2～3cmまたは3～4cmの階級の剥片のうち、形状の整ったものとみられる。なお、石鏃の大きさから推定された素材剥片の大きさは、長さ3～4cm・幅2～3cm程度の幅広剥片である。

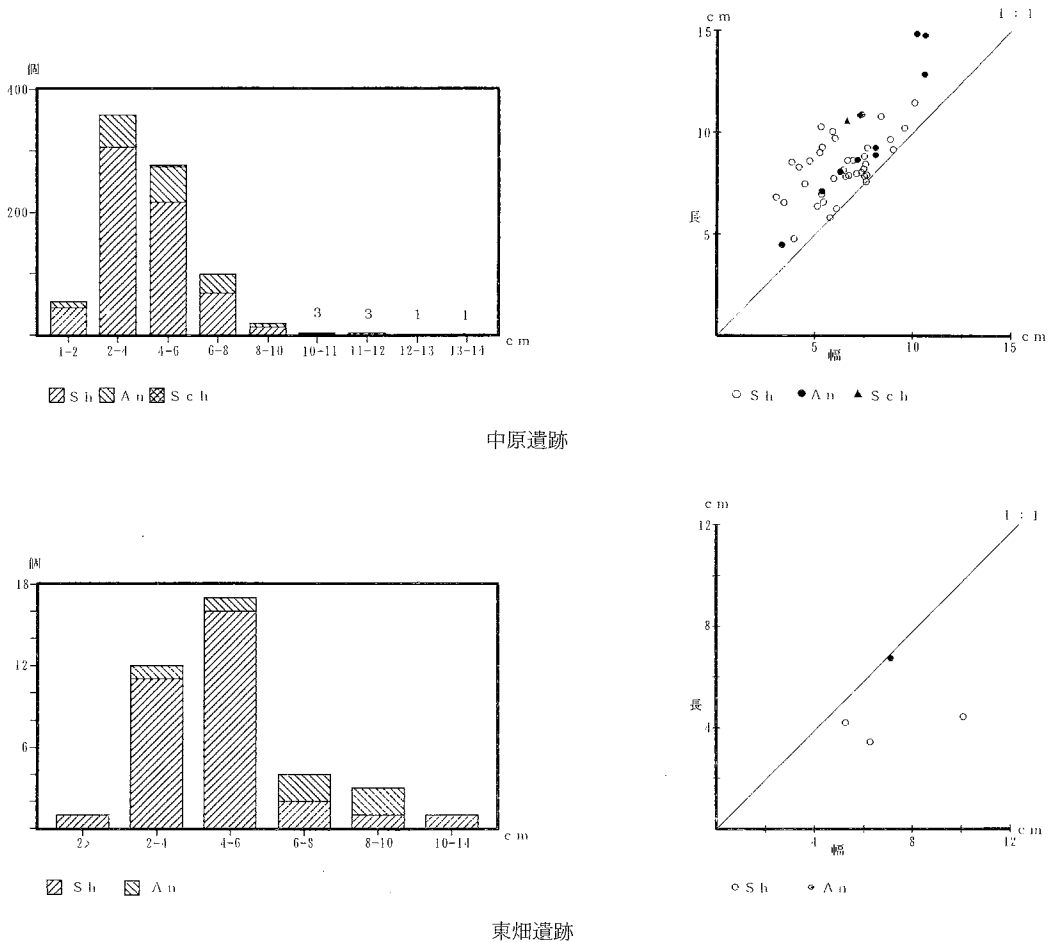
したがって、A類石器の中で、どの器種が優先的に製作されていたかについて検討すると、①精緻な押圧剥離が多用されており、最も強い範型を有していること、②普遍的に安定して存在していること、③石核A類から作出される剥片を用いて製作する場合、最良の器種であること、などから判断して石鏃が最「優先器種」であったと認識することができる。

A類石器の中で最優先された石鏃には、石材I類の中で、最も良質な石材であり、しかも遠隔

地から搬入された黒曜石が優先的に用いられており、「優先器種」と「優先石材」の密接な関係がここに看取される。まとめると、A類の石器製作は石鏃の製作が一義的目的であり、素材としては黒曜石が優先的に用いられていることが、最大の特徴であることが解る。

b 前期前半のB類石器

この時期のB類石器としては、打製石斧、スクレイパーB類、リタッチド・フレイクB類などが存在する。打製石斧はこれらの器種の中では、ある程度範型が存在しており、主体的な型式を有する器種に該当すると考えられる。この時期の打製石斧はI形態（撥形）にほぼ限定されており、大きさは長さ5～10cm・幅4～7cmである。また、スクレイパーB類では、第262図（p. 46）のように、3～9cmの長幅比1：1程度の幅広剥片が用いられている。このように、打製石斧と



中原遺跡

東畑遺跡

第343図 前期前半の剥片B類・石核B類の大きさ

スクレイパーB類は、同じ素材剥片が利用されているものとみられる。こうした剥片剥離システムについては、器種の並立関係としてすでに指摘しているものである（大工原1990）。

次に、石核B類と剥片B類について検討してみたい。第343図のように、石核B類は5～10cm程度のやや縦長（横長）のものであることが解る。また、剥片B類の大きさのヒストグラムを調べてみると、中原遺跡（関山Ⅰ段階中心）では2～4cmのものが最も多く、4～6cmのものがこれに次ぐ。また、これ以外の大きさの剥片は非常に少なく、2～6cmの剥片が作出されていたことが解る東畑遺跡（関山Ⅱ段階中心）では4～6cmのものが最も多く、次いで2～4cmのものが多いが、1位と2位の階級が突出して多い点は共通しており、大きな違いは認められない。

また、B類石器に用いられる石材はⅡ類、特に頁岩が圧倒的に多く、Ⅲa類の安山岩は少ない。このようにB類では、石材Ⅱ類（頁岩）との結び付きが強いことが解る。

以上のように、B類石器では、打製石斧とスクレイパーB類が安定して製作されているが、打製石斧は範型を有しており、主体的な型式を有する器種と認定されることから、優先器種として把握することが可能である。また、スクレイパーB類については、この時期には多数製作されており、前期の石器群の特徴でもあるので、ある程度主体性を有していたものと推定される。

したがって、B類石器では打製石斧が「優先器種」であり、石材Ⅱ類のうち頁岩が「優先石材」としてこれと密接に結びついていたと考えられる。

（2）石器製作システムの変遷

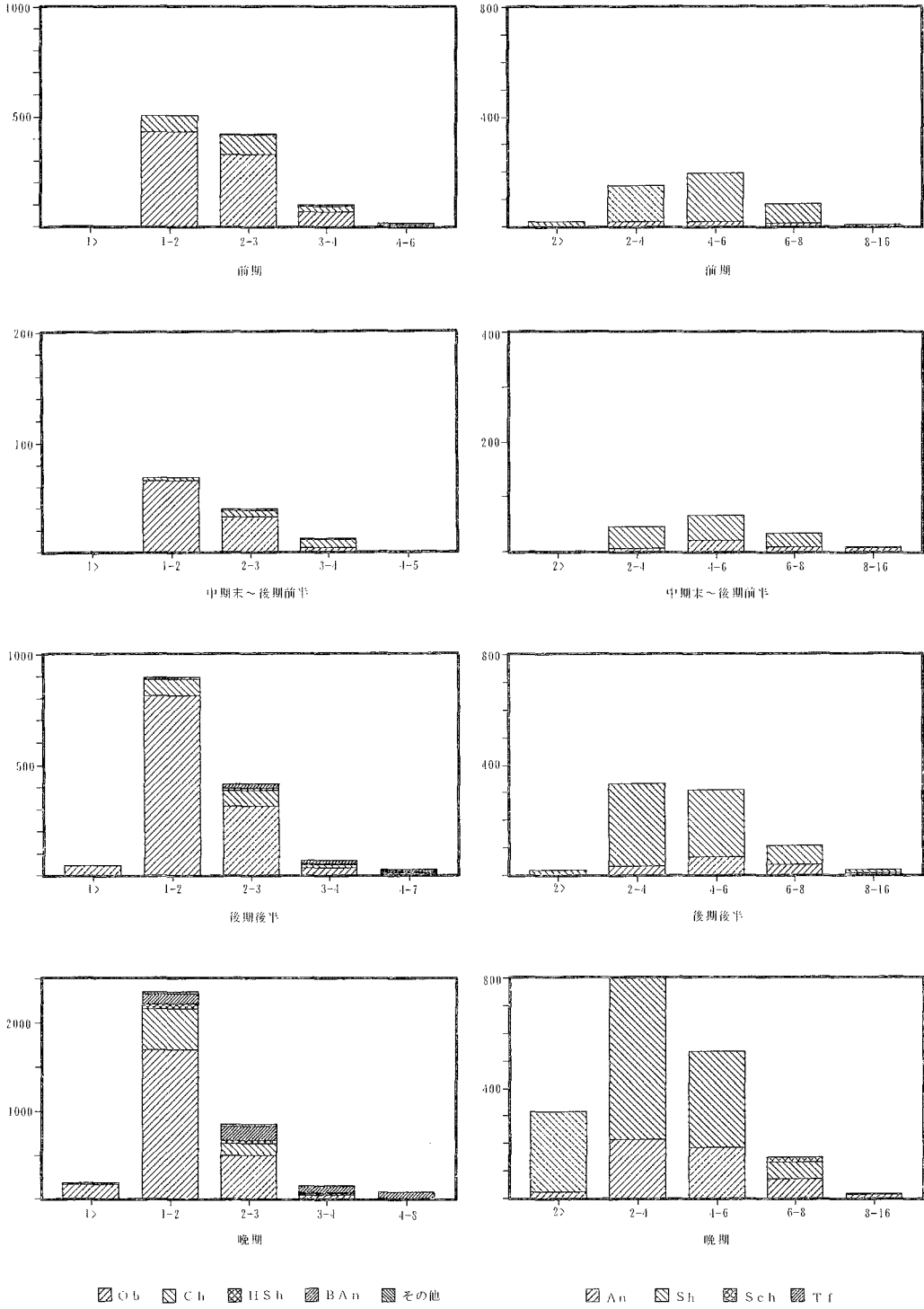
ここでは、A類石器・B類石器の製作が時期的にどのように変遷するかについて、天神原遺跡の資料を例に検討することにしたい。

天神原遺跡では前期から晩期までの石器群が存在しており、時期別にその様相の変化を明らかにすることができた。第344図は剥片A類・剥片B類のヒストグラムである。

剥片A類では、前期～晩期まで、1～2cmの階級の剥片が、常に最大値を示すことが解る。これは、前期前半期の様相と全く同じであり、石鏃を優先器種として製作する剥片剥離技術の存在が窺える。

また、B類石器については、4～6cmの剥片が多く、次いで2～4cmのものが多い状態が前期～後期前半まで認められる。また、後期後半ではこの両階級のものがほぼ拮抗する。こうした状態は前期前半の様相とほぼ同じであり、基本的には打製石斧を「優先器種」とし、スクレイパーB類をこれに準じて製作する石器群であることが解る。

しかし、晩期のヒストグラムをみると、2～4cmの階級が突出して高い度数を示しており、2



第344図 天神原遺跡の剥片A類・剥片B類の大きさ

cm以下のものも多数認められる。石鏃の時期別変化については、第326図 (p. 226) で示したとおりであり、有茎鏃 (Ⅲ形態) では晩期に剥片B類を素材としたものが集中的に製作されている。したがって、晩期ではこれまではあり得なかったA類石器の最優先器種と石材Ⅱ類 (剥片モードではB類) の組合せが成立していたことになる。この組合せは、伝統的な凹基無茎鏃 (Ⅰ形態) ではほとんど認められないものであり、後期以降新しくこの地域に導入された有茎鏃 (Ⅲ形態) のみに認められる現象である。この関係は以下のように整理することができる。

前期～後期後半

A類石器の最優先器種＝石鏃……石材Ⅰ類の最優先石材＝黒曜石

晩期前半

Aモード：A類石器の最優先器種＝石鏃 (Ⅰ形態) ……石材Ⅰ類の最優先石材＝黒曜石

Bモード：A類石器の最優先器種＝石鏃 (Ⅲ形態) ……石材Ⅱ類の最優先石材＝頁岩

このように、晩期前半には伝統的な石器と石材の組合せであるAモードと、新しく成立したBモードが併存する構造が看取されるのである。Bモードは、質は良くないが量は豊富な在地の石材を用いることで、大量生産を可能とした石鏃生産体制を成立させたものである。しかし、伝統的なⅠ形態には、依然として良質な黒曜石が用いられており、両者は集団内で明確に区別されていたことは明白である。同じ石鏃でも形式レベルでの相違があった可能性は濃厚である。このBモードを採用した大量生産体制のⅢ形態の突出した増加現象は、すでに鈴木道之助氏により指摘されているように、中部・関東・東海地方で顕著であり、石鏃が単に狩猟具としてではなく、武器として使用されていた可能性を示すものと考えられる (鈴木1981)。この問題については、集落構造・火災住居・土器群の様相等を含めて、検討する必要があるので、ここでは問題点の指摘に留めることにする。

(3) 周辺地域の様相

これまで、中野谷地区遺跡群の石器群の特徴と、変遷について検討してきた。ここでは、群馬県内の前期前半の石器群の様相と、本遺跡群の様相を比較検討することで、石器群の地域的特徴を明らかにしたい。

利根川流域では分郷八崎遺跡、諏訪西遺跡、勝保沢中ノ山遺跡、三後沢遺跡などの遺跡が存在する。この地域の石器群のうち、優先器種の様相についてみると、A類石器に対して黒曜石の使

用頻度が低い点が特徴としてあげられる。石鏃には黒色頁岩とチャートが多用されている。また、黒色安山岩も少量使用されている。これらの石材は基本的に在地の石材であり、容易に獲得することができるものである。中野谷地区遺跡群では入手が容易な黒色安山岩でも石鏃には全く用いられておらず、この点も相違点としてあげることができる。

また、チャートはA類石器に限定される傾向が強いが、黒色頁岩はB類石器の優先器種である打製石斧に最も多用される石材でもあり、打製石器に対しては、万能の石材として利用されている。黒色頁岩は旧石器時代では「石刃技法」と結びついて利用されており（麻生・大工原1991）、癖がなく剥離に適した石材であることに帰因すると考えられる。また、利根川流域で大形の転石が入手可能であるため、打製石斧のように大形の石器の素材として用いられていると考えられる。

このように、A類石器にも黒色頁岩が多用される背景には、利根川流域では、需要を満たすほどの黒曜石の供給がなされていなかったことが、大きな要因と考えられる。このことについて、ここで詳しく述べるのは本旨ではないので避けるが、中野谷地区遺跡群で認められたA類・B類のそれぞれ独立した剥片剥離システムを希求しながらも、十分な黒曜石の供給を受けられなかったことから、黒色頁岩を中心とした独自の石材選択性を採用したものと推定される。

また、赤城山南麓地域でも関山段階の集落遺跡が多数存在するが、実態が不明なため言及することができない。恐らく、利根川流域と同様に在地の石材を中心とした石器製作システムが採用されていたものと推定される。

なお、周辺地域の後・晩期の石器群の様相については、同様の視点で比較検討を行うことができる遺跡が少ないので、今後の検討課題として残しておくことにする。

（麻生 敏隆・大工原 豊）

註

（註1）ただし、チャートの方が大きな剥片が多く、重量比では黒曜石とチャートの比率はこれほど大きな差にはならない。

（註2）剥片の形状については、石鏃やスクレイパーA類等のグラフで示したとおり、長幅比1：1程度の剥片が素材として用いられていることが判明しているため、ここでは長さ・幅については考慮せず、1cm単位の方眼を階級として、ヒストグラム（histgram）を作成することにした。

5 奈良・平安時代の「牧」と推定される遺構群について

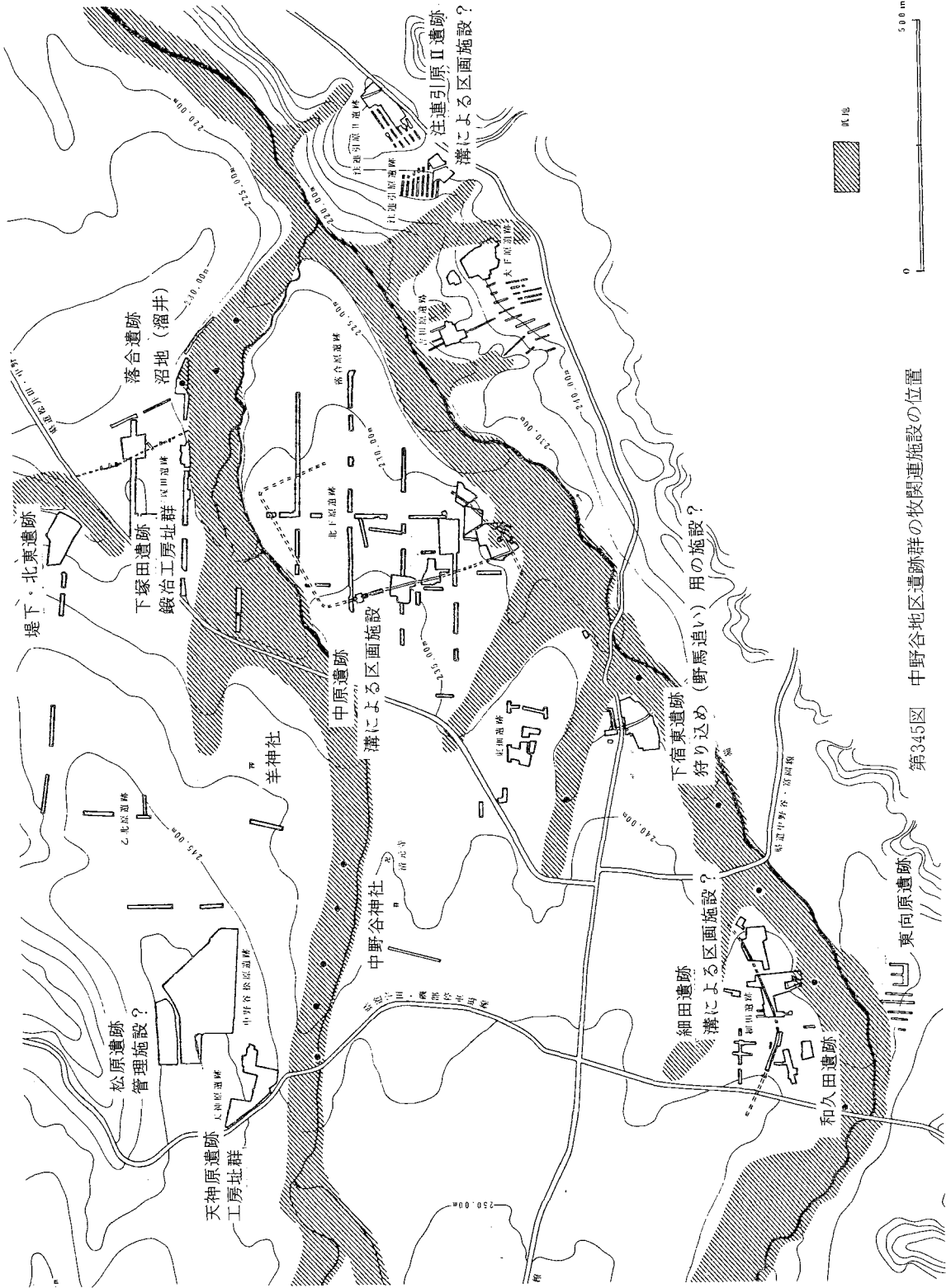
中野谷地区においては、奈良・平安時代の大規模な溝による区画が検出された遺跡は調査の進展とともに増加し、現在では5遺跡（中原遺跡、下塚田遺跡、下宿東遺跡、細田遺跡、注連引原Ⅱ遺跡）が確認されている（第335図）。これにより、区画を伴う区域の面積も100ha以上に及ぶことが明らかとなった。また、それ以外にも大鍛冶と推定される工房群が検出された下塚田遺跡や、畿内系暗文土師器を伴う性格不明工房群が検出された天神原遺跡がある。しかし、一般的な集落遺跡は、ほとんど確認されておらず、この地区の当期の様相は特殊であると言わざるを得ない。こうした状況から本地区の遺構群については「牧」とその関連施設である可能性が高く、すでに第Ⅴ章において、根拠を述べている。そこで、ここでは「牧」と関連する個々の遺跡の特徴と問題点を抽出し、若干整理しておくことにする。

（1）各遺跡の特徴

中原遺跡 最初に大規模な区画の存在が確認された遺跡である。台地の内部に溝に囲まれた台形の区画が存在しており、推定面積は8.9haである。区画内にはピット群以外の遺構はまったく検出されず、大規模な沼地をも取り込んでいる。西辺には土橋部分の存在が確認されている。溝内からは9世紀前半と推定される土師器・須恵器片が検出されている。なお、沼の東縁部には、12世紀以降の埋葬馬が1頭検出されており、時期は下るもののこの遺跡内に馬の存在していたことが確認されている。

下宿東遺跡 舌状台地の先端にクランク状に折れ曲がった溝が存在していることが確認された。ここでは、溝同士が切り合っている状態が確認されており、継続的な利用が推定された。そして、平坦面を単に区画する以外に別の機能を有していたことも推定された。また、溝構築以前（縄文時代前期と古墳時代）の遺物が多量流れ込んでいること状態が確認された。

細田遺跡 舌状台地を縦に裂く形で緩く弧を描く溝の存在が確認された。単に平坦面を確保するための区画ではなく、広域的な囲い込みの可能性が推定された。この遺跡の溝には、柵列と推定されるピット列が構築されており、最外縁部を区画する溝の可能性もある。そして、ここでは埋め戻しにより構築された土橋が存在しており、台地南縁部に存在する湧水点と内部を繋ぐ施設と推定された。また、ここでは6世紀代の住居址が破壊されていることと、隣接する7世紀の住居址が溝構築時の排土と推定されるローム土により埋め戻されていることが確認され、上限は7世紀代まで遡る可能性があることが確認された。大溝はさらに西へ延びていることが確認されてお



第345図 中野谷地区遺跡群の牧関連施設の位置

り、旧東横野村7号墳（明神塚）を避けて構築されていることも判明した。

和久田遺跡 細田遺跡と同じ台地上に存在し、溝の南側（外側）に位置する。ここでは、9世紀の住居址2軒が検出されており、小規模な集落の存在が確認された。そして、溝の北側（内側）では本遺跡群では最も新しい9世紀後半の住居址1軒が検出された。これらの住居址は「牧」の管理に関連する人間の居住施設の可能性もあり、留意される遺構である。

注連引原Ⅱ遺跡 こうした一連の溝の存在が確認される以前に調査を行った注連引原Ⅱ遺跡においても、同種の溝が検出されている。この溝からは弥生時代中期初頭の遺物が、覆土中層～下層にかけて多量検出されていたため、この時期の「濠」として報告した（大工原1988）。しかし、下宿東遺跡の事例にもあるように溝構築以前の遺物が流れ込んだ可能性が否定できないことと、一連の溝と形態・覆土の堆積状態が酷似していることから、同種のものである可能性が濃厚である。すでに、弥生時代中期初頭としての位置付けもされているが（柿沼1990等）、こうした溝が中野谷の台地全体に縦横に走っていることから、現状では奈良・平安時代に形成された大規模な施設の一部と考えた方が妥当とみられる。

下塚田遺跡 台地を横切る溝と、4軒の鍛冶工房址が検出されている。工房址はすべて溝の西側に位置している。また、工房址のうち1軒は長屋形の大形建物址であり、当初正方形であったものが、2倍の面積の建物へ拡張されたことが確認された。ここでは羽口・鉄滓などが多数検出されているが、製品は全く検出されておらず、いわゆる「大鍛冶」的色彩の強い工房であったと推定された。この工房址の存続時期は7世紀終末から9世紀にかけてと推定され、「牧」の存続時期と一致する。また、福田豊彦氏は平将門の研究事例から、「牧」の運営と「鉄」の生産が有力豪族により、一元的に管理されていたことを指摘しており（福田1981）、本遺跡の事例との共通性も窺える。

天神原遺跡・松原遺跡 大形建物址を伴う工房址群が検出されている。この工房址群の機能については、はっきりしないが、畿内系土師器が共伴しており、官衙的・技術系色彩が強い施設と推定される。（註1）また、時期的には8世紀後半と推定され、「牧」の存続時期内に営まれた工房群であることが確認された。なお、隣接する松原遺跡において、小規模な溝（幅50cm程度）による大規模な方形区画の存在が確認されているが、現在整理中であり、時期を特定することができないが、天神原遺跡の工房群と関連するものと推定され、大規模な建物址の周囲の区画の可能性もある。

堤下・北東遺跡 8世紀の住居址が2軒検出されている。この遺跡では6～7世紀代の住居址も7軒検出されている。住居同士の重複はまったく認められないことから、集落は断続的であったと推定される。この遺跡は最も一般的な集落の様相を呈している。

南向原遺跡 猫沢川南岸に位置する。ここでは、小規模な溝による区画が検出されている。この区

面の時期は特定できないが、堆積状況から奈良・平安時代の可能性がある。

その他の遺跡 これ以外に谷地部分には浅間B軽石降下以前の水田址の存在が、テフラ分析とプラント・オパール分析の結果、設定したすべての試掘坑で確認されている。したがって、台地の周囲に存在する谷地には、広範囲に水田が存在していたものと推定される。しかし、水田の開始時期を決定するデータは得られておらず、大溝が構築された時点でも水田が存在していたかどうかは不明である。

(2) 「牧」の可能性の検証

中野谷地区では8世紀から9世紀にかけての時期を中心とした時期に構築された、大規模な溝による区画が多数存在することが確認された。また、溝の形態と規模には斉一性が認められ、最上層に浅間B軽石層が堆積することも共通している。また、下塚田遺跡の大形建物址(H-4)や和久田遺跡の9世紀の住居址(H-1)も検出状況は同じであり、廃絶時期は同じ頃であった可能性が高い。

区画には様々な形態が認められ、各台地単位で完結する施設とは考えられず、中野谷地区の遺構群が一体となって機能する構造であったとみられる。

なお、「牧」については、『大宝律令』のうち『厩牧令』の中で制度面での規定が定められている。しかし、実態と制度との間には多少隔たりが存在していたようであり、福田豊彦氏は古代「牧」の具体的施設について、下総の例を通して述べている(福田1981)。また、山口英男氏も長野県の例などにより、「牧の景観と施設」の具体的様相について言及している(山口1990)。そして、『群馬県史』の中で前沢和之氏も「牧」の具体像について言及している(前沢1991)。各氏の見解は基本的に同じであり、以下の施設等が「牧」に必要な施設であるとしている。

- ①放牧用の各種区画施設(大溝・土塁・柵)
- ②調教用の馬場
- ③繫飼用の厩舎
- ④狩り込め(野馬追い)用の施設
- ⑤馬具などを生産する各種工房や鍛冶施設
- ⑥飼料貯蔵用の建物・倉庫
- ⑦水場
- ⑧管理用の建物・執務所

また、これに加えて、放牧地としての数百haに及ぶ広大な土地が必要であり、下総の例では、

区画が容易な半島状の地形が立地の要件としてあげられている（福田1987）。

これらの施設群と中野谷地区遺跡群で検出された遺構群を対比してみると、①には下塚田、中原、細田、注連引原Ⅱ遺跡の大溝が該当する。④には下宿東遺跡のクランク状の溝が該当する。また、⑤には下塚田遺跡の鍛冶工房址群と、天神原遺跡の工房址群が該当する。そして、⑦には中原遺跡の沼地が該当する。さらに、⑧には松原遺跡で検出された方形区画が該当する可能性がある。しかし、②・③・⑥に該当する遺構は確認されていない。

また、放牧用の広大な土地については、中野谷地区遺跡群の大溝が検出された台地は100ha以上の面積を有しており、十分な土地が確保されていたことが確認されている。そして、下総に見られる半島状の地形についても、中野谷地区にはこうした地形に類似した、舌状台地が連続しており、立地条件も満たしている。

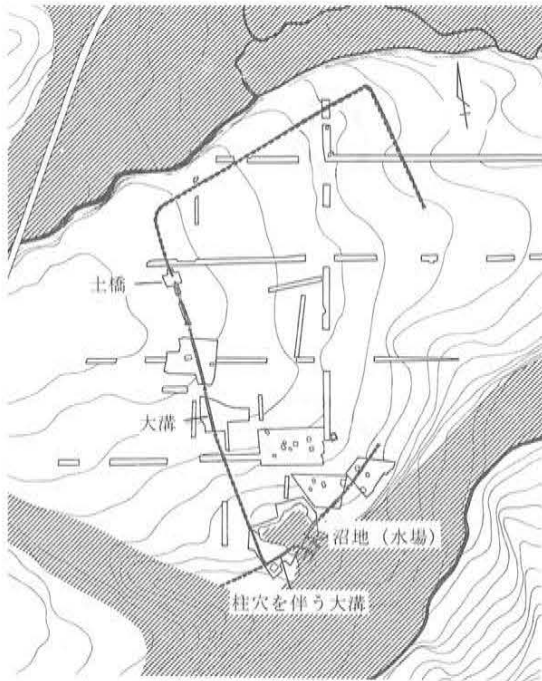
以上のように、一般的な農業集落遺跡では認められない施設が、中野谷地区遺跡群には多数存在しており、「牧」の施設として文献史学の立場から提示されている施設に該当すると考えられるものも多い。そして、半島状の地形の連続体である広大な台地全体に遺構群が存在している。したがって、中野谷地区遺跡群は、「牧」とその関連遺跡群であったと結論付けることができる。遺構群の配置をもとに具体的に「牧」の景観を推定すると第346図のように示すことができる。

なお、浅間B軽石降下直前には台地の周囲の谷地に水田が存在していたことは確認されているが、この時期にはすでに大溝も放棄されており、水田が大溝構築時まで遡るかどうかについて、解明する資料を得ることはできなかった。「牧」の経営と水田経営が両立するものであったかどうかは不明であり、今後の課題として残った。

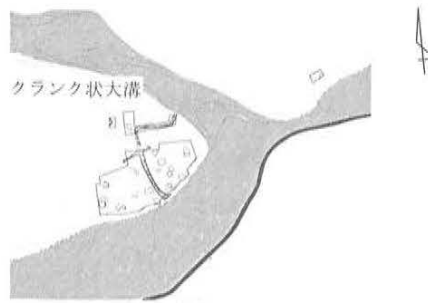
（3）中野谷の「牧」成立の背景

ところで、古代上野国には9カ所の御牧が存在していたことが『延喜式』に記載されている。また、これ以外にも3ないし4カ所の諸国牧あるいはそれに準じた牧の存在が推定されている（前沢1991）。そして、地名研究の成果により、御牧の所在が推定されているが、地域を推定しただけでなく、具体的な場所まで、確定されているものはほとんどない。当時、官牧以外にも私牧の存在も確認されており、上野国に数多くの牧が存在していたことも指摘されている（前沢1991）。また、古代利根郡内の牧については、地名と地形から大江正行氏による推定も行われている（大江1988）。

『延喜式』等の記載から8・9世紀における上野国の年間貢上馬は御牧50疋・諸国繫飼45疋であったと推定されている（山口1986）が、この数は全国でも最多であり、当時上野国が全国でも



中原遺跡



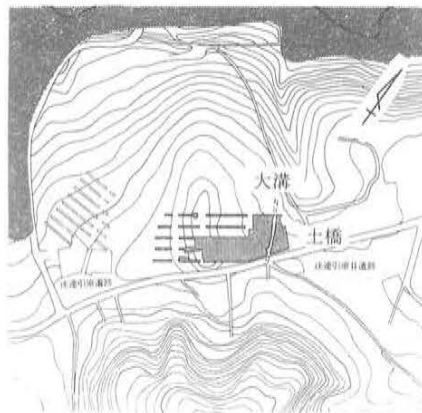
下宿東遺跡



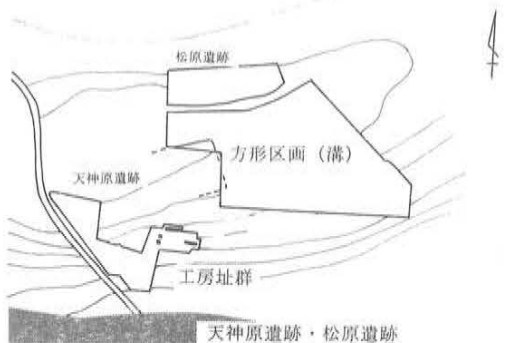
細田・和久田遺跡



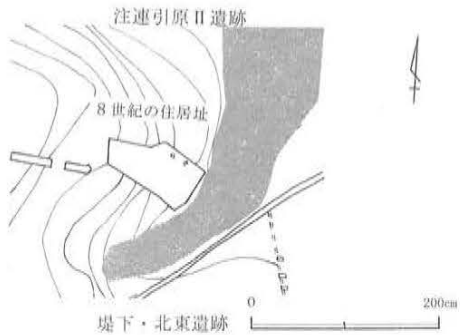
下塚田遺跡



注連引原II遺跡



天神原遺跡・松原遺跡



堤下・北東遺跡

第346図 中野谷地区遺跡群の奈良・平安時代の遺構

有数の馬生産国であったことを示している。

本遺跡は当時の碓氷郡に含まれると推定されるが、碓氷郡には、坂本駅、野後駅の2駅が存在しており、駅馬数は坂本駅15疋・野後駅10疋であり、さらに碓氷郡に伝馬5疋が配置されていたとみられる。したがって、碓氷郡の官馬数は30疋であり、上野国の官馬75疋のうち40%が碓氷郡に属していたことになる。碓氷峠を背景に多数の馬の需要があった地域性が、中野谷に「牧」を設ける要因の一つとも考えられる。

また、物部氏永を賊首とする群盗が899年（寛平元年）に蜂起し、900年（昌泰3年）に追捕されたことが『日本紀略』『扶桑略記』に記されている。物部氏は甘楽・多胡郡をあたりを基盤としていたと推定されている（西垣1989）。物部に関する文字資料は鑓川流域に多く、さらに碓氷郡まで勢力が及んでいた可能性もある。

なお、「僞馬の党」と呼称される馬による運送を生業とした強盗が活動したのもこの時期であり、これを取り締まるため「碓氷坂」に関を899年（昌泰2年）に設置することが太政官符にあり（『類聚三代格』）、碓氷郡周辺が騒然とした状況にあったことが類推される。

これらの事件が発生した9世紀末～10世紀初頭の時期は、本遺跡群の「牧」が営まれていた時期に該当する。そして、共に馬に関連性のある事件であることから、何らかの関連性や影響が及ぼされた可能性が高い。なお、西毛地域におけるこの時期の社会の中では、物部氏は重要な役割を担っていた可能性が高く、「牧」の経営に関与していた可能性についても、留意しておく必要がある。

（4） 「牧」管理集落の推定

「牧」の直接的遺構が検出された遺跡は不明であるが、「牧」を管理していたと推定される集落の調査事例はいくつか知られている。

山梨県北巨摩郡武川村に存在する宮間田遺跡は9世紀後半～11世紀にかけて継続的に営まれた集落遺跡であり、住居址74軒・掘立柱建物址45棟が検出されている（平野1988）。この遺跡からは「牧口」と書かれた墨書土器が検出されている。また、遺跡のある武川村一帯は『和名類聚抄』の巨摩郡真衣郷に比定され、『延喜式』に真衣野牧の設置の記載もある地域である。こうした状況から、宮間田遺跡と「牧」の関連性が指摘されている。

また、長野県北佐久郡御代田町の鑄師屋遺跡群（野火付・前田・十二・根岸）は奈良・平安時代の住居址357軒・掘立柱建物址434棟が検出されている。そして、ここでは古墳時代後期～平安時代までの馬19頭分の馬骨が検出されている。御代田町は推定東山道ルート上に存在し、『延喜

式』に記載のある御牧「塩野牧」と「長倉駅」の比定地である。調査担当者の堤隆氏は「塩野牧」あるいは鑄師屋遺跡群を「長倉駅」の経営にあたった人々の集落と推定している（堤1987等）。

これらの遺跡は、「牧」の管理集団の居住する集落と推定されており、掘立柱建物址が多いことや、畿内系の須恵器や土師器が多数出土している点、墨書土器が多い点などに共通点が認められる。

中野谷地区遺跡群の周辺で、こうした管理集団が居住したと推定される集落遺跡としては、北部の下位段丘面に存在する大王寺地区遺跡群（松井田工業団地遺跡）及び新寺地区遺跡群（西裏・西新井遺跡、諏訪辺遺跡）と、東部の咲々神社周辺の鷲宮地区遺跡群（荒神平・吹上遺跡、桜林遺跡等）がある。いずれの遺跡群も弥生時代以来の伝統集落（能登・洞口・小島1985）である。前者は地名等から『和名類聚抄』にある碓氷郡の郷の一つである「磯部」郷の一部に比定することが可能であるが、後者の集落については、現在のところ比定される郷名はない。

大王寺地区遺跡群・新寺地区遺跡群では9世紀代に住居軒数が倍増しており、集落規模の拡大が確認されている（大工原・金井・和田1991）。また、周辺では田中田・久保田遺跡と松井田工業団地遺跡A区において平安時代の水田址が検出されており、「磯部」郷が農業集落としての側面を有していた可能性が高いことが解る。ただし、田中田・久保田遺跡では馬蹄痕が多数検出されており（大工原他1992）、馬の飼育との関連性否定できない。

このように、管理集団の集落の特定は現状では難しいが、この二つの遺跡群のいずれかであった可能性が高い。なお、当時の碓氷郡の中には「駅家」郷が存在したと考えられているが（前沢1991）、比定地がはっきりしていない。そして、咲々神社を中心とした鷲宮地区遺跡群は、当時大規模な集落であったにも関わらず、郷名が不明であり、管理集団の集落としての「駅家」郷であった可能性について、考慮すべきであろう。

（5）まとめ

中野谷地区遺跡群の様相は、以上のことから「牧」の関連遺構群である可能性が濃厚であるが、これまでの調査では、埋葬馬（ただし時代は下る）の検出以外、馬が飼育されていた直接的な証拠は得られておらず、遺構群から類推される間接的根拠の積み重ねによるものであり、問題点も多く残されている。

なお、遺存状態の良好な榛名山二ツ岳軽石（Hr-FP）降下直前期の白井大宮遺跡においては、6世紀中葉の馬蹄痕の残る畠が検出され、自然科学的方法を多用した多角的分析により、「休閒放牧を伴う輪換農法」であったとしている（能登・麻生1993）。さらに、ここでは休閒中に「焼

き払い」行為が行われ、そのサイクルは10年であったことも推定しており、この時期の畠作と放牧のシステムにまで言及している。しかし、白井大宮遺跡をはじめとするこの地区の遺跡群では、大規模な溝による区画は検出されておらず、遺構からみた限りでは、奈良時代以降の「牧」とは系統的連続性は認められない。6世紀中葉の白井遺跡群の事例と、8～9世紀の中野谷地区遺跡群の事例との間には、実年代で100年以上の隔りがあり、この間には律令制の導入といった大きな社会変化もある。馬の飼育方法に大きな転換があったのか、発展形態として溝による区画が構築されるようになったのか等々、今後解決しなければならない問題も多いようである。

以上、現状で判明したことについて、整理してみたが、この遺跡群の調査のみでは解明することが不可能な問題も多く、「牧」が成立した社会的・歴史的背景をさらに明らかにすることが重要であると考ええる。

(大工原 豊)

註

(註1) 「平城宮では馬寮厩舎とおもわれる東西6^m弱、南北40^mというかなり細長い一連の建物跡が発掘されており、そのそばで発見された幅6.5^m、長さ45^mという長大な土塋は、馬洗い場と推定されている。」(山口1990)が、長大な土塋は本遺跡H-1号住居址とした遺構に類似しているものとみられる。

引用・参考文献

- 相京建史 1986 『三後沢遺跡・十二原遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団』
- 青木和明 1988 『宮崎遺跡』 長野市教育委員会
- 青森県教育委員会 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1987 『大石平遺跡Ⅲ』 青森県教育委員会
- 赤星直忠 1974 『神奈川県金子台遺跡』 横須賀考古学会
- 赤山容造 1982 「堅穴住居」 『縄文文化の研究』 8 雄山閣
- 浅川利一・戸田哲也他 1969 『田端遺跡調査概報』 町田市教育委員会
- 麻生敏隆・大工原豊 1991 「北関東地方の様相」 『石器文化研究』 3 石器文化研究会
- 麻生優・荒井幹夫他 1978 『打越遺跡』 富士見市教育委員会
- 麻生優 白石浩之 1986 『縄文土器の知識Ⅰ』 東京美術
- 安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器・関東地方」 『縄文土器大成』 3 講談社
- 阿部博志・渋谷正三 1981 「根岸遺跡」 『宮城県営園場整備関連関連遺跡群詳細分布調査報告書』 宮城県教育委員会
- 阿部芳郎 1993 「縄文土器の型式の広がりは何を表すか」 『新視点 日本の歴史』 1 新人物往来社
- 雨宮正樹他 1988 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」 『山梨県考古学協会』 2 山梨県考古学協会
- 荒井幹夫他 1983 『打越遺跡』 富士見市教育委員会
- 新井和之 1986 「文様系統論―関山式土器―」 『季刊考古学』 17 有山閣
- 石井克巳 1987 『押出遺跡発掘調査概報』 子持村教育委員会
- 石毛直道 1971 『住居空間の人類学』 『』 鹿島出版会
- 石坂 茂 1985 「柄鏡形住居址について」 『荒砥二之堰遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 1991 「縄文時代後期初頭における加曾利E式系土器の一様相」 『群馬県史研究』 34 群馬県史編さん委員会
- 石坂茂他 1988 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石戸啓夫 1986 「東国における暗文を有する土師器について」 『史友』 18 青山学院大学史学会
- 市浦村教育委員会 1982 『五月女菴遺跡』 市浦村教育委員会
- 伊藤晋祐・増田 修他 1978 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』 千網谷戸遺跡発掘調査会
- 同 1980 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』 桐生市教育委員会
- 同 1991 『千網谷戸遺跡'91発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 今村啓爾 1988 「土坑性格論」 『論争・学説 日本の考古学』 2 雄山閣
- 上野佳也他 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』 軽井沢町教育委員会

- 内田憲治 1988「上鶴ヶ谷遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 大上周三 1989『厚木市山の上遺跡Ⅱ』 神奈川県教育委員会
- 大江正行 1988「古代利根郡の歴史的背景について」『群馬文化』214
- 大野政雄・佐藤達雄 1968「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2
- 大原正義 1981「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』33-4
- 岡本郁栄他 1982『奥の城（西峯）遺跡・第二次発掘報告書』 中郷村教育委員会
- 奥山 潤 1954「縄文晩期の組石棺」『考古学雑誌』40-2
- 尾崎喜左雄 1954「横穴式石室編年への一考察」『史学会報』5輯 群馬大学史学会
- 小野和之・谷藤保彦 1986『中畦遺跡・諏訪西遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼恵介 1990「弥生文化の伝播と展開」『群馬県史 通史編1』 群馬県
- 柿沼啓介・右島和夫 1986『分郷八崎遺跡』 北橋村教育委員会他
- 葛西 励・高橋 潤 1981『堀合Ⅰ号遺跡』 平賀町教育委員会
- 金井安子 1984「縄文時代の集落を有する住居址について」『青山考古学通信』4 青山考古学会
- 神谷佳明 1987「暗文土器」『下東西遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 神村 透 1978「石鏃を見て―群と型式からの私考―」『信濃』30-11
- 櫛原功一 1986『豆生田第三遺跡』 大泉村教育委員会
- 久保田正寿 1977「T-59遺跡（寺改戸遺跡）発掘調査資料」『青梅市の埋蔵遺跡』 青梅市教育委員会
同 1986『寺改戸遺跡』 同
- 黒岩文夫・富澤敏弘 1985『中棚遺跡』 昭和村教育委員会
- 黒坂禎二 1989「羽縄文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 群馬県考古学研究所編 1987『縄文前期の諸様相』 群馬県考古学研究所
- 群馬県史編さん委員会編 1985『群馬県史 資料編4』 群馬県
- 河野達二編 1985『房総の牧』3 房総の牧研究会
- 小栗一夫 1985「縄文前期集落の構造―内陸部と海浜部の集落比較から―」『法政考古学』10
同 1991「住居址型式」論からの視点」『研究論集X』 東京都埋蔵文化センター
- 小杉 康 1987「樋沢遺跡押型土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 後藤和民 1982「縄文集落の概念」『縄文文化の研究』8 雄山閣
同 1988「縄文集落論」『論争・学説 日本の考古学』2 雄山閣
- 後藤守一 1933『西秋留の石器時代住居遺跡』
- 小林達雄 1972「縄文世界における土器の廃棄について」『國史學』93
同 1980「縄文時代の集落」『國史學』110・111
同 1988a「縄文時代の居住空間」『國學院大學文学研究科』19輯

- 同 1988 b 「身分と装身具」『古代史復元3 縄文人の道具箱』 講談社
- 同 1988 c 「スペースデザインと円」『古代史復元3 縄文人の道具箱』 同
- 同 1989 「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観』4 小学館
- 小林達雄・柳田敏司他 1965『米島貝塚』 庄和町教育委員会
- 小林正史 1992 「器種組成からみた縄文土器から弥生土器への変化」『北越考古学』5
- 斉藤幸恵 1987 「押型文系土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24 群馬県史編さん委員会
- 桜岡正信 1989 「群馬県出土の暗文土師器について」『群馬県史研究』30 群馬県史編さん委員会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅰ）」『土曜考古』3 土曜考古学研究会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅱ）」『土曜考古』4 同
- 笹森健一 1982 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅲ）」『土曜考古』5 同
- 佐原 眞 1979『日本の原始美術2 縄文土器Ⅱ』 講談社
- 山武考古学研究所編 1991 「八城遺跡」『山武考古学研究所年報』7 山武考古学研究所
- 同 1992 「行田Ⅱ遺跡」『山武考古学研究所年報』8 同
- 島田哲夫 1990『一律』 大町市教育委員会
- 下条 正他 1987『深沢遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 庄野靖寿・昼間孝次他 1974『関山貝塚』 埼玉県教育委員会
- 新藤 彰・小宮俊久 1988 「下新井遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 鈴木克彦 1986『青森県花巻遺跡』 黒石市教育委員会
- 鈴木公雄 1963 a 「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』31-1~4
- 同 1963 b 「書評:杉原荘介,戸沢充則著『神奈川県杉田遺跡及び桂台遺跡の研究』」『あるかいあ』3
- 同 1964 a 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21
- 同 1964 b 「姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題」『史学』37-1
- 同 1970 「石庖丁様石器について」『史学』43-1・2
- 鈴木加津子他 1993『精進場遺跡』
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行3 b 式研究の序」『土曜考古』5
- 同 1983 「安行式遺跡解題（Ⅰ）」『土曜考古』7
- 鈴木道之助 1981『石器の基礎知識』 柏書房
- 鈴木保彦 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』9
- 同 1986 「続・配石墓の研究」『神奈川考古』22
- 鈴木保彦他 1978『下北原遺跡』 神奈川県教育委員会

- 鈴木優子他 1983『上村・下村A・下村B遺跡発掘調査報告書』 岩手県教育委員会
- 須田 茂 1991「東山道と上野国の駅家」『群馬県史 通史編2』 群馬県史編さん委員会
- 関根孝夫・倉田恵津子 1987『幸田貝塚展』 松戸市文化ホール
- 藪田芳雄 1961「北関東における縄文式晩期の文化（I）」『県立富士国立公園博物館研究報告』5
- 藪田芳雄 1972『千網谷戸C-E S地点の調査』
- 大工原 豊 1990「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義」『青山考古』8 青山考古学会
- 大工原 豊 1991『中野谷地区遺跡群発掘調査概報2』 安中市教育委員会
- 同 1992『天神原遺跡－中野谷地区遺跡群発掘調査概報3』 同
- 同 1993『中野谷地区遺跡群発掘調査概報4』 同
- 大工原 豊・若狭 徹他 1988『注連引原Ⅱ遺跡』 同
- 大工原 豊・千田茂雄 1990『三本木遺跡・落合遺跡』 同
- 大工原 豊・千田茂雄 1990『中野谷地区遺跡群発掘調査概報1』 同
- 大工原 豊・金井京子・和田宏子 1991『新寺地区遺跡群』 同
- 大工原 豊・金井京子 1992『田中田・久保田遺跡』 同
- 大工原 豊・関根慎二・麻生敏隆・中島 誠他 1993『大下原遺跡・吉田原遺跡』 同
- 鷹野光行 1990「安行3c式土器の3分について」『先史考古学研究』3
- 高橋 桂 1982「宮中遺跡」『長野県史 考古資料編 全一卷（二）』 長野県史刊行会
- ダグラス・フレイザー 1984『未開社会の集落』 井上書院
- 谷藤保彦・関根真二 1993『縄文前期終末の諸様相』 縄文セミナーの会
- 塚田 光 1982「縄文時代堅穴住民の研究」『縄文時代の基礎研究』
- 都築恵美子 1990「堅穴住居址の系統について」『東京考古』8
- 堤 隆 1985『野火付遺跡』 御代田町教育委員会
- 同 1987『前田遺跡』 同
- 同 1988『十二遺跡』 同
- 同 1989『根岸遺跡』 同
- 同 1992『城之腰遺跡』 同
- 同 1986「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬について」『信濃』38-4
- 奈良泰史 1986「尾咲原遺跡」『都留市史 資料編 地史・考古』 都留市史編纂委員会
- 寺内敏朗他 1988『谷地遺跡』 藤岡市教育委員会
- 戸沢充則 1955「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2
- 戸沢充則編 1987『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 戸沢充則他 1981『新山遺跡』 東久留米市教育委員会

- 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994『やまかいどう』7 栃木県埋蔵文化財センター
- 富澤敏弘 1989『城山遺跡』北橋村教育委員会
- 友野良一 1983「中越遺跡」『長野県史 考古資料編 全一卷(三)』長野県史刊行会
- 中川成夫・岡本勇他 1966『養生遺跡』立教大学博物館講座
- 奈良国立文化財研究所編 1985『平城宮発掘調査報告』XII 奈良国立文化財研究所
- 新津 健 1983「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 西井幸雄他 1983『前原遺跡』宮代町教育委員会
- 西垣晴次 1989「隼馬の党と新皇将門」『図説群馬県の歴史』河出書房新社
- 能登健・洞口正史・小島敦子 1985「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37-4
- 能登 健・石坂 茂 1988「八木沢清水遺跡」『群馬県史』資料編1 群馬県
- 能登 健・麻生敏隆 1993「軽石直下で検出された馬蹄痕の性格について」『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本博文・加部二生 1984「VII群馬県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 羽鳥政彦他 1993『赤城遺跡』勢多郡富士見村教育委員会
- 花岡 弘 1993『石神遺跡』小諸市教育委員会
- 林 謙作 1977a「縄文期の葬制 第I部 研究史」『考古学雑誌』62-4
- 同 1977b「縄文期の葬制 第II部 遺体の配列, とくに頭位方向」『考古学雑誌』
- 同 1986「亀ヶ岡と遠賀川」『日本考古学』5 岩波書店
- 原 雅信 1991「群馬県における縄文時代前期における住居形態について」『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 樋口昇一他 1982『阿久遺跡』長野県教育委員会
- 平野 修他 1988『宮間田遺跡』武川村教育委員会
- 平林 彰・町田勝則他 1993『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 福田豊彦 1981『平将門の乱』岩波新書
- 同 1987「変革の世紀—鉄と馬と奴婢」『朝日百科日本の歴史』59 朝日新聞社
- 古郡正志他 1982『小野地区遺跡群発掘調査報告書』藤岡市教育委員会
- 前沢和之 1991「上野国の馬と牧」『群馬県史 通史編2』群馬県史編さん委員会
- 前原 豊他 1985『柳久保遺跡群I』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前原 豊他 1988『柳久保遺跡群V』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前原 豊・相澤貞順他 1990『芳賀東部団地遺跡III』前橋市教育委員会
- 増山 仁他 1984『金沢市新保本町チカモリ遺跡』金沢市教育委員会

- 三沢正善他 1982『乙女不動原北浦遺跡』 小山市教育委員会
- 三友国五郎他 1974『高井東遺跡』 埼玉県教育委員会
- 同 1975『高井東遺跡』本文編 埼玉県教育委員会
- 南 久和 1992「刺枝文」『長野県考古学会誌』第67号
- 三宅敦気 1993「縄文時代後・晩期のムラ ―群馬県月夜野町矢瀬遺跡―」『東国史論』8
- 宮下健司 1988「縄文土器」『長野県史全一卷（4）』 長野県史刊行会
- 村田文夫 1985「縄文集落」 ニュー・サイエンス社
- 室岡 博 1982『奥の城（西峯）遺跡・第一次発掘報告書』 中郷村教育委員会
- 本橋恵美子 1988「縄文時代における柄鏡形住居址の研究」『信濃』40-8・9
- 百瀬長秀 1984「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開 ―長野県の縄文時代後～晩期土器概観―」『長野県考古学会誌』49
- 森島 稔・原田政信 1990『円光房遺跡』 戸倉町教育委員会
- 八木光則 1976「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』28-4
- 山口英男 1986「八・九世紀の牧について」『史學雑誌』95-1
- 同 1990「信濃の牧」『長野県史』通史編1 長野県
- 山崎和己他 1984『新堂遺跡』 多摩市教育委員会
- 山田昌久 1990 a 「『縄文文化』の構図（上）」『古代文化』9
- 同 1990 b 「『縄文文化』の構図（下）」『古代文化』12
- 山田康弘 1993「縄文時代のイヌの役割と飼育形態」『動物考古学』1 動物考古学研究会
- 山梨県考古学協会編 1990『シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷―地域的特色とその面期―」』山梨県考古学協会・山梨学院大学
- 山本暉久 1976「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』28-2・3
- 同 1982「敷石住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 若月省吾 1988「阿左美遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 渡辺 仁 1990『縄文式階層化社会』 六興出版

妙義山を巡る信仰

阪本英一

1 はじめに

妙義山は赤城山、榛名山とともに上毛三山に数えられる名山である。ところが、赤城山には赤城神社があり、山麓の人々に赤城信仰が広まっている。榛名山には榛名神社があり、山麓だけではなく、広範囲に榛名信仰がある。両神社ともに水の神・農業神としての信仰がある。これに対して妙義山には妙義神社はあるものの、山麓の人々の信仰は薄い感がある。東方から朝な夕な眺めている者として、それが不思議でならなかったわけである。そこで、この機会に「素人の思い付き」を書き記して、今後の検討を期待するものである。

2 縄文人と妙義山

縄文時代の遺跡として、注目されている天神原遺跡は、横野ヶ原と呼ばれる中野谷の台地上にあり、環状列石をもち、その中に三本の石棒が立てられていた方向に妙義山がある。埋葬された人々の頭の向きも妙義山の方向であったことから、天神原遺跡に居住していた縄文人が、妙義山を聖なる山として意識し、信仰していたことが考えられる。しかも、発掘調査の中で彼岸には太陽が妙義山の真上に沈むことも確認され、三本の石棒の位置と一致していることから、縄文の人々がそのことを知っていたことに驚いたわけである。最近、栃木県の寺野東遺跡で報告された縄文人の暦がここにある。また、埋葬された頭の方向からみて、彼らは死後、妙義の山の彼方に行くと思っていたとみられる。このことは、狩猟・採集を主とした縄文人の生活では、太陽の沈む聖なる山であり、三本の石棒を中心とした祭祀が行われたとみられるが、どのような祭祀が行われたかは明らかでない。しかし、妙義山信仰はあったと考えられよう。また、奇岩の山は狩猟・採集の生活では目印として重要であった。

東に隣接する松原遺跡は、天神原遺跡より古い時代の遺跡で、ここでは埋葬された死体の方向が、妙義山を意識していることが明らかとなったが、頭が浅間山の方向になっている事例も相当数あることが確認されている。このことは、妙義山への信仰のほかに浅間山の信仰があったこと

が考えられる。それには浅間山の噴火活動が働いていたものとみられる。浅間山は中野谷からは遠い山で、普通には別世界とみられていたと思われるが、盛んな噴火活動を見てその力強さに驚き、信仰されたものとみられる。しかし、中野谷から見る浅間山は、妙義山の右端から少し離れた程度の奥になる位置になり、妙義山に向かう時にはある場所までは必ず視野に入る山であるから、浅間山が信仰の対象になることは不思議なことではなかったかもしれない。縄文人の行動範囲は、ほぼ半径10kmの円内とみられるが、妙義山が見える範囲は、中野谷を中心にした時、東端は岩野谷地区の東の台地上にあたり、北は後閑地区、南は稻含山の麓の辺りまでが考えられる。その範囲が妙義山の全容をたやすく見られる地域であることは、中野谷を拠点とした縄文人の行動範囲として納得できる範囲である。

3 弥生人と妙義山

弥生時代になると、妙義山信仰はみられなくなる。しかも、弥生時代以後の妙義山信仰は、県内の名山といわれる赤城山や榛名山の信仰にみられるような発展はなかったようで、現在でも広がりや赤城山や榛名山と違うものがある。その理由は何だったのだろうか。縄文人が、奇岩の山・春分の日に太陽が沈む山として、死者の霊が天に上るとみていた聖地も、弥生人にとっては聖地にならなかったとみられるわけである。弥生時代になると、農耕を基本とする生活になることから、「水」にこだわることになり、水源をもたない岩山は意義を失ったとみられるわけで、その意味からみた妙義山には沼もなければ、有力な水源もない。しかも、夏の雷雲もこの山からは発生せず、浅間山の方向（碓氷峠）である。さらに、妙義山は岩石の山で上の方に木がなく、したがって緑の山ではなく、秋の紅葉も弱いとしたら、弥生人には信仰の山として見られなかったといえよう。幸せな死後の世界を願うことには、妙義山はふさわしくなかったとみられるわけである。

4 古代人と妙義山

古代、中野谷を含む碓氷川と鏡川流域にはある時期に物部氏が勢力をもっていたが、この地域を中心にして渡来人の移住があつて、貫前神社や辛科神社の信仰が広がり、荒船山が渡来人の望郷の山として眺められたと言われるようになった。その頃、南にそびえる稻含山が信仰の山として現れる。稻含山は山容もきびしく、夏は雷雲の発生する山であり、雷鳴のものすごさと、雷雨の激しさは比較するものがないほどで、沼はないが、水の神、農耕の神として信仰され、稻含神

社になっていったものとみられる。貫前神社も雷神を祀っているが、これは稲含山の雷神を祀っているものとみることができる。中野谷の東南に位置する御荷鉾山は、高崎周辺から中毛にかけては「御荷鉾の三束雨」といわれる山であるが、中野谷の縄文人にとっては世界の果てであり、太陽の出る山として、一種の信仰をもって眺めた山であったとみられる。北東の榛名山は、遠く、別の世界であり、中野谷に住む縄文人には信仰はなかったとみられる。（榛名山が農耕の神として、この地で信仰されるようになったのはずっと後のことである。）榛名山も雷雲の湧く雷の山であり、榛名湖をもつ「水のある」山として、農耕の神となった。このようにみたとき、妙義山は「水がない」ことが古代の人々の信仰の対象から外れていった大きな理由の一つとみることができる。

5 中世の妙義山

中世になると、修験道の山として、信仰されるようになったが、その由来や広がりについては明らかでない。そのころ『神道集』にみられる赤城山の「赤城縁起」や、それに類するものとして榛名山の「満行権現由来記」「船尾山縁起」のような長編の「縁起」がつくられるが、妙義山には「縁起」はみられない。

6 近世以降の妙義の神

近世以降妙義の神は、古くは波己曾神社とされ、妙義には七波己曾といって七つの波己曾神社があったというが、妙義神社の波己曾殿がその中心にあたるものとみられる。中世以来、神仏習合があり、修験道の山となって妙義の神が信仰されることとなり、「妙義大権現」が現れる。白雲山にある「大」の字を表すものである。また、神仏習合によってこの地に寺が建てられたのが、別当白雲山石塔寺である。石塔寺は、近世になって東叡山寛永寺の座主輪王寺の宮の隠居所となって、修験道の性格は消え、栄えたと言われる。民間には「火伏せの神」として妙義講ができた。妙義講は、「火伏せの祈祷」として広く関東一円に広まったといわれ、元文から天保の頃（18世紀半ばから19世紀半ば頃）がもっとも盛んであったと言われる。

「火伏せ」を中心としたのは、福島から栃木方面の人たちが多く、「作神信仰」は東京三多摩地方から埼玉方面が多いという。養蚕、鼠除け、雷除け、雹除けなどであるという。また、祭神菅原道真公に因んで、正月初卯の日の卯の刻（5時～7時）に参詣して、「出世開運」の祈祷をする者も多く、比較的近い人々では碓氷・甘楽・多野方面が、遠隔地では埼玉の人が最も多いと

いう。しかし、地元の妙義町の人々は、一部の人を除いて参拝は少なく、人生の節目ごとに参拝して祈願することはないようで、集落の産土様で済ませている。それは、上野寛永寺の隠居寺になって住民とのつながりが少なくなったり、明治維新时期には廃仏毀釈によってダメージを受け、一時衰えた時期があったことが大きく影響しているものと考えられる。

7 妙義山以外の信仰の山

御荷鉾山 中野谷からは東南にあたり、太陽の昇る山であり、二つの山はオッパイを思わせる山容である。この山は雷雲の発生する山であり、この山から降り出した雷雨は「御荷鉾の三東雨」と呼ばれるほど雨足がはやいことで知られている。中野谷の縄文人にとって、この山は東の果てとして獵の時の目印となった山であったとみられる。

稲舎山 中野谷から南方にそそり立つ山で、夏は緑の色が濃く青い山、秋は紅葉、冬は雪で真っ白になる。しかも、雷雲が湧き、雷鳴と雷雨で乾いた大地を潤してくれる山である。近世以降、雨乞いの山であった。山麓の村（甘楽町秋畑地区）では「米を作ってはいけない」という禁忌をもつ。稲舎神社では、1月7日に「お筒粥の神事」があって作占いが行われ、5月5日の山開きには、マユダマの奉納と、これに関連して養蚕の豊作を願うため、「マユダマを借りる」ことが行われ、翌年二倍にして返すことが行われた。

浅間山 中野谷松原遺跡や大下原遺跡の土壙墓には、明らかに浅間山を意識して埋葬したとみられる事例が少なくない。浅間山は活火山で、縄文時代にしばしば噴火したものと考えられるので、その様子から力強さに祈りを捧げたとみられる。浅間山の方向は、碓氷峠と同じで、峠付近は雷雲が発生する所で、「峠の三東雨」の言葉があるくらい雨足が早く、ここの熊野神社は「お田植え神事」や、「作占い」を行い、雨乞いの時にはここから「ご神水」をもらって来て、また、峠講を組織し、春には代参を立てて雹霰除けの御札をもらって来て、村の辻に立てたこともある。このように、碓氷峠は浅間山と重なり合う形で信仰されていたとみられる。

榛名山 山は大きく、緑の山、紅葉、雪ともにすばらしく、雷雲も雷鳴も激しいが、雷雨は気流の流れから直接中野谷に降ることは少ないが、気流が渦巻くようになって、稲舎山・碓氷峠・榛名山の三つが合流することがあり、その時はものすごい雷雨となる。しかし、榛名山は中野谷から遠く、この地の縄文人には信仰されなかったものとみられ、榛名山が農耕の神として中野谷の人々に信仰されるようになるのは、近世以降のこととみられる。

赤城山 形の整った山として、はるか彼方に見える赤城山は、中野谷からははるかに遠く、全くの別世界で、信仰としては現在も見られない。

8 妙義山をめぐる民俗

妙義信仰は、明治維新後の混乱もあって、地元の信仰がいま一つであるのに対して、遠隔地の人々の信仰、特に講を組織しての信仰に特色がみられる。

- ① 火伏せの神ということから、妙義町高田地区や安中市秋間地区などでは、二つ子参りといって、母親が数え年2才の子供を背負ってお参りに行くことになっていて、火傷しないよう祈願に行くものだと言われていた。
- ② 妙義の白雲山に「大の字」があり、条件の良い日には中野谷あたりから見えることがある。見えたからといっても中野谷の周辺では特別の信仰があるわけではなく、現在でもこれについての信仰行事は何もないというわけである。
- ③ 中野谷より東方に隣接する上間仁田や下間仁田では、雨乞いの時、碓氷峠と稲倉山、榛名山の三カ所へ御神水をもらいに行く。もらった水は地面に下ろした所に雨を降らせるものと言われ、運搬役になる若者は厳しく注意されて出発したものである。これには妙義山は入らなかったが、理由はすでに述べたとおりで、妙義山の西北の碓氷峠が水源なので、そちらが信仰されるわけである。
- ④ 妙義山の中央の山・金洞山中之岳の中腹に祀られている中之岳神社には大黒様も祀られていて、甲子講を組織して人々の信仰を集め、中でも千葉県・茨城県の漁師の信仰が深く、泊まり込みで参拝し、早朝の行にも参加している。船の進水式にも宮司を招くほどであるという。さらに、大黒様のご眷属はネズミといわれて信仰されているが、ネズミの害に苦しめられている中野谷やその周辺の養蚕家にはあまり歓迎されず、ネズミを捕るヘビ（諏訪神社）やネコ（熊野神社のネコ石）が歓迎された。
- ⑤ 近年、大晦日から元旦にかけての「二年参り」で「三社参り」と称するお参りが、貫前神社、中之岳神社、妙義神社の三社を回って行われるようになったが、自動車社会の流行のようなもので、信仰面からみると古代以来のものとは意味が違うものである。

9 おわりに

松原・天神原両遺跡の発掘調査の成果を聞いているうちに、素人の好奇心が思いつかせたことをならべてみたが、あらためて検討してみる必要がある。それには、各分野の関係者が、それぞれ持っている資料を出し合って語り合うことが基本だと気付いたわけである。

発掘調査報告書抄録

ふりがな	なかのやちくいせきぐん
書名	中野谷地区遺跡群
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	大工原豊・関根慎二・石坂茂・麻生敏隆・中島誠・林克彦・金井京子・早田勉・杉山真二 木越邦彦・宮崎重雄・田口勇・斎藤努・江鹿立男・坂山利彦・軽部文雄・峠美穂 古環境研究所・バリノ・サーヴェイ・応用地質 磯貝基一・阪本英一
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-01 群馬県安中市安中1丁目 23-13
発行年	西暦1994年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ' "	東経 ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかほらいせき 中原遺跡	あんなかしなかのや 安中市中野谷 あぎなかはら 字中原	102113	G8	36° 17' 10"	138° 52' 20"	19881209- 19900308	9,000m ²	土地改良事業
ひがしほらいせき 東畑遺跡	あんなかしなかのや 安中市中野谷 あぎひがしはた 字東畑		G10	36° 16' 50"	138° 52' 00"	19891002- 19900308	2,500m ²	土地改良事業
かないがいといせき 金井谷戸遺跡	あんなかしなかのや 安中市中野谷 あぎかないがいと 字金井谷戸		G10B	36° 16' 50"	138° 52' 10"	19891002- 19900308	108m ²	土地改良事業
てんじんぼらいせき 天神原遺跡	あんなかしなかのや 安中市中野谷 あぎてんじんぼら 字天神原		G14	36° 17' 20"	138° 51' 40"	19901009- 19910325	5,100m ²	土地改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原遺跡	集落	縄文時代早期 縄文時代前期前半 縄文時代前期前半 弥生時代中期前半 古墳時代 奈良・平安時代	土坑 1 住居址 16 土坑 33 陥穴 2 湧水坑 1 住居址 1 牧の大溝 沼(水場) 炭窯 1	土器 土器・石器・礫・炭化物 土器・石器・礫 土器・石器 土師器 土師器・須恵器 木製品 炭化材	関山期の良好な集落遺跡
東畑遺跡	集落	平安時代末～中世 縄文時代前期前半 縄文時代前期後半	掘立柱建物址 1 住居址 6 土坑 1 住居址 1	土器・石器・礫 土器・礫 土器・石器・礫	
金井谷戸遺跡	集落	縄文時代中期終末 縄文時代早期	敷石住居址 1 竪穴住居址 1 集石土坑 4	土器・石器・礫 土器・石器・礫 土器	押型文段階の住居址と集石
天神原遺跡	集落・墓域 祭祀	縄文時代前期後半 縄文時代後期前半 縄文時代後期後半 縄文時代後期後半 縄文時代晩期前半 古墳時代 奈良時代	ピット群 住居址 2 住居址 8 土坑 6 配石墓 35 埋設土器 8 環状列石 石棒祭祀遺構 方形柱穴列 住居址 2 工房址 4	土器 土器・石器・礫 土器・石器・礫 土器・石器・礫 土器・石器・礫 土器・石器・礫 土器・石器・礫・鉄鉾石 土器・石器・礫・鉄鉾石 土器・石器・礫 土師器高坏・埴・甕等・紡錘車 土師器坏・須恵器坏・甕	縄文時代後期の配石墓群 晩期の環状列石・周堤帯 晩期の鉄鉾石が出土 「牧」に関連する工房群

中野谷地区遺跡群

— 県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —
— 本文編 —

発行日 平成6年3月25日

編集・発行 安中市教育委員会

群馬県安中市一丁目23-13

印刷 朝日印刷工業株式会社